押水町冬野遺跡群

1991

石川県立埋蔵文化財センター

押水町冬野遺跡群

1991

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県羽咋郡押水町冬野・免田地内に所在する冬野遺跡・免田一本松遺跡・冬野小塚古墳群の発掘調査報告書である。本書名は３遺跡を包括するため便宜的に冬野遺跡群としたものである。

2　冬野遺跡群の発掘調査は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の国道159号線（押水バイパス）改築事業に係るもので、昭和61年度に石川県立埋蔵文化財センターが調査委託を受けて実施した。

3　冬野遺跡の発掘調査は、松山和彦、北野博司が担当し、昭和61年５月上旬から同年８月下旬まで現地作業を実施し、同年12月に補足調査を行った。免田一本松遺跡・冬野小塚古墳群の発掘調査は、松山和彦、西野秀和が担当し、同年８月上旬から同年12月15日まで実施した。各遺跡の発掘調査には、本田秀生、山本泰幹（本センター調査員）、津田耕吉、山下郁夫（石川考古学研究会会員）、谷口宗治、宮崎正裕（奈良大学学生）、細口喜則（立正大学学生）、市川秀和（石川工業高等専門学校生）らの協力を受けた。

4　調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、押水町教育委員会、冬野町内会・免田町内会の助言・協力を受けた。

5　発掘調査及び遺物整理にあたって、次の各位の御教示を賜った。

村井一郎（石川考古学研究会幹事）、村井伸行（押水町教育委員会）、小島和夫（センター運営委員）

6　各遺跡出土遺物の整理作業は、平成２年度に石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。遺物整理作業に携わったのは次の方々である。

小屋玲子、正木直子、黒田和子、吉田節子、勝島栄蔵、小間博文、前田すみ子、戸澗かがり、小林直子、新谷由子、尾崎昌美、辻森由美子

なお、遺構図の整理、遺物写真撮影は、各担当者が行い、次の方々の協力を受けた。

藤田美和子、長谷川啓子、谷内茂代、山下陽子、田畑　弘、大藤雅男

7　本報告書の執筆は各担当者が分担し、西野が編集を行った。各執筆分担は目次に表示した。

8　本遺跡の遺構図、現場写真、航空写真、出土遺物、遺物実測図などの資料は、本センターで一括して保管している。

9　本報告書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものは挿図内に記した。

(1)　方位は全て磁北を表示する。

(2)　水平基準は海抜高で表示する（単位　m）。

(3)　挿図の縮尺

住居址・掘立柱建物跡　１／80、土坑　１／40、土器、石器　１／３

(4)　写真図版中の復元土器の縮尺は統一していない。

(5)　写真図版中の遺物番号は、挿図に使用したものと統一している。

(6)　遺物の計測値の単位は、センチメートル、グラムを最小単位としている。

押水町冬野遺跡群　目次

第１章　調査に至る経緯と経過　（本田秀生）　……　1
第２章　位置と環境　（松山和彦）　……　4
　第１節　地理的環境　……　4
　第２節　歴史的環境　……　6
　第３節　オホミ郷周辺の水系と遺跡　……　10
第３章　冬野遺跡　……　16
　第１節　層序と遺構の配置　（松山）　……　16
　第２節　縄文時代の遺構　（松山）　……　21
　第３節　弥生・古墳時代の遺構と遺物　……　30
　　1　竪穴住居跡　（遺構　松山、遺物　北野博司）　……　30
　　2　掘立柱建物跡　（松山）　……　43
　　3　大型土坑　（北野）　……　44
　　4　その他の土坑　（松山）　……　66
　第４節　古代の遺構と遺物　……　133
　　1　掘立柱建物跡　（松山）　……　133
　　2　土坑　（松山）　……　143
　　3　出土遺物　（川畑　誠）　……　146
　第５節　大型土坑について　（北野）　……　162
第４章　免田一本松遺跡　……　176
　第１節　層序と遺構の配置　（本田）　……　176
　第２節　岩宿時代の遺物　（本田）　……　182
　第３節　縄文時代の遺構と遺物　……　183
　　1　土坑　（本田）　……　183
　　2　土器と石器　（西野秀和）　……　183
　　3　能登南部（宝達山地区）の地質　（小島和夫）　……　191
　第４節　弥生・古墳時代の遺構と遺物　……　192
　　1　竪穴住居跡　（遺構　本田、遺物　松山）　……　192
　　2　土坑　（遺構　本田、遺物　松山）　……　235
　　3　掘立柱建物跡　（本田）　……　241
　　4　包含層等出土資料　（松山）　……　248
　第５節　まとめ　……　261
　　1　岩宿時代――押水町の岩宿時代の遺跡　（本田）　……　261
　　2　縄文時代――新崎式土器の細分について――　（西野）　……　268
　　3　出土土器にみる免田一本松遺跡竪穴住居跡群の変遷　（松山）　……　272
　　4　古墳時代以降の遺物　（川畑）　……　280
第５章　冬野小塚古墳群　（西野）　……　285
　第１節　古墳の配置　……　285
　第２節　第１号墳　……　286
　第３節　第３号墳　……　296
　第４節　第２号墳　……　298

第５節　まとめ …… 303

挿　図　目　次

第１図　押水バイパスと発掘調査遺跡（１／50,000） …… 2
第２図　押水町の位置 …… 4
第３図　押水町南部の地形（１／50,000） …… 5
第４図　冬野・免田周辺の遺跡（１／25,000） …… 8
第５図　能登国南端部の水系と遺跡（１／100,000） …… 11
第６図　冬野遺跡平面図　北半部（１／300） …… 17
第７図　冬野遺跡平面図　南半部（１／300） …… 18
第８図　冬野遺跡遺構配置図　その１（１／300） …… 19
第９図　冬野遺跡遺構配置図　その２（１／300） …… 20
第10図　冬野遺跡おとし穴実測図　１（１／40） …… 22
第11図　冬野遺跡おとし穴実測図　２（１／40） …… 23
第12図　冬野遺跡おとし穴実測図　３（１／40） …… 25
第13図　冬野遺跡おとし穴実測図　４（１／40） …… 26
第14図　冬野遺跡おとし穴実測図　５（１／40） …… 27
第15図　１号竪穴住居跡実測図（１／80） …… 31
第16図　１号竪穴住居跡床面出土状況 …… 32
第17図　１号竪穴住居跡出土土器(1)※ 100号土坑出土品含む …… 33
第18図　１号竪穴住居跡出土土器(2) …… 34
第19図　１号竪穴住居跡出土土器(3) …… 35
第20図　２号竪穴住居跡実測図　その１（１／80） …… 38
第21図　２号竪穴住居跡実測図　その２（１／80） …… 39
第22図　３・５号竪穴住居跡実測図（１／80） …… 40
第23図　２号竪穴住居跡出土土器(1) …… 41
第24図　２号竪穴住居跡(2)(54～60)・３号竪穴住居跡(61)・５号竪穴住居跡(62～71)出土土器 …… 42
第25図　７号掘立柱建物跡実測図（１／80） …… 43
第26図　弥生時代終末期の土坑の法量（数字は土坑番号） …… 44
第27図　大型土坑の坑底面積と深さ（数字は土坑番号） …… 44
第28図　大型土坑の容量 …… 45
第29図　大型土坑の分布（１／1,000） …… 45
第30図　１号土坑実測図（１／40） …… 47
第31図　鉄鏃（１号土坑１～２層）（２／３） …… 47
第32図　３号土坑実測図（１／40） …… 47
第33図　３号土坑遺物出土状況 …… 48
第34図　12号土坑実測図（１／40） …… 49
第35図　12号土坑遺物出土状況 …… 50
第36図　７号土坑実測図（１／40） …… 51
第37図　８号土坑実測図（１／40） …… 51

第38図　9号土坑実測図（1／40）…… 52
第39図　9号土坑遺物出土状況（1／40）…… 52
第40図　10号土坑実測図（1／40）…… 53
第41図　34号土坑実測図（1／40）…… 53
第42図　10号土坑遺物出土状況（1／40）…… 54
第43図　35・36号土坑実測図（1／40）…… 55
第44図　14号土坑実測図（1／40）…… 55
第45図　20号土坑実測図（1／40）…… 56
第46図　17号土坑遺物出土状況 …… 57
第47図　17号土坑実測図（1／40）…… 58
第48図　32号土坑実測図（1／40）…… 58
第49図　98号土坑実測図（1／40）…… 60
第50図　45号土坑実測図（1／40）…… 60
第51図　100号土坑実測図（1／40）…… 60
第52図　106号土坑実測図（1／40）…… 60
第53図　108号土坑実測図（1／40）…… 61
第54図　43号土坑実測図（1／40）…… 61
第55図　73号土坑実測図（1／40）…… 61
第56図　41号土坑実測図（1／40）…… 62
第57図　44号土坑実測図（1／40）…… 62
第58図　49号土坑実測図（1／40）…… 62
第59図　47号土坑実測図（1／40）…… 64
第60図　104号土坑実測図（1／40）…… 64
第61図　50号土坑実測図（1／40）…… 65
第62図　13号土坑実測図（1／40）…… 65
第63図　16号土坑実測図（1／40）…… 65
第64図　21号土坑実測図（1／40）…… 65
第65図　53号土坑実測図（1／40）…… 66
第66図　55号土坑実測図（1／40）…… 66
第67図　54号土坑実測図（1／40）…… 66
第68図　205号土坑実測図（1／40）…… 67
第69図　56・72・74・112号土坑実測図（1／40）…… 68
第70図　1号土坑出土土器（1／3）…… 69
第71図　3号土坑出土土器(1)（1／3）…… 70
第72図　3号土坑出土土器(2)（1／3）…… 71
第73図　3号土坑出土土器(3)（1／3）…… 72
第74図　12号土坑出土土器(1)（1／3）…… 73
第75図　12号土坑出土土器(2)（1／3）…… 74
第76図　12号土坑出土土器(3)（1／3）…… 75
第77図　7号土坑出土土器（179～186）・8号土坑出土土器（187～190）（1／3）…… 76
第78図　9号土坑出土土器（1／3）…… 77
第79図　10土坑出土土器（1／3）…… 78

第80図　34号土坑（221～224）・35号土坑（225～239）・36号土坑（240～241）出土土器（1／3）…… 79
第81図　14号土坑出土土器（1／3）…… 80
第82図　20号土坑出土土器（1／3）…… 81
第83図　17号土坑出土土器(1)（1／3）…… 82
第84図　17号土坑出土土器(2)（1／3）…… 83
第85図　17号土坑出土土器(3)（1／3）…… 84
第86図　17号土坑出土土器(4)（1／3）…… 85
第87図　17号土坑出土土器(5)（1／3）…… 86
第88図　17号土坑出土土器(6)（1／3）…… 87
第89図　32号土坑出土土器(1)（1／3）…… 88
第90図　32号土坑出土土器(2)（1／3）…… 89
第91図　32号土坑出土土器(3)（1／3）…… 90
第92図　108号土坑（370～377）・110号土坑（378～380）出土土器（1／3）…… 91
第93図　70・71・73・74・77・98号土坑出土土器（1／3）…… 92
第94図　41号土坑出土土器（1／3）…… 93
第95図　43・44・45・40号土坑出土土器（1／3）…… 94
第96図　47号土坑出土土器(1)（1／3）…… 95
第97図　47号土坑(2)（443～448）・49号土坑（449～452）出土土器（1／3）…… 96
第98図　50・52・53号土坑出土土器（1／3）…… 97
第99図　包含層出土土器(1) 1－39区（1／3）…… 98
第100図　包含層出土土器(2)（1／3）…… 99
第101図　ピット出土土器（1／3）…… 100
第102図　1号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 134
第103図　2・3・4号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 135
第104図　5号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 137
第105図　6号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 138
第106図　8号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 139
第107図　9・10号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 140
第108図　冬野遺跡・掘立柱建物跡の（主軸）方位の分布 …… 141
第109図　古代の土坑実測図1（1／40）…… 144
第110図　古代の土坑実測図2（1／40）…… 145
第111図　地区別須恵器出土概略図 …… 146
第112図　出土遺物実測図（1／3）…… 150
第113図　70号土坑出土遺物実測図 …… 151
第114図　47・48号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 152
第115図　出土遺物実測図（1／3）…… 153
第116図　出土遺物実測図（1／3）…… 154
第117図　出土遺物実測図（1／3）…… 155
第118図　分布調査他出土遺物実測図（1／3）…… 156
第119図　出土遺物実測図（1／3）…… 157
第120図　弥生時代末の甕形土器の容量（数次は土坑番号）…… 162
第121図　弥生時代末の甕形土器の容量別個数 …… 162

第122図　弥生時代末の壺形土器の容量（数字は土坑番号）…… 163
第123図　弥生時代末の壺形土器の容量別個数 …… 163
第124図　冬野遺跡と周辺遺跡出土の記号文 …… 164
第125図　大型土坑出土土器の器種構成比（%） …… 165
第126図　甕形土器の口縁部形態類別構成比の推移 …… 167
第127図　甕形土器の類別構成比の分布 …… 168
第128図　土坑間接合資料の共有関係 …… 169
第129図　竹生野遺跡（第１次調査）の大型土坑群の分布 …… 170
第130図　高杯形土器の計測 …… 171
第131図　免田一本松遺跡・冬野小塚古墳群主要遺構およびグリッド配置図（１／1,000） …… 177
第132図　東南地区全体図（１／300） …… 178
第133図　北東地区全体図（１／300） …… 179
第134図　北西地区全体図（１／300） …… 180
第135図　西南地区全体図（１／300） …… 181
第136図　岩宿時代の石器（４／５） …… 182
第137図　縄文時代土坑分布図（１／600） …… 184
第138図　第３・８・14・15号土坑（１／40） …… 185
第139図　第16・17・24・26号土坑、第14号竪穴住居内土坑（１／40） …… 186
第140図　土器実測図（１／３） …… 187
第141図　石器実測図（２／３） …… 188
第142図　石器実測図（１／３） …… 189
第143図　第１号竪穴住居跡（１／80） …… 193
第144図　第１号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 193
第145図　第２・４・22号竪穴住居跡（１／80） …… 194
第146図　第２号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 195
第147図　第４・22号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 196
第148図　第３号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 198
第149図　第３号竪穴住居跡遺物（１／４） …… 199
第150図　第５号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 199
第151図　第３号竪穴住居跡（１／80） …… 200
第152図　第５号竪穴住居跡（１／80） …… 201
第153図　第６号竪穴住居跡（１／80） …… 202
第154図　第６号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 202
第155図　第７・８・20号竪穴住居跡（１／80） …… 203
第156図　第７・８・20号住居跡断面図（１／80） …… 204
第157図　第７号竪穴住居跡遺物(1)（１／３） …… 205
第158図　第７号竪穴住居跡遺物(2)（１／３） …… 206
第159図　第７・８・20号竪穴住居跡遺物（１／３） …… 207
第160図　第９号竪穴住居跡（１／80） …… 209
第161図　第10号竪穴住居跡（１／80） …… 211
第162図　第10号竪穴住居跡遺物(1)（１／３） …… 212
第163図　第10号竪穴住居跡遺物(2)（１／３） …… 213

第164図　第10号竪穴住居跡遺物(3)（1／4）…… 214
第165図　第11号竪穴住居跡（1／80）…… 215
第166図　第11号住居跡断面図（1／80）…… 216
第167図　第11号竪穴住居跡遺物(1)（1／3）…… 217
第168図　第11号竪穴住居跡遺物(2)（1／3）…… 218
第169図　第12・13・21号竪穴住居跡（1／80）…… 220
第170図　第12・13・21号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 221
第171図　第14号竪穴住居跡（1／80）…… 222
第172図　第14号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 222
第173図　第15・16・18・19号竪穴住居跡（1／80）…… 224
第174図　第15・16・18・19号竪穴住居跡断面図（1／80）…… 225
第175図　第15・19号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 226
第176図　第17号竪穴住居跡（1／80）…… 227
第177図　第23号竪穴住居跡（1／80）…… 227
第178図　第17・23号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 228
第179図　第24・26号竪穴住居跡（1／80）…… 229
第180図　第24号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 230
第181図　第26号竪穴住居跡遺物(1)（1／3）…… 231
第182図　第26号竪穴住居跡遺物(2)（1／3）…… 232
第183図　第25号竪穴住居跡（1／80）…… 233
第184図　第27号竪穴住居跡（1／80）…… 234
第185図　第27・28号竪穴住居跡遺物（1／3）…… 234
第186図　第28号竪穴住居跡（1／80）…… 235
第187図　第2号土坑（1／40）…… 236
第188図　第4号土坑（1／40）…… 236
第189図　第10号土坑（1／40）…… 237
第190図　第15号土坑（1／40）…… 237
第191図　第19号土坑（1／40）…… 237
第192図　第22号土坑（1／40）…… 238
第193図　第28号土坑（1／40）…… 238
第194図　第25号土坑（1／40）…… 238
第195図　第29号土坑（1／40）…… 238
第196図　土坑出土遺物（1／3）…… 240
第197図　第1号掘立柱建物跡（1／80）…… 242
第198図　第2号掘立柱建物跡（1／80）…… 242
第199図　第3号掘立柱建物跡（1／80）…… 243
第200図　第11・12号掘立柱建物跡（1／80）…… 243
第201図　第4号掘立柱建物跡（1／80）…… 244
第202図　第5号掘立柱建物跡（1／80）…… 244
第203図　第7号掘立柱建物跡（1／80）…… 245
第204図　第8号掘立柱建物跡（1／80）…… 245
第205図　第6号掘立柱建物跡（1／80）…… 246

第206図　第９号掘立柱建物跡（１／80）…… 247
第207図　第10号掘立柱建物跡（１／80）…… 247
第208図　包含層出土資料実測図その１（１／３）…… 249
第209図　包含層出土資料実測図その２（１／３）…… 250
第210図　包含層出土資料実測図その３（１／３）…… 251
第211図　包含層出土資料実測図その４（１／３）…… 252
第212図　包含層出土資料実測図その５（１／３）…… 253
第213図　包含層出土資料実測図その６（１／３）…… 254
第214図　調査区外採集資料実測図（１／３）…… 255
第215図　押水町の地質と岩宿時代の遺跡（北野他1987を改変）…… 264
第216図　宿向山、宿東山、竹生野遺跡石器分布図…… 265
第217図　竹生野遺跡、御館遺跡、正友はちじがり遺跡出土遺物…… 266
第218図　宿向山遺跡、宿東山遺跡出土遺物…… 267
第219図　第１号墳調査前の墳丘平面図（１／300）…… 286
第220図　第１・３号墳平面図（調査後）（１／300）…… 287
第221図　第１号墳破壊面断面図（１／120）…… 287
第222図　第１号墳破壊面断面図（１／40）…… 288
第223図　第１号墳墳丘断面図（１／40）…… 290
第224図　断面実測位置図（１／400）…… 292
第225図　第１号墳周溝断面図（１／40）…… 292
第226図　第１号墳周溝外土坑（１／40）…… 292
第227図　第１号墳出土土器(1)（１／３）…… 294
第228図　第１号墳出土土器(2)（１／３）…… 295
第229図　断面実測位置図（１／400）…… 297
第230図　第３号墳周溝断面図（１／40）…… 297
第231図　第３号墳周溝および周辺出土土器（１／３）…… 297
第232図　第２号墳墳丘平面図（１／300）…… 299
第233図　第２号墳調査区平面図（１／300）…… 299
第234図　断面実測位置図（１／400）…… 301
第235図　第２号墳周溝断面（１／40）…… 301
第236図　周溝内１号土坑（１／40）…… 301
第237図　周溝内２号土坑（１／40）…… 301
第238図　第２号墳墳丘裾部断面図（１／60）…… 302
第239図　第２号墳周溝出土土器（１／３）…… 302

表　目　次

第１表　遺跡地名表…… 9
第２表　おとし穴一覧表…… 29
第３表　遺物観察表　冬野遺跡（住居跡、土坑）…… 101
第４表　冬野遺跡　掘立柱建物跡一覧表…… 141

第５表　遺物観察表　冬野遺跡（古代）　…… 158
第６表　大型土坑出土土器の器種構成　…… 166
第７表　出土石器一覧表（単位　mm、g）　…… 188
第８表　遺物観察表　免田一本松遺跡（包含層他）　…… 192
第９表　冬野遺跡・免田一本松遺跡出土須恵器胎土分類表　…… 256
第10表　冬野遺跡・免田一本松遺跡への須恵器供給の様相　…… 283

図　版　目　次

図版１　冬野遺跡航空写真
図版２　冬野遺跡群航空写真、免田一本松遺跡・冬野小塚古墳群航空写真
図版３　冬野遺跡遠景（西南から）、冬野遺跡全景（西から）
図版４　冬野遺跡航空写真（最北部）
図版５　冬野遺跡航空写真（北部）
図版６　冬野遺跡航空写真（中央部）
図版７　冬野遺跡航空写真（南部）
図版８　冬野遺跡航空写真（最南部）
図版９　調査前風景、表土除去風景、水田部試掘風景
図版10　調査風景、同左、同左
図版11　航空測量風景、調査区南部（北から）、調査区北部（南から）
図版12　第１号住居跡（調査風景）、同左、同左
図版13　第１号住居跡（遺物出土状況）、同左、同左
図版14　第２号住居跡（調査風景）、同左（遺物出土状況）、同左
図版15　第３号住居跡、第５号住居跡、同左
図版16　列状に分布する南の群（北西から）、南の群１・２・12号土坑（南から）、南の群７～10・35・36号土坑（西から）
図版17　１号土坑第１次土器群、同左「月影式」甕、同左床面、同左土層断面、３号土坑作業風景、同左第１次土器群と土層
図版18　３号土坑第１次土器群、同左第２次土器群、同左土層断面、同左坑底土器
図版19　12号土坑第１次土器群、同左第２次土器群、同左土層断面、同左作業風景、同左第４次土器群（坑底）と土層断面
図版20　７号土坑、同左完掘、８号土坑土層断面、同左壁溝検出状況、９号土坑第１次土器群、同左第３次土器群
図版21　９号土坑土層断面、同左完掘、10号土坑土層断面（上半）、同左第１次土器群、同左土層断面（下半）、同左坑底土器と床面
図版22　７号土坑土層断面、同左完掘、35号土坑１層土器群、同左作業風景、同左床面土器群
図版23　14号土坑第１次土器群、同左土層断面、同左土層断面（下半）、同左第２次土器群、20号土坑土層断面、同左焼土面、同左完掘
図版24　17号土坑第１次土器群、同左第２次土器群と土層断面、同左第２次土器群
図版25　17号土坑第３次土器群(1)、同左第３次土器群(2)、同左第４次土器群、同左近接、同左完掘
図版26　32号土坑作業風景、同左遺物出土状況、同左完掘

図版27　73号土坑、98号土坑、100号土坑、106号土坑、108号土坑、同左土器出土状況
図版28　41号土坑土層断面、同左土器出土状況、同左完掘、43号土坑土層断面、47号土坑、44号土坑、49号土坑、44号土坑と49号土坑
図版29　50号土坑作業風景、同左土層断面、104号土坑土層断面、同左完掘、50号土坑土器出土状況、同左完掘、104号土坑作業風景
図版30　第１号掘立柱建物跡、第４号掘立柱建物跡、第５号掘立柱建物跡
図版31　第６号掘立柱建物跡、第７号掘立柱建物跡、第10号掘立柱建物跡
図版32　第48号土坑、第70号土坑、第75号土坑
図版33　第２号土坑、第４号土坑、第11号土坑
図版34　第15号土坑、第26号土坑、第27号土坑
図版35　第30号土坑、第39号土坑、第90号土坑
図版36　第91号土坑、第96号土坑、第103号土坑
図版37　第15号土坑（土層）、第27号土坑（土層）、第29号土坑（土層）
図版38　第１号竪穴住居跡出土土器(1)
図版39　第１号竪穴住居跡出土土器(2)
図版40　第２・３・５号竪穴住居跡出土土器
図版41　第１・３号土坑出土土器
図版42　第３・12号土坑出土土器
図版43　第12・７・９号土坑出土土器
図版44　第10・35号土坑出土土器
図版45　第14・20・17号土坑出土土器
図版46　第17号土坑出土土器
図版47　第17号土坑出土土器
図版48　第17・32号土坑出土土器
図版49　第32号土坑他出土土器
図版50　第108・41・44号土坑出土土器
図版51　第44・47・50号土坑他出土土器
図版52　奈良時代以降の出土土器
図版53　奈良時代以降の出土土器
図版54　航空写真（免田一本松遺跡）、航空写真（全景）
図版55　航空写真（北部）
図版56　航空写真（中央部）
図版57　遺跡遠景（南から）、同左（北から）、調査区全景
図版58　北東地区全景、北西地区全景、西地区全景
図版59　北東地区遺構検出、同左遺構発掘、同左
図版60　第８号住居跡、第８・20・７号住居跡、第８・20号住居跡
図版61　第７号住居跡、同左、同左
図版62　第10号住居跡、同左、同左壁溝断面
図版63　第10号住居跡遺物出土状況、同左、同左
図版64　第11号住居跡、同左、同左
図版65　第11号住居跡壁溝断面、同左、同左土師器出土状況
図版66　第13号住居跡、第21号住居跡、第13・21号住居跡

図版67　第17号住居跡、第14号住居跡、第15・16・18・19号住居跡
図版68　第23号住居跡、第５号住居跡、第２・４号住居跡
図版69　第26号住居跡、第25号住居跡、同左
図版70　第24号住居跡、同左、第26号住居跡
図版71　第１号掘立柱建物跡、第２号掘立柱建物跡、第３号掘立柱建物跡
図版72　第４号掘立柱建物跡、第５号掘立柱建物跡、第６号掘立柱建物跡
図版73　第７号掘立柱建物跡、第８号掘立柱建物跡、第９・11号掘立柱建物跡
図版74　南西地区発掘風景、同左検出状況、同左
図版75　遺物出土状況、住居跡検出状況、縄文土器出土状況
図版76　第29号土坑
図版77　第10号土坑、第22号土坑
図版78　第14号土坑、第16号土坑、第26号土坑
図版79　岩宿時代・縄文時代の遺物
図版80　竪穴住居跡出土土器(1)
図版81　竪穴住居跡出土土器(2)
図版82　竪穴住居跡出土土器(3)
図版83　土坑・包含層等出土土器
図版84　包含層等出土資料
図版85　冬野小塚第１号墳、同左第３号墳
図版86　第１号墳（調査前）、同左墳丘（北から）、同左（東から）、同左表土除去後の墳丘
図版87　断面全景、主体部掘方検出、同左、同左断面
図版88　墳丘断面全景、同左中央部、同左南部、同左北部
図版89　周溝断面、同左遺物出土状況、同左全景（東から）
図版90　墳丘断割、同左、同左、墳丘除去後の状況
図版91　南東地区全景、同左発掘状況、第３号墳周溝、同左
図版92　第３号墳周溝、同左断面、同左発掘状況
図版93　第２号墳全景（北から）、同左（東から）、周溝検出状況（東部）、同左（北部）
図版94　周溝検出状況（東部・南から）、同左断面、周溝内遺物出土状況
図版95　周溝内遺物出土状況、同左（拡大）、周溝内土坑、墳丘北端断面
図版96　第１号墳出土土器
図版97　第１・３号墳出土土器

第１章　調査に至る経緯と経過

１　調査にいたる経緯

冬野遺跡、冬野小塚古墳群、免田一本松遺跡の調査は、一般国道159号押水バイパス改築工事に伴う緊急発掘調査である。押水バイパスは、国道としての機能維持が困難となって来た159号線に対し、安全円滑な交通確保を図り、地域開発の発展に寄与することを目的として計画されたものである。押水町宿－同免田間6720ｍ、幅員17ｍの路線である。昭和46年度調査着手、同48年度ルート発表、同49年度用地買収着手、同49年度用地買収着手、同53年度改良工事着手、同55年度用地買収完了、同59年度には押水町吉田－上田出間共用、平成２年に全通開通している

本工事に関わる埋蔵文化財関係の協議・調査経過は、昭和61年度刊行の『宿東山遺跡』、昭和62年度刊行の『竹生野遺跡』に詳しいが、本報告が、押水バイパスに関わる調査の最後となるため載録して於きたい。

昭和49年７月、ルート策定にともない建設省金沢工事事務所と県教委文化財保護課との間で埋蔵文化財の取扱いに付いて協議文書。

53年８月、建設省金沢工事事務所との協議において東山古墳の存在を伝える。工事計画に付いては協議必要。

54年１・２月、前年９月の分布調査依頼に基づき路線内の踏査実施。６月、南吉田葛山遺跡、竹生野遺跡、鳥毛山遺跡確認。８月、竹生野遺跡第１次発掘遺跡調査開始。　55年１月、竹生野遺跡、東山砦、東山古墳群分布調査。３月、竹生野遺跡第１次調査終了。

55年６月、南吉田葛山遺跡発掘調査開始。６月、冬野遺跡分布調査依頼。10月、南吉田葛山遺跡発掘調査終了。11月、冬野遺跡確認、協議必要。

57年６月、竹生野遺跡第２次発掘調査開始。６月、宿エゾエ、東山砦分布調査に付いて協議。10月、宿向山（東山砦）第１次調査開始。12月、竹生野遺跡第２次調査。宿向山遺跡第１次調査終了。

58年５月、宿向山第２次調査開始。12月、同終了。

60年６月、宿東山遺跡第１次発掘調査開始。

61年３月、宿東山遺跡第１次発掘調査終了。４月、同第２次調査開始。５月、同終了。５月、冬野遺跡発掘調査開始。７月、冬野遺跡小塚古墳群、免田一本松遺跡発掘調査開始。８月、冬野遺跡発掘調査終了。12月、冬野小塚古墳群、免田一本松遺跡発掘調査終了。

62年３月、『宿東山遺跡』『宿向山遺跡』刊行。

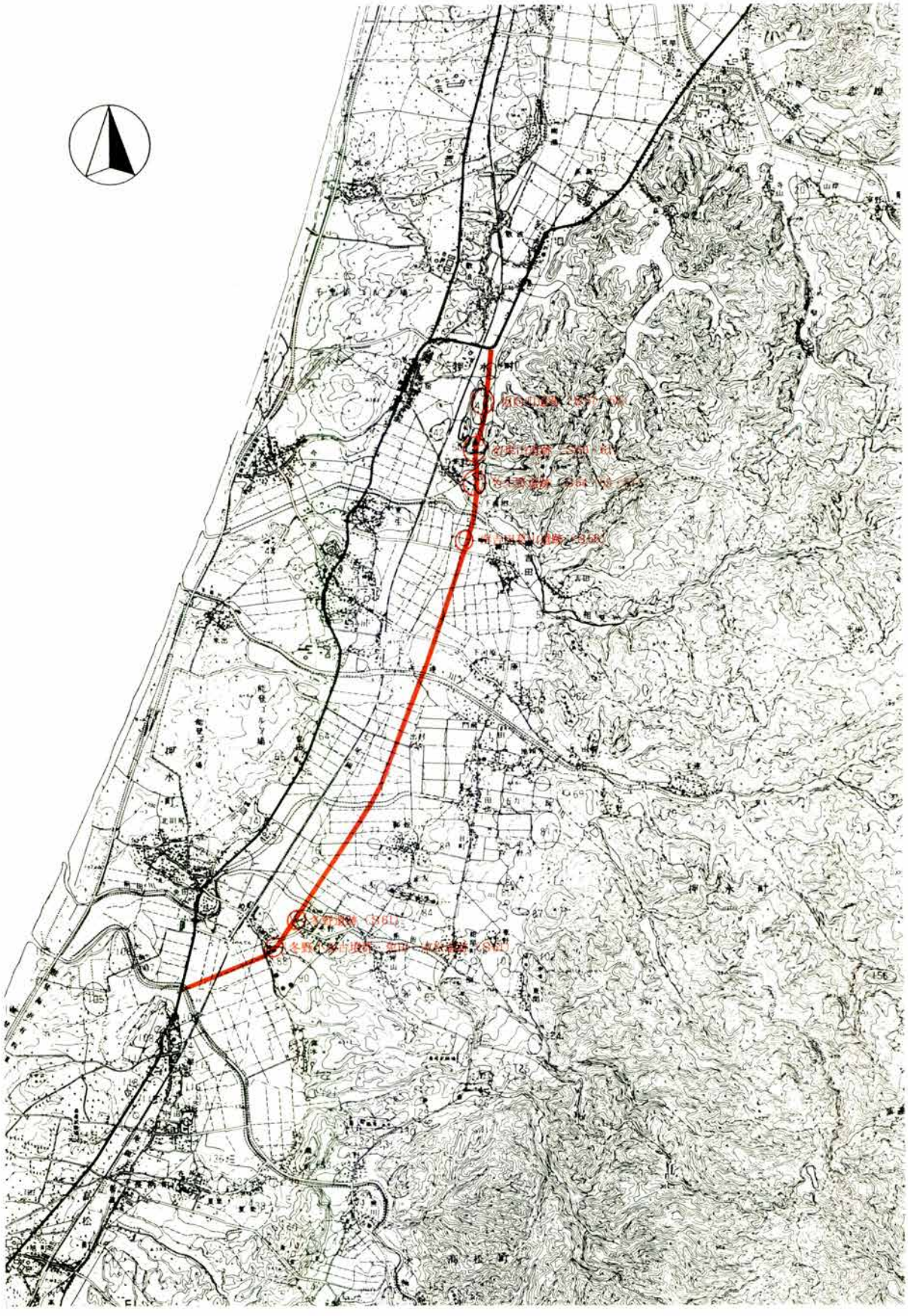
63年３月、『竹生野遺跡』刊行。

今回報告の冬野遺跡、冬野小塚古墳群、免田一本松遺跡については、冬野小塚古墳群が昭和43年の『全国遺跡地図（石川県）』に記されており、冬野遺跡、免田一本松遺跡についても昭和47年に実施された石川県埋蔵文化財包蔵地分布調査により発見され、昭和49年発行の『石川県遺跡地図』に記載されている。昭和56年に実施された押水バイパス冬野地先の分布調査で路線内の遺跡の広がりを確認し、昭和61年５月から発掘調査を開始した。

発掘調査前は、用地買収後放置され、雑木、雑草の生い茂るような状況であった。古墳群に付いては、１号墳は土取りで半壊状態にあり、２号墳に付いても盗掘を受けているようであった。

２　調査の経過

昭和61年５月中旬より冬野遺跡の発掘調査を開始する。雑木、雑草の刈り取りから始め、下旬には表土除去を開始する。



第１図　押水バイパスと発掘調査遺跡(1／50,000)

6月初旬から調査区の南側より切株を除去しながら遺構検出する。円筒土坑が多数確認され、中旬にはこれらの掘削を開始している。また、これと並行して冬野小塚古墳群、免田一本松遺跡の雑木、雑草の刈り取りをおこなう。この時点で調査対象地区以北に遺跡が広がることを確認している。表土除去は6月中旬に入り完了した。

6月の後半に入ると雨にたたられがちになるが、遺構検出と掘り下げを交互に繰り返しながら、7月上旬までに農道南側の遺構はほぼ掘りきっている。円筒土坑、掘立柱建物、竪穴住居跡などが確認されている。

7月上旬からは農道北側に調査の主体が移る。円筒土坑、竪穴住居跡、掘立柱建物などが検出された。円筒土坑は、調査区南側のグループと北側のグループにまとまることが判明する。また、調査区中程から北では、古代の遺構、遺物が検出されるようになり、地域をわずかにずらして、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺跡と古代の遺跡が存在することが確認された。

7月も下旬にはいると晴天に恵まれるようになる。遺構も多量に土器の出土している円筒土坑数基を残してほぼ掘り上がる。免田一本松遺跡は県道の北側から表土除去作業を開始している。30日には冬野小塚古墳群の現況の測量と冬野遺跡の航空測量を行う。

8月に入り晴天が続く様になる。冬野遺跡は円筒土坑の土器の取り上げと、掘立柱建物の断面図作成を行う。また航空測量では図化不可能な土坑底面の平面図作成も行い、8月下旬に調査を終了している。

免田一本松遺構は上旬までに県道北側の遺構検出にとりかかり、中旬からは県道南側の表土除去、及び一部遺構検出を開始している。8月中は、表土除去を終えた地区の遺構検出に終始した。冬野遺跡で検出された円筒土坑は確認されず、竪穴住居跡群が姿を現してきた。

9月に入り、竪穴住居跡の掘り下げを開始する。10月上旬まで住居跡の掘り下げが続く。表土除去は1号古墳南側に付いてこれを行う。墳丘の削平された方墳が確認される。

10月中旬からは1号墳周辺の遺構検出も始める。下旬に入り1号墳の表土剝ぎを開始。また、1号墳の県道西側（調査中は西南地区と呼称）の表土除去、および掘り下げを始めている。西南地区では、弥生時代の竪穴住居跡と縄文時代中期の土器を確認している。

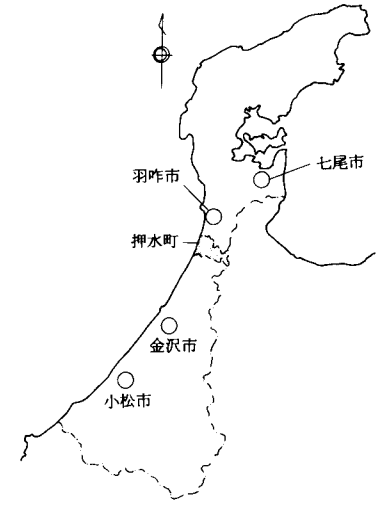
11月には2号墳の測量を始め、並行して周溝部分の発掘調査を行う。1号墳は、いよいよ主体部に取り掛かる。この時点で、1・2号墳は、方墳ということが判明している。また、3号墳周溝内から岩宿時代の石刃が発見されている。中旬までに遺構はほぼ掘り上がり、21日に航空測量を実施した。

航空測量後、1号墳封土の掘り下げと、西南地区の下層の調査、土坑坑底の平面図作成などに取り掛かる。12月中旬までにこれらの作業を終了し、12日に機材等の撤収、15日までに現地での作業をすべて終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

石川県羽咋郡押水町は旧能登国域の最南端に位置し、西側を日本海、東側を宝達山系によって画され、北は羽咋郡志雄町、南は河北郡高松町に隣接している。この町の地形を西から順に概観すれば、まず季節風によって形成された内中外3列の海浜砂丘、その後背の低湿地、山麓の低丘陵や台地、さらに主峰の宝達山（標高637m）によって代表される宝達山系に大別することができる。これら四者を東から西に貫くようにして相見・宝達・大坪・前田の各河川が流れており、それぞれの流域を潤しつつ日本海へ注いでいる。これらの南には宝達山東南斜面の水を集め、河北郡津幡町河合谷地区で大きく流路の方向を変えたのち、宝達山系と津幡丘陵を隔てつつ北西へ流れる大海川が存在する。この川の下流域、免田一本松遺跡の立地する台地の西南には、長さ約3km、幅約1kmの狭長な沖積低地が広がっており、これはかつての大海潟の名残であるという。



第2図 押水町の位置

次にこれらを渡河しつつ加賀と能登を結ぶ道（陸路）についてみていきたい。まず、その最も主要なものは、内列砂丘の後背直下を縫うようにして、内高松（高松町）―中沼（同）―二ツ屋（同）―免田（押水町）―小川（同）を結ぶものである。江戸時代には七尾街道と呼ばれており、押水バイパス供用前の国道159号にほぼ相当する。これに対して、大海川中流の黒川（高松町）から野寺（同）の峠を越え、紺屋町（押水町）―上田（同）―河原（同）と宝達山麓の村々を結ぶ道もある。現在は主要地方道小矢部押水線となっており、少し前までは国鉄バスも運行されていた。このような道が中世以前のいつ頃までに遡り得るか定かではないが、平安時代の『延喜式』には北陸道の本道から分岐して能登へ向かう支路沿いに「横山駅」と「撰才駅」の名がみえ、それぞれが河北郡宇ノ気町横山及び羽咋市余喜地区に比定されることから、その中間に位置する押水町域を南北に貫く古代の官道は、前記の2つのルートのいずれかであった可能性が高いと思われる。冬野・免田一本松遺跡は砂丘後背の道と山麓の道に挟まれるようにして立地しているが、どちらかといえば前者に近い。西には大海川河口を控え、その周辺の低湿地からのびる水路も遺跡のある台地近くにまでのびていたものと推測されることから、冬野及び免田一本松の地は、古来より水陸交通の要衝の地であったことが窺われるのである。

最後に両遺跡付近の地形について簡単に触れておきたい。押水町南部の宝達山西麓には、東間さかて山遺跡付近を扇の要として長さ約3km、最大幅約2kmにわたる低い丘陵（台地）が広がっている。北を前田川、南を大海川及びその支流の野寺川によって画されたこの低丘陵（台地）は、ほぼ全面を更新世の堆積物によって被覆されており、その形状等から考えてもかつての扇状地、いわゆる隆起扇状地ではないかと思われる。現在ではかなり開析が進んでいる状況であり、扇端部においては樹枝状に派生する数条の支丘がみられる。それら支丘のうち最も北に位置するのが冬野遺跡が立地する台地、そこから南に谷一つ隔てたところにあるのが免田一本松遺跡の占地する台地であり、それぞれ南東から北西に向けて細長くのびている。以下、冬野台地及び免田一本松台地という名称を用いてゆくことにするが、より微細な地形については、各遺跡の遺構の概要に関する記述に譲りたい。

第３図　押水町南部の地形（１／50,000）

第２節　歴史的環境

押水町は“お清水町”である。宝達山麓の湧水は幾多の時代にわたって人々の生活を支え続けてきたといえよう。そのような営みの結果遺された遺跡や遺物、さらには発掘調査による考古学的知見等については、すでに北野博司が押水町宿東山遺跡の報告書において時代ごとにまとめており、改めて繰り返す必要もないかもしれないが、一応ここでも簡単に時代を追いながら触れていくことにしたい。

岩宿時代

かつては旧石器時代なる術語が用いられていたが、「時代」（AGE）とは本来、地域（地球上の一定の空間）に根ざした特殊性を表現する言葉でもあり、すでにヨーロッパという地域において一定の概念的な内容を包含してしまった「旧石器」（PALAEOLITHIC）を避け、本報告書では後期旧石器時代に相当する部分については、岩宿時代という名称を用いていくことにしたい。（これについては本田秀生の見解にしたがった。）

さて、押水町は県下で最初にこの時代の遺物が発見され、しかも現在県下で最も多くの遺跡数が知られる町である。まず、1960年に御館地内の水田で“ナイフ・ブレード”が採集されたのを皮切りに、80年代以降の押水バイパス改築に係る事前調査のなかで、宿向山（しゅくむかいやま）・宿東山（しゅくひがしやま）・竹生野（たこの）の末森山麓３遺跡からＡＴ下位に比定されるべき内容をもった石器群の検出が相次ぎ、免田一本松遺跡からも石刃が出土している。それ以外にも正友はちじがり遺跡出土の石槍が知られているが、これら押水町の資料については本報告書中で本田秀生が詳しく論じている。

縄文時代

第四氷河期の終焉は、日本列島にも温暖な気候をもたらしたが、押水町ももちろんその例外ではなかった。このような状況下でおこった海進や海浜砂丘の形成といった現象については、『押水町史』において藤則雄が論じている。それによれば、まず、縄文時代前期に縄文海進がみられ、免田一本松遺跡西南の大海川下流域に入江が出現したという。その後、前期末に内列砂丘が、続く中期初頭には中列砂丘が形成されたとのことであり、かかる汀線の変動が縄文人の生業活動に少なからず影響を与えたことは、想像に難くない。

ところで、この地域にみられる最も古い縄文時代の人々の足跡は、高松町野寺Ａ遺跡・押水町宝達こぶしがせ遺跡など山間部に見い出すことができる一方、平野部に接する低丘陵上に立地する押水町宿向山及び宿東山遺跡からも佐波式期の遺物が検出されている。なかでも、野寺Ａ遺跡からは冬野遺跡の発掘に参加中の津田耕吉によって早期に属する資料（楕円押型文を伴う土器）が採集されており、この点は特筆に値しよう。

中期に入ると遺跡はにわかに増加の傾向を辿るようである。新保式期の住居跡が確認された東間（あずま）さかて山遺跡、それに続く新崎式期の上田地頭方（うわだいとがた）遺跡、中葉後葉串田新式期を主体とする紺屋町ほんでん遺跡など、宝達山麓に連綿と遺跡が営まれる。また、内列砂丘上の北川尻すわ山遺跡・北川尻ほしば山遺跡でも中期前葉の土器が採集されており、この砂丘という新しい環境への人間集団の痕跡の拡がりは注目すべき事象といえる。その他では、坪山かわだ遺跡から中期の土器とともに採集された硬玉製勾玉が興味深い資料であろうか。

後・晩期に入ると宝達山麓で上田うまばち遺跡が営まれたほか、内列砂丘でも上田出西山遺跡から酒見式期の土器が検出されている。後・晩期については、近年大変に重要な発掘調査の成果がもたらされることとなった。1989年に当センターが発掘調査を実施した紺屋町ダイラクボウ遺跡がそれであり、丘陵裾に前後２列に配置された大小21基の土坑からなる貯蔵穴群が確認されるところとなった。袋状を呈するそれらの土坑中にはドングリ類に加えクリ・トチなどの堅果類が遺存しており、当時の食料の実態を知る貴重な手がかりが提供されたといえよう。この遺跡からは後期の土器が少量出土しているが、調査を担当した垣内光次郎は貯蔵穴を営んだ母体として北方約100ｍの東間たけのこし遺跡を想定している。

弥生時代

宝達山系から流れ出した河川の下流域、内列砂丘の後背にあたる場所には、かつては葦の生い茂る低湿地が広がっていたと推定されるが、そこは初期の水田耕作者にとっても格好の生産の場として利用されていたのものと

考えられる。この時期における人々の活動を示す証しとしては、押水町の北川尻おさの山遺跡・竹生野トリゲ山遺跡など、内列砂丘周辺の遺跡で採集された弥生時代中期の土器等をあげることができよう。

やがて、後期後半から終末、法仏・月影式併行期になると遺跡数も増加し、その分布密度もかなり高まるようである。冬野・免田一本松の両遺跡をはじめとして、押水バイパス改築に伴い発掘調査が実施された宿向山、宿東山遺跡では該期の集落跡が確認されているほか、竹生野遺跡では冬野遺跡と同様の大型土坑群をみることができる。それ以外でも低湿地を見下す内列砂丘上の上田出西山遺跡から該期の土坑等が検出されている。

ところで、この時期は集団内で階層分化が進むとともに集団相互の緊張が高まった時期でもあり、そのような社会情勢を反映した所産としては、高松町中沼Ｃ遺跡の方形周溝墓群や同町西山遺跡の環濠を伴う集落跡が知られている。ともに大海川流域に位置し、前者は下流の沖積地西側の内列砂丘上、後者は山間を縫うようにしてきた大海川が下流の沖積地に注ぎ込もうとするまさにその地点に張り出した丘陵先端（標高60～79m、平野との比高50～60m）に立地している。

古墳時代

近年の調査事例を中心に集落跡と古墳に分けて概観していきたい。

集落跡に関しては、押水町北部（末森山麓）の低丘陵上に立地する宿向山・宿東山・竹生野の各遺跡で古墳時代の竪穴住居跡群が確認されているほか、そのやや南、相見川左岸の沖積地に営まれた南吉田葛山遺跡も1990年に押水町教育委員会によって発掘調査が実施され、やはり古墳時代の竪穴や溝などが検出されているようである。押水町南部については、冬野・免田一本松遺跡以外ではさしたる調査事例に恵まれていないのが実状であろうが、大海川を挟んだ対岸の高松町の内列砂丘上には研究史上著名な二ツ屋遺跡が所在する。

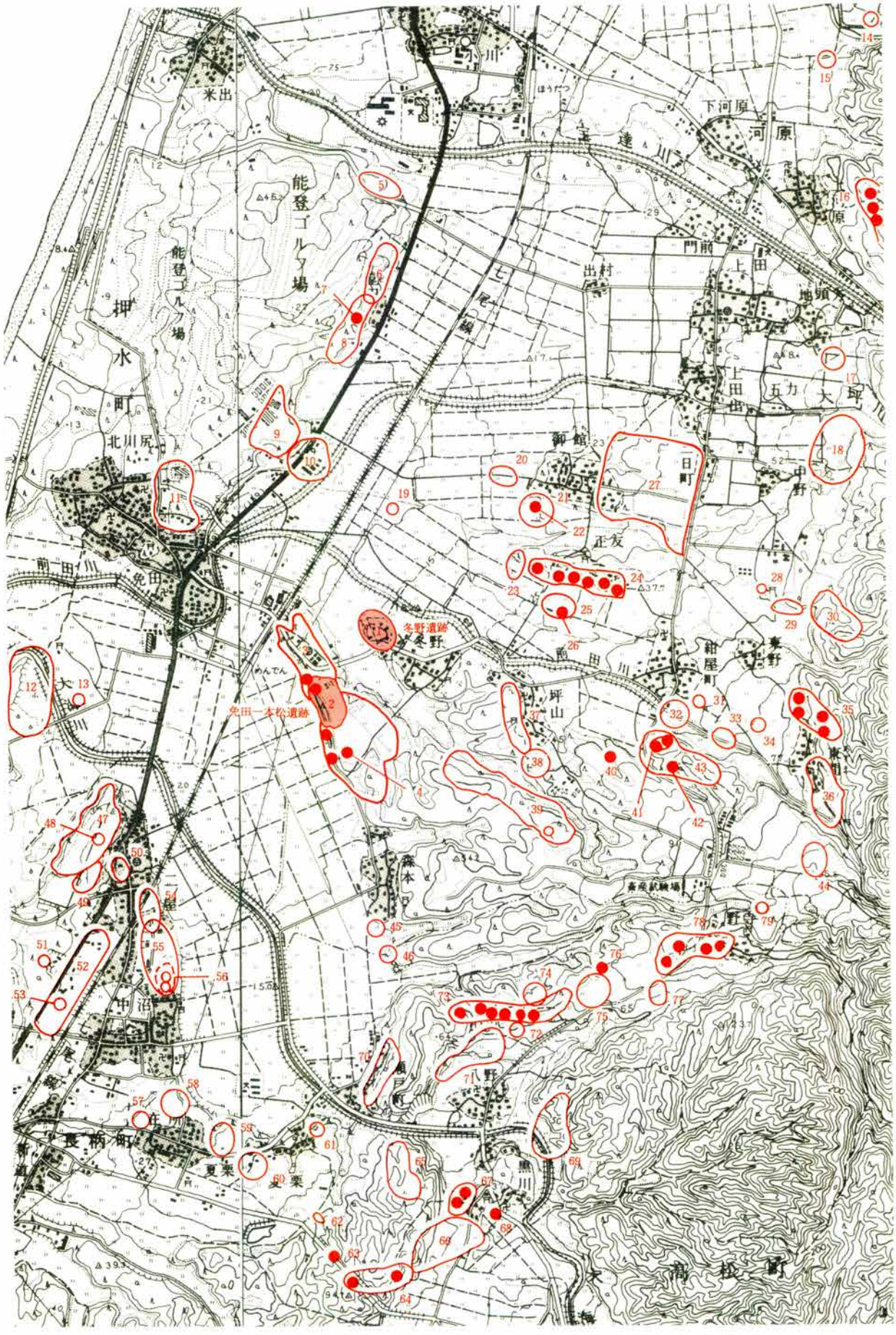
なお、飛鳥時代（７世紀）に関しては、竹生野フルヤシキ遺跡や北川尻おさの山遺跡からの遺物の出土が知られている。前者は1987年に当センターによって発掘調査が行われており、調査を担当した垣内光次郎の教示によれば、調査区は集落跡端部にあたり、土馬（須恵質）の出土もみられたとのことである。さらにこの世紀には紺屋町ムカイノ窯跡ですでに須恵器生産が開始されている点も注目される。

一方、古墳については、押水町域では宝達山麓を中心に分布しており、築造された時期も前期から後期末に及ぶようである。それらを北からみていくならば、１号墳からの後漢鏡の出土によって知られ、群中に前方後方墳２基を含む宿東山古墳群、50m級の前方後円墳を主墳とする竹生野天皇山古墳群、宝達川右岸の丘陵に築かれた河原三つ子塚古墳群をあげることができ、いずれも宝達川以北に立地している。これに対して、押水町の南部、大海川右岸の隆起扇状地付近では、まず西から本報告書でも扱う冬野小塚古墳群、そこからやや離れて墳丘径38mで葺石と円筒埴輪列を伴う冬野大塚（旧称森本大塚）古墳が免田一本松台地に築かれている。隆起扇状地の前田川を挟んだ対岸にも、横穴式石室墳に代表される東間宝殿山古墳群、現集落と重複する正友古墳群がみられる。さらに広く大海川流域を眺めれば、左岸の内列砂丘裾に二ツ屋古墳群、中沼きりやま古墳群、また同川中流でも黒川古墳群が形成されている。これら三者はいずれも高松町域に属し、後期古墳と考えてほぼ間違いないようである。

以上の古墳の分布状況において、前期古墳を主体とする押水北部の宿東山古墳群と同南部の冬野小塚古墳群、また、小地域内で中心的な地位を占める北部の竹生野天皇山１号墳と南部の冬野大塚古墳とをそれぞれ対比させて考えていけば、相互に多少の時間的なズレがあるとはいえ、ほぼ古墳時代を通じて押水町北部と南部、言い換えれば邑知潟縁辺から南にのびる沖積低地の南端から相見川流域、他方は大海川流域をそれぞれ基盤とする二つの政治的勢力の存在が予想される。

また、横穴群については、宝達川右岸の押水町山崎、前田川左岸の同町坪山、大海川中流右岸の高松町黒川などに分布する状況が窺える。

最後に古墳とは直接は関係ないかもしれないが、1891年に大海川河口付近で須恵質の人物埴輪２体が採集されていることも付け加えておきたい。



第４図　冬野・免田周辺の遺跡（１／25,000）

第１表　周辺の遺跡地名表

番号	県遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	現　況	時　代	出　土　品　他
1	6203	冬野遺跡(II)	押水町冬野	台　地・水田	弥生～近世	弥生土器・土師器・須恵器他
2	1920	免田一本松遺跡	〃　〃	〃　・畑地	旧石器～古墳	石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器他
3	1941～　44	冬野小塚古墳群	〃　免田	〃　・〃	古墳	土師器、４基以上
4	1945	冬野大塚古墳	〃　冬野	〃　・〃	〃	円墳（径38ｍ、高さ5.5ｍ）
5	6547	小川Ａ遺跡	〃　小川	砂　丘・荒地	不詳	須恵器
6	2001	堂田遺跡	〃　堂田	丘陵端・畑地	奈良・平安	土師器、須恵器、土馬（須恵質）
7	2015	米出ドダヤマ中世墓	〃　米出	〃　・宅地	中世	五輪塔、宝篋印塔、蔵骨器
8	6204	上田出西山遺跡塔	〃　上田出他	砂　丘・ゴルフ場	弥生～中世	弥生土器・土師器・須恵器
9	1932	北川尻おさの山遺跡	〃　北川尻	〃　・畑地	古墳	土師器・須恵器
10	1931・　33	〃	〃　〃	平　地・水田	弥生～古墳	弥生土器・土師器
11	1935	北川尻ほしば山遺跡	〃　〃	砂　丘・山林	古墳末～平安	竪穴住居24、掘立柱建物２
12	1923	免田大海河床遺跡	〃　免田	河　川・河床	古墳～	土師器・須恵器
13	1924・　25	免田丸山遺跡	〃　〃	平　地・荒地	奈良・平安	土師器
14	2024	南吉田古屋敷遺跡	〃　南吉田	〃　・水田	不詳	須恵器
15	2020	南吉田堂の後遺跡	〃　〃	〃　・〃	〃	土師器
16	2017	河原三つ子塚古墳群	〃　河原	丘　陵・山林	古墳（中期）	円墳６基以上
17	2003	上田地頭方遺跡	〃　上田	平　地・畑地	縄文（中期）	縄文土器、石器
18	2002	上田うまばち遺跡	〃　〃	台地端・水田	〃（後期）	〃
19	1946	坪山かわだ遺跡	〃　坪山	平　地・〃	〃（中期）	縄文土器、硬五勾玉
20	1998	御館下遺跡	〃　御館	〃　・〃	弥生	弥生土器（月影期）
21	1997	御館遺跡	〃　〃	〃　・〃	不詳	土師器
22	1996	〃	〃　〃	〃　・〃	旧石器	ナイフブレイド？
23	1994	正友はちじがり遺跡	〃　正友	台　地・水田	縄文？	石槍
24	1988	正友古墳群	〃　〃	〃　・宅地	古墳	円墳６基
25	1983	正友じんとくじま遺跡	〃　〃	〃　・畑地	縄文	
26	1987	〃	〃　〃	〃　・〃	古墳	
27	5068	御館館跡	〃　〃	平　地・〃	中世	
28	1999	御館ヘライバシ窯跡	〃　〃	山　麓・宅地	奈良～平安	須恵器
29	6546	東野Ｂ遺跡	〃　東野	丘陵裾・畑地	不詳	土師器
30	6886	正友ヤチヤマ窯跡	〃　正友	〃　・山林	奈良	須恵器
31	1960	岡部館跡	〃　紺屋町	台地端・水田	不詳	
32	1962	紺屋町ほんでん遺跡	〃　〃	平　地・〃	縄文・古墳・中世	縄文土器、石器、須恵器、珠洲焼
33	1974	東間たけのこし遺跡	〃　東間	台地端・〃	縄文（後晩期）	縄文土器、石器
34	1975	東間ほりがいち遺跡	〃　〃	台　地・〃	〃（晩期）	
35	1978	東間宝殿山古墳群	〃　〃	丘　陵・山林	古墳（後期）	円墳等４基以上
36	6884	東間ヨウショウジ遺跡	〃　〃	山　麓・〃	平安・中世	土師器、珠洲焼
37	1948	坪山横穴群	〃　坪山	丘陵端・〃	古墳（後期）	土師器、７基以上
38	1957	坪山みやのた遺跡	〃　〃	丘陵裾・水田	不詳	土器
39	1955	坪山あさか窯跡	〃　〃	丘　陵・山林	奈良～平安	２基以上
40	1969	紺屋町むかいの窯跡	〃　紺屋町	丘陵裾・〃	古墳	須恵器
41	1966	紺屋町天神山横穴	〃　〃	丘陵端・〃	〃	２基以上
42	1968	紺屋町飯塚古墳	〃　〃	丘　陵・〃	〃	円墳
43	6885	紺屋町ダイラクボウ遺跡	〃　〃	〃　・〃	縄文・平安・中世	縄文時代貯蔵穴群
44	1973	東間さかて山遺跡	〃　東間	〃　・牧場	縄文（中期）	住居跡
45	6545	森本Ｂ遺跡	〃　森本	平　地・畑地	奈良・平安	
46	6544	森本Ａ遺跡	〃　〃	丘陵端・〃	〃	
47	1840	二ッ屋しっとがらん遺跡	高松町二ッ屋	砂　丘・果樹園	不詳	土器
48	1842	二ッ屋縄文遺跡	〃　〃	〃　・〃	縄文	縄文土器・石器
49	1837	二ッ屋瓦工場遺跡	〃　〃	〃　・山林	不詳	土師器
50	1844	二ッ屋遺跡	〃　〃	平　地・宅地	古墳（前期）	〃
51	5060	中沼Ｃ遺跡	〃　中沼	砂　丘・山林	弥生・古墳	方形周溝墓群
52	5059	中沼Ｂ遺跡	〃　〃	平　地・山林	不詳	土師器、須恵器
53	1835	中沼Ａ遺跡	〃　〃	砂　丘・畑地	縄文	石器
54	6531	二ッ屋Ｄ遺跡	〃　二ッ屋	平　地・畑地	古墳～平安	土師器、須恵器
55	5059	中沼Ｄ遺跡	〃　中沼	〃　・〃	〃	土師器、須恵器、管玉
56	1836	中沼きりやま古墳	〃　〃	〃　・荒地	古墳	墳丘２基（消滅）
57	1837	長柄マエダ遺跡	〃　長柄	〃　・工場	平安	土師器
58	6533	長柄遺跡	〃　〃	〃　・宅地	奈良・平安	土師器、須恵器
59	6534	夏栗ミヤノ遺跡	〃　夏栗	〃　・〃	古墳	土師器
60	6539	夏栗Ａ遺跡	〃　〃	河岸段丘・畑地	奈良・平安	土師器、須恵器
61	6540	夏栗Ｂ遺跡	〃　〃	平　地・水田	〃	〃
62	6541	夏栗Ｃ遺跡	〃　〃	丘　陵・畑地	〃	〃
63	5062	元女２号窯跡	〃　元女	〃　・山林	不詳	（消滅）
64	1869	元女しんめい窯跡	〃　〃	〃　・〃	〃	（地点不明）
65	6883	西山遺跡	〃　瀬戸	〃　・畑地	弥生	環濠集落
66	6538	黒川遺跡	〃　黒川	丘　陵・水田	奈良・平安	土師器、須恵器
67	5065	黒川２・３号古墳	〃　〃	平　地・宅地	古墳	（消滅）
68	1899	黒川１号古墳	〃　〃	〃　・〃	〃（後期）	
69	1900	黒川窯跡群	〃　〃	丘陵端・水田	不詳	須恵器、３～５号窯跡、
70	6542	瀬戸コノウエ遺跡	〃　瀬戸	平　地・畑地	奈良・平安	土師器、須恵器
71	6543	八野Ｂ遺跡	〃　八野	丘　陵・水田	縄文・奈良～中世	縄文土器、土師器、須恵器、珠洲焼
72	1910	八野ウワノ縄文Ａ遺跡	〃　〃	台　地・水田	縄文	縄文土器、石器
73	1903	八野窯跡群	〃　〃	丘　陵・山林	奈良	６基以上
74	1911	八野ウワノ縄文Ｂ遺跡	〃　〃	台　地・畑地	縄文	石器
75	1912	八野遺跡	〃　〃	〃　・水田	古墳～奈良	土師器、須恵器
76	1909	八野７号窯跡	〃　八野	丘　陵・山林	奈良	
77	－	野寺Ａ遺跡	〃　野寺	河岸段丘・水田	縄文（早・前期）	押型文土器、津田耕吉氏発見
78	1913	野寺窯跡群	〃　〃	丘　陵・宅地	奈良	須恵器
79	1918	野寺尼塚	〃　〃	〃　・牧場	不詳	伝承のみか

奈良・平安時代

近年の調査事例を中心に集落跡と生産遺跡に分けて述べていくことにしたい。

弥生～古墳時代に集落の形成がみられた押水町北部末森山麓の３遺跡は、古代においても引き続き集落として利用されているようである。宿東山遺跡で奈良時代初頭の竪穴住居跡が２棟、また宿向山遺跡でも奈良時代後半頃のそれが１棟確認されている。古代の掘立柱建物跡については、宿向山・竹生野両遺跡でそれぞれ３棟以上確認され、いずれも平安時代頃と推定されている。一方、押水町南部の大海川流域においては、冬野遺跡の北西約１㎞の大海川右岸にせり出した内列砂丘上の北川尻ほしば山遺跡を1974年に石川考古学研究会が発掘調査した結果、奈良時代の竪穴住居跡27棟、平安時代の掘立柱建物跡２棟が検出され、前者からは和同開珎や銅製バックルも出土したという（調査を担当した西野秀和の教示による）。

以上の知見から、押水町付近では、奈良時代（８世紀）においては一辺３～４ｍの方形が呈したカマドを伴う竪穴住居跡が一般的であり、それが掘立柱建物に転換していくのは平安時代前期（９世紀）以降まで待たねばならないことが指摘できるかもしれない。とはいえ、本報告書で扱う冬野・免田一本松両遺跡については、必ずしもこの住居形態の年代的変遷の図式が当てはまるわけではなく、そこに両遺跡の地域における歴史的位置付けや性格について考えていく際の大きな課題が潜んでいる可能性もあり、今後とも十分な注意を払っていく必要が認められよう。

その他では、明確な竪穴住居跡は確認されなかったものの内列砂丘上を占地する上田出西山遺跡の包含層からは、奈良時代後期から平安時代前期にかけての須恵器・土師器とともに、多くの管状土錘や土製支脚の出土がみられ、周辺において漁撈や塩業生産に携わった集団の存在が予想される。また、前記の宿向山遺跡の調査区南端から、北及び東側を溝によって画された10ｍ四方に満たない小テラスが検出され、特にその東斜面では廃棄行為によると考えられる土器溜りが形成されていた。そこを中心に須恵器多口瓶や灰釉陶器の手付瓶などの特殊な器種がみられる点、土師器の杯や椀に灯芯痕やタール状付着物が目立つ点、さらに小テラス内には柱穴様のピットが存在する点などから、報告者宮下栄仁は平安時代中期頃に宗教的施設が存在した可能性を指摘している。

次に生産遺跡について述べていくことにしたい。大海川流域を代表する古代の生産は、窯業すなわち須恵器生産だといえる。宝達山麓の押水町御館（おたち）・正友・紺屋町・坪山、大海川流域の高松町野寺・八野（はちの）・黒川・元女（がんにょ）・箕打（みうち）、さらに河北潟に注ぐ宇ノ気川水系の高松町若緑・宇ノ気町余地にかけて分布する須恵器窯跡群は、「高松・押水窯跡群」と総称され、その範囲は南北約５㎞、東西約３㎞に及ぶ。分布の実態や年代観については、『宿東山遺跡』に所収の川畑誠による論稿があり、詳しくはそれを参照して頂くことにしたい。最近では押水町正友地内で発掘調査が実施された正友ヤチヤマ１号窯跡（８世紀前半）から、階段状に構築された窯体床面が検出されており、調査を担当した川畑誠・安英樹は東海地方、とりわけ静岡県西部の湖西市周辺の窯跡との類似を指摘している。窯体構造の面に端を発した技術系譜の問題が、工人集団を包摂した生産組織の構造や経営形態の実相といったテーマにどのような新視角をもたらし得るのか、今後の研究の深化が期待される。

第３節　オホミ郷周辺の水系と遺跡

イ．能登・加賀国境の意味するもの

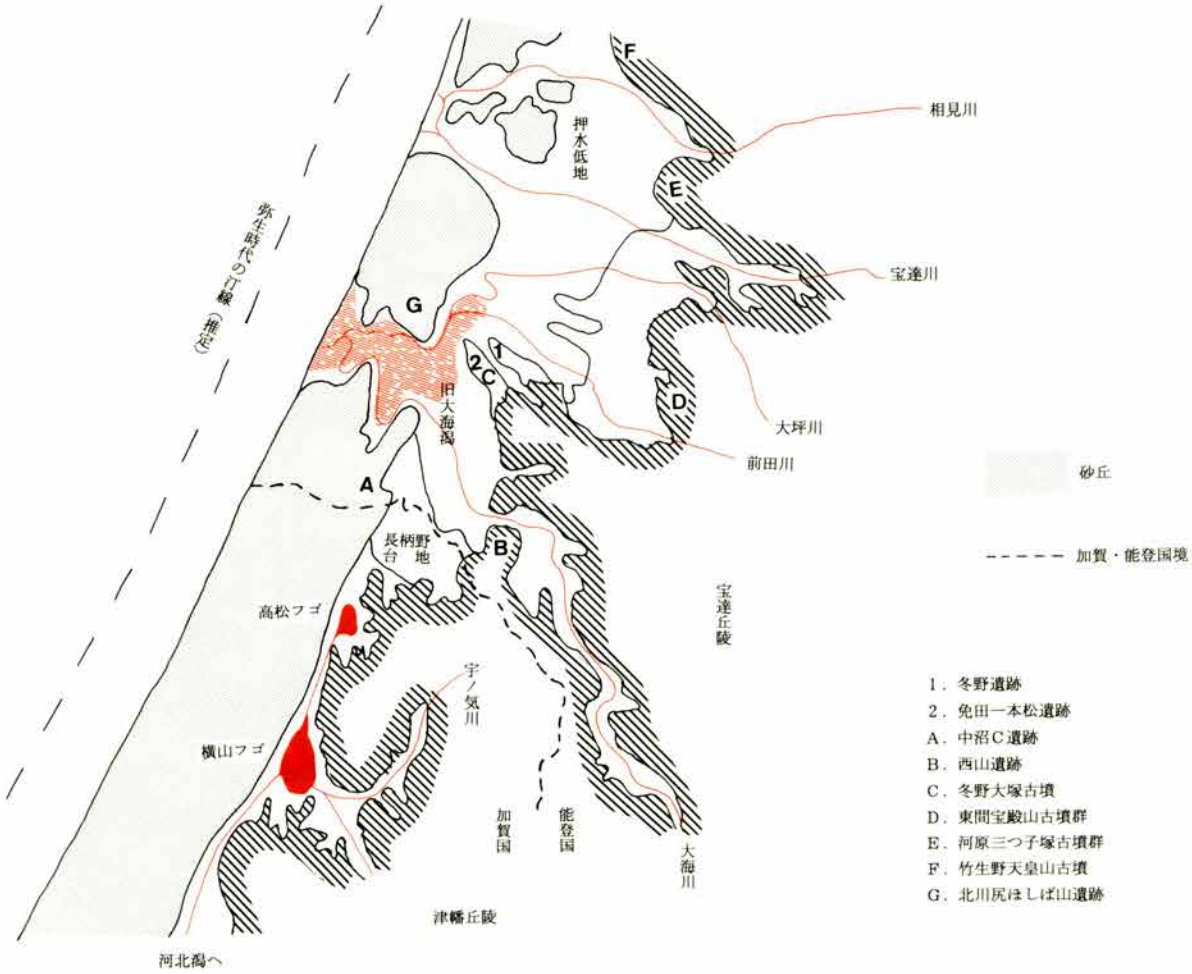
大海川は加賀と能登を隔てる川であると一般には考えられがちである。巨視的にみた場合はこの考え方で大過ないといえるかもしれないが、微視的な見地からでは必しくも正しくはないと指摘できよう。戦後の町村合併の経緯を紐とけば、現在は河北郡高松町に属するかつての南大海村、同じく津幡町に属する河合谷村が、昭和29年以前までは羽咋郡、つまり能登国域に属していた事実が理解される。さらに能登国の最南端を構成する両村の村域について、陸地測量部発行の地形図（第３図参照）を検討するならば、まさに大海川水系までが能登国であった点に気付くであろう。この国境線が近世を超えてそれ以前のどの時代まで遡り得るかは、はっきりとは知る由もないかもしれないが、長い伝統性を有したものとして留意しておく必要はあるのではなかろうか。

一方、これを加賀国の側から考えた場合、河北潟（大野川）水系までが加賀国に含まれ、それに流入する河川の流域が加賀国北端の河北郡の郡域を構成すると言い換えることもできる。河北郡の近世の内陸舟運については、一つの注目すべき古絵図が残されている。『石川県宇ノ気町史』（1970年刊行）の205ページに掲載されている「河北潟古図」の写しがそれであり、原本は19世紀前半の文政年間に作成されたという。宇ノ気川の流域には「横山フゴ」及び「高松フゴ」、加えてそれを繋ぐ宇ノ気川・大谷川と思われる水路が描かれていることから、往時は河北潟から内高松（ＪＲ七尾線高松駅付近）付近まで舟で遡上することができたものと思われる。なお、「フゴ」とは低湿な沼地のような地形を指すのであろう。

以上の点から能登・加賀国境線には、伝統的に三国山から西へ続く大海川・宇ノ気川両水系の分水嶺があてられていた状況が推測される。一方、海岸砂丘後背付近に目を転じてみれば、「高松フゴ」と大海川下流の低湿地を隔てる長柄野台地に国境が置かれていたが、南北１㎞余りで標高も30ｍ程度に過ぎないこの台地が陸上交通にとって大きな障害をなしていたとは考えることはできない。しかしながら、河北潟から遡上した川舟はこの台地に遮られ大海川水系へ抜けることはできず、そのため台地の南側が河北潟水系の内陸舟運の終点をなしており、水運にとってはまさに越すに越されぬ長柄野であったわけである。このように旧国域という伝統的領域の境界が、河川の水系やそれを利用した内陸舟運のあり方によって大きく規定されている事例は、われわれにその歴史的環境に占める役割の重要性を改めて認識させてくれるのではなかろうか。

ロ．オホミ郷とその郷域

次に冬野・免田一本松両遺跡が位置する大海川水系の史的背景について少しばかり考えてみたい。この周辺の



第５図　能登国南端部の水系と遺跡（１／100,000）

状況が文献上に登場してくるのは古代からであるが、平安時代に成立した『和名抄』には能登国羽咋郡八郷のうちに「大海郷」の名がみえ、訓は「於保美」と註されている。大海郷はその名が示すように、大海川及び河川改修以前までそれに合流して支流をなしていた前田・大坪の両河川の流域を含めた部分が郷域の中心を占めていた点は、まず疑い得ないのではなかろうか。したがって、大海郷は能登国最南端の郷ということになる。

この大海郷の郷域の南限については前述の伝統的な国境を念頭に置けばよいのであろうが、残る北限については見解の分かれるところである。鎌倉時代、押水低地には「大泉庄（おおしみず）」と呼ばれる庄園があり、それが南北朝期には北・中・南の三庄に分立するとされているが、そのうちの北庄にあたる部分には、宝達山系から宝達・相見の両河川が流下している。両川は陸地測量部発行の地形図でみる限り、河口がかなり近接した位置にあり、弥生時代など汀線が現在よりかなり沖にあった時期には最下流部で合流して可能性が高いのではないかと思われる。この宝達・相見川水系が大海郷域に包摂されるか否かをめぐっては、いまだ定説がないのが現状かもしれないが、押水低地という言葉で表現される地形的一体性や、院政期に立券した大泉庄のあり方から考えて、本稿では大海川水系と宝達・相見川水系という二つの水系の流域から構成される範囲を大海郷の郷域としてとらえつつ論を進めていくことにしたい。もちろん、この場合の大海川水系には、かつてのその支流前田川・大坪川も含まれてくることになる。

ハ．オホミ郷の展開

古代の〝大海郷〟なる歴史的な領域の起源がいつ頃に求められるかは詳らかではない。しかし弥生時代後期後半から終末期にかけてのこの地域の動向には注目すべきものがある。大海川下流域を見渡す西山の丘陵上には環濠集落が築かれるとともに、同下流域を東に望む中沼の砂丘上には方形周溝墓群が出現する。これらは共同体内でおこった階層分化の一側面と集落を超えて進みつつあった地域統合の動きを如実に体現した所産と性格付けることも可能であり、のちにそれが結実し、一定の質的変遷を伴ったのちに成立してくる大海郷の胎動をそこに感じ取ることは、あながち牽強に過ぎるとはいえないのではなかろうか。冬野や竹生野のムラにみられる大型土坑群についても、このような胚胎期が有していた社会的時代的背景の文脈のなかで理解していくことが、今後とも必要とされる。

次に弥生時代から古墳時代への移行は、階級社会への移行でもあった。このような社会情勢を反映したモニュメントとして古墳が構築されるようになるが、その社会情勢はオホミ郷にとっても無縁ではなかった。大海川下流域や相見川流域を見下ろす台地や丘陵上には、それぞれ前期古墳を含む冬野小塚古墳群や宿東山古墳群が築かれるようになる。続く中期から後期にかけては、一部の古墳は大型化の道を辿るようであり、なかでも大海川流域の葺石や円筒埴輪列を伴う冬野大塚古墳や相見川流域の50m級の前方後円墳である竹生野天皇山１号墳は小地域の盟主墳としての威容を備えた古墳であるといえる。

ここで、これら盟主墳の存在が意味するところについて若干考えみることにしたい。石川県の地図を広げてみればわかるように、北加賀の金沢市から南能登の羽咋市にかけての海岸線には長く海岸砂丘が発達しており、そのうちの一部は日本三代砂丘の一つである内灘砂丘として世に知られている。このような砂丘の発達という自然現象は、殊に中小河川の直接的な日本海への流入を妨げ、多くの場合に、一旦砂丘後背で帯状の低湿地を形成してさらに潟や比較的大規模な河川に合流し、しかる後に海へ注ぐという迂遠な流路をとらせることになる。そのため自ずと河口の数が限られてしまい、北加賀の河北潟の放水路をなす大野川の河口と南能登の邑知潟の放水路をなす羽咋川の河口間約40kmにわたる海岸線では、河口を有する河川はすべて宝達山系の丘陵斜面を急激に流下するオホミ郷内のそれによって占められている。それは大海川と宝達川・相見川に他ならないが、後二者は先述のようにかつて合流していた可能性も考えられ、その河口数はせいぜい２ないし３であったと推測される。以上の水系を中心とした地理的条件、すなわちオホミ郷内の河川がすべてオホミ郷の海岸線で海に注ぐという水系上の独立性は、一衣帯水の関係にあった河北潟や邑知潟周辺の諸郷を包括し、さらにはそれに続く金沢平野や邑知地溝帯の一部の地域とも密接な関連性を有する形で生成し展開しつつあったカガやハクヒの強大な王権から相対的に自立した政治的位置をオホミ郷の首長層に提供していたものと思われる。その自立的な政治的基盤を前提に

して、冬野大塚古墳や竹生野天皇山1号墳などのオホミ郷の盟主墳が出現してるくるわけであるが、その両者がなおも水系を異にした立地を占すという事実は、冬野小塚古墳群や宿東山古墳群などによって代表される郷内の前期以来の二大勢力圏が少なくとも中期の段階ではいまだ解消されずに併存していた可能性をも示唆してくれる。とはいえ、古墳群の築造という事象からみた古墳時代の地域史を復原する試みは、今後の資料の増加をまちつつ進展がはかられねばならない。石川県内では、古墳に関する墳丘測量図や石室測量図、さらに副葬品の実測図とそのリストの作成といった基礎的データを蓄積する地道な作業は、現在、途上段階にあるといえる。オホミ郷の古墳時代史像を解明するうえでは、竹生野天皇山古墳群や東間宝殿山古墳群など地域の重要古墳についてのデータを図化・資料化・公表することが急がれねばならないことを余談ながら申し添えておきたい。

その後、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代へと続く律令社会の形成過程のなかで、押水低地一帯は、能登国羽咋郡大海郷として位置付けられていくが、この時期にはかつてこれを挟むようにして蟠踞していた「クニ」の「王」たちの後裔と目される北加賀の道君や南能登の羽咋郡などが譜第の郡領氏族へと変貌していったものと考えられている。羽咋郡に属する大海郷は、後者すなわち羽咋君の勢力に対して従属的な政治的立場に置かれていたものと推測され、そのような状況の下では、かつてのオホミ郷域の盟主墳の被葬者の系譜に連なる者たちが、依然として押水低地一帯の有力者層を形成していた蓋然性が高いであろう。しかし、その事実を考古学の資料を通して具体的に跡付け論証していく作業は現時点ではかなり困難であると言わざるを得ない。ただ、郷域内のいわゆる「拠点的集落」のあり方を探りつつ、その背後に存在が予想される当時の大海郷内の有力者層の一側面に触れることは、今の我々が採り得る数少ない方法のうちの一つであると考えて差し支えなかろう。

ところで、本報告書で扱う冬野・免田一本松両遺跡であるが、特に後者は前期古墳を含む冬野小塚古墳群に隣接するばかりか、中期の大海川流域の盟主墳である冬野大塚古墳とも占地する台地を同じくし、また、前者もそれから小さな谷を隔てただけの指呼の間にある台地上に所在している。このような両集落跡の、大海川流域を基盤としたと思われる勢力の首長層の墳墓群との近接した地理的関係は、その勢力の存在を無視しては両集落跡の少くとも古墳時代史を語ることができない程に重要な要素ではなかろうか。

ともに大海川水系に属する両集落跡ではあるが、次に内陸舟運との関連を主眼にして周辺の微地形を眺めていくことにしたい。両集落跡の西側前方には海浜砂丘を断ち割るように形作られた大海川河口が控えている。そこから続く低湿地は、やがて大海川下流の大海潟埋積に由来する低湿地と、支流の前田川・大坪川下流の砂丘後背の低湿地との二者に分岐するが、その分岐点に突き出すようにして伸びているのが、冬野及び免田一本松の2つの台地である。このような低湿地は、内陸舟運にとっても航行すべき水路を提供したはずであり、それぞれに水路の体系を有していた2つの低湿地が結節する場所は、大海川水系中の最大の要衝であり、そこを扼する台地上の集落が同水系の舟運を管理・掌握する位置にあったことは想像に難くない。そして、そのような水運を管掌する権限が、冬野大塚古墳の被葬者に代表される古墳時代の首長から古代の大海郷の有力者層へと伝統的に継承されたものであるとするならば、冬野・免田一本松両集落跡は通時代的に小地域の政治的中枢と密接な関連を有して存在していたことになり、その意味では大海川水系周辺における「拠点的」な集落という理解は許されるものと思われる。

さらに小地域のなかでの両集落跡の歴史的位置付けを考えるうえで看過できないのは、竪穴住居跡から掘立柱建物跡への変換期の問題である。歴史的環境の項でも触れたとおり、従来、押水町域では、北川尻ほしば山遺跡等の事例から、その転換の画期は8世紀後半から9世紀代とされてきた。押水バイパスに関連した一連の発掘調査のなかでも、宿東山遺跡から8世紀初頭頃のカマドを有する小規模な竪穴住居跡2棟が検出されている。しかしながら、遺構は無論のこと、包含層の建物においてすら殆んど古代の資料を見い出すことができない免田一本松遺跡において、12棟にのぼる掘立柱建物跡が調査の結果確認されるところとなり、そのすべてがとはいえぬまでもそのうちの多くが飛鳥時代以前に遡る可能性が高くなってきた。同遺跡では飛鳥時代（7世紀）にも竪穴住居跡が用いられており、一定の期間それと併存する形で構築されていたものと思われる。また、一方の冬野遺跡においても7世紀代末葉から8世紀にかけての土器が出土しているにもかかわらず、該期の竪穴住居跡は検出さ

れず調査区内の状況からは掘立柱建物跡という建築形態が一般化している印象を受けた。両遺跡とも地山上層まで耕作が及び、その耕土を重機で除去していること、調査区が遺跡全体の一部に限られていることなどから集落跡における建築（住居）形態の変換期を論ずる段階には至ってはいないが、周辺の集落遺跡よりも掘立柱建物跡の採用の面でより先進的であった公算が高いのもまた事実であり、その点は地域における両集落跡の性格を考える際の重要なポイントである。

古墳時代、或いは遅くとも７世紀のある段階までに掘立柱建物跡が集落内で一定の位置を占めるようになったとしても、周辺の８世紀代まで依然として竪穴住居跡が主体をなす集落との比較から、そこに階層性、つまりそれら掘立柱建物跡を専ら特定の階層との係わりのみで理解してゆく方向は、現段階では早計かつ短絡的であるとの批判を免れないかもしれない。しかし、前記の諸条件を踏まえ、当該の両集落跡が大海川水系のなかで有する「拠点的」な地位を改めて認識しそれを積極的に評価していくことは、小地域史復原のための作業仮説を展開するうえで必要とされよう。

ニ．今後の課題

大海郷の“おおみ”とは“淡海”つまり淡水の海である湖潟を意味するものと思われる。かつての大海川下流の低湿地には、ある程度の湛水面が広がっていたものと推定され、扇状地性であり遡行するに従って漸次高度を増していく前田川・大坪川とは異なり、免田一本松遺跡西南の縄文時代の大海潟（あるいは入江）が埋積した低地や冬野遺跡との間の谷は水路としても緩やかであり、淀みに富んだものであったはずである。したがって両遺跡は水路を通じて日本海と直結した存在であったことになるが、この周辺のイメージを具体化するためには、海進や海退、海浜砂丘の消長をはじめとする自然史的背景の理解やボーリングによる地質学的データの解析に基く古環境復原の深化が今後とも続けられねばならぬであろう。

さて、ここで想起されるのは、近年、森浩一氏らによって提唱されてきている日本海沿岸の潟港論である。丹後半島での事例等が著名であるが、北陸地方でもこの視点からの検討を要する地域は多々ある。大海川下流域周辺もそうした地域の一つとして評価できよう。潟港論は潟周辺地域における大型古墳の構築に代表される政治権力の基盤として、潟周辺における水田耕作による農業生産力よりはむしろ潟港を利用した交易を重視する。こうした交易を管掌したであろうオホミ郷の首長層ではあるが、当時の人的物的資材の流れについて考古学的資料から論証することが難しい現段階にあっては、その交易の実態についても不明な点が余りにも多いと言わざるを得ない。

大海郷域で集中的に生産され、群域・国域を越えて広範囲に供給された物資としては、やや時代が下るが古代の須恵器をあげることができる。「高松・押水古窯跡群」のなかでも宝達山麓から大海川右岸にかけて立地し、７世紀から８世紀までの時期を操業の盛期とする「北群」においては、生産物の輸送の面で大海川が果たした役割は大きかったものと思われる。大海川水系の舟運に要衝を占地し、掘立柱建物跡を主体とする８世紀代の冬野の集落跡は、郡領層の勢力を背後に控えつつも大海川水系の水上交通を管掌していたと想定される郷内の有力者層との密接な連関が指摘できそうであり、かかるクラスが土器生産をはじめとする諸生産の経営・維持にいかなる形で係わりあっていたか、今後の研究の進展のなかでその成果が多いに注目される。

最後にこれまで冬野・免田一本松遺跡が大海川水系の「拠点的」位置を占めると繰り返し述べてきたわけであるが、その「拠点的」という言葉について若干申し添えておくことにしたい。これはあくまでも地域の政治的に有力な集団との関係を念頭に置いた用語であり、水運上重要な地点とはいえ、両集落自体が物資の集散地でそこで舟積みや荷下ろし等の経済的活動が行われた臨港集落、すなわち「津」であることまでは含んでいない。というより、現時点では発掘調査区が遺跡のごく一部であるため、そのような機能まで有していたかどうか判断できないというのが実情である。

いずれにせよ、大海川周辺の地域史を考えていくためには、日本海から内陸へ入り込んだ汽水・淡水の水路に沿った水辺で繰り広げられた諸活動のうちでも人間の流れも含めた「交易」という概念を重視していくことが大切であろう。日本海沿岸の潟港といっても、潟の水面の大きさをはじめ、潟周辺地域の低地の規模、その地理的

位置も様々であり、一概に論ずることはできないし、また、海で結ばれた潟周辺地域の複合体がより大きな地域を構成することも忘れてはならない。かつて潟港として利用されたであろう大海川下流域の「フゴ」ないし潟の周辺地域はせいぜい律令制下の1つの郷に対応するかしないかの比較的小規模なものに過ぎないが、これをやはり北陸の潟港を核とする地域群における小規模例のモデルとして評価し、その類型に含めつつ今後の論の展開がはかられねばならないだろう。

（後記）

本書で報告する冬野・免田一本松遺跡等が大海川水系のなかで占める歴史的位置については再三指摘したところであり、また同水系が能登のなかでも最も加賀に近い場所であることについても先に触れている。したがって、殊に古墳時代前期を中心とする時期におけるいわゆる外来系土器の問題についても充分に本書で論じなければならなかったであろう。しかし、筆者の不勉強及び力量不足もあって、本書では布留系土器や山陰系土器をはじめとするそれらをめぐる議論に対して殆んど応えることができなかった。ここにその点を反省するとともに今後の課題としたい。

参考文献

辞典

浅香年木他編　1981　『角川日本地名大辞典17　石川県』　角川書店

市町村史

押水町史編纂委員会編　1974　『押水町史』　石川県押水町役場

宇ノ気町史編纂委員会編　1970　『石川県宇ノ気町史』　宇ノ気町役場

発掘調査報告書

三浦純夫　1980　『上田出西山遺跡発掘調査報告書』　押水町教育委員会

高堀勝喜・西野秀和　1983　『上田うまばち遺跡』　押水町教育委員会

折戸靖幸　1987　『高松町中沼C遺跡』　高松町教育委員会

北野博司他　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

藤田邦雄他　1987　『宿向山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

三浦純夫・越坂一也　1988　『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

その他

浜岡賢太郎・吉岡康暢　1962　「加賀・能登の古式土師器」　『古代学研究』第32号　古代学研究会

橋本澄夫　1966　「石川県押水町森本大塚古墳の予備的調査」　『石川考古学研究会々誌』第10号　石川考古学研究会

村井一郎　1966　「羽咋郡押水町北川尻オサノ山遺跡」　『石川考古学研究会々誌』第10号　石川考古学研究会

谷幸信・西野秀和　1976　「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」　『石川考古学研究会々誌』第19号　石川考古学研究会

加藤三千雄　1987　「高松町・押水町入会東間坂手山遺跡出土土器の資料再紹介」　『石川考古学研究会々誌』第30号　石川考古学研究会

津田耕吉　1991　「石川県河北郡高松町野寺A遺跡採集の縄文式土器について」　『石川考古学研究会々誌』第34号　石川考古学研究会

折戸靖幸　1988　「高松町西山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター所報『拓影』第25号

垣内光次郎　1990　「押水町紺屋町ダイラクボウ遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター所報『拓影』第31号

安　英樹　1991　「押水町正友ヤチヤマ窯跡」　石川県立埋蔵文化財センター所報『拓影』第34号

第3章　冬野遺跡

第1節　層序と遺構の配置

1　地形とグリッドの設定

冬野遺跡は、現在の冬野集落の西方の台地上に立地し、標高は13～17mを測る。北を前田川旧河道（近世期）、南を免田一本松遺跡との間の谷によって画される遺跡調査区は、南端部を最高所に最も低い北端部まで緩やかな傾斜面をなしている。その間は直線距離にして150m弱、比高は約4mであり、平均斜度も2度未満に過ぎない。

さて、今回の発掘調査では、遺跡内を通過するバイパス路線の方向に沿った南北ライン（H～Jライン）を設定し、次にそれと直交する東西ライン（38～51ライン）を求めた。南北及び東西ラインともその間隔は12mであるので、結果として調査区をカヴァする12×12mのメッシュができあがるが、その1つをもって1グリッドとすることにした。なお、グリッドの名称は、例えばH50区というように、それの西及び北を画するラインに基いて決められている。免田一本松遺跡でも本遺跡同様に12×12mのグリッドが設定されているが、これもやはり任意のものであり、両者は相互に関連性はない。

2　層序

冬野遺跡では洪積世に属する黄褐色土層の上面をもって遺構検出面としたが、地表からそこに至る間の土層の堆積状況は概して単純であるため、土層柱状図を省略して文章による説明に留めることにする。調査区西壁の土層についてみれば、40ライン以南すなわち調査区の大半では30～40cmの耕土の直下が地山（黄褐色土層）である。開田する際に削られずに盛土された箇所では、ところどころに厚さ15～20cmの遺物包含層（暗茶褐色土）が耕土下半に相当する部分に残存していた。40ライン付近から前田川旧河道へ向けて傾斜する調査区北端部では、耕土と地山の間に10～30cmの流土性の黒褐色土が北へ向かって厚く堆積しており、前田川旧河道内では耕土下に淡青灰色の砂質土層が認められた。耕土直下が地山である状況は、近代以降の開田のために包含層を越えて地山上部まで耕土化が進行した結果と考えられる。調査に際しては重機を用いて耕土を除去しているが、このことは掘立柱建物跡等の年代決定を難しくしている一因であることは否めない。

3　遺構の配置

調査区を北・中央・南部に分けて概述し、詳細については後の各項に譲る。

a．竪穴住居跡　　中央部の43～44ライン間に4棟が集中する。弥生時代後期から古墳時代前期に属する。

b．掘立柱建物跡　　北部から中央部にかけて10棟が検出されている。年代的には弥生時代後期頃から平安時代までのものを含む。建物の主軸方向からいくつかのグループに分けられる。

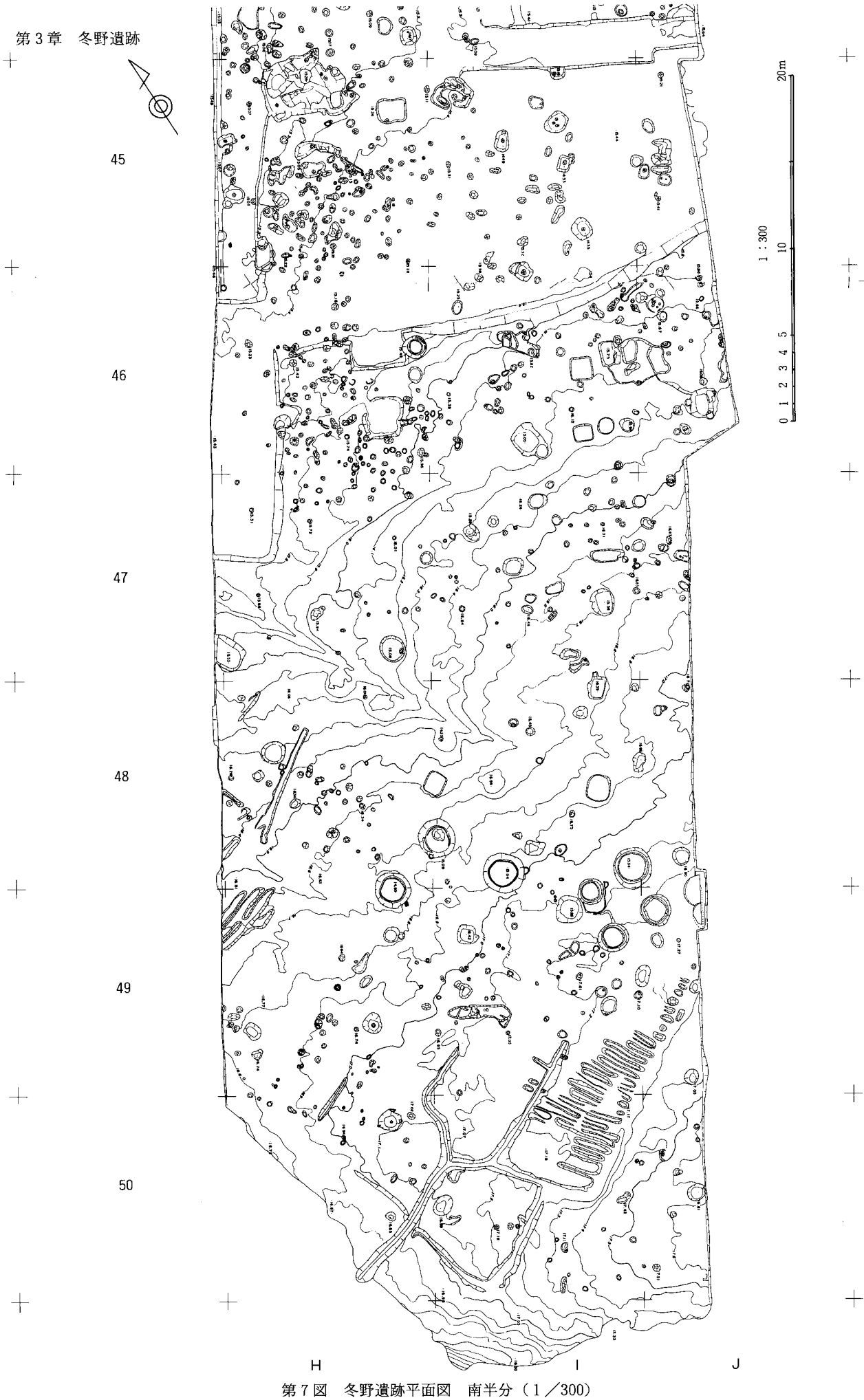
c．大型土坑　　弥生時代後期終末頃の貯蔵穴と考えられる。27基が確認され、南群（13基）と北群（14基）に大別される。

d．おとし穴　　形態等から狩猟用のおとし穴と想定される土坑。伴出遺物を欠くため年代を特定することが難しいが、県下の調査事例から縄文時代に属する可能性が高いといえよう。北～南部を通じ25基が検出された。

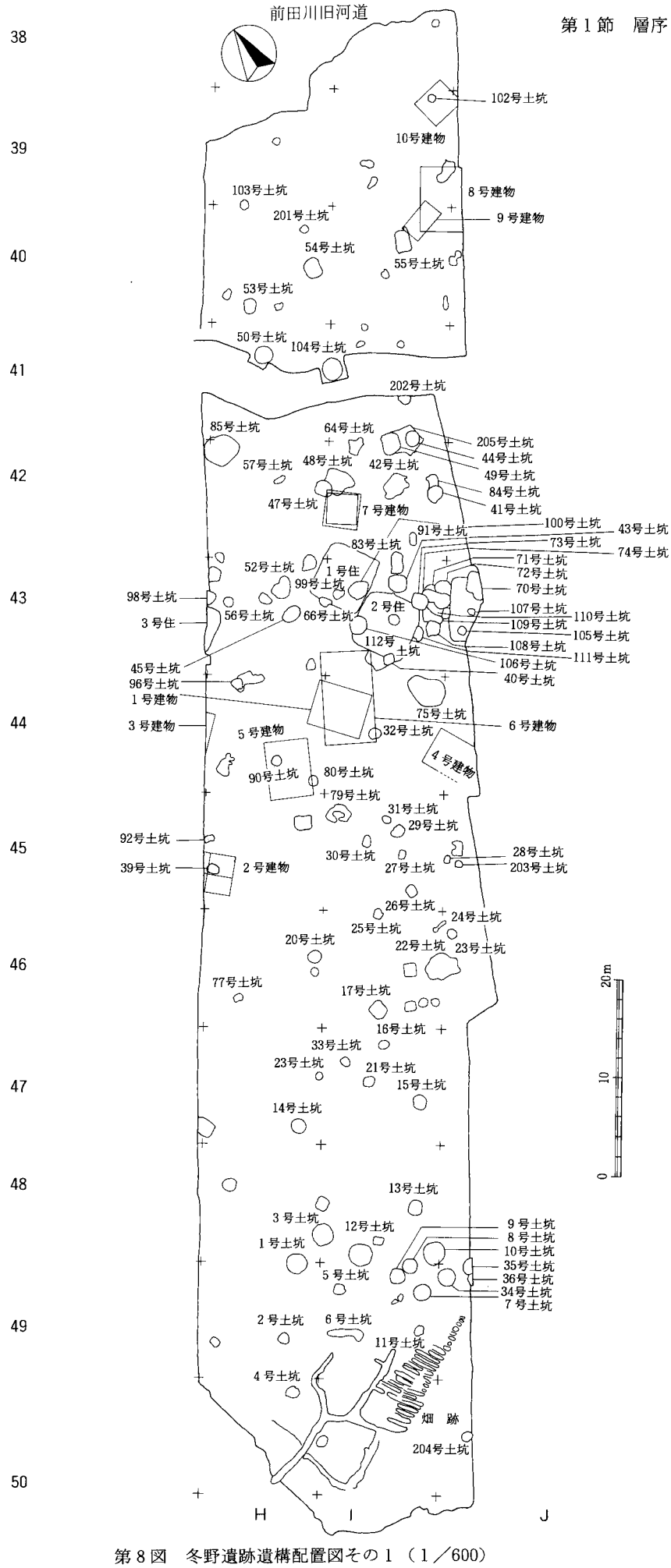
e．古代の土坑　　中央部を中心に少なくとも5基は存在する。主として7世紀末葉から8世紀代の土器が出土している。

f．近世以降の遺構　　北部では前田川旧河道の砂層中から陶磁類が出土している他、南部でも畑の畝溝の跡や肥溜め（水溜め）の跡が検出された。後者は「冬野村」西端部で営まれた畑作に係わるものであろう。

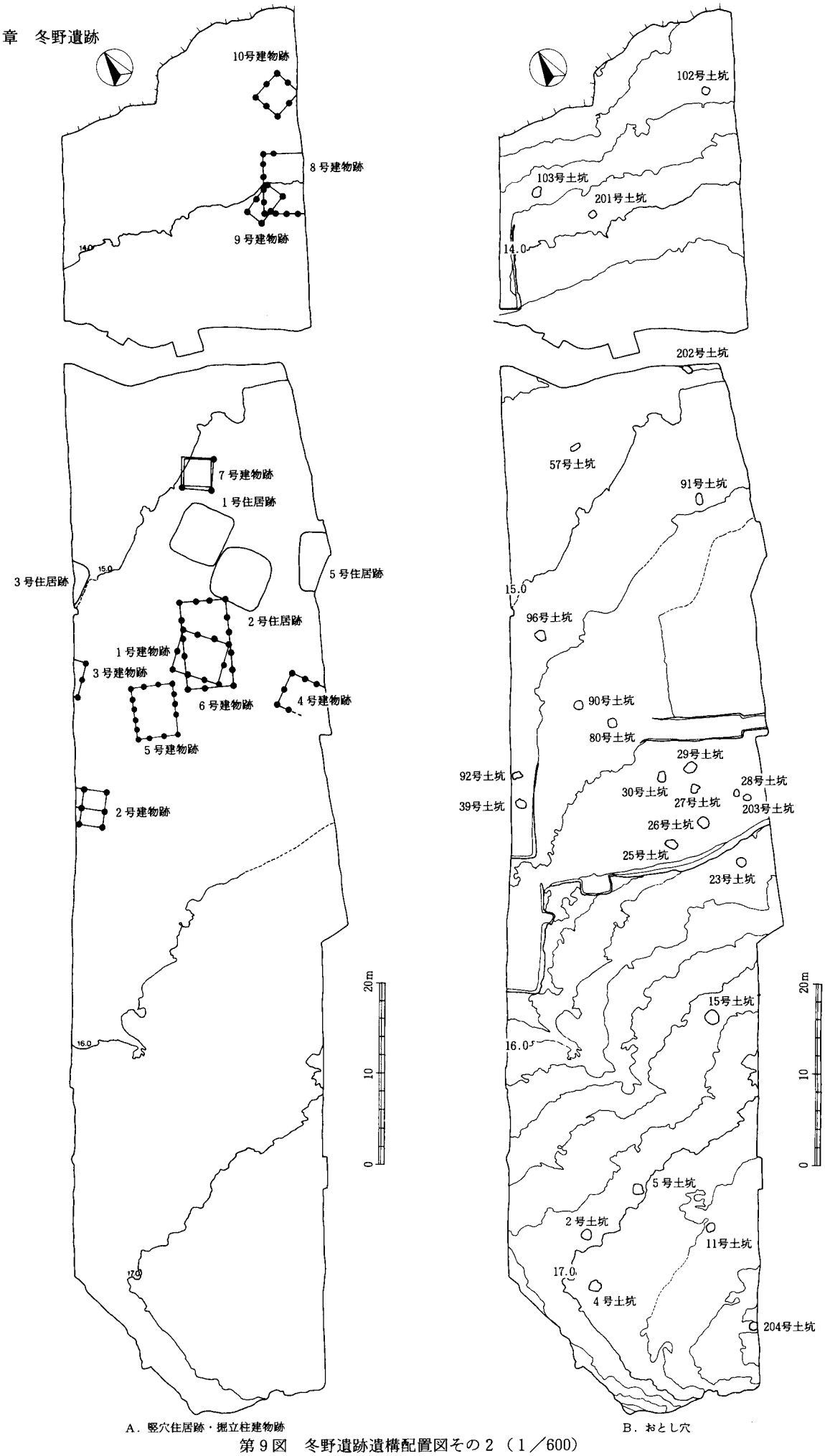
第６図　冬野遺跡平面図　北半分（１／300）



第７図　冬野遺跡平面図　南半分（１／300）



第８図　冬野遺跡遺構配置図その１（１／600）



A．竪穴住居跡・掘立柱建物跡　　B．おとし穴

第９図　冬野遺跡遺構配置図その２（１／600）

第２節　縄文時代の遺構

今回の冬野遺跡の調査では、該期の遺物はほとんど検出されなかった。しかし、遺構については狩猟用のおとし穴といわれている土坑が確認されており、後述するごとく石川県下の既往の調査事例から縄文時代に属する可能性が高いと思われるので、本節で一括して論ずることにしたい。なお調査区内におけるおとし穴の分布については、第１節の第９図に配置図を掲げてある。

(1)　おとし穴

冬野遺跡で検出された多数の深い土坑は、形態、覆土の種類、出土遺物などによって、弥生時代の大型土坑と縄文時代のおとし穴との二者に大別することができる。25基を数えるおとし穴の形状は多岐にわたるが、ここではまず底部の平面形による分類を試みた。

Ａ類　　細長い長方形を呈するもの

Ｂ類　　細長い楕円形を呈するもの

Ｃ類　　長方形を呈するもの

Ｄ類　　正方形に近いもの

Ｅ類　　円形或いはかなり寸づまりな楕円形に近いもの

さらに底部のピットの数によっても分けてみた。

０、　底部にピットを伴わないもの

１、　底部にピット１基のみを伴うもの

２、　底部に複数のピットを伴うもの

これらに加え底部のピットの大きさからも細別できる。

ａ、　長径が20cmを越えるものがみられる

ｂ、　径が20cm未満の小さなピットを標準とする

以下においては、Ａ～Ｅ類の基本分類に底部ピットによる細分を適宜加味しながら記述を進めていくことにしたい。また、底部平面形による基本分類に際しては、その細長さを示す基準として底部長短比を用いてみた。これは比較的形が整っている土坑底面について、その長径の計測値を短径のそれで除したものであり、数値が大きい程より細長い形状を呈することになる。ただし、土坑の長さ（長径）や幅（短径）について記す場合は、遺構検出面での計測値を表示してある。

Ａ類（第10図）

57号土坑と91号土坑の２基がみられ、ともにＡ１ａ類に属する。底部長短比は前者が2.75、後者が3.23と他類に比して著しく細長い。短辺がオーバーハングぎみなる特色がみられ、91号土坑においては縦断面がややフラスコ状を呈している。

Ｂ類（第10図）

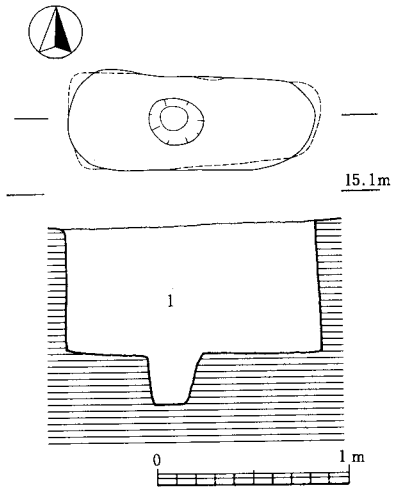
28号土坑と39号土坑の２基を数え、いずれもＢ１ａ類に含まれる。底部長短比は前者が1.90、後者が1.63になる。なお、39号土坑の覆土最上面に貼り付くようにして須恵器杯蓋（577）が出土しているが、これは重複する２号掘立柱建物跡に係るものと考えられ、遅くとも古代までにはこの土坑が埋まり切っていたことが知られよう。

Ｃ類（第11図）

15・26・27・30・92・202号土坑の６基がこれに含まれ、すべてＣ１ａ類。底部長短比については、92号土坑が2.39とＡ類に準ずる細長さを有する以外は、いずれも1.38～1.50の範囲におさまる。30号土坑では、北側の検出面より深さ８cmの箇所に小さなテラスがみられる。

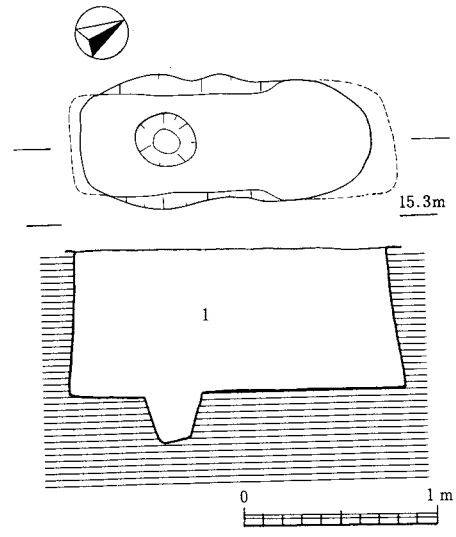
Ｄ類（第12図）

４基のうちＤ０類（５・201号土坑）とＤ１ａ類（25・102号土坑）がそれぞれ２基ずつを占める。底部長短比は201号土坑の1.25を最大に、102号土坑の1.07を最小とする。25号土坑では北西側深さ約50cmの位置にテラスを



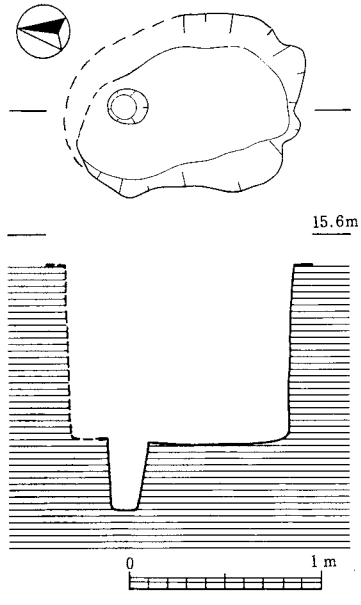
1．暗茶褐色粘質土（ほぼ単層でわずかに地山ブロックを含む・わずかに炭化物を含み、下へ行くにしたがって全体的により暗い色調を呈する・底は砂礫層である）

57号土坑実測図（１／40）

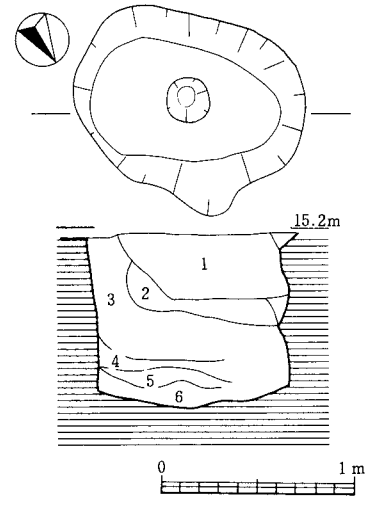


1．黒褐色土（地山ブロックをわずかに含む）

91号土坑実測図（１／40）



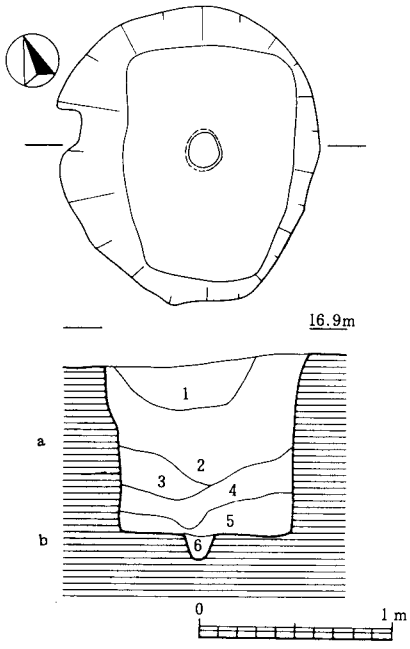
28号土坑実測図（１／40）



1．黒褐色粘質土（ほとんど混りけがない）
2．茶褐色土（ほとんど混りけがなく、粘性が弱い）
3．暗茶褐色粘質土（地山をブロック状に含む）
4．黒褐色土
5．地山ブロックを多量に

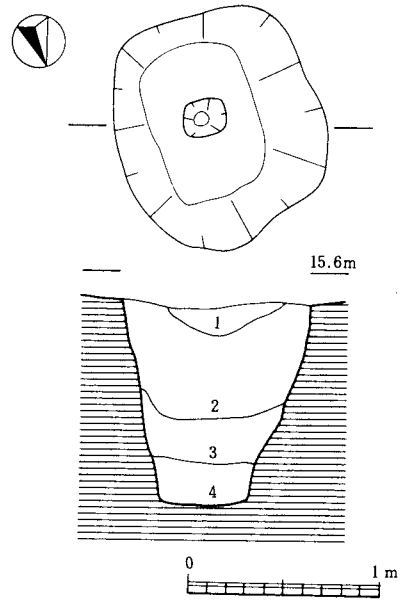
39号土坑実測図（１／40）

第10図　冬野遺跡おとし穴実測図１（１／40）



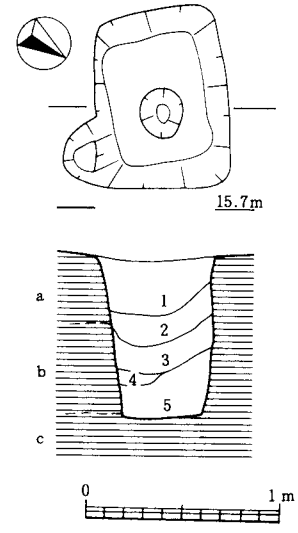
1．黒褐色土（しまりない・乾燥すればぼこぼこ・１・２層砂性）
2．茶褐色土（しまりない・乾燥すればぼこぼこ・１・２層砂性）
3．黄褐色土（粘性の地山土ブロック壁の崩落土）
4．暗茶褐色土（細かい砂質）
5．暗褐色土（細かい砂質）
6．暗褐色土（黄灰砂混じり）
a．明黄褐粘
b．黄灰砂

15号土坑実測図（１／40）



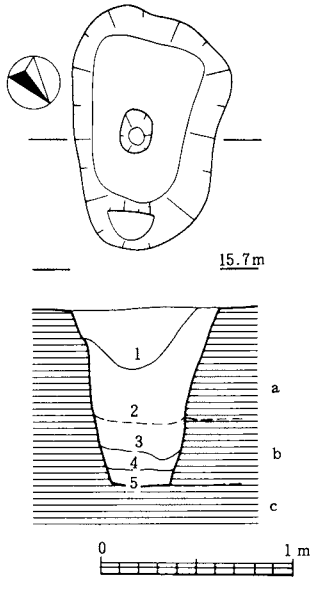
1．淡茶褐色土（軟）
2．暗褐色土（地山土混りぼこぼこ）
3．茶褐色土（地山土さほど含まない）
4．暗茶褐色土（地山土さほど含まない）

26号土坑実測図（１／40）



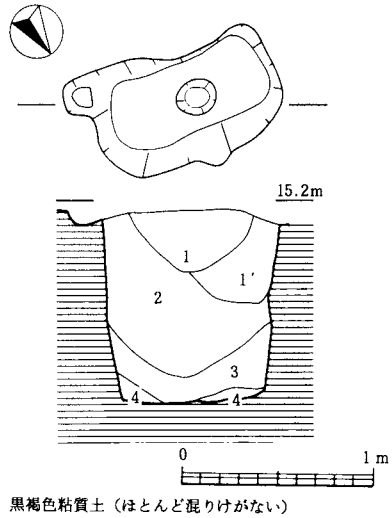
1．暗茶褐色土（ぼこぼこ、砂性）
2．濁暗茶褐色土（１層に黄褐粘の地山ブロック多く混じる）
3．黒（灰）褐色土
4．黄褐色粘の地山ブロック
5．暗褐色土
a．黄褐粘
b．黄灰砂
c．礫　層

27号土坑実測図（１／40）



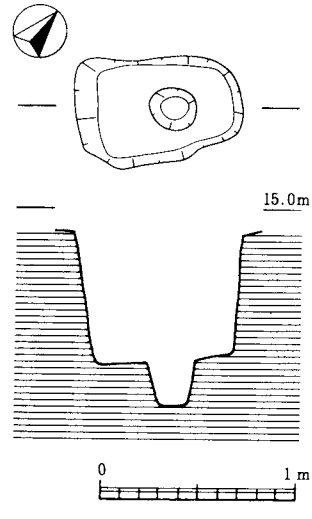
1．暗茶褐色土
2．１層＋細かな黄褐色粘の地山ブロック
3．黒褐色土
4．黄褐色粘質土（地山質土）
5．暗褐色土
a．黄褐粘
b．黄灰砂
c．礫　層

30号土坑実測図（１／40）



1．黒褐色粘質土（ほとんど混りけがない）
1′．黒褐色粘質土（１と同様であるが少し地山ブロック及び鉄分のつぶを含む）
2．暗茶褐色粘質土（１をベースにする様だが地山粒を多く含むため明るい色調を呈する）
3．黒褐色土
4．地山質粘質土（暗褐色）

92号土坑実測図（１／40）



202号土坑実測図（１／40）

第11図　冬野遺跡おとし穴実測図２（１／40）

伴っている。また、調査区北端に近いＩ39区に位置する102号土坑が深さ50cmとおとし穴群中最も浅いのはこの付近を中心に堆積していた流土を除去したことと関係があろう。

Ｅ類（第12～14図）

11基が認められるが、これはおとし穴全体の４割強を占めることになる。内訳はＥ０類が２基（11・204号土坑）、Ｅ１ａ類が１基（２号土坑）、Ｅ１ｂ類が２基（４・80号土坑）、Ｅ２ａ類が２基（29・96号土坑）、Ｅ２ｂ類が４基（23・90・103・203号土坑）である。このうち、４号土坑の覆土上層には第２層を中心に礫が含まれており、その出土状況からは埋積途中の窪みに投棄された状況が想起される。覆土中でまとまった礫が検出されたのは、本遺跡のおとし穴群中では唯一の例である。また、この土坑の底部ピットは土坑底面から深さ55cmを測るが、深く掘り過ぎている可能性が高く実際にはもう少し浅かったと判断される。Ｅ類では特にＥ２ｂ類を中心にみられる径・深さともに10cm以下の小さな底部ピットの存在が大きな特色といえる。Ｅ類の底部長短比については、1.22（203号土坑）から1.00（90土坑）の範囲である。

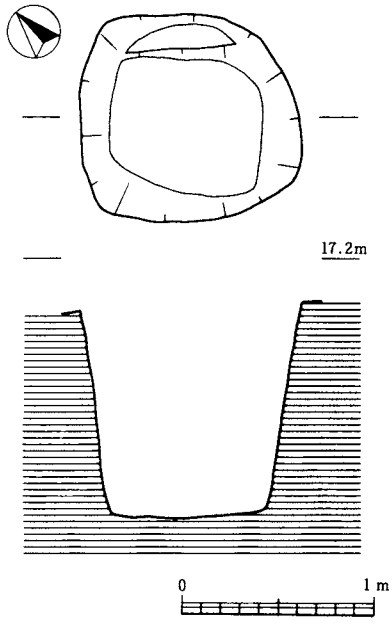
以上のようにＡ～Ｃ類の細長い底部平面形を有するグループについては、径20cmを越す比較的大きな底部ピット１つを伴うものが通例であるが、Ｄ類ではこれに底面にピットをもたないものが加わり、さらにＥ類では小さく浅いピット複数を底部に伴うようになる。冬野遺跡のおとし穴群はＡ１ａ類とＥ２ｂ類をそれぞれ両極とするあり方を示すといえよう。ただ、ここで注意せねばならないことは、Ａ・Ｂ類及びＣ類の15・92号土坑の覆土上層で黒褐色土系の土層が目立つ点である。この土層はＤ・Ｅ類では認められず、このことが何に起因するかについて、土坑が掘られ利用された時期の違いも含めて今後の検討が必要とされよう。

最後に本節で扱った土坑群の年代及び性格について若干触れておくことにしたい。

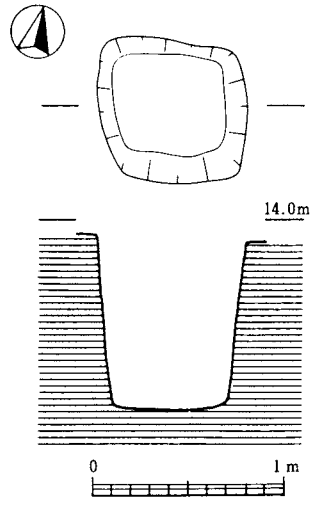
まず、年代については、前述のとおり冬野遺跡でおとし穴としたものは、70～80cm以上の深さを有する土坑から、出土遺物・覆土・形態等の検討を通して弥生時代終末頃に属すると考えられるものを消去することによって設定されているに過ぎず、遺物を欠く本土坑群の年代を探る手がかりは冬野遺跡には殆んど残されていないといえう。しかしながら、同種類の土坑が検出された能登南部から加賀北部の諸遺跡、例えば羽咋市柳田シャコデ[(1)]、押水町宿東山[(2)]、津幡町谷内石山[(3)]、同竹橋油木谷[(4)]などの各遺跡では、土坑覆土中から出土する遺物が縄文土器や同時代の石器に限られており、このことは、土坑が縄文時代の埋まってしまっていたことに由来すると考えられる。そのために弥生時代以降の遺物が覆土中で検出されないのではなかろうかと推定される。ゆえに本遺跡の当該土坑群についても縄文時代に営まれたとして現時点では大過ないものと判断されるだろう。冬野遺跡の場合、調査区周辺が縄文時代には土器・石器を伴う居住の場としてではなく専ら「わな」を用いた狩猟の場として利用されたことが、該期の遺物の出土をきわめて乏しくしている一因と判断される。

次にこれらの土坑の機能や性格については、横浜市霧ケ丘遺跡の発掘調査・調査に携った今村啓爾によって狩猟用のおとし穴とする見解が1970年代前半以来提示され[(5)]、この視点が研究の流れのなかで趨勢を占めてきている。しかし、民族誌例を主たる論拠とする今村に対して否定的な立場の研究者もみられ、また県内では三浦純夫が定義も不明確なままに縄文時代とされる深い土坑を安易に狩猟用のおとし穴と結び付けるのではなく、その性格の把握には基礎的検討を踏まえたより慎重な姿勢が必要なことを説いている[(6)]。小稿では今村の見解に従って「おとし穴」とする立場を採ったが、筆者自身そのカテゴリーについての定見を持ちあわせているわけでなく、この点については今後の検討課題としたい。

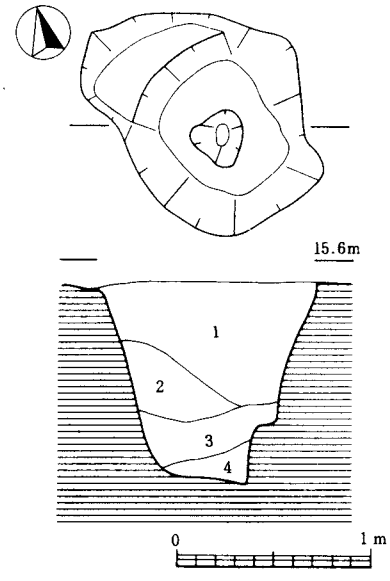
冬野遺跡では弥生時代の深い土坑、すなわち大型土坑が貯蔵穴で、縄文時代のそれは何故違うのか――そういう素朴な疑問が残るかもしれない。縄文時代の貯蔵穴については調査区北方を流れる前田川上流約1.5kmの押水町紺屋町ダイラクボウ遺跡[(9)]で21基、金沢市米泉遺跡[(8)]の河道跡の「トチ塚」に隣接して７基が確認されている。いずれもドングリ・トチなどの遺存がみられ、晩期を中心とした時期の所産と考えられている。このように県内において明確に縄文時代の貯蔵穴とされる例は、地下の湧水や河川の流水の存在を前提として堅果類の比較的短期の保存（保管）に用いられたと推定されるものにいまだ限られており、それらと台地上に営まれた冬野遺跡の縄文時代の土坑を同列に扱うことはできないであろう。たとえ、長い縄文時代おける時期差、保存する対象やそ



5 号土坑実測図（１／40）

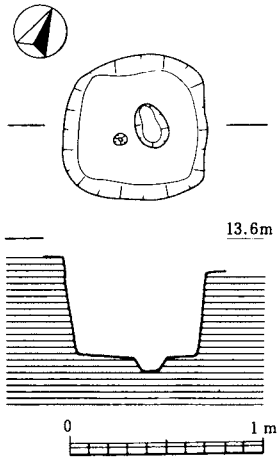


201号土坑実測図（１／40）

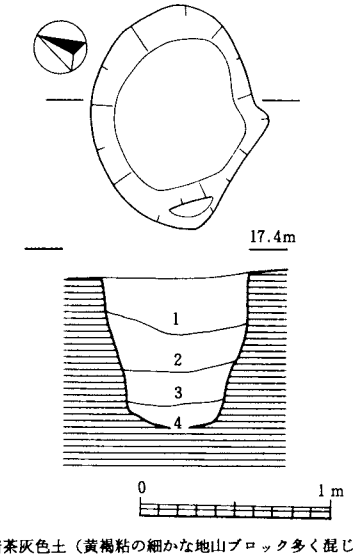


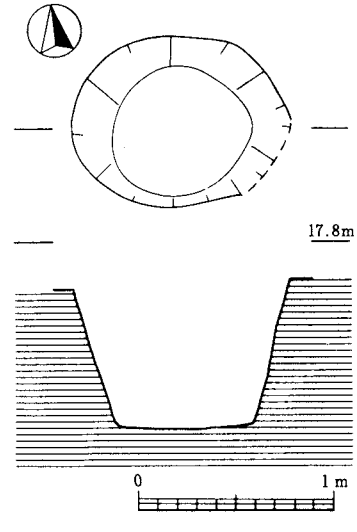
1．茶褐色土（上層炭多し、地山ブロック多く含む）
2．暗褐色土（炭・地山ブロック若干含む）
3．濁黄茶褐色土（地山土主体、埋め土か？）
4．暗黄褐色土（地山土含まない）

25号土坑実測図（１／40）



102号土坑実測図（１／40）



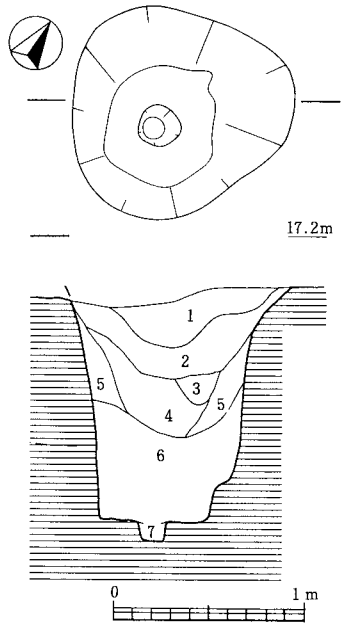


204号土坑実測図（１／40）

1．濁暗茶灰色土（黄褐粘の細かな地山ブロック多く混じる）
2．暗灰色粘質土＋黄褐色粘質土の地山ブロック（暗灰主体）（1層より大きなブロック）
3．暗灰色粘質土＋黄褐色粘質土の地山ブロック（地山ブロック主体）
4．暗灰色粘質土＋黄褐色粘質土の地山ブロック（暗灰主体）

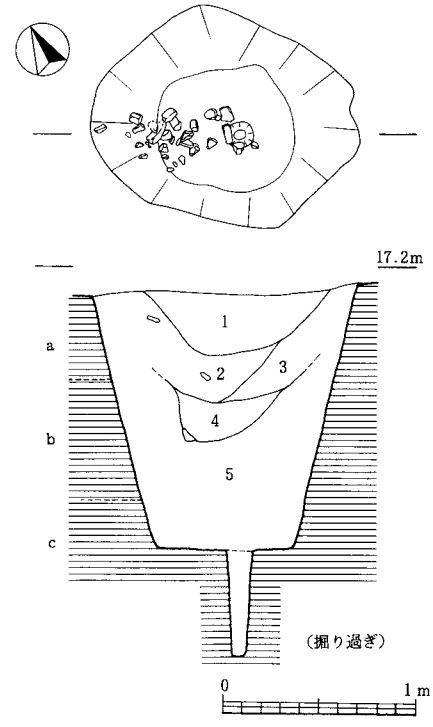
第11号土坑実測図（１／40）

第12図　冬野遺跡おとし穴実測図３（１／40）



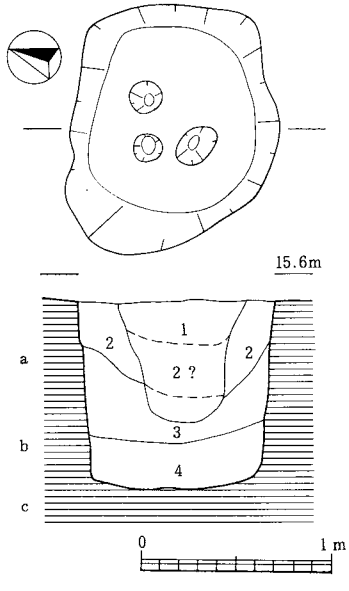
１．暗茶褐色土（黒っぽい）
２．茶褐色土
３．明黄褐色土（地山ブロック）
４．明茶褐色土（２層より明るく、細かい地山ブロック）
５．濁茶褐色土（混黄褐色土の地山ブロック）
６．暗黄褐色土（炭若干含む、粘性で均質、地山ブロックはほとんど含まない。硬くしまっており、埋め土とみられる）
７．暗黄褐色土（地山質含む）

２号土坑実測図（１／40）



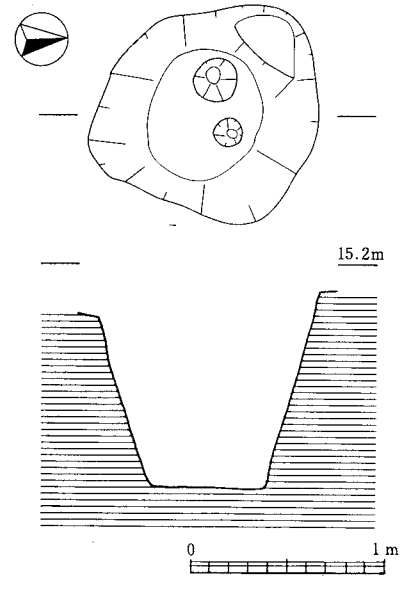
１．淡褐色土
２．暗茶褐色土（炭・石を多量に含む層）
３．褐色土
４．淡茶褐色土（炭・石若干含む）
５．黄茶褐色土（黄褐色粘の地山土主体）
ａ．黄褐粘
ｂ．漸移的
ｃ．明黄灰砂

４号土坑実測図（１／40）



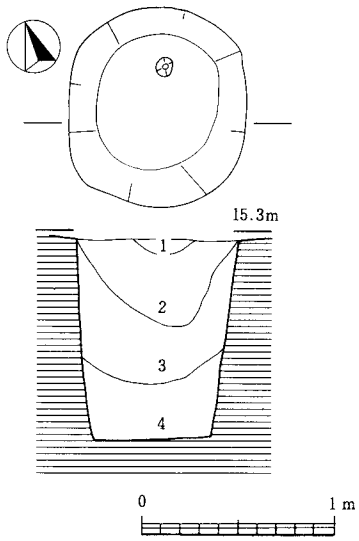
１．暗茶褐色土（黄褐粘の地山ブロックが混じる、かたい）
２．暗褐色土（地山土若干混じる）
３．茶褐色土（地山土若干混じる）
４．暗茶褐色土（１層より濃く、地山土含まない）
ａ．淡黄褐粘
ｂ．黄白色粘
ｃ．黄白色礫層

29号土坑実測図（１／40）



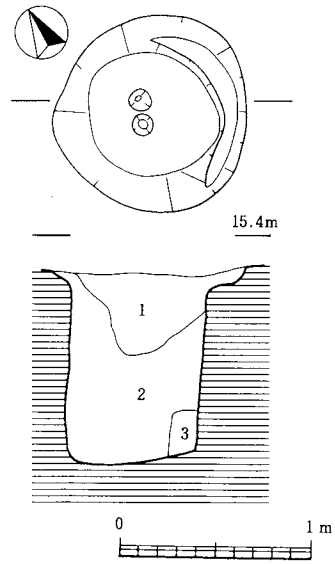
96号土坑実測図（１／40）

第13図　冬野遺跡おとし穴実測図４（１／40）



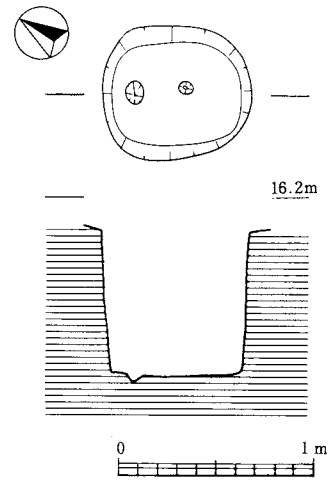
1．赤褐色粘質土（有機物を多く含み、暗い色調を呈する）
2．赤褐色粘質土（炭化物を多く含み、かたくしまる）
3．茶褐色粘質土（地山質を粒状に多く含む）
4．暗茶褐色粘質土（混り気がなく極めて柔かい）

80号土坑実測図（１／40）

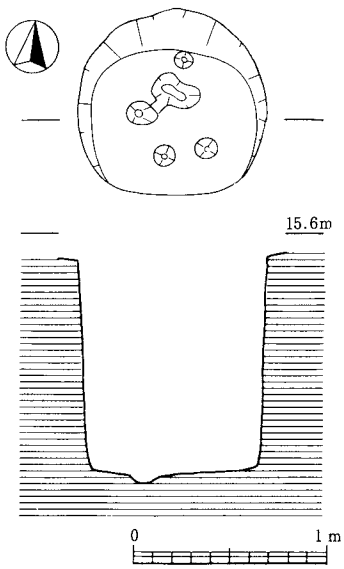


1．赤褐色粘質土（80号土坑と同じ）
2．赤褐色粘質土（80号土坑と同じ）
3．地山ブロック

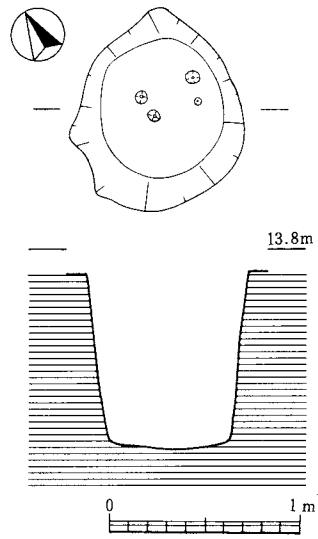
90号土坑実測図（１／40）



203号土坑実測図（１／40）



23号土坑実測図（１／40）



103号土坑実測図（１／40）

第14図　冬野遺跡おとし穴実測図５（１／40）

の保存期間の違いを想定してみても、県下でおとし穴状遺構ないしはおとし穴とされる土坑に貯蔵穴的な性格を付与する論拠は現段階では見当らないといえそうである。

註

(1) 河村好光　1983　『羽咋市柳田シャコデ遺跡』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　石川県立埋蔵文化財センター

(2) 北野博司・山本直人他　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(3) 西野秀和　1980　『津幡町谷内石山遺跡』　津幡町教育委員会

(4) 竹田学　1985　『竹橋油木谷遺跡』　津幡町教育委員会

(5) 今村啓爾編　1973　『霧ケ丘』　霧ケ丘遺跡調査団

今村啓爾　1983　「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2生業　雄山閣出版　他

(6) 三浦純夫　1988　「大型土坑の機能について－能登半島の弥生時代を中心として－」『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(7) 垣内光次郎　1990　「押水町紺屋町ダイラクボウ遺跡」　『拓影』第31号　石川県立埋蔵文化財センター

その他、垣内氏からの御教示による

(8) 西野秀和　1989　『金沢市米泉遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

その他、西野氏からの御教示による

第２表　おとし穴一覧表

〔単位はcm〕

遺構名	分　類	所在区	長　さ（検出面）	幅（検出面）	深　さ	底　部 長短比	底　部 ピット 数	底部ピット 径	底部ピット 深　さ	挿図番号
57号土坑	Ａ１ａ	Ｈ42区	130	52	70	2.75	1	25～30	26	第10図
91号土坑	Ａ１ａ	Ｉ42区	152	72	77	3.23	1	30	25	〃
28号土坑	Ｂ１ａ	Ｊ45区	135?	90	96	1.90	1	20	28	〃
39号土坑	Ｂ１ａ	Ｈ45区	123	93	92	1.63	1	20	25	〃
15号土坑	Ｃ１ａ	Ｉ47区	158	136	98	1.41	1	20	12	第11図
26号土坑	Ｃ１ａ	Ｉ45区	126	109	105	1.43	1	20	15	〃
27号土坑	Ｃ１ａ	Ｉ45区	95	69	83	1.38	1	22～26	24	〃
30号土坑	Ｃ１ａ	Ｉ45区	130	82	95	1.50	1	17～23	23	〃
92号土坑	Ｃ１ａ	Ｈ45区	102	60	102	2.39	1	20	20	〃
202号土坑	Ｃ１ａ	Ｉ41区	88	58	70	1.46	1	25	22	〃
5号土坑	Ｄ０	Ｉ49区	115	108	112	1.14	0	－	－	第12図
201号土坑	Ｄ０	Ｈ40区	81	75	92	1.25	0	－	－	〃
25号土坑	Ｄ１ａ	Ｉ46区	131	105	104	1.14	1	30	10	〃
102号土坑	Ｄ１ａ	Ｉ39区	78	77	50	1.07	1	18～25	10	〃
11号土坑	Ｅ０	Ｉ49区	120	88	81	1.17	0	－	－	〃
204号土坑	Ｅ０	Ｊ50区	115	89	72	1.06	0	－	－	〃
2号土坑	Ｅ１ａ	Ｈ49区	117	113	125	1.14	1	22	27	第13図
4号土坑	Ｅ１ｂ	Ｈ50区	142	108	135	1.09	1	15	?	〃
29号土坑	Ｅ２ａ	Ｉ45区	128	110	100	1.14	3	㊤24㊦16	7～9	〃
96号土坑	Ｅ２ａ	Ｈ44区	118	111	107	1.20	2	㊤24㊦15	㊥27㊧18	〃
80号土坑	Ｅ１ｂ	Ｈ44区	105	93	107	1.09	1	10	6	第14図
90号土坑	Ｅ２ｂ	Ｈ44区	104	103	101	1.00	2	13	6	〃
203号土坑	Ｅ２ｂ	Ｊ45区	78	74	76	1.22	2	㊤12㊦8	5	〃
23号土坑	Ｅ２ｂ	Ｊ46区	102	98	115	1.13	5	㊤25㊦10	㊥10㊧5	〃
103号土坑	Ｅ２ｂ	Ｈ40区	109	94	93	1.13	4	㊤8㊦5	㊥10㊧4	〃

第３節　弥生・古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

本遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が４棟確認されている。その分布としては南北約150ｍに及ぶ調査区のうちでも43～44ライン間を中心とする南北わずか十数メートルの範囲に集中する傾向がみられる。付近の検出面の標高は、15.0～15.5ｍを測る。

調査時点では農道を挟んで南北両側で検出された住居跡を２号及び４号竪穴住居跡の２棟として把握していたが、稲刈後に農道部分についても発掘調査を実施した結果、両者は同一の住居跡のそれぞれ一部であることが判明した。そこで混乱を避けるため呼称の全面的な変更を行わず、４号を欠番とし、旧２号・旧４号を併せて改めて２号竪穴住居跡とすることにした。以下、１・２・３・５号の順に説明を加えたい。

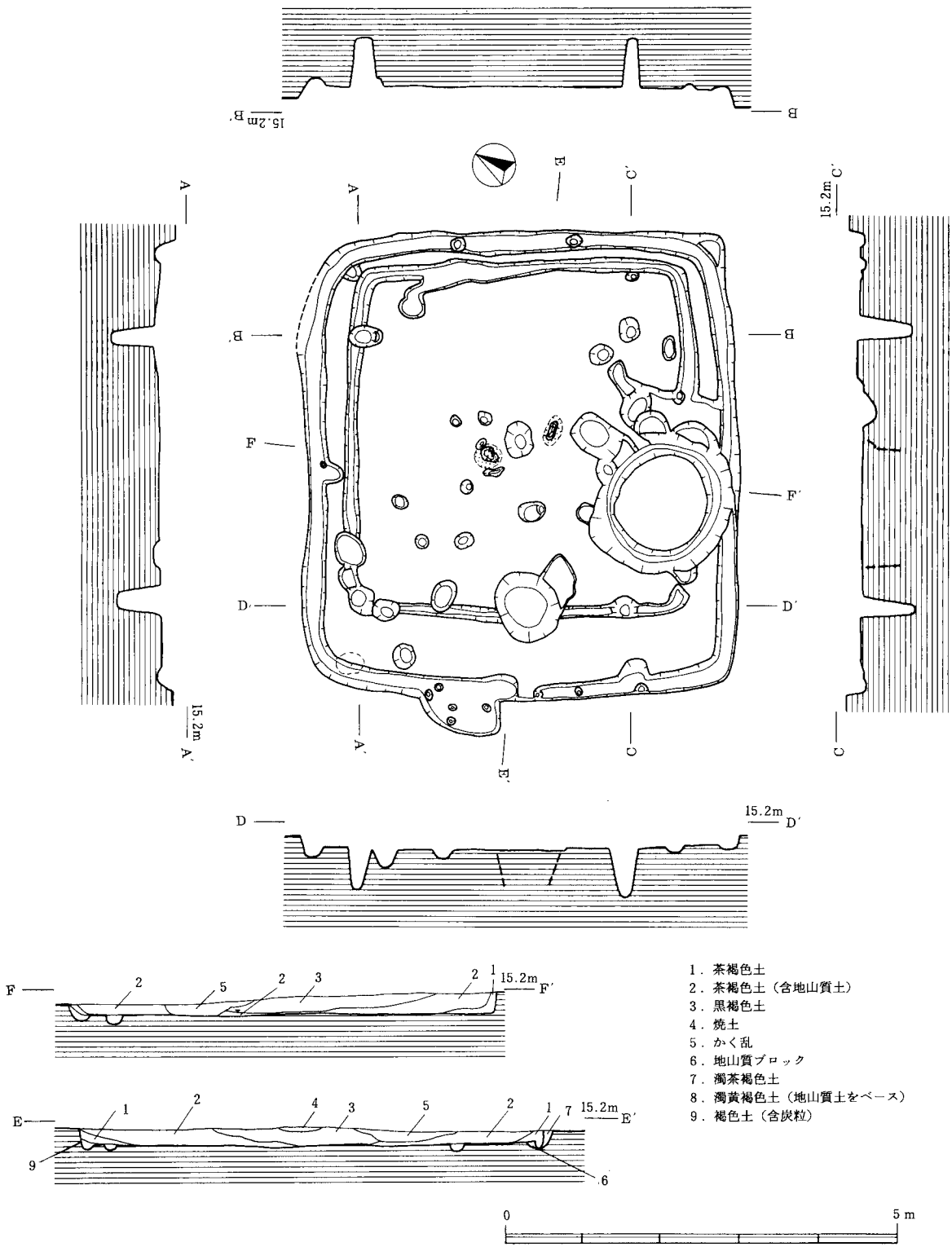
１号竪穴住居跡（第15～19図、図版12・13）

遺構　Ｉ43区北西に位置し、一部はＨ42・Ｉ42・Ｈ43区に及ぶ。約6.4ｍ×約5.6ｍの隅円方形をなし、検出面からの深さは20cm前後を測る。幅20cm程度、床面からの深さ10cm程度の壁周溝が廻るほか、その内側にもそれよりも幅が狭く浅い周溝が認められる。調査時点では住居の拡張による結果と判断していたが、内側の周溝に対応する主柱穴が存在しない点、確認されている４基の主柱穴のうち３基までが内側の周溝の線上に位置する点などから考えて、内側の周溝については、何らかの住居内の施設（例えば間仕切のようなもの）に伴う可能性が高いのではないかと思われる。４基の主柱穴については、住居床面における直径が約30cm、床面からの深さは50～70cmである。住居跡南辺の中央には大型土坑である100号土坑が存在し、その付近に壁際にみられる場合が多い住居内土坑が存在した可能性も想定されるが、同土坑の土層断面図（第51図）からはそれを具体的に窺うことはできなかった。また、床面の中央付近では２箇所の焼土（スクリントーンで表示）が残存していた。いずれも厚さ２～３cmで、床面に設けられ浅い窪みの表面を覆うようにして深さ５cm程度の皿状を呈している。加えて北西コーナー付近では白色粘土の塊（破線で表示）も検出されており、約40cm×約30cmの楕円形の範囲に床面から最高10cmの盛り上がりが観察される。

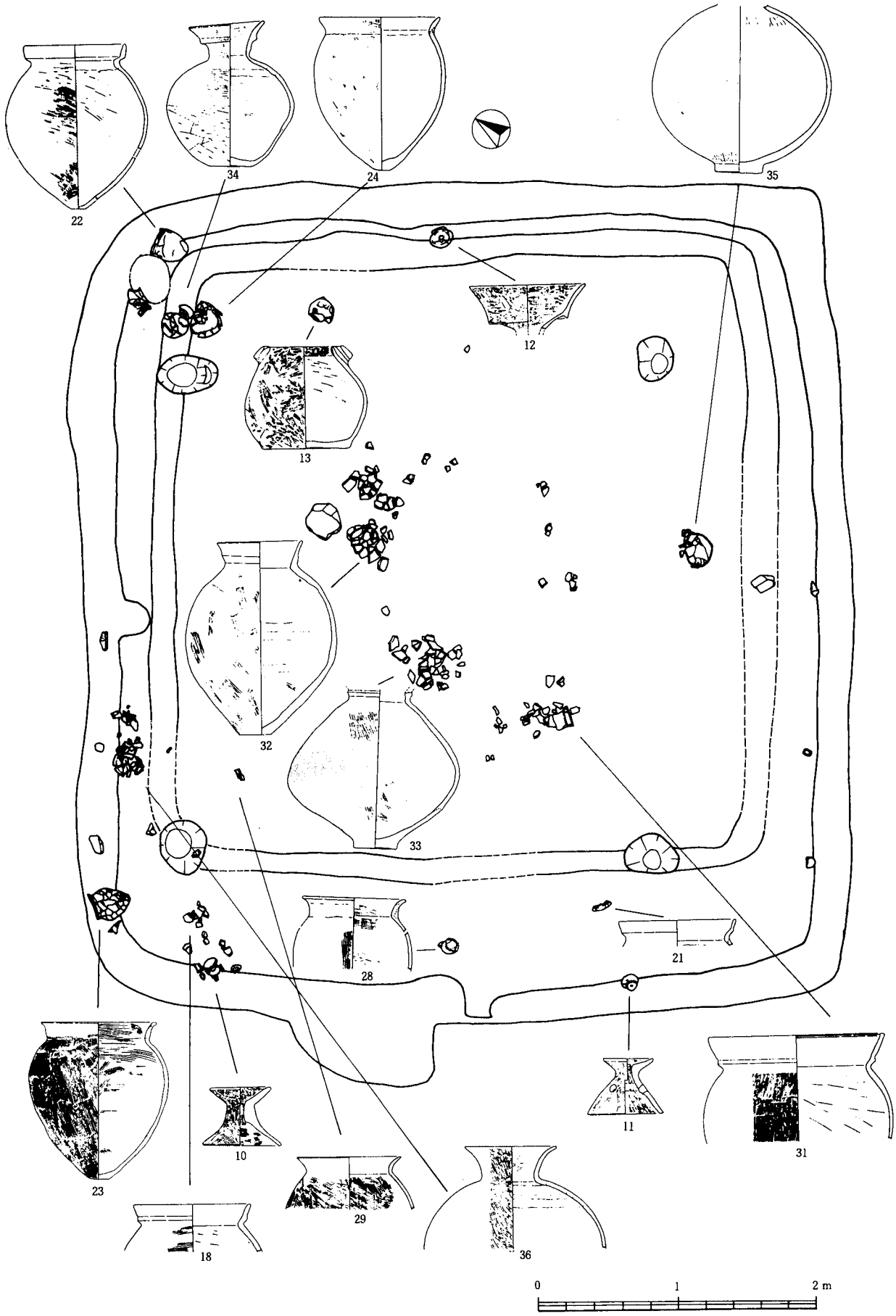
遺物の出土状況　本住居跡の埋積過程については、土層断面図からいわゆる「レンズ状堆積」の状態であることが知られ、茶褐色系統の覆土→黒褐色系統の覆土の順で住居跡が徐々に埋まっていったと判断される。床面付近よりの土器の出土状況については第16図に示してある。このうち床面中央付近から検出された31～33については、黒褐色系覆土に伴って埋積途中に形成された住居跡中央の窪みに後から廃棄された可能性を払拭することができない。それ以外のものについては一部に若干の不安を残すものの、概ね竪穴住居が機能を失った時点と近接した時期の資料といえそうである。１号竪穴住居跡の年代を探るうえだけではなく、当該時期の土器群の様相について考る際においても興味深い事例となろう。

遺物　竪穴の壁より床面近くから壺形土器、甕形土器を中心に器形遺存度のよい個体が多く出土した（第16図）。しかし、欠損部を有するものが大半で、取り上げ時の取り残し破片の存在を考慮しても、完全な形での遺棄例はほとんどない（23・34は胴部片を若干欠く程度で完形であった可能性はある）。土器群の出土状態は、住居の使用時を反映したものとは考えられず、位置や組みあわせに特定の意義を見い出し難いことから、住居廃絶後の塵芥処理的な廃棄と推定する。主として北～西から投棄されたと考えられる。

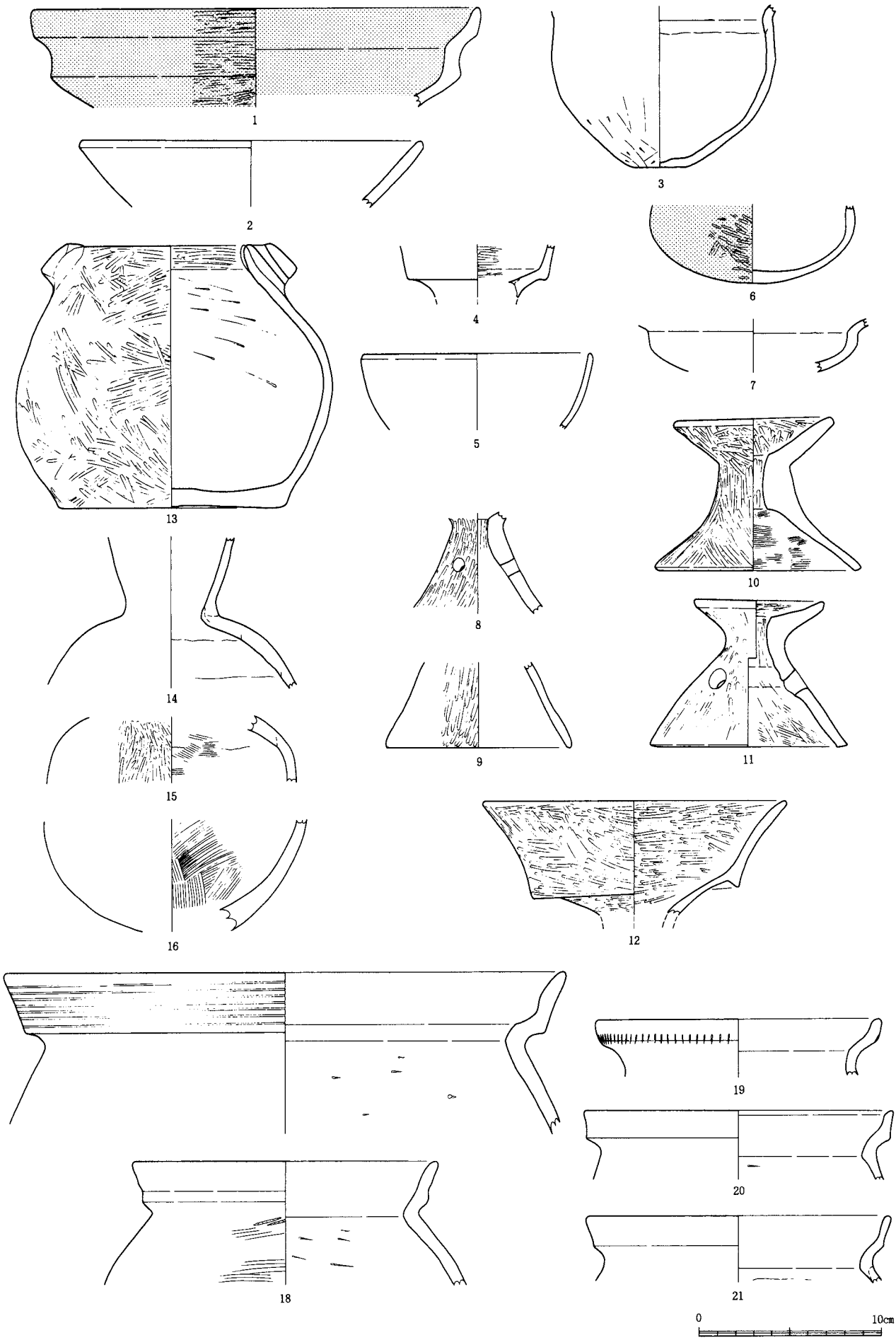
高杯形土器は２の東海系とみられる破片があるのみである。小型高杯形土器は、５の薄手椀形のものがある。小型鉢形土器は丸底の６、７がある。小型器台形土器は、８・９と遺存度のよい10・11がある。10は脚部上半が筒状となり、透し孔はない。11は脚がハの字に開き、透し孔をもつ。中型器台形土器12は、受部がほぼ完形で口縁部は外反する。13は蓋受けの貫通孔付突起を２個持つ無頸壺形土器で、底部は安定感のある大きな平底となる。厚い底部は土器焼成前（乾燥時）に底割れをおこし、粘土で充塡修復されている（写真図版39）。14～16は直口壺形土器である。



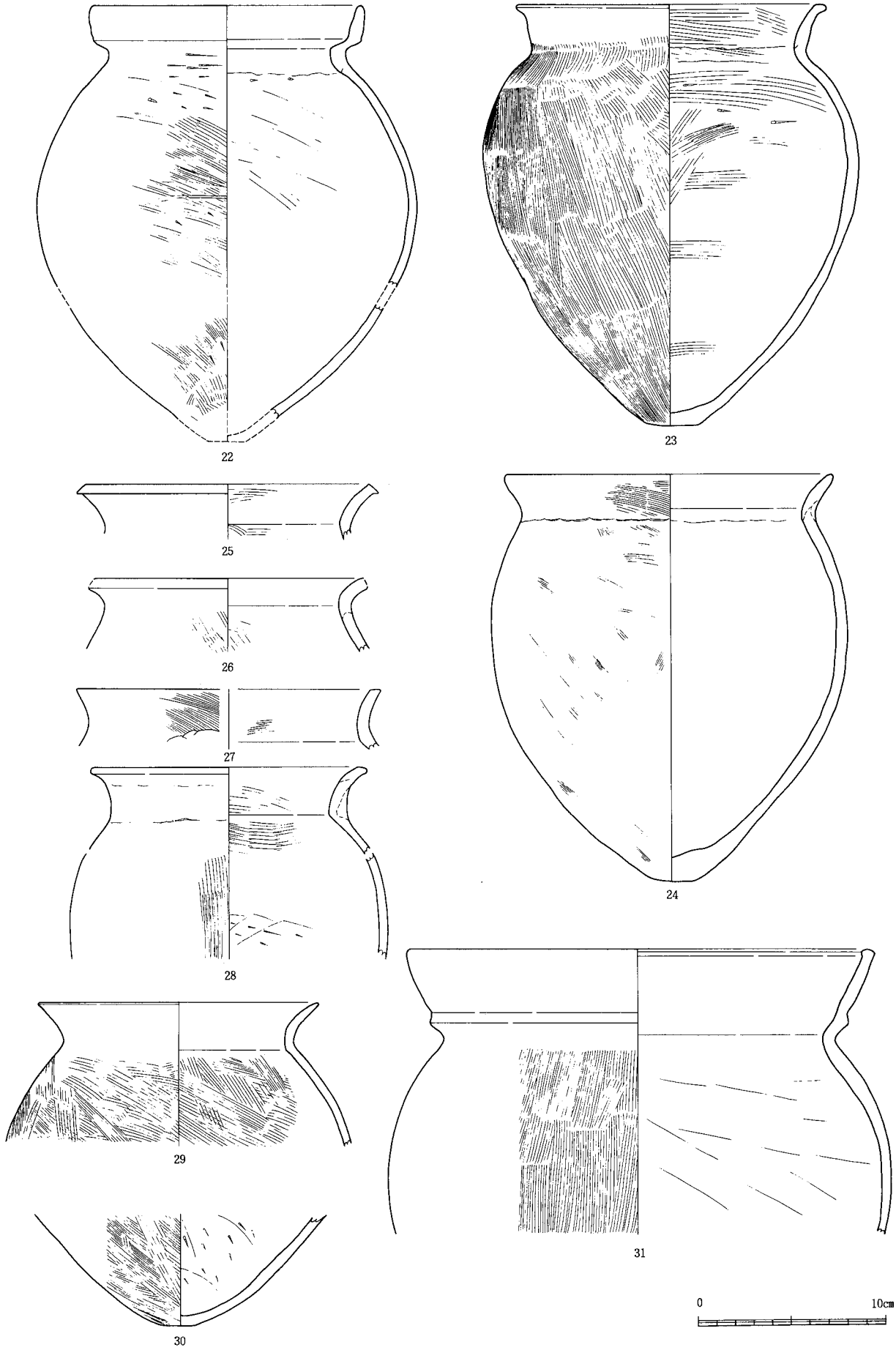
第15図　１号竪穴住居跡実測図（１／80）



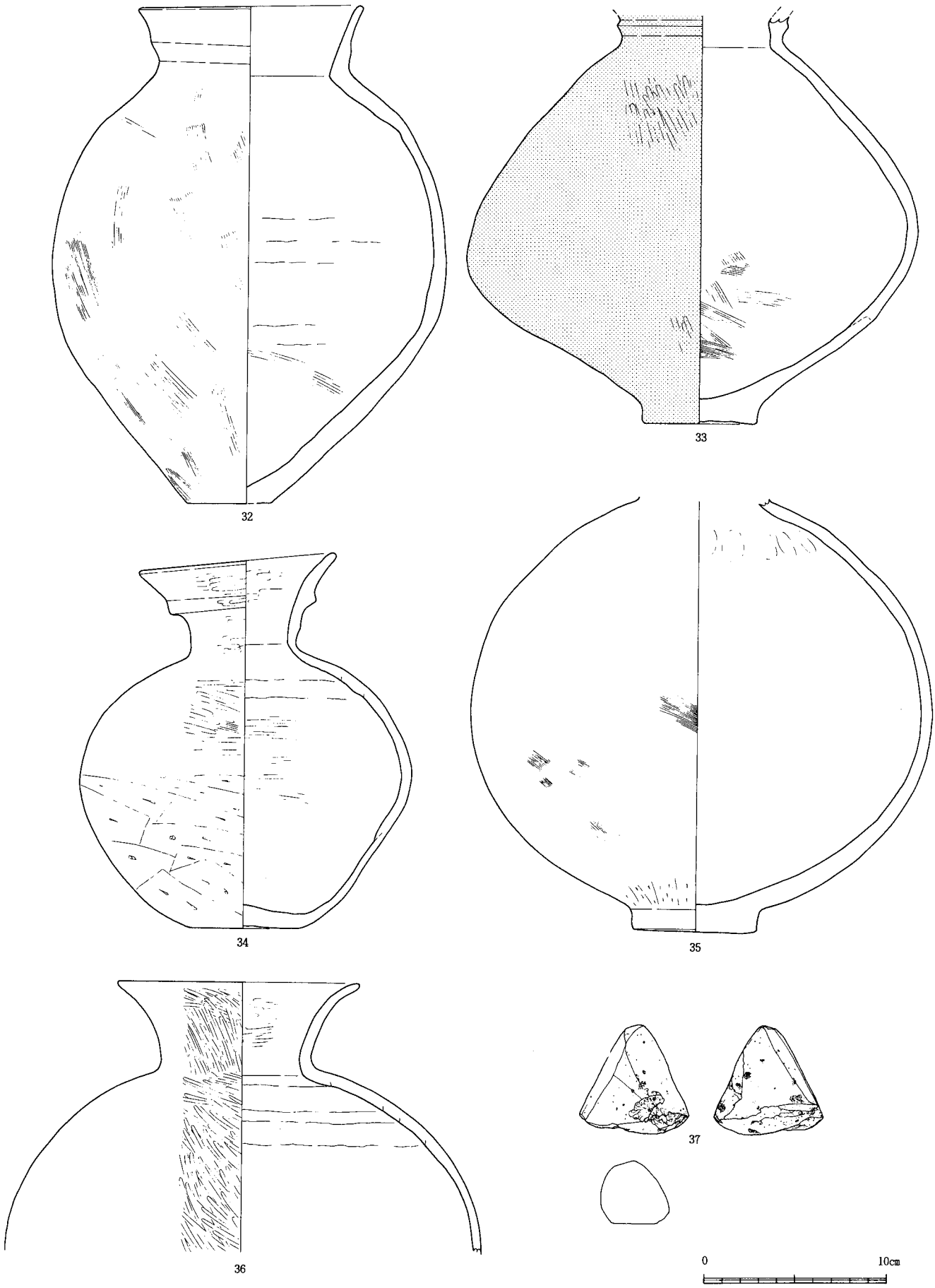
第16図　１号竪穴住居跡床面土器出土状況



第17図　１号竪穴住居跡出土土器(1)（１／３）※100号土坑出土品含む



第18図　１号竪穴住居跡出土土器(2)（１／３）



第19図　１号竪穴住居跡出土土器(3)（１／３）

中～大型壺形土器は、器形（系譜）が様々である。32は長胴の在来系有段口縁壺で、口縁部の段は形骸化して全体的には直口となる。33は胴の張った下膨れの器形で、頸部には突帯をもつ。外面は赤彩する。東海系か。34は中型の二重口縁壺である。本来の小さな底部はひしゃげて内側に折れ曲がり、大きな平丸底状となっている。35は端正な球形胴部の壺で口縁部は欠損する。二重口縁か。胎土には1.5～2.0mm前後の赤色円形の流紋岩質岩砂礫を多量含み、本遺跡中では異質な砂礫構成を有する。富来町鹿頭上の出遺跡などで普遍的に認められるものである。36はくの字に開く口縁を持ち、球形の胴部がつく。34～36は畿内地域に系譜をたどりうる。

甕形土器は在来有段口縁系の18、22（口縁は受口状の有段で、胴部が球形化、外面を削り器壁の薄化をはかっている点では外来的要素を含む）、くの字面取り口縁の23、25～28、素縁の24、29・30（球胴化し、器壁が薄い）がある。その他、大型品として山陰系の31がある。

軽石製の砥石は37とあわせて計３点が出土している。各21ｇ、27ｇ、22ｇである。また花崗岩の自然石を利用した磨面のある石（12.5×10.3×4.8cm）が床面から出土した。

土器群の編年的位置は、古墳時代前期でも、徳前２群土器（湯尻1986）より後出的で、壺・高杯・小型器台形土器等、在来色の弱い組成をもつことから、ほぼ加賀地域の古府クルビ式（田嶋1986）に併行すると考える。

２号竪穴住居跡（第20・21・23・24図、図版14）

遺構　Ⅰ43区に所在し、北西部は１号竪穴住居跡と近接しており、両者の間は最も狭いところでわずか10cm程にしか過ぎない。約6.2m×約6.0mの隅円正方形であり、検出面からの深さは状態の良いところでもせいぜい20cm、削平を受けた箇所では10cmに満たない。２段掘りの住居内土坑が２基みられ、このことは住居の拡張が行われた結果と推定される。ただし、主柱穴が６基しか検出されておらず、北側の２基については拡張前も拡張後もほぼ同位置であった可能性が高い。少なくとも南辺については外方へ70～80cm程度拡張されたものと思われる。なお、２段掘りの住居内土坑はいずれも１段目が長方形、２段目が楕円形であり、床面からの深さについては拡張前（内側）のものが６cmと39cm、拡張後（外側）のものが４cmと14cmを測る。壁周溝は幅20cm、深さ５～10cmを標準とし、底部にはさらに径10cm程度の小ピットが数多くみられる。南辺内側に存在したはずの拡張前の壁周溝の跡については検出することができなかった。また、壁周溝は北辺で弥生時代後期の大型大坑である106号土坑に、西辺では古代の土坑である40号土坑によって切られている。その他では床面に焼土面（スクリントーンで表示）が４箇所みられ、主柱穴内側の２者よりも外側の２者の方が範囲が大きい点が指摘できる。

遺物の出土状況　本住居跡の検出面に近い覆土の上層からは須恵器等の古代の遺物がまとまって出土している。弥生土器についても床面直上出土というものはなく、図示したものの殆んどは写真図版からもわかるように床面からかなり浮き上がった位置から検出されている。したがって、覆土の深さから考えれば、弥生時代の遺物も古代のそれも出土レベルにおいてはさほど変わらないことになる。なぜこのような現象が生じたかについては、土層断面の記録の不備もあって残念ながら明らかにすることができなかった。

遺物　大型破片は多いが略完形状態に復元できるものはない。

40は口縁部内面に甕蓋の使用痕がある。器台形土器44は日本海西部に系譜をたどりうる型式である。高杯形土器42は杯口縁が短かいものの外へ開く特徴がある。50は肉厚の壺形土器で口縁部を欠損する。広口壺か。甕形土器51は、肩部に櫛状具による平行沈線と刺突列点文を有する近江に系譜を持つものである。同様の文様構成を持つ個体は他にもあり、52・53を含め広い意味での近江系と言えよう。他には、くの字で口縁部と肩部に刻みをもつ54や内湾口縁でくの字面取りの55、有段口縁の56～59がある。59は器壁は薄く削るが、口縁部と底部の作りは厚い。60は甕形を呈するもので底部には焼成前の穿孔がある。焼けた粘土塊が２個出土した。

時期は、主に甕形土器に鹿島町徳前Ｃ遺跡（第２～４次）や羽咋市太田遺跡に類品が認められることから、弥生時代後期でも中葉に近い頃と考える。

３号竪穴住居跡（第22・24図、図版15）

遺構　H43区の調査区西壁にかかって検出されており、住居跡の北東コーナー付近が明らかになったのみであり、残る大半は調査区外にあって未調査である。検出面から床面までの深さは約20cmを測る。東辺に沿って幅15cm位で、床面からの深さ５cm程度の壁溝がみられるが、北辺においてそれは認められない。調査区西壁の壁際には床面からの深さ約30cmのピットが存在するが、それが主柱穴になるかどうかは今のところ判断できない。

遺物　61の管玉１点と長方体状の荒割り未成品１点、剝片４点が出土している。61は完成品で両端は生きており、長1.7cmを測る。石材は風化しており、淡緑色の軽くて脆いものである。

時期は伴出土器がなく決めがたい。

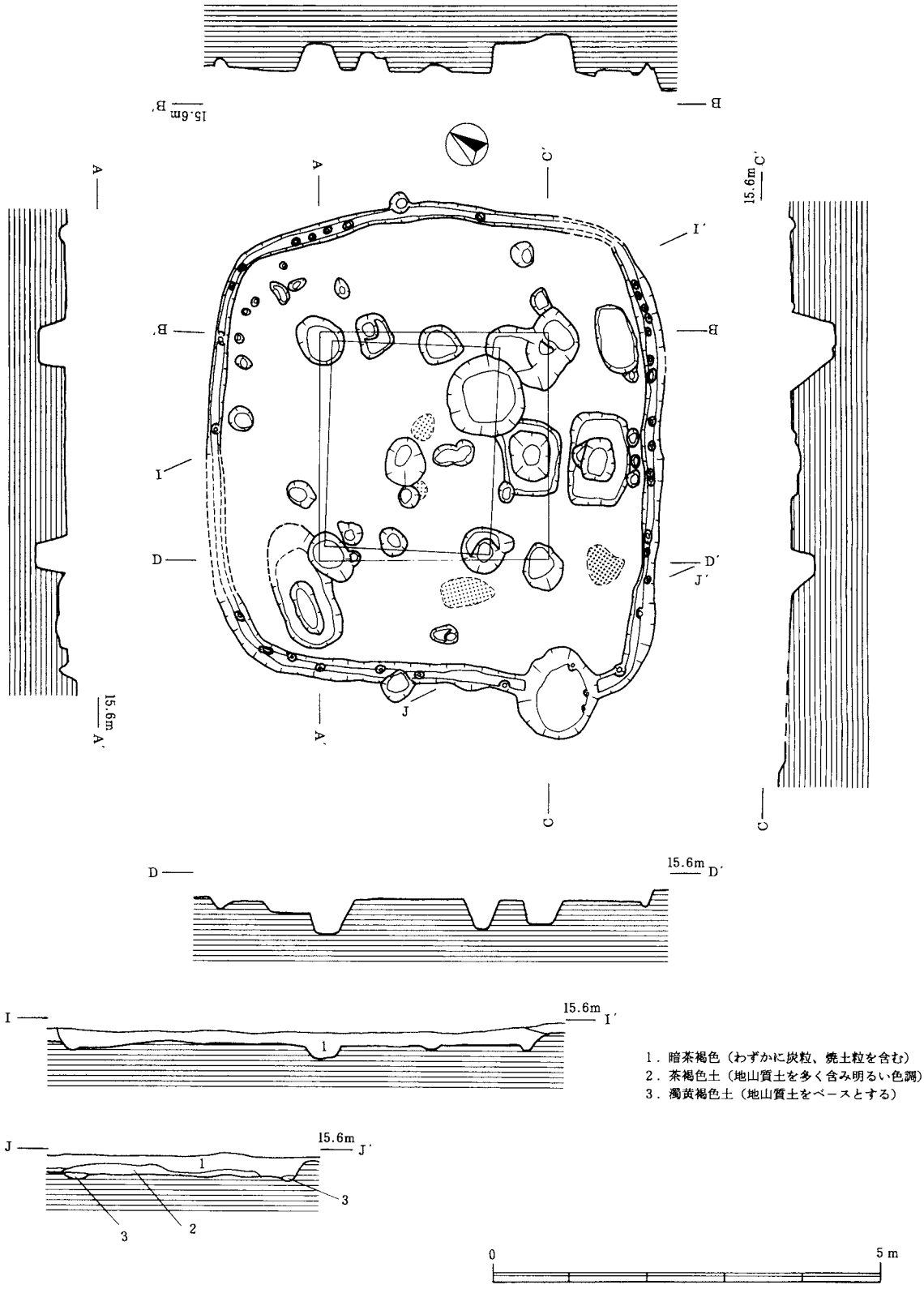
５号竪穴住居跡（第22・24図、図版15）

遺構　J 43区の調査区東壁にかかって検出されている。南北約6.6m×東西3.4m以上の隅円方形を呈しており、検出面から床面までの深さは20cm程である。幅15cm、床面からの深さ10cm強を標準とする壁周溝が廻っているが、北辺の一部は古代に属する70号土坑によって切られている。主柱穴については２基が確認され、径約40cmの略円形で床面からの深さは約50cmを測る。両主柱穴間の床面上には55cm×40cm程の範囲の焼土面（スクリントーンで表示）がみられ、床面からわずかに（１cm未満）盛り上がりが認められる。また、床面の北西コーナー付近では瓢箪形をなす白色粘土の塊（破線で表示）が検出されており、この床面からの盛り上がりは最大10cmである。

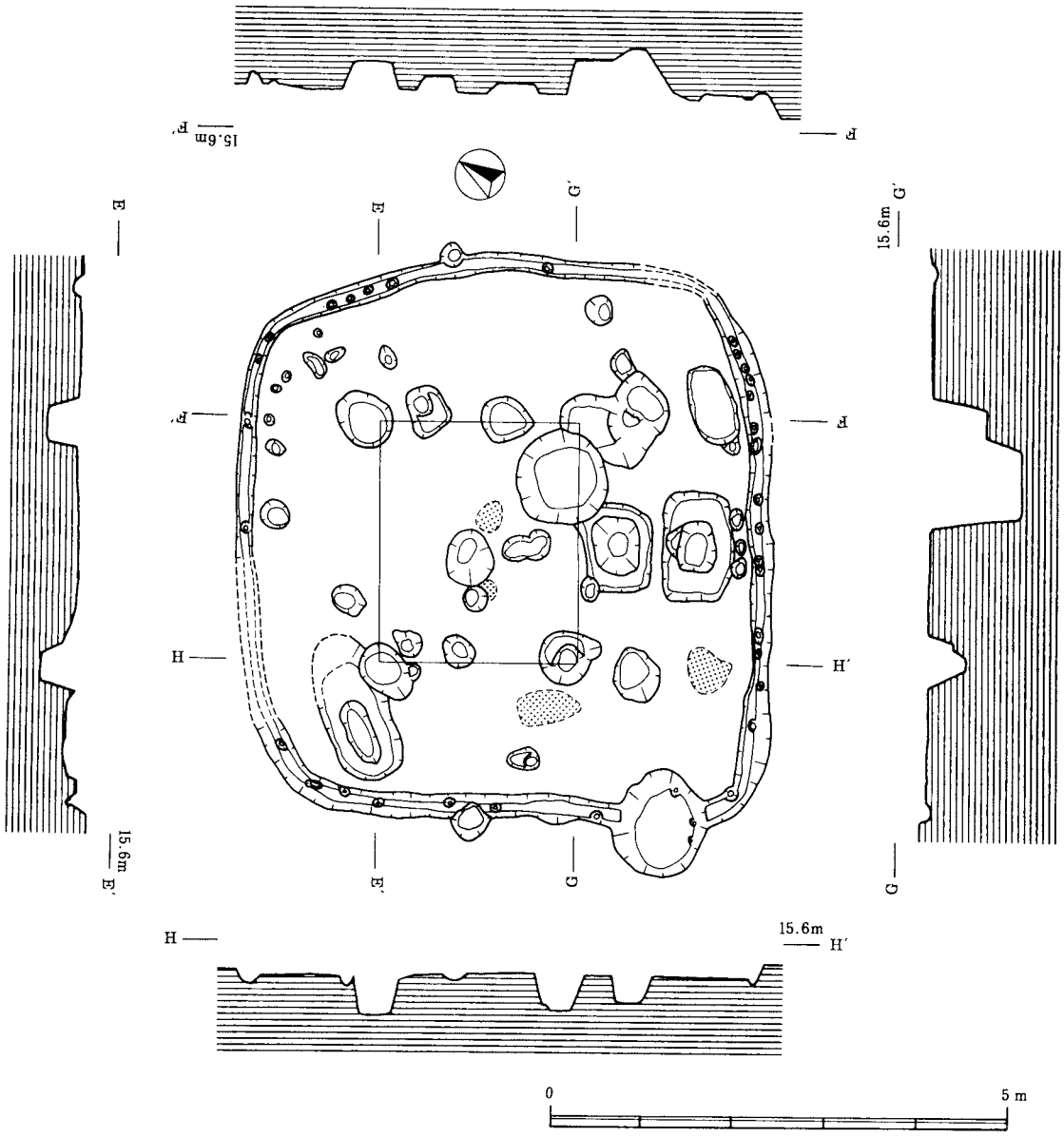
遺物の出土状況　５号竪穴住居跡は、１号竪穴住居跡同様に茶褐色系覆土、黒褐色系覆土の順に漸次埋積していったことが土層断面図より察せられる。また、床面上にみられる厚さ約10cmの地山質土（第４層）は、床面を整えるために意識的に貼られたものかもしれない。以上のように比較的安定した土層堆積条件下にある本住居跡であるが、床面をはじめとする覆土中からは特にまとまった量の資料を得ることはできなかった。

遺物　土器は小型鉢形土器62・63、高杯形土器64・65（小型器台形土器か）・68、小型器台形土器66、甕形土器70がある。石製品として71の転石製砥石（18ｇ）があり、焼けた粘土塊が２個出土している。

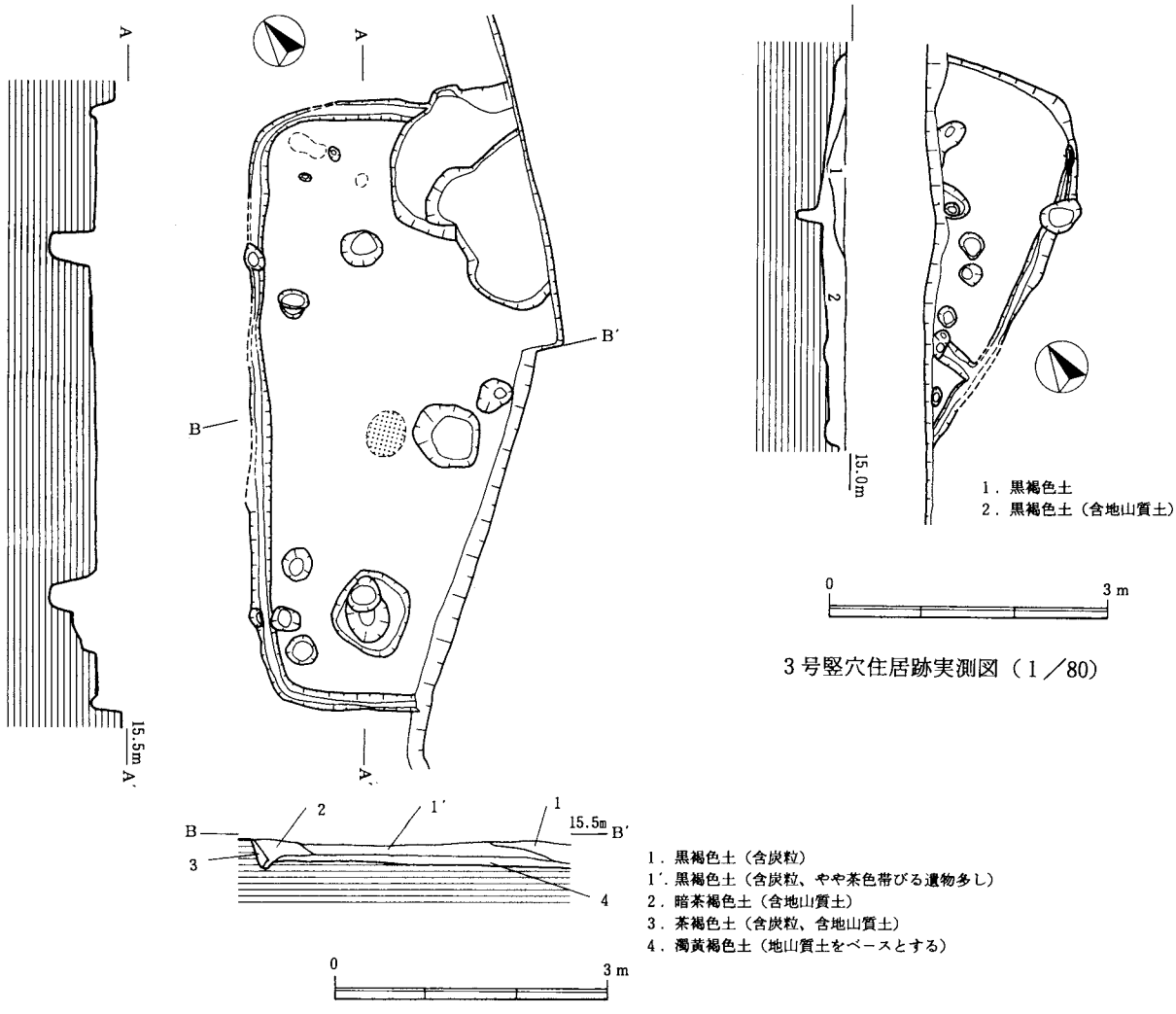
時期は64の高杯形土器の評価は難しいが、65・66・68から、１号竪穴住居跡と大差ない頃ととらえておきたい。



第20図　２号竪穴住居跡実測図　その１（１／80）



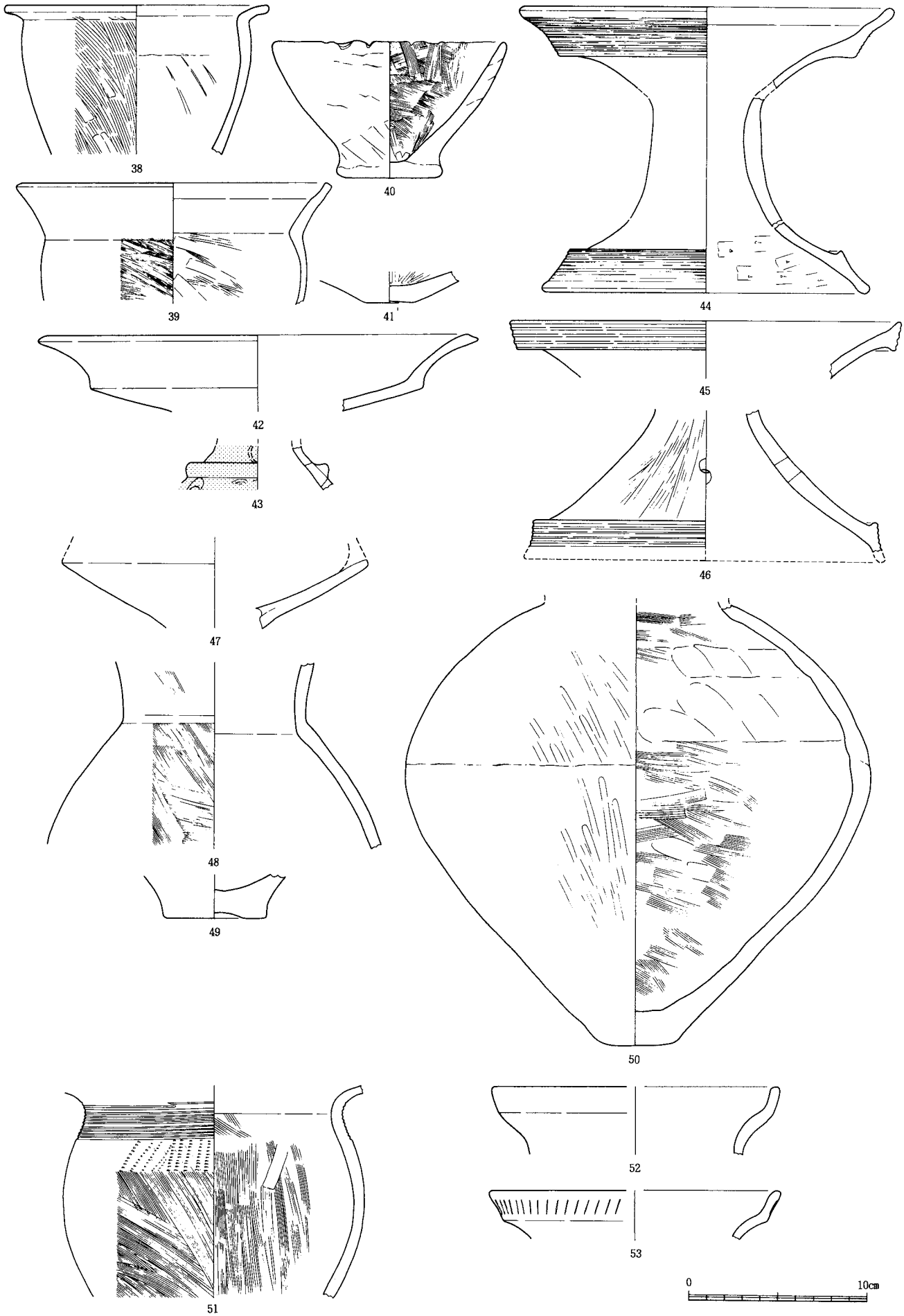
第21図　２号竪穴住居跡実測図その２（１／80）



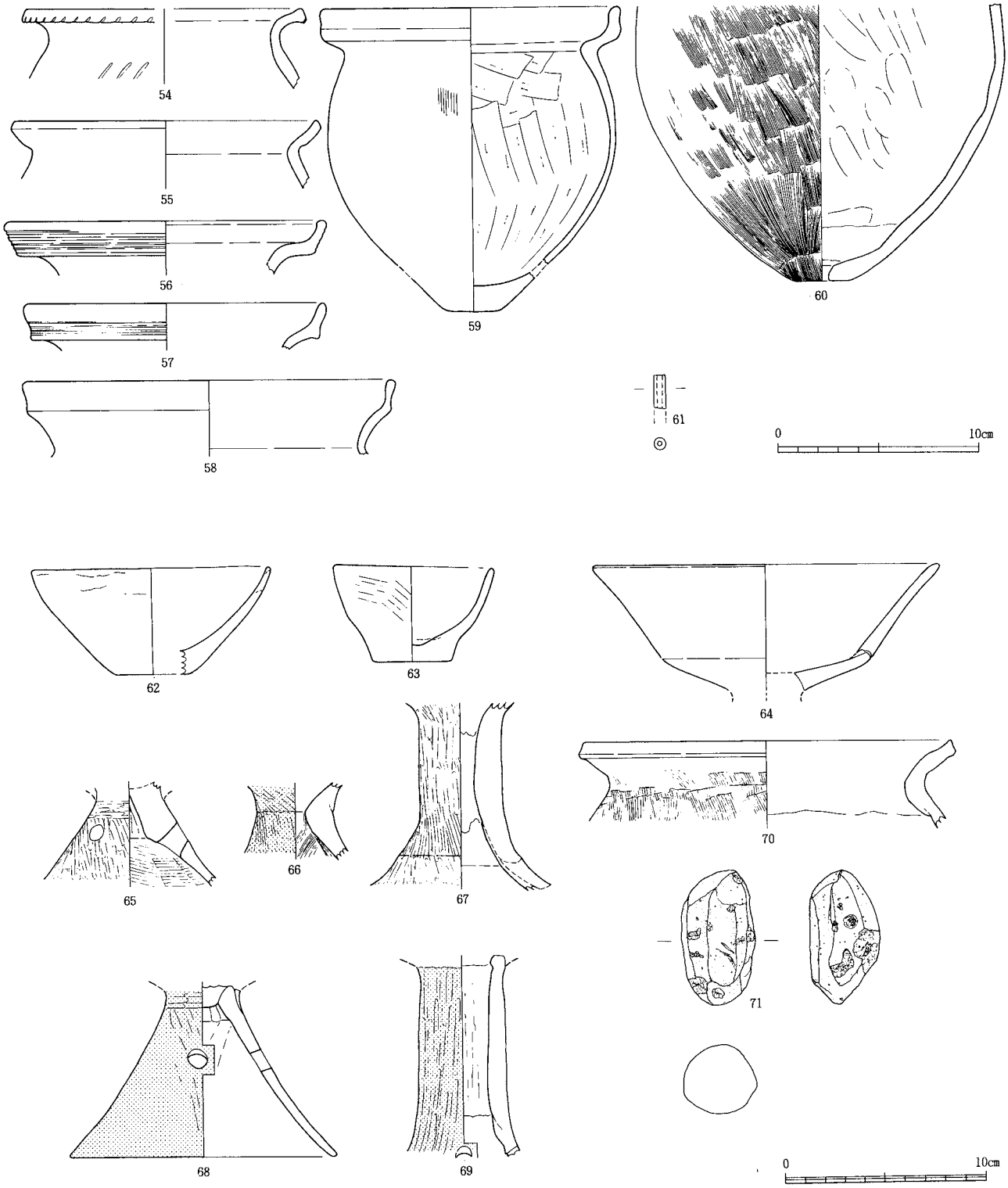
３号竪穴住居跡実測図（１／80）

５号竪穴住居跡実測図（１／80）

第22図　３・５号竪穴住居跡実測図（１／80）



第23図　２号竪穴住居出土土器(1)（１／３）



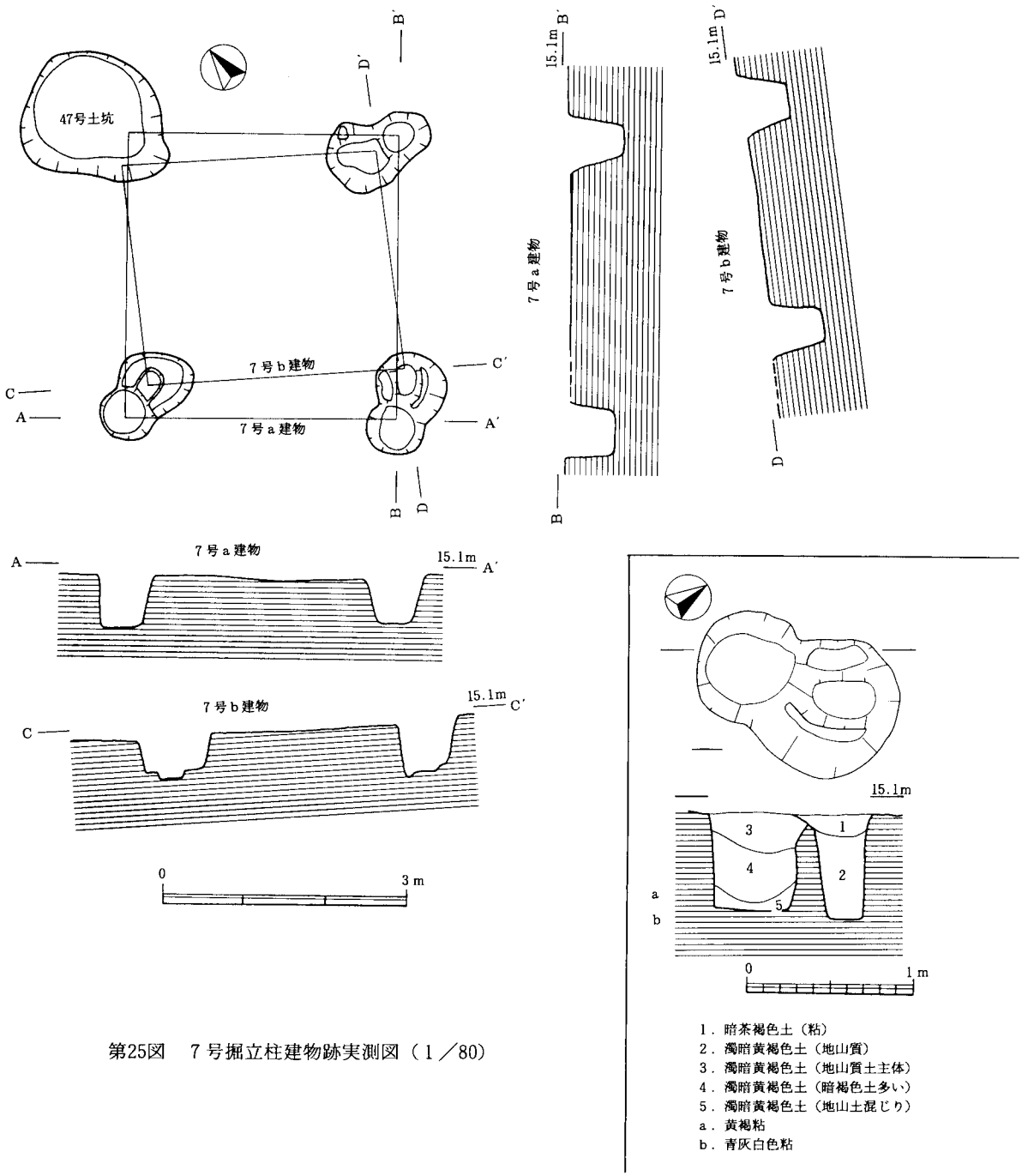
第24図　２号竪穴住居跡(2)、３号竪穴住居跡、５号竪穴住居跡出土土器（１／３）
（54～60）　（61）　（62～71）

2　掘立柱建物跡

冬野遺跡では10棟の掘立柱建物跡が検出されているが、そのうち弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、つまり竪穴住居跡が営まれた時期に併行すると考えられるのは７号建物跡１棟のみである。

７号掘立柱建物跡（第25図、図版31）

Ｉ42区西部から一部Ｈ42区にかけて立地し、柱間は１間×１間である（詳細は第３節の一覧表参照）。弥生時代の大型土坑の北群に囲繞され、その１つの47号土坑が北西側の柱穴と重複するが、両者の切り合い関係は不明である。ほぼ同じ場所での建て替えが認められ、南東側柱穴の土層断面図から７号ａ建物──→同ｂ建物の順で築かれたと判断される。柱穴覆土中から弥生土器細片の出土がみられるのみで須恵器及びそれに伴う時期の資料は認められない。１間×１間の掘立柱建物跡は、冬野遺跡では７号掘立柱建物跡だけに過ぎない。



第25図　７号掘立柱建物跡実測図（１／80）

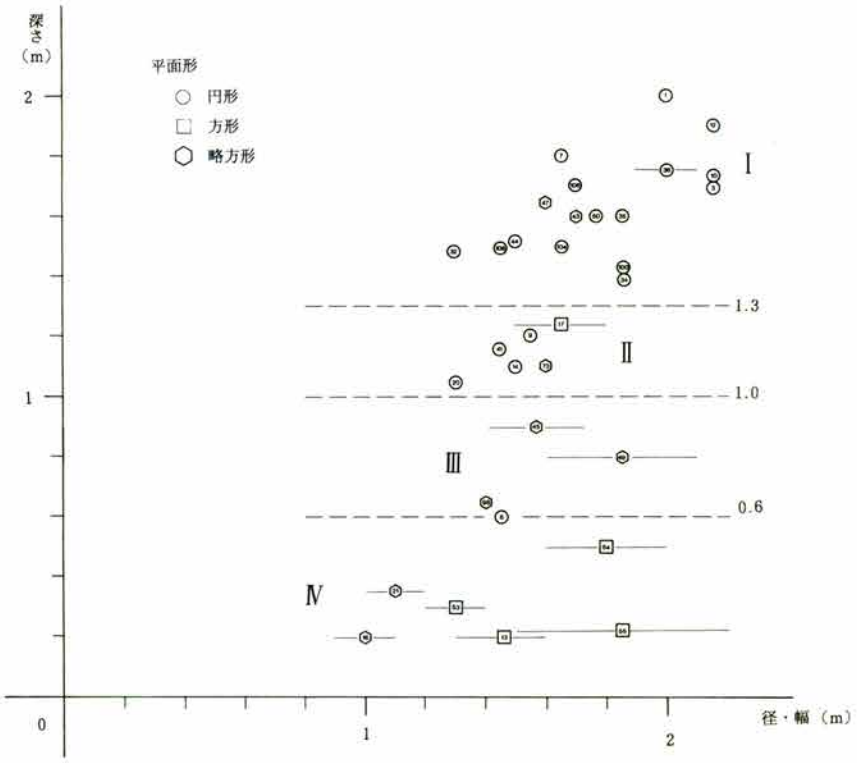
３　大型土坑

ａ　形態分類

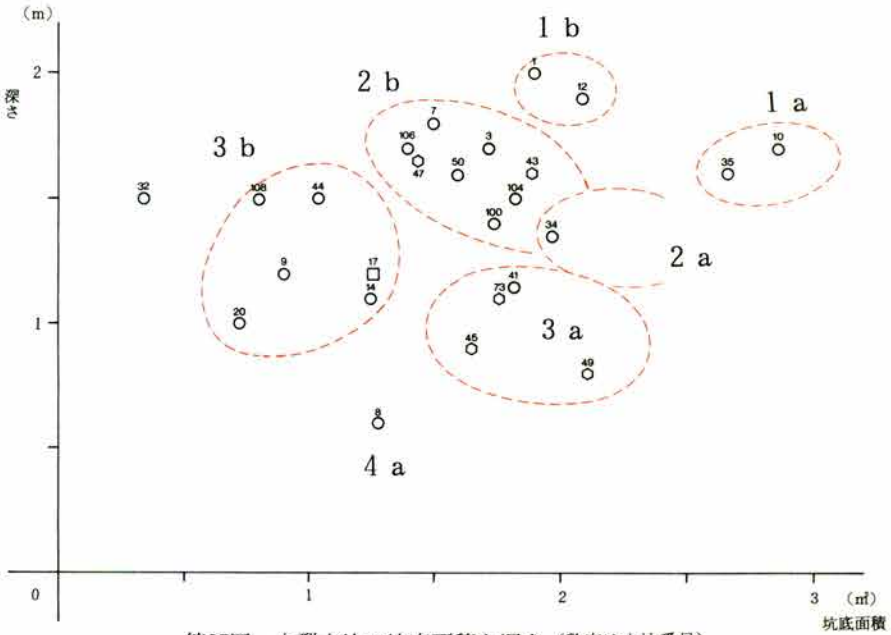
出土遺物から弥生時代に帰属すると考える土坑を平面形と深さで分類した（第26図）。平面形は上面と底面プランの相方を勘案し、若干区別しづらいものもあったが、（略）円形、略方形（略長方形）、方形（長方形）に分けた。深さは法量グラフの谷部の1.3、1.0、0.6m付近を境に４群に分けた。断面形はほぼ箱形を呈するものに限られたため分類はしなかったが、17号土坑や32号土坑のように逆台形ぎみとなるものがある。坑底の遺構には壁溝を有するものが多数あり、中央ピットを持つもの等があった。

円形平面の土坑は、深さⅠ～Ⅲがあり、略方形にはⅠ～Ⅳ、方形にはⅡ、Ⅳがあって、一般的には円形のものが深い傾向にある。壁溝はⅠ、Ⅱでは一般的であるが、Ⅲには１例のみで、Ⅳにはない。大型土坑の用途論は別に必要であるが、ここでは貯蔵穴（穴倉）とする立場をとる。機能的には地下に一定の深さを有することを要件にし、地上施設として竪穴式住居のような上屋構造（周堤、垂木、土屋根）や坑底での柱穴・貼床、除湿効果の上げ床構造（壁溝、盛土、枕木）、焼壁（灰層）等の認められるものがこれに該当しよう。

以下の報告では、分類した円形Ⅰ～Ⅲ類（20基、Ⅰ－15、Ⅱ－４、Ⅲ－１）、略方形Ⅰ～Ⅲ類（６基、Ⅰ－２、Ⅱ－１、Ⅲ－３）、方形Ⅱ類（１基）、計27基を大型土坑（穴倉）として扱っていく。大型土坑は坑底面積をプラニメーターで計測し、深さとの関係で第27図のとおり分類した。南群では両者に比較的相関が認められたが、北群は明確ではない。



第26図　弥生時代終末期の土坑の法量（数字は土坑番号）



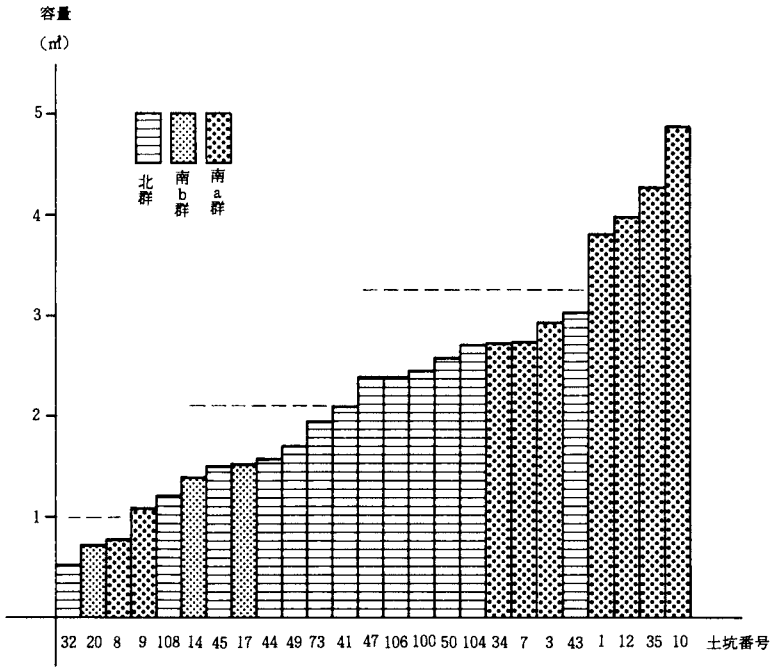
第27図　大型土坑の坑底面積と深さ（数字は土坑番号）

ｂ　分布（第29図）

大型土坑の分布は２群に大別でき、17・20号土坑を北限とする南群と32号土坑

を南限とする北群がある。南群は、さらに台地頂部標高17m付近に列状をなして集中する一群（南ａ群－１・３・７～10・12・34～36号）と、その北側の緩斜面に位置するものとに分けられる。北群は台地上平坦面標高15m付近に群在しており、しいて分けるならばＩ－43区付近のもの（北ａ群－32・43・45・73・98・100・106・108号）とＩ－42～Ｈ－41区にかけてのもの（北ｂ群－41・44・47・49・50・104号）に細別可能である。ただし、32号土坑は北群ａ群と別群とみることもできる。

形態別の分布状況では、略方形の北群での偏在、容量の大形のものの南群での偏在や分化（第28図）が指摘できる。土坑の切り合いが確認されたのは南ａ群の35号と36号のみであり、集中性をみせながらも重複の少ないのが大型土坑の分布の特徴である。なお、形態分類で大型土坑から除外したⅣ類が南群の北側（13・16・21号）と北群の北側（53～55号）にそれぞれ分布しており類似したあり方が看取できる。



第28図　大型土坑の容量

出土遺物量は、土坑数が南群が13基、北群が14基とほぼ同数にもかかわらず、前者が整理済のコンテナで約25箱、後者が約12箱と大きな差がある。

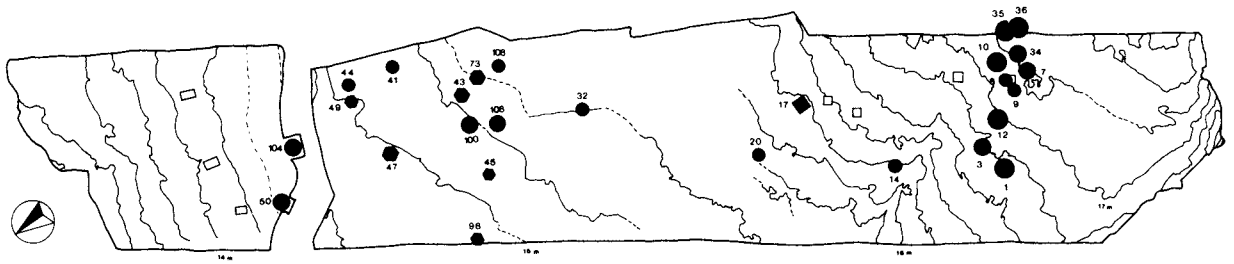
c　周辺遺構と時期

大型土坑出土土器は、概ね加賀地域の弥生時代後期終末の月影式併行期最古段階に位置付けられる。その他に当該期の土器を出土する遺構は、形態分類の項で述べた略方形・方形Ⅳ類の10例にも見たない土坑のみであり、住居跡（竪穴、掘立柱）は確認できない。遺跡地は畑・水田等により既に遺物包含層はもとより、遺構面の一部までが削平を受けており、当該期土器の全般的な分布傾向を知ることはできない。包含層が遺存した北端のＩ－39区では多量の土器が出土したが明確な遺構は検出されなかった。集落縁辺の土器捨て場的な地域であったのかもしれない。

大型土坑が営造された時期、この一帯は、集落のそばの「群倉」的な地区であったと推定される。

d　層位

大型土坑の埋土の観察により、土坑廃棄に伴い埋め戻されたか、自然堆積により埋まったかを推定してみた。



第29図　大型土坑の分布（１／1000）

遺跡地の地山は中央の平坦面付近を境に北半と南半でやや様相が異なるが、ともに上位が粘性のある黄褐色土で、下位に砂質土、砂礫層が堆積する。

自然堆積を想定したものは、10号土坑例や47号土坑例のごとく、均質な壁の崩落地山土と土器・炭粒を比較的多く含む腐植土層がレンズ状に堆積しているものである。９基前後あり全体の約⅓を占め、一般的に土器の出土量が多い特徴がある。

一方、埋め戻しを想定したものは、１号土坑下半や７号土坑、34～36号土坑のごとく、分層できる層位数が少なく、地山質土がブロック状に混じって比較的水平に厚く堆積するものである。土坑上面のへこみから土器群の出土する場合はあるが、埋め土中からの出土は通常小片に限られる。土坑周囲の壁の崩落が少なく、断面形が原形を保っているとみられるものが多い。また特徴的なのは、７号土坑、34号土坑、43号土坑、73号土坑などにみられるように、周囲の地山の層序と逆に、下層に黄褐色の粘質土を主体にした地山土をもち、上層に砂層や砂礫層の地山をもつというような土層の転置現象の認められることである。土坑廃棄に際し、隣接地に新たな土坑を掘削し、その排土を順次埋め込んだ場合などはこのような現象がおこりうる。

土器群の出土は多くの土坑で認められたが、坑底に当時の使用状況を窺わせるような状態で出土した例はなかった。坑底も含め、多量の土器が腐植土系の層位から出土したものは、一般的に完形に復元できるものはなく、一部に欠損部をもつものが通例であって、いずれも塵芥処理を目的としたものであろう。ただし、17号土坑および32号土坑例の一括土器廃棄は他の例と事情が異なる可能性がある。

その他、いくつかの例で土坑中に焼土面が確認された。いずれも坑底や壁面を焼成して除湿・防疫を意図したと考えられる例はなく、層中や上面のもので、穴やへこみを利用した焚き火的な火処とみられた。日常的な塵芥処理や土器焼成、なんらかの集落祭祀に伴う場合などが想定される。

坑底付近の土層は、掘方床面を底とした例もあるが、粘質土の貼床等、一定の土層を持つ例も多い（１号土坑、７号土坑、９号土坑、10号土坑、20号土坑など）。34号土坑では坑底一面に藁状の炭化物が検出されている。

e　大型土坑各説

１号土坑（第30・70図、図版17）

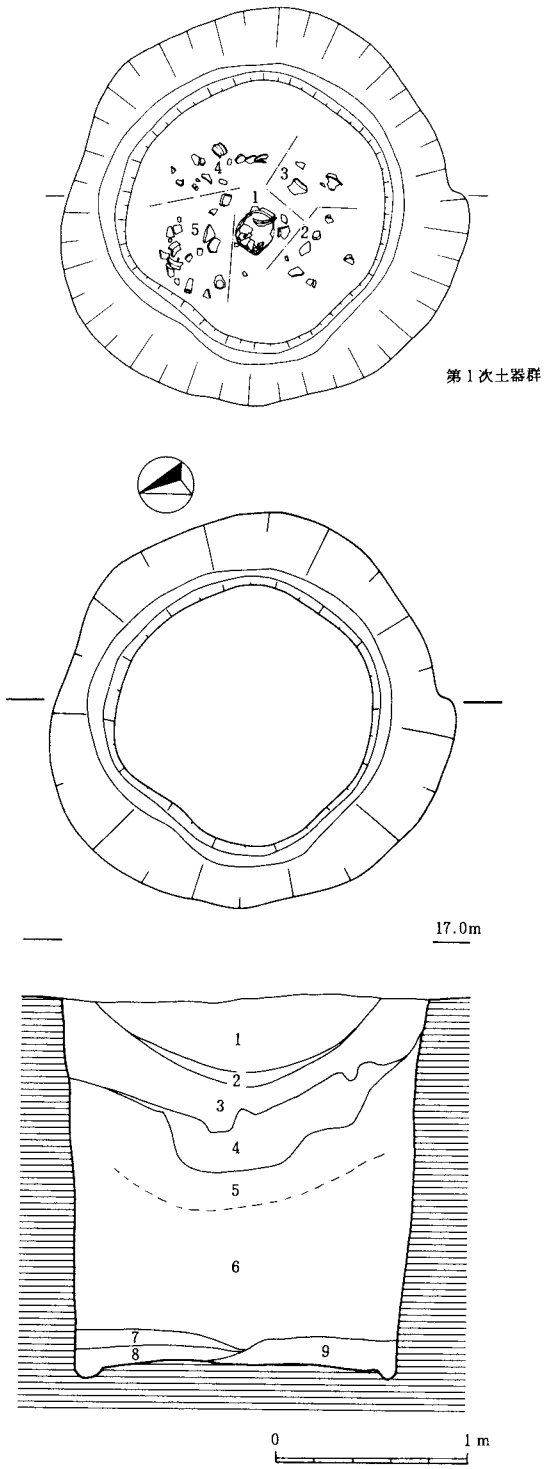
遺構　南ａ群の西端に位置する円形１ｂ類の土坑である。上面径1.9～2.1m、底面径1.6m、坑底面積1.90㎡、深さ2.0mを測る。壁溝は幅10～15cm、掘方底からの深さ５～10cmで全周する。埋土は、坑底付近に砂質の地山質土層が約15cmあるが、坑底面を形成していたものか、廃棄後の堆積土かはわからない。その上部は、遺物や炭粒をほとんど含まない埋め土とみられる地山質土が堆積する（６層）。１、２、４層はその上のへこみに堆積した、黒っぽい腐植土混じりの層で、土器等の遺物・炭粒を多く含む。３、５層の地山質土は壁の流入土ないしは埋め土であろう。

遺物　土器は１、２層から小片が、４層から大形破片がまとまって出土し、後者を第１次土器群として取り上げた。１・２層からは、柳葉式の鉄鏃が出土した。基部～茎は欠損するが、現存長6.8cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、現存重量17.37ｇをはかる。第１次土器群は中央部の月影式甕１の付近が深く、その北東よりに破片が多くレベルがやや高くなる。土器の廃棄が主として北東方向からなされたと考えられる。その他、自然礫を利用した磨り面のある砥石が２点（黒雲母角閃石片麻岩、凝灰岩）出土した。

本土坑出土品中では他の土坑との接合資料は確認していない。

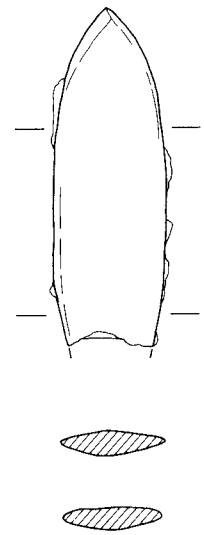
３号土坑（第32・33・71～73図、図版18）

遺構　南ａ群の円形２ｂ類の土坑である。上面径2.1～2.2m、底面径1.5～1.6m、坑底面積1.72㎡、深さ1.7mを測る。壁溝は幅10cm、深さ５cm以下の浅いものであり、溝というよりは掘削時の坑底の縁取り（壁立て）の痕跡を示しているのかも知れない。埋土は中位まで壁の崩落土とみられる（黄）褐色土（５～７層）が緩やかに堆積し、その上部に地山ブロックを含む３層をはさんで多量の土器・炭粒を含む２・４層がある。３層は埋め土を

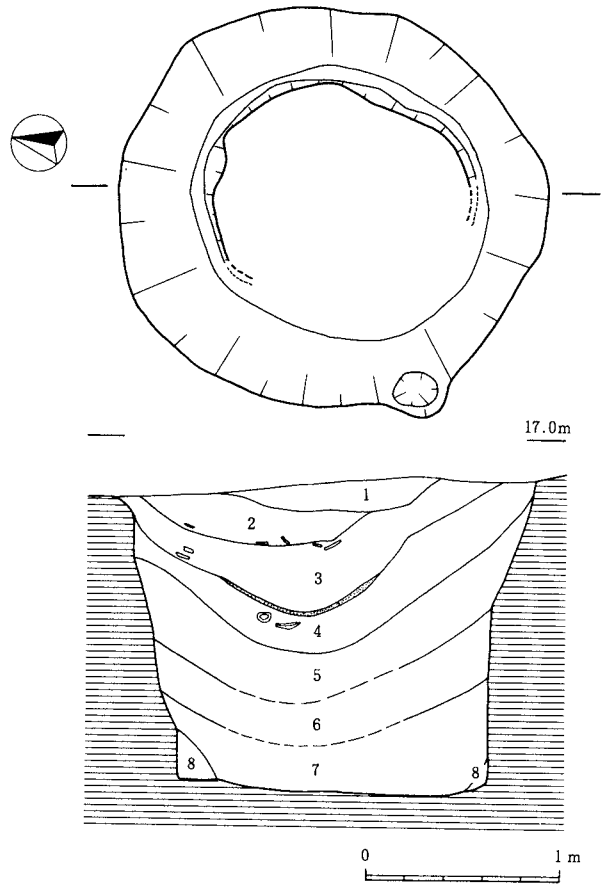


１．茶褐色土（炭・土器細片若干）
２．濁茶褐色土（炭多量、黒っぽい）
３．明褐色土　（地山質土多く含む）
４．濁暗茶褐色土（２層より炭多量含み黒っぽい）
　　第１次土器群
５．黄褐色土（土器・炭ほとんど含まず、しまり強い）
６．　〃　（　　〃　　、５層より明るい）
７．褐色土（まじりなし、遺物含まない）
８．濁灰黄色土（砂質で地山ブロック含む）
９．　〃　（８層より地山ブロック少ない）

第30図　１号土坑実測図（１／40）

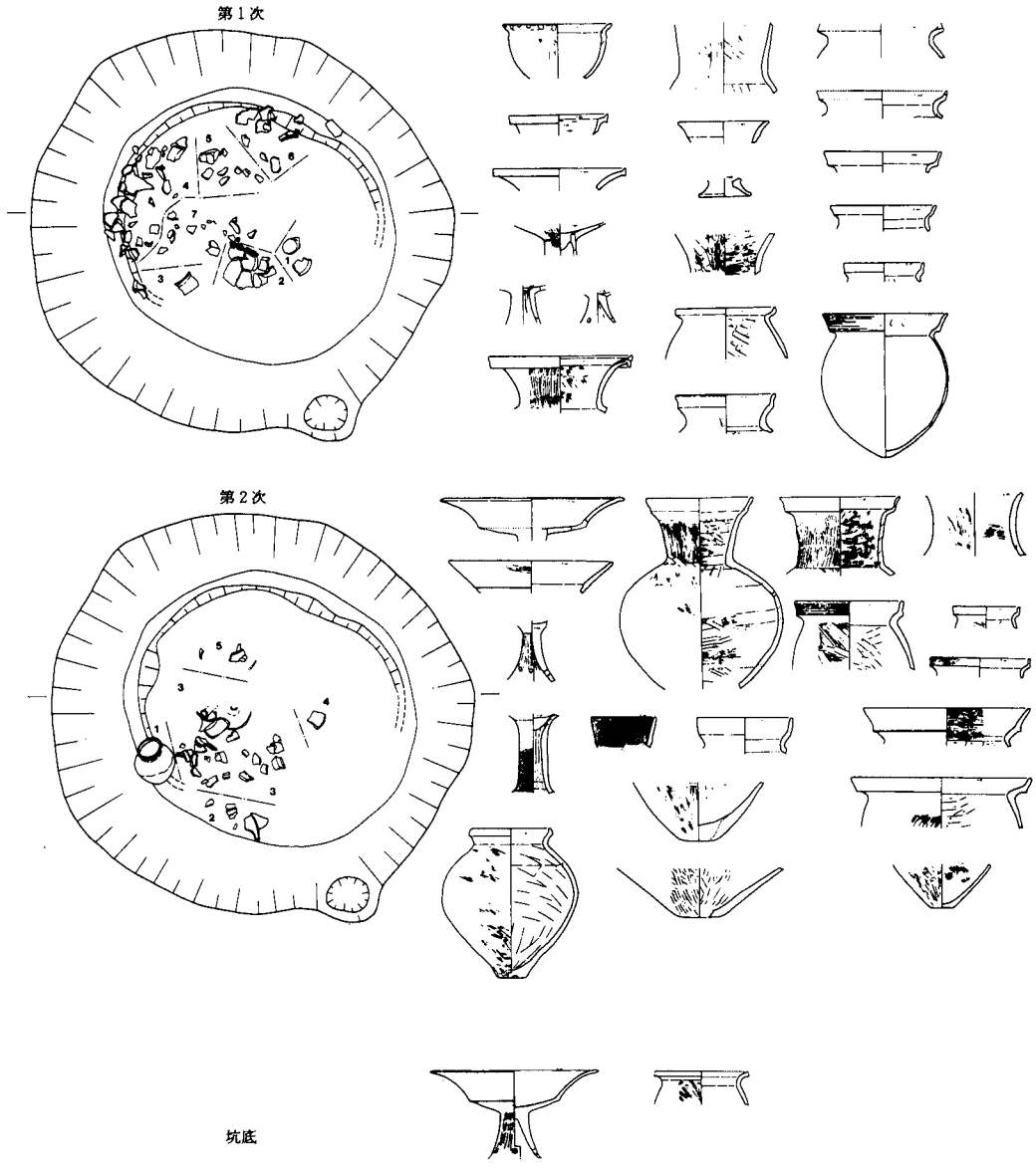


第31図　鉄鏃（１号土坑１～２層）（２／３）



１．茶灰色土
２．暗茶褐色土（炭多量、細かい地山ブロック含む）
　　第１次土器群
３．明茶褐色土（地山ブロック多量含む）
　　中央下面に炭粒層
４．濁茶褐色土（砂山ブロック含む、大形土器含む）
　　第２次土器群
５．褐色土（やや明るい）
６．　〃　（炭少量）
７．　〃　（６層よりやや暗い）
８．地山ブロック

第32図　３号土坑実測図（１／40）



第33図　３号土坑遺物出土状況（１／40）

含む可能性があるが、５～７層は自然堆積と観察された。

遺物　土器は２層下面と４層、掘方床面上約５～10cm付近でまとまって出土し、それぞれ第１次土器群、第２次土器群、坑底土器として取り上げた。第１次土器群は、その下の３層が南側から埋まっており、最深部が北よりにズレ（土器No.第１次－４付近）ている。土器の出土状況もそれにあわせたかたちで出土しており、南～南東方向から廃棄されたと推定される。131の月影式甕がほぼ完形でつぶれて出土した（No.２）が、口縁の一部はNo.６とやや離れた場所からも出土している。その他炭化したモモ科の種子とみられるものが出土した。第２次土器群も出土地点は北側に偏在する。完形状態で出土したNo.１の壺116や底部欠損のNo.３の壺113付近が最も深く、No.２・５の土器群に向けて東西が高くなっている。坑底土器は98の高杯で、倒立状態で出土した。

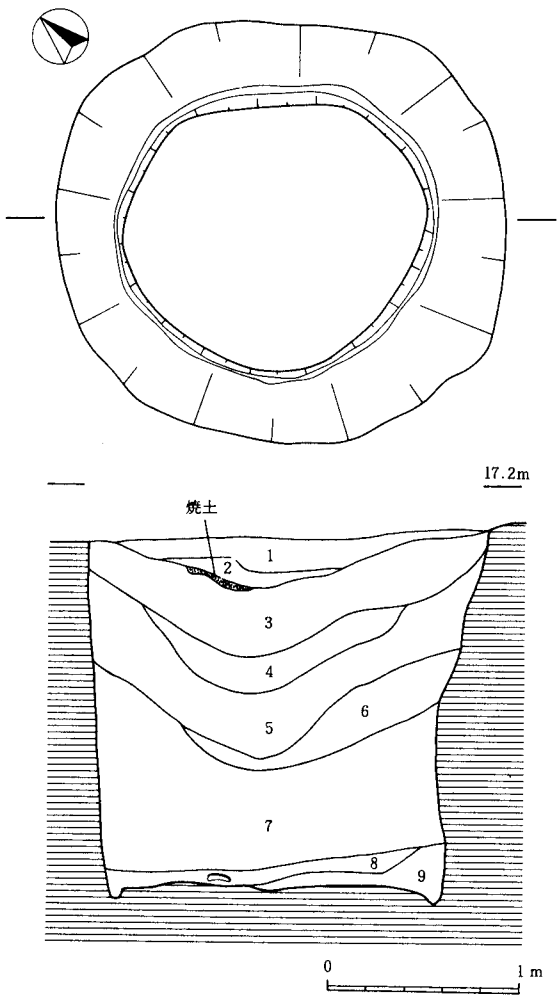
他の土坑との接合資料は、詳細は観察表に譲るが、10号、12号、14号、17号と多く、特に隣接する12号土坑とは未実測資料も含めて最も多い。

12号土坑（第34・35・74～76図、図版19）

遺構　南ａ群で１、３号土坑とグループをなす円形１ｂ類の土坑である。上面径2.1～2.2m、底面径1.6～1.7m、坑底面積2.09㎡、深さ1.9mを測る。坑底壁溝は幅約10cm、深さ５～10cmで全周する。埋土は坑底に10cm前後の土器・炭粒含有層があり、その直上には厚さ60～100cmの粘質の上層地山質土が堆積する。本層は埋め土と観察された。さらに上面に位置する地山質土３、５層は、下層地山の明黄灰色砂をブロック状に含むことから、同層が土坑周辺部にあり、それが流れ込んだ可能性もあるが、埋め土か自然堆積かの判断は難しい。

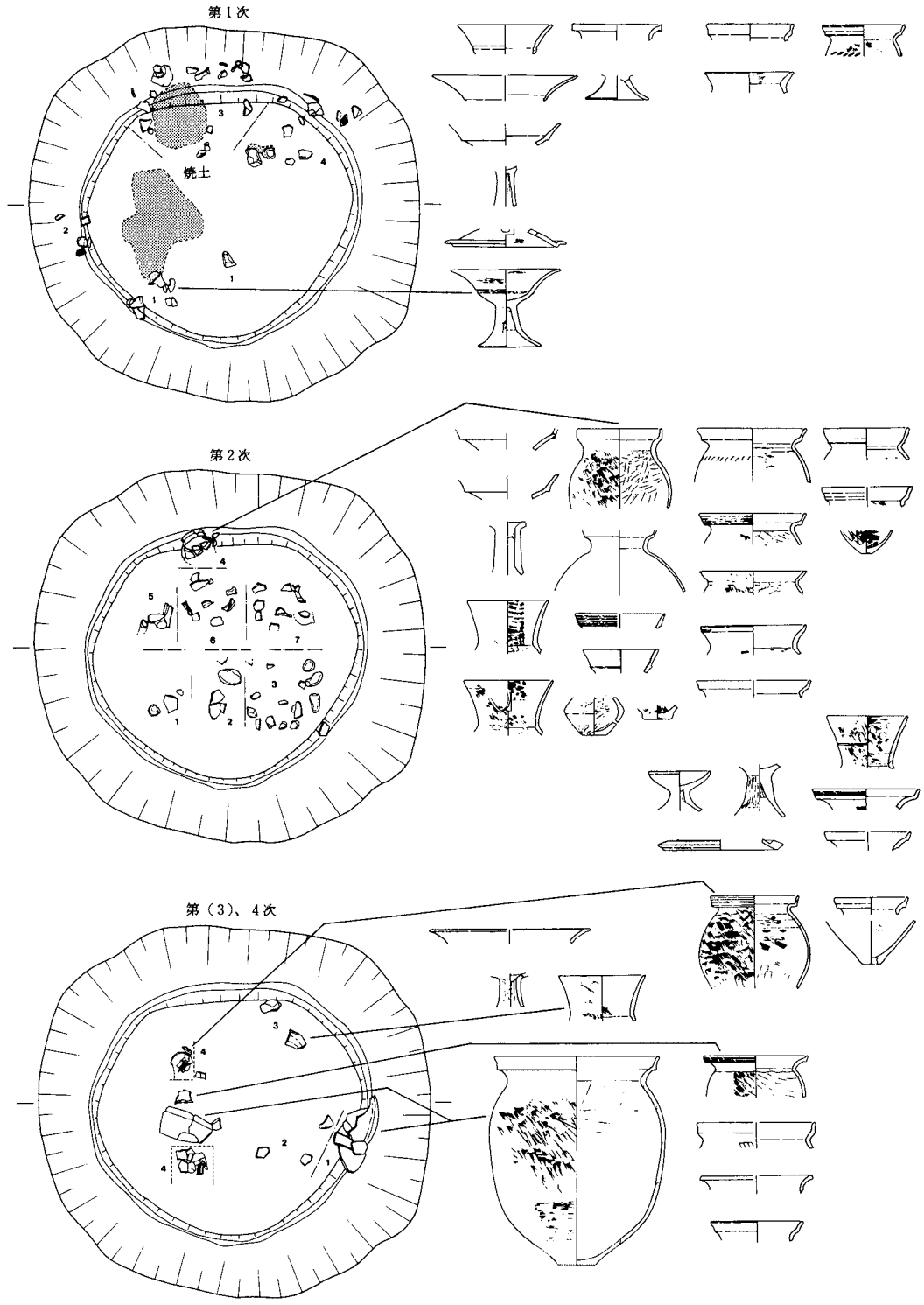
遺物　３次の地山質土の堆積と交互して土器・炭粒を多量に含む層が４層確認された。その土器群を上から、２層が第１次土器群、４層が第２次土器群、６層が第３次土器群、８層が第４次（坑底）土器群として取り上げた。第１次土器群は北～北東よりに小破片を主体に出土した。この下は焼土面となっており、ここで火の焚かれたことがわかる。第２次土器群は中央からやや東によって出土している。土器は160が比較的遺存が良かったほかは破片ばかりである。南側からは長10cm前後の礫がまとまって出土した（№２・３）。№３の１点は３号土坑第１次の５と接合した。ともに焼けた痕跡があり、それによって破砕したものと考えられる。その他、磨り面のある礫が１点ある。第３次土器群は北西よりから、167などが出土したが、量は少ない。第４次（坑底）土器群は、№１・４の大型甕172や№３の壺口頸部153などがある。その他、使用痕のある軽石が第１次土器群から１点(4.8ｇ)、第２次土器群から大形品１点（102.5ｇ）が出土した。

本土坑出土の土器は量は多いが、いずれも破片や使用不能の欠損品であり、塵芥処理用の穴として４次以上にわたり利用されたと考えられる。そのことを示すかのように、他土坑との接合資料は３号土坑とともに最も多く、３号、８号、10号、14号、20号土坑とで確認されている。



1．茶灰色土（２層の上面に多量の炭）
2．暗茶褐色土（炭、焼土ブロック多量）
　第１次土器群
3．暗黄褐色土（黄灰砂、黄褐粘の地山質土主体）
4．暗黄灰褐色土（炭多量）
　第２次土器群
5．暗黄褐色土（地山質主体、中央部はブロック状の塊が目立つ）壁よりはブロックをあまり含まない地山質土
6．暗黄灰褐色土（４層より明るい、炭多量）
　第３次土器群
7．暗黄褐色土（黄褐色粘の地山質主体）
8．暗灰褐色土（炭多量）
　第４次土器群
9．明黄褐色土（地山質土）

第34図　12号土坑実測図（１／40）



第35図　12号土坑遺物出土状況（１／40）

７号土坑（第36・77図、図版20）

遺構　南ａ群の円形２ｂ類の土坑で、上面径1.6～1.7m、底面径1.4m、坑底面積1.50㎡、深さ1.8mを測る。壁溝は幅10～20cm、深さ10～15cmで全周する。坑底面には上下の地山土の混合で堅くしまった貼床が認められた。埋土は、水平近く堆積した埋め込み土とみられる２・３・５層からなる。５層は上層地山の黄褐色粘質土からなり堅くしまっている。３層は上層地山を主体とするが黄灰色砂の下層地山も混じっている。３・５層間には少量の土器片や多量の炭粒を含む薄層があって、両者の間に若干の時間差があったことがわかる。２層は砂層の下層地山を主体とする層で、本土坑では埋土における「地山の転置現象」が顕著に認められる。壁の崩落も少なく比

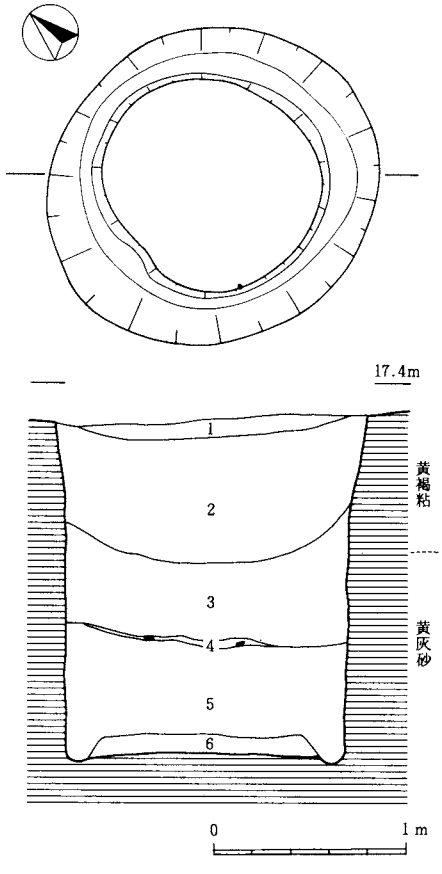
較的短期のうちに埋め戻されたと推定される。

遺物　廃棄の事情からもわかるように、出土遺物量は少なく、各層から小片が散発的に出土したにすぎない。２層出土品と９号土坑第１次土器群との接合資料がある。

８号土坑（第37・77図、図版20）

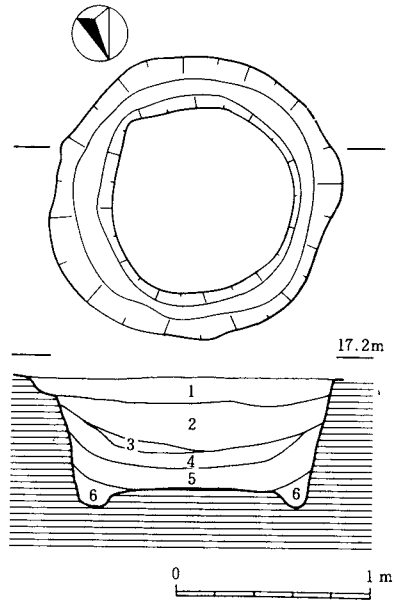
遺構　南ａ群の略円形４ａ類の土坑で、上面径1.5～1.6m、底面径1.2～1.3m、坑底面積1.28㎡、深さ0.6mを測る。上面には隣接する13号土坑に似た、1.3×2.0m、深さ0.1～0.2mの長方形土坑が重なっている（１層）。壁溝は幅約20cmで深さ10cm、全周する。埋土は下層が自然堆積、上層の２層が下層地山のブロックを多量含むもので埋め込み土とみられる。

遺物　土器は地山質土に挟まれた遺物・炭粒含有層の４層から破片が若干出土した。12号土坑３～４次床面出土品との接合資料が確認された。



1．茶灰色土
2．濁黄茶灰色土（砂質、黄灰砂の地山土主体、黄褐粘の地山ブロックも若干含む）
3．濁暗黄茶褐色土（黄褐粘の地山主体、黄灰砂は若干）
4．暗灰色土（粘性、多量の炭粒）
5．暗黄褐色土（粘性、黄褐粘の地山主体、かたくしまる）
6．明黄灰砂（地山）、黄褐粘（地山）、貼床層（かたくしまる）

第36図　７号土坑実測図（１／40）



1．茶褐色土（砂質）
2．黄茶褐色土（砂質、明黄灰色砂質地山土の数cmのブロックを多量含む）
3．暗灰色粘質土
4．暗褐色土（やや粘性、土器含有層）
5．暗黄褐色土（中央部は黄褐色粘の地山ブロック多量含む、左側の溝上面では明黄灰色）
6．濁暗褐色土（左：明黄灰色砂含む、右：黄褐色粘含む）

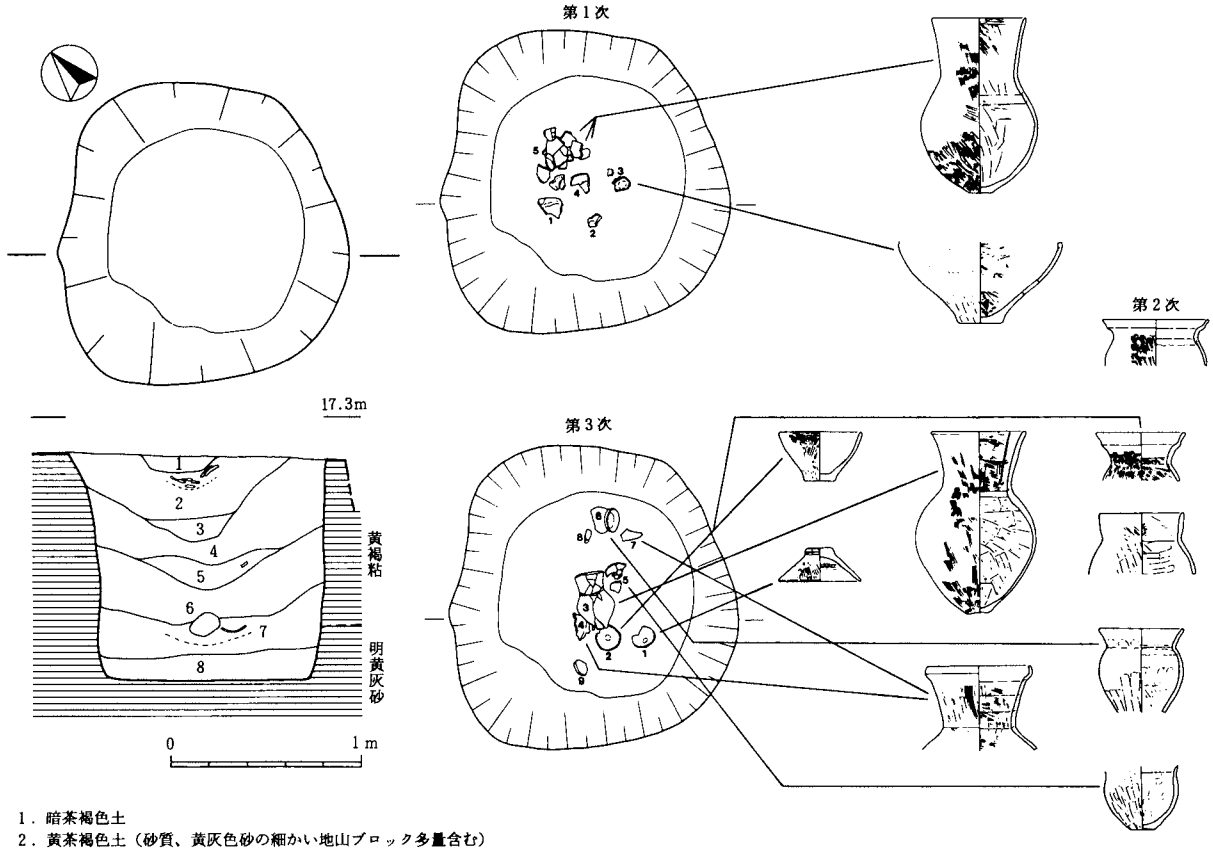
第37図　８号土坑実測図（１／40）

９号土坑（第38・39・78図、図版20・21）

遺構　南ａ群の略円形３ｂ類の土坑で、上面径1.5～1.6m、底面径1.0～1.1、坑底面積0.90㎡、深さ1.2mを測る。壁溝は検出できなかった。埋土は坑底上に堅くしまる水平な上層地山を主体とした層がある。貼床の可能性もある。その上部は、地山質土を含む層とへこみとなった中央部にたまった多量の炭粒含有層が交互に堆積する。２・４層には下層地山の細かいブロックを多量含む。６・７層は炭粒を一定量含むことから壁の崩落等により順次埋積したものと考えられる。２・４層は下層地山のブロックが細かい点や堆積がスリ鉢状となることから自然な埋没の比重が高いと考えた。地山質土の評価は難しい面があるが、本土坑と12号土坑の埋没状況は類似点が非常に多い。

遺物　土器類は各段階の中央部のへこみから出土しており、２層上面が第１次土器群、６層上面が第２次土器群、７層が第３次土器群として取り上げた。４層上面の３層からは小片は出土したがまとまった土器群はなかった。第２次土器群についても破片は小さい。第１次土器群は壺195・198の大形破片が出土したが、198は復元しても欠損部が存在する。第３次土器群は、ほぼ完形の壺197や鉢191・蓋193など、いずれも器形のわかる状態で坑内に広がりをもって出土した。その他、使用痕のある軽石（10.5ｇ）や自然礫が出土した。

他土坑との接合資料は、１次－３と７号土坑２層、１次－５と10号土坑上層がある。



１．暗茶褐色土
２．黄茶褐色土（砂質、黄灰色砂の細かい地山ブロック多量含む）
　上面に第１次土器群
３．２層より暗く、多量の炭粒含む
４．黄褐色土（砂質、２層と同様の地山ブロック含む）
５．４層より暗く、炭多量含む
　第２次土器群
６．暗黄褐色土（炭若干含む）
７．暗灰黄褐色土（炭若干）
　第３次土器群
８．黄褐色粘質の地山質土（かたくしまる、貼床？）

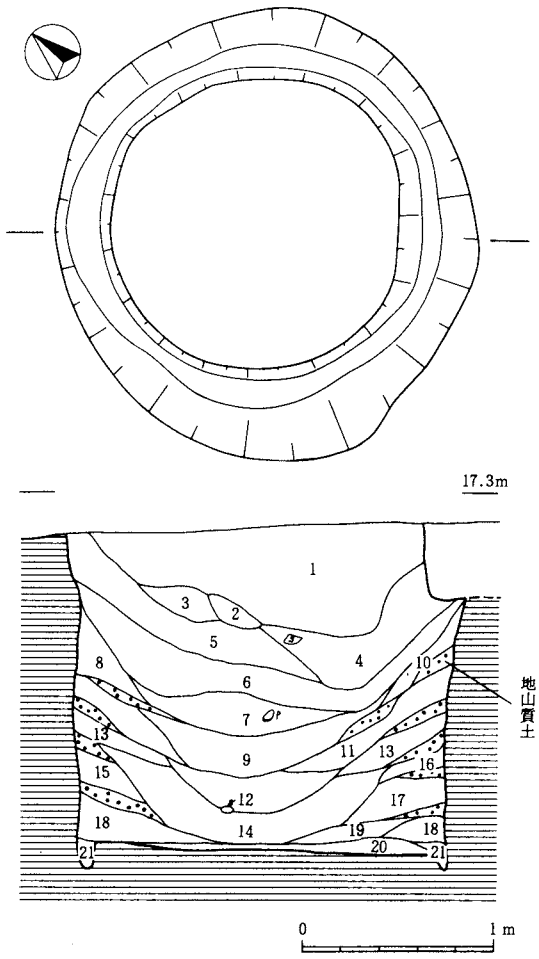
第38図　９号土坑実測図（１／40）

第39図　９号土坑遺物出土状況（１／40）

10号土坑（第40・42・79図、図版21）

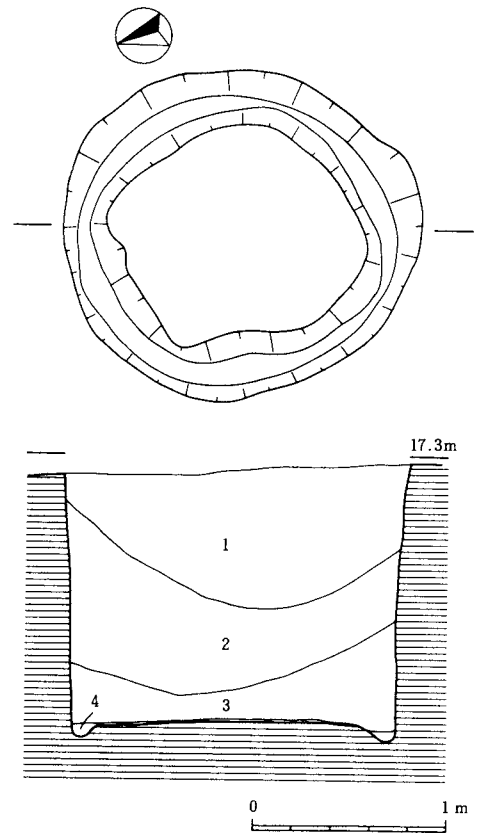
遺構　南ａ群の円形１ａ類の土坑で、上面径2.1～2.2m、底面径1.9m、坑底面積2.86㎡、深さ1.7mを測る。壁溝は幅10～20cm、深さ15cm前後で全周する。坑底面には上下層の地山土混じりの貼床が検出された。その上部－７層までは軟質な壁の崩落土や流入土が細かく堆積している。さらに上部４～６層は多量の土器・炭粒の含有層で、ここまでは自然堆積層とみられる。１層は下層地山ブロックを多量含む層で埋め土かとみられる。

遺物　土器類は４層と６層に多く、坑底からも出土した。６層中央部にまとまっていたものは第１次土器群として取り上げた。215は底部を欠損するのみで他は完存している。坑底中央部からは甕蓋の転用痕のある高杯脚部205が出土した。４層から台石状の自然礫、９層から磨り面のある台石が出土した（ともに花崗岩質岩）。４～６層出土の214の壺が、９号土坑１次－５の破片と接合したほか、３号、12号土坑との接合資料がある。



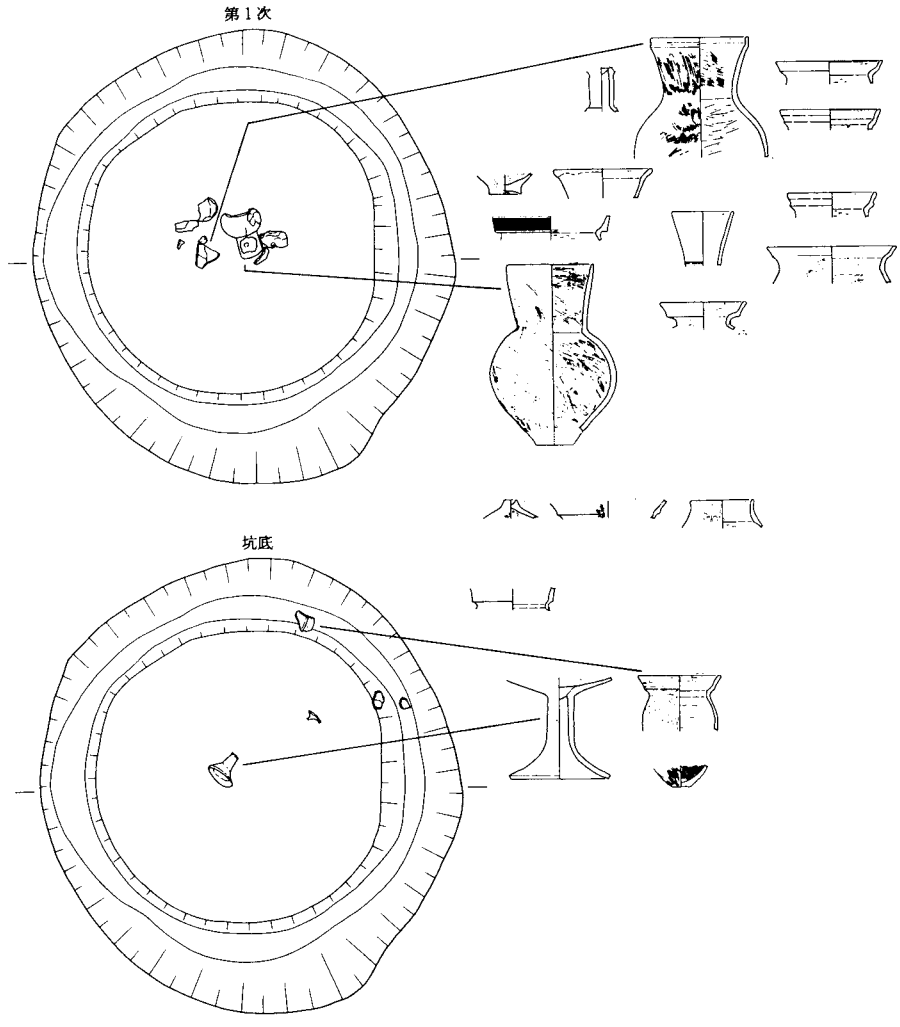
1．濁黄茶灰色土（黄灰砂の地山ブロック多量）
2．暗灰色土
3．暗灰色土＋黄灰色砂の地山ブロック
4．茶褐色土（暗いが、６層より明るい、土器多く含む）
5．濁暗黄茶灰色土
6．暗茶褐色土（土器多い）
第１次土器群
7．黄茶褐色土｜
9．黄褐色土　｜１～２cmの黄褐色粘の硬い地山ブロックを
12．暗黄褐色土｜主体とする。層はしまりなく軟質→流入土か
14．暗茶褐色土｜
8．10．11．13．15～17　濁茶褐色土（黄褐色粘の地山土混）
18．茶灰色土（黄褐色粘の地山土混）
19．明黄茶褐色土（地山質土主体）
20．明黄褐色粘と明黄灰色砂（ともに地山質土）の混合→貼床
21．茶灰色土（砂質）

第40図　10号土坑実測図（１／40）



1．濁黄褐色土（砂質、数cmの明黄灰砂の地山ブロック多量含む）
2．　〃　（１との境は漸移的、砂質の地山ブロックあまり含まず、粘質土ブロック若干含む）
3．濁暗黄褐色土（粘質の地山ブロック主体、しまりなし）
4．黒色炭灰層（有機物の炭化）

第41図　34号土坑実測図（１／40）



第42図　10号土坑遺物出土状況（１／40）

34号土坑（第41・80図）

遺構　南ａ群の東側に位置する円形２ａ類の土坑で、上面径1.8～1.9m、底面径1.6～1.7m、坑底面積1.97㎡、深さ1.3～1.4mを測る。壁溝は幅10～20cm、深さ10cmで全周する。坑底面には藁状の敷物とみられるものが炭化して一面に貼り付いていた。腐植土層境に堆積する炭粒層とは明らかに違うと観察された。藁灰状のものを意識的に敷いたか、敷藁が廃棄後に炭化したのであろう。埋土は下の方に上層地山、上の方に下層地山といった転置が顕著であり、かなり短期に埋め戻された可能性がある（３層は流入土か？）。地山質土の層の入り込みは北～東側が高い傾向にあり、主に当該方向より土が入ったと推定される。

遺物　遺物量は非常に少なく、土器小片が２－３層境付近ほかから散発的に出土したにすぎない。他土坑との接合資料は確認されなかった。

35号土坑（第43・80図、図版22）

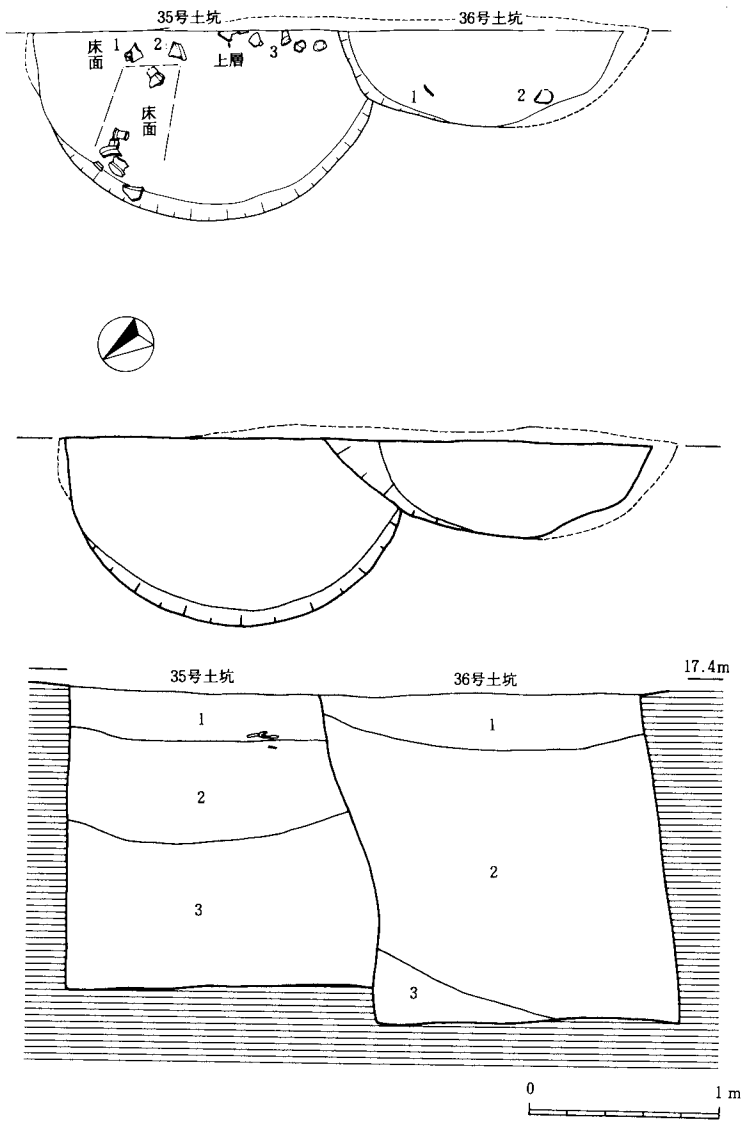
遺構　南ａ群の東端に位置し、36号土坑に先行して造られている。円形１ａ類で、上面径1.8～1.9m、底面径1.7m、推定坑底面積約2.7㎡、深さ1.6mを測る。壁溝は検出されなかった。埋土は２・３層が埋め込み土と推定される。１層底には部分的に焼土面があり炭化物が多量認められた。

遺物　土器群は焼土面上の１層と坑底面近くから比較的まとまって出土している。焼土面上からは火熱変色した235の甕や磨り面、敲打痕のある砥石(台石)が焼けた状態で出土した。他土坑との接合資料は確認していない。

36号土坑（第43・80図）

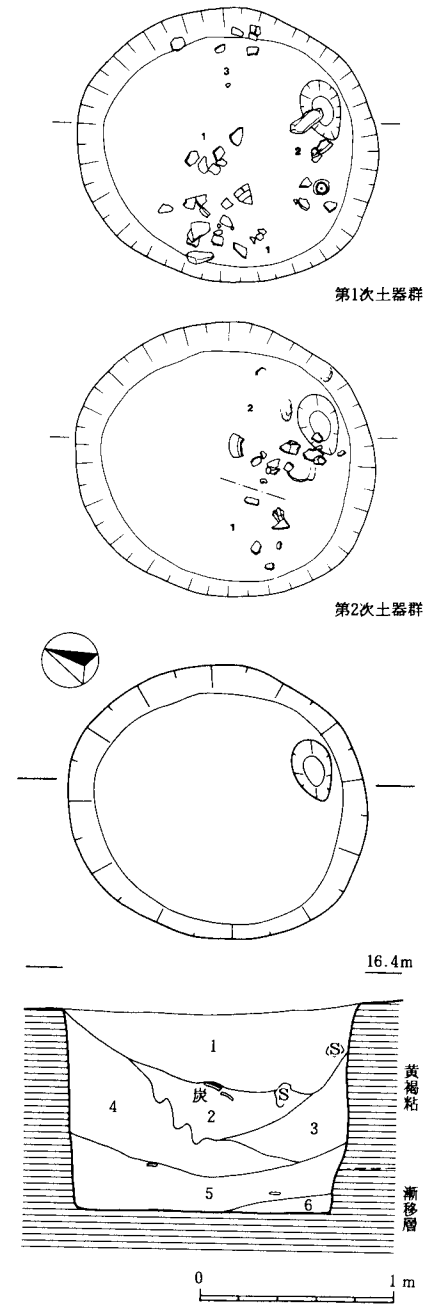
遺構　35号土坑を切って構築された円形１ａ類とみられる土坑で、規模は推定で上面径約2.0m、底面径1.8m、深さ1.7～1.8mを測る。壁溝は検出されなかった。埋土は35号土坑に類似した埋め込み土とみられる。廃棄土坑を切っているため北側の壁の崩れが大きく、３層は35号土坑埋土の流入土であろう。

遺物　土器類は１層を中心に破片が散発的に出土したにすぎない。他土坑との接合資料は確認していない。条痕をもつ土器片が１点出土した。その他炭化したモモの種子かとみられるものがある。



35号土坑
1．淡褐色土（１層底に土器片含む、２層境に炭薄層）
2．暗黄褐色土（地山質土含む）
3．明黄褐色土（砂質の地山質土多量含む）
土器群
36号土坑
1．暗褐色土（土器片少量含む）
2．淡褐色土（粘質の地山質土含む）
3．明黄褐色土（35土坑３層に類似）

第43図　35・36号土坑実測図（１／40）



1．黄茶褐色土（砂質、黄褐色砂の細かい地山ブロック多量）
第１次土器群
2．暗茶褐色土（土器、炭多量）
第２次土器群
3．暗黄茶褐色土（細かな地山質土多量）
4．黄褐色土（粘質、やや濁れた地山質土）
5．濁暗茶褐色土（土器含む、粘質の地山ブロック若干）
6．濁黄褐色土（粘砂の地山質土）

第44図　14号土坑実測図（１／40）

14号土坑（第44・81図、図版23）

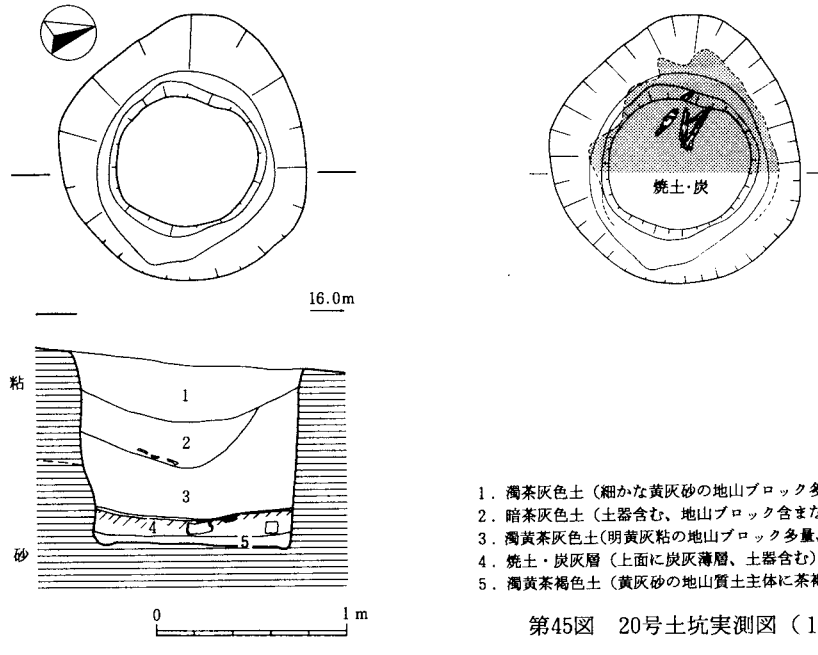
遺構　３号土坑の北、南ｂ群に位置する円形３ｂ類の土坑で、上面径1.5m、底面径1.3m、坑底面積1.25㎡、深さ1.1mを測る。土坑上面が削平されており、本来はもう少し深かったとみられる。壁溝は検出されなかったが、南東に浅いピット状のへこみがあった。埋土は、５層が土器含有層で、３・４層が壁の崩落等による地山質土の流入土とみられ、主に北側から埋まっている。２層は土器・炭粒を多量に含む。

遺物　１層上位と２層から比較的破片の大きい土器群が出土し、それぞれ第１次土器群、第２次土器群とした。第１次から長15cm前後の礫が２点、床面から255の磨石が出土した。その他使用痕のある軽石（5.8ｇ）が１点出土した。他土坑との接合資料は248が南ａ群の12号土坑第２次と接合したほか、３号土坑でも確認された。

20号土坑（第45・82図、図版23）

遺構　南ｂ群の最北に位置する円形３ｂ類の土坑で、上面径1.2～1.3m、底面径1.0m、坑底面積0.72㎡、深さ1.0mを測る。上面は若干削平されている。壁溝は５cm程度の浅いもので明確な溝とはいえない。埋土は、坑底に５cmほどの地山質土混じりの５層があり、その上に焼土、炭混じりの４層、さらに上面は炭灰薄層が覆っている。焼土面は４層上半部で、一部は土坑壁にまで達し、大型土坑中では最もよく焼け、遺存した例である。３層は上層地山を主体とした流入土とみられ、14号土坑と同様、主として北側から埋まっている。２層は下面を中心に比較的多く土器を含む黒っぽい土で、流入土の堆積に一時的な休止があったことがわかる。

遺物　土器は２層下面を中心に１層～４層まで破片ばかりであるがかなり出土したほか、長10～15cm程の礫が６個あった。他土坑との接合資料は、12号、17号土坑で確認された。



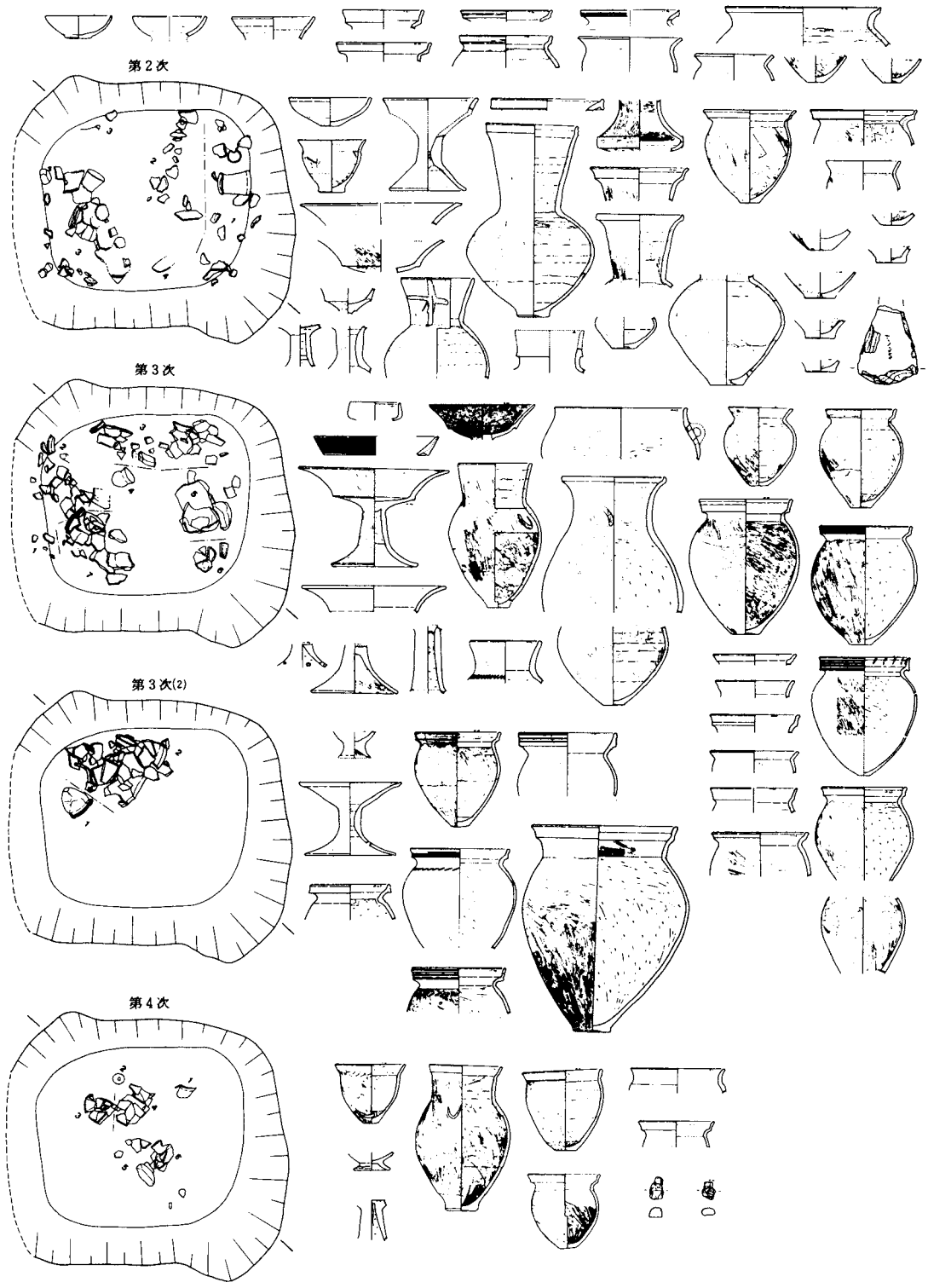
1．濁茶灰色土（細かな黄灰砂の地山ブロック多量）
2．暗茶灰色土（土器含む、地山ブロック含まない）
3．濁黄茶灰色土（明黄灰粘の地山ブロック多量、黄灰砂の小ブロック若干）
4．焼土・炭灰層（上面に炭灰薄層、土器含む）
5．濁黄茶褐色土（黄灰砂の地山質土主体に茶褐色土混じる）

第45図　20号土坑実測図（１／40）

17号土坑（第46・47・83～88図、図版24・25）

遺構　南ｂ群にある唯一の方形土坑で、最も多量の土器を出土したものである。規模は上面幅1.5×1.8m、底面幅1.1×1.2m、坑底面積1.26㎡、深さ1.2mを測る。壁溝は検出されなかった。埋土は自然堆積とみられ、３～５層は主に北よりから埋まっている。埋土の傾斜以上に土器群が南西による傾向があり、主に当該方向から投棄された可能性がある。南接の円筒形の土坑は本土坑より新しい。

遺物　１層からは小片を主体とした土器が出土し、第１次土器群（上層）として取り上げた。３層からは大量の土器が厚さ約50～60cmにわたって出土、上面から第２次、第３次、第３次図下(2)、第４次土器群として取り上



第46図　17号土坑遺物出土状況（１／40）

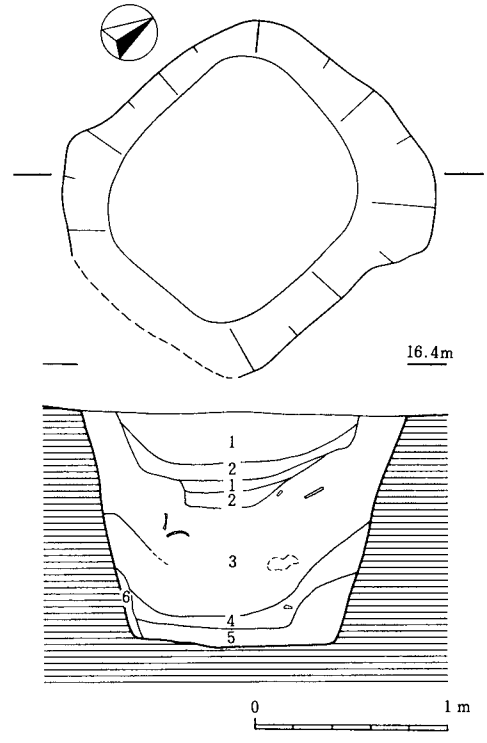
げたが、各土器群は連続的であり、本来は一括廃棄にかかるものと観察された。完形に復元できるものや大形破片を主体とするものが特徴である。

石類は第１次～第４次にかけて、長10～15cm程の自然礫が６点出土し、ほかに被熱痕のある35号土坑出土例に似た砥石（花崗岩）１点がある。また第２次土器群からは打製石斧349が出土した。刃部付近は表裏、側縁の剥離面とも細かな線状痕と光沢が顕著である。刃部の剥離面の多くは同様の使用痕を持たず、一定期間使用後に再生

されたものとみられる。石材は、Ｈ－47区出土の491とともに、手取川扇状地～金沢平野の遺跡に通有の火山礫凝灰岩である。石材自体は手取川扇状地産とされることから、同所の製作遺跡からもたらされた広域流通品の可能性が強い。所属時期は不明であるが、少量の破片が出土した条痕？を有する土器502の段階、ないしは本土坑の時期であろう。

土器・石器のほかに、347・348に示したような焼土塊が４点出土した。不定型な粘土塊の焼けたものとみられ、図化した３号、14号、32号、44号土坑のほかにも20号、35号、41号、45号等、数多くの土坑から出土した。発色等は土器と類似するが、砂粒が少なく手に持った感じが軽い。土器生産に関連した遺物であろうか。

他土坑との接合資料は、３号土坑１・２次と20号土坑２・３層で確認された。



１．茶灰色土（炭化物若干、砂質）
　　第１次土器群
２．黄灰色砂質土（地山質土主体に１層混じる）
３．暗茶褐色土（砂質、多量の土器含む）
　　第２～４次土器群

第47図　17号土坑実測図（１／40）

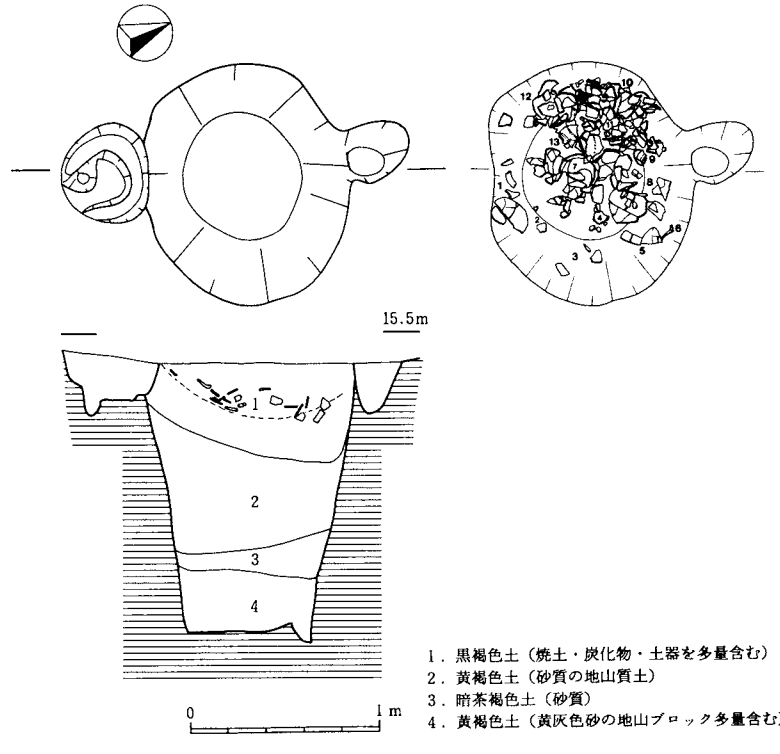
32号土坑（第48・89～91図、図版26）

遺構　分布上は仮に北群としたが、南ｂ群との関連で捉える見方もある。深さはＩ類であるが、坑底が小さいため容量は大型土坑中最も小さく円形３ｃ類に属する。上面径1.3m、底面径0.6～0.7m、坑底面積0.34㎡、深さ1.5mを測る。壁溝は不明確であったが、坑底の周縁はやや深くなっている。埋土は３層が腐植土系の土層、２層は埋め込み土と観察され、南側から主に埋まっている。

遺物　土器群は１層上半から焼土・炭化物とともに集中的に出土した。土坑廃棄後のへこみに西側から投棄されたとみられる。完存品はないが、復元可能な状態で出土し、ほとんどの土器が被熱変色を受けている。焼土はブロック状で面的な広がりは認められなかった。埋土中からは使用痕のある軽石（39.0ｇ）、１層から焼土塊が出土している。

廃棄は一時性が強いと推定されるが、土器の器種構成は、類似形態が複数存在するなど、多くの点で17号土坑の土器群との共通性を窺うことができる。本土坑は壺の型式に特徴がある。

他土坑との接合資料は確認できなかった。



１．黒褐色土（焼土・炭化物・土器を多量含む）
２．黄褐色土（砂質の地山質土）
３．暗茶褐色土（砂質）
４．黄褐色土（黄灰色砂の地山ブロック多量含む）

第48図　32号土坑実測図（１／40）

98号土坑（第49・93図）

遺構　Ｈ－43区の調査区壁際で東半部のみを調査した。深さは0.6ｍと浅く、壁溝はない。土坑の分類上は大型土坑としたが、形態や埋土等から積極的にその範ちゅうに含める要素はない。

遺物　小片が若干量出土したが時期を特定できるものはない。46号土坑との接合資料がある。

45号土坑（第50・95図）

遺構　略長方形３ａ類で、規模は上面幅1.4×1.7ｍ、底面幅1.3×1.5ｍ、坑底面積1.65㎡、深さ0.9ｍを測る。壁溝は検出されず、埋土は一括で埋め込まれたものと観察された。

遺物　土器は１～３層で小片が若干量出土したにすぎない。土器の他に焼けた粘土塊が出土している。

100号土坑（第51図、図版27）

遺構　円形２ｂ類で、上面径1.8～1.9ｍ、底面径1.4～1.5ｍ、坑底面積1.74㎡、深さ1.4ｍを測る。上面は30～40㎝程、１号竪穴住居跡により削平されている。壁溝は幅15～30㎝、深さ約15㎝で全周する。埋土は１、３、５、６が埋め込み土とみられ、南東よりから流れ込んでいる。

遺物　土器は破片が若干量出土したにすぎない。１号竪穴住居の調査中に誤って本土坑を掘り抜き、遺物は１号住土坑として取り上げられている。出土状況の詳細は不明である。43・106・108号土坑出土の高杯370・407と同一個体の口縁部片がある。

106号土坑（第52図、図版27）

遺構　円形２ｂ類の土坑で、２号竪穴住居跡を切って構築される。上面径1.6～1.8ｍ、底面径1.2～1.3ｍ、坑底面積1.40㎡、深さ1.7ｍを測る。北群中では最も深い。壁溝は幅20～30㎝、深さ10～15㎝で全周する。埋土は７層、３層などが埋め込み土とみられるが、７層堆積後、掘削し直して再利用した形跡がある。

遺物　土器は小片が少量出土したにすぎない。43・108号土坑出土高杯370・407と接合する破片が出土している。

108号土坑（第53・92図、図版27）

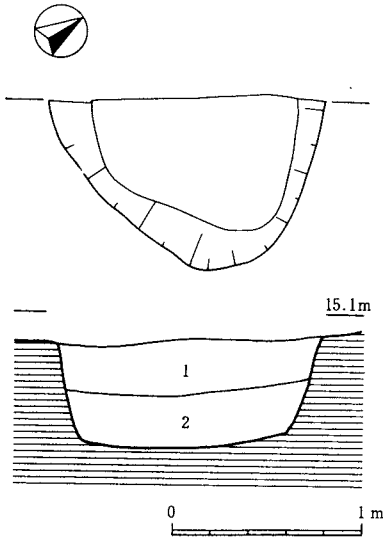
遺構　円形３ｂ(c)類の土坑で、109号土坑に先行して作られている。上面径1.4～1.5ｍ、底面径0.9～1.1ｍ、坑底面積0.8㎡、深さ1.5ｍを測る。壁溝は幅10～15㎝、深さ５㎝程の浅いもので全周する。埋土は自然堆積層が主体と観察され、南側からの流入傾向が看取できる。検出面の１層では小さな焼土面、層中には焼土粒が確認された。４・５層と７層の境には炭灰薄層を挟んでいる。

遺物　土器は２－３層境で、壺373、甕377が器形を保った状態で出土した。43・106号土坑などとの接合資料がある。

43号土坑（第54・95図、図版28）

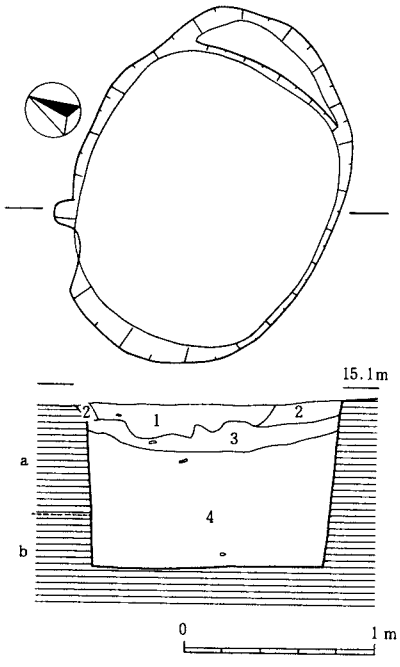
遺構　略（隅円）方形２ｂ類の土坑で、上面幅1.7ｍ、底面幅1.4ｍ、坑底面積1.89㎡、深さ1.6ｍを測る。壁溝は幅15㎝前後、深さ10㎝で全周する。南側コーナーには、底面より40㎝上がったところで、40×80㎝の横穴が検出され、奥行70㎝までを確認したが、さらに伸びていた。埋土は２、４～10層が地山質土で、細礫混じりの２・５・６層と粘砂の７～10層とで上下地山の転置現象が認められる。埋土は北西からの流入傾向がある。

遺物　土器は１・２層や７層以下から小片が若干量出土した。407の高杯は100・106・108号土坑から破片が出土し、その他73号土坑との接合資料がある。



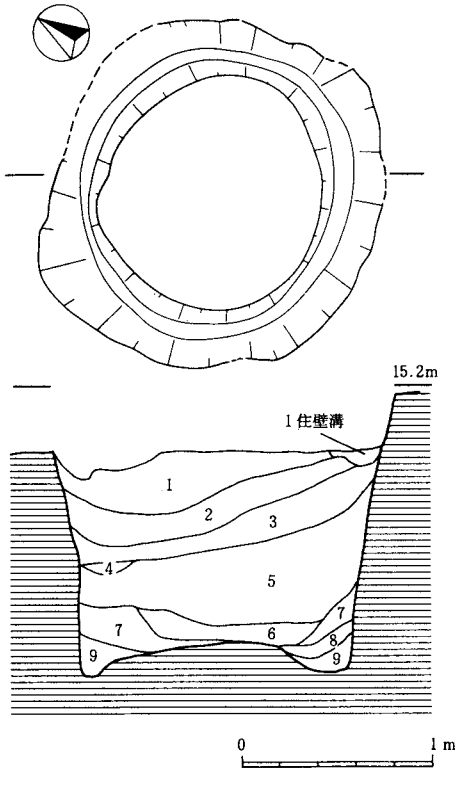
1．淡乳褐色土（地山質土を多量、遺物・炭粒含む層）
2．暗茶褐色土（遺物、炭粒など少量含む層）

第49図　98号土坑実測図（１／40）



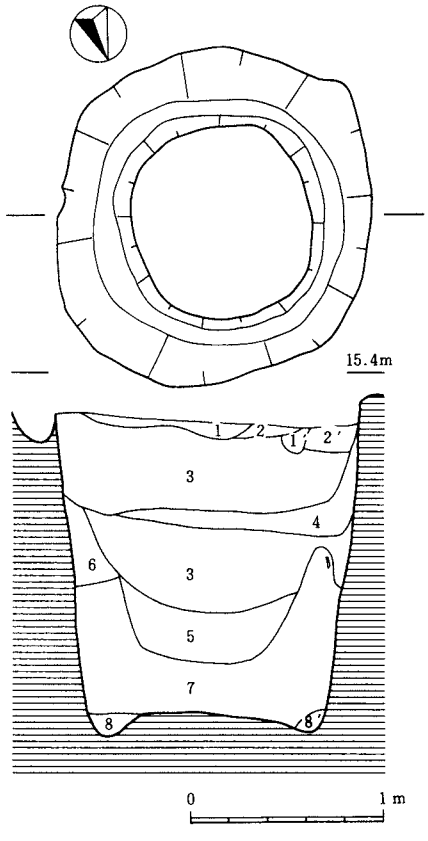
1．黄白色粘質土主体にａ混じる。炭化物や褐色土はほとんど含まない
2．茶褐色土を主体にａやｂをブロック状に含む
3．暗茶褐色土（２より黒い、地山質土を少し含むがブロック状ではなく細粒となる。炭化物含む）
4．２と同じ
a．赤褐色土（粘質）
b．黄白色土（粘質）

第50図　45号土坑実測図（１／40）



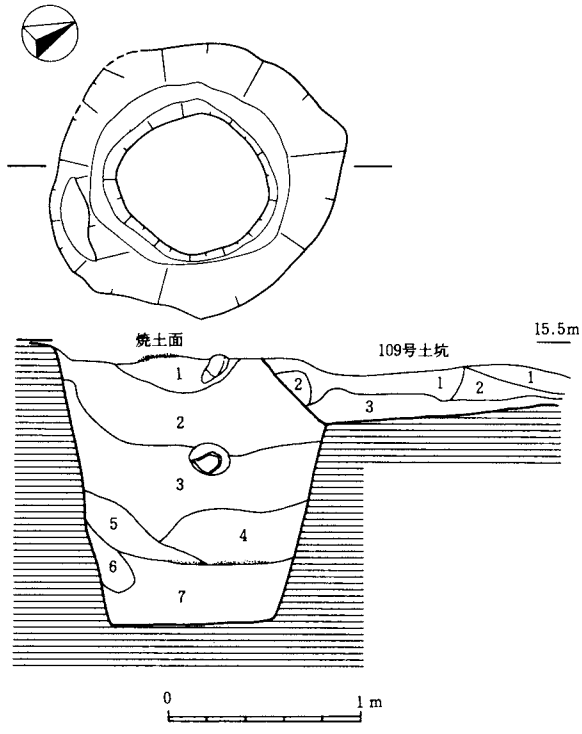
1．黄褐色土（粘質の地山質土）
2．茶褐色土（粘質の地山ブロック含む）
3．濁乳灰色砂礫層（地山ブロック含む）
4．黒褐色土
5．濁茶灰色土（乳灰色地山ブロック多量）
6．濁乳灰色砂質土(地山ブロック主体、３層のように小砂利は含まない)
7．茶褐色土（地山ブロック含む）
8．乳灰色土（粘質、地山質土）
9．暗茶褐色土（粘質）

第51図　100号土坑実測図（１／40）



1．暗茶褐色土（１′は地山ブロック含む）
2．茶褐色土（地山粒含む、２′は地山の量多く小礫含む）
3．濁黄灰色土（礫・地山ブロック、黄白色粘土を含む）
4．濁暗茶褐色土（地山ブロック、礫を少し含む）
5．濁暗黄褐色土（３より暗い、礫含む）
6．淡暗黄褐色土（色調均一、粗砂含む）
7．暗青灰色土（砂質で、コブシ大の礫が混じる）
8．茶褐色土（８′黒灰色土）

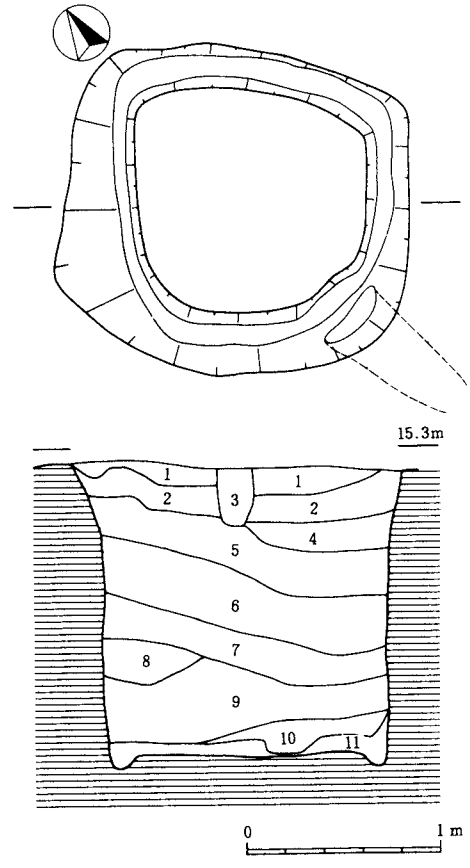
第52図　106号土坑実測図（１／40）



1．暗茶褐色土（焼土粒・炭化粒含む）
2．茶褐色土（小礫・炭化物含む）
3．暗茶褐色土
4．濁黄茶褐色土
5．暗黄灰色土
6．暗青灰色土
7．濁暗黄茶褐色土（４、５層境に炭化物薄層）

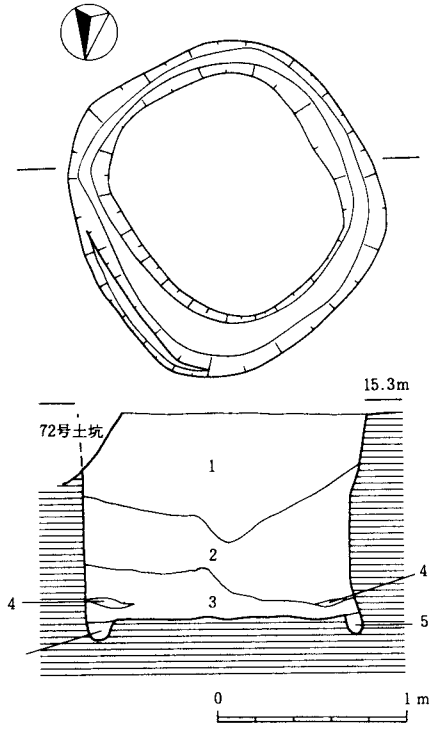
（109号土坑）
1．濁茶褐色土（地山ブロック多量）
2．濁黄褐色土（　〃　主体）
3．濁暗茶褐土（　〃　多量）

第53図　108号土坑実測図（１／40）



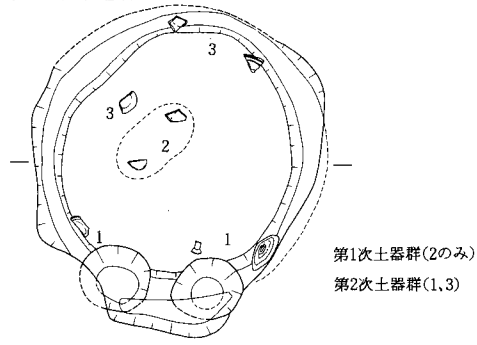
1．褐色土（粘砂）
2．濁黄褐色土（土器細片小量、地山ブロック含む）
3．濁灰色土（ハサ穴）
4．褐色土（１と同じ）
5．濁黄色土（地山ブロック、細礫含む）
6．濁灰黄色土（土器片、細礫含む）
7．黄褐色土（粘砂）
8．濁黄色土（７層より暗い、粘砂）
10．灰黄色粘土
11．褐色土（粘質、１層、４層より暗い）

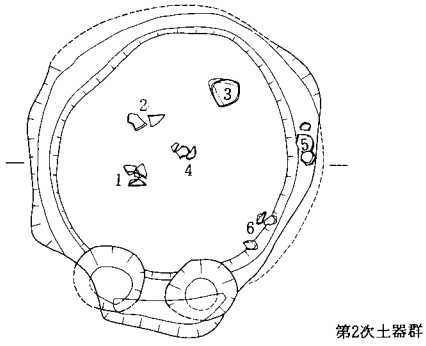
第54図　43号土坑実測図（１／40）

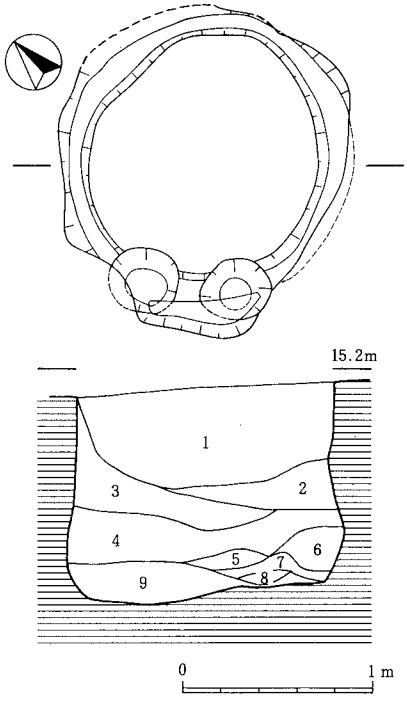


1．淡黄褐色土（礫混じりの地山土混入）
2．明黄褐色土（粘質の地山ブロック混入）
3．暗黄褐色土（地山ブロック混入）
4．黒色炭灰層
5．暗茶褐色土（地山ブロック小量混入）

第55図　73号土坑実測図（１／40）

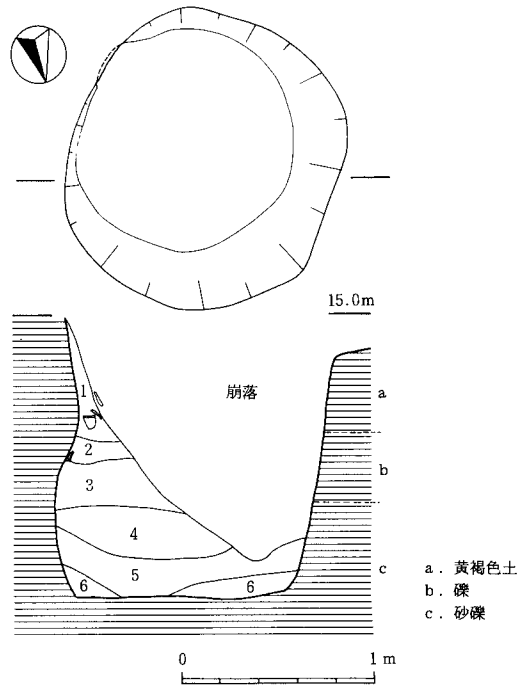






1．褐色粘質土（炭粒、土器片多い）
　　第１次土器群
2．濁黄灰色土（粘質）
3．黄色土（粘質地山ブロック）
4．褐色土（粘質、１層より炭粒少ない、大形土器含む）
　　第２次土器群
5．黄褐色土（粘質、炭粒多い）
6．２層と同じ
7．褐色土（４層よりやや明るい）
8．２層と同じ
9．灰褐色土（粘質）

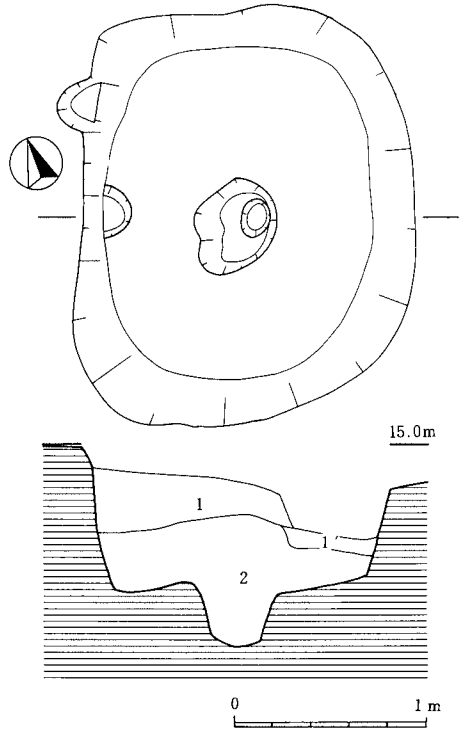
第56図　41号土坑実測図（１／40）



a．黄褐色土
b．礫
c．砂礫

1．暗茶褐色土（わずかに地山質土、炭粒含む）
2．　〃　（１に地山ブロック混入）
3．　〃　（地山質土あまり含まず、礫混じりで砂質）
4．　〃　（地山質土をブロック状に含み、砂質）
5．黄褐色土（黄褐色土の地山ブロック主体で、わずかに茶褐色に濁る）
6．茶褐色土（地山質土が混じり、粘性でやわらかい）

第57図　44号土坑実測図（１／40）



1．暗黄褐色土（地山質土を含み、ややかたい粘質土・炭粒含まれる）
1′.明黄褐色土（地山質土混入、１層よりわずかにやわらかい粘質土状）
2．乳灰色土（砂礫層、大小の石多量に混入し遺物をほとんど含まない層）

第58図　49号土坑実測図（１／40）

73号土坑（第55・93図、図版27）

遺構　略（隅円）方形３ａ類の土坑で、上面幅1.6m、底面幅1.4×1.5m、坑底面積1.76㎡、深さ1.1mを測る。形態的には隣接する43号土坑との類似性が強い。壁溝は幅、深さとも10～15cmで全周する。埋土は地山質の埋め込み土とみられ、上下地山の転置が認められる。坑底近くの壁溝上面にはレンズ状に黒色炭灰層が挟まっている。

遺物　土器は１層などから破片が少量出土し、43号土坑との接合資料が確認されている。

41号土坑（第56・94、図版28）

遺構　円形３ａ類の土坑で、上面径1.4～1.5m、底面径1.4m、坑底面積1.82㎡、深さ1.1～1.2mを測る。壁溝は幅10～15cm、深さ５cm程で全周する。南西の壁溝中には径約20cmの小ピットが２個並んで検出された。埋土は自然堆積と観察された。

遺物　腐植土系の１層、４層から大型破片を含んだ土器群が検出された。390は44号・49号と391は44号土坑の破片と接合している。

44号土坑（第57・95図、図版28）

遺構　円形３ｂ類の土坑で、上面径1.4～1.6m、底面径1.1～1.2m、坑底面積1.04㎡、深さ1.5mを測る。壁溝は検出されなかった。埋土は、５層が壁の崩落土かとみられる地山質土で、他は暗茶褐色土を主体とする自然堆積層と観察された。

遺物　上層を主体に比較的大きめの破片が一定量出土した。41号、46号、49号土坑との接合資料がある。

49号土坑（第58・97図、図版28）

遺構　略長方形３ａ類の土坑で、上面幅1.6×2.1m、底面幅1.4×1.7m、坑底面積2.11㎡、深さ0.8mを測る。壁溝は検出されなかったが、中央に深さ約30cmのピット、西壁よりに浅いくぼみがあった。下層は砂礫層が充填しており、本土坑壁には当該層がないことから別土坑の掘削排土と推定された。

遺物　土器は上層から破片が少量出土し、41号、43号、46号土坑との接合資料がある。

47号土坑（第59・96・97図、図版28）

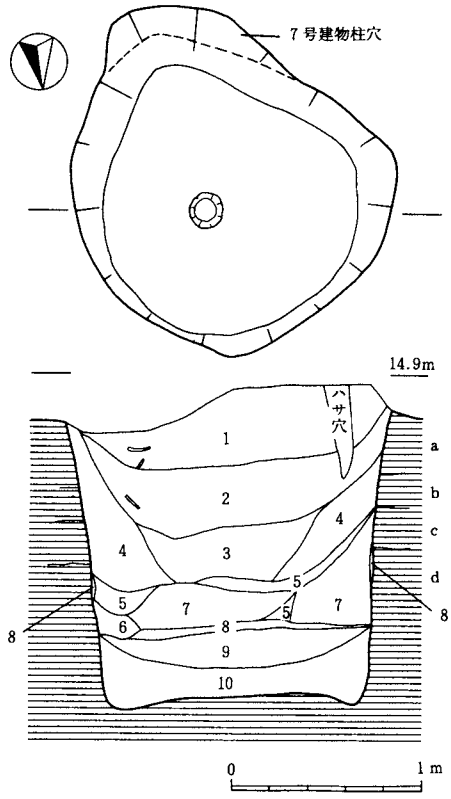
遺構　略方形２ｂ類の土坑で、上面幅1.6m、底面幅1.3m、坑底面積1.44㎡、深さ1.6～1.7mを測る。坑底の壁際は深さ５cm程の浅いへこみとなって全周する。中央には深さ８cmの小ピットが検出された。埋土は自然堆積と観察されたが、９層上面は水平で、ここを坑底として土坑が再利用された段階があったと推定される。その上面には炭化物薄層（８層）があり、６・７層埋積後、再び炭化物・焼土粒を多量に含む層（５層）が入り込んでいる。

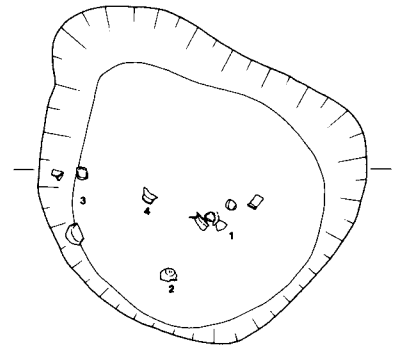
遺物　土器群は１層を主体に出土し、その他２～３層にかけて比較的大形破片があった。土器群とともに、長25cmと10cmの自然礫（使用痕不明）が出土した。48号、50号土坑との接合資料がある。

104号土坑（第60図、図版29）

遺構　大型土坑群の北端部付近に位置する円形２ｂ類の土坑で、上面径1.6～1.7m、底面径1.3～1.4m、坑底面積1.82㎡、深さ推定1.5m（現況1.1m）を測る。明確な壁溝は検出されなかったが、坑底周縁は中央部よりも若干深く掘削されている。埋土は、下半の８層が上層地山の埋め込み土とみられ、１～６層についても地山土をブロック状に含むもので埋め込み土の可能性がある。土層は東側からの流入傾向がある。

遺物　上層が削平されたせいもあり、出土遺物は極少量の土器片があるのみである。

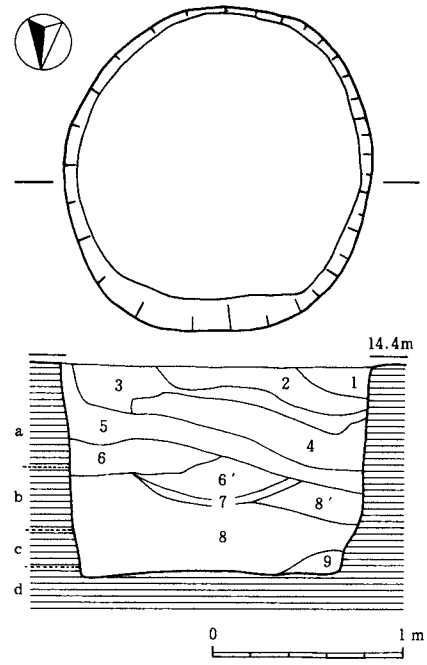




1．暗茶褐色土（土器、炭化物、地山質土含む砂質）
　土器群
2．暗茶褐色土（粘質、　　〃　　）
3．黒褐色土　（砂質、　　〃　　）
4．暗茶褐色土（〃、地山粘質土ブロック含む）
5．暗茶褐色土（炭化物・焼土多量含む）
6．　〃　（地山質土ブロック含む）
7．濁明茶灰色土（暗茶褐色と地山質土の混合）
8．黒色炭化物層
9．明茶褐色土（粘質と砂質の地山土の混合）
10．茶褐色土（粘質、砂質の他山ブロック含む）

a．赤灰色粘質土
b．乳灰色砂質土
c．乳灰色砂礫
d．乳灰色砂質土

第59図　47号土坑実測図



1．濁淡茶灰色砂質土（a、bをブロック状に含む）
2．濁淡黄灰色土（黒褐色土、a、bが混合）
3．濁暗灰色土（黒褐色土にaが混じる）
4．濁暗黄灰色土（bにaが混じる）
5．濁黒褐色土（黒褐色土に若干aを含む）
6．濁灰褐色土（bに黒褐色土、aを含む、6′はaの量が少ない）
7．橙色粘質土（鉄分層）
8．濁黄褐色土（aに少量の黒褐色土、bが混じる、8′はほとんどa）
9．濁黄灰色土（地山質土b）

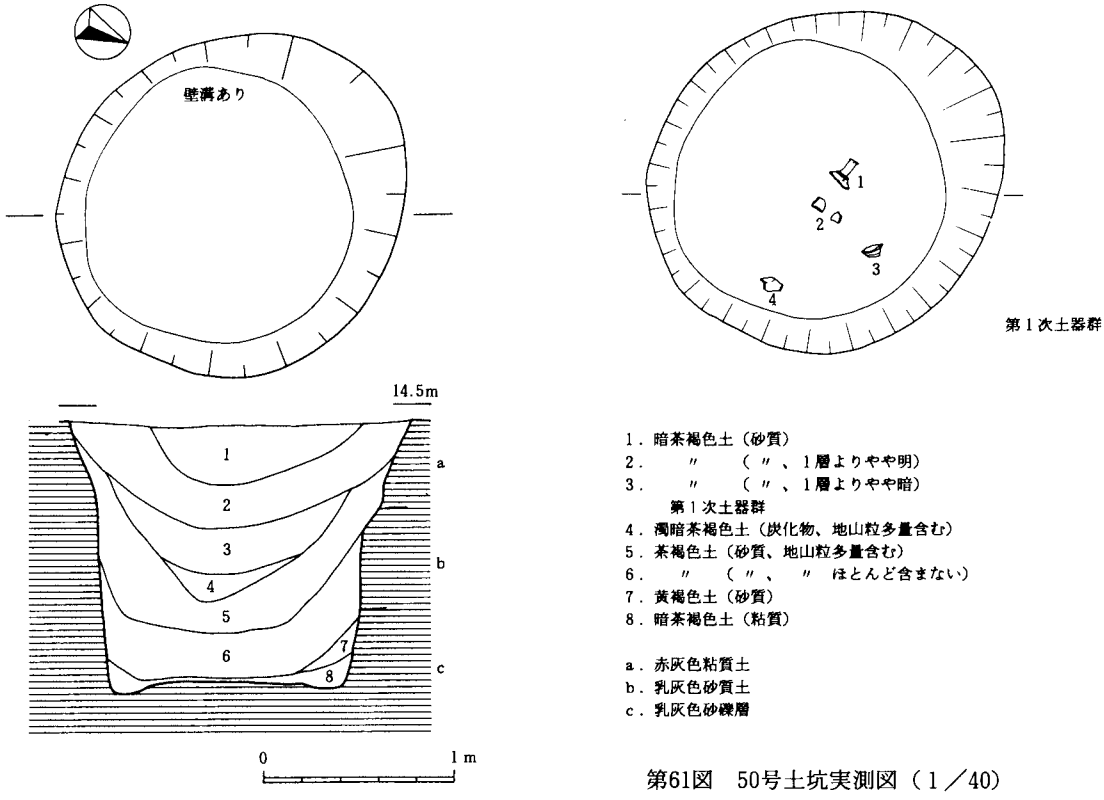
a．黄褐色土
b．黄灰色砂質土
c．黄白色粗土
d．礫

第60図　104号土坑実測図（1／40）

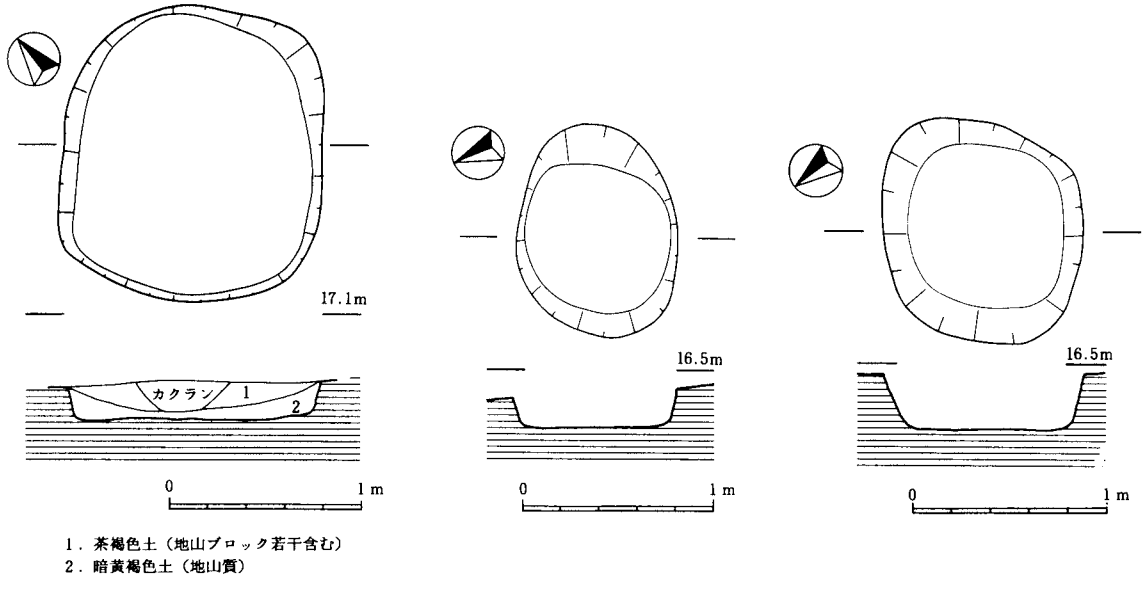
50号土坑（第61・98図、図版29）

遺構　大型土坑群の最北端で検出した円形２ｂ類の土坑で、上面径1.7～1.9m、底面径1.3～1.4m、坑底面積1.60㎡、深さ推定1.6m（現況1.4m）を測る。壁溝は深さ５㎝前後の浅いもので全周する。埋土は自然堆積と観察された。

遺物　土器群は２・３層から比較的大きめの破片が出土し、それ以下の層にも小片が混じる。456の高杯は47号土坑出土の杯部片と接合している。下層からは５～15㎝の自然礫が６点出土した。



第61図　50号土坑実測図（１／40）



第62図　13号土坑実測図（１／40）　第63図　16号土坑実測図（１／40）　第64図　21号土坑実測図（１／40）

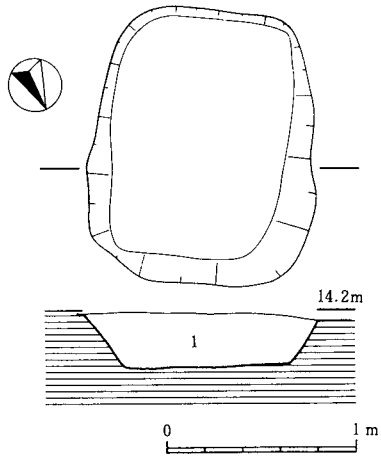
４　その他の土坑

ａ．長方形を呈する土坑

形態分類の項で大型土坑から除外した当該期の土坑は、南群で４基、北群に３基ある。いずれも深さ20～50cmの浅いもので、壁溝等の溝底施設を有するものはない。平面形は南群が方形、北群が長方形を基調とする傾向性がある。北群の54号土坑は断面形は大型土坑と何ら変わらないが、53～55号土坑は等高線に平行して列状に並ぶ可能性があり、類似性格の土坑と考えた。

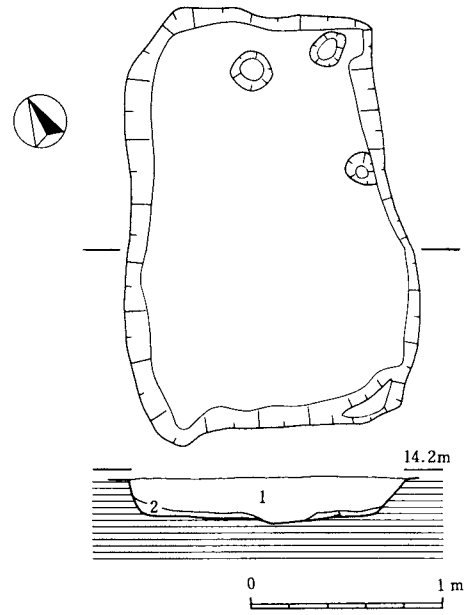
遺物はいずれも小片を主体とし、大型土坑でみられたような大型品が一括廃棄されたような例はない。

土坑の性格は、貯蔵穴でないとする根拠はなんらなく、対該土坑どうしの形態や分布の類似性などから大型土坑との機能差は窺えるが、それが非貯蔵穴であるのか、貯蔵物の違いなのかは今のところ分からない。



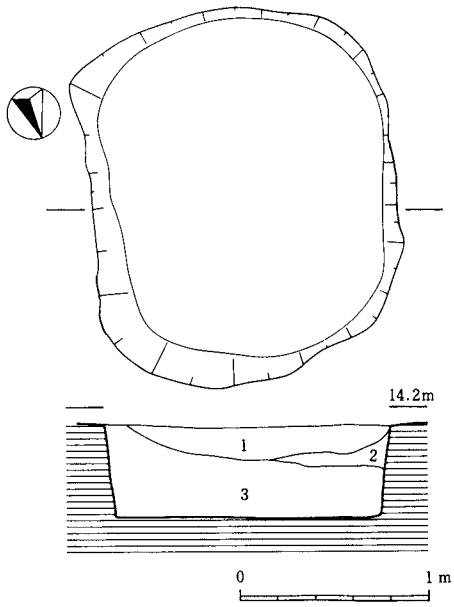
１．暗茶褐色粘質土（地山質土を粒状に含む。炭化物もわずかに含む。土器片は比較的多い）

第65図　53号土坑実測図（１／40）



１．茶褐色土（パサパサの粘質土状）
２．黄褐色土（地山で遺溝のけずりすぎ部分）

第66図　55号実測図（１／40）



１．黒褐色粘質土（所々に地山をブロック状に含みわずかに炭化物も混じる）
２．地山質土（地山をベースとし、わずかに褐色土が混じる）
３．茶褐色土（全体的に地山を粒状に含み、明るい色調を呈する。わずかに炭化物を含む）

第67図　54号土坑実測図（１／40）

また、大型土坑である44・49号土坑と重複し、土坑底面でそれら両者が開口するかたちとなっている205号土坑については、主たる覆土が44号土坑の第１層とほぼ共通すること、土坑西壁がそのまま49号土坑のそれへとつながっていくこと等から考えて、大型土坑に附属する何らかの施設との関連が予想される。

ｂ．ａ以外の土坑

56号土坑（第69図）

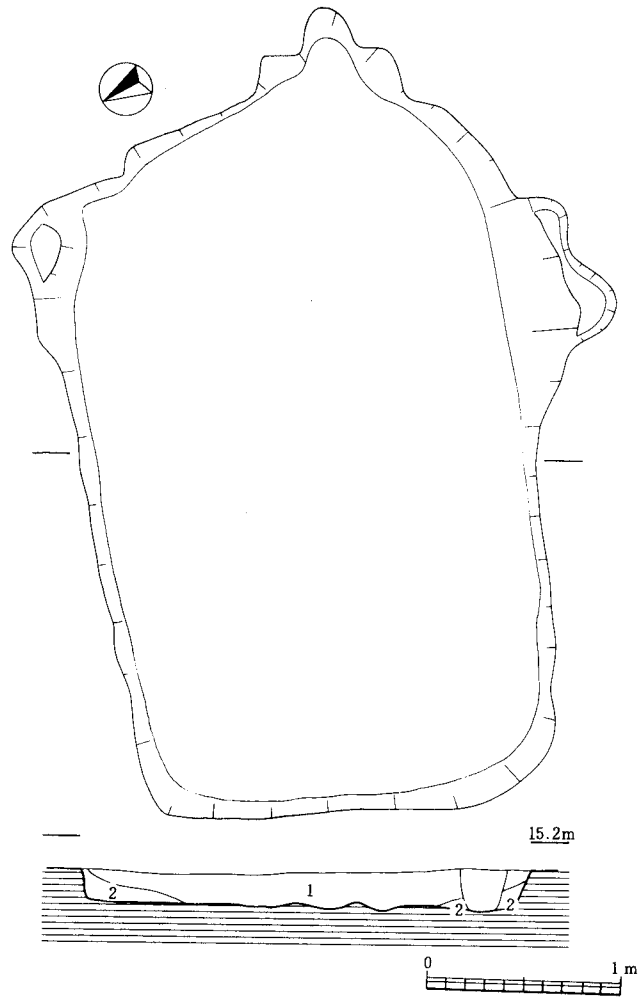
Ｈ43区に所在し、３号竪穴住居跡の北東コーナーからは約１ｍの距離を測る。径約１ｍの不整な円形を呈し、底部の平面形は不整な楕円形に近い。深さは67cmである。出土遺物を欠くため年代を特定することが難しいが、周辺の遺構配置や覆土の観察等、調査時の所見から弥生時代後期～終末期に属する可能性が高いと推定される。

72・74号土坑（第69図）

２号竪穴住居跡と５号竪穴住居跡の間では多数の土坑が重複した状況がみられる。73・108号土坑の２基は弥生時代終末期の大型土坑であるが、それ以外の主な土坑は72号及び74号土坑の２基である。後者からは図示した土器（385～387）の出土がみられる他、前者からも597(第４節参照）が出土している。また、両土坑に接する71号土坑からも382が検出されている。これらから、71号土坑が法仏式併行期、74号土坑が弥生時代終末期を中心とする時期、また72号土坑は古墳時代中期以降の時期に営まれたと推定することができるかもしれないが、実際にはより複雑に切り合いが予想され、覆土中の資料が直ちに土坑の年代と結び付けられないとした方が適切であろう。

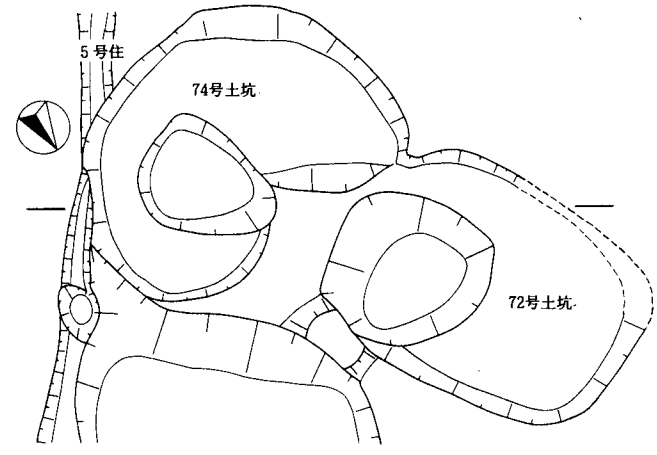
112号土坑（第69図）

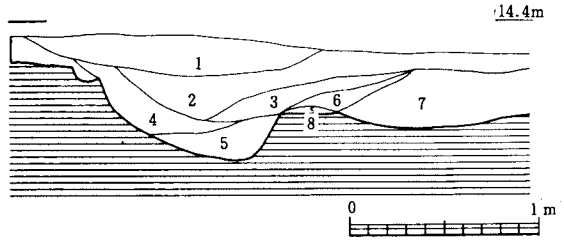
２号竪穴住居跡の住居内土坑と考えられ、直径約１ｍ、住居床面からの深さも１ｍ前後である。２号竪穴住居跡については拡張が認められるが、切り合い関係から拡張前の二段掘り土坑よりも新しいことが知られる。また、本土坑の土層断面図からは土坑が埋まった（恐らく埋められた）後に第１・２層が住居の床面の一部として貼り付けられている状況が窺えよう。したがって、２号竪穴住居後が拡張された後に一定の期間使用され、使命を終えてからは埋められ、その上面に粘土を貼って住居の床とされていたことが理解される。土坑が掘られ使用されていた場所は、４本の主柱穴に囲まれた空間の一部に含まれる。



１．暗茶褐色土（粘・細かい地山質土ブロック・炭多量含む）
２．暗褐色土（粘・細かい地山質土ブロック・炭は含まない）

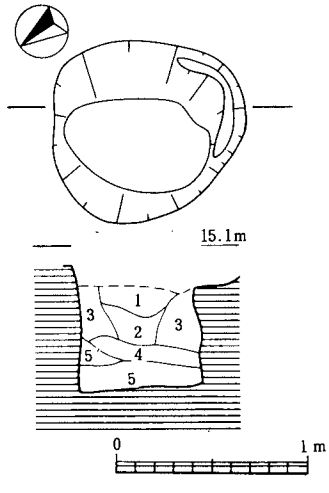
第68図　205号土坑実測図（１／40）





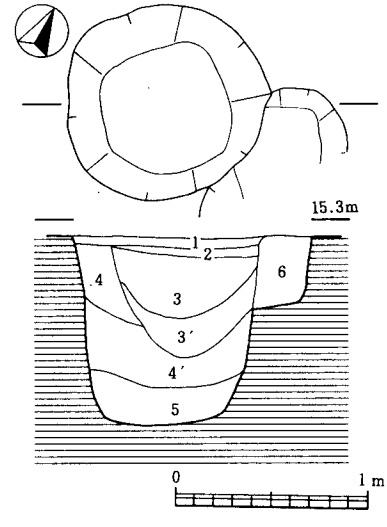
1．暗茶褐色砂質土（地山粒子含む）
2．茶褐色砂質土（地山ブロック含む）
3．暗茶褐色砂質土
4．茶褐色砂質土（地山ブロック多量に含む）
5．黒褐色砂質土
6．濁乳灰色砂質土（地山質土）
7．暗茶褐色砂質土
8．暗茶褐色砂質土

74・72号土坑実測図（１／40）



1．黄褐色粘質土（地山質をベースとして褐色土が混じってくる）
2．黒褐色粘質土（わずかに地山の小粒を含む）
3．茶褐色粘質土（地山質ブロックを多く含む）
4．黒褐色粘質土（強い黒の色調を帯び、何も混じらない）
5．茶褐色粘質土（何も混じらない）
5′．茶褐色粘質土（小さな地山ブロックを含む）

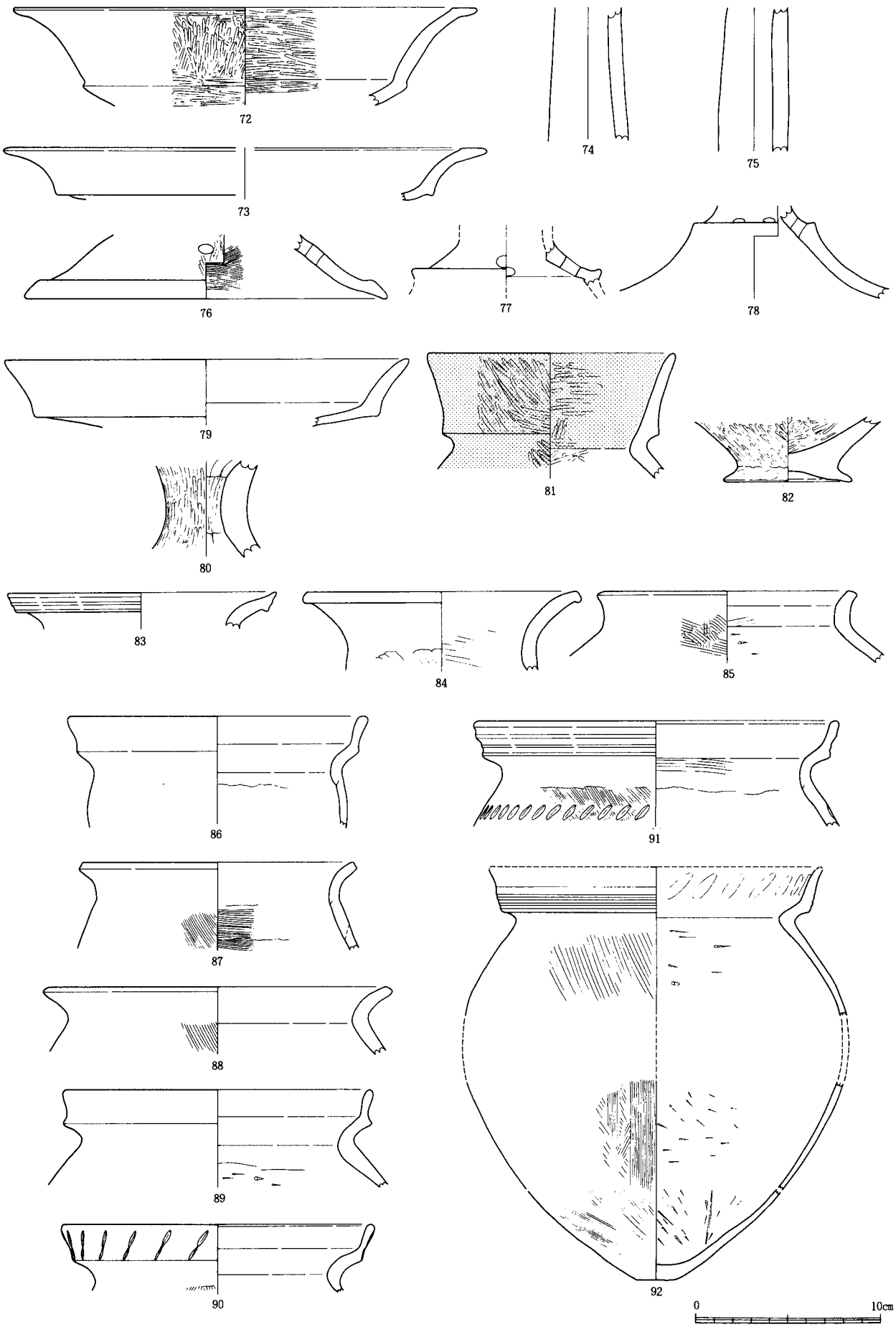
56号土坑実測図（１／40）



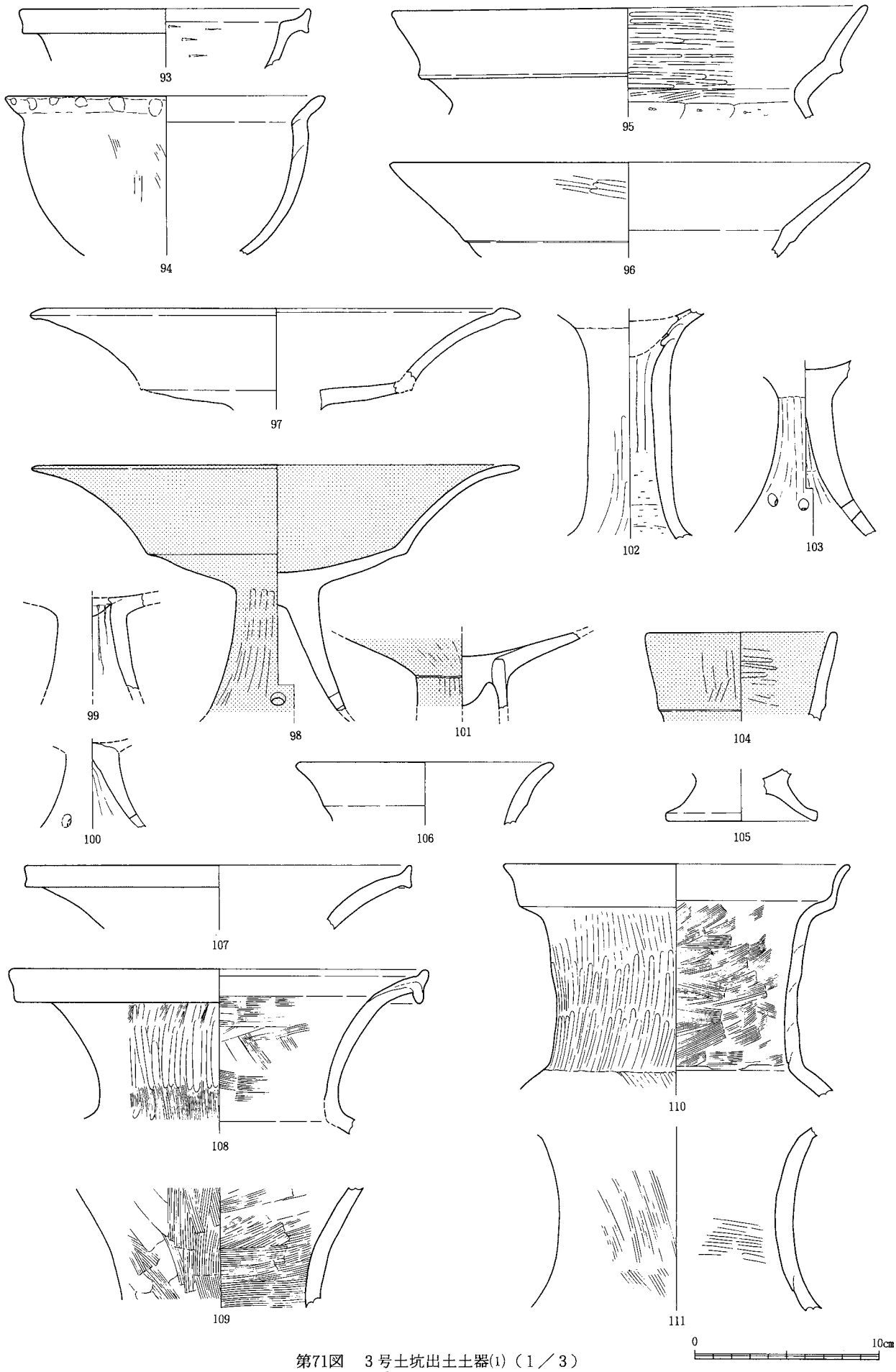
1．暗茶褐色砂質土（焼土、炭化物含む）
2．黄褐色粘土（貼り床）
3．赤茶褐色粘土質（大きい炭化物含む）
3′．茶灰色粘質土（大きい炭化物含む）
4．茶褐色砂質土（地山ブロックを少量含む）
4′．茶褐色粘質土（やや色調が淡い）
5．暗灰色砂質土（砂、小砂利を含む）
6．濁黄褐色粘質土（ピット）

112号土坑実測図（１／40）

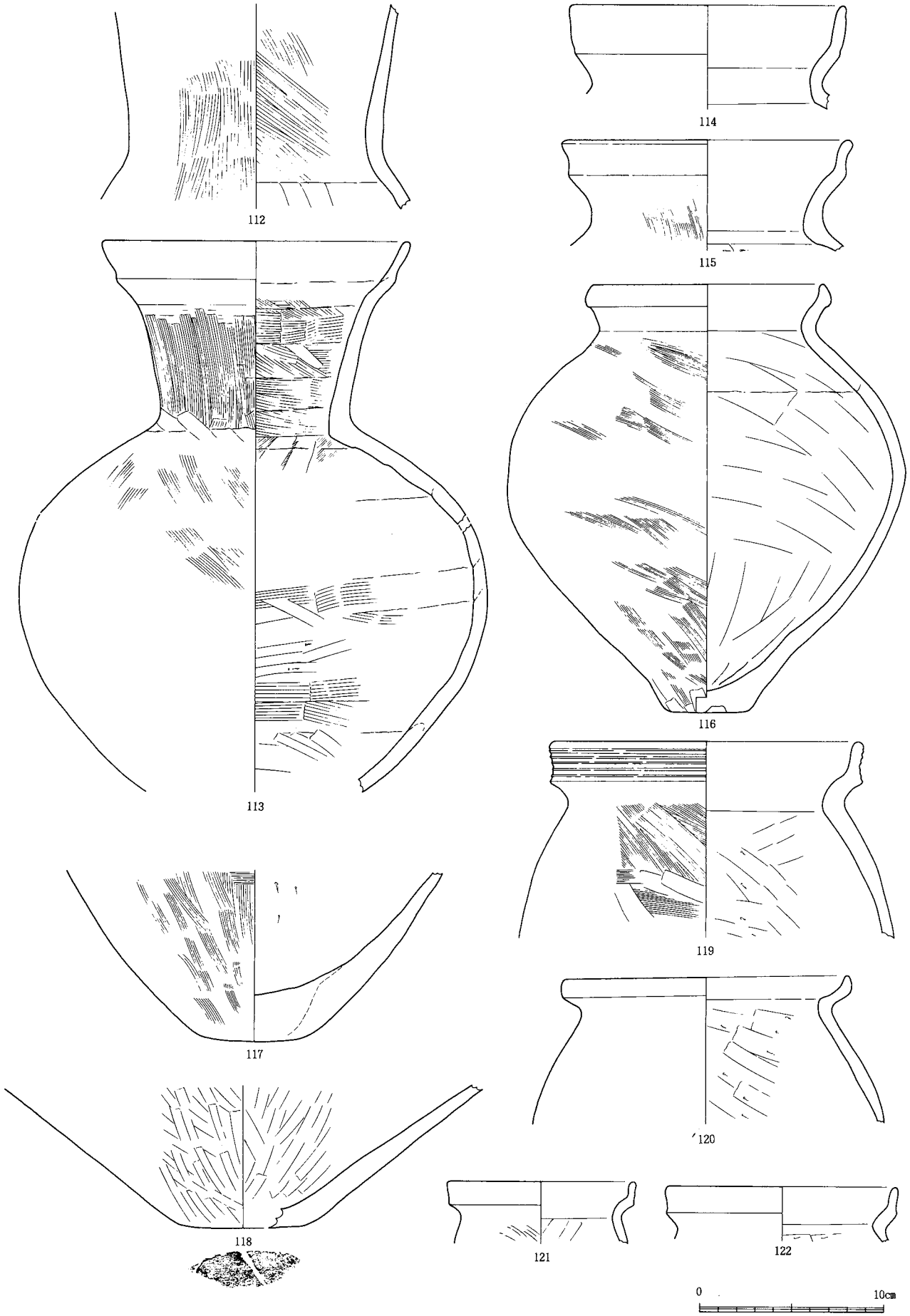
第69図　56・72・74・112号土坑実測図（１／40）



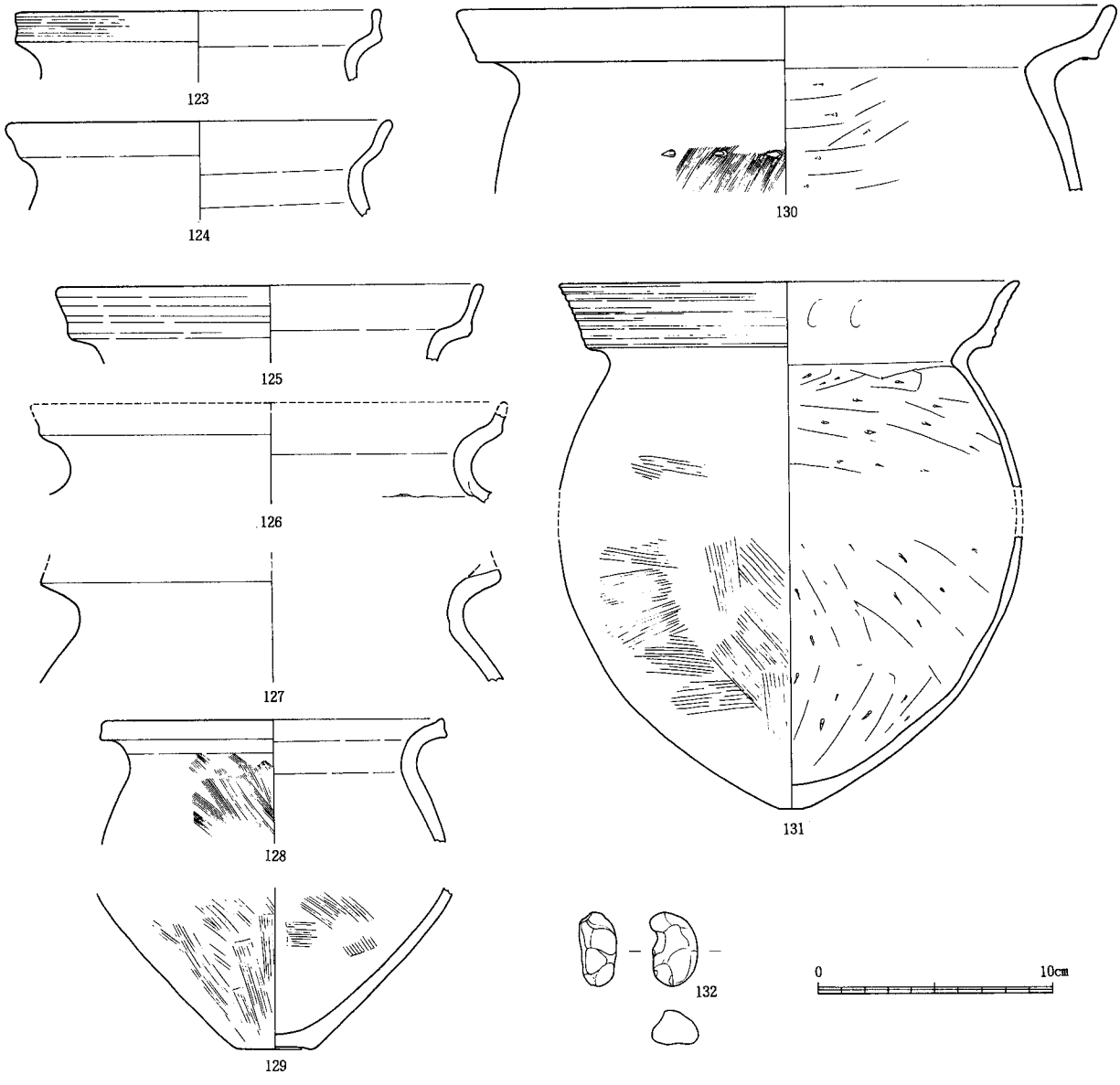
第70図　１号土坑出土土器（１／３）



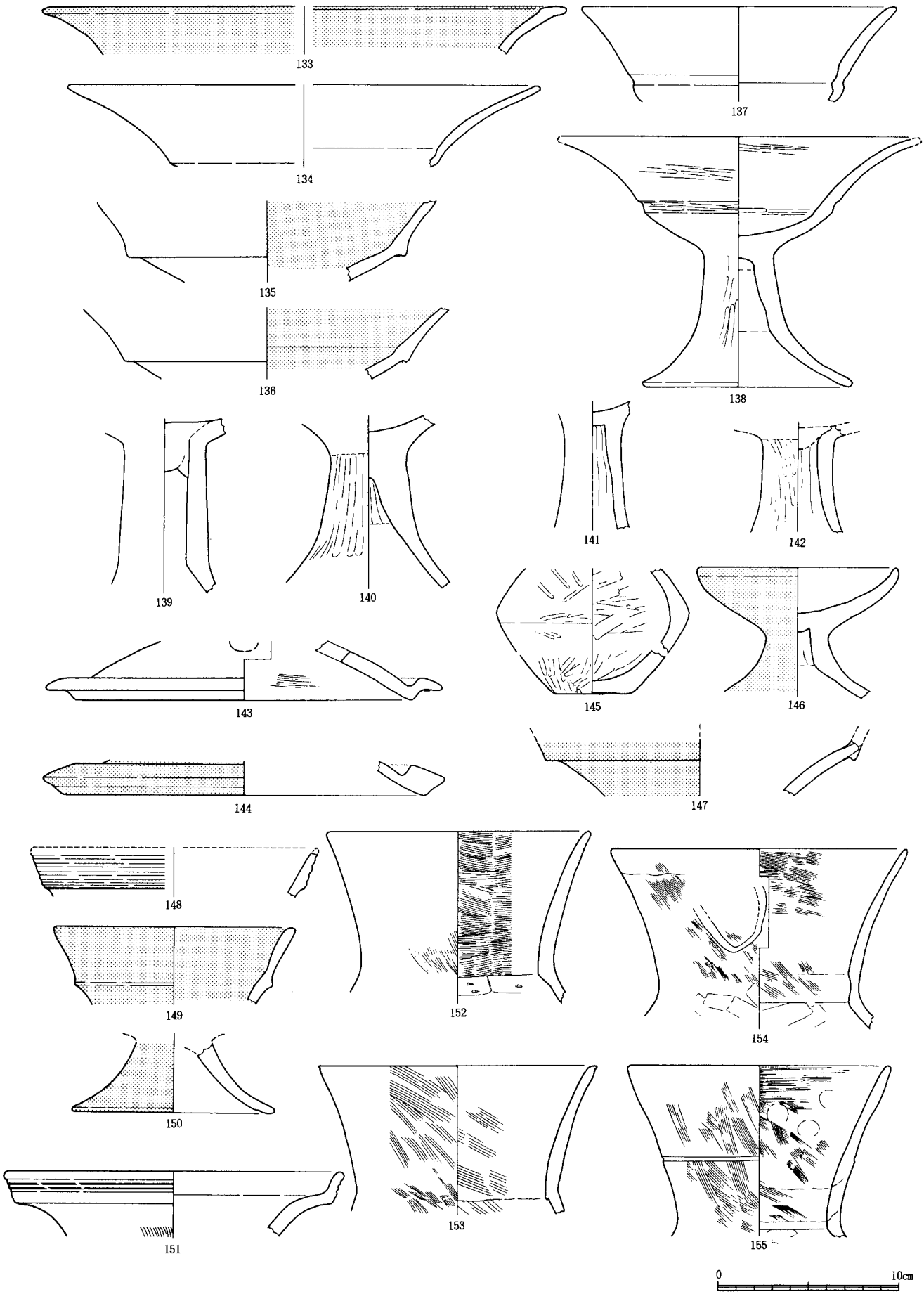
第71図　３号土坑出土土器(1)（１／３）



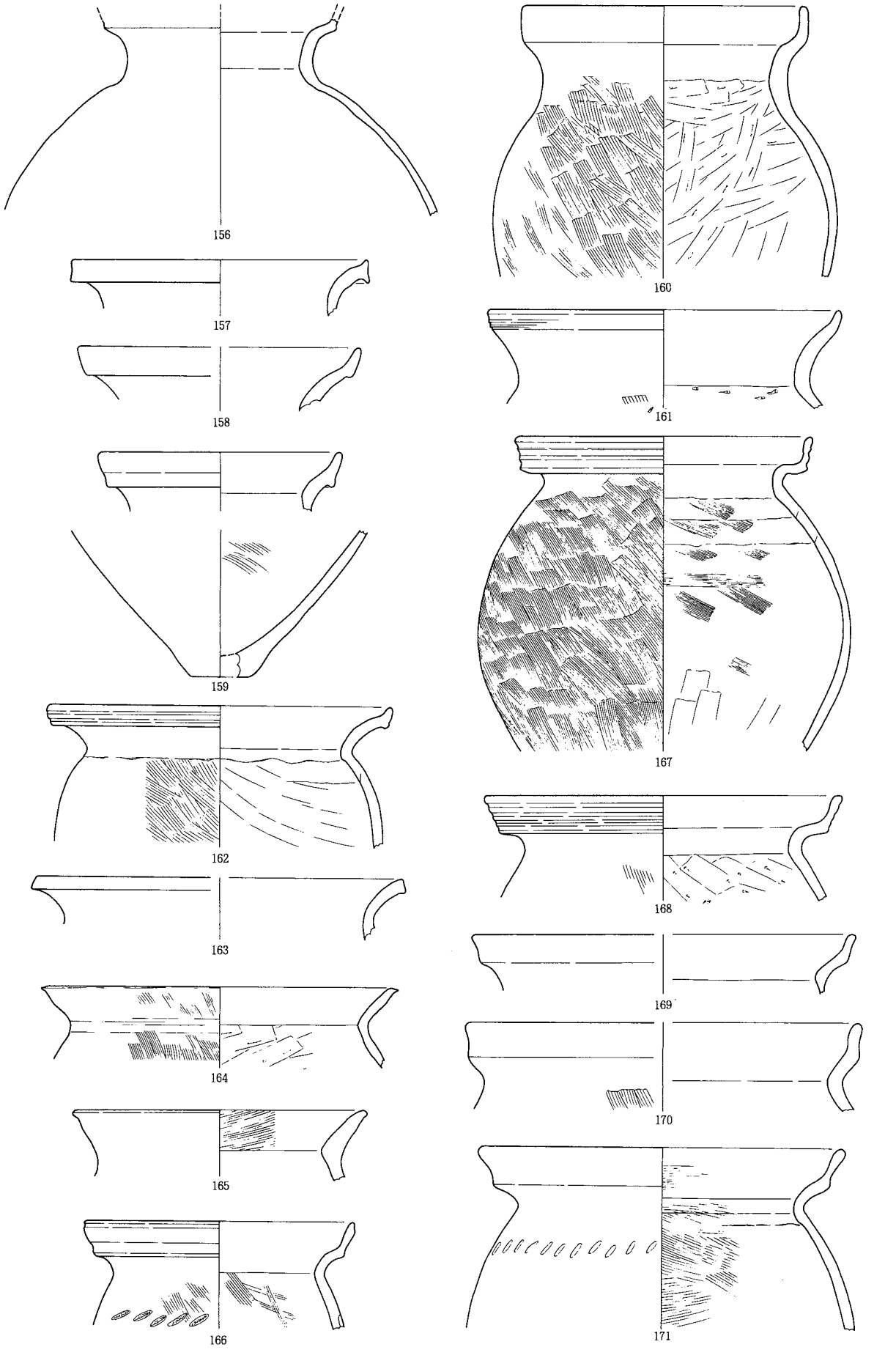
第72図　３号土坑出土土器(2)（１／３）



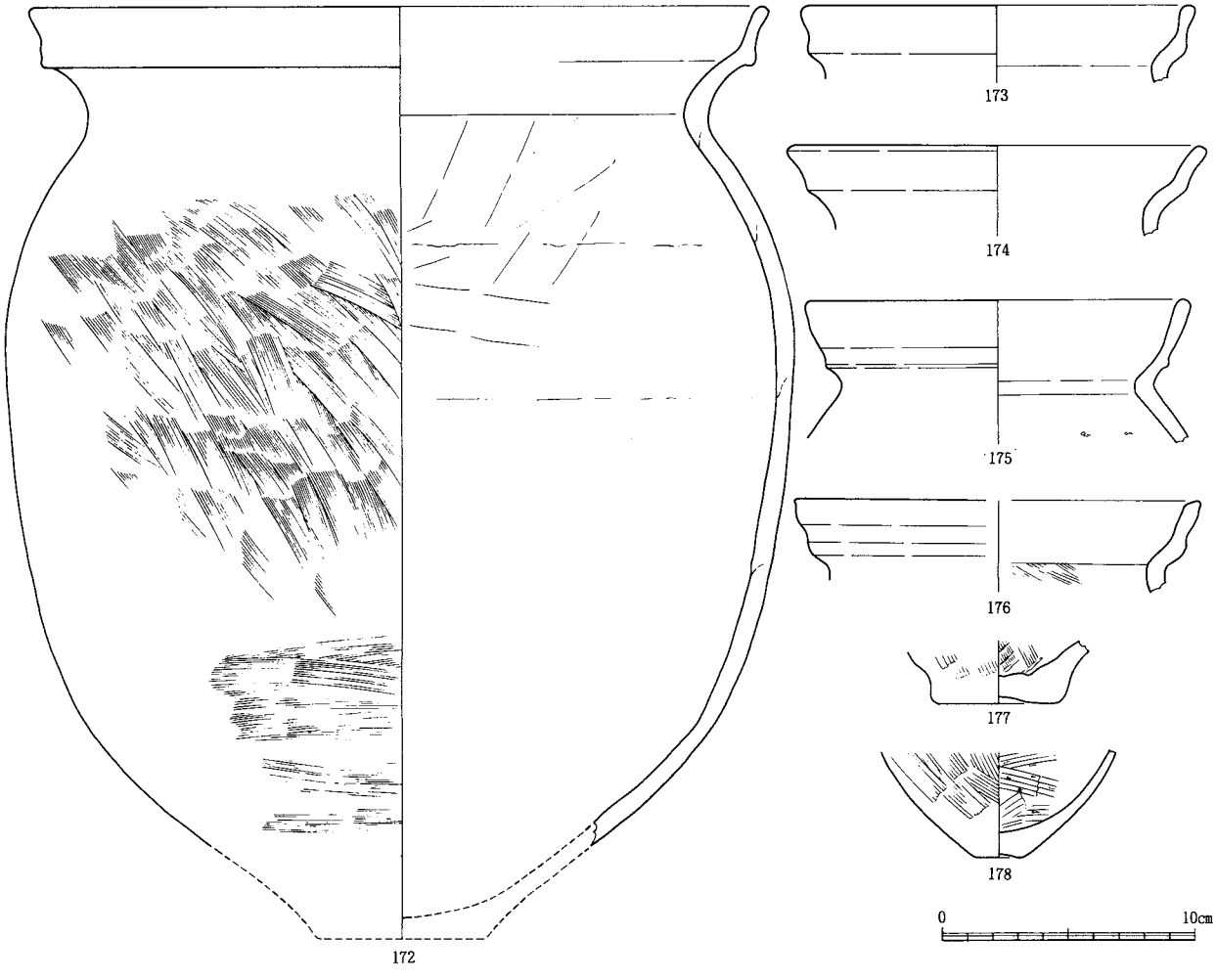
第73図．３号土坑出土土器(3)（１／３）



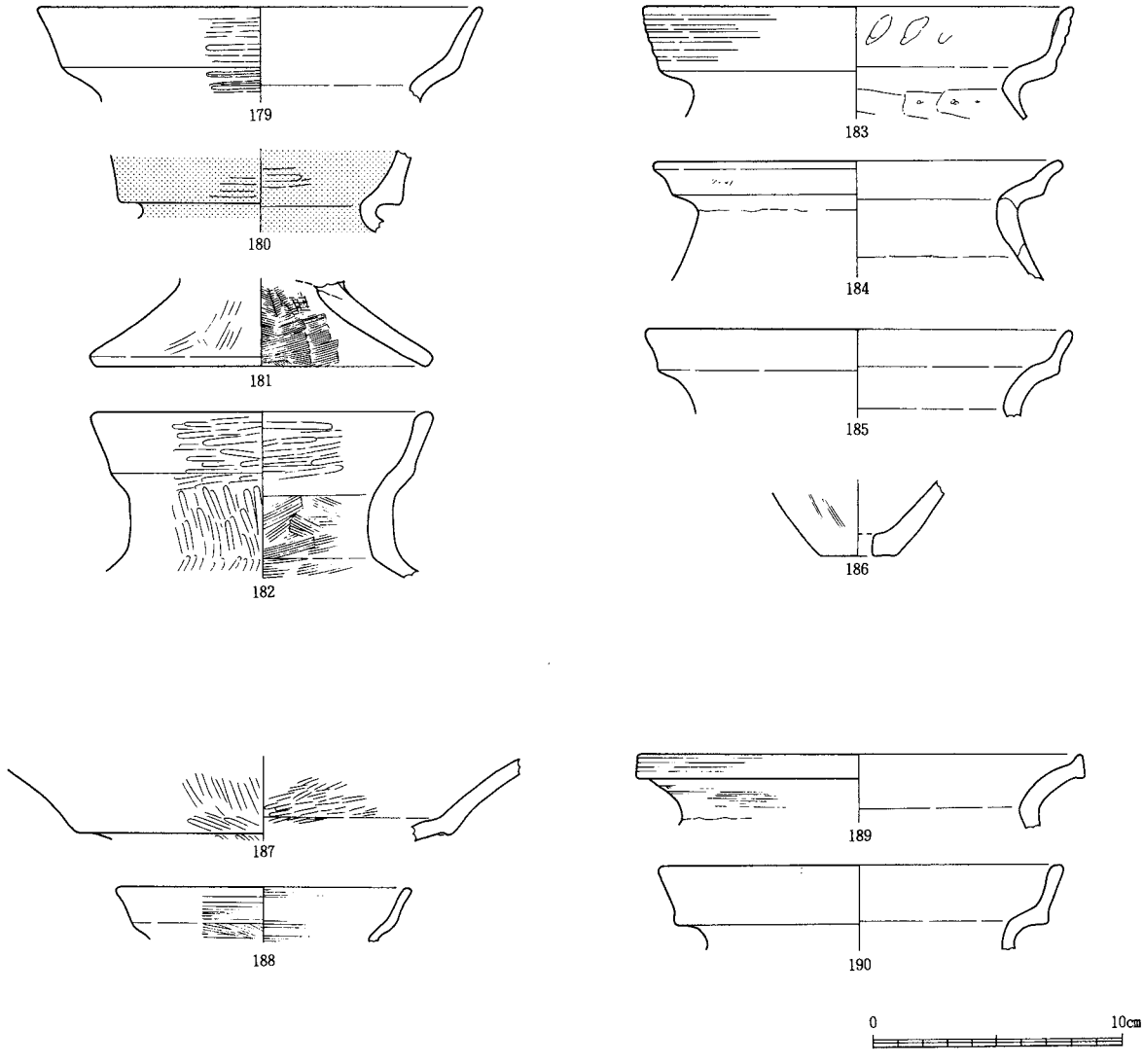
第74図　12号土坑出土土器(1)（１／３）



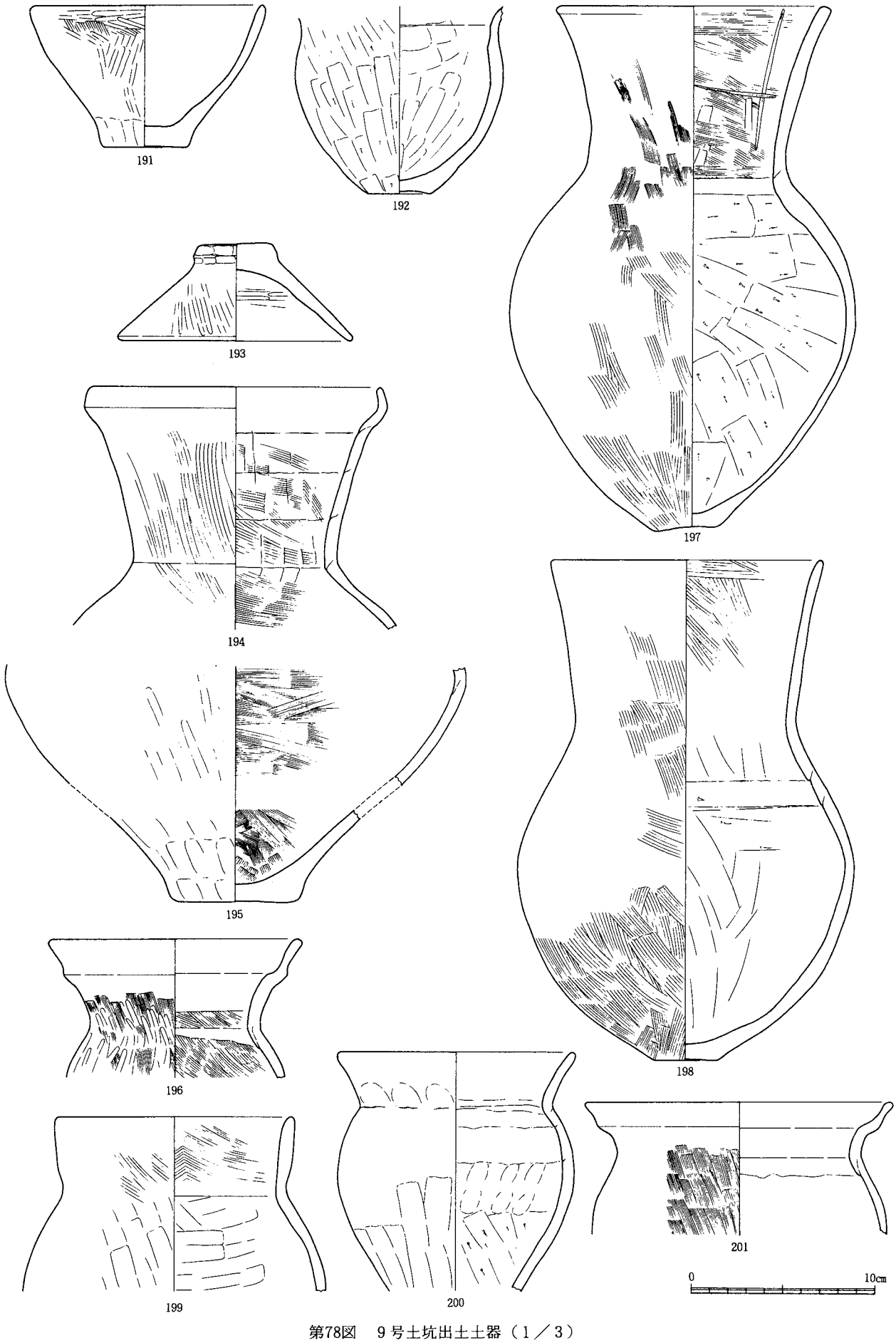
第75図　12号土坑出土土器(2)（１／３）



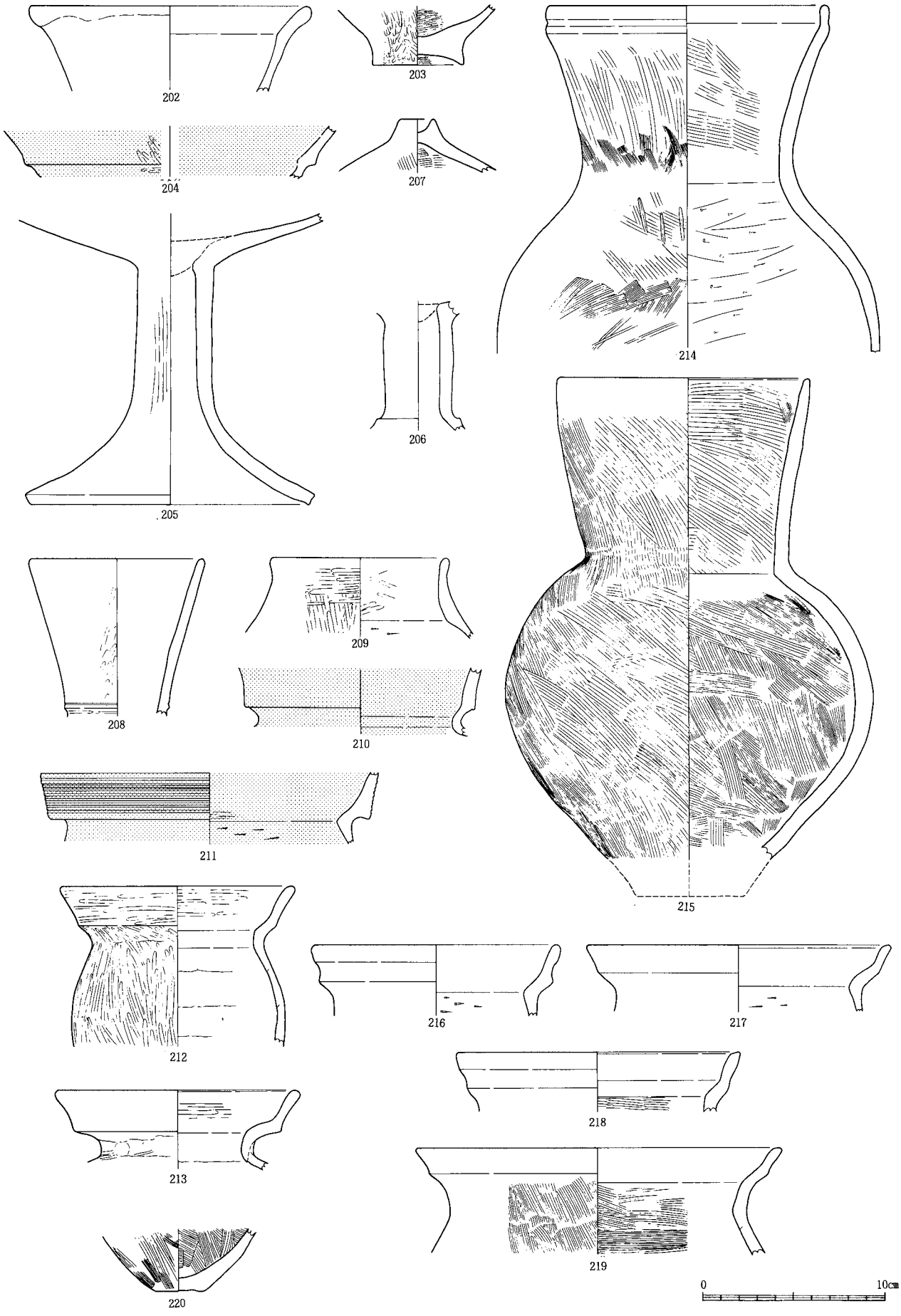
第76図　12号土坑出土土器(3)（１／３）



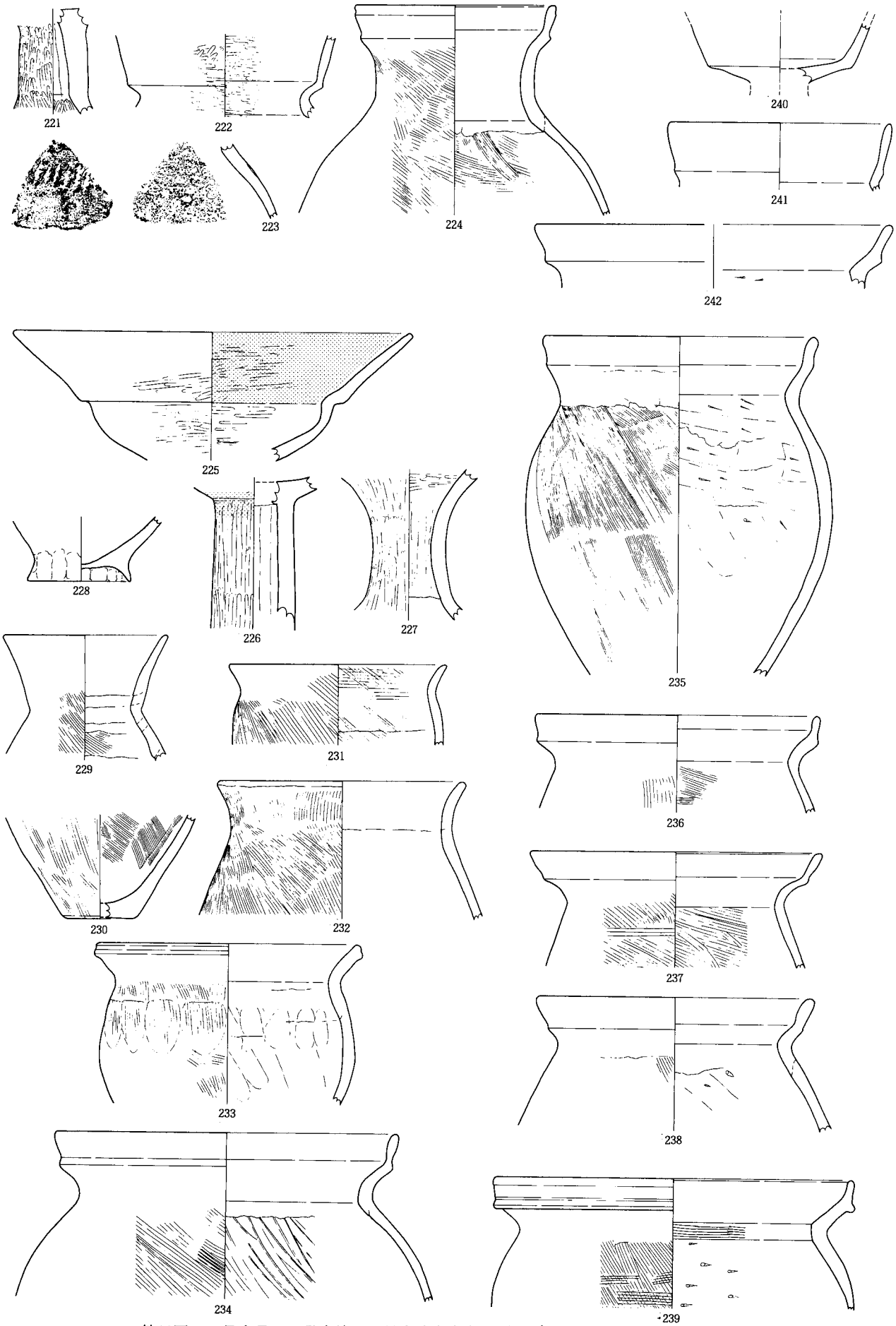
第77図　７号土坑、８号土坑出土土器（１／３）
(179～186)(187～190)



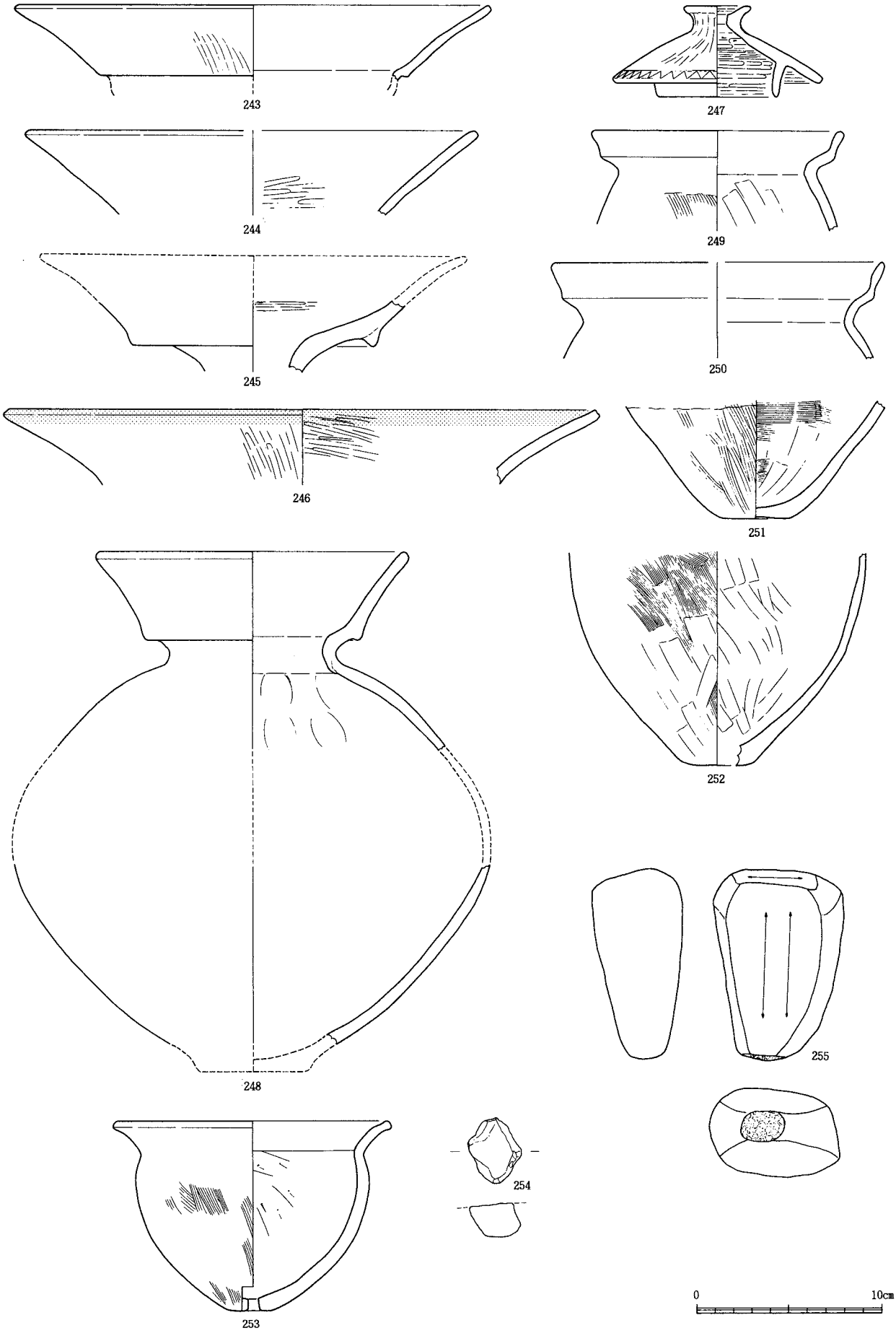
第78図　９号土坑出土土器（１／３）



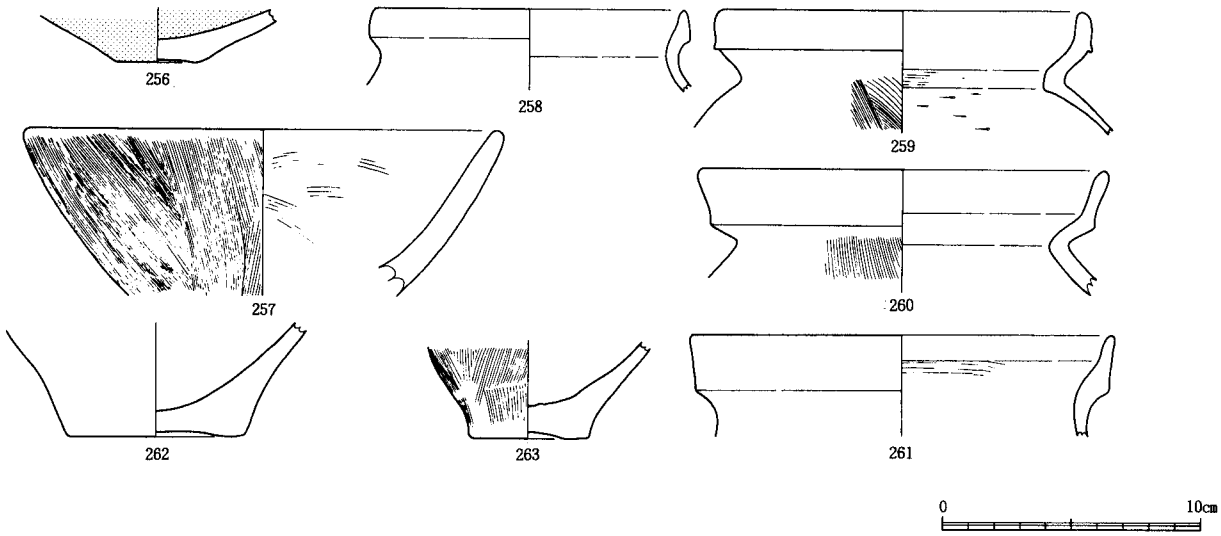
第79図　10号土坑出土土器（１／３）



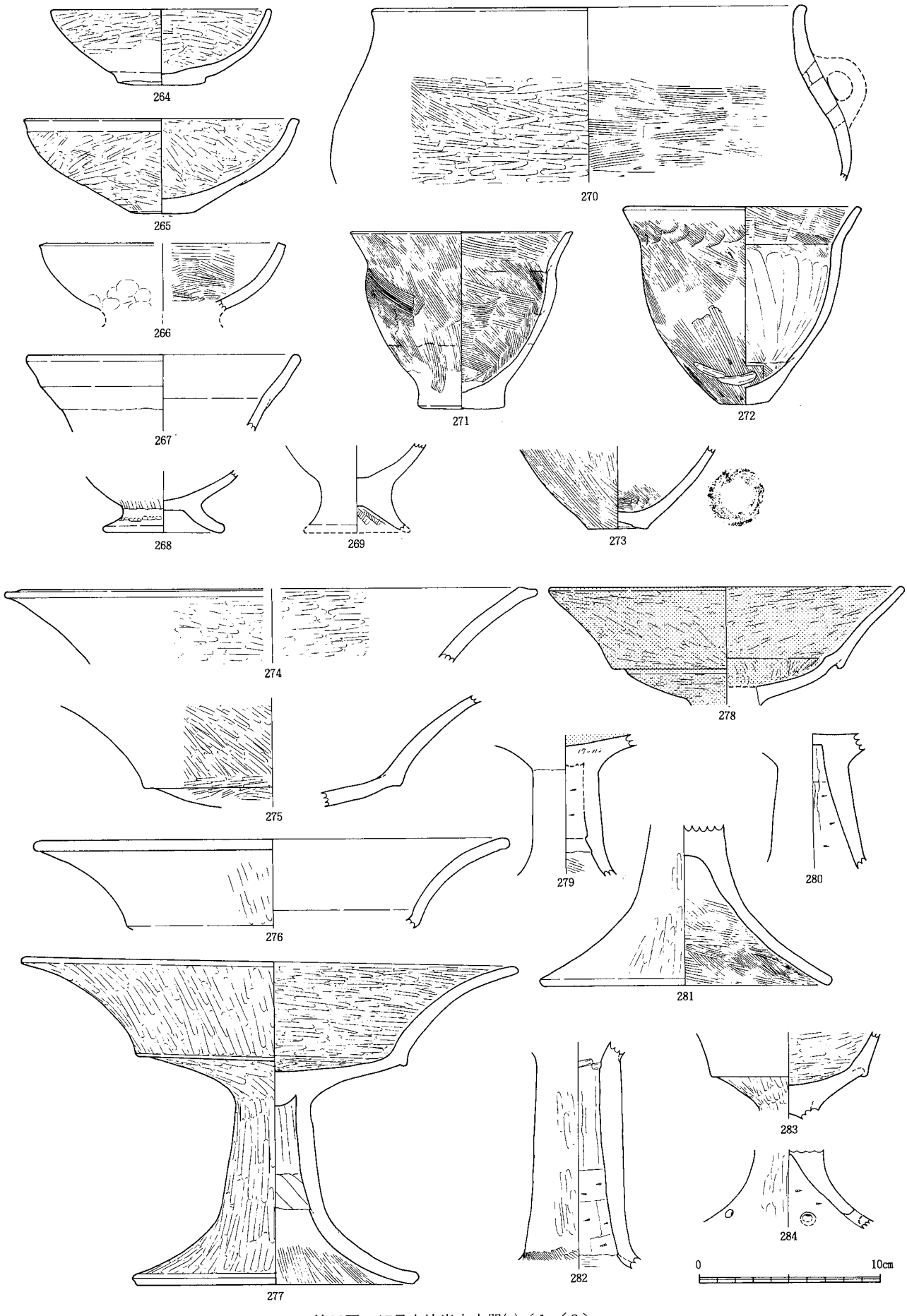
第80図　34号土号、35号土坑、36号土坑出土土器（１／３）
(221～224)(225～239)(240～242)



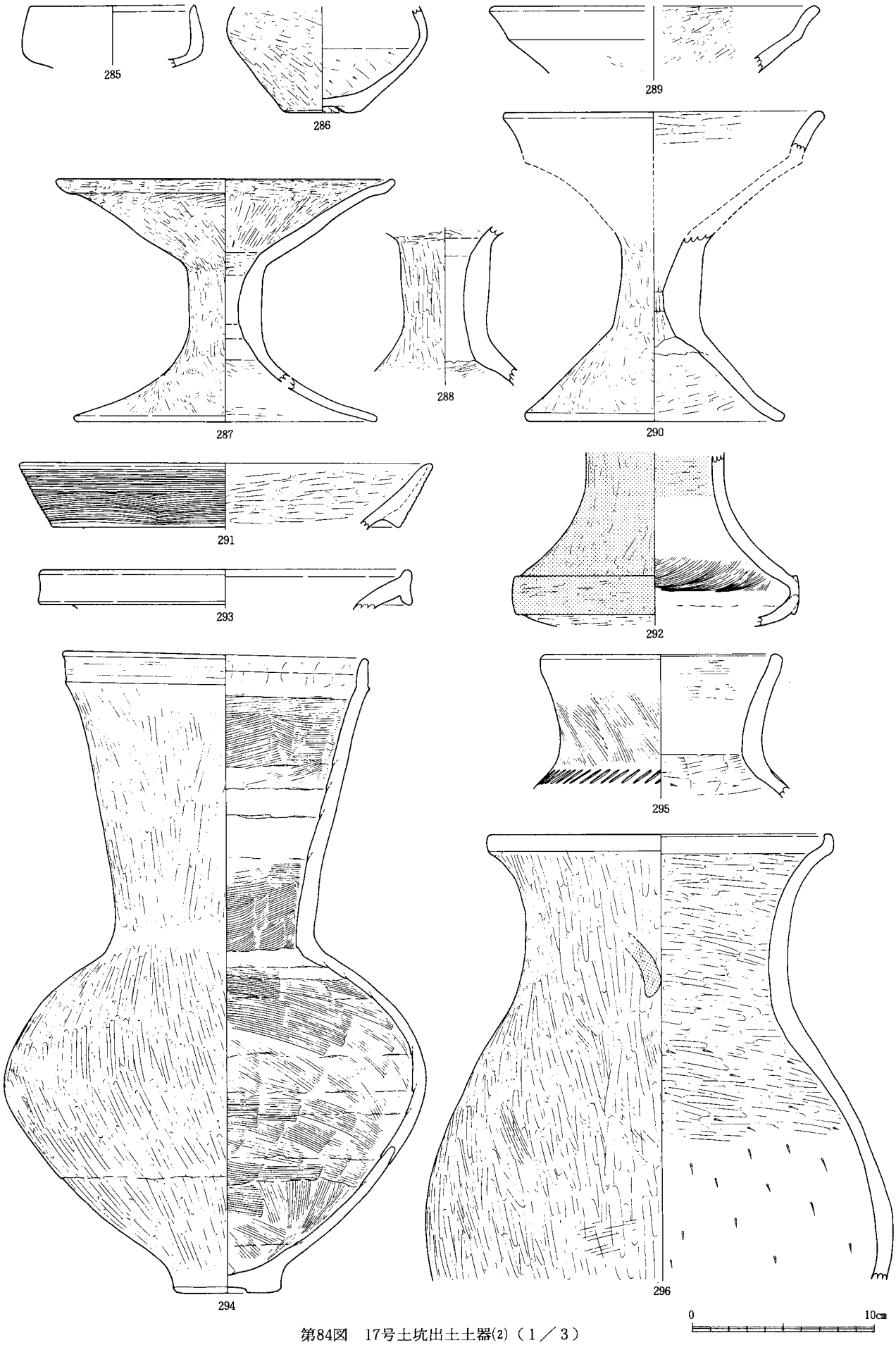
第81図　14号土坑出土土器（１／３）



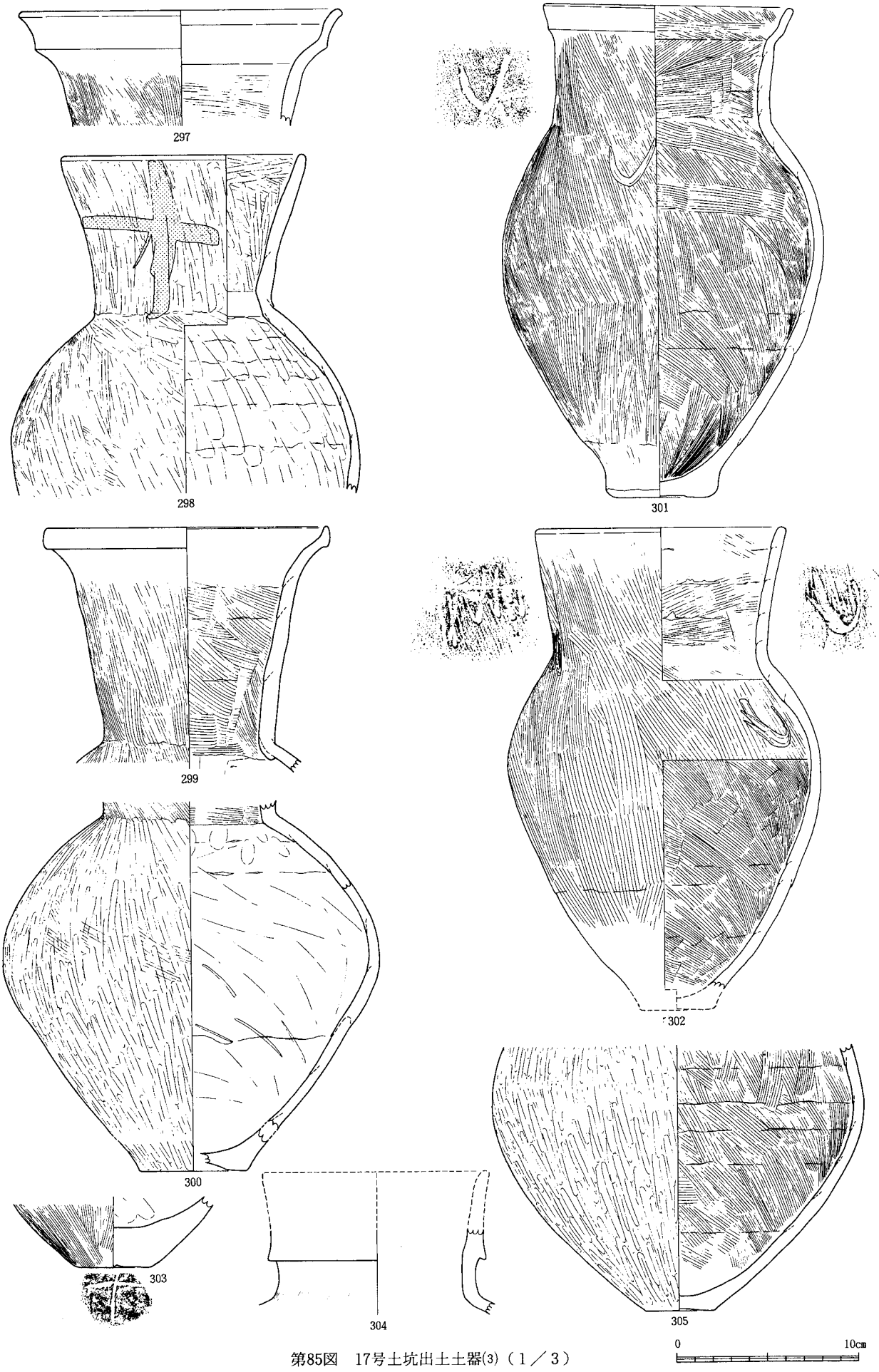
第82図　20号土坑出土土器（１／３）



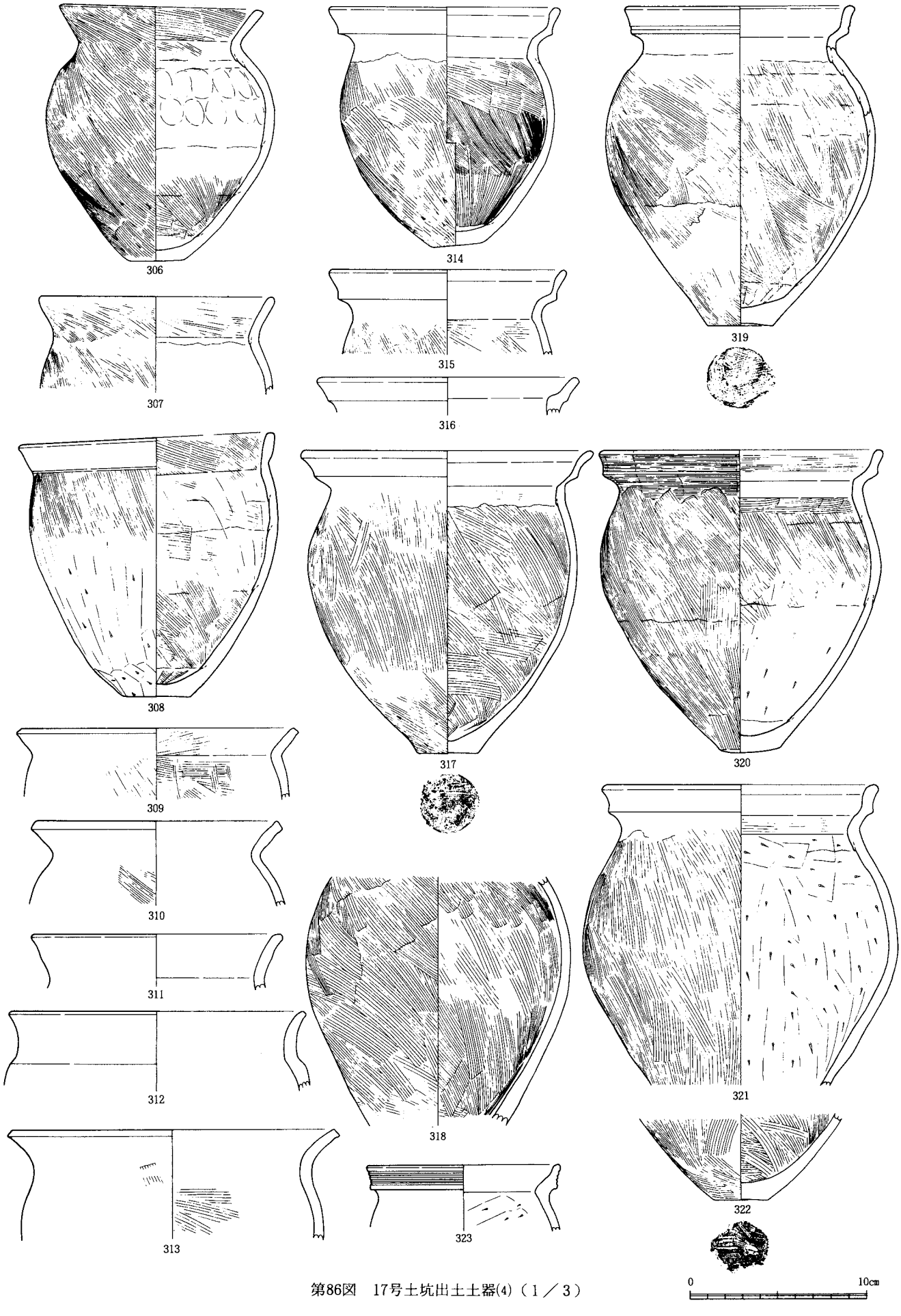
第83図　17号土坑出土土器(1)（１／３）



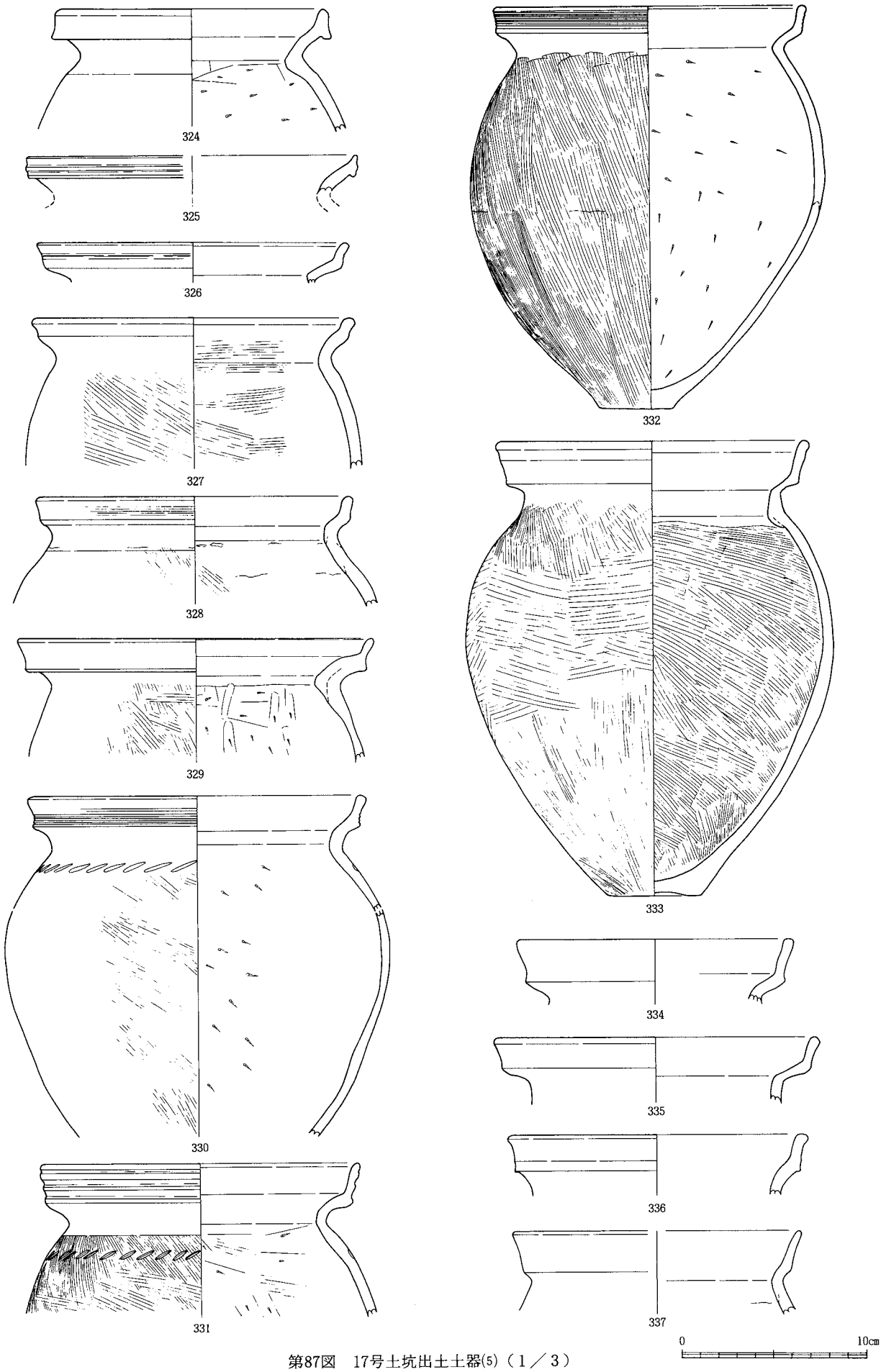
第84図　17号土坑出土土器(2)（１／３）



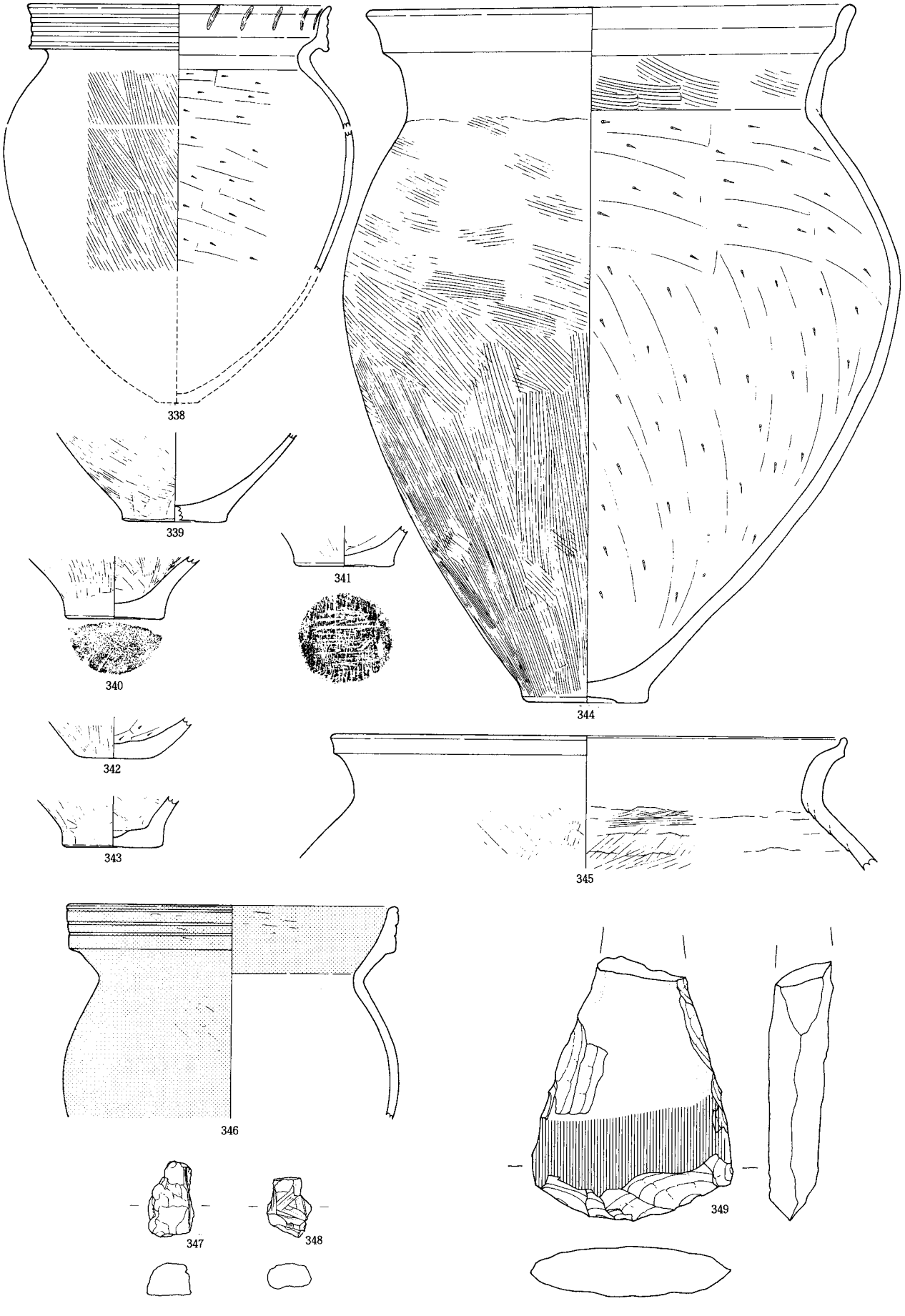
第85図　17号土坑出土土器(3)（１／３）



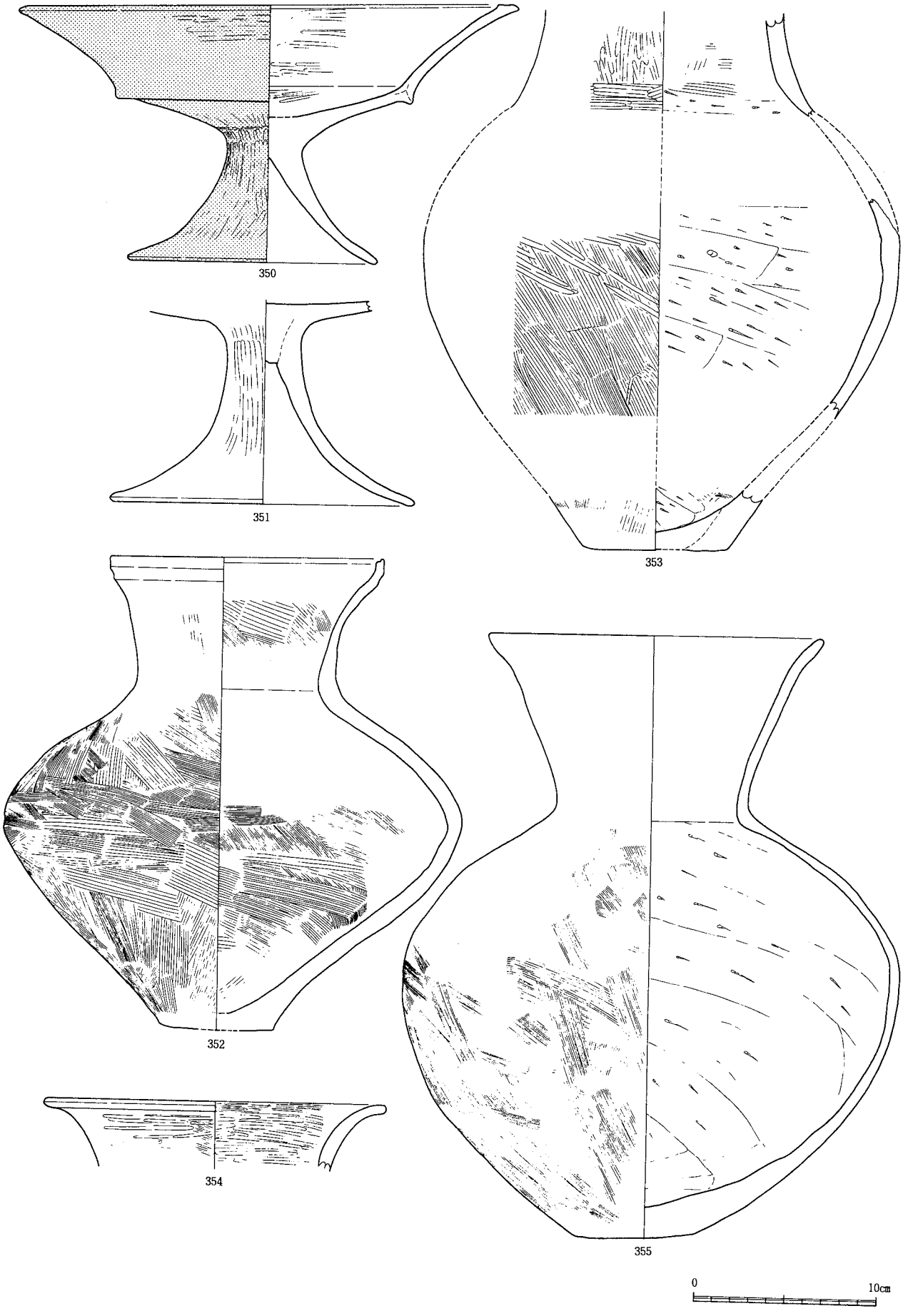
第86図　17号土坑出土土器(4)（１／３）



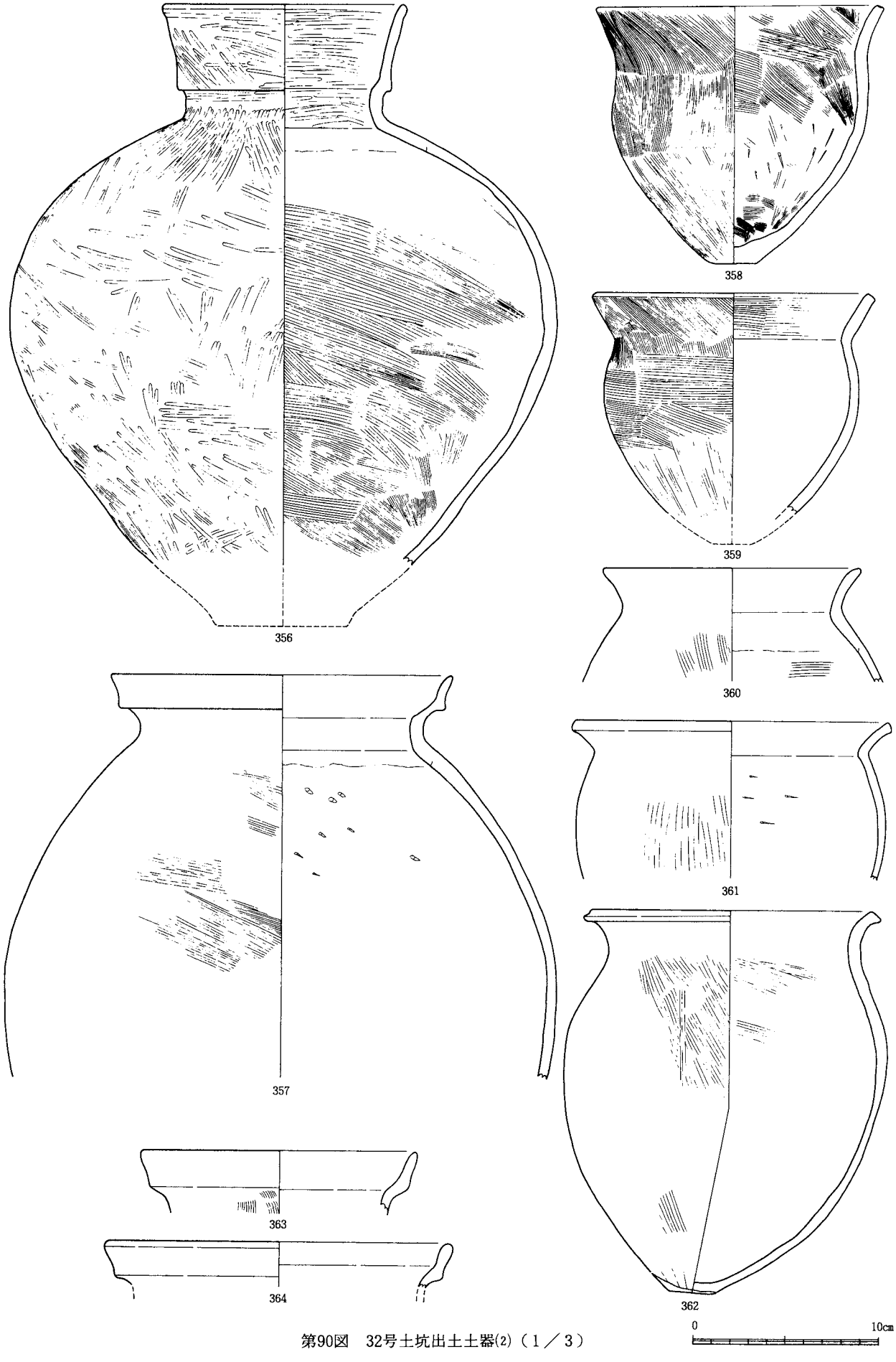
第87図　17号土坑出土土器(5)（１／３）



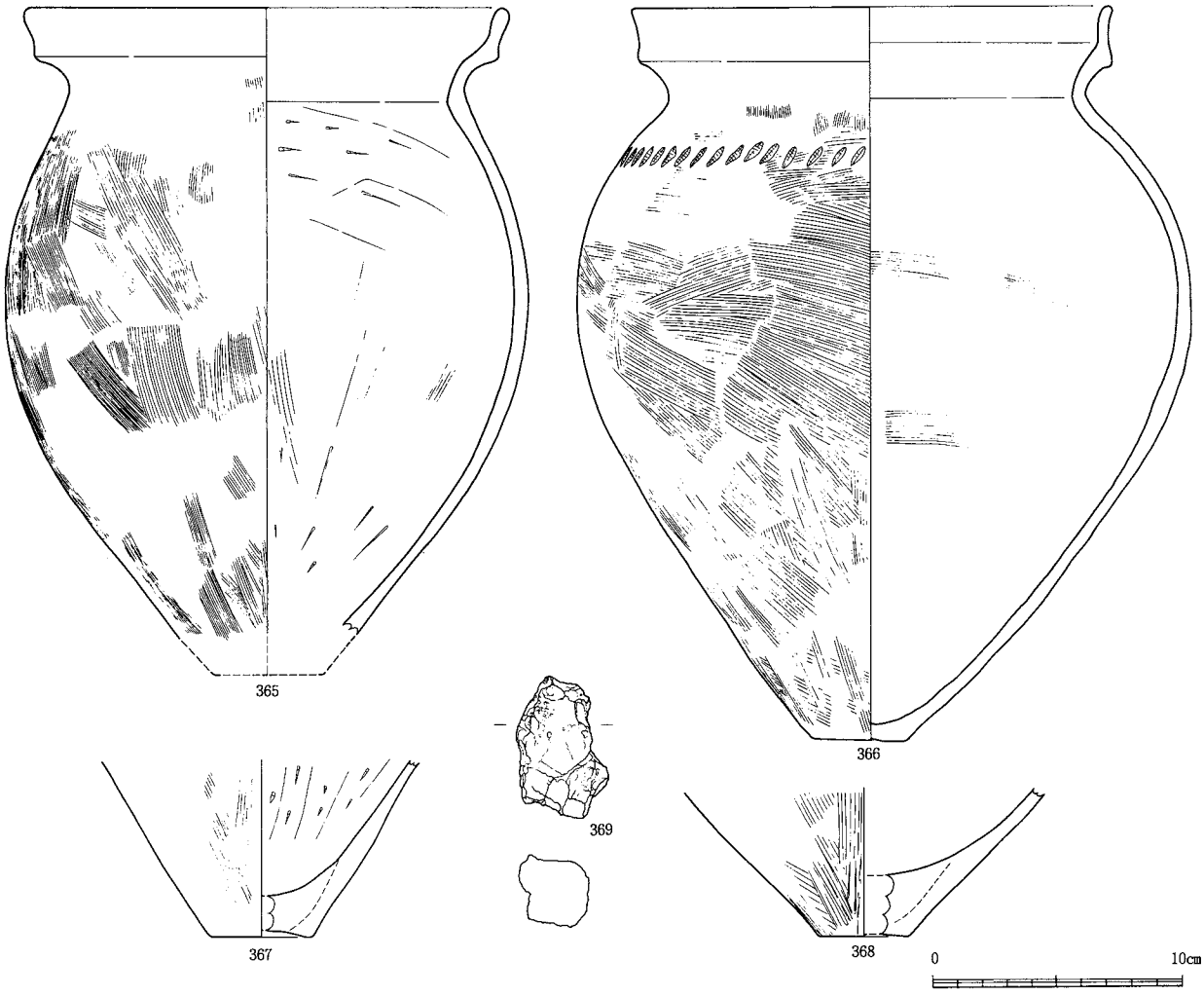
第88図　17号土坑出土土器(6)（１／３）



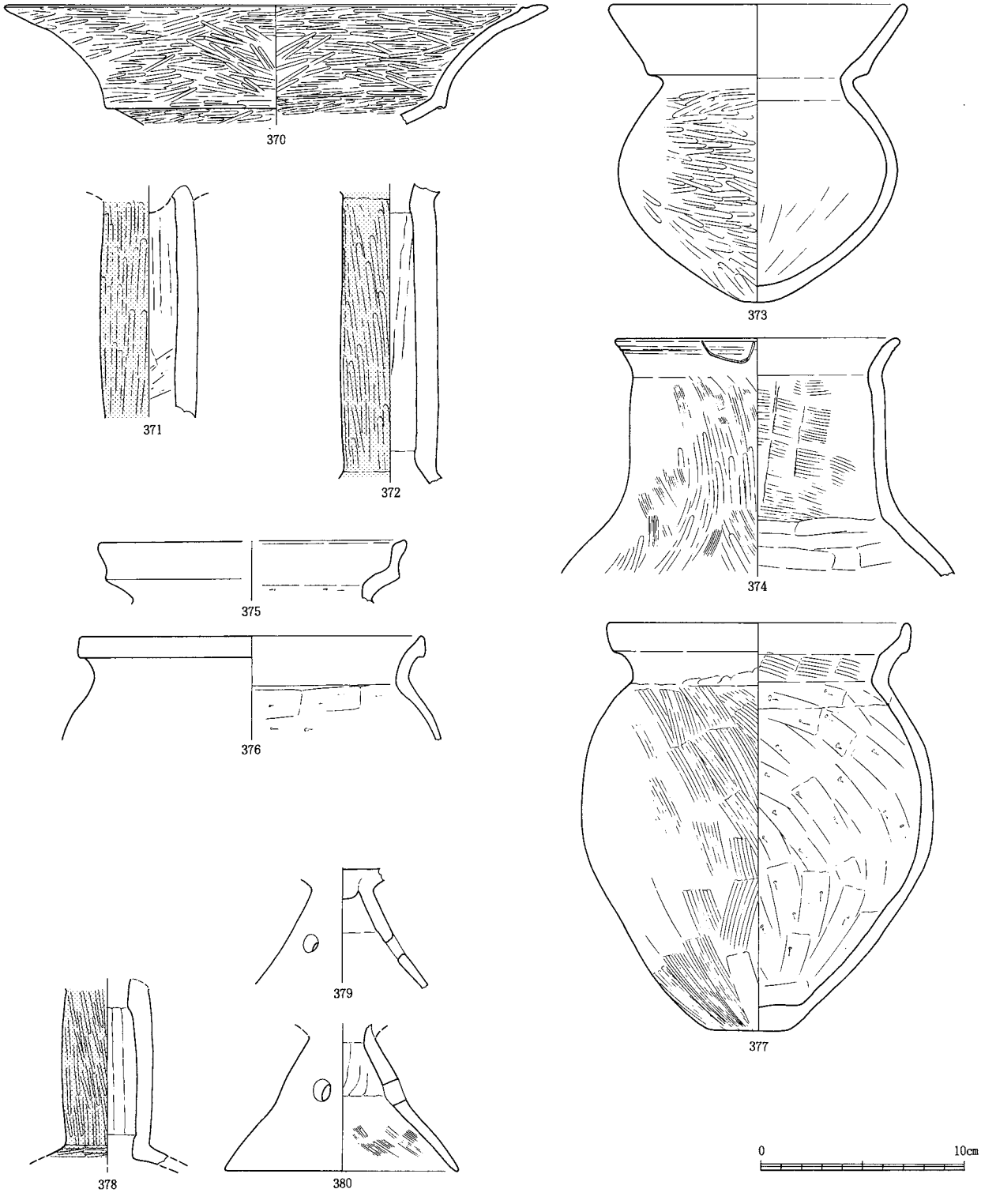
第89図　32号土坑出土土器(1)（１／３）



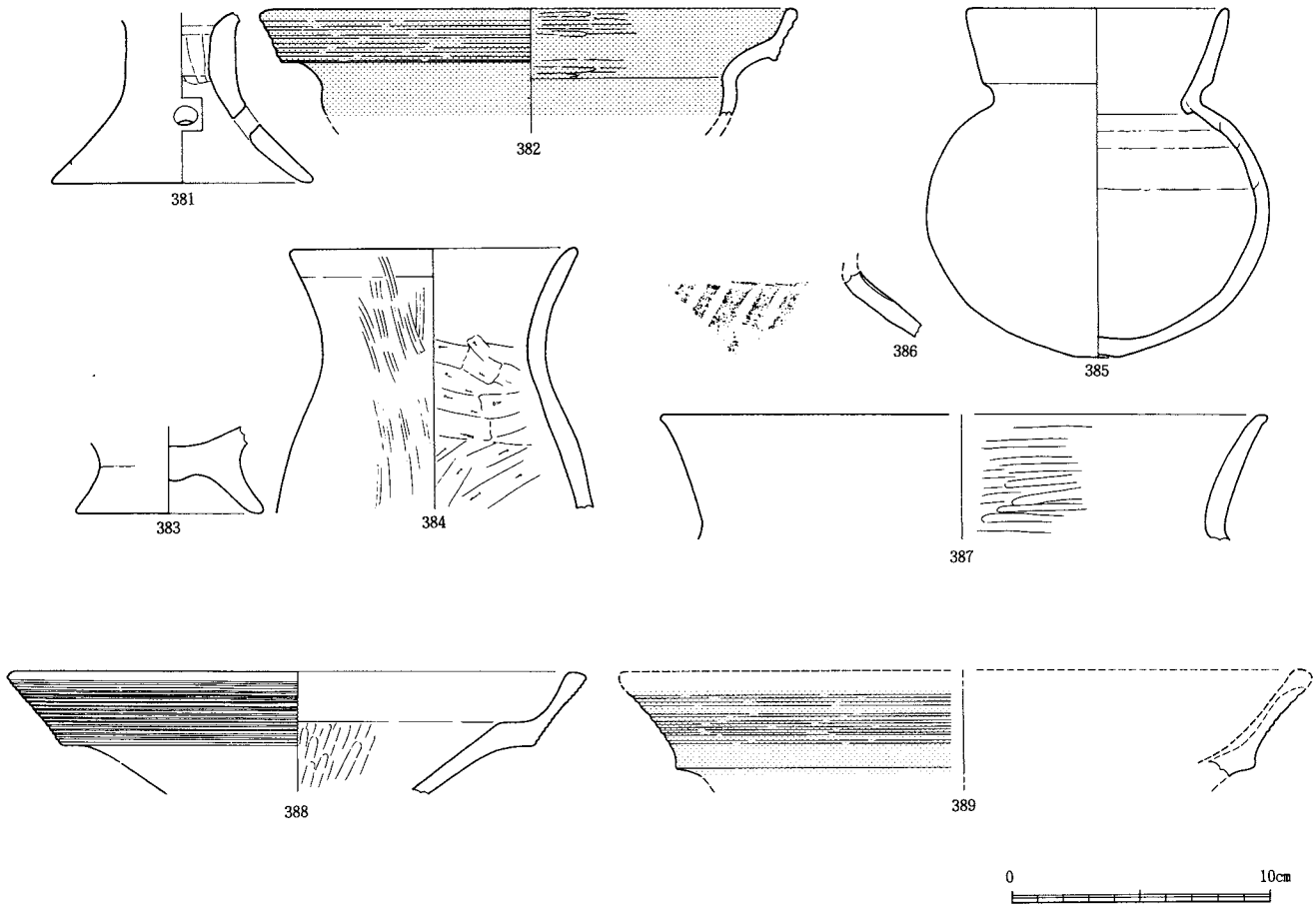
第90図　32号土坑出土土器(2)（１／３）



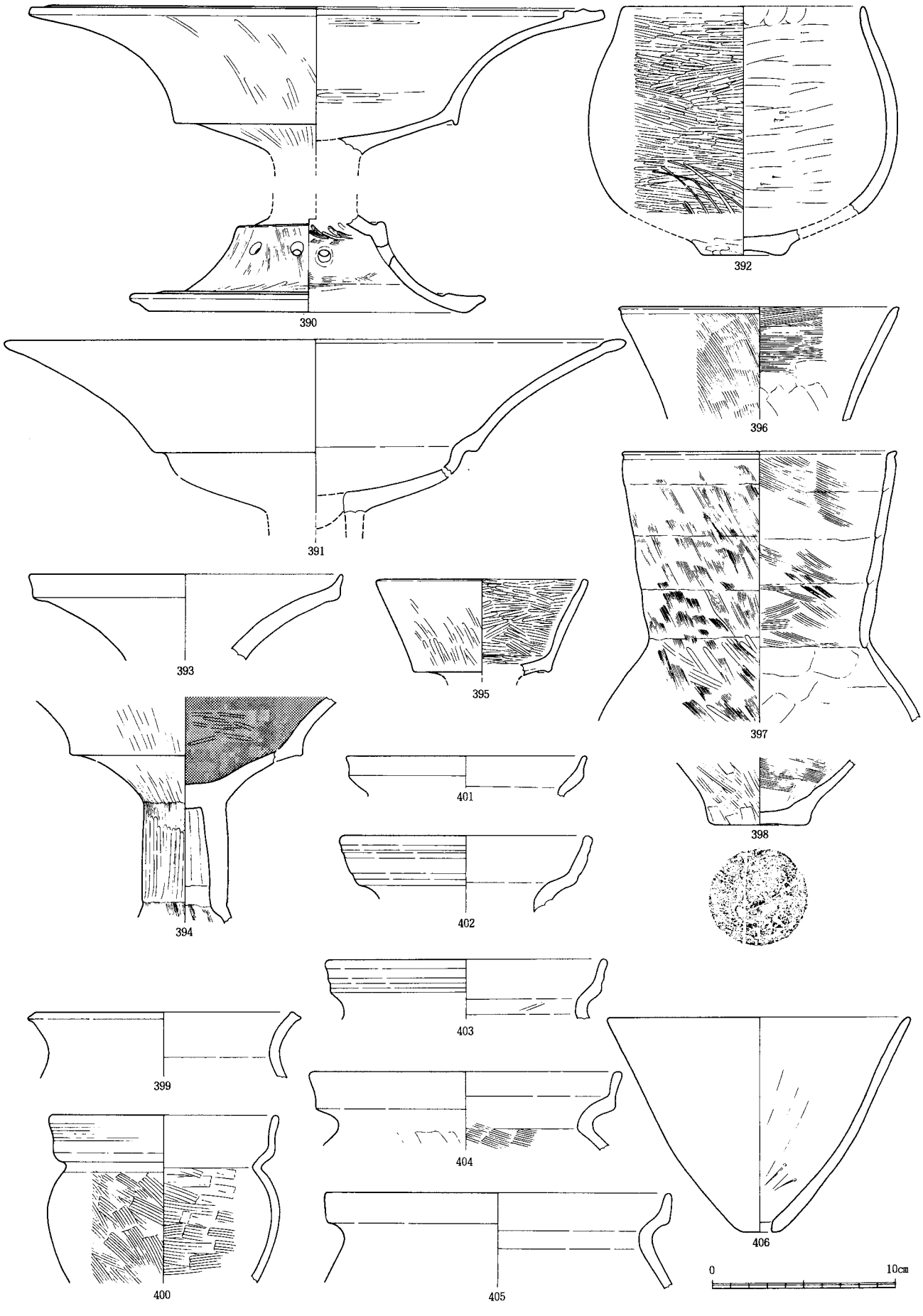
第91図　32号土坑出土土器(3)（１／３）



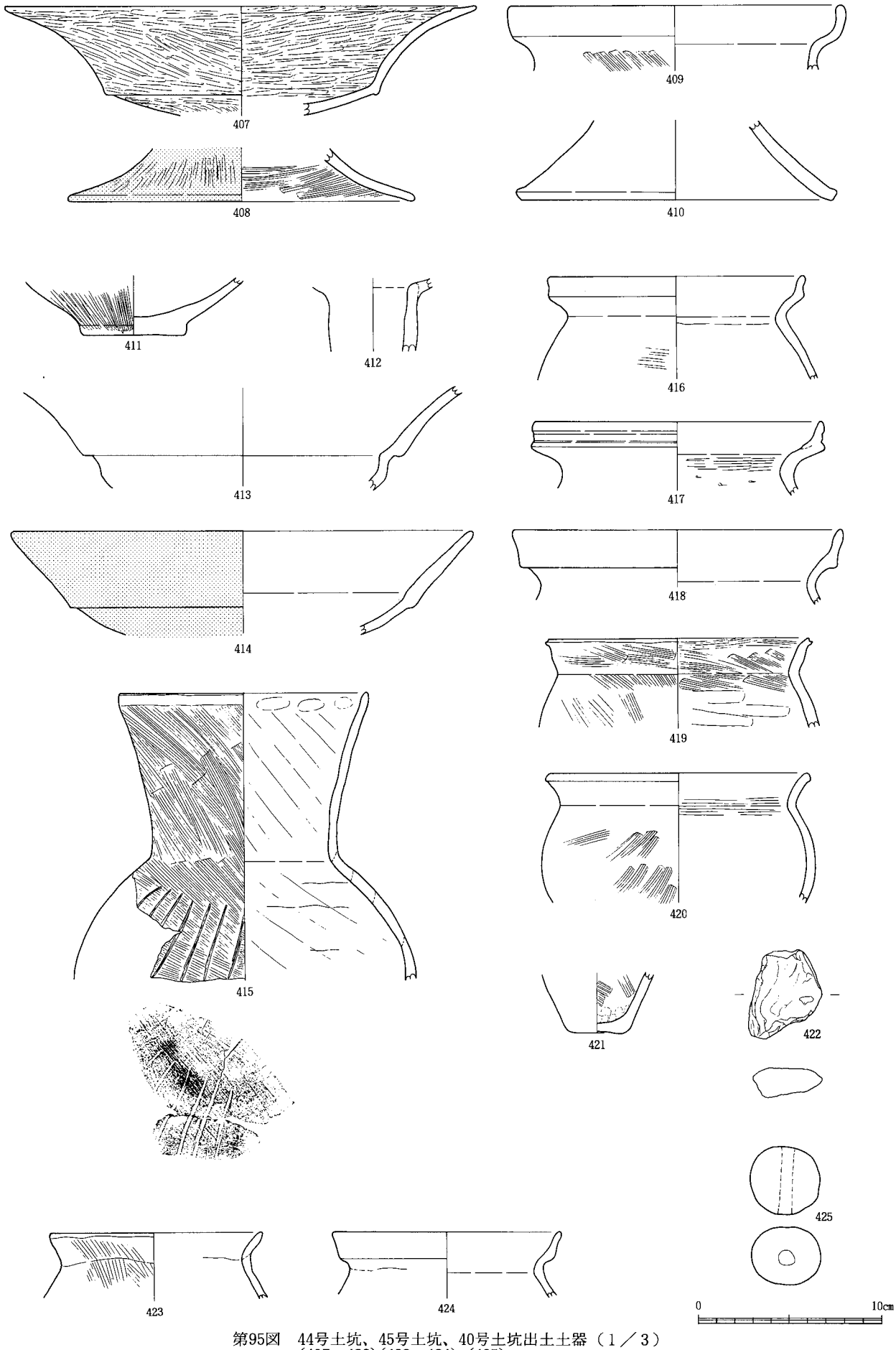
第92図　108号土坑、110号土坑出土土器（１／３）
(370～377)(378～380)



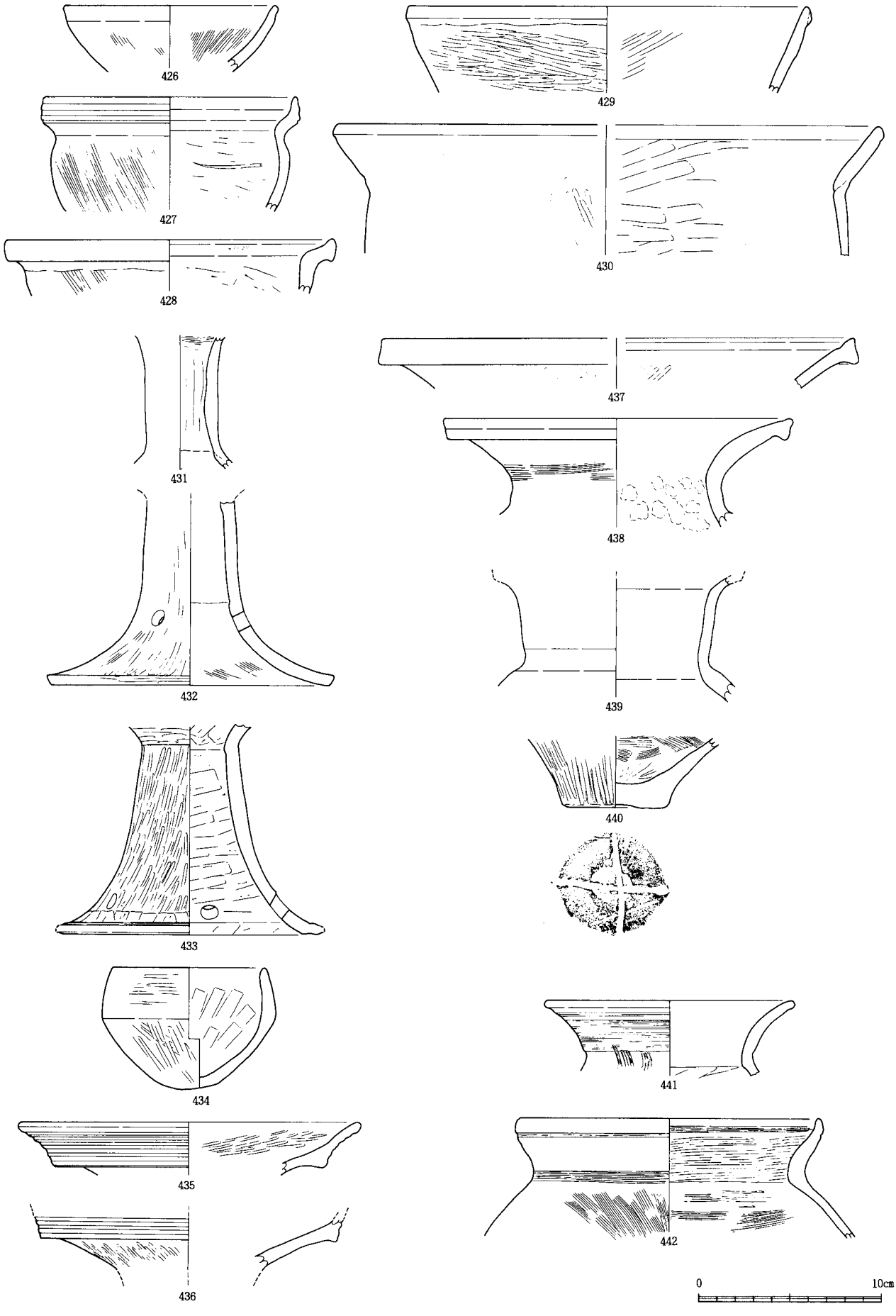
第93図　70号土坑、71号土坑、73号土坑、74号土坑、77号土坑、98号土坑出土土器（１／３）
（381）　（382）　（383、384）（385～387）（388）　（389）



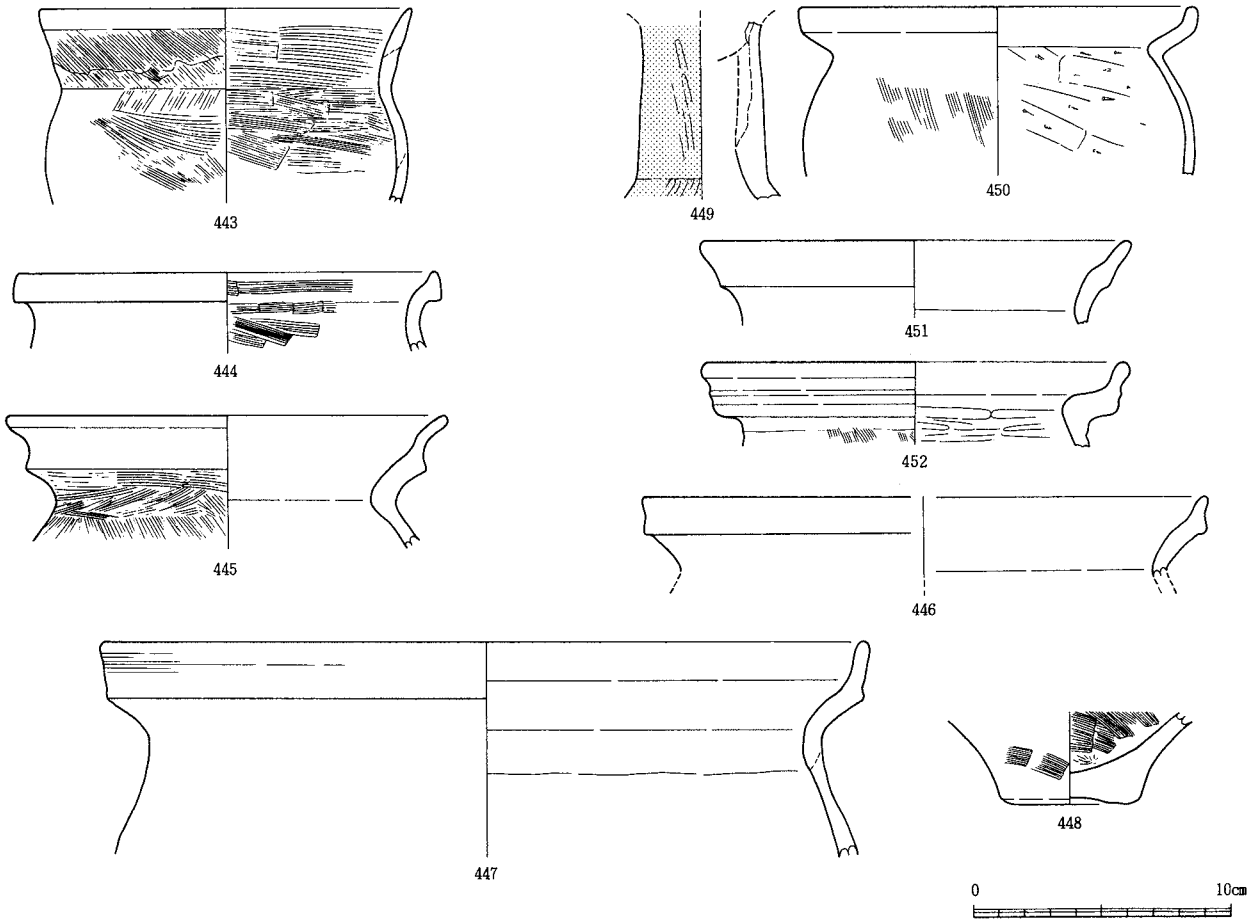
第94図　41号土坑出土土器（１／３）



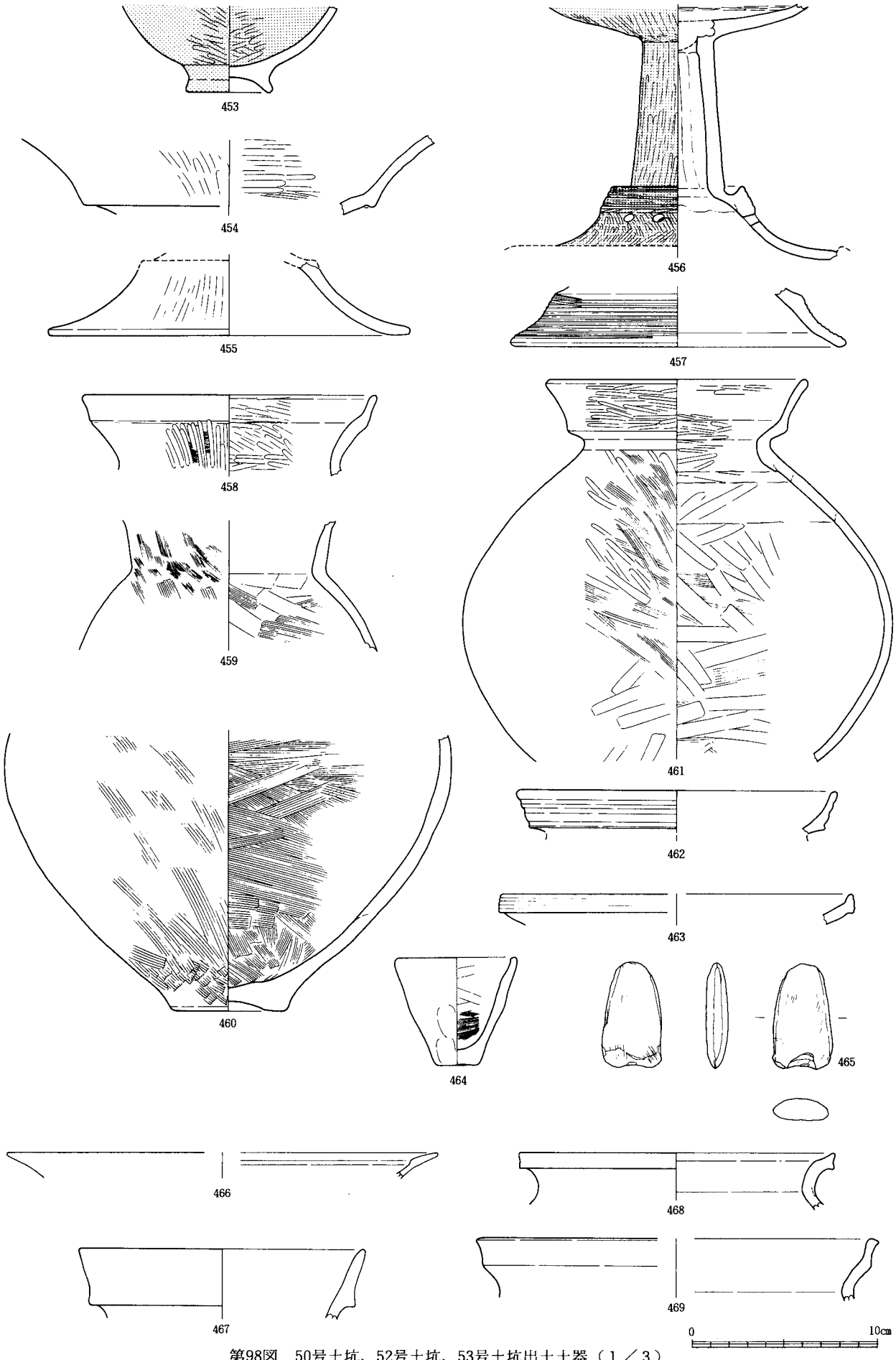
第95図　44号土坑、45号土坑、40号土坑出土土器（１／３）
(407～422)(423～424)（425）



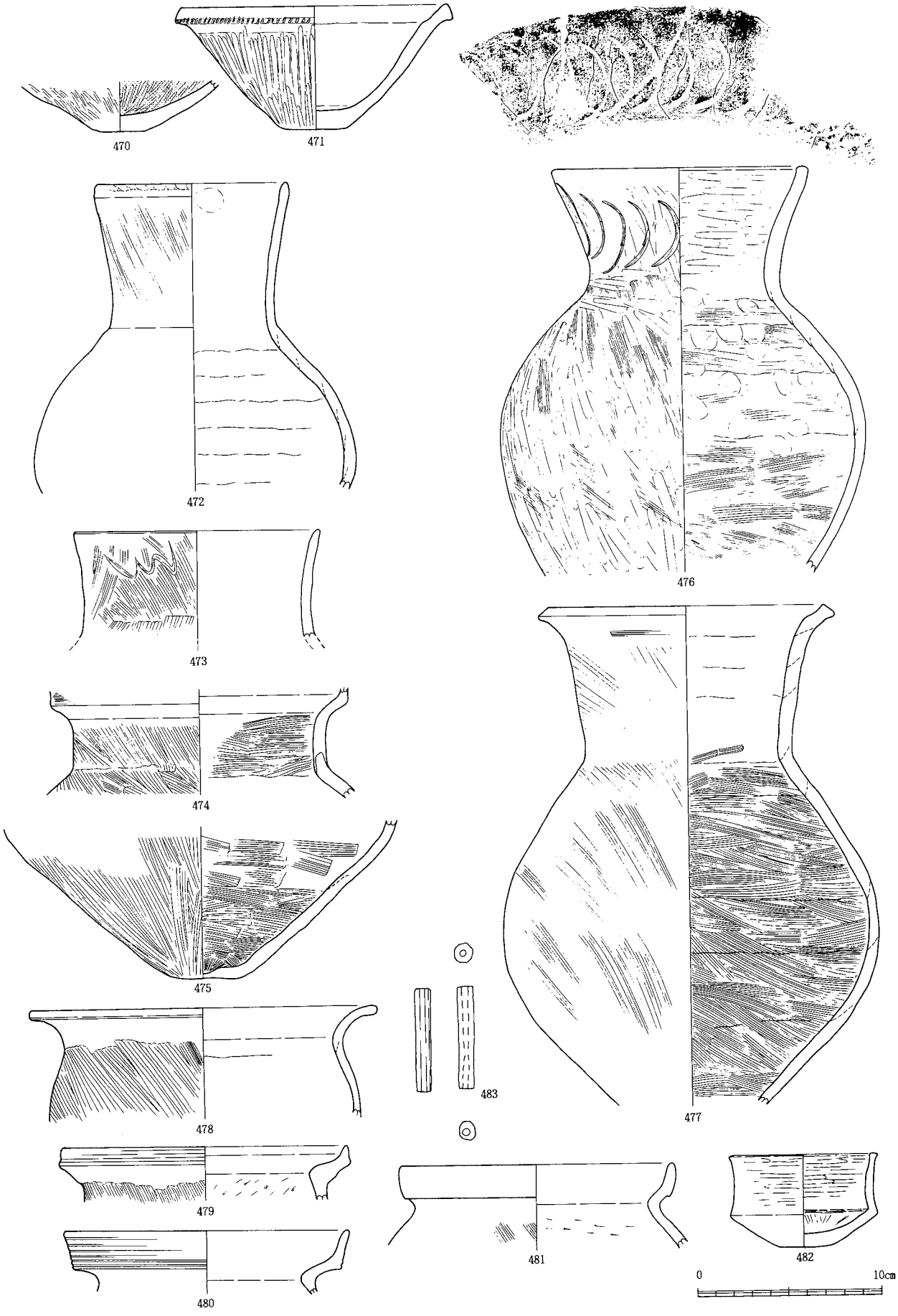
第96図　47号土坑出土土器(1)（１／３）



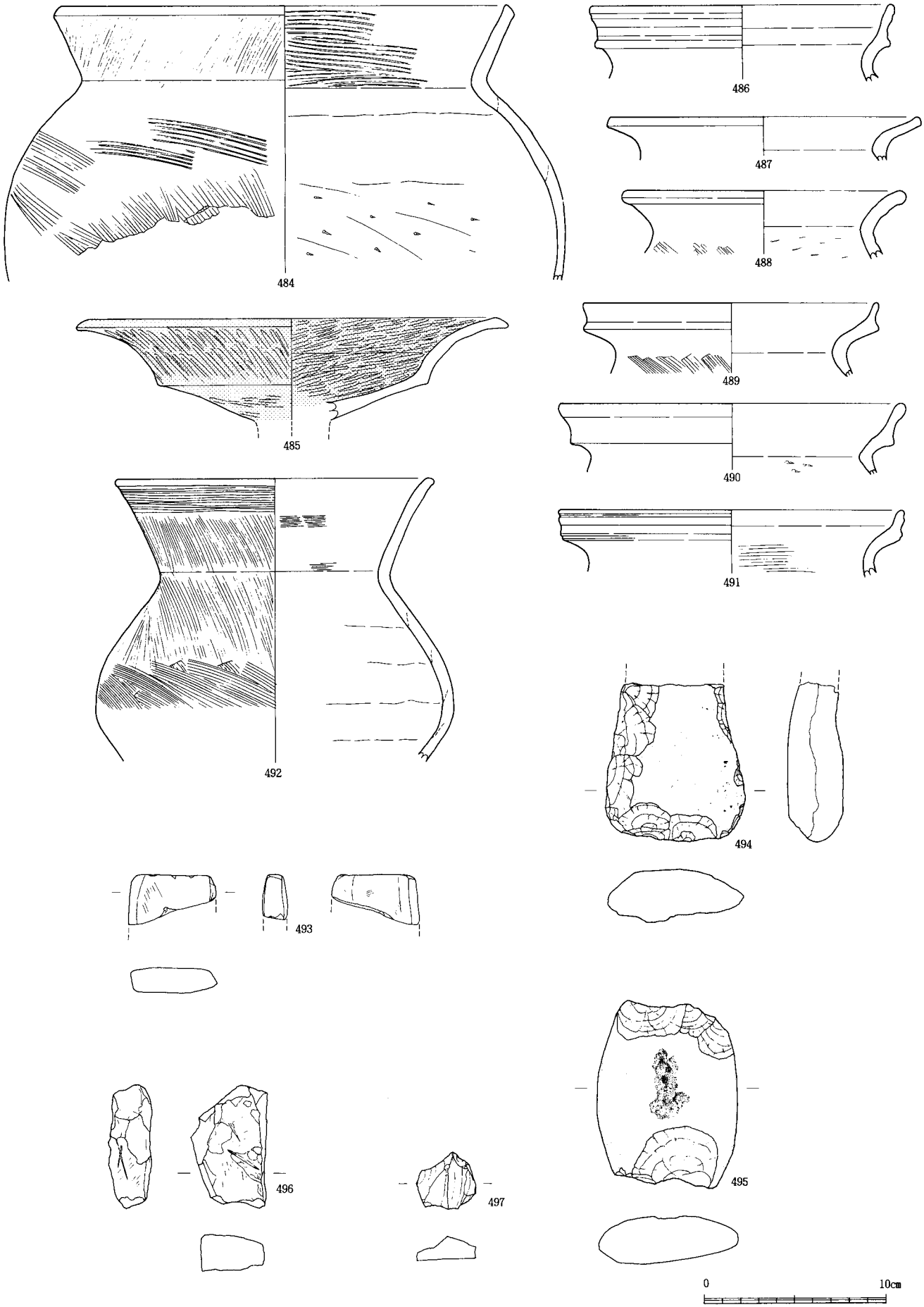
第97図　47号土坑(2)、49号土坑出土土器（１／３）
（443～448）（449～452）



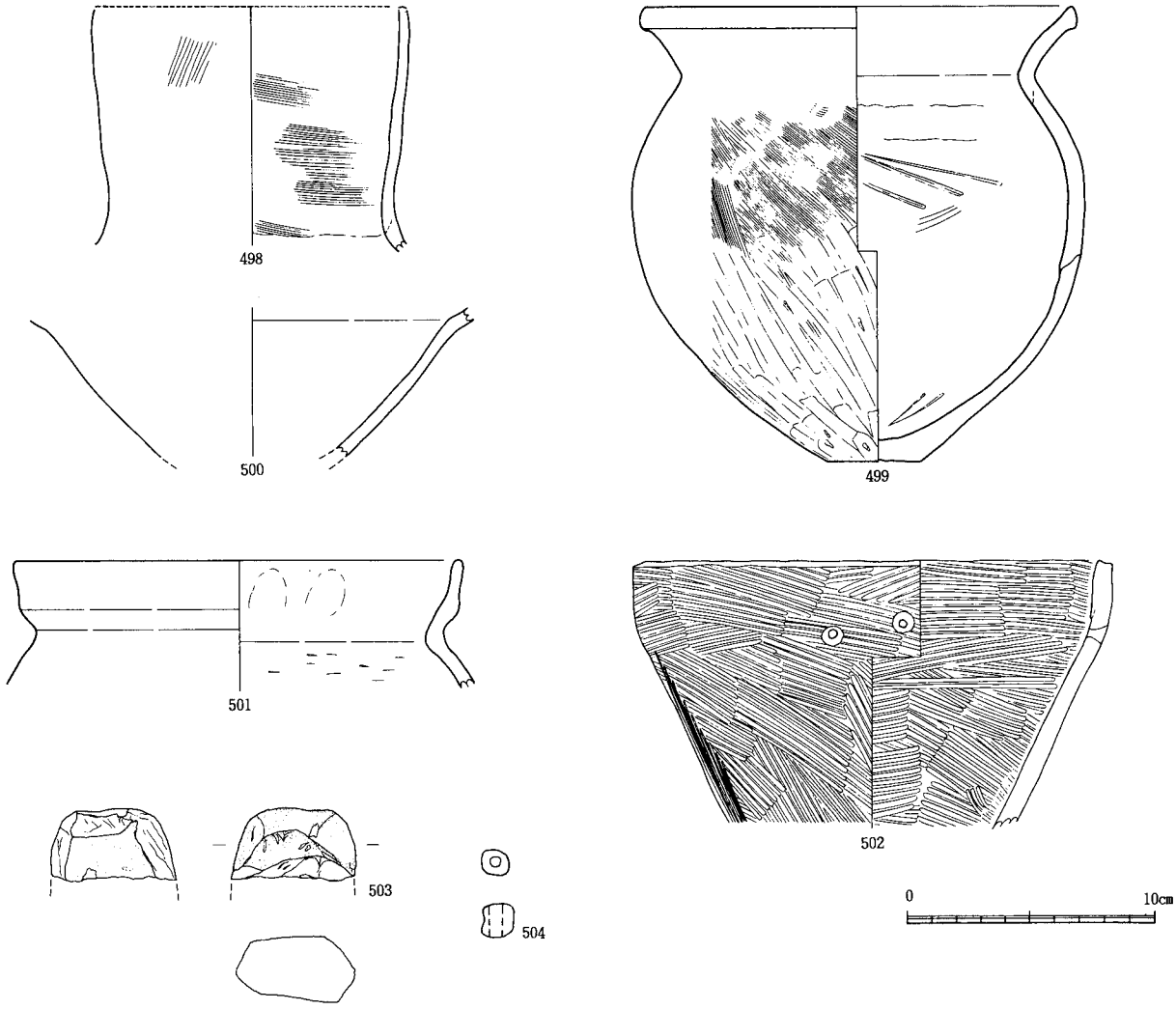
第98図　50号土坑、52号土坑、53号土坑出土土器（１／３）
（453～464）（465）（466～469）



第99図　包含層出土土器(1)（１／３）Ⅰ－39区（483は原寸）



第100図　包含層出土土器(2)（１／３）



第101図　ピット出土土器（１／３）（504は原寸）

第3表　遺　物　観　察　表

冬　野　遺　跡

凡　例

遺物観察表は、各遺構―挿図毎に表組みした。

〔番　　号〕挿図中の遺物番号（通しNo.）を記入。

〔出土地点〕各遺構内の出土層位・地点、遺物取り上げ番号（挿図の遺物出土状態図の番号に対応する）を記入。「1次－3」は第1次土器群の取り上げ番号(3)を示している。

〔器　　種〕大まかな器種分類によるものであり、通例の呼称に準拠した。

〔法　　量〕土器の法量をcm単位で示した。略号は以下の通りである。

A：口径、N：頸部径、M：胴部最大径、B：底径（脚径）、H：器高、NH：頸部径の高さ（口縁部からの）、MH：胴部最大径の高さ、C：容量、L：長さ、W：幅、G：重量(g)

〔調 整 等〕器面の最終調整を記入。口縁部－口、体部－体、外面－外、内面－内などとした。

〔色　　調〕器面の標準的な部位（黒斑、赤化等のない外面）の色調を記入。褐、赤褐、橙、淡黄橙、灰白にあてはめた。淡黄橙色が最も一般的な色調であった。

〔そ の 他〕その他の観察事項を記入。文様、赤彩、転用、他遺構との接合等。

〔実測番号〕実測原図の整理番号。土器に注記した番号であり、実物との照合の便を図った。

第17図　１号竪穴住居跡(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
1	西南区 東北区	鉢（高杯）	A:25.3, C:0.7	内外ともミガキ	橙	内外とも赤彩	291
2	床－１	高　杯	A:19.2		淡黄橙	東海系	316
3	〃－S	鉢	M:12.3, B:3.0 C:0.7	外体下半ケズリ	灰　白		275
4	土坑アゼ南	小型高杯		内ミガキ	橙	100号土坑	321
5	東南区焼土	小型高杯	A:13.0, C:0.3	内外ともミガキ	褐	薄作り	322
6	内側周溝	小 型 鉢	C:0.3	外ケズリ後ミガキ	灰　白	外赤彩	332
7	東北コーナー フク土中	〃			赤　橙		167
8	アゼN フク土(床含む)	小型器台	N:2.8	外ケズリ後ミガキ	灰　白		289
9	アゼE床	〃	B:10.4	外ミガキ	淡黄橙		323
10	床－４	〃	A:8.8, H:8.6 N3.9, B:11.3 NH:2.5	外ミガキ、杯内ケズリ、後ミガキ、脚内ハケ	灰　白	脚１部欠	315
11	床－９	〃	A:7.2, H:8.2 N:3.2, B:10.9 NH:2.3	外ケズリ後ミガキ、 脚内ハケ	淡黄橙	ほぼ完	279
12	床－13	器　台	A:16.6	内外ミガキ	橙	受部完	280
13	床－12	無頸壺	A:9.1, H:14.7 M:17.7, B:12.7 MH:7.0, C:2.1	外ミガキ、内ケズリ、後ミガキ	〃	蓋結束穴２ケ所、 底部に焼成前の補修痕	313
14	床－13	直口壺	N:5.0		灰　白		330
15	フク土東北	〃			〃		317
16	床－３・４ 西南フク土	〃		内ハケ	〃		440
17	アゼNフク土	甕	A:17.0, N:14.9 NH:4.1	体内ケズリ	赤　褐		287
18	床－４	〃	A:17.0, N:14.9 NH:3.1	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		319
19	西北フク土	〃	A:15.8N:12.7 NH:2.6		〃	口縁下端にキザミ	288
20	土坑アゼ南	〃	A:17.1, N:15.1 NH:2.4	体内ケズリ	橙	100号土坑	286
21	床－10	〃	A:16.8, N:14.8 NH:2.9	体内ケズリ	褐		312

第18図　１号竪穴住居跡(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
22	床－８	甕	A:14.8, M:20.5 N:12.8, NH:2.7 MH:11.0, C:4.2	体外ハケ後ケズリ、 内ハケ後ナデ	淡黄橙		276
23	床－１	〃	A:16.6, H:22.9 M:20.1, N:14.7 B:2.8, NH:2.6 MH:8.4, C:4.0	体外ハケ、内ハケ	〃	口縁端部に２ケ所キザミ	290
24	床－11	〃	A:17.6, H:22.1 M:19.1, N:15.8 B:2.4, NH:2.3 MH:7.9, C:3.7	体外ハケ後ケズリ、 内ケズリ後ナデ	〃		284
25	東北区フク土	〃	A:16.4, N:13.3 NH:2.3		橙		442
26	床－13	〃	A:15.1, N:13.3 NH:1.6	体外ハケ、内ナデ	赤　褐		441
27	北西コーナー付近壁溝	〃	A:16.5, N:15.2 NH:1.8		淡黄橙		320
28	床－５	〃	A:15.0, M:17.2 N:12.8, NH:2.5 MH:8.7	体外ハケ、内ハケ後中位以下ケズリ	〃	２に類似	324
29	床－７	〃	A:15.2, N:12.4 NH:2.1	体外後ハケ	〃	器壁薄い	277
30	床－４	〃	B:1.7	体外ハケ、内ケズリ	灰　白 淡黄橙		292
31	西南・東南区フク土 床－16	〃	A:25.2, M:27.0 N:21.0, NH:4.8 MH:11.9	〃	橙	山陰系	281

第19図　１号竪穴住居跡(3)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
32	床－25	壺	A:12.5, H:28.0 M:22.0, N:10.5 B:4.6, NH:3.0 MH:14.5, C:5.0	体内外ハケ後ナデ	淡黄橙 ～灰白		283
33	床－３・27 炉横ピット	〃	M:25.1, N:8.8 B:6.3, C:5.0	内ハケ、ナデ	〃	外面、赤彩	285
34	床－10	〃	A:11.1, H:20.7 M:18.6, N:5.9 B:6.0, NH:4.6 MH:12.3, C:2.4	外体下半ケズリ内ハケ	〃	外面赤彩か？底部元は径３cm程の平底	278
35	床－15	〃	M:15.6, N:7.1 B:6.8, MH:12.5 C:6.7	体外細かい丁寧なハケ 内ナデ	〃	胎土:0.5mm前後の石英を主体とする均質な砂粒を多量含む。2mm前後の丸い赤色流紋岩多い。	282
36	床－５	〃	A:13.5, M:26.6 N:8.4, NH:4.4 MH:14.9	外ミガキ、内ナデ	〃		314
37	フク土 (床含む)	砥　石	L:6.15, W:6.05 G:20.7			軽石	石１

第23図　２号竪穴住居跡(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
38		鉢	A:15.0, M:13.1 N:12.9, NH:0.9 MH:2.4	体外ハケ、内ナデ	橙		298
39	5	〃	A:18.0, M:15.2 N:14.0, NH:3.0 MH:5.0	体内外ハケ	橙		310
40	5	〃	A:13.7, H:7.9 B:6.1, C:0.4	内外ハケ	橙　褐	蓋に転用	299
41	5	〃	B:2.8	内ミガキ	赤　褐	内外赤彩か？	438
42	2	高　杯	A:25.1		灰白～ 淡黄橙		303
43		〃			淡黄橙	スタンプ文、外面赤彩	293
44	上層	器　台	A:21.2, H:16.5 B:18.5		〃		300
45	5	〃	A:22.1		灰　白	46と同一個体	439
46	5	〃	B:20.4	外ミガキ	橙	透し孔４	307
47	6	台付壺			淡黄橙		435
48	6	壺	N:10.4	外ハケ	〃		304
49	5	〃	B:5.8		橙	底に板圧痕	437
50	1	〃	M:26.4, N:10.6 B:4.2, C:6.3	体外ミガキ、内ハケ	淡黄橙		302
51	6	甕	M:17.1, N:14.7	体内外ハケ	〃		301
52	5	〃	A:16.3, N:12.1 NH:3.9		〃		311
53	5	〃	A:14.3, N:9.6 NH:2.9		橙	口縁部外面にキザミ	308

第24図　２号竪穴住居跡(2)

番号	出土地点	器　種	法　量 (cm)	調　整　等	色 調	そ の 他	実測番号
54	5	甕	A:14.0, N:11.7 NH:1.5	体内ハケ	橙　褐	外面キザミ	309
55	4	〃	A:15.4, N:13.5 NH:1.6		淡黄橙		306
56	6	〃	A:16.4		橙		436
57	フク土	〃	A:13.4		橙　褐		295
58	〃	〃	A:18.9, N:15.7 NH:3.4		褐		305
59	フク土上層	〃	A:15.4, H:15.5 M:14.7, N:12.9 B:2.8, NH:2.5 MH:6.6, C:1.6	体外ハケ、内ケズリ	橙		294
60	5	有孔甕	M:18.5, B:2.8	体外ハケ、内ナデ	橙　褐	焼成前穿孔か	342

第24図　３号竪穴住居跡

61		管　玉	L:1.7, W:0.6 G:0.5		淡　緑	表面風化	石９

第24図　５号竪穴住居跡

62	フク土	鉢	A:12.1, H:5.4 B:3.8, C:0.3	内外後ナデ	灰　白		484
63	南アゼ、床	〃	A:8.2, H:4.9 B:4.0, C:0.1		淡黄橙		327
64	フク土	高　杯	A:17.5		橙		318
65	〃	〃		外ミガキ、内ハケ	灰　白		326
66	南アゼ、床	〃		外ミガキ	〃	外面赤彩	325
67	ピット	〃	N:3.7, B:13.5	外ミガキ内ケズリ	〃	〃	213
68	1	〃		外ハケ後ミガキ	褐		329
69		〃		外ミガキ	淡黄橙	杯部赤彩	212
70	3	甕	A:18.6, N:15.9 NH:2.2	体外ハケ	〃		328
71	フク土	砥　石	L:6.9, W:3.5 G:17.6			軽石	石２

第70図　１号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
72	１次－３	高　杯	A:25.6	内外ともミガキ	灰　白～　褐		8
73	６層下位～９層	〃	A:26.8		橙		429
74	１次－５	〃			淡黄橙		430
75	北東１次～１層	〃			灰　白		433
76	西　〃	〃	B:23.0	外ミガキ、内ハケ	橙		432
77	北東　〃	〃			灰　褐		434
78	１次－３	〃			橙	透し穴２孔１対	9
79	１次～１層	器　台	A:22.4		〃		11
80	１次－５の下	〃		外ミガキ	〃		36
81	１次－４	壺	A:13.6, N:10.6 NH:5.1	外ミガキ、口内ミガキ、体内ハケ	淡黄橙	外面～口頸部内面赤彩	4
82	１次～５層上面	鉢	B；7.0	内外ともミガキ	橙　褐		1
83	１次－５	甕	A:14.8, N:10.8 NH:2.1		灰　白		431
84	１次－２	壺	A:15.4, N:10.4 NH:3.4		淡黄橙		10
85	１次	甕	A:14.1, N:13.3 NH:1.4	体外ハケ、内ケズリ？	淡黄橙	外面スス	12
86	１次－５	〃	A:16.5, N:13.6 NH3.0		黄　褐		7
87	５～６層	〃	A:15.2, N:13.3 NH:2.0	内外ともハケ	橙		2
88	１次～１層	〃	A:19.2, N:16.5 NH:1.8	体外ハケ	淡黄橙		13
89	１次－４	〃	A:17.0, N:14.9 NH:2.8	体内ケズリ	〃		5
90	１次－５	〃	A:17.2, N:13.4 NH:3.3	体外ハケ、内ケズリ	〃	口縁部外面キザミ	6
91	１次－５の下	〃	A:19.9, N:16.8 NH:2.9	体内ナデ	〃	肩部外面刺突列点	3
92	１次－１	〃	A:18.2, H:23.0 M:21.0, N:15.2 NH:3.0, MH:10.0 C:4.6	体外ハケ、内ケズリ	灰白～灰　褐	月影式甕	42

第71図　３号土坑(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
93	南上層40cm	鉢	A:16.0, N:12.5 NH:2.9	体内ケズリ	淡黄橙	10号土坑（北）－60cmと接合	446
94	１次－１	〃	A:17.6, H:10.2 M:15.7, N:15.6 B:2.3, NH:1.4 MH:2.1, C:1.2	体外ハケ	〃	外面スス	16
95	１次－４ ２次－３ 上層－40cm 北東１～３層	〃	A:26.1, N:19.9 NH:5.2	口縁内面ミガキ 体内ケズリ	〃		31
96	２次－３	高　杯	A:26.3	内外ともミガキ	〃		24
97	２次－２	〃	A:27.0		〃	10号土坑206と同一か	32
98	坑底、１次－４ 中層アゼ内	〃	A:26.9		褐 淡黄橙	内外とも赤彩（炭化）、透し孔数不明	66
99	１次－４	〃			淡黄橙		427
100	１～３層	〃			〃		38
101	１次－４	〃		外ミガキ	〃	外面赤彩、内面不明	428
102	２次－３	〃		〃	〃	有段脚、透し孔あり	27
103	２次－３ １次－６	〃		〃	〃	透し孔、２孔１対３ケ所	424
104	２次－５	台付壺	A:10.5	内外ともミガキ	〃	内外面赤彩	35
105	上層－40cm	〃	B:9.4		灰　白		448
106	１次	壺	A:14.3		淡黄橙		445
107	１～３層	器　台	A:21.3		〃		443
108	１次－３ ２次－２	壺	A:23.1, N:13.1 NH:7.0	外ハケ後ミガキ、内ハケ	〃	17号土坑293と同一個体	17
109	上層－40cm	〃	N:16.4	内外ともハケ	橙		447
110	３層 ２次－３	〃	A:18.9, N:13.1 NH:8.0	頸部外ハケ後ミガキ 内ハケ体外ミガキ内ハケ	〃		29
111	２次－２ １次－６	〃	N:12.8	内外ともハケ	淡黄橙		34

第72図　３号土坑(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
112	１次－４	壺	N:14.0	頸内外ハケ、体内ケズリ	灰　白		19
113	２次－３ １次－６	〃	A:17.0, M:25.9 N:10.4, NH:9.6 MH:20.0, C:7.5	頸部内外ともハケ 体外ハケ内ナデハケ	〃		33
114	２次～床	〃	A:15.1, N:12.6 NH:4.5	口頸部ヨコナデ 体内ケズリ	淡黄橙	12号土坑北半上層、第３～４次床面と接合	21
115	１次－６	〃	A:15.9, N:12.6 NH:4.3	体内ケズリ	〃		14
116	２次－１	〃	A:12.6, H:23.9 M:21.5, N:11.8 B:4.4, NH:2.5 MH:12.0, C:4.2	体内外ハケ	〃	外面スス	343
117	４層、２次－２	〃	B:6.1	外ハケ、内ケズリ	橙		490
118	４層、２次－３	〃	B:7.0	外ミガキ、内ハケ	淡黄橙	底部にヘラ記号	361
119	２次－３	〃	A:17.2, M:19.3 N:14.8, NH:3.5 MH:11.0	体外ハケ、内ケズリ	灰　褐	肉厚、擬凹線－貝殻	25
120	１次－３	甕	A:15.7, M:19.2 N:13.7, NH:1.8 MH:8.1	体内ケズリ	橙		15
121	２次－３	〃	A:9.4, N:7.9 NH:2.0	体外ハケ、内ナデ	褐		26
122	１次－６	〃	A:12,7, N:11.4 NH:2.4	体内ケズリ	灰　白		37

第73図　３号土坑(3)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
123	東２次～床	甕	A:15.8, N:13.7 NH:2.6		灰　白		22
124	１次－７	甕	A:16.8, N:14.1 NH:2.5		淡黄橙		422
125	北東１～３層	〃	A:18.5		〃	12土坑168と同一個体、14号土坑第２次と接合	444
126	１次－４	〃	N:17.4		橙		425
127	１次－７	〃	N:16.6		淡黄橙		423
128	２次－５ １次－４、西床		A:14.7, N:12.4 NH:2.2	体外ハケ、内ナデ	橙		18
129	２次－２図下	〃	B:3.5	内外ハケ 側底・外底ケズリ	灰　白		30
130	２次－３・５ １次－４の下		A:28.5, N:23.1 NH:3.3	体外ハケ、内ケズリ	橙	肩部に刺突列点	28
131	１次－２・６	〃	A:19.8, H:22.9 M:19.9, N:15.4 B:1.0, NH:3.5 MH:11.2, C:4.6	体外ハケ、内ケズリ	灰　白	月影式甕	61
132	１次－４	焼土塊	L:3.2, W:2.1		淡黄橙		426

第74図　12号土坑(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色 調	そ の 他	実測番号
133	３～４次、床	高　杯	A:23.3	内外ともミガキ	灰　白	内外面とも赤彩	399
134	１次－３	〃	A:26.6	〃	淡黄橙		94
135	北２次	〃		〃	橙	内面赤彩外面？	410
136	１次－３	〃		〃	〃	〃 135と同一個体	95
137	１次－４	台付鉢	A:17.5	〃	〃		92
138	１次－１・４ ２次－３下	高　杯	B:11.3	内外ともミガキ	橙　褐	内外面とも炭化物付着	88
139	２次－５	〃		外ミガキ	淡黄橙		85
140	アゼ中層	〃		〃	〃		98
141	１次－４	〃			橙		406
142	坑底	〃		外ミガキ	褐	外面に赤彩痕	409
143	１次－３	〃	B:19.9	外ミガキ、内ハケ	淡黄橙		90
144	アゼ中層	〃	B:20.2	外ミガキ	灰　白	外面赤彩	100
145	２次－３	無頸壺	M:10.8, B:4.4	外ミガキ、内ケズリ	橙		87
146	アゼ中層	小型高杯	A:10.9	内外ともミガキ	灰　白	内外とも赤彩？	102
147	南２次	器　台		〃	〃	外面赤彩	400
148	南２次	壺（器台）		外ミガキ	橙		402
149	２次－３	台付壺	A:13.5	内外ともミガキ	灰白～ 淡黄橙	20号土坑の２・３層と接合	80
150	１次－３	〃	B:11.1	外ミガキ	淡黄橙	内外とも赤彩、149と同一個体	103
151	アゼ中層	壺	A:19.1	頸部外ハケ	〃		101
152	２次－３	〃	A:13.9, N:9.8 NH:7.3	外ハケ、頸部内ハケ 体内ケズリ	〃		82
153	４次－３	〃	A:15.7, N:11.3 NH:7.1	内外ともハケ	灰　白		73
154	１次－３ 北２次	〃	A:16.4, N:11.0 NH:7.8	〃	〃	内面スス、頸部に記号文	96
155	アゼ中層	〃	A:14.6, N:8.9 NH:8.7	〃	〃		99

第75図　12号土坑(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
156	２次－７	壺	M:23.4, N:10.0	体外ミガキ、内ナデ	淡黄橙		93
157	１次－３	〃	A:16.1, N:12.6 NH:2.6		褐		91
158	アゼ中層	〃	A:14.3		灰　白		407
159	北３次 ２次－６	〃	A:13.2, N:9.8 B:3.3, NH:3.1		淡黄橙	外面スス	77
160	２次－４	〃	A:15.3, M:18.5 N:13.1, NH:4.2 MH:11.8	体外ハケ、内ケズリ	〃	〃	78
161	２次－３	甕	A:19.0, N:15.6 NH:3.9	〃	〃	〃	79
162	４次－４	〃	A:18.6, M:17.7 N:14.3, NH:2.4 MH:7.4	外ハケ、内ナデ	灰　白		74
163	坑底	〃	A:19.8, N:16.7 NH:2.3		赤　褐		104
164	アゼ中層 ２次－６ ２次－７	〃	A:19.3, N:16.1 NH:2.1	体外ハケ、内ケズリ	橙		97
165	北半上層	〃	A:15.9, N:13.1 NH:2.7		灰　白		408
166	３～４次 床北半上層 １次	〃	A:14.6, N:11.4 NH:2.9	内外ともハケ	橙	肩部に刺突列点	89
167	北３次、坑底 ２次－３ 南３次	〃	A:15.9, M:19.9 N:12.8, NH:2.5 MH:10.0, C:4.1	体内外ともハケ	淡黄橙	３号土坑東２次～床と接合	23
168	２次－６	〃	A:19.2, N:14.9 NH:3.8	体外ハケ、内ケズリ	〃	３号土坑125と同一個体14号土坑第２次と接合	83
169	２次－３	〃	A:20.6, N:17.2 NH:3.0		橙		388
170	３～４次、床	〃	A:21.3, N:19.3 NH:3.3	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		75
171	２次－５	〃	A:19.7, M:20.9 N:15.4, NH:3.3 MH:10.0	体内外ハケ	橙	肩部に刺突列点	84

第76図　12号土坑(3)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
172	４次（坑底）	甕	A:29.8, M:31.9 N:25.1, NH:4.4 MH:14.6, C:19.6	体外ハケ、内ナデ	橙		155
173	１次－４	〃	A:15.6, N:13.6 NH:3.0		淡黄橙		397
174	３～４次、床	〃	A:16.7, N:12.8 NH:3.4		〃		76
175	２次－３	〃	A:13.2, N:10.2 NH:3.4	体内ケズリ	〃		81
176	南２次	〃	A:13.4, N:10.4 NH:3.1		橙	10号土坑218と同一個体	401
177	２次－５	壺	B:5.0	内外ともハケ	灰　褐		398
178	２次－１	甕	B:1.9	外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		86

第77図　７号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
179	南－180cmまで（５・６層）	鉢	A:18.1	内外ともミガキ	淡黄橙		418
180	北－150cmまで（３・４層）	壺	N:9.5	〃	褐	内外面とも赤彩	416
181	床面近く	脚　台	B:13.5	外ミガキ、内ハケ	淡黄橙		40
182	南－102cm －180cm （3・5・6層）	壺	A:13.9, N:10.7 NH:4.4	内外ともミガキ	橙		39
183	南半－80cmまで（２層）	甕	A:17.4, N:13.1 NH:3.6	体内ケズリ	淡黄橙		420
184	南－180cmまで（５・６層）	〃	A:16.5, N:12.9 NH:2.0	体内ナデ	灰　褐 淡黄橙		41
185	南半－80cmまで（２層）	〃	A:17.2, N:13.2 NH:3.4		橙		419
186	南－180cmまで（５・６層）	有孔鉢	B:3.0	外ハケ	淡黄橙		417

第77図　８号土坑

187	アゼ－80cm	器　台		内外ともミガキ	淡黄橙		413
188	アゼ	甕	A:12.0		灰　褐	12号土坑３～４次床面と接合	414
189	北半底まで	〃	A:18.0, N:14.5 NH:2.5		灰　白		415
190	アゼ	〃	A:16.3, N:12.3 NH:3.1		淡黄橙		412

第78図　９号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
191	３次－２	鉢	A:13.1, H:7.9 B:5.1, C:0.5	内外ともミガキ	橙	外面スス、底部に木の葉圧痕	44
192	３次－５	〃	H:11.7, M:11.6 N:10.9, B:3.4 C:0.8	内外ともケズリ	褐		48
193	３次－１	蓋（鉢）	A:13.0, H:5.4 B:4.1, C:0.2	内外ともミガキ	淡黄橙		161
194	３次－４・７	壺	A:16.1, N:11.2 NH:9.4	内外ともハケ	〃		49
195	１次－３	〃	M:25.5, B:7.1	外ミガキ、内ハケ	〃	７号土坑（南半）－80cmまでと接合	52
196	３次－２	〃	A:13.6, N:9.0 NH:4.9	外ハケ後ミガキ、内ハケ	〃		43
197	３次－３	〃	A:15.0, H:29.0 M:18.9, N:10.8 B:3.4, NH:8.5 MH:17.4, C:3.8	外ハケ、頸部内ハケ 体内ケズリ	灰　白 淡黄橙	頸部内面記号文、外面スス、肩部以上と以下で胎土の発色が異なる	45
198	1次－1・4・5	〃	A:14.9, H:28.0 M:18.4, N；12.0 B:3.5, NH:9.0 MH:17.5, C:3.8	〃	淡黄橙	外面スス	47
199	３次	〃	A:13.3, N:12.4 M:16.8, NH:4.0 MH:9.8	内外ともハケ	〃		50
200	３次－６ 南アゼより －76cm	甕	A:13.2, M:13.1 N:10.8, NH:2.9 MH:7.0, C:1.2	外ケズリ、内ナデ	〃		51
201	５層（２次）	〃	A:16.8, M:16.1 N:13.3, NH:2.7 MH:7.5	体外ハケ	〃		53

第79図　10号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
202	南６～７層（１次）	鉢	A:15.7		橙	外面スス	421
203	アゼ１～５層	〃	B:5.1	内外ともミガキ	〃		63
204	南－100cm	高　杯		〃	淡黄橙	内外とも赤彩	62
205	床面、９層	〃	B:15.4	外ミガキ、脚内ヨコナデ	橙	甕蓋に転用	60
206	北－42cm	〃			淡黄橙	３号土坑97と同一か	64
207	北７層～床	蓋	B:2.0	外ハケ、内ナデ	〃		65
208	－60、150cm	細頸壺	A:9.8	外ミガキ	灰　白		20
209	北－130cm	無頸壺	A:10.0	外ミガキ、内ケズリ	淡黄橙		59
210	アゼ７層～床	壺	N:11.3		灰　白	内外と赤彩	411
211	北－60cm	〃	N:15.8	体内ケズリ	〃	内外とも赤彩(?) 擬凹線櫛状具	56
212	北床	〃	A:13.0, M:11.9 N:9.5, NH:3.3 MH:7.5	外ミガキ、口縁内ミガキ 体内ハケ	橙	外面スス	58
213	北－60cm	〃	A:13.6, N:8.4 NH:3.4	口縁内外ともミガキ	灰　白	12号土坑と接合	55
214	南－30cm －30～80cm	〃	A:15.5, M:21.2 N:11.6, NH:8.5 MH:19.5	外ハケ、口頸内ハケ 体内ケズリ	〃	９号土坑１次－５と接合、外面スス	54
215	１次中央（６層）	〃	A:14.0, M:20.3 N:11.2, NH:10.0 MH:17.5, C:4.0	内外ともハケ	灰　白 淡黄橙	外面スス、胎土に赤褐色粒多量	46
216	北１～６層	甕	A:14.0, N:11.5 NH3.0	体内ケズリ	淡黄橙		404
217	北－30cm	〃	A16.8, N:13.5 NH:2.9	〃	赤　褐		403
218	〃	〃	A:15.8, N:13.2 NH:3.3		橙	12号土坑176と同一個体	405
219	北－30、60cm	〃	A:20.4, N:16.5 NH:3.5	内外ともハケ	淡黄橙		57
220	南－146cm（坑底）	〃	B:2.6	体内外ともハケ 側底ケズリ	橙		335

第80図　34号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
221	炭層中	高　杯		外ミガキ	淡　褐		395
222	西－115cm	壺	N:9.9	内外ともミガキ	淡黄橙		394
223	〃	甕		外ハケ、内ケズリ	〃	肩部に貝殻による刻み	391
224	〃	壺	A:11.3, M:17.4 N:8.9, NH:4.0 MH:11.5	体内外ともハケ	淡黄橙 橙		177

第80図　35号土坑

225	上層焼土面上、焼土面下	高　杯	A:22.4	内外ともミガキ	橙	口縁部内面赤彩	183
226	焼土面上	〃		外ミガキ	〃	杯基部赤彩	183
227	床面	器　台		外ミガキ、受内ミガキ	〃		187
228	床３	鉢	B:5.8		淡黄橙		181
229	床面近く	壺	A:9.3, N:6.3 NH:4.2	体内外ともハケ	灰　白		185
230	床３	甕	B:3.8	体内外ともハケ	淡　褐		387
231	上層	〃	A:12.1, N:10.9 NH:1.6	〃	橙		178
232	焼土面、床１	〃	A:13.5, N:11.9 NH:2.6	体外ハケ、内ナデ	赤　橙		184
233	床１	〃	A:14.9, M:14.4 N:12.6, NH:2.3 MH:6.4	体外ハケ・内ハケ・ナデ	灰　白		182
234	床３焼土面以下－80cm	〃	A:19.3, N:16.4 NH:3.5	体内外ともハケ	淡黄橙		190
235	焼土上面	〃	A:15.2, M:17.0 N:13.2, NH:3.6 MH:10.0	体外ハケ 内ハケ上半ケズリ	橙	被熱変色 36号土坑１と接合	179
236	焼土以下80cm	〃	A:15.8, N:13.4 NH:3.0	体内外ともハケ	赤　橙		384
237	床面	〃	A:16.2, N:12.0 NH:2.8	体内外ともハケ	淡黄橙	口頸部完存	186
238		〃	A:15.4, N:12.9 NH:2.3	体外ハケ、内ケズリ	橙		188
239	床２	〃	A:20.0, N:17.0 NH:3.0	〃	淡黄橙		180

第80図　36号土坑

240		小型高杯		杯内ミガキ	橙		189
241	上層	壺	A:12.0		淡黄橙		382
242	－60cm	甕	A:19.7, N:16.8 NH:3.0	体内ケズリ	〃		383

第81図　14号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
243		鉢	A:26.3	内外ともミガキ	橙		474
244	１次－３	器　台	A:25.0	〃	褐	赤褐色粒多量含む	473
245	１次－１	〃	N:5.3	〃	橙		471
246	南床	〃	A:32.8	〃	灰　白	口縁内外面赤彩	72
247	１次－２	壺　蓋	A:6.5, H:5.0 B:3.6	〃	〃	口縁部外面に鋸歯文	68
248	２次－２、１次	壺	A:17.2, N:9.1 NH:5.5, C:7.2	外ミガキ、口内ミガキ 体内ケズリ後ナデ	淡黄橙	12号土坑２次と接合	71
249	１次－２	甕	A:13.7, N:10.8 NH:2.4	体内外ともハケ	〃		69
250	２次－１	〃	A:18.1, N:14.7 NH:3.3		橙		470
251	アゼ出土 １次－１	〃	B:3.9	内外ともハケ	褐		472
252	１次－１	〃	M:16.2, B:4.0	外ハケ、内ナデ	淡黄橙		70
253	２次－１	有孔鉢	A:15.2, H:10.5 M:12.7, N:12.2 B:2.4, NH:1.8 MH:3.7, C:0.8	体外ハケ、内ケズリ	橙　褐	焼成後穿孔、煮炊に使用後転用か	67
254		焼土塊			橙		493
255	床面	磨　石	L:10.5, W:7.1 G:59.0			５面磨痕 １端敲打痕	

第82図　20号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
256	２・３層	鉢	B:3.2	内外ともミガキ	灰　白	内外面とも赤彩	137
257	西－上層～下層 ２・３層	〃	A:19.0	外ハケ、内ナデ	淡黄橙		164
258	２・３層	甕	A:12.7, N:11.8 NH:2.0		灰　白		390
259	焼土中 ２・３層	〃	A:14.7, N:12.6 NH:2.8	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		165
260	２・３層	〃	A:16.0, N:13.0 NH:3.0	体外ハケ、内ケズリ	〃		166
261	東上層～下層	〃	A:16.7, N:14.4 NH:3.2	体内ケズリ	〃		392
262	〃	壺	B:7.1		〃		393
263	２・３層	甕	B:4.8	外ハケ	〃		389

第83図　17号土坑(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
264	東、西１次	鉢	A:12.3, H:4.3 B:4.9, C:0.2	内外ともミガキ	淡黄橙		154
265	２次－１	〃	A:15.4, H:5.4 B:3.7, C:0.4	〃	橙	外面スス	108
266	東、１次	〃	A:13.8	外ナデ、内ハケ	淡　褐		163
267	東、上層－30cm	〃	A:15.4		橙		157
268	４次－２	〃	B:6.5	内底ミガキ	淡黄橙		150
269	３次－２、図下	〃			〃	外面スス	480
270	３次－２	無頸壺	A:24.3	外ミガキ、体内ハケ後ケズリ	淡　褐		127
271	２次－１ ３次－７ 上～下層	鉢	A:12.6, H:10.0 B:4.9, C:0.5	内外ともハケ	淡黄橙	火熱痕なし	105
272	４次－１	〃	A:13.2, H:11.2 B:2.6, C:0.6	体外ハケ、内ハケ後ナデ	〃	〃	148
273	東、上層－30cm	甕	B:3.3	内外ともハケ	橙　褐	310と同一個体か	461
274	２次－３	高　杯	A:29.9	内外ともミガキ	淡　橙		119
275	２次－３	〃			〃		117
276	３次－２	〃	A:26.8	内外ともミガキ	淡黄橙	内面に赤彩痕280ないしは284と同一個体か	124
277	３次－４下 ３次－７	〃	A:28.0, H:18.3 B:15.5	外～杯部内ミガキ 脚内ハケ後ナデ	〃		134
278	２次－３下 東、３次	〃	A:19.8	内外ともミガキ	灰　白	内外面とも赤彩	114
279	２次－３	〃		外ミガキ、杯内ミガキ	淡黄橙	杯部内面赤彩	112
280	４次アゼ西	〃			〃		152
281	３次－２	〃	B:16.2	外ミガキ内ハケ	〃	甕蓋に転用	122
282	３次－３	〃		外ミガキ内ケズリ	灰　白		477
283	２次－３	小型高杯		内外ともミガキ	淡黄橙		116
284	３次－２	高　杯		外ミガキ	灰　白		478

第84図　17号土坑(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
285	３次－１下	鉢	A:9.3, H:10.3		橙		121
286	２次－１	壺　？	M:11.3, B:4.4	外ミガキ、内ケズリ・ナデ	〃		106
287	３次－２ ３次－１下	器　台	A:19.1, H:13.7 B:16.8	外面～受部内面ミガキ	〃		123
288	２次－３	〃		外ミガキ、受内ミガキ 脚内ハケ	黒　褐		118
289	東上～下層	〃	A18.4	内外ともミガキ	灰　褐		338
290	２次－２ ３次－３ 東１次	〃	A:17.9, B:14.1	外ミガキ、脚内ミガキ	橙　褐		109
291	３次－６	〃	A:23.2	内ミガキ	赤　褐		143
292	２次－３	台付壺		外ミガキ、頸内ミガキ 体内ハケ	淡黄橙	外面中位以上～ 頸部内面赤彩	115
293	２次－３	壺	A:20.6		〃	３号土坑108と 同一個体	339
294	西１次 ２次１・３ 東3次、西3次 ３次－５	〃	A:17.1, H:36.1 M:23.6, N:11.1 B:5.8, NH:15.5 MH:23.9, C:6.2	外ミガキ、内ハケ	〃		142
295	３次－２	〃	A:13.4, N:11.2 NH:5.0	口頸部内外ともハケ 体内ケズリ	淡黄橙	肩部に刻み	132
296	３次－6.7	〃	A:18.9, M:25.9 N:14.6, NH:6.0 MH:22.5	外ミガキ 頸部～体上半ミガキ 体内以下ケズリ	〃	頸部に赤彩痕？	145

第85図　17号土坑(3)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
297	２次－２	壺	A:18.0	頸内外ともハケ	淡黄橙 灰　褐		111
298	２次－３ 西上層－30cm	壺	A:13.6, M:19.3 N:9.8, NH:8.0 MH:15.9	外～頸部内ハケ後ミガキ 体内ナデ	淡　褐	頸部に赤彩文	367
299	２次－３	〃	A:15.5, N:9.5 NH:11.5	内外ともハケ	淡黄橙		366
300	２次－１～３ ３次－５ ３次－７下 西－30cm 東上層－30cm 上～下層	〃	M:20.9, N:9.6 B:6.0, C:3.4	外ミガキ、内ケズリ	褐	外面スス	120
301	４次－４	〃	A:13.7, H:27.4 M:17.6, N:11.8 B:5.8, NH:6.4 MH:13.9, C:3.3	内外ともハケ	淡黄橙	肩部に記号文 外面スス 胴部に籾圧痕	136
302	２次－３ 3次－1～4、7 ３次－図下 アゼ３次	〃	A:13.8, N:11.7 M:17.2, NH:6.8 MH:13.0, C:3.1	〃	〃	肩部に２ヶ所記号文外面スス	131
303	２次－３	〃	B:4.2	体外ハケ、内ケズリ	〃	外底にヘラ記号	455
304	２次－３	〃	N:11.0	外ミガキ	橙		296
305	２次－１、３ 3次－2、東3次 アゼ３次 ４次－５ 東上層－30cm	〃	M:20.5, B:3.8	外ミガキ、内ハケ	灰　白		340

第86図　17号土坑(4)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
306	３次－４・７ 東３次	甕	A:11.8, H:14.8 M:13.2, N:9.3 B:3.1, NH:2.2 MH:6.6, C:1.1	体外ハケ、内ナデ・ハケ	橙		140
307	２次－２	〃	A:13.6, N:11.8 NH:2.3	体外ハケ、内ナデ	〃		110
308	４次－６	〃	A:14.8, H:15.0 M:14.4, N:13.6 B:3.9, NH:1.9 MH:4.9, C:1.4	体外ハケ後ケズリ、内ハケ	淡黄橙		147
309	３次－２	〃	A:16.2, N:14.4 NH:1.6	体内外ともハケ	〃		129
310	上層～下層	〃	A:14.5, N:11.9 NH:2.0	〃	橙　褐	273と同一個体か	156
311	３次－２の下	〃	A:14.5, N:12.4 NH:2.5		淡黄橙		337
312	４次－５	〃	A:17.1, N:16.1 NH:2.0		灰　白		333
313	西－30cm	〃	A:19.2, N:16.0 NH:2.4	体内外ともハケ	淡黄橙		158
314	４次－３	〃	A:13.4, H:14.0 M:12.5, N:10.7 B:3.0, NH:2.4 MH:7.9, C:1.0	〃	〃		149
315	４次－３	〃	A:13.8, N:10.9 NH:2.7	体内外ともハケ	淡黄橙		151
316	３次－２の下	〃	A:15.2		〃		479
317	２次－２	〃	A:16.9, H:17.6	体内外ともハケ	橙		135
			M:15.6, N:13.5 B:3.5, NH:2.4 MH:6.6, C:2.1				
318	３次－１	〃	M:15.3	内外ともハケ	淡黄橙		336
319	２次－３ ３次－６・７ 西３次 西30cm	〃	A:13.1, H:18.6 M:15.3, N:10.9 B:3.7, NH:2.2 MH:7.9, C:1.9	体内外ともハケ	橙		144
320	３次図下－１	〃	A:16.2, H:17.6 M:15.9, N:13.8 B:3.4, NH:2.3 MH:6.6, C:2.0	体外ハケ 内ハケのちケズリ	淡黄橙	ススが付かない	139
321	３次－２・７	〃	A:15.8, M:18.0 N:13.6, NH:2.5 MH:9.6, C:3.0	体外ハケ、内ケズリ	〃		128
322	３次－２ 西上層30cm	〃	B:3.2	内外ともハケ	褐	334と同一個体か	482
323		〃	A:11.3, N:9.9 NH:2.0	体外ハケ、内ケズリ	灰　白		334

第87図　17号土坑(5)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
324	３次－２ 図下	壺	A:14.4, N:12.2 NH:2.6	体外ミガキ内ケズリ	橙	外面スス	125
325	東、上～下層	甕	A:18.2		灰　白		153
326	西、１次	〃	A:17.2		淡黄橙		462
327	３次－１	〃	A:17.8, M:18.5 N:15.1, NH:2.2 MH:8.1	外ハケ、内ハケ後ナデ	橙		126
328	東 上層－30cm	〃	A:17.4, N:15.7 NH:2.3	体内外ともハケ	淡黄橙		341
329	２次－１	〃	A:19.6, N:15.9 NH:2.5	体外ハケ、内ケズリ	〃		107
330	３次－３・４ 図下	〃	A:18.6, M:21.1 N:16.0, NH:2.8 MH:9.5, C:4.8	〃	〃	肩部に刺突列点	138
331	３次－２・４ 図下	〃	A:17.1, N:14.1 NH:3.3	体外ハケ、内ハケ後ケズリ	〃	肩部に刻み	130
332	２次－１ 東３次 ３次－２・５	甕	A:17.0, H:22.2 M:19.3, N:14.5 B:4.1, NH:2.5 MH:9.5, C:3.8	外ハケ、内ケズリ	橙		146
333	３次－３・５ 西３次 ４次	〃	A:17.1, H:25.1 M:20.0, N:13.9 B:5.1, NH:2.9 MH:11.2, C:4.4	体内外ともハケ	淡黄橙	外面最大径付近 タタキ	141
334	東１次	〃	A:15.1, N:11.5 NH:3.4		褐	322と同一個体か	483
335	西上層－30cm	〃	A:17.7, N:13.6 NH:3.0		橙		160
336	３次アゼ内	〃	A:16.4, N:13.5 NH:3.4		淡黄橙		463
337	３次－２	〃	A:15.8, N:13.8 NH:2.8		灰　白		481

第88図　17号土坑(6)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
338	３次－７	甕	A:16.7, M:19.3 N:14.4, NH:2.8 MH:6.7, C:3.8	体外ハケ、内ケズリ	灰　白		162
339	２次－２	壺	B:5.7	内外ともハケ	淡黄橙		460
340	２次－３	〃	B:5.4	〃	〃	外底板目圧痕	459
341	２次－２	〃	B:5.5	〃	〃	〃	456
342	〃	〃	B:4.1	外ハケ、内ケズリ	褐		458
343	２次－３	〃	B:5.5	内外ともハケ	淡黄橙		457
344	３次－２、 ３、４	甕	A:26.8, H:38.6 M:30.5, N:22.6 B:6.9, NH:5.3 MH:15.4, C:15.2	体外ハケ内ケズリ	〃		133
345	西上層30cm ３次－３ ４次－４ ４次ーアゼ西	〃	A:28.3, N:25.7 NH:3.6	外平滑なハケ、内ハケ	〃	20号土坑２・３層と接合	159
346	２次－２ ３次－２	壺	A:18.3, N:14.5 NH:4.2	外ミガキ、体内ケズリ	灰　白	外面～口縁部内面赤彩、外面スス	113
347	４次西	焼土塊	L:4.30, W:2.54 G:17.8		褐		396
348	４次東	〃	L:3.37, W:2.38 G:9.2		〃	347と同一個体か	396
349	２次－１	打製石斧	L:14.7, W:11.0 G:715			火山礫凝灰岩	

第89図　32号土坑(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
350	８、９、10 10下－１・２	高　杯	A:27.8, H:14.3 B:13.8	外ミガキ、杯部内ミガキ	赤　褐	外面赤彩（内面不明）	192
351	７～10・12－１	〃	B:16.9	外ミガキ、杯部内ミガキ	淡黄橙		173
352	12－２ 13－１・２	壺	A:15.1, H:26.3 M:25.4, N:10.9 B:6.3, NH:7.3 MH:14.8, C:4.8	内外ともハケ	〃		297
353	10、12－２ 13－２	〃	B:8.0	外ハケ後ミガキ 体内ケズリ	淡黄橙 灰　褐		194
354	８ 10下－１・２	〃	A:18.5, H:33.7 M:27.5, N:9.9 B:6.6, NH:9.4 MH:19.9, C:9.0	体内ハケ、内ケズリ	橙		172
355	12－２	〃	A:19.1	内外ともミガキ	淡　褐	353と同一個体か？	193

第90図　32号土坑(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
356	1～3 5・7・8	壺	A:13.4, M:30.1 N:10.8, NH:5.6 MH:17.6, C:11.5	外ミガキ、体内ハケ 口頸部内ミガキ	淡黄橙		169
357	8 11－下－3 13－2	〃	A:18.7, M:30.4 N:15.5, NH:3.0 MH:17.6	体外ハケ、内ケズリ	橙		171
358	9、10 12－2 12－3、上層	甕	A:15.6, H:14.3 M:13.8, N:13.6 B:2.5, NH:3.4 MH:5.9, C:1.3	内外ハケ	淡黄橙		170
359	11－下－1 9、上層	〃	A:15.3, M:13.8 N:12.7, NH:2.7 MH:5.0, C:1.3	外ハケ	〃		175
360	上、8 12－1、13－1	〃	A:14.0, N:11.8 NH:2.1	体内外ともハケ	淡黄橙		374
361	6、東上層	〃	A:17.0, M:16.8 N:14.9, NH:1.7 MH:5.8	体外ハケ、内ケズリ	灰　白		174
362	1、11 11－下－2 7・8	〃	A:16.2, H:21.0 M:17.5, N:13.7 NH:2.1, MH:8.0 C:3.0	体外ハケ、内ハケ・ケズリ	赤　褐		168
363	覆土	〃	A:15.2	体外ハケ	淡黄橙		379
364	11下－1	〃	A:19.2		橙	365と同一個体	373

第91図　32号土坑(3)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
365	12－1、10 8	甕	A:19.6, M:21.2 N:16.0, NH:3.3 MH:12.0, C:5.7	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		176
366	西上層 1、13 13－3、4 12－3、10	〃	A:19.4, H:30.0 M:24.8, N:16.9 B:3.8, NH:3.7 MH:12.4, C:7.9	体内外ハケ	灰　白	肩部に刺突列点	197
367	12－2	〃	B:4.3	外ハケ内ケズリ	淡黄橙		378
368	12－2、11	〃	B:3.6	〃	〃		375
369	11下－2	焼土塊			灰　白		376

第92図　108号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ　の　他	実測番号
370		高　杯	A:27.0	内外ともミガキ	橙	43号・100・106号土坑と接合407と同一個体	211
371		〃		外ミガキ、内ケズリ	淡黄橙		204
372		〃		外ミガキ	〃		205
373	２－３層境	壺	A:14.7, H:15.0 M:13.7, N:9.3 B:1.2, NH:3.9 MH:8.2, C:1.2	体外ミガキ、内口縁ミガキ体ケズリ	橙		210
374	上層	〃	A:14.0, N:13.4 NH:8.1	外ミガキ、内ハケ	淡黄橙	口縁部外面にヘラ描	208
375		甕	A:15.4, N:11.9 NH:2.9	体外ハケ、内ケズリ	〃		206
376		〃	A:17.2, N:15.7 NH:2.2	体内ケズリ	灰　白		207
377	２－３層境	〃	A:14.9, H:20.5 M:17.4, N:12.6 B:4.0, NH:2.6 MH:9.6, C:2.7	体外ハケ、内ケズリ	橙		209

第92図　110号土坑

378		高　杯		外ミガキ	淡黄橙	外面赤彩	201
379		小型器台			灰　白		203
380		〃	B:11.6	脚内ハケ	〃		202

第93図　70・71・73・74・77・98号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ　の　他	実測番号
381	70号土坑３	高　杯	B:10.4	外ミガキ、内ケズリ後ヨコナデ	白　灰	透し孔ろ	218
382	71号土坑		A:21.5	内外ともミガキ		内外面とも赤彩	449
383	73号土坑南	脚　台	B:7.4	脚内外ナデ	橙		216
384	73号土坑 アゼ上部 北側上層	壺	A:11.4, M:12.5 N:8.8, NH:4.0 MH:10.4	体外ハケ、内ケズリ	〃	外面スス、43号土坑北側上層と接合	215
385	74号土坑１	〃	A:10.2, H:13.9 M:13.4, N:8.1 B:1.5, NH:3.6 MH:7.9, C:1.0	体外ミガキ、内ケズリ	灰　白		214
386	74号土坑 上層	〃			〃	17号土坑西上層30cmと接合	492
387	〃	鉢		外ハケ後ヨコナデ、内ミガキ	〃		364
388	77号土坑	器　台	A:23.0	内外ともケズリ後ミガキ	褐		199
389	98号土坑	〃		内外ともミガキ	〃	46号土坑と接合	331

第94図　41号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
390	２次上－１ ２次下－２	高　杯	A:32.8, B:17.6	外～杯内ミガキ 脚内ハケ後ヨコナデ	淡　橙	44号土坑アゼ南、49号土坑アゼ中、同東と接合。透し２孔一対３ケ所	227
391	２次－２・３	〃	A:34.6	摩耗	灰　白	赤彩かどうか不明 44号土坑と接合	230
382	２次－５・６	鉢 (無頸壺)	A:13.1, M:17.0 B:4.5, C:2.1	外ミガキ、内ケズリ	淡　褐	外面スス 内面コゲ	240
393	上層	器　台	A:17.4		淡黄橙		232
394	２次上・１	高　杯		外～杯内ミガキ	〃	杯部内面樹液塗布か	228
395	２次下－１	小型高杯	A:11.8	内外ともミガキ	灰　白 赤　褐	外面にスス	229
396	南、下層	壺	A:15.4	内外ともハケ	灰　白		237
397	２次－４・６	〃	A:15.1, N:12.1 NH:10.4	外ハケ、肩後ミガキ 口頸部内ハケ、体内ハケ後ナデ	淡　橙		235
398	２次－５	〃	B:5.3	内外ともハケ	淡　褐	木の葉底	239
399		甕	A:14.4, N:12.9 NH:2.1		橙		241
400	２次－３	〃	A:12.7, M:12.4 N:10.9, NH:3.0 MH:5.8	体内外ともハケ	淡黄橙		231
401	南、上層	〃	A:13.5, N:10.9 NH:2.2		淡黄橙		380
402		壺	A:14.1, N:9.6 NH:3.6		灰　白		238
403	２次－３	甕	A:15.7, N:13.6 NH:2.8		〃		381
404	２次－３	〃	A:17.4, N:14.2 NH:3.0	体内外ともハケ	淡　橙		233
405		〃	A:19.2, N:17.1 NH:2.5		橙		236
406	２次下－３	有孔鉢	A:16.6, H:12.1 B:2.1, C:1.0	内ケズリ後ナデ	〃	赤化（二次的？）	234

第95図　43号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
407	南、下層	高　杯	A:26.0	内外ともミガキ	橙	100・106・108号土坑と接合370と同一個体	243
408	〃	〃	B:19.2	外ミガキ、内ハケ	灰　白	外面赤彩	372
409	〃	甕	A:18.5, N:15.4 NH:3.2	外ハケ、内ナデ	橙		369
410	南上層	脚　部	B:17.5		灰　白		370

第95図　44号土坑

411	アゼ崩壊部	鉢	B:5.9	外ハケ、内ナデ	淡黄橙		250
412	アゼ南	細頸壺？		外ミガキ	橙		368
413	アゼ崩壊部	高　杯			灰　白	41号土坑391と同一個体	249
414	アゼ南	〃	A:25.5	外ミガキ	黄　橙	外面赤彩 内面不明	245
415	アゼ第１層	壺	A:13.8, N:10.1 NH:7.8	外ハケ、内ナデ	淡黄橙	肩部に記号文	244
416	アゼ南	甕	A:14.1, N:12.0 NH:2.2	外ハケ、内ケズリ	黄　橙		246
417	アゼ第２層	壺	A:15.9, N:12.7 NH:3.0	体内ケズリ	灰　白		242
418	アゼ北	甕	A:18.2, N:15.1 NH:3.1		〃		371
419	アゼ第１層	〃	A:14.6, N:13.2 NH:2.0	外ハケ、内ナデ	灰　褐		247
420	アゼ南	壺	A:14.5, M15.0 N:12.9, NH:1.8 MH:5.3	体外ハケ、内ナデ	灰　褐		251
421	アゼ崩壊部	小型土器	B:3.5	内ハケ後ナデ	淡黄橙		248
422	アゼ南	焼土塊			淡　褐	砂粒含まない	377

第95図　45号土坑

423	南側	甕	A:10.7, N:9.4 NH:1.6	体外ハケ、内ナデ	赤　褐		252
424	〃	〃	A:12.8, N:10.8 NH:2.0	体外ハケ、内ケズリ			253

第95図　40号土坑

425		土　錘	3.8×3.8 G:53.8g		淡黄褐		191

第96図　47号土坑(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
426	２の下	鉢	A:11.9	内外ともハケ	淡黄橙		263
427	20～30cm	〃	A:14.2, M:13.3 N:12.7, NH:2.3 MH:3.5	体外ハケ、内ケズリ	〃		262
428	〃	〃	A:18.2	〃	〃		271
429	〃	〃	A:22.0	内外ともミガキ	〃		468
430	中層30～60cm	〃	A:30.0, N:26.2 NH:4.0	体外ミガキ、内ケズリ	橙		255
431	１次－１	器　台		外ミガキ、受内ミガキ	淡黄橙	受部内面に赤彩痕	267
432		高　杯	B:15.5	外ミガキ、内ハケ後ヨコナデ	〃	蓋に転用	257
433	アゼ北	器　台	B:14.9	外ミガキ、内ケズリ	黄　褐	48号土坑と接合	491
434		鉢	A:8.4, H:6.9 M:9.6, MH:2.9 B:2.0, C:0.2	外ハケ後ミガキ 内ケズリ後ナデ	灰　白		258
435	１次－２	器　台	A:19.1	内外ともミガキ	橙		265
436	－20～30cm	〃		外ミガキ	〃		260
437	中層－30～60cm	〃	A:26.1	内外ともミガキ	淡黄橙		256
438		壺	A:19.2, N:11.5 NH:3.9	頚内外ともハケ	灰　白		259
439	20～30cm	〃	N:10.0		橙		465
440	１次・２	〃	B:5.8	外ミガキ、内ハケ	灰　白	外底にヘラ記号	269
441	中層－30～60cm	〃	A:13.3, N:9.1 NH:3.0	体外ハケ	橙		254
442	１次－１	〃	A:16.8, N:14.9 NH:3.0	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		264

第97図　47号土坑(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
443	土坑上面 (20～30) アゼ北	甕	A:14.7, M:14.3 N:13.0, NH:3.2 MH:6.0	体内外ともハケ	淡黄橙		266
444	アゼ南	〃	A:16.8, N:15.2 NH:2.0	体内外ともハケ	〃		268
445		〃	A:17.5, N:13.4 NH:2.2	体外ハケ、内ケズリ	灰　白	壺か	261
446	アゼ南	〃	A:22.3, N:19.1 NH:2.9		灰　白		469
447	土坑上面 (20～30cm)	〃	A:24.7, N:21.0 NH:4.0	体外ハケ、内ケズリ	橙		270
448		壺	B:5.4	体内外ともハケ	〃		467

第97図　49号土坑

449	アゼ東	高　杯		外ミガキ	淡黄橙	外面赤彩痕	
450	〃	甕	A:15.6, M:15.3 N:12.9, NH:1.9 MH:5.4	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		273
451	〃	〃	A:17.0, N:13.6 NH:3.2		〃		274
452	〃	鉢	A:16.9, N:13.5 NH:3.0	体外ハケ、内ミガキ	灰　白		272

第98図　50号土坑

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
453	－60cm、下層	鉢	B:4.7, C:0.2	内外ともミガキ	橙	内外面とも赤彩	224
454	１次－図下	高　杯		〃	淡黄橙	外面に炭化物	451
455	底、－60cm	〃	B:19.9	外ミガキ	〃	454と同一個体か	452
456	１次－１	〃		外～杯部内ミガキ 脚内ハケ後ヨコナデ	橙	透し２孔一対３ケ所 47号土坑と接合外面 ～杯部内面赤彩文様	219
457	－60cm	器　台	B:18.3	脚内ヨコナデ	〃		226
458	〃	壺	A:16.2, N:12.1 NH:3.8	内外ともミガキ	淡　褐		225
459	１次－４	〃	N:10.7	体内外ともハケ	灰　白		221
460	１次－２・３ 下層	〃	B:6.2, M:24.6	〃	橙		220
461	－60cm、下層	〃	A:14.2, M:23.4 N:10.1, NH:3.5 MH:13.5	外ハケ後ミガキ 口頸部内ミガキ、体内ハケ	淡黄橙		222
462	下層	甕	A:17.5		橙		454
463	〃	〃	A:19.4		淡黄橙		453
464	－60cm	小型土器	A:6.8, H:6.0 B:2.2, C:0.07	内ハケ後ナデ	橙		223

第98図　52号土坑

465		磨製石斧	L:5.8, W:3.3 G:27.5			凝灰岩類	石８

第98図　53号土坑

466		高　杯	A:23.8	摩耗	橙		448
467		壺	A:15.8	内外ともヨコナデ	灰　白		489
468		甕	A:17.2, N:15.1 NH:2.0	体内外ともハケ	淡黄橙		486
469		〃	A:21.9, N:19.2 NH:2.8	体内ケズリ	〃		487

第99図　包含層(1)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
470	Ⅰ－39	鉢	B:2.6	内外ともミガキ	褐	内面が赤彩 外面スス	485
471	〃	〃	A:14.4, H:6.9 B:3.9	外ミガキ、内不明	淡黄橙	外面スス	113
472	〃	壺	A:10.8, M:17.7 N:8.9, NH:7.9 MH:15.3	内外ともハケ	淡黄橙		196
473	〃	〃	A:13.6, N:12.2 NH:5.5	〃	灰　白	口縁部外面に記号文	357
474	〃	〃	N:14.0	外ハケ、頚部内ハケ、体内ナデ	橙		360
475	〃	〃	B:4.1	内外ともハケ	淡黄橙		359
476	〃	〃	A:14.0, M:20.0 N:10.4, NH:5.7 MH:15.0, C:4.1	外～口縁内ハケ後ミガキ 体内ハケ	〃	頸部外面に記号文	353
477	〃	〃	A:16.2, M:20.6 N:11.4, NH:8.3 MH:18.1, C:4.5	内外ともハケ	〃		365
478	〃	甕	A:19.2, N:15.3 NH:2.1	体外ハケ、内ナデ	橙　褐		355
479	〃	〃	A:16.1, N:13.4 NH:2.5	体外ハケ、内ケズリ	褐		352
480	Ⅰ－39	甕	A:15.2, N:13.5 NH:2.3	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		356
481	〃	〃	A:15.8, N:11.9	体内ケズリ	〃		351
482	〃	鉢	A:8.0, H:5.2 B:2.8, C:0.1	内外ともミガキ	灰　白		
483	〃	管　玉	L:1.9, W:0.3 G:0.3	面取り	薄緑色		石12

第100図　包含層(2)

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
484	Ｉ－39	甕	A:25.8, M:36.4 N:22.7, NH:4.2 MH:13.0	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		354
485	Ｈ－42	高　杯	A:23.5, N:7.6 NH:5.8	内外ともミガキ	橙	内外面とも赤彩	344
486	Ｉ－41	甕	A:16.8, N:14.3 NH:3.5		淡黄橙		347
487	Ｈ－42	〃	A:17.4, N:13.5 NH:2.0	体内ケズリ	橙		350
488	〃	〃	A:15.7, N:12.2 NH:2.3	体外ハケ、内ケズリ	〃		348
489	〃	〃	A:16.4, N:12.7 NH:3.0	体外ハケ、内ケズリ	淡黄橙		345
490	〃	〃	A:19.2, N:15.5 NH:3.0	〃	〃		346
491	〃	〃	A:19.1, N:15.7 NH:3.0		〃		349
492	Ｈ・Ｉ－45	壺	A:17.8, M:20.0 N:12.8, NH:5.6 MH:13.0	外ハケ、頸部内ハケ 体内ナデ	灰　白		200
493	Ｈ－42	砥　石	L:2.8, W:4.8 G:25.0			凝灰石	石３
494	Ｈ－47	打製石斧	L:9.0, W:7.75 G:284.4			火山礫凝灰岩	石７
495	Ｉ－40	石　錘 （凹石）	L:10.7, W:7.75 G:299.3			砂岩	石４
496	旧河道	砥　石	L:7.0, W:3.8 G:82.0			〃	石６
497	Ｈ－43	玉原石	L:3.3, W:3.35 G:8.9		淡　緑	緑色凝灰岩	石５

第101図　ピット

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	色調	そ の 他	実測番号
498	P166	壺	A:12.8, N:11.7 NH:7.8	内外ともハケ	灰　白		198
499	P166	鉢			灰　白		385
500	〃	甕	A:17.4, H:18.7 M:17.9, N:14.4 B:3.9, NH:2.9 MH:10.3, C:2.9	体外ハケ、下半後ケズリ 内ハケ、後ナデ	〃		195
501	P370	〃	A:18.4, N:16.6 NH:2.8	体外ハケ、内ケズリ	橙		362
502	Ⅰ－43坑より 北へ490cm 西へ320cmの ピット上面	鉢	A:19.6	内外とも条痕	淡　褐	口縁下に補修孔	363
503	P633	砥　石	L:2.9, W:5.15 G:12.7			軽石	石10
504	P451	ガラス玉	L:4.5mm, G:0.1		紺　色		石11

第４節　古代の遺構と遺物

冬野遺跡からは、整理用コンテナ（いわゆるパンケース）にして五十数箱分の遺物が出土しており、そのうちの約１割、５箱程度が須恵器をはじめとする古代以降の資料によって占められている。本章では便宜上、竪穴住居跡や大型土坑群が営まれた弥生時代後期から古墳時代前期までの時期を「弥生・古墳時代」とし、須恵器出現期以降を「古代」に包括させて論ずることにしている。したがって、古墳時代後半期の資料も本節に含めて扱うことになるので、その点をはじめにおことわりしたい。

まず、該期の遺構である掘立柱建物跡と土坑について触れ、次に出土遺物に関して記述を進めていくことにするが、出土遺物の一部には近世以降の資料がみられ、今回の調査でも近代頃と考えられる遺構、例えば畑の畝溝跡や肥溜め跡等が検出されている。しかし、紙幅の都合により、本書では遺物のみの報告に留め、それら遺構については割愛せざるを得なかった。

１　掘立柱建物跡

本遺跡からは10棟にのぼる掘立柱建物跡か検出されたが、そのうちの竪穴住居跡群が構築された期間に含まれる７号掘立柱建物跡については、第３節で記した通りである。ここでは残る９棟について説明を加えていくことにする。なお、個々の建物跡の桁行や梁行の長さの計測値やそれから推定される床面積等は、別に一覧表を掲げてあるので、そちらを参照して頂きたい。建物跡の配置については、本章第１節の第９図として示してあるが、４棟の竪穴住居跡群の南に接する南北20ｍの範囲、すなわちＨ44～45区・Ｉ44区・Ｊ44区で６棟、また、前田川旧河道に臨む調査区北部でも３棟が確認されている。掘立柱建物跡の年代については、包含層出土資料に恵まれていない事情もあってその特定が困難であると言わざるを得ないが、ここでは建物跡の方位の違いや柱穴の大きさに依拠していくつかのグループに分け、その各者に対して年代を想定していくことにする。以下各建物跡について番号の若い順に記す。

１号掘立柱建物跡（第102図、図版30）

Ｈ44及びＩ44区に所在し、６号掘立柱建物跡と重複する。柱間は３×２間（以下桁行×梁行）であり、その全体を知ることができる。柱穴の掘方は概ね径70cm程度の円形を呈し、柱痕は径約40cmである。

２号掘立柱建物跡（第103図）

Ｈ45区西部に位置し、検出できたのは２×１間の計６つの柱穴であるが、恐らく２×２間のいわゆる「田」の字型の建物になると推測される。柱穴の掘方は径約70cmの円形で柱痕は径約40cmを測る。

３号掘立柱建物跡（第103図）

Ｈ44区の調査区西壁に沿って３つの柱穴が確認されるのみで、建物跡本体はさらに西の調査区外へのびていると判断される。柱穴については、いずれも不整形で原況がよくわからないが、これもやはり掘方が径約70cmの円形で柱痕は径40cm前後である。

４号掘立柱建物跡（第103図、図版30）

Ｉ44区からＪ44区にかけて所在し、柱間は２×２間以上。南東部が近年の耕作に伴って溝状に深く掘削されてしまっているため、全貌を窺い知ることができないが、恐らく北側の柱穴列は東側の調査区外へのびていると思われる。柱穴の掘方は円形で径70cm程度、柱痕は径35～40cmである。

５号掘立柱建物跡（第104図、図版30）

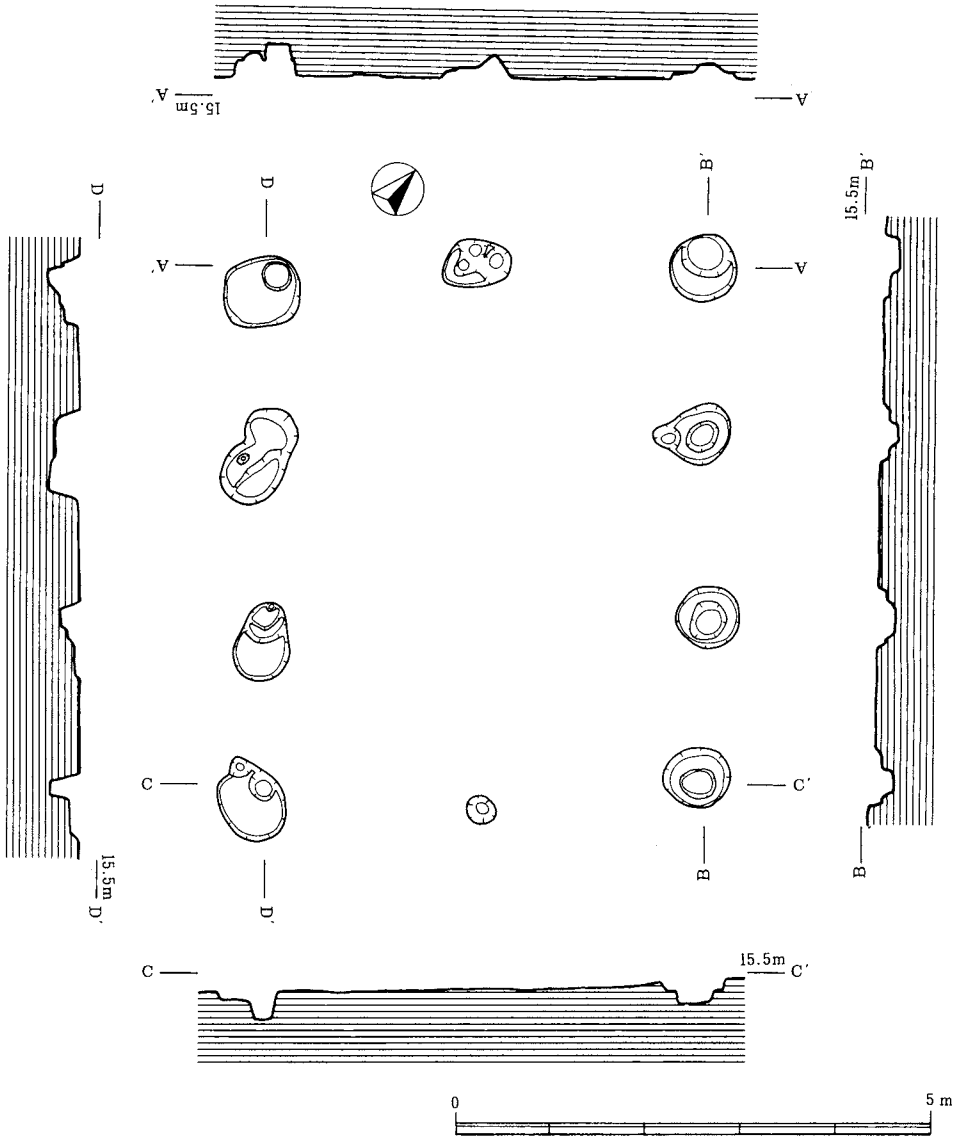
Ｈ44区南部を中心とし、南側柱穴列の一部がＨ45区に及ぶ。柱間は５×３間である。柱穴の掘方は径約50cmの円形で、柱痕は径20cm弱に過ぎない。近接する６号掘立柱建物跡との距離はわずか1.5ｍである。

６号掘立柱建物跡（第105図、図版31）

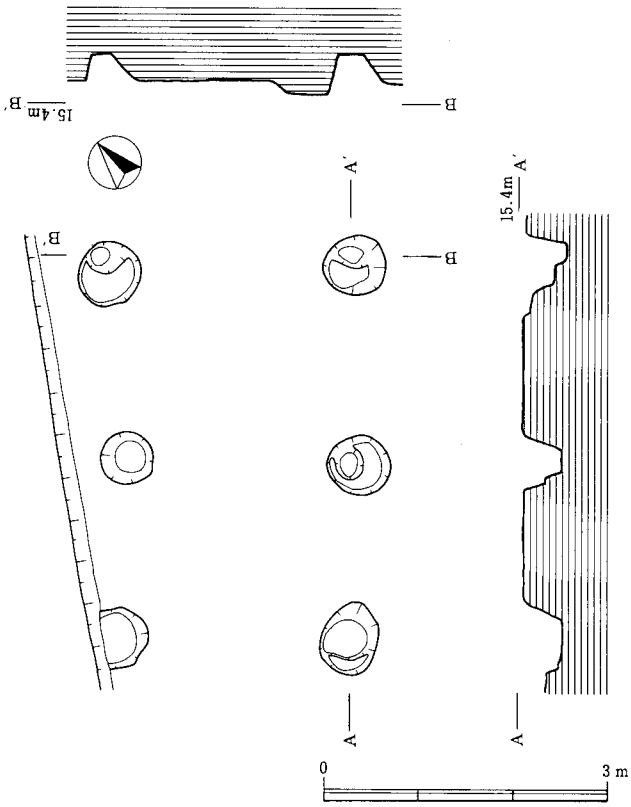
Ｉ44区北西部を中心にその他Ｈ43～44区及びＩ43区にわたって占地する。柱間は５×３間で、推定される床面積は約50㎡であり、本遺跡の全体が把握できた掘立柱建物跡中で最大といえる。柱穴の掘方は概ね径50cmの円形を呈し、柱痕径は20cmに満たない。なお、この建物跡は１号掘立柱建物跡と重複がみられる。

８号掘立柱建物跡（第106図）

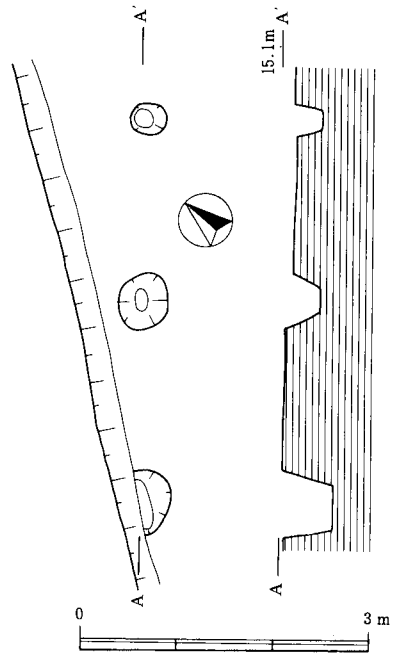
Ｉ39～40区の調査区東壁に近い部分を中心に占地する。５間×３間以上であり、建物跡東側が調査区外にのびる可能性が高い。柱穴の掘方は径45cm前後を標準とし、一部大きなものは径60cm程度に及ぶ。いずれも不整な円形を呈しており、柱痕は径20cm前後であろうか。９号掘立柱建物跡と重複する。



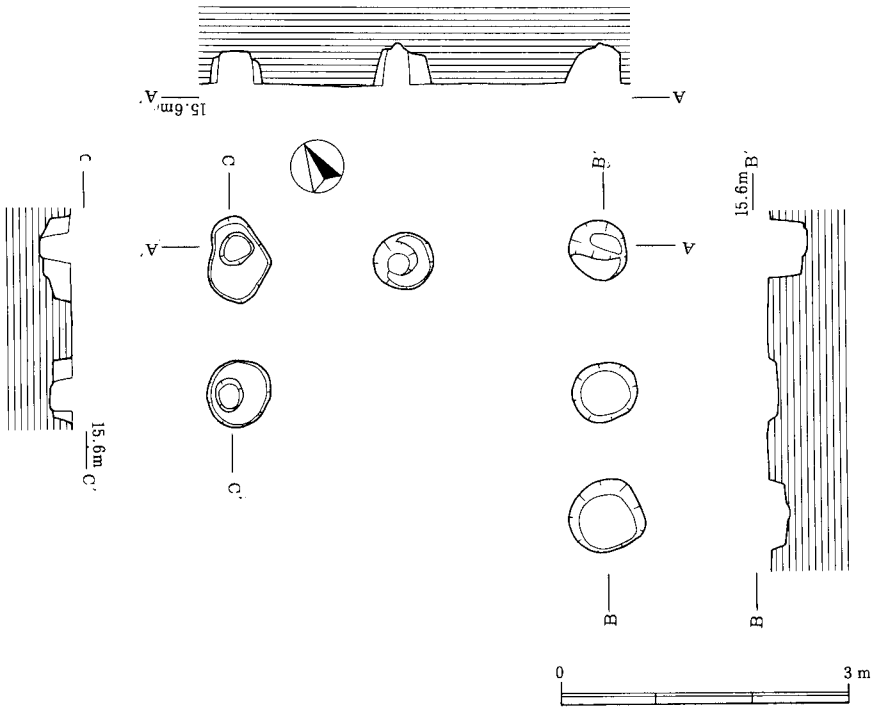
第102図　１号掘立柱建物跡実測図（１／80）



２号掘立柱建物跡実測図（１／80）



３号掘立柱建物跡実測図（１／80）



４号掘立柱建物跡実測図（１／80）

第103図　２・３・４号掘立柱建物実測図（１／80）

９号掘立柱建物跡（第107図）

Ⅰ40区北西部から一部Ⅰ39区にかけて所在し、８号掘立柱建物跡との重複が認められる。２×１間の細長い建物跡で、柱穴（掘方）は径約30cmの円形を呈する。

10号掘立柱建物跡（第107図、図版31）

調査区の北端、Ⅰ38～39区にかけて所在し、柱穴のうちの１つは東側調査区外に存在すると推定される。柱穴は２×２間であるが、いわゆる「田」の字型とはならず側柱式である。柱穴の掘方は径60cm前後の円形で、柱痕の径は20～40cmとややバラツキがみられる。

掘立柱建物跡の分類と推定される年代について

本節で対象とする９棟の掘立柱建物跡が、柱穴覆土や周辺の包含層からの出土遺物に恵まれず、その構築年代の特定に苦慮することは、先に述べたところである。ここでは　①調査区内における建物跡の凡その位置、②柱穴の形状や大きさ、③建物跡の方位などといった観点から９棟をいくつかのグループに分け、さらにそれらが建てられ住居として用いられた時期を考えていくことにする。しかし、その結果得られる年代についてはあくまでも推論の域を出るものではなく、したがって今後の調査例の増加に伴って修正を余儀なくされる場合も十分に考えられるのである。記して叱正を乞う次第である。

①　調査区内における建物跡の位置

北群　　調査区北東部、Ⅰ38～40区を占地する。８～10号掘立柱建物跡があげられる。

南群　　竪穴住居跡群の南側を占地する。１～６号掘立柱建物跡があげられる。

②　柱穴の形状と大きさ

いずれの建物跡も柱穴の平面形は円形を基調としており、方形の掘方を有するものはみられない。しかし、柱穴（掘方）の直径からいくつかのグループに分けることが可能かと思われる。

Ａ群　　柱穴の直径が60～70cm前後を標準とするもの。１～４号及び10号掘立柱建物跡があげられる。

Ｂ群　　柱穴の直径が50cm前後を標準とするもの。５・６号及び８号掘立柱建物跡があげられる。

Ｃ群　　柱穴の直径が30cm前後を標準とするもの。９号掘立柱建物跡１棟のみである。

③　掘立柱建物跡の方位

全体像が不明の建物跡が存在すること、また建物跡の平面形が正方形に近く桁行か梁行かの区別が難しい場合があることを考慮して、必ずしも主軸（桁行）にはこだわらず、桁行か梁行いずれかの真北方向から東側への傾きの分布を示したのが第108図である。それによって建物跡を分類すれば以下のようになる。

Ⅰ群　　真北から25～30度東へ傾くもの。５・６・８号建物跡がこれに含まれる。

Ⅱ群　　真北から40～50度東に傾くもの。１・２・３号建物跡がこれに含まれる。

Ⅲ群　　真北から60～70度東に傾くもの。４号建物跡のみである。

Ⅳ群　　真北から70～80度東に傾くもの。９・10号建物跡がこれに含まれる。

このうちの①については、北群や南群の用語で示される内容は、本遺跡では溝・柵・垣根などで区画されていた明確な痕跡は認められなかったものの、「家地（やち）」[1]の概念に近いのではないかと考えられる。40ｍ以上の距離を有しつつ併存する南北両群ではあるが、その各々のなかに柱穴の大きさや主軸方位を異にする掘立柱建物跡のグループを包摂しており、この事実から双方が通時代的に住居区として踏襲されながら利用された状況が想像できよう。

次に②については、現時点では最も年代性を反映した要素ではないかと推定している。残る③についても建物跡相互の一定の時間幅における同時性を論ずる場合の重要な着目点といえよう。

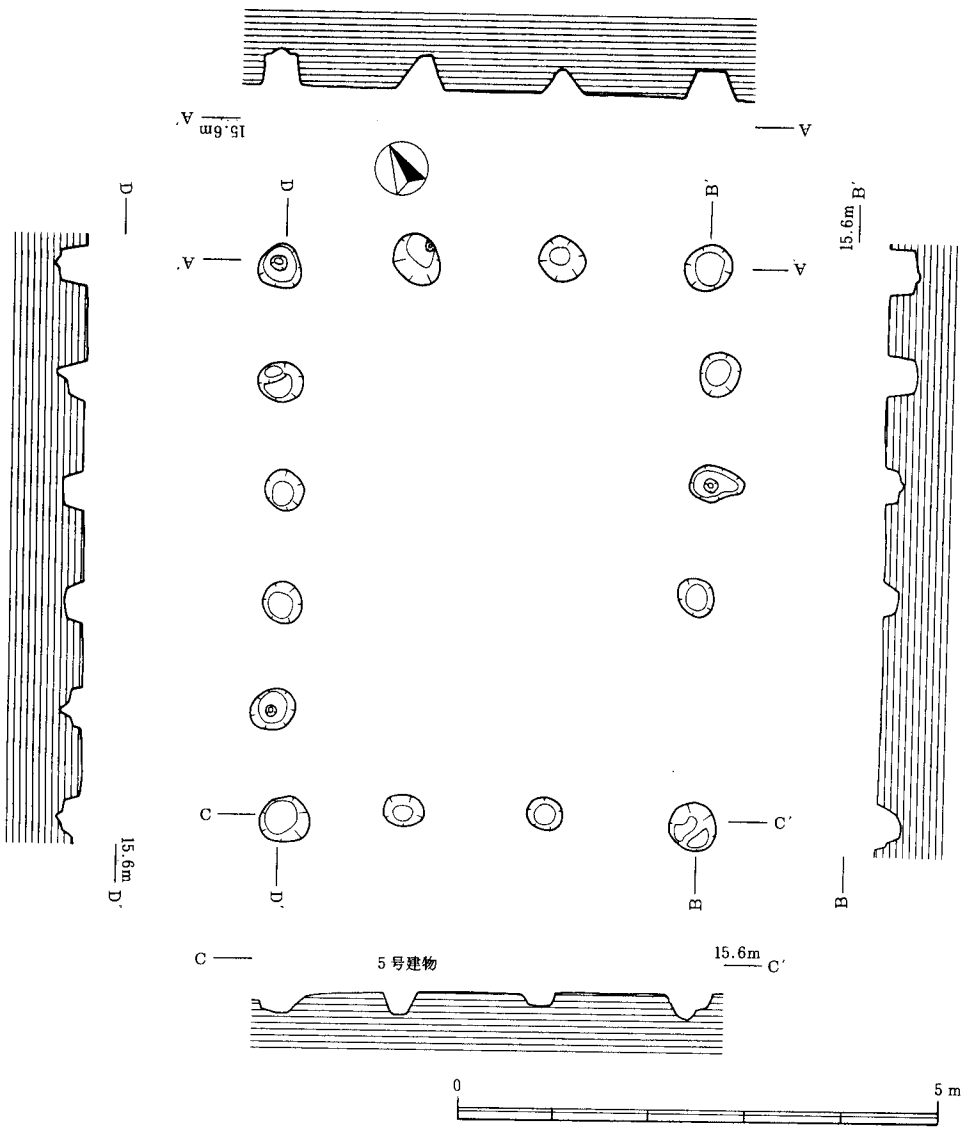
以下、各建物跡の年代を推定していきたい。

略円形で柱穴の直径が60～70cmと本遺跡中最大のＡ群については、本遺跡と近似した土質的条件、すなわち低

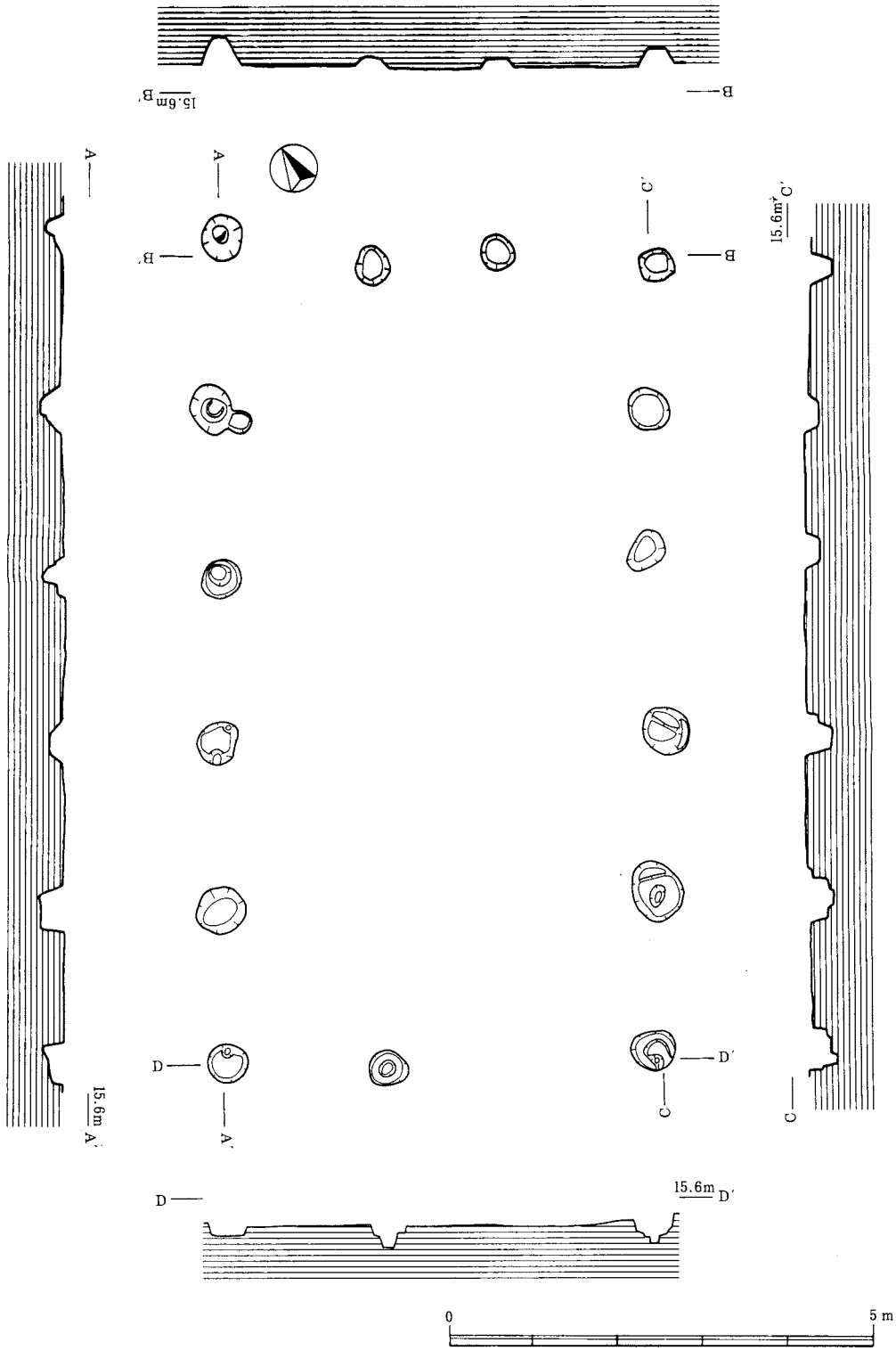
い洪積台地上に立地する能登国域南部の諸遺跡の事例から、８世紀代を中心とする時期に属する可能性が高いと考えている。羽咋市柳田シャコデ遺跡[2]のⅡ期（７世紀後葉～８世紀前葉）おいては、本遺跡Ａ群に比してやや小ぶりの径60cm前後の円形掘方を有する掘立柱建物跡が主体を占めるほか、七尾市古府タブノキダ遺跡[3]（７世紀後半～８世紀中葉）でも方形掘方をもつ建物跡に混じって径60～70cmの円形を基調とする柱穴掘方からなる建物跡が検出されている。これらは桁行の柱間寸法が２ｍ前後を測る点においても本遺跡Ａ群と共通するといえる。

本遺跡Ａ群では南群中の１～３号建物跡が方位（③の観点）においてともにⅡ群に属しており、近接する時期に営まれ、「建物小群」[4]を構成していた可能性も想定できよう。４号建物跡も南群中のＡ群ではあるが、これらとは建物の方位を異にしており、この点については時期差に起因するとみるべきであろうか。残る北群の10号建物跡についても南群中のＡ群のいずれとも建物の方位を大きく異にしているが、これが時期差によるのか或いは北群・南群の呼称で示される集落内の小住居区を超えた建物配置の面での規制（集落としての企画性）が希薄であったことに由来するのかは現時点では判然としない。いずれにせよ、この点では後述するＢ群のあり方と比べて対照的であるといえる。

次に５・６・８号建物跡の３棟を数えるＢ群について述べたい。古代のなかでも遺物量が比較的豊富な８世紀



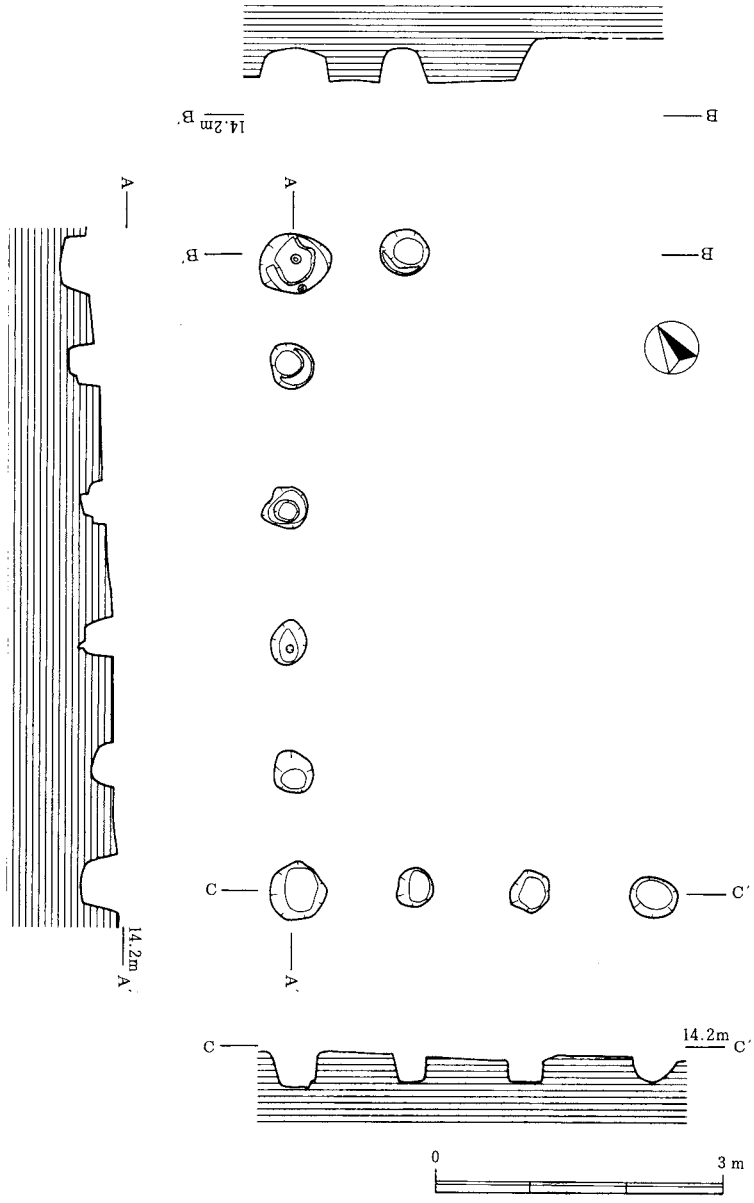
第104図　５号掘立柱建物跡実測図（１／80）



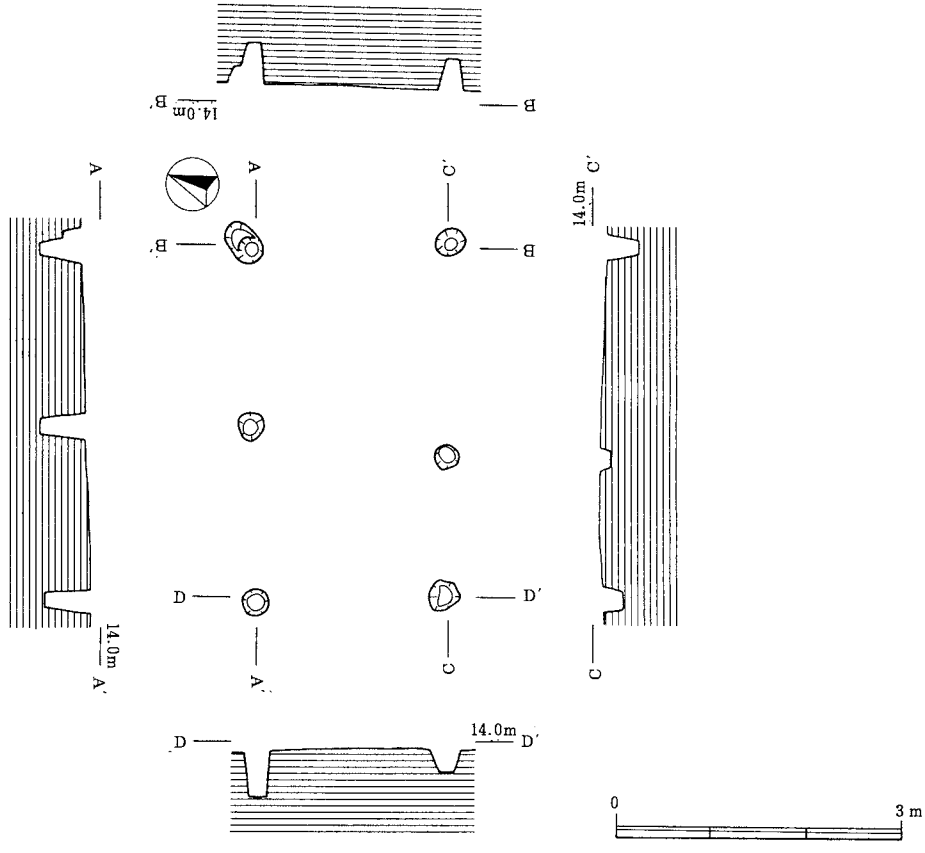
第105図　６号掘立柱建物跡実測図（１／80）

代を中心とする時期をＡ群に当てた場合、それ以外の乏しい量の包含層資料からの年代の比定が難しいのが実情である。したがって、出土遺物による裏付けを欠く以上は、多少の危険性を孕むものの建物跡それ自体の形態を唯一の手掛りとして考えていく他ないであろう。この場合にＢ群の建物跡の年代推定の重要な鍵となる特徴としては、５及び８号建物跡の桁行柱穴列における柱間寸法の短かさを指摘することができる。前者では120cm程度、後者でも135cm程度に過ぎず、これは200cm前後を測るＡ群に比べて明らかに短かい。このような例は隣接する免田一本松遺跡（本書第４章）の６号掘立柱建物跡にみられ、また、南加賀の加賀市永町ガマノマガリ遺跡[5]の最も新しい時期にあたるＤ群（７世紀後半代を中心とする時期）を除くＡ～Ｃ群（６世紀前半代～７世紀前後）に属する掘立柱建物跡では、桁行の平均柱間寸法が150cm未満のものが過半数を占めて主流をなしている。免田一本松例も７世紀までに構築された可能性が高いことから、本遺跡Ｂ群も現時点では６～７世紀のいずれかの時点で営まれたと考えるべきではなかろうか。重複する１・６号建物跡の切合関係においても、Ｂ群の後者がＡ群の前者に先行すると判断されることもこの推定とは矛盾しない。

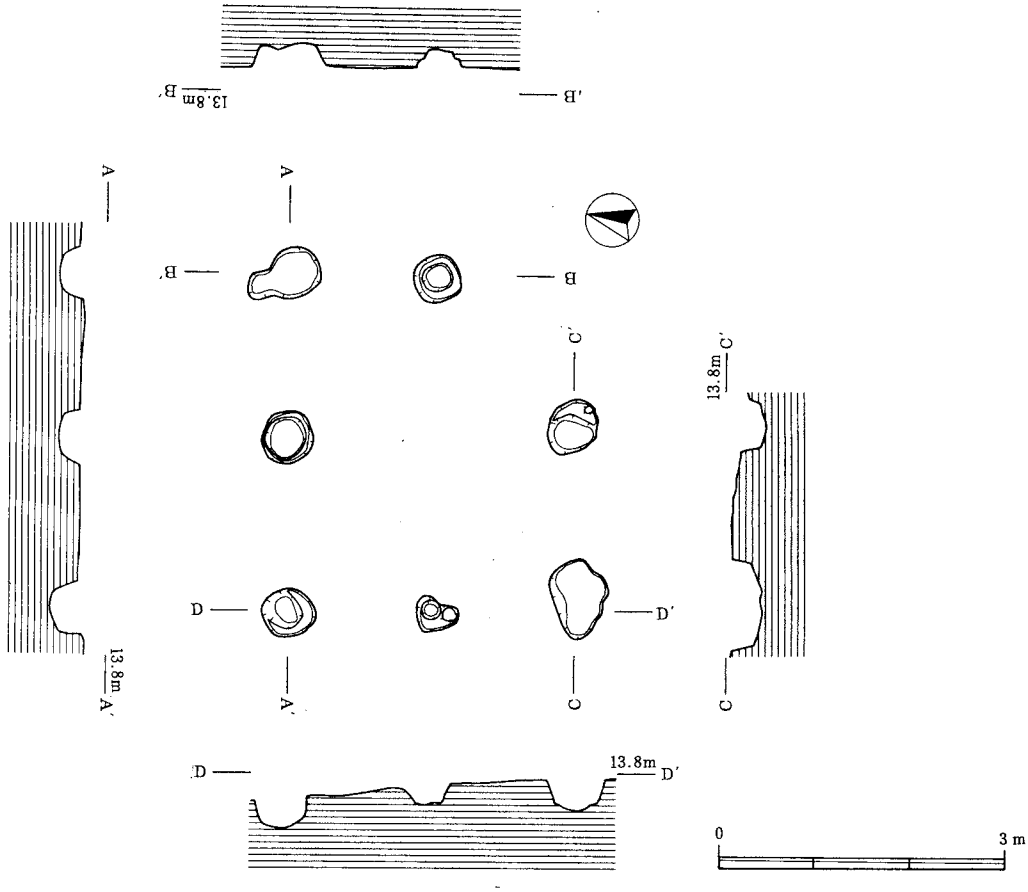
ところで、Ｂ群の３棟は建物の方位の面でもすべてⅠ群に含まれ、北群の８号建物跡と南群の５・６号建物跡



第106図　８号掘立柱建物跡実測図（１／80）

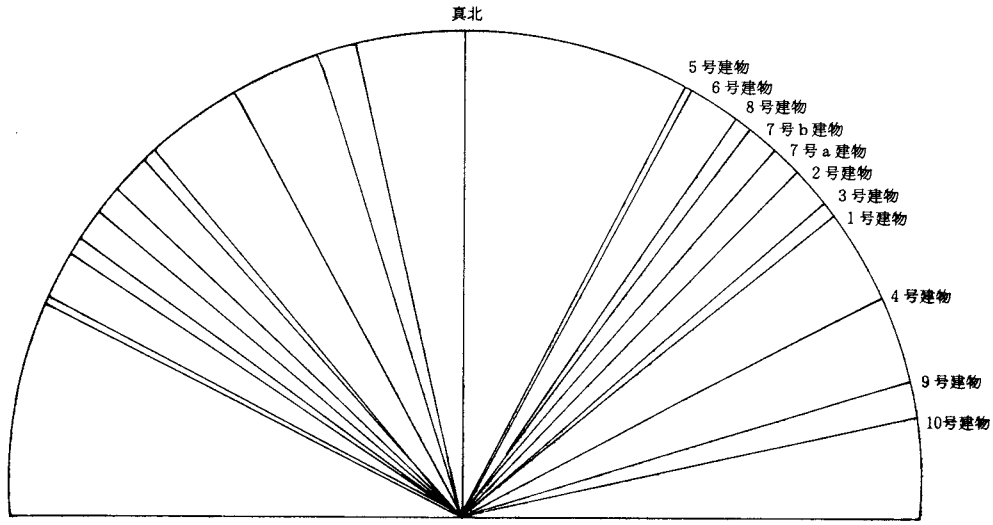


９号掘立柱建物跡実測図（１／80）



10号掘立柱建物跡実測図（１／80）

第107図　９・10号掘立柱建物跡実測図（１／80）



第108図　冬野遺跡・掘立柱建物跡の（主軸）方位の分布

第４表　冬野遺跡　掘立柱建物跡一覧表

建物番号	方　位	柱　間（桁行×梁行）	桁　長（m）	梁　長（m）	掘方の直径（cm）	面　積（㎡）	備　考
1	N－40°－W	3×2	5.45	4.65	約70	25.34	南群
2	(N-46.5°-E)	1以上×2	2.6 以上	4	約70	10.4 以上	南群
3	(N-48.5°-E)	2以上？×1以上	4.15以上	1.0以上	65？	4.15以上	南群
4	N－28.5°－W	2以上×2	3.0 以上	3.9	約70	11.7 以上	南群
5	N－27.5°－E	5×3	5.85	4.45	45～50	26.03	南群
6	N－28°－E	5×3	9.55	5.2	約50	49.66	南群
7ａ	N－40°－E	1×1	3.5	3.3	75～80	11.55	弥生時代後期～古墳時代前期
7ｂ	N－54°－W	1×1	3.1	2.7	約90	8.42	弥生時代後期～古墳時代前期
8	N－34°－E	5×3以上	6.7	3.8以上	約50	25.46以上	北群
9	N－72.5°－E	2×1	3.7	2.05	約30	7.59	北群
10	N－77°－E	2×2	3.55	3.05	約60	10.83	北群

には40ｍ以上の距離的な懸隔が認められるにもかかわらず、建物の主軸方位をほぼ同じくしており、構成単位たる個々の小住居区内に留まらぬ集落全体としての建物配置の規制が存在したことが窺われる。南群の５・６号建物跡はともに５×３間でありながら、桁行の平均柱間寸法においては後者の約190cmに対して前者が約120cmであり、この面では大きく異るといえる。筆者は８号建物跡の規模も考慮に入れて、前者を標準規模、後者を大型規模の建物跡とすべきと考えている。前記の永町ガマノマガリ遺跡Ａ～Ｃ群でも後者（49.66㎡）に近い面積を有する48号建物跡（46.30㎡）を最大規模としていることも注目されよう。所によってはわずか２ｍ足らずの間に軒を接する本遺跡６及び５号の両建物跡がほぼ同じ時期に存在し、主屋及び副屋の関係をなしていた可能性も否めない。

残るＣ群については、２×１間で細長く納屋風の９号建物跡１棟のみである。建物の方位からはＡ群の10号建物跡と同じグループである可能性も考えられるが、柱穴の直径を大きく異にする点から同列に扱ってよいのか疑問でもある。９号建物跡東南の柱穴中からは須恵器甕胴部片617が出土している。内面にも平行タタキがみられ、これを上限を示す資料とすれば、やはり９世紀後半以降とすべきであろう。

最後にもう一度繰り返すならばＢ群（６～７世紀のいずれかの時期）→Ａ群（８世紀を中心とする時期）→Ｃ群（９世紀後半以降）の順で掘立物建物跡群が推移したことになる。

註

(1) 都出比呂志　1979　「ムラとムラとの交流」『図説日本文化の歴史』１　小学館

(2) 河村好光　1984　『羽咋市柳田シャコデ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(3) 垣田修児他　1983　『七尾市古府タブノキダ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(4) 小笠原好彦　1979　「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻第４号

(5) 田嶋明人他　1987　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

２　土坑

番号の若い順に記述することとし、出土遺物については３で説明する。

40号土坑（第109図）

Ｉ43区に所在し、２号竪穴住居跡の壁周溝南辺を切っている。約120×100cmの不整な楕円形を呈し、深さは約30cmを図る。底面に貼り付くようにして須恵器杯蓋578が裏がえしの状態で検出されている。

48号土坑（第109図、図版32）

Ｉ42区西端に位置し、土坑の西側部分はＨ42区に及んでいる。弥生時代の大型土坑である47号土坑と切り合っており、土層断面からもわかるとおり、同土坑覆土を掘り込んだ部分は地山質の土を貼り付けて改めて底面としている。検出面上で識別できなかったため47号土坑出土として取り上げられている古代遺物も本来は本土坑に帰属すると判断される。約300×240cmの不整な５角形を呈し、深さは約25cmである。覆土は単層であり写真図版に見るごとく遺物は人頭大の礫とともに底面から10cm以上浮いた状態で検出されている。

52号土坑（第109図）

Ｈ43区で１号竪穴住居跡の西約２ｍに所在する。約240×180cmの不整な楕円形を呈し、深さは約40cmである。出土遺物としては平底の製塩土器589が注目される他、磨製石斧465もみられる。土坑自体の形態は不定形といえよう。

70号土坑（第110、図版32）

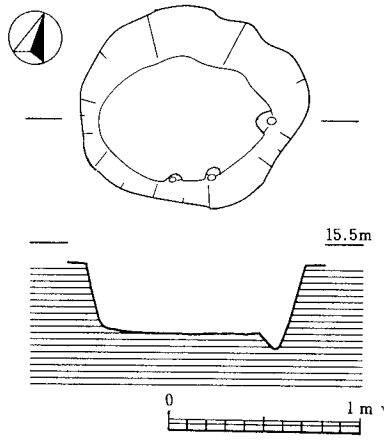
Ｊ43区に所在し、５号竪穴住居跡と切合っている。土坑の一部分が調査区外東側へのびているため、すべてを検出しているわけではない。長径は約260cm。底部は二段になっており、検出面からの深さは約60及び約35cmを測る。炭粒や焼土粒を多量に含む最上層（第２層）を中心に、平面図に図示したように遺物がまとまって出土している。その他、雨によって崩れたこの土坑の覆土の一部から鉄鉢形の須恵器539が出土していることも注目されよう。

75号土坑（第110図、図版32）

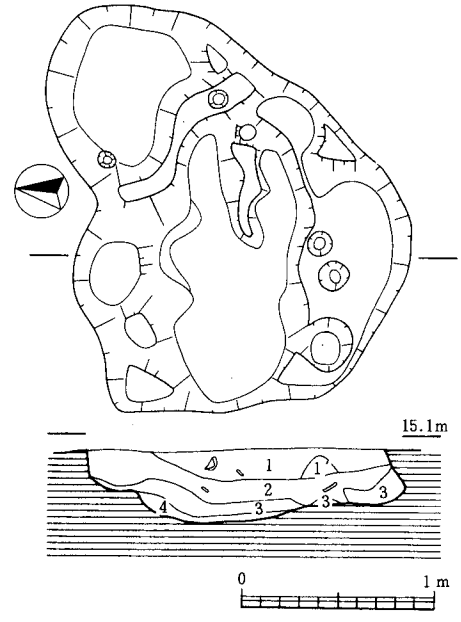
Ｉ44区北東に所在し、長さが約400cm、最大幅約320cmの茄子形を呈する。深さについては、北半部で約10cm、南半部中央で25～30cmを測る。（このことは平面図には表わされていないが、断面図から理解されよう。）また、南端部に付属するようにして80cm四方程度の正方形の深い部分（検出面からは深さ約100cm）がみられるが、検出時に確認されなかったことからすれば、その部分については先行する別の土坑である可能性も考えられる。ただし、そこ（覆土は第２層に近似するがより暗い色調を呈し粘性が強い）からの出土遺物を欠くため、この点について具体的に検証することはできなかった。

その他、土坑ではないが古代の遺物がまとまって検出された箇所として２号竪穴住居跡覆土上層をあげることができる。冬季の悪天候下における限られた期日の補足的な調査に終始したため、残念ながら実態を明らかにすることができなかったが、そこに弥生時代後期の竪穴住居跡の覆土を切り込むようにして設けられた古代の土坑が存在した可能性は十分に考えられる。２号竪穴住居跡覆土の土層断面の観察・記録が行き届かなかった点については今さらながらに悔やまれる。

また、５号竪穴住居跡覆土上層からの出土として取り上げられている内面黒色で大型の有合埦528については、本来は70号土坑覆土上層に帰属すると考えられる。前述の鉄鉢形の須恵器539ともどもこの土坑出土遺物の性格について考える際の興味深い資料といえる。

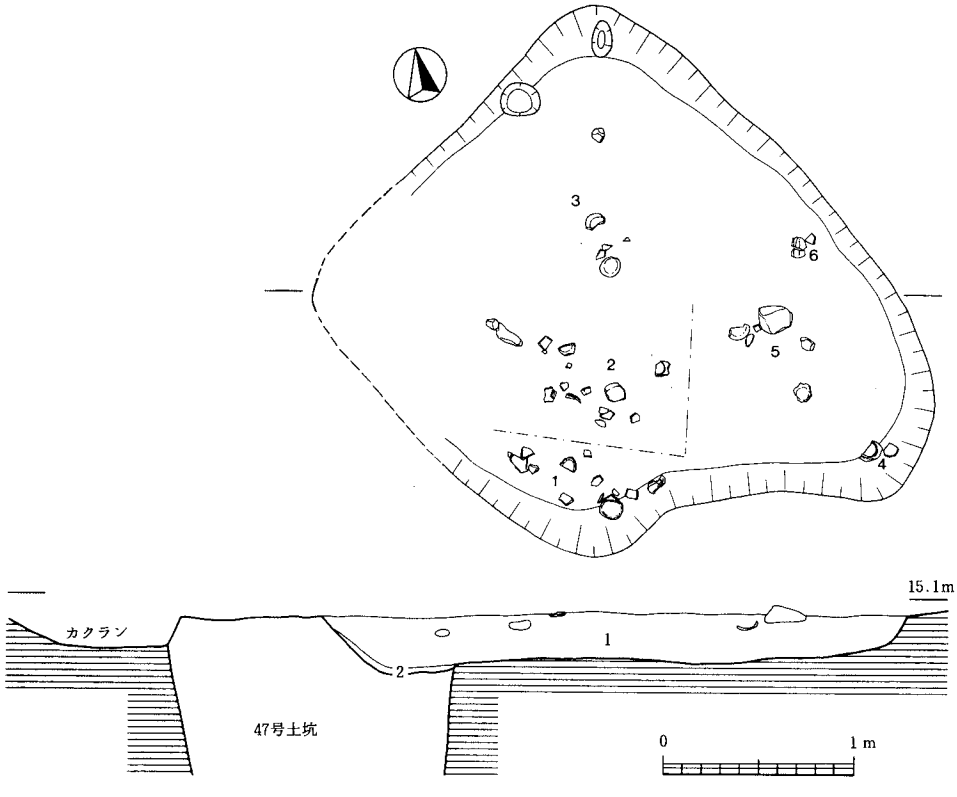


40号土坑実測図（１／40）



１．茶褐色粘質土（地山質及び炭化物を含まない）
1'．茶褐色粘質土（例外的に含む地山の粒が大きい）
２．茶褐色粘質土（地山質及び炭化物・焼土を細かい粒状に含む・土器細片多し）
３．地山質ブロック（少量の茶褐色土は含むが、炭化物等は含まない）
４．茶褐色土をベースに地山質がブロック状に混じる炭化物等は含まない

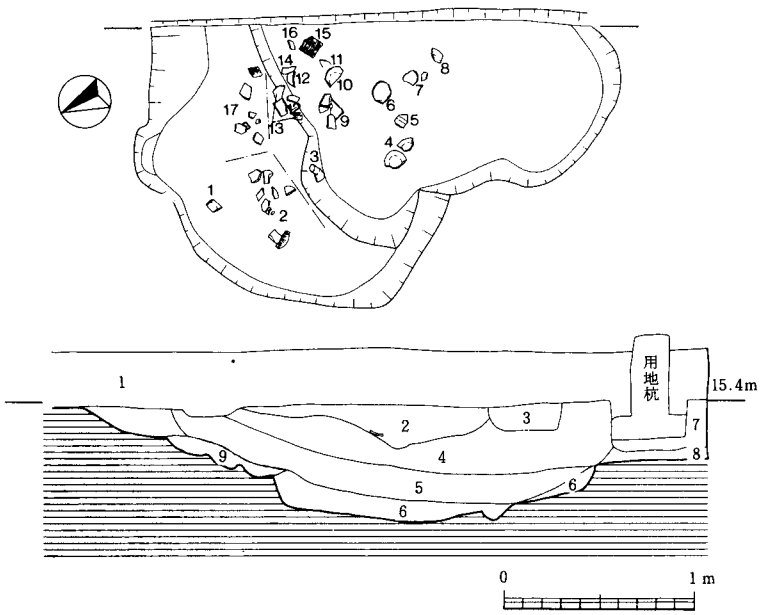
52号土坑実測図（１／40）



１．暗茶褐色土（粘・細かな地山ブロック・炭粒多量含む）
２．黄褐色粘質土（地山質土による貼り床）

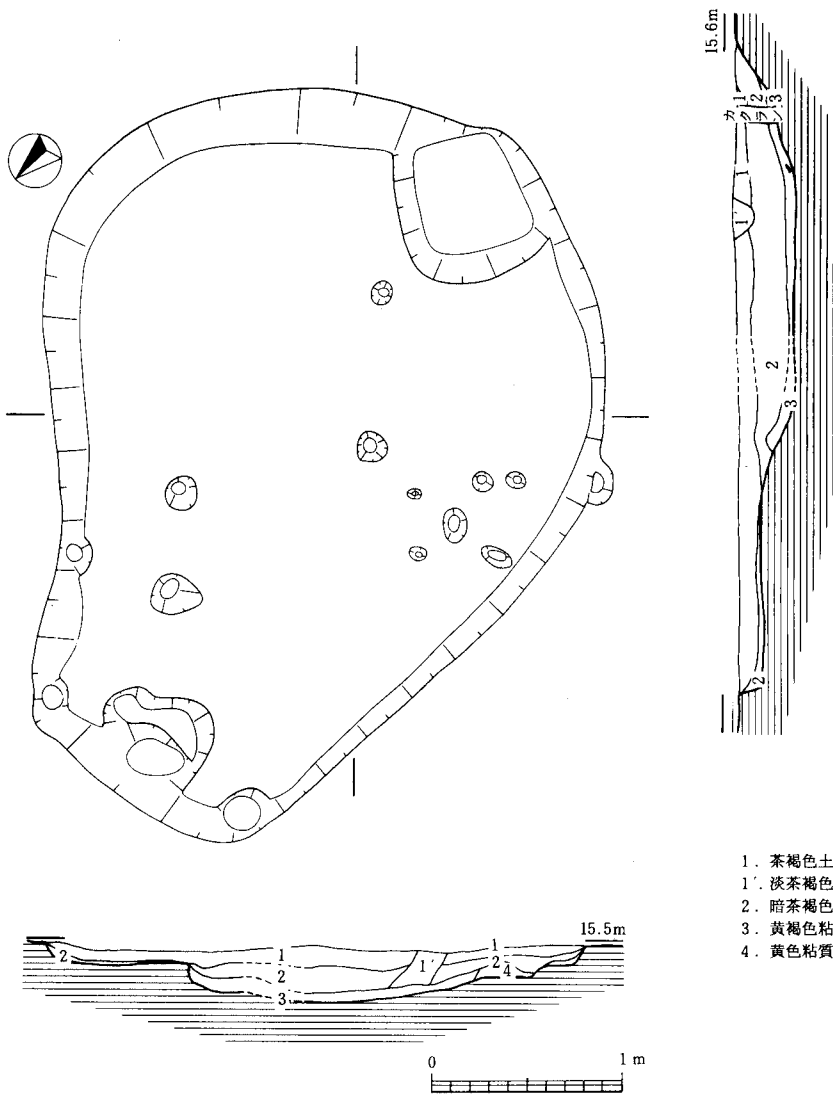
48号土坑実測図（１／40）

第109図　古代の土坑実測図１（１／40）



1．表土（耕作土）（灰褐色を呈する）
2．黒褐色土（炭化物・焼土粒・土器等を多く含む）
3．地山質土（黄褐色土と茶褐色土が１：３の割で混じる）
4．茶褐色土（全体的に地山質・炭化粒を多く含む）
5．茶褐色土（殆んど地山を含まないことより４と区別される・やはり炭化粒・焼土は含む）
6．茶褐色土（全体的に地山をブロック状に含むが、焼土・炭化粒は含まない）
7．暗褐色土（茶褐色土が斑に混じる）
8．５号住居址覆土（茶褐色を呈し混入物が殆んど無い）
9．茶褐色土（混入物が殆んどない）

70号土坑実測図（１／40）



1．茶褐色土（地山質土混入）
1′．淡茶褐色土（１層よりわずかに明るい・地山質土混入）
2．暗茶褐色土（炭粒多量に含む）
3．黄褐色粘質土（土器片・２層の土少量含む）
4．黄色粘質土（地山）

75号土坑　実測図（１／40）

第110図　古代の土坑実測図２（１／40）

３　出土遺物

古代以降の遺跡は第111図に見られるように調査区44区より北側に大部分が分布している。中でもＩ－42、43区とＩ－39、40、Ｈ－39区に集中する傾向をもつ、前者は土坑等の遺構より出土するものが多いのに対して、後者は包含層出土が大半を占める。これは遺跡の立地条件によるもので、41～44区の平坦面に遺構が存在し、40区より北側の緩斜面に廃棄もしくは流出した結果と考えられる。また、42、43区出土遺物が食膳器を中心とし、器種に多様性をもつのに対して、39、40区出土遺物は甕類胴部片が大半を占める傾向がある。

また、年代的には７世紀から10世紀まで継起的に存在し、７世紀末から８世紀初めと８世紀後半代の遺物が目立つ。９世紀代以降の遺物は細片が43区（農道部分）にまとまって出土している。なお、文章中特に断わらない限り須恵器を示し、また個々の遺物の詳細は観察表（第５表）を参照にしていただきたい。

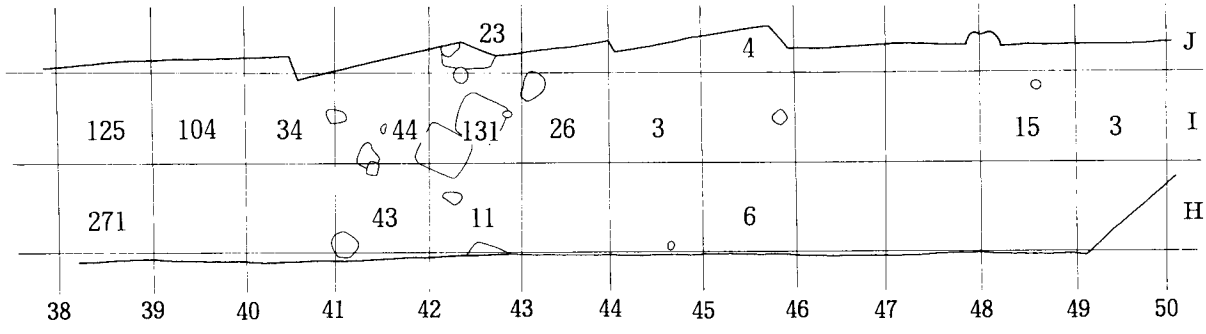
２号住居跡覆土上層（第112図）

法仏並行期の竪穴住居跡覆土上層より８世紀中頃～後半を中心とする遺物が出土している。明確な遺構は確認できないものの、先に述べた遺物の集中度合から、付近に何らかの遺構の存在を想定したい。

505は杯蓋である。天井部と口縁部の境は稜をなし、口縁端部は内傾、面をつくる。506も杯蓋。口径9.7cmを測り、断面三角形の内面返りがつく。飛鳥Ⅲ期に比定でき、胎土から近接する高松･押水窯跡群産と思われる。507、508も杯蓋である。508の天井部回転ケズリ調整は省略されている。509～513は有台杯である。509、510は偏平で、底部内面に使用による磨耗が認められる。また 510の底部内面に径8.6cmの重ね焼き痕が残る。511は大型で身の深いタイプで長く下方にのびる台部をつける。512も身の深いタイプで、やや腰が張る。513は断面方形の外展する台部をつけ、体部は直線的にのびる。底部外面にヘラ記号「//」が認められる。514～521は無台杯で、底部外面にナデ調整を施す。514、515は偏平で、体部中位から外側に開く。516、518、519は身の深いタイプである。516の底部外面にヘラ記号「／」が認められる。518は底径が小さいため、体部が大きく開く印象を受ける。520は底部外面に墨書が確認できるが判読不可能である。県内では類例を見ない。８世紀後半に位置づけて大過ないと考えられる。523は須恵器技法の影響を受けた土師器杯である。器壁は厚手で、口縁部を小さく外反させる。内面を黒色処理した後、磨いている。胎土中に２mm大の角ばった砂粒と海綿骨片が認められる。内面黒色処理を施さない類似品が免田一本松遺跡より出土しているが、県内ではほとんど類例をみないタイプといえる。器形から８世紀前半の所産と思われる。524は非ロクロ土師器小甕である。外面は熱を受け変色している。525は壺瓶類台部で、二次加熱により黒化している。526は土師器長甕。口径21.1cmを測り、胴部にカキメ調整を施す。527は甕であり、胴部球形を呈するものと思われる。口径12.0cmを測り、口縁部中程に一条の沈線が入る。外面に自然釉付着。

３・５号住居跡覆土上層（第112図）

出土状況は２号住居跡覆土上層遺物と似ている。528は内面黒色の土師器椀で口径23.8cmを測る。平安時代に



第111図　地区別須恵器出土概略図

属する。529は杯蓋で、天井部ナデ調整を施す。８世紀後半と思われる。530は土師器小甕である。胴部外面にタテハケ調整、内面にケズリ調整が認められる。

70号土坑（第113図）

本遺跡の中で比較的まとまった資料といえ、７世紀末を中心とした時期に位置づけられる。531～537は杯である。531、533は重ね焼き痕から蓋がつくと思われる。531は口径10.8cm、器高3.4cmを測り、口縁部は大きく外反する。532は口縁端部内側に面状にナデをおこなっている。533は身が深く、底部外面に手持ちケズリ調整を施す。534は体部内湾気味に立ち上がる。２mm大の石英が目立つ。535は扁平で椀形を呈する。536は身が深く、底部外面に手持ちケズリ調整が認められる。底部内面の使用痕が顕著である。537は体部と底部の境に回転ケズリ調整を施す。538は有台杯である。赤橙色を呈し、外展する台部がつく。539は鉄鉢。底部外面は切り離し後に雑なナデ調整が加えるにとどめる。体部内湾する。540は皿と思われ、口径19.4cmを測る。541は高杯で、脚端部を下方に小さく折りまげる。542は瓶類胴部。543は甕口縁部で肥大した口縁部を丸くおさめる。544、545は土師器高杯である。544は口径12.9cmを測る。545の杯部内面は黒色ミガキ調整が施されている。546～551は非ロクロの土師器甕である。球胴形を呈する548を除き、胴部は張らない。546は粗い砂粒が目立つ。547は胴部内面にヨコハケ調整を施し、下半部にケズリ調整を加える。550は底部外面に細かいハケ調整が認められる。551は口径18.3cmを測る大型品で、胴部内部のナデつけが弱く、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。552は弥生末期に属する無頸壺である。胴部中程に稜がめぐる。

47、48号土坑（第114図）

弥生時代の47号土坑と一部重複して古代の48号土坑が存在する。そのため、47号土坑遺物のうち古代に属する一群も48号土坑遺物として同時に扱う。遺物は８世紀後半に位置づけられる。556、557は杯蓋である。天井部に回転ケズリ調整を施す。また、557は天井部と体部の境に明瞭な段をもつ。天井部内面にヘラ記号「／」が認められる。553～555、558～565は有台杯である。553は口径15.3cm、器高5.8cmを測り、体下部は丸味をもつ。底部内面に使用痕が認められる。体部は直立気味である。554、555は身の深いタイプとなる。555は断面方形の外展する台部がつく。558～563は口径10.8～11.8cm、器高4.0cm前後を測り、法量的にまとまりをもつ。また、断面方形のやや外展する台部が内面につくため、腰が張る印象を受ける。559は焼きゆがみが大きく、内外面とも降灰が認められる。560、564の底部外面にヘラ記号「／」が認められる。565は焼成不良で黄灰色を呈する。566～569は無台杯である。566の体部はあまり開かない。567の口縁部はやや外反する。569の底部外面にヘラ記号「／」が認められる。570は平底の土師器小甕である。二次加熱を受け、にぶい橙色を呈する。571～574は土師器長甕である。口径20～23cmを測り、胴部にカキメ調整を施す。571、573の口縁部が断面三角形を呈するのに対し、572、574は口縁端部を上方につまみ上げる。575は鉢で、口縁部内端をやや凹ませる。胴部内外面ともカキメ調整を施し、内面にタテハケ調整を加える。576は土師器鍋である。口縁端部を上方につまみ上げる。

39号土坑覆土上層（第115図）

577は杯蓋である。天井部に回転ケズリ調整を施す。口縁端部の折り返しは目立たない。８世紀後半に位置づけられる。

40号土坑（第115図）

578、579は杯蓋で、天井部回転ケズリ調整を施す。578は口縁基部に平坦面をもち、天井部内面にヘラ記号「／」が認められる。579の口縁端部は丸くおさめる。北野氏分類（註１）Ⅱｂ類重ね焼き痕が残る。580は台付の小型壺と思われる。体部は湾曲しながら立ち上がる。581は有台椀台部と思われ、台部は大きく外側にのびる。高松・押水窯跡群の野寺２号窯灰原出土遺物（註２）に類例が認められる。仏具的要素の強い器種といえ、８世

紀初頭に位置づけられる。582～584は土師器甕である。583の口縁部がなだらかに外反するのに対して、584はくの字に折れまがる。585も土師器甕で口縁端部は外側で面をとる。体部は張らない。

52号土坑（第115図）

586は箱型を呈する無台杯で、身の深い印象を受ける。587は土師器甕で、口縁部を外反させる。588は土師器甕胴部片。外面に平行タタキが認められる。589は平底の製塩土器で、底径22.5cmを測る。色調はにぶい橙色を呈する。

75号土坑（第115図）

出土遺物は８世紀前半を中心とした時期と思われる。590は杯蓋で、口径16.9cmを測る。口縁端部を下方に折りまげる。591は有台杯。592は土師器甕で球胴形を呈すると思われる。口縁部内面に粗いハケメ調整を施す。593は平底の土師器小甕である。口径12.4cmを測り、口縁部を小さく折りまげる。

その他の土坑、ピット（第115図）

594は土師器椀で、底部やや台状を呈する。底部外面に糸切り痕が残る。595は有台杯。偏平な台部をつける。596は土師器甕で、口縁部は外反しながら長くのびる。597は土師器小甕である。口縁部はまっすぐ立ち上がる。598は杯身で、立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめる。599は無台杯で淡灰色を呈する。底部外面にヘラ記号「／」が認められる。600は土師器高杯で、杯部内面に黒色ミガキ調整を施す。内外面ともハケメ調整を施す。601は土師器有台椀で、断面方形の台部をつける。602は薄手の土師器甕である。口縁部は内屈気味に立ち上がる。

包含層（第116～117図）

603～605は７世紀前半に位置づけられる。603は杯蓋で口径13.0cmを測る。口縁端部を丸くおさめる。604、605は杯身。立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめる。606、607は杯蓋である。607の口縁端部は断面三角形を呈する。608～611は有台杯。608の体部は外側に開くのに対し、609はまっすぐ立ち上がる。610は身の深い大型品。底部内面に使用痕が認められる。611の底部外面に墨書が認められ、「門」と判読できる。８世紀後半に位置づけられる。612～615は無台杯である。612は淡灰色の色調で、体部は外側に開く。613は器肉が厚く、箱型を呈する。614の底部外面にヘラ記号「／」が認められる。615は焼成が甘い。616は高杯で口径17.1cmを測る。体部は丸味をもち、口縁部やや外反する。617は内外面とも平行タタキを施す。618の胴部は張らないと考えられる。619は土師器高杯で内面に黒色ミガキ調整を施す。620は土師器椀である。口径11.0cm、器高5.0cmを測り、外面ハケメ調整、内面黒色ミガキ調整が認められる。621は土師器椀類で、口縁部は屈曲しながら外反する。622～625は土師器甕である。622は口径11.2cmを測る。ナデ肩で胴部外面に粗いタテハケ調整を施す。623の口縁部はなだらかに外反する。胎土に焼土塊を含む。624は口径15.0cmを測る。内外面とも細かいハケメ調整を施す。625は口径24.6cm前後を測る大型品である。626は口径29.4cmを測る土師器鍋である。口縁部を上方につまみあげる。627～629は土師器鉢類把手である。627の胴部内面にケズリ調整を、外面にハケメ調整を施す。630～633は土師器椀である。630の底部はやや台状を呈する。631は暗茶褐色を呈し、コンクリートのような質感をもつ。632は底部台状を呈し、体部中程で屈曲する。633は口縁部外側に面をもつ。634は手づくねの土器で、赤橙色を呈する。口縁端部を指押さえで平坦に仕上げ、体下部を絞り込む。635は鉄滓である。636はフイゴの羽口。外径約7.0cm、内径3.4cmを測る。637は支脚と思われる。638はカマドの一部と思われる。

次に出土地点不明の遺物（第118図）について述べる。645は土師質の皿で口径7.6cmを測る。浅黄橙色を呈する。646は平底の土師器甕である。胴部外面にタテハケ調整を施す。648は瓶類底部で外側にふんばる台部をつける。650は甕底部。外面平行タタキが底部まで認められる。

分布調査時採集遺物（第118図）

639は杯蓋で、天井部回転ケズリ調整を施す。天井部内面にヘラ記号「／」が認められる。640は有台杯である。体部は直線的にのびる。641は無台杯で、底部外面にヘラ記号「／」が認められる。642は甕で、口縁端部をナデにより平坦に仕上げる。明茶色を呈する。643は珠洲焼鉢。口縁部内側に波状文を施す。644は砥石。四面とも鎌の砥ぎに用いられたのか、湾曲した面を成す。

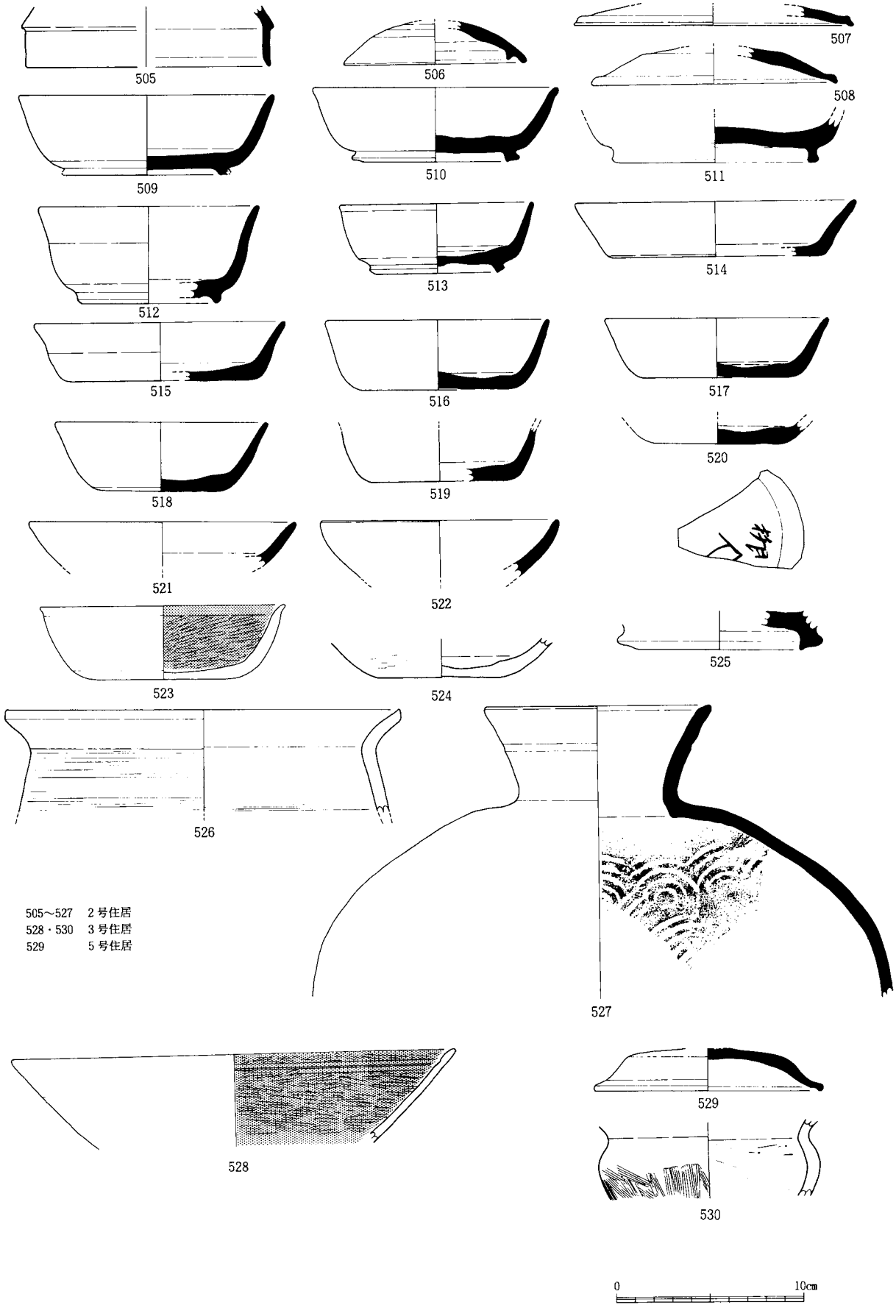
近世以降の遺物（第119図）

Ⅰ－46区116号ピットを中心として、若干の遺物が出土している。651は瀬戸系の鉄釉丸埦で釉は黒褐色を呈する。652はハケメ唐津の鉢である。653は擂り鉢と思われる。654は伊万里の碗。絵付は手書きである。655は瀬戸系の灰釉丸埦。淡黄色を呈し、台部はススが付着している。656は青磁の玉縁の鉢である。体部球胴形を呈する。657は擂り鉢。台部を削り出し、内面一面におろし目を入れる。658は石製品。小松市滝ケ原産の凝灰岩を使用し、六角形につくる。植木鉢等に利用されたと思われる。659の鉢は660の赤瓦で蓋をした状況で出土している。底部外面に「メヤス□□」と墨書されている。660の外面は火を受けている。661は瓦質の火鉢と思われ、猫足が取れている。663は肥前系の染付碗である。664は伊万里の染付碗で口径13.8cmを測る。

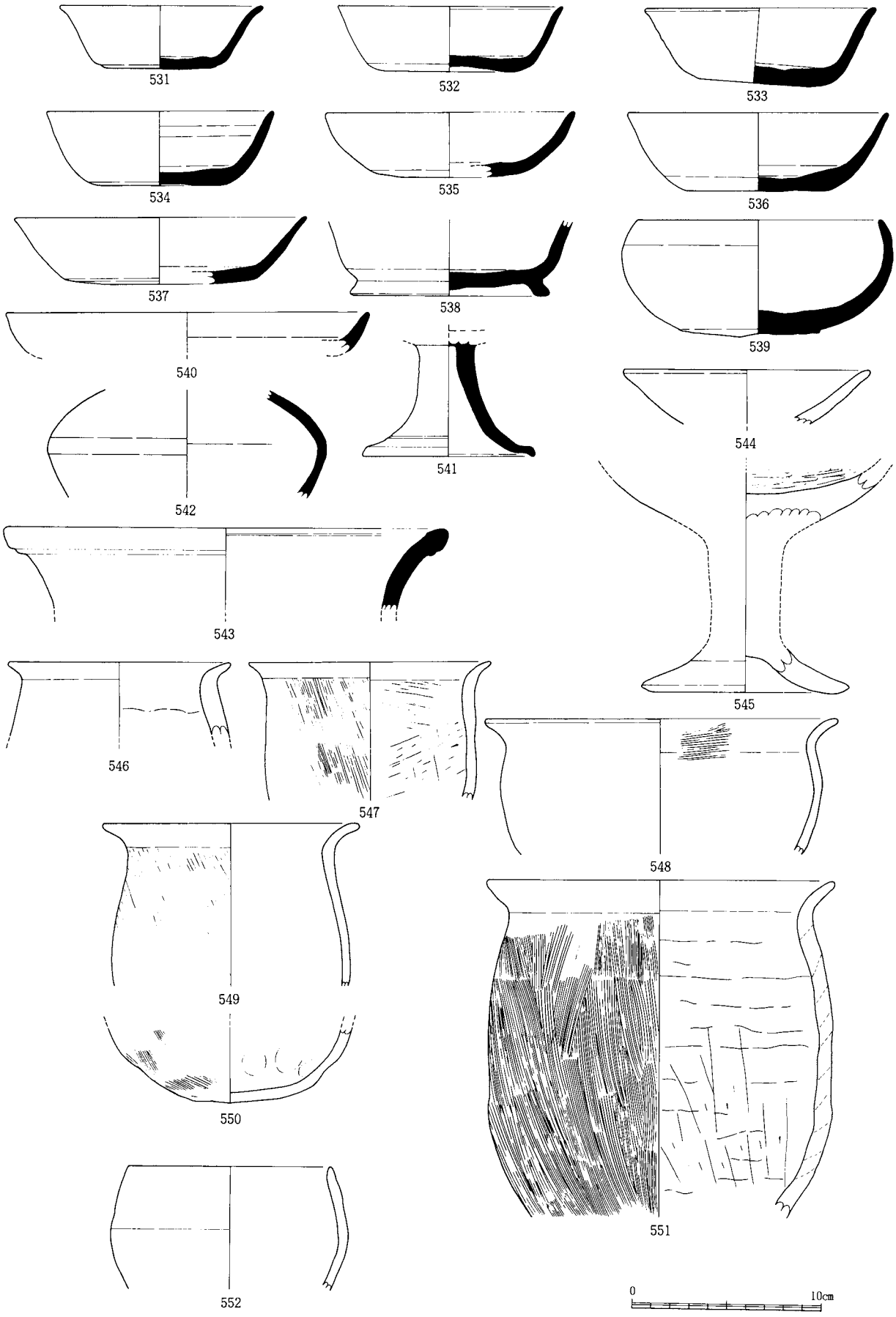
註

1　北野博司他　1988　『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

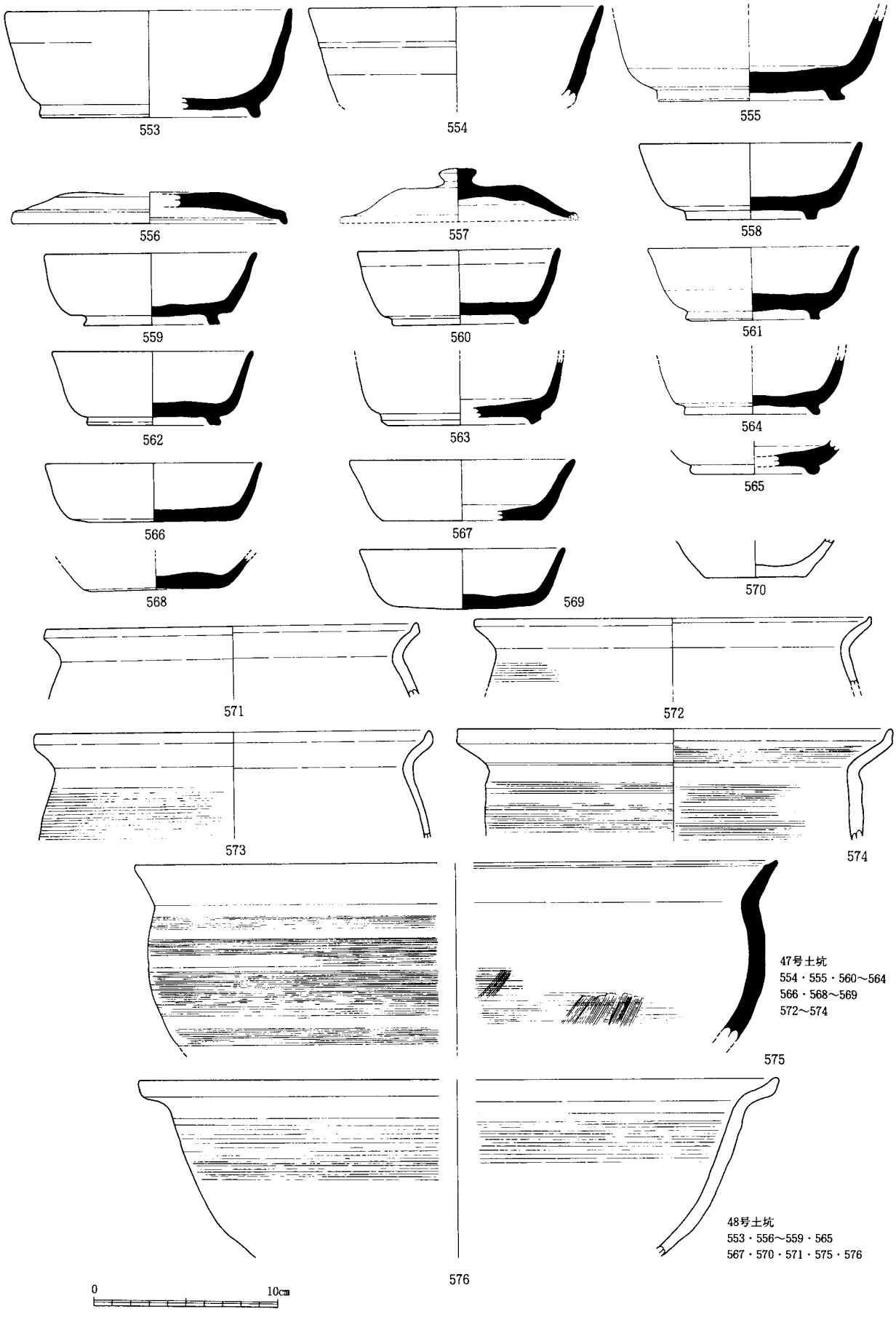
2　川畑　誠　1987　「第７節　高松・押水窯業跡群について」『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター



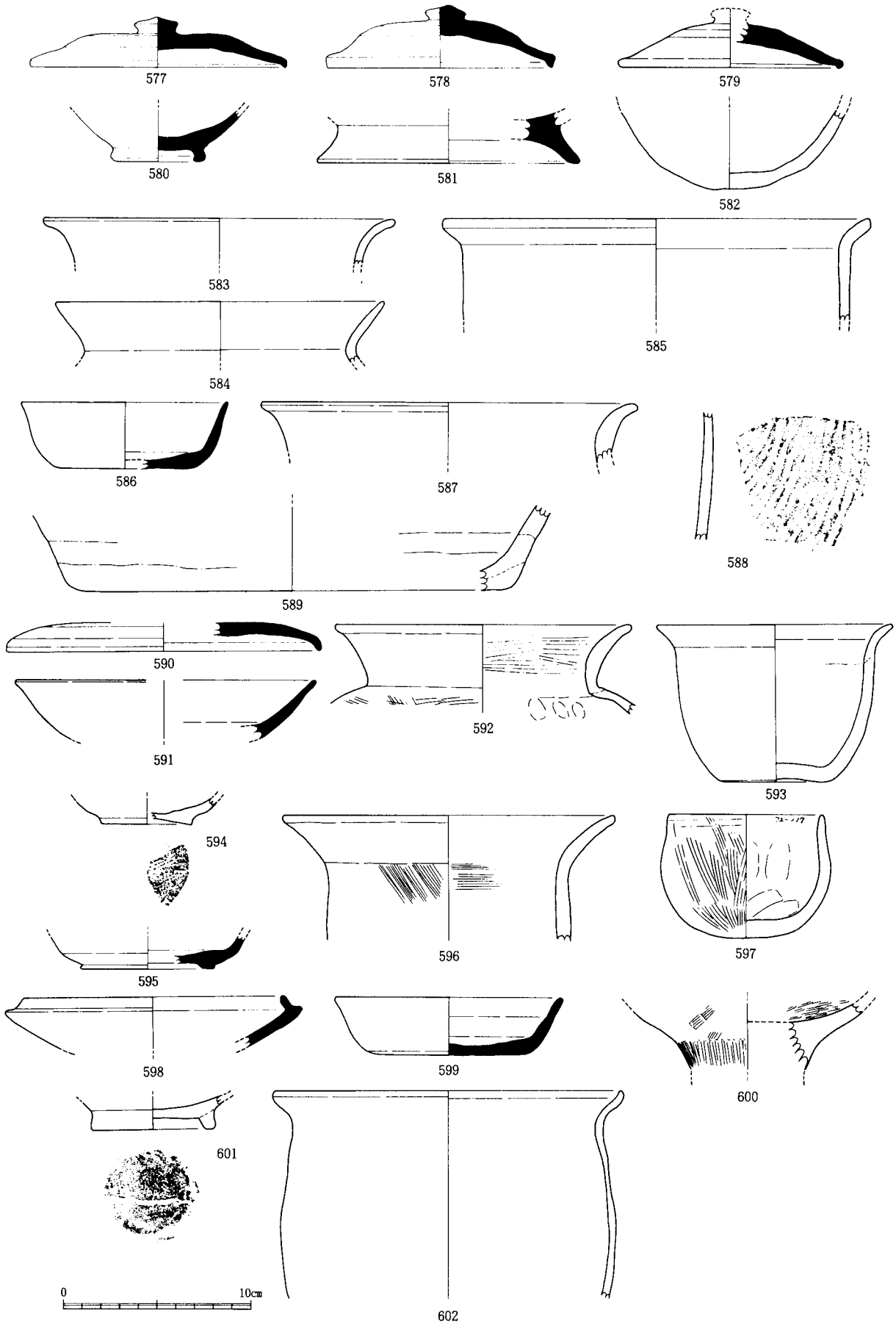
第112図　出土遺物実測図（１／３）



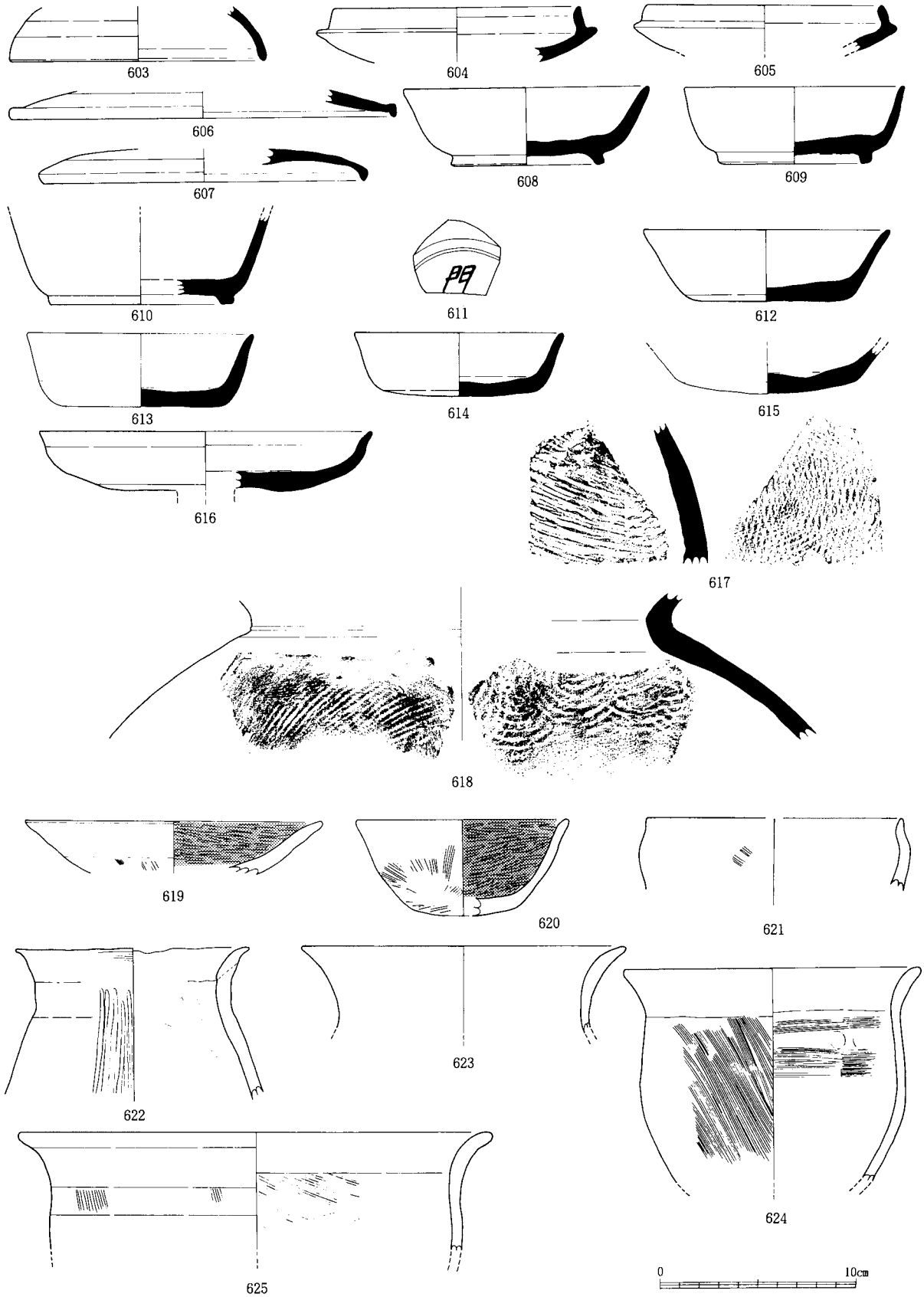
第113図　70号土坑出土遺物実測図（１／３）



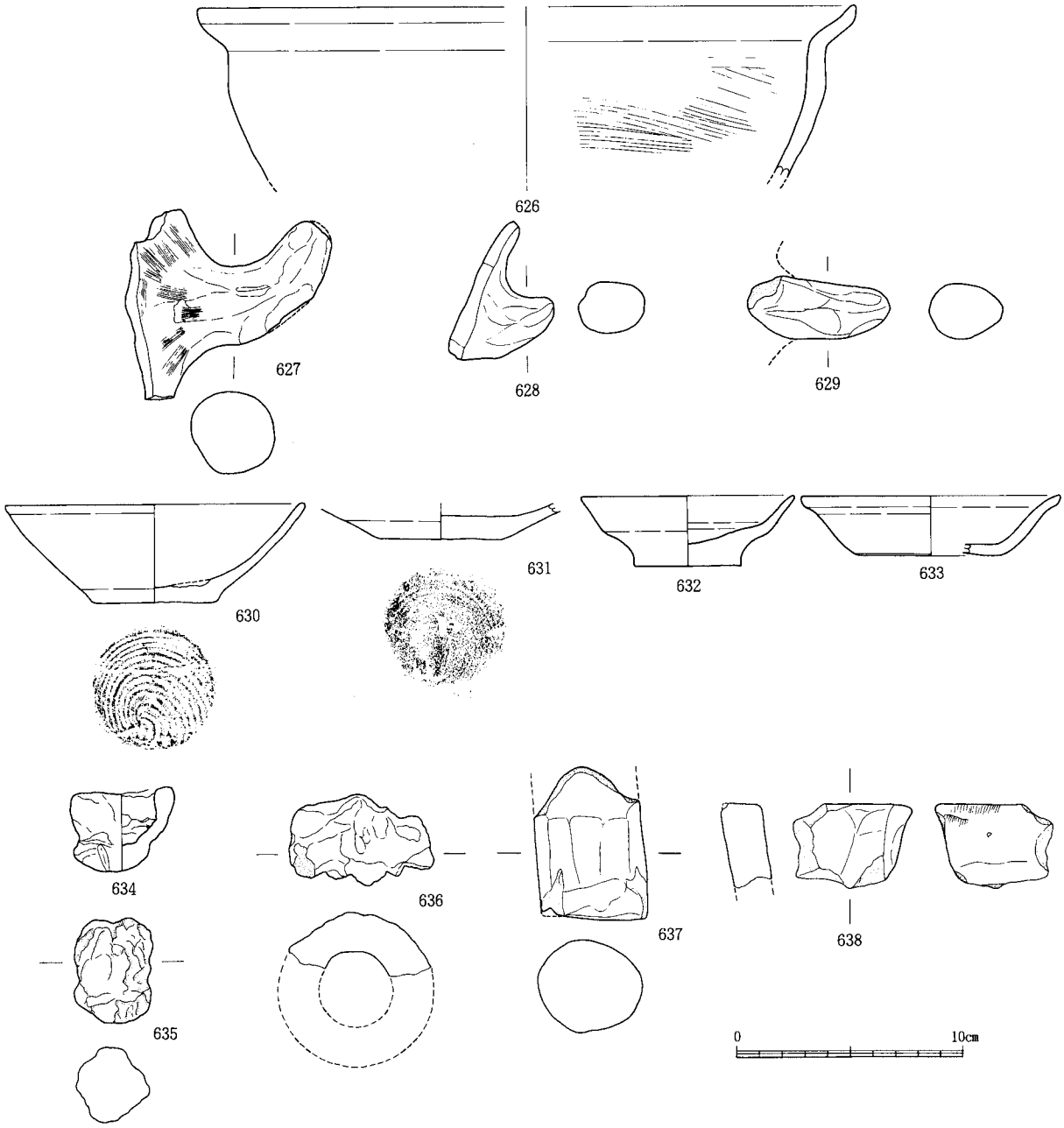
第114図　47、48号土坑出土遺物実測図（１／３）



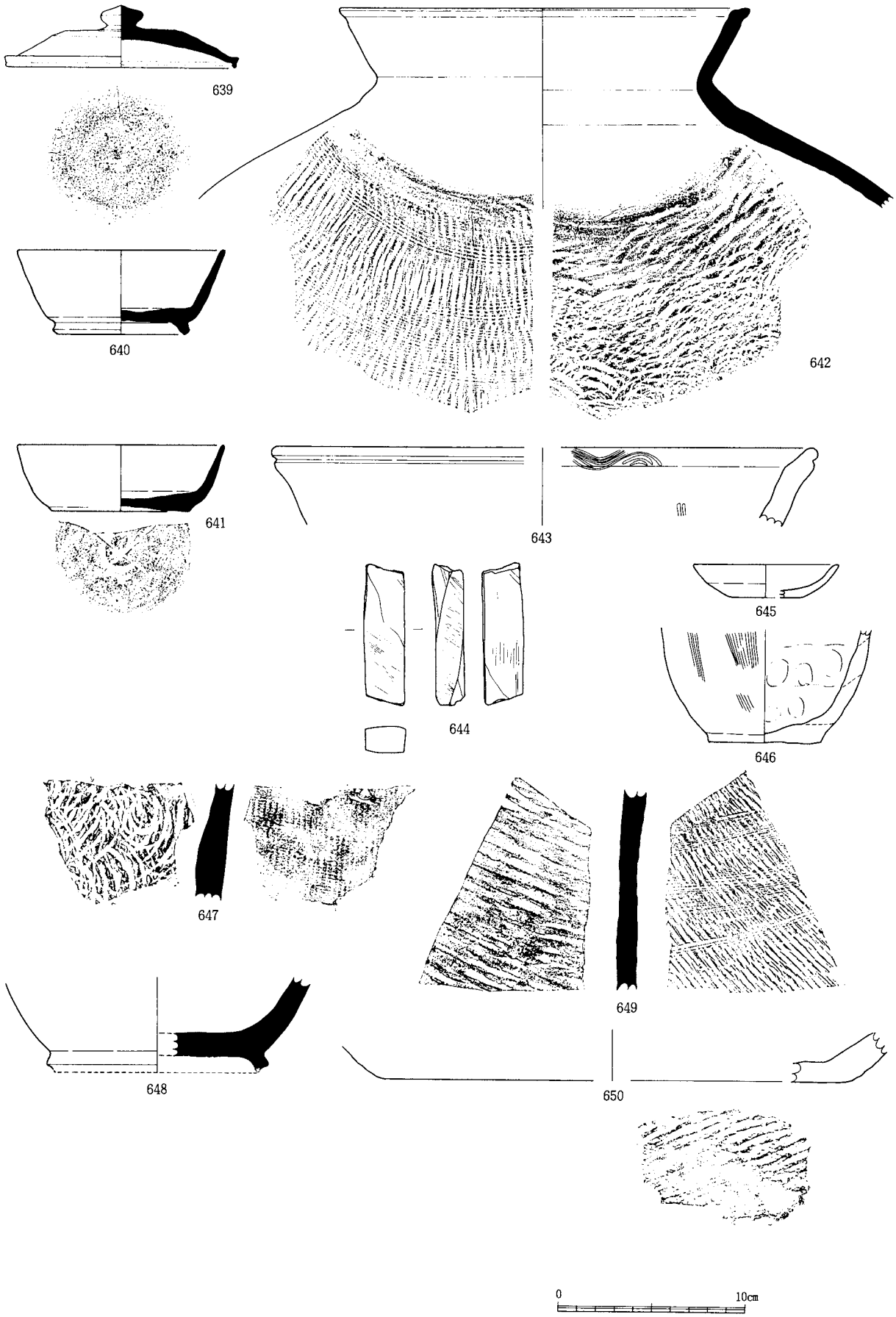
第115図　出土遺物実測図（１／３）



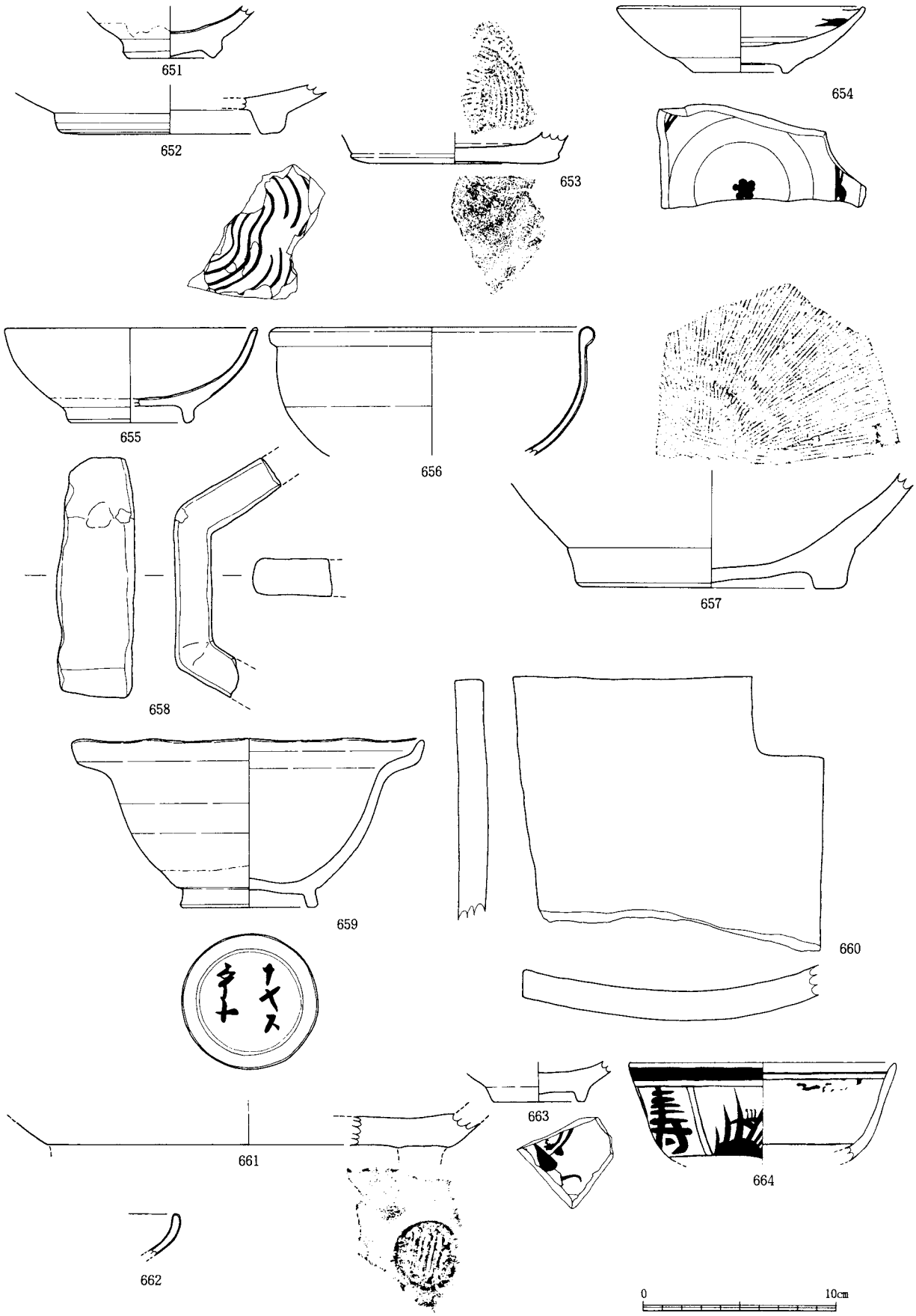
第116図　出土遺物実測図（１／３）



第117図　出土遺物実測図（１／３）



第118図　分布調査他出土遺物実測図（１／３）



第119図　出土遺物実測図（１／３）

第５表　遺物観察表　冬野遺跡（古代）

番号	遺物番号	遺構層位	器種	法量（cm）	調整等	色調	胎土
505	D－80	２号住居 フク土　上層	須恵器 杯蓋		内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰白	１ミリ前後の砂粒
506	D－82	２号住居 フク土　上層	〃	A:9.7	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ	淡白	２ミリ前後の砂粒
507	D－85	２号住居 フク土	〃	A:14.7	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ　降灰あり	灰白	１ミリ前後の砂粒少量
508	D－83	２号住居 フフ土　上層	〃	A:12.9	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ	内　灰 外　暗灰	〃
509	D－79	２号住居 フク土　上層	須恵器 有台杯	A:13.6 H:4.3	内面　ヨコナデ　底部　不整方向ケズリ 外面　ヨコナデ	淡灰	微砂含
510	D－72	２号住居 フク土　上層	〃	A:13.1、B:9.1 H:4.0	内面　ヨコナデ　底部　回転ケズリ（？） 外面　ヨコナデ	明オリーブ	１ミリ前後の砂粒
511	D－75	２号住居 フク土　上層	〃	B：11.0	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰色	２ミリ前後の砂粒少量
512	D－86	２号住居	〃	A:11.7、B:7.2 H:5.3	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	乳灰白	１ミリ前後の砂粒
513	D－70	２号住居 フク土　上層	〃	A:10.4、B:6.6 H:3.8	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	暗灰	２ミリ前後の砂粒
514	D－84	２号住居 フク土　上層	須恵器 無台杯	A:14.8、B:11.3 H:3.0	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	２ミリ前後の砂粒
515	D－71	２号住居 フク土　上層	〃	A:13.3、B:10.0 H:3.1	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	１ミリ前後の砂粒
516	D－73	２号住居 フク土　上層	〃	A:12.0、B:8.2 H:3.8	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ　ヘラ記号「／」	灰	２ミリ前後の砂粒
517	D－74	２号住居 北側セクション	〃	A:11.8、B:8.0 H:3.2	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	１ミリ前後の砂粒
518	D－78	２号住居 フク土　上層	〃	A:11.3、B:6.4 H:3.8	内面　ヨコナデ　底部若干ナデ 外面　ヨコナデ	灰	１ミリ前後の砂粒
519	D－76	２号住居 フク土　上層	〃	B:7.5	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	内　青灰 外　灰	２ミリ前後の砂粒
520	D－１	２号住居 フク土　上層	〃	B:6.7	内面　ヨコナデ　使用のため摩耗 外面　ナデ　墨書	内　灰 外　淡灰	３ミリ前後の砂粒
521	D－94	２号住居 撹乱　フク土中	須恵器 有台杯	A:14.2	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	１ミリ前後の砂粒
522	D－81	２号住居 フフ土	須恵器 杯（？）	A:12.8	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ　黒化	内　灰 外　暗灰	〃
523	D－90	２号住居	土師器 杯	A:13.0、B:7.6 H:4.0	内面　黒色ミガキ　底部　不整方向ナデ 外面　ヨコナデ	内　黒 外　淡黄灰	２ミリ前後の砂粒
524	D－87	２号住居　農道 フク土　上面	土師器 甕	B:6.7	内面　ナデ 外面　ケズリ	内　灰白 外　淡赤橙	〃
525	D－88	２号住居 フク土	須恵器 瓶		内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	内　浅黄橙 外　褐灰	〃
526	D－89	２号住居	土師器 甕	A:21.1	内面　ヨコナデ→カキメ 外面　ヨコナデ→カキメ	内　褐灰 外　浅黄橙	１ミリ前後の砂粒
527	D－77	２号住居 フク土　上層	須恵器 甕	A:12.0	内面　同心円タタキ 外面　ヨコナデ　自然釉付着	灰白	２ミリ前後の砂粒
528	D－92	３号住居 フク土　上層	土師器 有台椀	A:23.8	内面　黒色ミガキ 外面　ヨコナデ	内　黒 外　にぶい黄橙	微砂粒
529	D－91	５号住居 フク土　上層	須恵器 杯蓋	A:12.0	内面　ヨコナデ　天井部ナデ 外面　ヨコナデ	灰白	〃
530	D－95	３号住居 フク土	土師器 甕		内面　ケズリ 外面　ハケメ	内　褐灰 外　にぶい橙	２ミリ前後の砂粒多い
531	D－22	70号土坑No.16	須恵器 杯	A:10.8、B:6.1 H:3.4	内面　ヨコナデ　底部　粗いナデ 外面　ヨコナデ	灰	２ミリ前後の砂粒
532	D－13	70号土坑No.４	〃	A:12.1、B:70.0 H:3.5	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ　釉付着、降灰	内　灰 外　濁灰黄	荒粗粒少量
533	D－12	70号土坑No.４	〃	A:12.1、B:6.0 H:4.0	内面　ヨコナデ　底部　手持ケズリ 外面　ヨコナデ　所々に自然釉付着	内　灰色 外　青白	荒粗粒少量
534	D－19	70号土坑 フク土	〃	A:12.1、B:6.8 H:4.0	内面　ヨコナデ　底部　雑なナデ 外面　ヨコナデ	内　暗灰 外　灰	１ミリ前後の砂粒
535	D－25	70号土坑	〃	A:13.4 H:3.5	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	内　青灰 外　灰黒	２ミリ前後の砂粒多い
536	D－17	70号土坑No.10	〃	A:13.7、B:7.4 H:4.2	内面　ヨコナデ　底部　手持ちケズリ 外面　ヨコナデ	灰白	２ミリ前後の砂粒
537	D－16	70号土坑No.８	〃	A:15.6、B:9.5 H:3.6	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰白	２ミリ前後の砂粒
538	D－14	70号土坑No.６	須恵器 有台杯	B:10.8	内面　ヨコナデ　底部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	にぶい淡橙	１ミリ前後の砂粒
539	D－14	70号土坑 東側崩壊部	〃 鉄鉢	A:12.9、B:7.3 H:6.2、M:14.4	内面　ヨコナデ　底部　粗いナデ 外面　ヨコナデ	灰	２ミリ前後の砂粒
540	D－38	70号土坑 フク土上面	〃 皿	A:19.4	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	内　灰白 外　灰	１ミリ前後の砂粒
541	D－21	70号土坑No.14	〃 高杯	B:9.3	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	１ミリ前後の砂粒
542	D－26	70号土坑	〃 瓶	A:15.0	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰白	１ミリ前後の砂粒
543	D－32	70号土坑 フク土	〃 甕	A:23.5	内面　ヨコナデ　生焼けに近い 外面　ヨコナデ	黄灰白	１ミリ前後の砂粒
544	D－28	70号土坑	土師器 高杯	A:12.9	内面　ナデ 外面　ナデ	灰白	２ミリ前後の砂粒多い

番号	遺物番号	遺構層位	器種	法量（cm）	調整等	色調	胎土
545	D－15	70号土坑No.2	土師器 高杯	B:(9.8)	内面　黒色ミガキ 外面　ナデ	内　淡灰 外　にぶい橙	2ミリ前後の砂粒
546	D－27	70号土坑	土師器 甕	A：11.8	内面　ナデ 外面　ナデ	灰白	2ミリ前後の砂粒多い
547	D－31	70号土坑 フク土	土師器 甕	A:13.0 M:11.4	内面　ハケメ→ケズリ 外面　ハケメ	内　乳灰白 外　浅黄橙	1ミリ前後の砂粒
548	D－18	70号土坑No.7下	〃	A:18.6 M:17.1	内面　ハケメ 外面　摩耗の為調整不明（ナデか）	内　黒褐 外　にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
549	D－20	70号土坑No.9	〃	A:13.6 M:12.8	内面　ナデ？ 外面　ハカメ	にぶい黄橙	1ミリ前後の砂粒少量
550	D－23	70号土坑 東側セクションⅡ層	〃		内面　ナデ 外面　ハケメ	内　褐内 外　にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
551	D－30	70号土坑 フク土	〃	A:18.3 M:18.3	体面　ナデ→ケズリ 外面　ハケメ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
552	D－151	70号土坑No.5	土師器 無頸壺	A:10.8 M:12.8	内面　ヘラナデ（指頭痕あり） 外面　ナデ	灰白	2ミリ前後の砂粒多い
553	D－60	48号土坑No.5	須恵器 有台杯	A:15.3、B:12.0 H:5.8	内面　ヨコナデ　使用による摩耗著しい 外面　ヨコナデ　底部　不整方向ケズリ(？)	灰白	微粒砂
554	D－48	47号土坑 第１次土器群No.2	〃	A:16.0	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰白	1ミリ前後の砂粒少量
555	D－51	47号土坑 第１次土器群No.1	〃	B:10.1	内面　ナデ　底部　不整方向ケズリ(？) 外面　ヨコナデ	灰白	微粒砂
556	D－56	48号土坑No.4	須恵器 杯蓋	A:14.8	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ　降灰あり	内　灰 外　灰オリーブ	1ミリ前後の砂粒多い
557	D－59	48号土坑No.5	〃	A:13.0 H:2.8	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ　降灰あり	内　暗灰 外　灰	2ミリ前後の砂粒
558	D－58	48号土坑No.5	須恵器 有台杯	A:11.8、B:7.0 H:4.1	内面　ヨコナデ　底部　不整方向ナデ 外面　ヨコナデ	内　淡灰褐 外　灰オリーブ	微粒砂
559	D－55	48号土坑No.4	〃	A:11.4、B:7.4 H:3.9	内面　ヨコナデ　底部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
560	D－44	47号土坑No.3	〃	A:11.0、B:7.5 H:4.0	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	内　灰 外　暗灰	1ミリ前後の砂粒
561	D－41	47号土坑No.3	〃	A:11.2、B:7.2 H:4.0	内面　ヨコナデ　底部若干ナデ 外面　ヨコナデ	内　灰 外　暗灰	1ミリ前後の砂粒
562	D－47	47号土坑 第１次土器群No.2	〃	A:10.8、B:7.3 H:4.0	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	内　灰白 外　暗灰	微粒砂
563	D－42	47号土坑 第１次土器群No.3	〃	B:8.7	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
564	D－49	47号土坑第１次土器群 No.2ベルト南側フク土	〃	B:7.3	内面　ヨコノデ　底部　若干ナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
565	D－61	48号土坑No.5	〃	B:6.8	内面　ヨコナデ　生焼け 外面　ヨコナデ	黄灰	1ミリ前後の砂粒
566	D－46	47号土坑 第１次土器群No.2	須恵器 無台杯	A:11.6、B:8.8 H:3.2	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
567	D－62	48号土坑 ベルト北側フク土	〃	A:12.2、B:8.7 H:3.3	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
568	D－43	47号土坑 第１次土器群No.3	〃	B:7.0	内面　ヨコナデ　底部　粗いナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒
569	D－45	47号土坑 第１次土器群No.2	〃	A:11.1 H:3.2	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	明オリーブ灰	微粒砂
570	D－53	48号土坑 ベルト北側フク土	土師器 小甕	B:5.3	外面　ケズリ（？）	内　浅黄橙 外　にぶい橙	微粒砂
571	D－57	48号土坑 ベルト北部側フク土	土師器 長甕	A:20.2	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	浅黄橙	微粒砂
572	D－39	47号土坑No.3	〃	A:21.4	内面　ヨコナデ→カキメ 外面　ヨコナデ→カキメ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
573	D－40	47号土坑No.2	〃	A:21.4	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ→カキメ	灰白	1ミリ前後の砂粒
574	D－52	47号土坑 第４次土器群No.4	〃	A:23.4	内面　ヨコナデ→カキメ 外面　ヨコナデ→カキメ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
575	D－54	48土坑ベルト北側ﾌｸ土Ⅰ -42包含層農道部分P1012	須恵器 鉢	A:35.0 M:33.6	内面　ヨコナデ→カキメ→ハケメ 外面　ヨコナデ→カキメ	内　黒灰 外　灰	微粒砂
576	D－50	48土坑No.5 47土坑第1次土器群No.2	土師器 鍋	A:34.6	内面　ヨコナギ→カキメ 外面　ヨコナギ→カキメ	灰白	2ミリ前後の砂粒
577	D－4	39号土坑 フク土上面	須恵器 杯蓋	A:13.6 H:2.7	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ　降灰あり	灰	2ミリ前後の砂粒
578	D－6	40号土坑 Ⅰ－43区	〃	A:12.1 H:3.4	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	灰白	2ミリ前後の砂粒
579	D－5	40号土坑	〃	A:11.6	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	灰白	1ミリ前後の砂粒
580	D－7	40号土坑	須恵器 小壺	B:5.1	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂
581	D－69	40号土坑	須恵器 有台椀	B:14.0		灰	1ミリ前後の砂粒
582	D－63	40号土坑	土師器 甕		内面　ナデ 外面　ナデ	浅黄橙	1.5ミリ前後の砂粒
583	D－96	40号土坑	〃	A:18.7	内外面　摩耗のため調整不明	内　灰白 外　褐灰	1ミリ前後の砂粒
584	D－66	40号土坑	〃	A:17.2	内外面　摩耗のため調整不能	灰白	2ミリ前後の砂粒
585	D－64	40号土坑	〃	A:22.5	内外面　摩耗のため調整不能	にぶい橙	2ミリ前後の砂粒
586	D－33	52号土坑アゼ	須恵器 杯	A:11.0、B:7.1 H:3.6	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	微粒砂多い

番号	遺物番号	遺構層位	器種	法量（cm）	調整等	色調	胎土
587	D－149	52号土坑　フク土ベルト 南側　アゼ	土師器 甕	A:19.9	内面　ナデ 外面　ナデ	にぶい橙	2ミリ前後の砂粒多い
588	D－36	52号土坑アゼ	〃		内面　ナデ 外面　平行タタキ	灰白	2ミリ前後の砂粒
589	D－35	52号土坑アゼ	製塩土器	B:22.5		にぶい橙	2ミリ前後の砂粒
590	D－8	75号土坑 ベルト内出土南	須恵器 杯蓋	A:16.9	内面　ヨコナデ　　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	内　灰白 外　乳灰白	1ミリ前後の砂粒
591	D－10	75号土坑 ベルト内　北	〃 有台杯	A:16.1	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	乳灰	1ミリ前後の砂粒
592	D－9	75号土坑 ベルト内南、東	土師器 甕	A:15.7	内面　ナデ→ハケメ 外面　ナデ→ハケメ	にぶい黄橙	2ミリ前後の砂粒
593	D－11	75号土坑	〃	A:12.4、B:6.0 H:8.5	内外面　摩耗のため調整不能	淡灰黄	1ミリ前後の砂粒
594	D－65	17号土坑	土師器 椀	B:4.8	内面　ヨコナデ　　底部　糸切り痕 外面　ヨコナデ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
595	D－146	85号土坑	須恵器 有台杯	B:7.0	内面　ヨコナデ　　底部　回転ナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒
596	D－34	51号土坑 ベルト北側	土師器 甕	A:17.7	内面　ナデ→ハケメ 外面　ナデ→ハケメ	内　にぶい黄橙 外　にぶい黄褐	2ミリ前後の砂粒
597	C－217	72号土坑 フク土	〃	A:8.4 H:6.6	内面　ナデ→ケズリ 外面　ナデ→ハケメ	黄褐	〃
598	D－119	Pit609	須恵器 杯	A:13.8	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒
599	D－118	Pit566	須恵器 杯	A:12.1、B:8.0 H:3.1	内面　ヨコナデ　　底部　雑なナデ 外面　ヨコナデ	灰白	1ミリ前後の砂粒
600	D－139	Pit520	土師器 高杯		内面　黒色ミガキ　脚部　ナデ→ケズリ 外面　ナデ→ハケメ	黒	2ミリ前後の砂粒
601	D－136	農道部分 P1007	土師器 椀	B:6.6	内面　ナデ　　底部　糸切り痕	内　にぶい灰黄 外　にぶい黄橙	1ミリ前後の砂粒
602	D－131	農道部分	〃 甕	A:18.6	内面　ナデ　　スス付着 外面　ナデ？	淡灰黄	2ミリ前後の砂粒
603	D－34	H－44区包含層	須恵器 杯蓋	A:13.0	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ　　自然釉付着	灰	1ミリ前後の砂粒
604	D－99	Ⅰ－40区包含層	〃 杯身	A:12.7	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒
605	D－133	Ⅰ－48区表採	〃 杯身	A:12.0	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒 無色ゴマ粒状斑点
606	D－148	Ⅰ－43区 耕作土下部	〃 杯蓋	A:19.8	内面　ヨコナデ　　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	灰	3ミリ前後の砂粒。 石英多い
607	D－145	Ⅰ－40区包含層	〃	A:16.5	内面　ヨコナデ　　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	内　灰 外　淡灰	2ミリ前後の砂粒
608	D－3	H－46区包含層	須恵器 有台杯	A:12.6、B:8.0 H:4.0	内面　ヨコナデ　　底部　ケズリ 外面　ヨコナデ	灰	3ミリ前後の砂粒
609	D－129	Ⅰ－43区上り 北6.52東1.00	〃	A:11.1、B:7.8 H:4.0	内面　ヨコナデ　　底部　粗いナデ 外面　ヨコナデ	灰	1ミリ前後の砂粒
610	D－147	H－42区 耕作土下部	〃	B:9.4	内面　ヨコナデ　　底部　若干ナデ 外面　ヨコナデ	内　灰白 外　灰	2ミリ前後の砂粒
611	D－102	H－42区 耕作土下部	〃	B:8.2	内面　ヨコナデ　　底部　ケズリ？ 外面　ヨコナデ	灰白	微粒砂
612	D－98	Ⅰ－42区 耕土下部	須恵器 無台杯	A:12.5、B:7.3 H:3.7	内面　ヨコナデ　　底部　若干ナデ 外面　ヨコナデ	明オリーブ灰	2ミリ前後の砂粒
613	D－126	Ⅰ－43区より 北4.50東1.20	〃	A:11.5、B:8.2 H:3.8	内面　ヨコナデ　　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	灰白	2ミリ前後の砂粒
614	D－101	Ⅰ－43区 北6.45東2.18	〃	A:10.8 H:3.3	内面　ヨコナデ　　底部　やや雑なナデ 外面　ヨコナデ	にぶい黄橙	2ミリ前後の砂粒
615	D－111	Ⅰ－39区 客土	〃	B:9.0	内面　ヨコナデ　　底部　粗いナデ 外面　ヨコナデ	乳灰白	1ミリ前後の砂粒
616	D－144	Ⅰ－39区 客土	須恵器 高杯	A:17.1	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	灰	2ミリ前後の砂粒
617	D－93	9号建物 東南柱穴の西南	〃 甕		内面　平行タタキ 外面　平行タタキ	灰	1ミリ前後の砂柱
618	D－110	Ⅰ－39区 客土	〃		内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ→カキ目	灰白	1ミリ前後の砂粒
619	C－476	Ⅰ－39区 客内	土師器 高杯	A:15.2	内面　黒色ミガキ 外面　ナデ→一部ハケメ	内　黒 外　にぶい橙	粗粒砂多い
620	C－475	Ⅰ－39区 客土	土師器 椀	A:11.0、B:5.8 H:5.0	内面　黒色ミガキ 外面　ナデ→ハケメ	内　黒 外　にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
621	D－103	Ⅰ－40区包含層	土師器 椀	A:11.4 H:5.9	内面　ナデ 外面　ナデ	内　褐灰 外　浅黄橙	1ミリ前後の砂粒
622	D－109	Ⅰ－39区 客土	土師器 甕	A:11.2	内面　ナデ→ハケメ 外面　ナデ→ハケメ	にぶい橙黄	2ミリ前後の砂粒多い
623	D－116	Ⅰ－39区 客土	〃	A：16.6	内面　ナデ 外面　ナデ	内　浅黄橙 外　にぶい橙	1ミリ前後の砂粒多い
624	D－115	Ⅰ－39区 客土	〃	A:15.0	内面　ナデ→ハケメ 外面　ナデ→ハケメ	浅黄橙	1ミリ前後の砂粒
625	D－114	Ⅰ－39区 第1土器群	〃	A：24.6	内面　ナデ→ハケメ 外面　ナデ→ハケメ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
626	D－97	Ⅰ－42区	土師器 鍋	A:29.4	内面　ハケメ 外面　摩耗のため調整不明	灰白	1ミリ前後の砂粒
627	D－104	Ⅰ－39区 客土	土師器 鉢把手		内面　ケズリ 外面　ハケメ	にぶい橙	1ミリ前後の砂粒
628	D－100	H－42区	〃			浅黄橙	1ミリ前後の砂粒

番号	遺物番号	遺構層位	器種	法量（cm）	調整等	色調	胎土
629	D－117	Ｉ－39区包含層	土師器 鉢把手			にぶい橙	２ミリ前後の砂粒
630	D－２	Ｈ－46区包含層	土師器 椀	A:13.3、B:5.6 H:4.5	内面　ヨコナデ　底部　糸切り痕 外面　ヨコナデ	灰白	１ミリ前後の砂粒
631	D－141	Ｉ－39区 客土	土師器 椀	B:5.5	内面　ヨコナデ　底部　糸切り痕 外面　ヨコナデ	暗灰褐	１ミリ前後の砂粒 細かい雲母少量
632	D－105	Ｉ－39区 客土	〃	A:9.4、B:4.8 H:3.2	内面　ヨコナデ　底部　糸切り痕 外面　ヨコナデ　摩耗著しい	淡黄橙	微砂
633	D－142	Ｉ－39区包含層	〃	A:11.4、B:6.3 H:2.7	内面　ナデ 外面　ナデ	黒褐	２ミリ前後の砂粒
634	D－112	Ｉ－39区 客土	手づくね 土器	A:4.6 H:3.5		赤橙	１ミリ前後の砂粒
635	D－143	Ｈ－39区 客土	鉄滓				
636	D－106	Ｉ－39区 客土	フイゴの 羽口	A　外径7.0 内径3.4			
637	D－108	Ｈ－39区 客土	支脚	A　長径4.8 短径4.2		にぶい橙	１ミリ前後の砂粒多い
638	D－140	Ｈ－39区 客土	土師器 カマド			にぶい橙	２ミリ前後の砂粒
639	免－33	押水ＢＰ冬野台地区 分調№56＋00	須恵器 杯蓋	A:12.3 H:3.4	内面　ヨコナデ　天井部　回転ケズリ 外面　ヨコナデ	内　灰 外　青灰	0.5～３ミリ大の砂粒をやや多い
640	免－36	押水ＢＰ台地区 分調№56＋00	〃 有台杯	A:11.0、B:6.9 H:4.6	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	内　暗緑灰 外　暗青灰	0.5～２ミリ大の砂粒をやや多い
641	免－37	水田部分調 耕土　下	〃 無台杯	A:11.0、B:7.4 H:3.6	内面　ヨコナデ　底部　ナデ 外面　ヨコナデ	緑灰	0.5～２ミリ大の砂粒をやや多い
642	(39) 免－56	押水ＢＰ台地区　分調 №56+00 水田部 耕土 下	〃 甕	A:22(23)	内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ	にぶい橙	２ミリ以下の砂粒少量
643	免－35	冬野水田分調№57、20 第５トレンチ	珠洲焼 鉢	A:29.0前後	内面　ヨコナデ　波状文 外面　ヨコナデ	内　淡灰 外　灰	３～５ミリ大の砂礫
644	免－33	冬野水田分調№57. 20 第５トレンチ	砥石	長7.3 幅2.2 厚1.7 重39.0ｇ		灰白	
645	D－138	出土地点不明	土師質 皿	A:7.6、B:3.8 H:1.8	内面　ナデ 外面　ナデ	浅黄橙	１ミリ前後の砂粒
646	D－132	〃	土師器 甕	B:6.0	内面　ナデ 外面　ナデ→ハケメ	内　浅黄橙 外　にぶい黄橙	２ミリ前後の砂粒
647	D－150	〃	須恵器 甕		内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ→カキ目	灰	２ミリ前後の砂粒
642	D－137	〃	須恵器 瓶	B：11.0～12.0		灰	１ミリ前後の砂粒
642	D－137	〃	須恵器 甕		内面　平行タタキ 外面　平行タタキ	灰	２～３ミリ大の砂粒
650	D－152	〃	須恵器 甕		内面　ナデ 外面　平行タタキ	灰	１ミリ前後の砂粒
651	D－128	旧河道	瀬戸系 鉄釉埦	B:4.5		内　黒褐 外　にぶい黄橙	
652	D－130	旧河道	唐津 鉢	B:11.4		内　灰白 外　にぶい橙	
653	278	押水ＢＰ冬野台地区分調 №55＋60	擂り鉢？	B:9.2	内面　おろし目　底部　糸切り？ 外面　ナデ	明褐灰	
654	D－127	旧河道	伊万里 碗	A:12.6、B:4.9 H:3.5			１ミリ前後の砂粒
655	D－123	Ｉ－46区 Pit166	瀬戸系 灰釉埦	A:13.2、B:6.3 H:5.0	底部　スス付着	淡黄	微粒砂
656	D－125	Ｉ－46区 Pit166	青磁 鉢	A:16.5 M:16.4		オリーブ黄	微粒砂少量
657	D－124	Ｉ－46区 Pit166	すり鉢	B:13.6		内　黒褐 外　にぶい赤褐	微粒砂
658	D－122	Ｉ－46区 Pit166	石製品		六角形	明オリーブ灰	
659	D－120	Ｊ－19区 Pit515	鉢	A:18.5、B:7.2 H:9.0		灰オリーブ	
660	D－121	Ｊ－49区 Pit515	赤瓦		外面焼けている	暗赤褐	１ミリ前後の砂粒
661	D－68	36号土坑 上層	台付盤			にぶい橙	１ミリ前後の砂粒
652	D－67	22号土坑	碗			内　灰オリーブ 外　にぶい赤褐	微粒砂
663	D－107	Ｉ－39区 客土	碗	B:4.8	内面　染付け	灰白	
664	D－135	Ｉ－39区 第３土器群	伊万里 碗	A:13.7		灰白	

第５節　大型土坑について

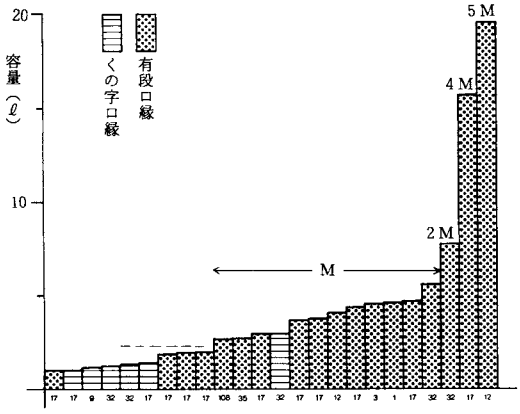
(1)　器種

本遺跡出土土器の記述にあたっては、細かな型式の認定作業が全くできていないため、大まかな器種分類を行い、その名称を使用していく。以下、本報告での分類指標を示しておく。

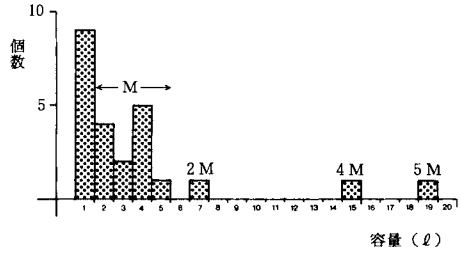
分類にあたっては、器形を主として従来の高杯形土器（以下「形土器」を便宜的に省略）、壺、甕等に分けた。鉢と壺・甕は器形の扁平度（口径／器高×100）と頸部のくびれの有無、容量で分類した。扁平度115以上ないしはくびれのないものを鉢とし、若干のくびれがあっても容量１ℓ以下のものは小型鉢の仲間に含めた。甕と壺の分類は、器形では口頸部長、口頸部形態（型式）、頸部のくびれ具合（頸部径／胴部最大径×100）、器厚、調整等（ミガキ・赤彩の有無）を参考とした。長胴（胴部高／最大径×100がほぼ100以上）で直口の口頸部（口頸部高／器高×100が20～32）をもつもの（301・302など）は頸部のくびれ度が概して弱く（指数50～70）粗製（ミガキを伴わない）で容量３～４ℓ代、本遺跡では煤の付着率が高いというように甕的な要素も多い。ただ当該形態には、記号文を有する例が多いことから従来通り壺として扱っておく。ミガキ・赤彩を行うものは基本的に壺とし、口縁部片のみでは甕と区別はしづらいが、116・119のごとく、頸部のくびれが強く（指数60以下）、胴部～底部が肉厚なものは壺に含めた。

甕は容量[1]分布から小甕（Ｓ）、中甕（Ｍ）、大甕に分けた（第120図）。小甕は1.0ℓ以上で2.0ℓ前後までのもの、大甕は約15ℓ、19ℓのものがある。中甕は4.0ℓ前後を平均に、3.0ℓ弱（ＭＳ）、５ℓ代（ＭＬ）の範囲に収まる。中甕の２倍サイズ－約８ℓの容量を有するものまでを仮に日常使用の煮炊具の範囲ととらえておく。前記の４Ｍ、５Ｍサイズは、民族例などからみても儀礼用の場合が多いとされる（小林1989）ように、非日常的なものと推定しておく。中・小甕は、第121図に示すようにグラフの容量分布に谷間が認められ、法量分化が一定程度進んでいるとみられる。ここで小甕としたものは、中甕の平均サイズからすれば約½～⅓の容量であるが、この差が単なる容量差なのか、煮炊の内容物に対応して分化したものか、今後、器形の分析、使用痕（おこげの種類や位置など）の観察や化学分析（脂肪酸分析）を積極的に行い、また、竪穴住居での保有状況や遺跡全体での組成比を算定するなど、その意義をめぐって甕の煮炊具としての使用の実態に迫っていくような研究が必要である。

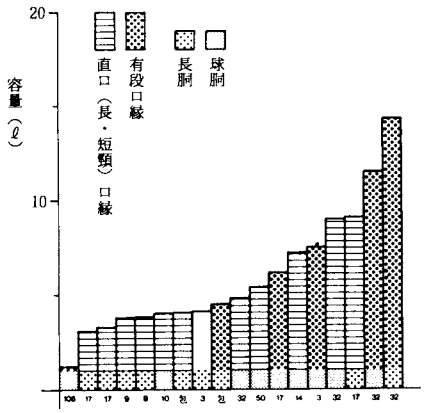
壺の容量分布は個体数も少ないが、小形品を除いて明瞭な分布の谷間は認められない。容量約２ℓ以下のものは、有段口縁の精製品（ミガキ・赤彩・胎土調製）として明確に法量分化しており、墳墓や各種の祭式土器のセットにも用いられるように、特定の場面で重用されるといった、大型甕同様の、使用の場の差として分化している可能性がある。本遺跡の段階以降、器台とのセットから台付壺化のコースをたどる器種である。



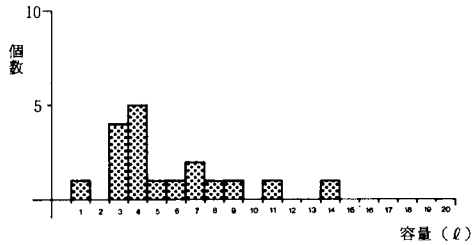
第120図　弥生時代末の甕形土器の容量（数字は土坑番号）



第121図　弥生時代末の甕形土器の容量別個数



第122図　弥生時代末の壺形土器の容量（数字は土坑番号）



第123図　弥生時代末の壺形土器の容量別個数

その他の壺は３～14ℓまで確認でき、３～４ℓ代にピークがある（第123図）。グラフで明らかなように、壺の容量は大部分が胴部形態に規制されている。すなわち、球胴のものが容量が大きくなり、言い換えれば、大容量の壺を作りたければ、球胴形を選択することになる。また、口頸部形と胴部形との関わりにも、本遺跡では有段口縁は球胴形といったような一定の傾向性が読み取れるが、これは型式としての結び付きの問題である。

器形から壺の機能差を考える時の重要な要素として、口頸部長、頸部のくびれ度、口縁部の開き方、容量がある。これらから、壺を分類すると、まず前記の長頸（口頸部長指数20～32前後）直口でくびれが弱く、長胴で容量４ℓ前後のものがある。口縁部の形状は素縁が最も多く、その他、くの字屈曲、受け口状（有段）などがある。記号文が施される器種である。次に、胴張で頸部のしまりが強く（指数35～40前後）、有段口縁（口縁部が直立ぎみのものと開きぎみのものがある）をもって、容量が大きいものがある（248・356）。その他、球胴（胴張）となり相対的に頸部のしまりが強くなって、容量が大きい352・354・113、球胴で極長頸の294、くびれが弱く、容量の大きな296、広口の108・492、口頸部が短い甕風の116などがある。

壺の形態は十分整理できておらず、現状では、容量３～４ℓ代の直口長頸長胴壺と容量の大きな有段口縁胴張壺の２者の使用方法のちがいを想定するにとどめたい。

鉢（大型鉢を除く）は形態のバラエティーが非常に多く、明確な分類はできなかったが、深身（指数100～140前後）のもの（271・272）、半球状胴部（指数160～210前後）のもの（94・191）、扁平（指数250～300前後）なもの（264・265）などがある。容量は概ね１ℓ以下で、それを越えるような有段鉢等の中型鉢はほとんど認められない。その他、容量0.2ℓ以下で最大径が口径を越える無頸壺風のもの（285・434）がある。

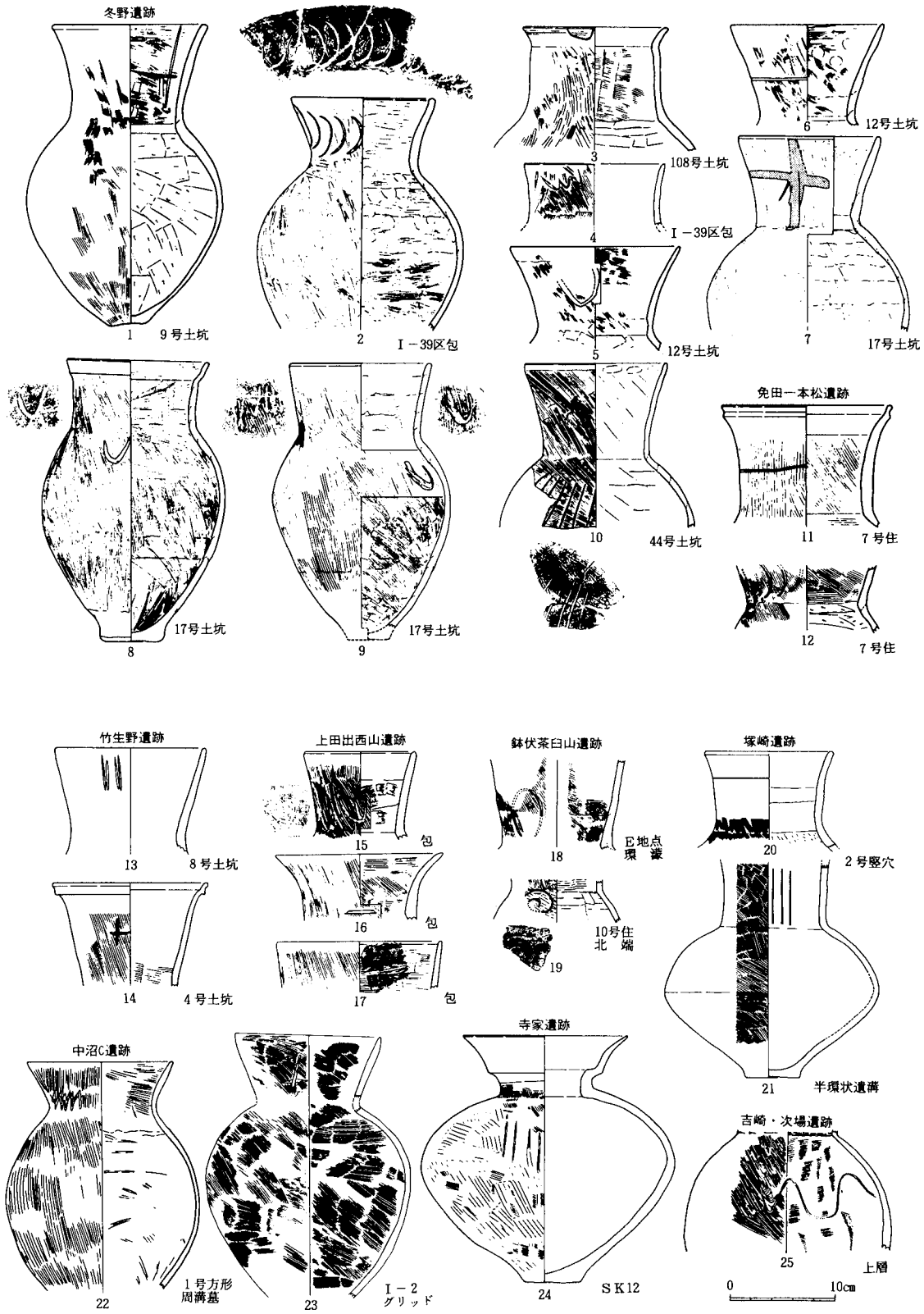
高杯、器台その他の器種については説明を省略する。

(2)　記号文

本遺跡と周辺遺跡出土の記号文を有する土器を集めたのが第124図である。

本遺跡の記号文の施文位置は、口頸部外面、同内面、頸基部、肩部外面がある。施文は先端がやや扁平な棒状具で線描きする例が多く、太さ・鋭さは様々である。２は湾曲線をもった施文具の２回の押圧によって三日月形としたもので、７は赤色顔料による線描きである。10は条線の１本が２回の線描きによっており、７本確認できる。

記号文の種類は、十字文、連続弧（三日月）文、U（V）字文、ジグザグ文、多条線文があり、U字形が４点と最も多い[2]。いずれも完全に記号化したものでそれぞれ何をシンボルとしたものかは分からない。施文器種は



第124図　冬野遺跡と周辺遺跡出土の記号文

通例のごとく直口の長胴壺が主で、本遺跡では他の形態のものに確認できない。

本遺跡周辺の資料を参考に当該地域の記号文のあり方を瞥見しておきたい。施文器種は本遺跡のあり方が一般的で、寺家遺跡24の二重口縁壺は特殊な例である。施文位置は頸部外面が最も多いが、肩部外面も普遍的に認められ、頸部内面の例も、西念・南新保遺跡（たて３条の沈線）、塚崎遺跡（同左）、上田出西山遺跡（横線）、本遺跡（十字形）でみられるように一定量認められる。

２の連続弧（三日月）文は、免田一本松遺跡に類品（12）があるほか、西念・南新保遺跡（楠ほか1989）では有段口縁壺の口縁部・肩部外面に線刻による連続三日月文があって、同様のモチーフの可能性がある。十字文は本遺跡で、線刻、赤彩があり、竹生野遺跡（14）、中沼Ｃ遺跡（23）に例がある。Ｕ（Ｖ）字形は、西念・南新保遺跡にあり、鉢伏茶臼山遺跡では逆Ｕ字、上田出西山遺跡ではＵ字の中央に一本線が入り、イカリ形となる。ジグザグ文は本遺跡のほか、中沼Ｃ遺跡（22）に出土例がある。波文は、次場遺跡で口頸部外面、肩部外面にゆるやかに大きく施されたものがある。条線は３本が前記遺跡で、４本が寺家遺跡、竹生野遺跡にあるが、本遺跡のような７本のものが同一のモチーフかは不明である。渦文は鉢伏茶臼山遺跡の例（19）があり、本遺跡でものその可能性をもつ小片がある。その他、柴垣須田遺跡では井桁文の出土例がある。

宝達山山麓地域周辺の記号文を概観し、時期的には、加賀の法仏式併行期～月影式併行期までのものを確認したが、それ以前の状況は調査例が少なく不明とせざるをえない。記号文の盛行時期は、主体的施文器種である直口長胴壺の消長と密接な関連を持つと考えられ、当該器種が普遍的に存在する本遺跡段階までは確実にその中に含まれる。出土状況は、特に祭祀土器群に偏在するようなあり方はなく、集落、墳墓等、遺跡・遺構の性格差との関連は認められない。ただ、宿向山遺跡や宿東山遺跡など確認例のほとんどないものもあり、その頻度には遺跡間で様相差のあることが予想される。

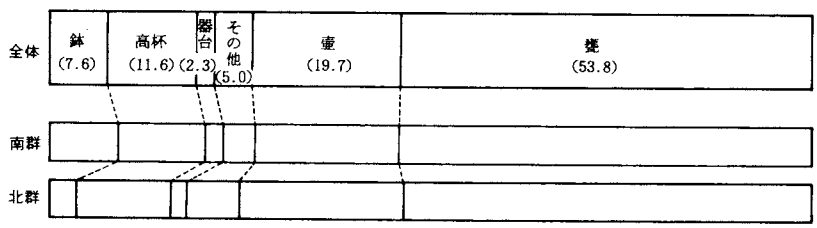
他の祭文との関係では、スタンプ文や赤彩祭文が出現・盛行する弥生時代後期後半の祭祀の高揚期である中沼Ｃ遺跡段階に、記号文と併存するが、両者は、やはりその主体的施文器種（形式）と消長を共にするため、当該形式が減少する本遺跡段階では急速に衰退し、三者の中では記号文が最も後へ残る。記号文とスタンプ文とは出現時期（楠1989）や波及経路（栃木1987）が異なり、また施文器種が違うようにそこに込められた祭祀的意味も当然違うことが予想される。時間的ズレの一因もそこに求められようが、祭祀内容の具体的内容については今後の課題としておきたい。

(3)　器種構成比（第６表、第125図）

大型土坑出土土器の器種構成比を算定するため、各器種の口縁部の破片数を数えた。器種を特定できないものは、特定したものの割合で比例配分したが、小片のため数器種に限定しえないものは不明としておいた。

全体では甕が53.8％と過半を占め、壺が19.7％、高杯11.6％、鉢類7.6％、器台2.3％と続く。実測個体の口縁部を器種別に数えた比率は、甕が52％、壺が24％、高杯８％、鉢類７％、器台４％で、口縁部破片数による比率に対して、壺をやや多く実測した可能性はあるが、さほど大きな差は認められない。

群別にみると、南群では鉢類が9.2％と多く、北群は3.6％と少ないが、その他の器種は大差ない。南群で鉢類



第125図　大型土坑出土土器の器種構成比（％）

第６表　大型土坑出土土器の器種構成（口縁部破片数）

		鉢類		精製小型壺類	蓋	有孔鉢	小型高杯	器台	高杯		壺					甕				不明
		中・小型鉢	大型鉢						杯形	有段鉢形	中型壺	甕形	有段口縁	直口口縁	その他	くの字	有段無文	有段擬凹線	付加状	
全体	866個	61	5	14	2	5	4	20	64	36	22	28	23	95	3	116	258	59	33	18
	(99.9%)	(7.6)		(1.6)	(0.2)	(0.6)	(0.5)	(2.3)	(11.6)		(19.7)					(53.8)				(2.1)
南群	617個	53	4	11	2	2	1	15	37	32	17	11	15	73	1	77	177	55	24	10
	(100%)	(9.2)		(1.8)	(0.3)	(0.3)	(0.2)	(2.4)	(11.2)		(19.0)					(54.0)				(1.6)
北群	249個	8	1	3	0	3	3	5	27	4	5	17	8	22	2	39	81	4	9	8
	(100%)	(3.6)		(1.2)	(0.0)	(1.2)	(1.2)	(2.0)	(12.4)		(21.7)					(53.4)				(3.2)

の比率が高いのは、17号土坑の小型鉢が31点－13%と高率を占めたためであろう。因みに、17号土坑ではその他は、甕が56%、壺が12%、高杯14%、器台４%で、壺が少なく、高杯・鉢類といった食膳具類の割合が高いという特徴を指摘できる。これは17号土坑の土器群の性格にかかわるものであろう。

ここで当該期前後の他遺跡のデータと比較してみたい。宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡では、本遺跡にほぼ併行する「住居跡（新段階）」で、甕58%、壺18%、高杯12%、鉢３%、器台５%、（古段階）も含めた「住居跡（全体）」では、甕59%、壺20%、高杯11%、鉢４%、器台２%というデータが示されている。前者と本遺跡との比較では、本遺跡が、相対的に鉢が多く、甕が少ないという傾向があり、その他は類似している。

また当該報告で引用された七尾市奥原遺跡の住居跡（本遺跡より古い段階）では、甕56%、壺15%、高杯10%、鉢10%、器台７%となっており、ここでは、鉢・器台の割合が高い。これと時期の重なる押水町宿東山遺跡でも、鉢・器台の割合は13%、９%と高くなっている（実測図の口縁個体数よりの算定）。

一方、押水町竹生野遺跡（第１次調査）では、本遺跡とほぼ同時期を主体とする大型土坑群が検出されているが、ここでは、壺の割合が１割弱と極端に低く、鉢・高杯・器台はそれぞれ10%・９%・３%で本遺跡と大差はない[3]（実測図の口縁部個体数よりの算定）。

以上の各遺跡のデータは、奥原遺跡を除き、いわゆる「宝達山山麓地域」という小地域に属するため大きな地域差を捨象して考えることができる。竹生野遺跡、冬野遺跡、鉢伏茶臼山遺跡新段階はほぼ同時期を主体とするため、竹生野遺跡での壺の少なさ、鉢伏茶臼山遺跡新段階での鉢の少なさは、各遺跡・遺構の特性の可能性がある。竹生野遺跡と冬野遺跡は類似の性格であり、その差をそこに求めることはできない。鉢伏茶臼山遺跡は、環濠を有する高地性集落であり、鉢の少なさは遺跡の性格差の可能性もあるが、冬野遺跡北群の例もあり、現状の資料のみからは即断すべきでない。奥原遺跡、宿東山遺跡に対して、上記３遺跡で器台の割合が低下するのは時期差のためであろう。

これらのデータを比較する際、器種の認定と構成比の算定方法が統一的でないという最も大きな問題がある。今後の検討課題であり、各データの読み取りも資料の増加を待って改めて考察したい。

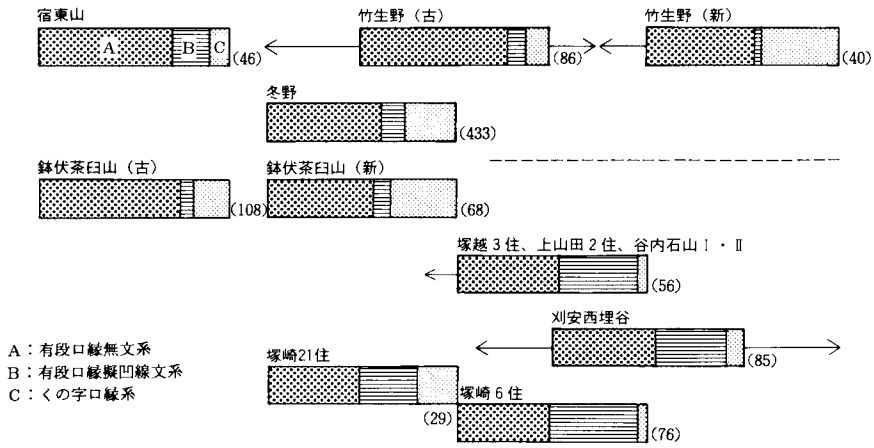
(4)　甕形土器の口縁部形態類別構成比

甕口縁部の類別構成比は、地域差の指標のひとつとしてこれまでも多くの分析がなされて（谷内尾1984、栃木1986、1987）おり、筆者も以前県内の遺跡の類別構成比を概観する中で、弥生時代後期後半における「宝達山山麓地域」といった小土器圏（地域圏）の設定、当該地域での古墳時代の開始に向けての土器圏（地域圏）の解体・再編について考えたことがある（北野1986）。そこでは、「第２段階」と「第３段階」の編年的位置付けに若干問題があり、類別構成比の推移の捉え方に疑問を残すこととなった（栃木1987）。第２段階の宝達山山麓地域宇ノ気地区のデータの算定の基礎となった、宇気塚越遺跡３号住、上山田遺跡２号住、谷内石山遺跡１号住などは、編年的に鉢伏茶臼山遺跡新段階よりは下るものであり、かえってこの間の有段口縁擬凹線文系甕の割合の増加の意義を認めるべきであろう。「第３段階」のデータを算定した竹生野遺跡28（・26）号土坑の資料は、鹿島町徳前Ｃ遺跡第２群土器の様相に近いものであり、現状でこの段階を明確に設定できる資料には恵まれていない。

各遺跡の構成比をグラフにしたのが第126図である。本遺跡のデータは未実測分も含めた口縁部数を数えたものであり、鉢伏茶臼山遺跡は報告書の算定データによった。その他は、報告書の実測口縁部数によった。Ａ類は有段口縁無文系、Ｂ類は有段口縁擬凹線文系、Ｃ類はくの字口縁系と便宜的に分類し、従来のデータとの対比をはかった[4]。

冬野遺跡大型土坑では、Ａ類が60％、Ｂ類が13％、Ｃ類が27％を占める。Ｂ類には在地系と月影式系が含まれ、Ｃ類は明確な分類はできないが、前段階からの伝統的なものと、次段階以降に顕在化する「能登型」甕に連らなるものの２形式が存在する。本遺跡のＣ類は、甕の容量グラフ（第120図）からもわかるように、小甕の多くを占めており、３～４ℓ代の中量サイズに限れば、その比率はかなり低下することになる。因みに、中甕と小甕（約1.0～2.0ℓ）は、口縁部径の大小とは必ずしも一致せず、口縁部片のみからその割合を算出することは難しいが、最大径付近までの遺存個体を数えた割合は、大甕（約10ℓ…３Ｍ以上）：中甕：小甕が、約１：７：９程になる。小甕が中甕に対して器形遺存率が高いと考えられることから、両者はほぼ１：１程度か、中甕がやや多くなるぐらいであろうか。

本遺跡の構成比と類似したものとして、鉢伏茶臼山遺跡住居跡新段階があり、各56％、９％、35％（古段階も含めた全体では、66％、８％、26％）となっている。竹生野遺跡古段階ではＣ類が12％とやや少なく、Ａ類が78％と多い。宿東山遺跡や鉢伏茶臼山遺跡古段階を参考にすると、宝達山山麓地域では押水・宇ノ気地区とも、この間Ａ類６～７割、Ｂ類１～２割、Ｃ類１～３割前後で推移しよう（第126図）。本遺跡の段階にＣ類が微増する



第126図　甕形土器の口縁部形態類別構成比の推移　　（　）は資料数

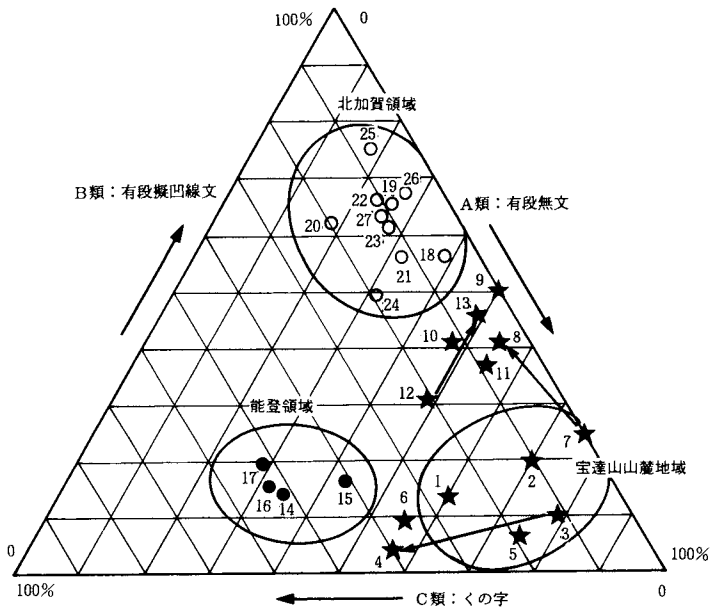
点は、「能登型」甕の成立、Ｃ類比率の高い小甕の割合の増加などの可能性があるが、現状での評価は保留したい。Ｂ類は宿東山遺跡段階から本遺跡段階にかけてやや割合が低下する（Ａ類の増加）可能性がある。参考までに、河北潟南辺の塚崎遺跡21号住では、Ｂ類が約３割と高く（相対的にＡ類の割合は低い）、北加賀の平野部に近いという地理的特性を端的に示している。

次に、本遺跡より新相に位置付けられる、塚越３号住ほかの宇ノ気地区の資料ではＢ類が４割に増え、Ｃ類が１割以下に落ち込む。この間、塚崎遺跡でも21号住から６号住への構成比の変化として同様な動きをみせ、刈安野々宮遺跡の例も参考にすれば、河北潟縁辺部で共通した現象と理解できよう。押水地区では、この時期を含むであろう竹生野遺跡で、Ｂ類の増加傾向が看取できないことから、宇ノ気地区とは動きを異にする可能性が強い。

竹生野遺跡新相土器群では、Ｃ類が40％と急増をみせ、宇ノ気地区以南とは構成比の様相差が明確化する。ここでＣ類の割合について注意を要するのは、冬野遺跡段階に比較的高率であったものは伝統的な形態が主であったり、小甕の主要形式であったのに対して、この段階では「能登型」甕と汎称されるような弥生時代末～古墳時代初頭の定式化した「地域甕」（田嶋1988）を主体とする点で、両者の意味は大きく違っている。

以上、宿東山遺跡や鉢伏茶臼山遺跡、冬野遺跡の段階、すなわち県内の高地性集落の主要な存続期における、「宝達山山麓地域」という加能国境地帯の小土器圏が、その廃絶を契機に、古墳時代の加賀・能登といった二大土器圏に解体・再編されていくという前回の仮説を、冬野遺跡ほかのデータを加えて再整理してみた。

しかし、土器圏（地域圏）の把握の指標として、甕口縁の類別構成比といった一点を取り上げたのみであり、今後は他器種も含めた型式認定作業を行う中で、各型式ごとの組成比を算定して、土器圏の理解を深めなければならない。「宝達山山麓地域」の領域設定もその後に始めて可能となるべきものである。また編年的位置付けが依然として曖昧である点も、今後の作業の重要な課題である。



1．冬野遺跡
2．宿東山遺跡
3．竹生野遺跡（古）
4．竹生野遺跡（新）
5．鉢伏茶臼山遺跡（古）
6．鉢伏茶臼山遺跡（新）
7．谷内石山遺跡Ⅰ
8．谷内石山遺跡Ⅱ
9．宇気塚越遺跡３号住
10．上山田遺跡２号住
11．刈安野々宮遺跡西埋谷
12．塚崎遺跡21号住
13．塚崎遺跡６号住
14．徳前Ｃ遺跡
15．国分高井山遺跡
16．奥原遺跡
17．鹿首モリガフチ遺跡Ｔ18
18．近岡ナカシマ遺跡２号溝下層
19．近岡遺跡大溝
20．無量寺Ｂ遺跡（第１次）
21．下安原海岸遺跡（第１～３次）
22．寺中遺跡（第１・２次）
23．南新保Ｄ遺跡（第１・２次）
24．南新保三枚田遺跡
25．北安江遺跡Ｃ16溝
26．御経塚ツカダ遺跡
27．法仏Ⅱ式

第127図　甕形土器の類別構成比の分布（栃木1986をもとに作図）

(5)　大型土坑の掘削と廃棄

大型土坑の分布の概要は個別報告の項で述べたが、ここではもう少し細かなあり方を見ておきたい。

まず、分布の近接度と形態の類似性を考慮すると、いくつかの小グループに分類可能である。例えば、列状分布を呈する南ａ群においては、１ｂ・２ｂと大型の１号－３号－12号土坑、規模が小さく不整形な８号－９号土坑、その東側で比較的大型の７号－10号－34号－35号土坑（東側の展開が不明のため、細分は保留）、南ｂ群では３ｂと規模の小さい14号－20号土坑である。北群では、100号－106号－108号、73号－43号、41号－44号－49号－47号、104号－50号が近接・類似する。これらは分布の見かけ上、不規則に存在するのではなく、一定の領域内に接近しながら（切り合いを極力避け）グループを形成するという特徴を持つ。

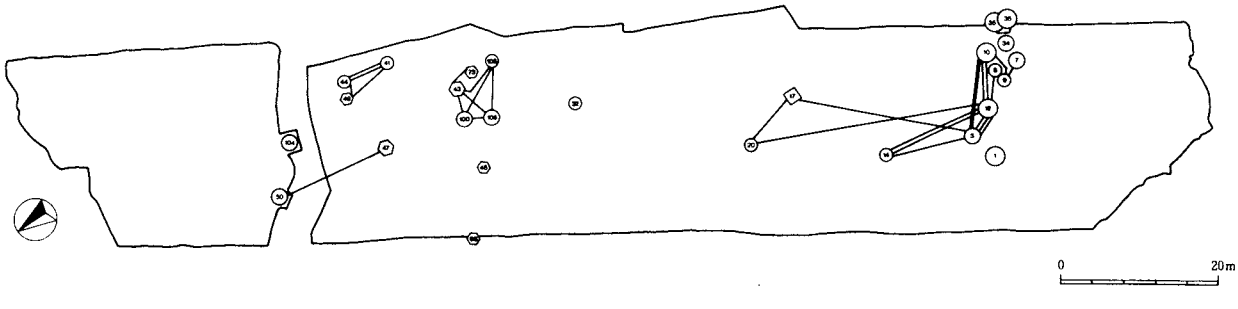
次に、埋土の堆積状況から廃棄に際しての埋め戻しと自然堆積を想定したが、その分布をみると、各グループに必ず両者が存在することがわかる。さらに、埋め戻しを想定した土坑では、埋土における地山の転置現象が顕著であり、先にはその要因として隣接土坑の掘削排土の投棄を考えた。

第３として、破片が複数土坑間で接合したものの共有関係をあげることができる。接近する土坑同士で破片を共有すること自体は至極当然と言えるが、土器群の多くが「かたずけ」により人為的にそれぞれの場所へ運ばれた[5]と考えると、その共有グループが運搬者を介して一定のまとまりとして捉えられる。自然堆積土坑は開口時間が長いため、遺物の廃棄量も多く、必然的に土坑間接合資料も多くなっている。

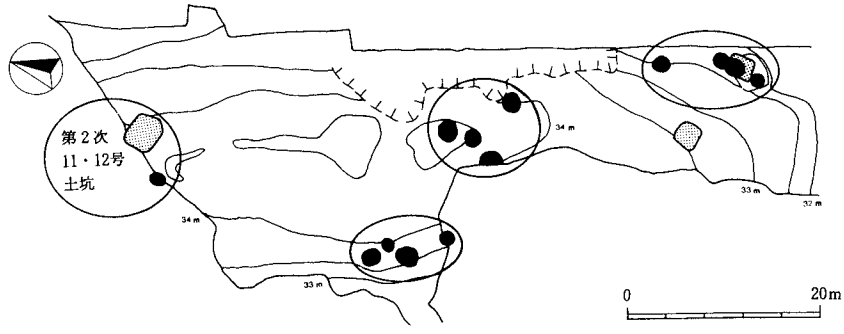
以上の観察結果から、大型土坑が一定領域内で同時併存したものではなく、その築造パターンとして、１グループ内で廃棄に際して新たに掘削するというような「随時築成」の形態を想定したい。したがってグループ内の埋め戻し土坑は基本的には最も新しいものではないと考えることができよう。仮にこのような考え方が妥当ならば、各グループ内での築造順序をある程度推定することが可能となる。

地山質埋土の理解については、土坑の上部構造とも関連性がある。例えば、掘削排土を周堤としたり、竪穴住居様の土屋根を構築した場合には、廃棄にあたっての第１次埋土は当該地山質土が流入することになる。また初期には、土坑壁上半の粘質土地山が崩落すると予想される。これらの堆積土と新たな土坑の掘削排土を投入したものとを区別するのは容易ではないと思われるが、むしろ、壁の地山が粘質土である土坑上半に、下層地山の黄灰色砂層ブロック土が堆積する状況を積極的に評価すれば、土坑埋土の「地山の転置現象」については、現状では先の理解が最も妥当性があるものと考えておきたい。

ここで注意しておきたいのは、12号土坑と９号土坑の堆積パターンである。遺物を多量含む腐植土系の土層と地山質土が交互に規則正しく堆積したもので、前者は後者の中央のへこみにたまる。腐植土は遺物の入り方からみて、土坑が開口状態にあり、土器等の廃棄に人間が訪れたことを示し、逆に地山質土は遺物量が非常に少なく、自然堆積とすれば、人間が訪れない間に緩やかに埋まったと考えられる。腐植土の生成要因を遺物等の有機物廃棄に求めることも可能であるが、それともに埋没過程における季節性を考慮する必要があると考える。１回の降雨によってもかなりの流入土があることは経験的にも理解できるが、また同様に本遺跡のような地山土の平地で、数回程度の降雨で、土坑が完全に埋没してしまうようなことも考え難い。以上のような事柄から、腐植土と地山質土の１単位を、１年間で堆積した量と考え、腐植土が主に春から秋にかけての堆積土（壁よりは地山質土の部



第128図　土坑間接合資料の共有関係



第129図　竹生野遺跡（第１次調査）の大型土坑群の分布

分を含むであろう）、地山質土が冬から春先にかけての堆積土と理解することができる。この考え方にしたがえば、両土坑は４年ぐらいの間にほぼ検出面まで埋まり、数次の土器群は１年サイクルで廃棄ないしは自然流入したものと考えられる。その当否は別にしても、自然堆積を認識する一つの土坑埋没パターンと捉えておきたい。

土坑群のグルーピングおよび構築順については、試案を提示しておくが、保留部分の多いものであることをあらかじめことわっておきたい。南群の第１グループとして１号→３号→12号があり、12号土坑および３号土坑上面はその後も遺物等の廃棄場として利用された。第２グループとして７号→34号→10号があり、その他、20号→14号、８号→９号の小型２群があって、大型２グループに従属させて２群４小群とすることもできるが、独立させて４群と捉えることもできる（第２グループについては、７号→８号→９号、35号→34号→10号という捉え方も可能性がある）。

北群は、100号・106号→108号（108号は東側に群が展開することも予想される）、73号→43号→47号、49号→44号→41号、104→50号の最低４グループ程度は確認できる。群ごとに土坑の形態差はあるが、南群でみられたような法量差で２分できるようなあり方は明確ではない。

本遺跡では南群、北群とも平均的には３基を一単位とするあり方が看取でき、このような状況は、当該遺構の分析の先がけとなった竹生野遺跡でも指摘されるとおり、４基をほぼ一群として構成されている（第129図）。これらのいくつかの「単位群」が同時併存した可能性は強いと考えるが、南群、北群が時間差を持つかどうかについては出土土器に様相差が認められるものの、現状では保留しておく。なお、本報告ではその機能についての論議をさけたが、少なくとも遺物の出土状態や土器の遺存状況の観察、埋土の観察等から、土坑の主な機能は、その埋没以前にあったことは確かであろう。用途論については三浦氏の立場（三浦1987）を支持しておきたい。

弥生時代末のこの大型土坑が貯蔵穴（穴倉）とすれば、これらは竪穴建物跡や掘立柱建物跡と同様に集落の重要な構成要素であり分析対象である。本報告ではその点や時期的に限定されることの意味など、様々な問題には一切踏み込めなかったことをお詫びして今後の課題としておく。

(6)　大型土坑出土土器の時間的位置

大型土坑からは多量の土器群が出土しており、出土状態や土坑の廃棄パターンの検討から、これらの多くが土坑の使命を終えた後、１年をサイクルとするような比較的短期のうちに断続的に投棄された可能性を指摘した。土坑の存続期間を考慮しても、少なくとも土器の投棄行為にかかる時間幅はさほど長いものではないと推定される。

本報告では、土器群の時間的位置付けを行う上で時間等の制約から、とりあえず高杯のみを取り上げて考えていくが、他器種の検討が全くできないため不十分なものであることをあらかじめおことわりしておく。

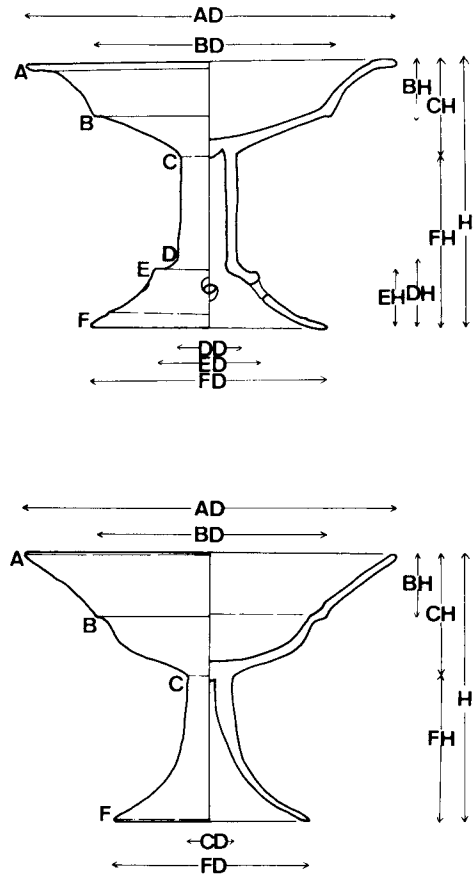
型式認定　高杯の杯部と脚部の形態には強い相関があるが、ここで杯部に注目すると、本遺跡では大きく２系

統があり、杯形、有段鉢形と仮称する。

杯形には、口縁端部に肥厚面を有し、棒状脚が付くとみられる72・370・390などと、素縁で緩やかに開く脚部をもつ98・277などがある。有段鉢形には、口縁部が外反して口径が比較的大きい134（・243）、口径が小さめで口縁部の外反度の弱い225・278、杯部が小さく口縁部の外反が強い138、深めの137、口径が大きく口縁部が短かめで外反しない96・414などがある。脚形のわかるものは138があるにすぎない。

本遺跡では器形全体を窺い知れものが僅かしかないため、ここで県内の当該期前後の資料を参考に、あらかじめいくつかの型式を認定し、それらとの対比において時間的な位置付けを行いたい。

杯形では、17号土坑277に近いものとして、杯口縁部が大きく発達し、ハの字状に開く脚部をもつ竹生野遺跡（第１次調査）４号土坑、26・27（挿図中番号）のようなものがある。以下形態的特徴を列記する。杯口縁端・脚端は素縁（丸縁、発達しない面取り）。脚部は柱状部の名残りを持つものから、基部から緩やかに開くものまであり[6]、透し孔を持たないものを通例とする。スタンプ文・環状把手は持たない。赤彩の頻度は特に他の型式とは区別できず、赤彩文様（別型式では頻度が高い）は基本的には持たない。形態・法量等から少なくとも２群の抽出が可能である。口径25～30cm、器高15～19cmの大型品（Ⅰ）と、口径22～24cm、器高12～16cmの小型品（Ⅱ）がある。



第130図　高杯形土器の計測

Ⅰの脚部は、宿東山遺跡高杯Ａ類の形態に連らなるもので、４孔の円形透しを有する例も含んでおく。柱状部が明瞭に認識できるなど、脚部の高いものが多く、ＦＨ／Ｈ（×100、以下省略）が51～62、杯部はＣＨ／ＡＤが24～34、ＢＤ／ＡＤが43～59、ＦＨ／ＡＤが31～43を特徴とする。Ⅱは脚がＦＨ／Ｈ44～52、ＦＨ／ＡＤ26～29と相対的に小形となっている。さらに脚の偏平度（ＦＡ／ＦＤ）も、Ⅰは60～80前後であるのに対して、Ⅱは50代を主としており、透し孔がないなど、より台脚化したものである。

製作技法や胎土など詳細の観察は行っていないが、とりあえず以上の形態的特徴から、当該型式の高杯を多く出土した遺跡名を冠して、前者を竹生野（たこの）Ａ型式、後者を竹生野Ｂ型式と認定しておく。竹生野Ａには竹生野遺跡（第１次調査）４号土坑26、同９号土坑20などがあり、本遺跡17号土坑277や３号土坑98も含まれる[7]。竹生野Ｂには、竹生野遺跡（第１次調査）25号土坑７、刈安野々宮遺跡23号住周辺948などがある[8]。

柳田うわの遺跡溝状遺構Ａの63、鹿首モリガフチ遺跡Ｔ18の261などの型式や柳田うわの遺跡同67などの型式に類似しながら、口縁部が発達し、脚部が透しを持たない宿東山遺跡218、61、鹿首モリガフチ遺跡Ｔ18の262とは、杯口縁部の発達度（ＢＤ／ＡＤ）の差として明瞭に区別できる。また、徳前Ｃ遺跡（第２次）溝状遺構102、103や国分高井山遺跡８号住３、３号土坑９、テラス７、竹生野遺跡（第１次）８号土坑20は、口径15～21cm、器高11～14cmと竹生野Ｂ型式よりも小形であることや口縁部が外反せずに直線的に外傾する点などから区別できる[9]。

杯形ではその他41号土坑390がある。有段棒状脚で杯口縁部および杯端・脚端が著しく発達したものとして、七ツ塚墳墓群１号墓、上田出西山遺跡包含層、（宿東山遺跡ＳＫ75）に出土例があり、ＡＤ32～35cm、ＢＤ／ＡＤは40代である。また１号土坑72や108号土坑370は、脚部不明ながら宿東山遺跡Ｃ類に近いものとみられるが、肥厚面が弱いなど細部では差がある。

次に有段鉢形杯部の類似形態を検討する。41号土坑391はＡＤ35cmと大型で、ＢＤ／ＡＤが51と口縁部が大き

く発達し、肥厚面をもつ[08]。型式は異なるが41号土坑390と形態的特徴の上では類似点がある。本例は棒状有段脚がつくとみられるが、類品としては、鹿頭上の出遺跡５号住５、奥原遺跡包含層75があり、参考品として塚崎遺跡21号住162をあげることができる。ＢＤ／ＡＤが65前後のものには、西念・南新保遺跡Ｈ区ＳＤ01下層333や同Ｋ区ＳＤ04の358、中沼Ｃ遺跡Ｆ－４グリッド３がある。

12号土坑138はの類品は、南新保Ｄ遺跡Ａ区第46図６、旭遺跡群一塚ＳＸ21出土例がある。ＡＤ20～23cm、Ｈ13～14cm、杯部の偏平度ＣＨ／ＡＤ30～33、ＢＤ／ＡＤ54～56、ＦＨ／Ｈ48～54をそれぞれ前後するような形態的特徴をもつ一群として捉えられる可能性がある[09]。同程度の大きさではその他、松寺遺跡Ａ２溝16のように口縁部の短いものがある。

一方、小形で深身の杯部（ＣＨ／ＡＤ＜約40）を有する一群があり、ＡＤ16～22cm（18～20cm主体）、Ｈ11～16cmで、口縁部は立ちぎみ（外傾度50°代）で長い（ＢＨ／ＣＨ60～75前後）。脚はＦＨ／Ｈが35～45前後と短く長脚形態の小形化を基本とするが、南新保Ｄ遺跡Ｃ区第73図５のように基部から大きく開いたものや、国分高井山遺跡10号住16のように極端に小形化（ＦＨ／Ｈ36）したものがあり、総じて「台付鉢」とも呼ぶべきものである[10]。ＡＤ20cm、Ｈ15cmを越える大型品（倉部出戸遺跡ＳＫ19－５、横江Ａ遺跡市教委118）は細別される可能性はあるが、ここではこれらを御経塚ツカダ型式と汎称しておく[11]。本遺跡12号土坑137は当該型式の可能性をもつが、口縁部長が相対的に短く、脚等が不明のため定かではない。

その他、44号土坑414や３号土坑96のような口径が比較的大きく、口縁部の短いものがある。徳前Ｃ遺跡（第２次）溝状遺構107が形態的に近いが、型式を認定するほどの資料はない。中型の有段鉢形土器の形態を残した器形であろう。

時間的位置　次いで、本遺跡で確認されたこれら高杯の各型式の共伴事例を検討しながら、周辺遺跡との対比においてその時間的位置づけを考えていきたい。

本遺跡の杯形高杯の主要型式は竹生野Ａ型式であるが、そのほか、宿東山遺跡で主体的であった口縁端部に肥厚面を持つものがかなりあり（１号土坑72、108号土坑他370など例は多いが破片がほとんど）、脚部も破片ながら柱状部のしっかりした棒状無段脚や棒状有段脚があって、同遺跡のA_2類～Ｃ類に広い意味で包括しうると推定できるものが存在している。一方、同遺跡には竹生野型式は確認できず、これらの点から、地域差を考慮する必要がないとすれば、両者は一部並存期を有する可能性はあるが、主要な存続期はあまり重ならない（少なくとも南群では）と考えられる。本遺跡での竹生野Ａ型式は３・17号土坑にあり、ほかにも10・32号土坑にその可能性を持つ脚部が出土しているが、17号土坑278の有段鉢形を除いては、他型式との明確な共伴を確認できたものはない。

竹生野遺跡（第１次）では、竹生野Ａ型式が主体であるが、25号土坑で同Ｂ型式と小型有段鉢形で身の深い御経塚ツカダ型式（やや大振り）かと見られる杯部が共伴している。竹生野Ｂ型式は、刈安野々宮遺跡第23号住周辺や南新保三枚田遺跡沼状遺構などにみられ、現在のところ本遺跡や鉢状茶臼山遺跡新段階に伴った例はなく、より後出的といえることから、本遺跡の土器群は大半が竹生野遺跡25号土坑出土土器の時期以前におさまると考えられる。

41号土坑390・391は杯部形態が異なるものの、共に大型で口縁部が著しく発達する特徴を持ち、先にあげたように宿東山遺跡とほぼ同時期を主要な存続期とする遺跡で顕著に見られる。

その他の有段鉢形では、本遺跡12号土坑138の南新保Ｄ群（高座型式）は出土例自体が少ないが、有段脚ながら鉢伏茶臼山遺跡Ｅ地点環濠560は類似形態とできよう。

これまで述べた各型式の共伴例から本遺跡大型土坑出土土器群の時間幅を以上のようにとらえておきたい。

竹生野型式と高座型式　竹生野型式高杯は、能登から越中西部（中山南遺跡・南太閤山Ｉ遺跡など）を中心に分布する。加賀では主体的型式ではないが、辰口町荒屋遺跡（町教委）や小松市高堂遺跡で存在し、類似品は一部越前（和田遺跡）にも存在する。

一方、高座型式は原目山墳墓群や漆町遺跡などに見られるように越前から加賀を中心に分布するが、外縁は能

登（万行赤岩山遺跡など）にも及んでいる。

両型式は、荒屋遺跡竪穴状遺構での共伴例を引くまでもなく、ともにこれまでの編年研究で「月影式」およびその併行期の土器であることが明らかである。従来からの指摘にもあるとおり、この時期の北陸の２大土器圏の象徴的器種、「月影型甕－装飾器台」と「能登（千種）型甕－台付直口壺」はそれぞれの領域を越えた緩やかな分布状況を示すが、この両者（竹生野Ａ型式－高座型式）の高杯も同様であり、当該期の北陸地域を二分する代表型式と言えよう。

それらの分布状況に対して、御経塚ツカダ型式は高座型式の主体的分布域はもとより、広く越中～越後・佐渡でも主体型式として存在している。能登－国分高井山遺跡10号住、越中－中山南遺跡２号住、越後－横山遺跡１号住、佐渡－千種遺跡などが例としてあげられる。高座・竹生野Ａ型式との明確な共伴例は確認できず、時間的には後出的である[10]。

以上、本遺跡出土例を中心とした、県内出土高杯の型式認定とその共伴関係から、当該土器群の時間的位置を考えてみた。今回は高杯のみを取り上げたものであるが、器台（17号土坑287～290）や小形の鉢（17号土坑264・265、同285・47号土坑434）の各形態からみても、その時間的位置には矛盾は無いように思われる。

また、１号土坑、３号土坑、17号土坑などの各土器群に伴出した[09]、一般に「月影（型）式」甕と通称されるものは、加賀地域との併行関係を直接示す貴重な資料であり、各土器群の時間幅の一端を如実に物語っている。

注

(1) 容量測定は、藤村東男1981　「土器容量の測定」『考古学研究』111号、の方法によった。

(2) 295の肩部の斜行刺突文は装飾文様として扱ったが、155の沈線文についても同様の可能性がある。柳田うわの遺跡では、頸部外面に斜行刺突文を有する例がある。

(3) 26号土坑、28号土坑のように、本遺跡より明らかに後出的な土器群は除外したが、それ以外でも11号土坑など様相的に新しいものも含んだ数値である。

(4) 構成比は付加状口縁系を除外した割合である。また各系統とも依然として型式差を無視した分類であり、今後は明確に型式設定を行い、型式ごとの割合を算定して地域差の問題を深化させていく必要がある。

(5) １個体の複数土坑への破片の分散については、様々なケースが想定できるため、本来的には個々の破片の遺存状況や、当該遺物の含有土層の評価などを踏まえて個別的な検討が必要となる。

(6) 脚と杯部の接合部分の技法は、小型品で脚基部が中実のものや杯底部が平坦なものの中には、他と異なったものが含まれる可能性がある。

(7) 17号土坑277は前者とは脚の形態等（ＦＨ／H57以上、ＦＨ／ＦＤ70以上）で型式的に細別される可能性があり、冬野型と仮称しておく。類品は未報告ながら、辰口町荒屋遺跡住居跡（辰口町教委調査）などに存在する。

(8) 竹生野遺跡（第１次調査）22号土坑27、上田出西山遺跡包含層95、谷内石山遺跡１号住１など、小型品でありながら脚部が杯部に対して相対的に長いものの型式的な取り扱いは保留しておく。同様に大型品についても脚部の小形のものはとりあえず当該型式の認定からは除外しておく。

(9) その他、口縁部が著しく発達したもの（ＢＤ／ＡＤ＜30）として、柴垣須田遺跡Ｎ区３号土坑11や竹生野遺跡（第１次）８号土坑22がある。

(10) その他、大型品ではＡＤ27～31cm、ＢＤ／ＡＤ75～80と口縁部が短く素縁のものがある。敷地町後方遺跡108を代表とし、類例は、同遺跡109・110、西念・南新保遺跡Ｋ区ＳＤ05－396、鹿首モリガフチ遺跡Ｔ18－266、矢田遺跡４号溝下層104、中沼Ｃ遺跡ＳＤ03－２などがある。確認例は少ないが、有段脚を伴うものとして敷地町後方型と仮称しておく。なお、口縁部の発達した（ＢＤ／ＡＤ50～65）ものの中でも２～３程度の型式の認定が可能となろう。今回、有段脚類の検討は行わないが、後述する御経塚ツカダ型式の杯部形には伴わず、基本的には本型式を原型として大型品に伴うのを基本にすると考える。吉竹遺跡（第２次）235は、口縁部がやや発達し、脚が退化傾向にあって、本型式からの派生と考え

られる。国分高井山遺跡５号土坑21は、御経塚ツカダ型式との折衷形として考えられる。小型品の希少な例では鉢伏茶臼山遺跡Ｅ地点環濠560の例がある。後述の無段脚類、仮称南新保Ｄ群をモデルとした可能性がある。

(11) 無段脚類の大型品（ＡＤ25～29cm、Ｈ15～21cm）にはいくつかの群が設定できる。津向大杉崎遺跡住居跡例や中沼Ｃ遺跡２Ａ区一括Ｃ群例のような一群（ＣＨ／ＡＤ31～35、ＢＤ／ＡＤ52～62、ＦＨ／Ｈ53～57)、杯部がより偏平で口縁の発達したもの（ＣＨ／ＡＤ21～31、ＢＤ／ＡＤ52～55、ＦＨ／Ｈ53～63）がある。また、高座遺跡東調査区25・26、御経塚ツカダ遺跡1981－１Ｎ区14など（ＢＤ／ＡＤ50～59、ＦＨ／Ｈ48～57、ＡＤ25～28cm、Ｈ15～18cm）は、法量差はあるものの本遺跡138などは形態的に特徴が比較的類似している。ここではとりあえず両者を含めて**高座型式**と仮称しておき、後者を南新保Ｄ群ととらえておく。その他、鹿首モリガフチ遺跡Ｐ５Ｇ第３層13のような、ＢＤ／ＡＤが44、ＦＨ／Ｈが47と杯形－竹生野Ａ型式に類似するものもある。これらの型式認定作業は今後の課題としておきたい。

なお、有段鉢形の脚の透し孔は有するものと無いものの両者が存在し、後述する小型品の御経塚ツカダ型式では無いものが主体となるが、有するものの中では、杯形に比べて３孔（および２孔一対３ヶ所）例の多いのが特徴である。

(12) この型式を高杯とみるか台付鉢とみるかは、単なる形態やその系譜による器種名の呼称の問題ではなく、弥生時代後期～古墳時代前期へかけての、食膳形態土器の変遷にかかわる重要な問題をはらんでいる。当該期の食膳形態型式の組成比の推移を明らかにした上で評価、命名すべきと考えるが、ここでは通例にしたがい高杯としておく。

(13) スタンプ文、赤彩文様のような祭文を伴う例はないが、松寺遺跡Ａ２溝・中山南遺跡２号住のような沈線による装飾例がある。杯口縁端・脚端は素縁を基本とする。

(14) 竹野生Ｂ型式ないしは徳前Ｃ遺跡（２次）102・103の様な形態の小型品は、杯部形態などの点で本型式との関連性が考えられる。

なお、御経塚ツカダ型式に共伴するものに、特徴的な大形の高杯がある。外反せずに短く立ち上がる口縁部を持つもので、串田新遺跡１号住29、中山南遺跡２号住７、横山遺跡例などがあり、類似資料として、徳前Ｃ遺跡（２次）106、南新保三枚田遺跡沼状遺構29、などがある。ＡＤ25～32cm、Ｈ14～18cm、扁平な大型杯部に、ＦＨ／ＡＤが24～27とやや不釣合いな小形の脚部を持つものである。有段脚を基本とし、**中山南型式**と仮称する。無段脚（徳前Ｃ）、八の字状脚（南新保三枚田）いったバラエティーがある。能登から越後の、北陸北東部を中心とした分布傾向（小田木1989）が確認できる。この型式の成立は御経塚ツカダ型式と共に、それ以前の地域型式からの内的発展のみでは生まれえないものと考える。

(15) 本遺跡出土の「月影式」甕はいずれも南群土坑からの出土であり、北群土坑出土の高杯には明確な竹生野型式がなく、41号土坑出土品をはじめやや古相を呈するものがあることは、両群の間に若干の時間差を想定することも可能であり、だとすれば、本遺跡の存続期の後半段階に当該形態の「月影式」甕が共伴してくると言えるのかも知れない。

参考・引用文献

小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ　石川考古学研究会

北野博司　1986　「宝達山山麓地域における『月影式』併行期の土器群」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編　石川考古学研究会

楠　正勝　1989　「絵画土器・記号文・スタンプ文」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会

小林正史　1989　「先史時代土器の器種分類について」『北越考古学』第２号　北越考古学研究会

田嶋明人　1988　「北陸における『庄内式』から『布留式』併行期の土器の状況」第３回庄内式土器研究会

田嶋明人　1988　「北陸の『定型化』した古墳以前の墓制」『定型化する古墳以前の墓制』第24回埋蔵文化財研究集会

栃木英道　1987　「スタンプ文について」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

栃木英道　1986　「大溝出土土器の検討」『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

栃木英道　1897　「弥生土器について」『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』宇ノ気町教育委員会

三浦純夫　1987　「北陸における弥生時代の大型土坑」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ

谷内尾晋司　1984　「鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置」『鹿首モリガフチ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

『敷地町後方遺跡発掘調査報告』加賀市教育委員会　1982

『漆町遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター　1988
『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1987
『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会　1987
『旭遺跡群発掘調査概報』松任市教育委員会　1990
『倉部』石川県立埋蔵文化財センター　1990
『松任市横江Ａ遺跡』松任市教育委員会　1897
『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』野々市町教育委員会　1984
『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会　1985
『金沢市松寺遺跡』金沢市教育委員会　1985
『金沢市南新保Ｄ遺跡』金沢市教育委員会　1981
『金沢市南新保三枚田遺跡』金沢市教育委員会　1984
「吉原七ツ塚墳墓群」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』石川県教育委員会　1976
「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』石川県教育委員会　1976
『津幡町刈安野々宮遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1988
『津幡町谷内石山遺跡』津幡町教育委員会　1980
『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』宇ノ気町教育委員会　1897
『河北郡宇の気町宇気塚遺跡』石川県教育委員会　1973（住居跡資料は『谷内石山遺跡』所収）
『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会　1979
『高松町中沼Ｃ遺跡』高松町教育委員会　1987
『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1987
『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1987
『上田出西山遺跡発掘調査報告書』押水町教育委員会　1980
『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1988
「柳田うわの遺跡」『羽咋市史』原始・古代編　羽咋市　1973
「次場遺跡」『羽咋市史』原始・古代編　羽咋市　1973
『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター　1988
『柴垣須田遺跡』羽咋市教育委員会　1986
『鹿首モリガフチ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1984
『鹿頭上の出遺跡』富来町教育委員会　1989
『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』石川県立埋蔵文化財センター　1986
『矢田遺跡』七尾市教育委員会　1986
『万行赤岩山遺跡』七尾市教育委員会　1983
「七尾市津向大杉崎遺跡」『石川考古学研究会々誌』第11号　石川考古学研究会　1968
『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1982
『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会　1984
『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会　1971
『串田新遺跡Ⅱ』大門町教育委員会　1981
「南太閤山Ⅰ遺跡」『七見・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(2)』富山県教育委員会　1984
「和田遺跡」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編　石川考古学研究会　1986
「原目山遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編１　1971
『横山遺跡』長岡市教育委員会　1987
『千種』新潟県教育委員会　1953

第４章　免田―本松遺跡

第１節　層序と遺構の配置

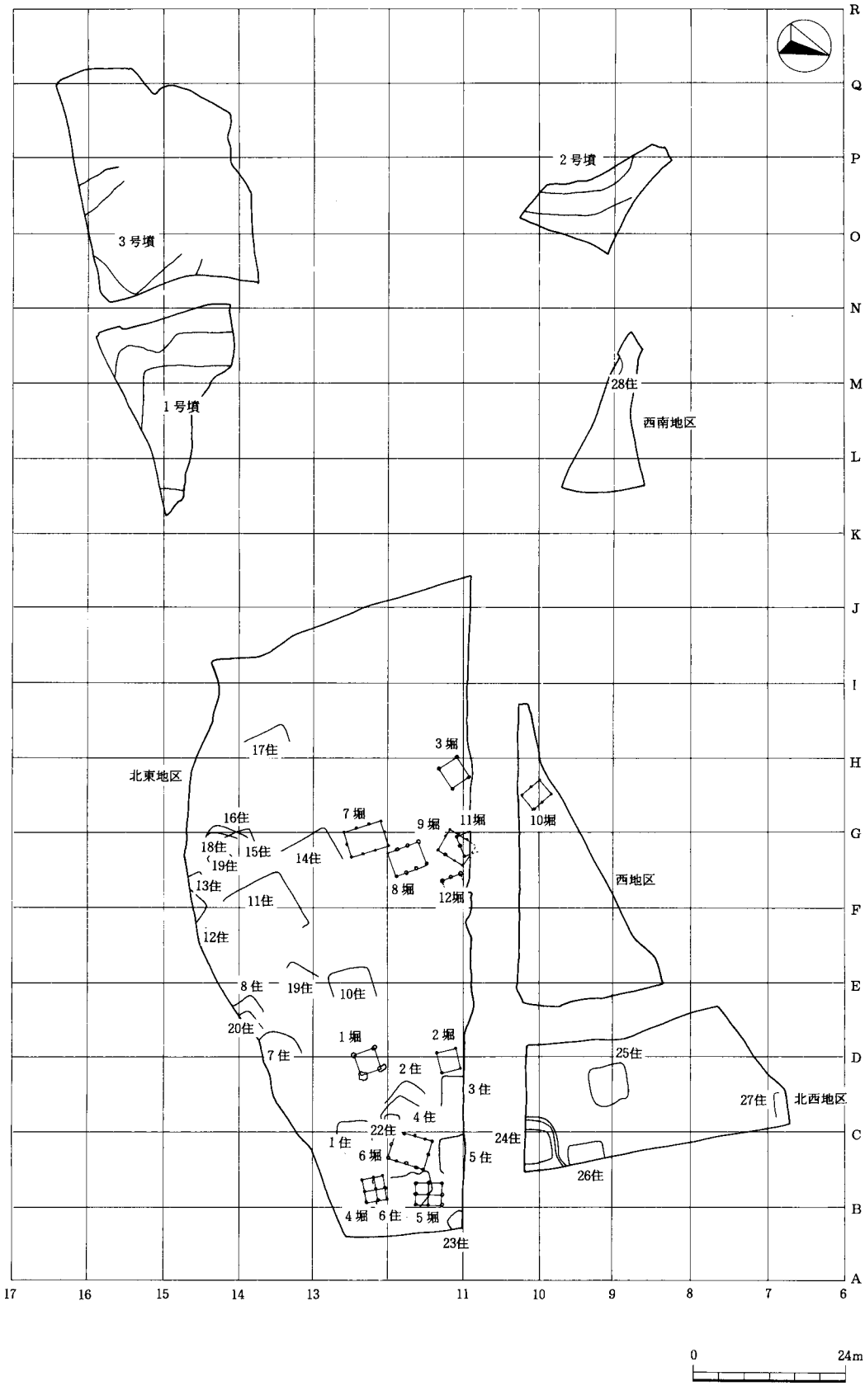
免田―本松遺跡の立地する丘陵は、海岸線に向かって延びる舌状の大地である。この台地は冬野遺跡のある台地を含め、本来は前田川によって形成された東間さかて山付近を扇頂とする扇状地であった可能性が地形図から伺える。台地の西側は、大海川の開析作用によってか急に崖となっているのに対し、東側は古墳群の立地する辺りから緩やかに傾斜し、冬野遺跡との間の谷に至っている。東向きの緩斜面であり遺跡が立地するには好条件と言えよう。免田―本松遺跡で検出された住居跡群はこの緩斜面に立地している。

この丘陵上は調査地を含め畑地あるいは水田として利用されており、数段のカットが認められる。また、ほとんどが地山面まで削平されており遺構の残りはよくない。あえて土層断面図は示さないが、遺物包含層と思われる黒褐色土は、北東地区の中央部分や東端部、西南地区で確認されたものの、それ以外では遺構覆土として捉えられたに過ぎない。また、遺構はこの黒褐色土中から堀込まれていたらしく、斜面ということもあって竪穴住居跡の壁面を完全に検出できたものは皆無である。

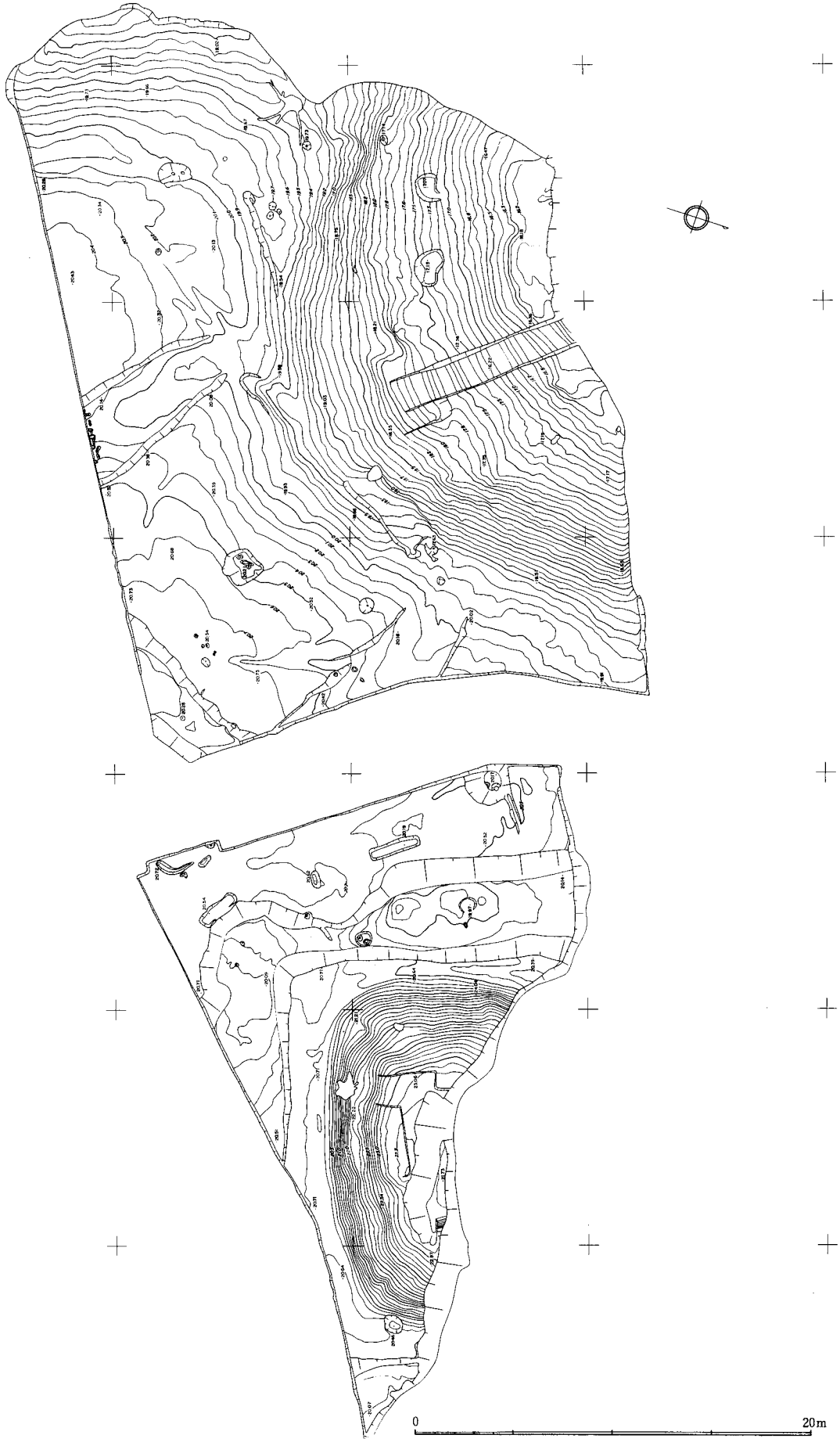
遺構は縄文時代の落し穴や、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物などが検出されている。竪穴式住居跡は、調査区の南北両側にさらに展開し、掘立柱建物は、北東地区中央から西地区と、北東地区東端に分布の偏りが認められる。詳細にみると弥生時代の遺構は北東地区のＥラインより東の西南地区に限られ、古墳時代後期のものも東側に分布が偏るようである。ただし古墳群と北東地区の間の部分についてはすでに削平されており、この部分に遺構が存在した可能性もある。

遺物については包含層の状態が前述した通りであり、包含層出土のものは偏りが多い。時代的には岩宿時代から中世にまで及ぶが、主体はやはり弥生時代後期から古墳時代後期のものである。もちろんこれらは遺構出土のものが多く、包含層出土としたものについても、遺構上面付近のものが多く含まれると考えられる。

グリッドは12m×12mを１グリッドとし、東西方面にはアルファベット、南北方面にはアラビア数字を付けグリッド名とした。

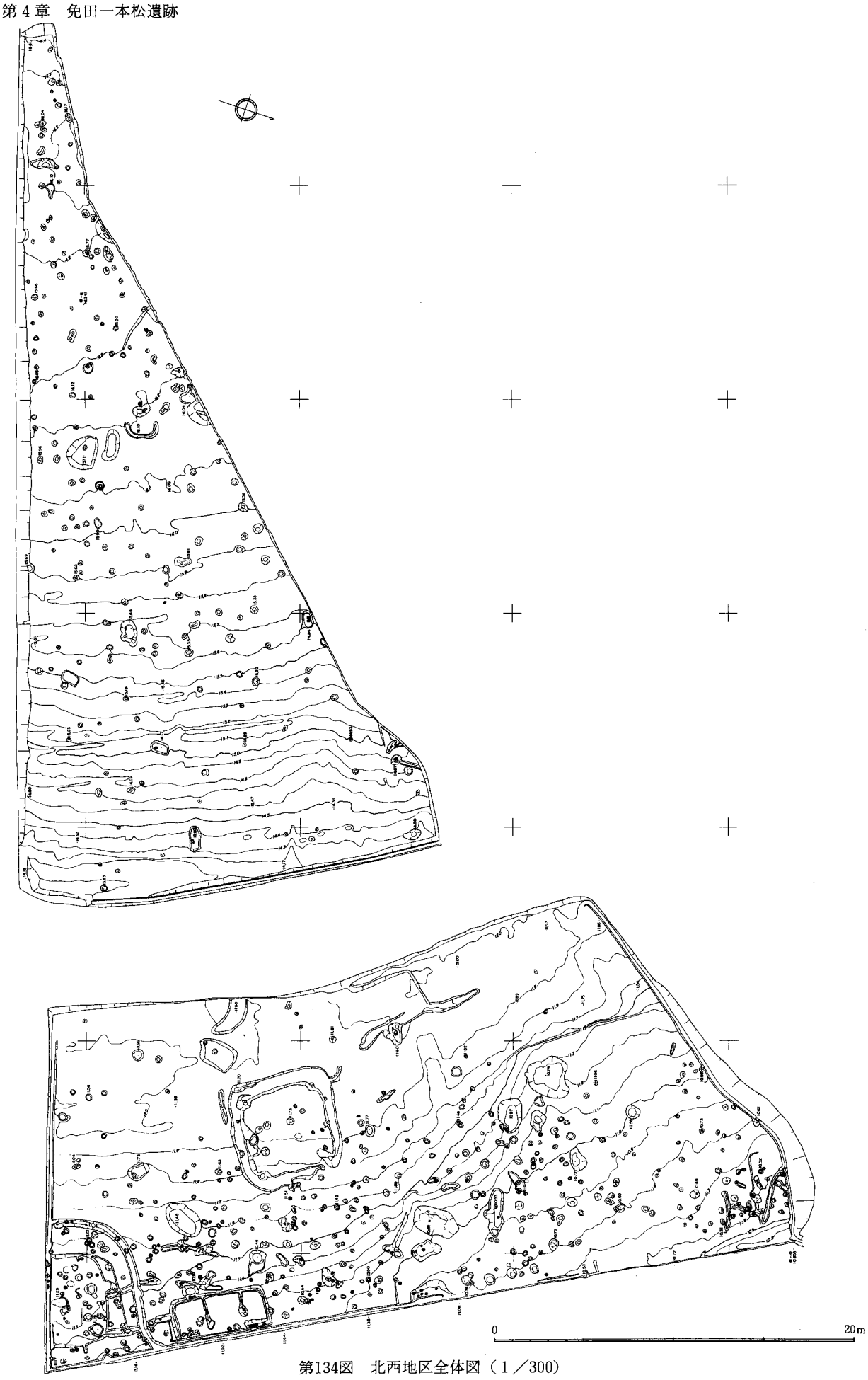


第131図　免田一本松遺跡・冬野小塚古墳群主要遺構およびグリッド配置図（１／1000）

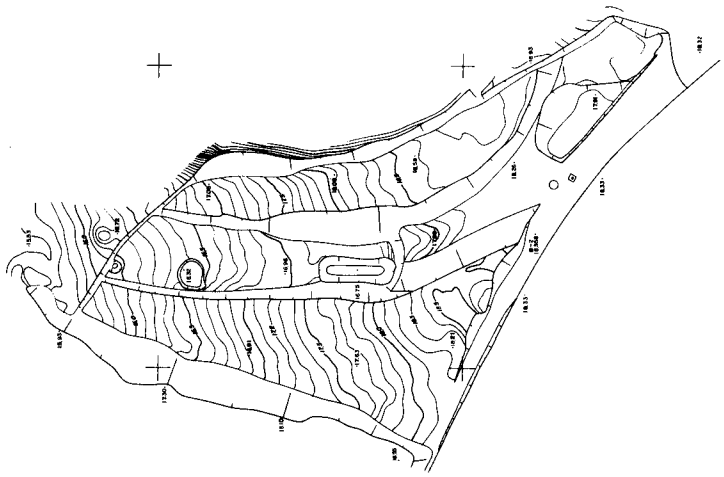


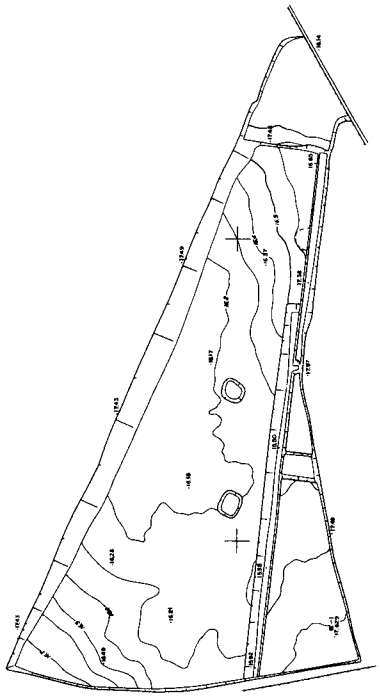
第132図　東南地区全体図（１／300）

第133図　北東地区全体図（1／300）



第134図　北西地区全体図（１／300）





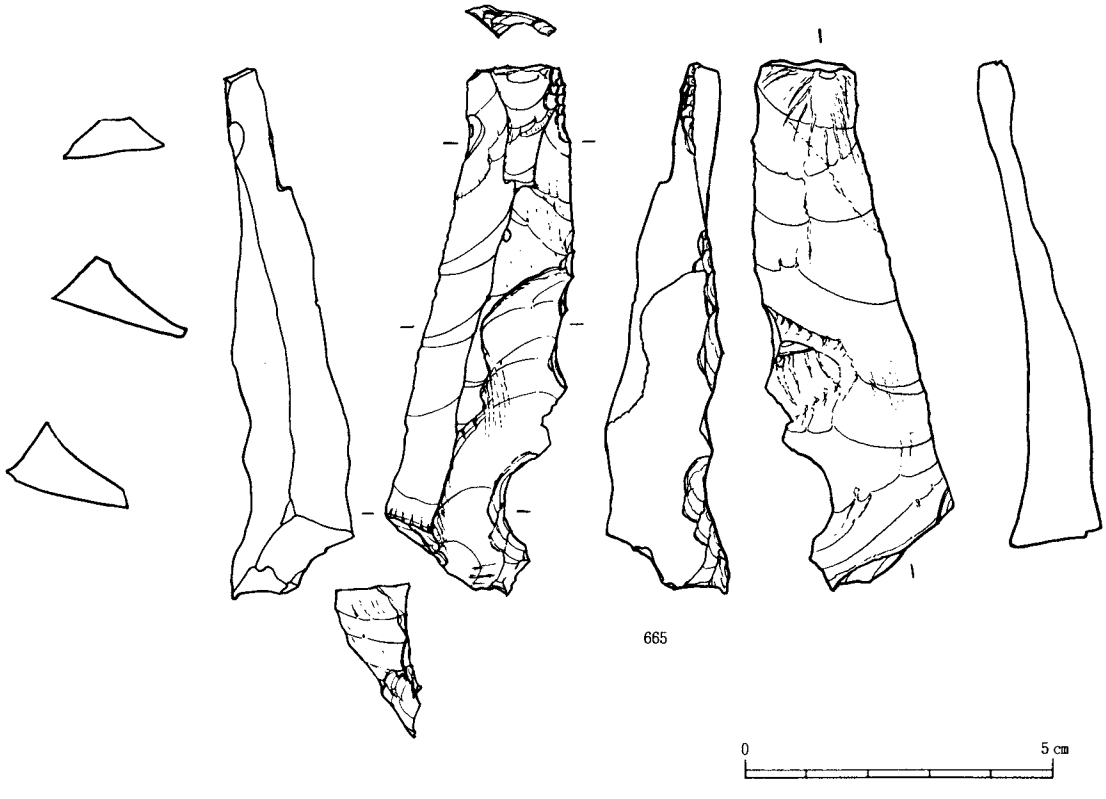
0　　20cm

第135図　西南地区全体図（１／300）

第２節　岩宿時代の遺物

微細剥離痕のある石刃が、冬野小塚３号墳の周溝より１点出土している。長さ8.6cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重さ19.2ｇを計る。左側縁に微細剥離痕が観察される。右側縁下部のノッチ状の剥離痕や、上部の小剥離痕は加工とも考えられるが、他の剥離面より風化の状態がやや新しく感じられ、のちのダメージと考えている。素材は端部に下設打面を取り込んだいわゆるしの字状剥片で、打面側から見たとき反時計回りに捻れている。打面には打面調整と考えられる小剥離痕が両打面共に観察できる。石材は、凝灰岩と思われる。このほか、メノウ、輝石安山岩の剥片、石核が、１号墳封土中から出土しているが、表面風化の度合がかなり異なり新しい時代のものと考えられる。

石器出土した地点の周辺は、本来の包含層と考えれる黄褐色の土層がかなり削平されており、ブロック等が存在したかどうかはわからない。ただ、３号墳と２号墳の間には小さな谷があり、この谷を望むような形でブロックの存在が想定可能である。また、この丘陵上には同様な地形が数カ所確認され、当該期の遺跡がまだ他にも存在するものと考えている。



第136図　岩宿時代の石器（４／５）

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　土坑

縄文時代に属すると考えられる土坑は10基確認された。その殆どがおとし穴と考えられるもので、調査区の中央部に集中するような形で分布している。形態は第８号土坑を除いて長方形を基調とし、覆土はいずれも自然堆積と考えられる。また、ほとんどが坑底に小穴を持つ。遺物は殆ど出土しない。

第３号土坑（第138図）

上面は楕円形、坑底面は長方形を呈する。横断面形は長方形を呈する。坑底中央には小穴がうがたれている。規模は120×90cm、深さ100cm、小穴の深さ30cmである。覆土は坑底に明るい茶褐色土が堆積している他は暗茶褐色土系の土である。

第８号土坑（第138図）

円筒形を呈する。規模は、95cm×90cm、深さ150cmである。覆土は坑底に赤褐色土、その上面に黒褐色土が薄く堆積し特徴的である。

第14号土坑（第138図）

形態は第３号土坑に類似する。規模は105cm×60cm、深さ90cm、小穴の深さ10cmである。覆土は、灰褐色系の土と茶褐色系の土が互層をなして堆積している。

第15号土坑（第138図）

上面に時期不明の落込みがある。形態は第３号土坑に類似するがやや長幅比が小さい。規模は120cm×100cm、深さ120cm、小穴の深さ30cmである。覆土は褐色系の土が堆積しているが堆積状況は第14号に類似する。

第16号土坑（第139図）

楕円形を呈する。規模は110cm×70cm、深さ90cm、小穴の深さ20cmを計る。覆土は坑底と中位に黒色土が堆積している他は茶褐色系の土が堆積している。

第17号土坑（第139図）

長方形を呈する。規模は140cm×60cm、深さ50cmを計る。坑底には三つの小穴がある。中央の物が15cm、左の物が８cm、右の物が５cmの深さを計る。覆土は汚れた暗茶褐色土である。

第24号土坑（第139図）

形態は第３号土坑に類似する。規模は125cm×80cm、深さ90cmを計る。覆土は坑底と中位に黄褐色系の土が堆積し、他は茶褐色系の土で埋まっている。

第26号土坑（第139図）

形態は第16号土坑に類似する。規模は90cm×50cm、深さ50cm、小穴の深さ10cmを計る。覆土は坑底すみに黒色土が堆積する他は茶系の土で埋まっている。

第27号土坑（第139図）

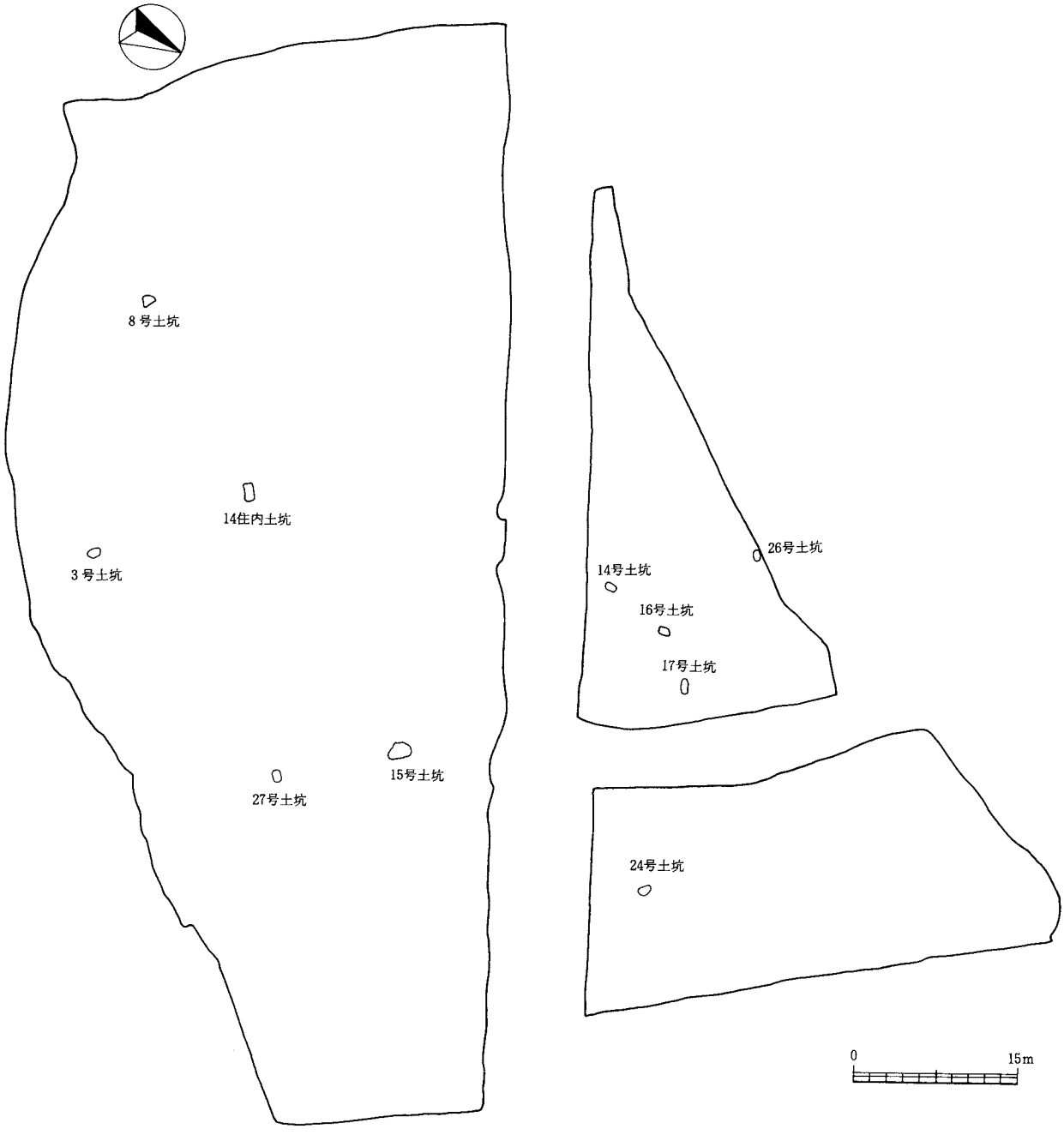
斜面に位置し上面を削平されている。形態は第15号土坑に類似する。規模は100cm×70cm、深さ110cm、小穴の深さ10cmを計る。

第14号竪穴住居跡内土坑（第139図）

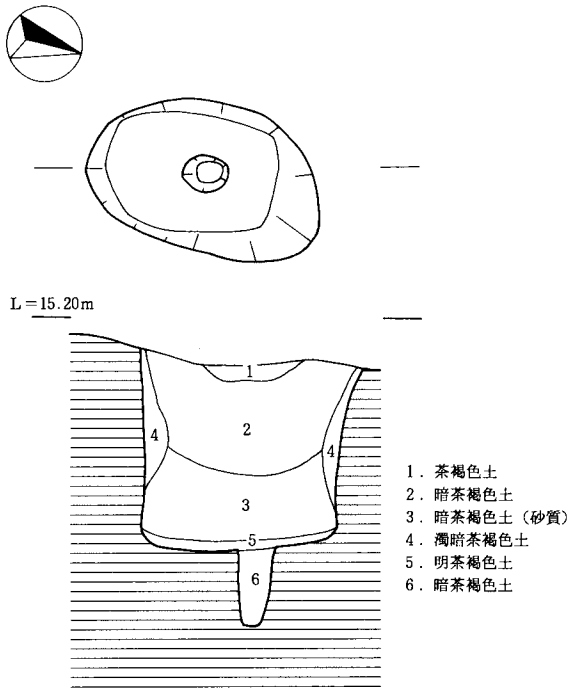
長方形を呈する。規模は170cm×90cm、深さ40cm、小穴の深さ45cmを計る。上面を削平されていると考えられる。

２　土器と石器

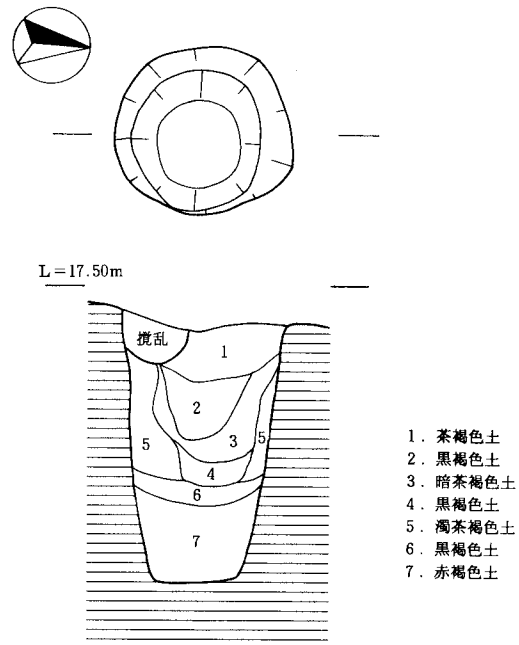
縄文時代の遺物は、遺構が丘陵斜面に散発的に配置されているという状況を反映して、まとまって出土したのは西南部発掘区の一地点だけであった。それも、流れ込んだような出土状態であった。集落遺構が存在しているのであれば、現発掘区の西側丘陵斜面が推定される。



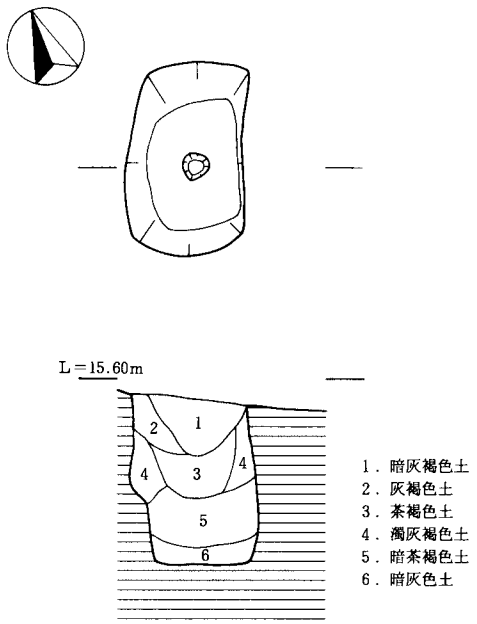
第137図　縄文時代土坑分布図（１／600）



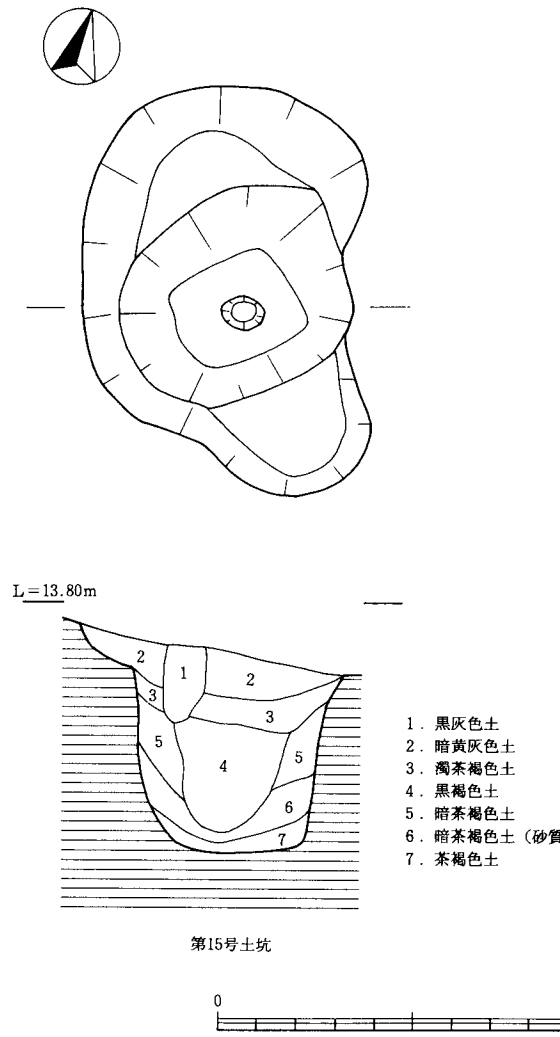
第３号土坑



第８号土坑

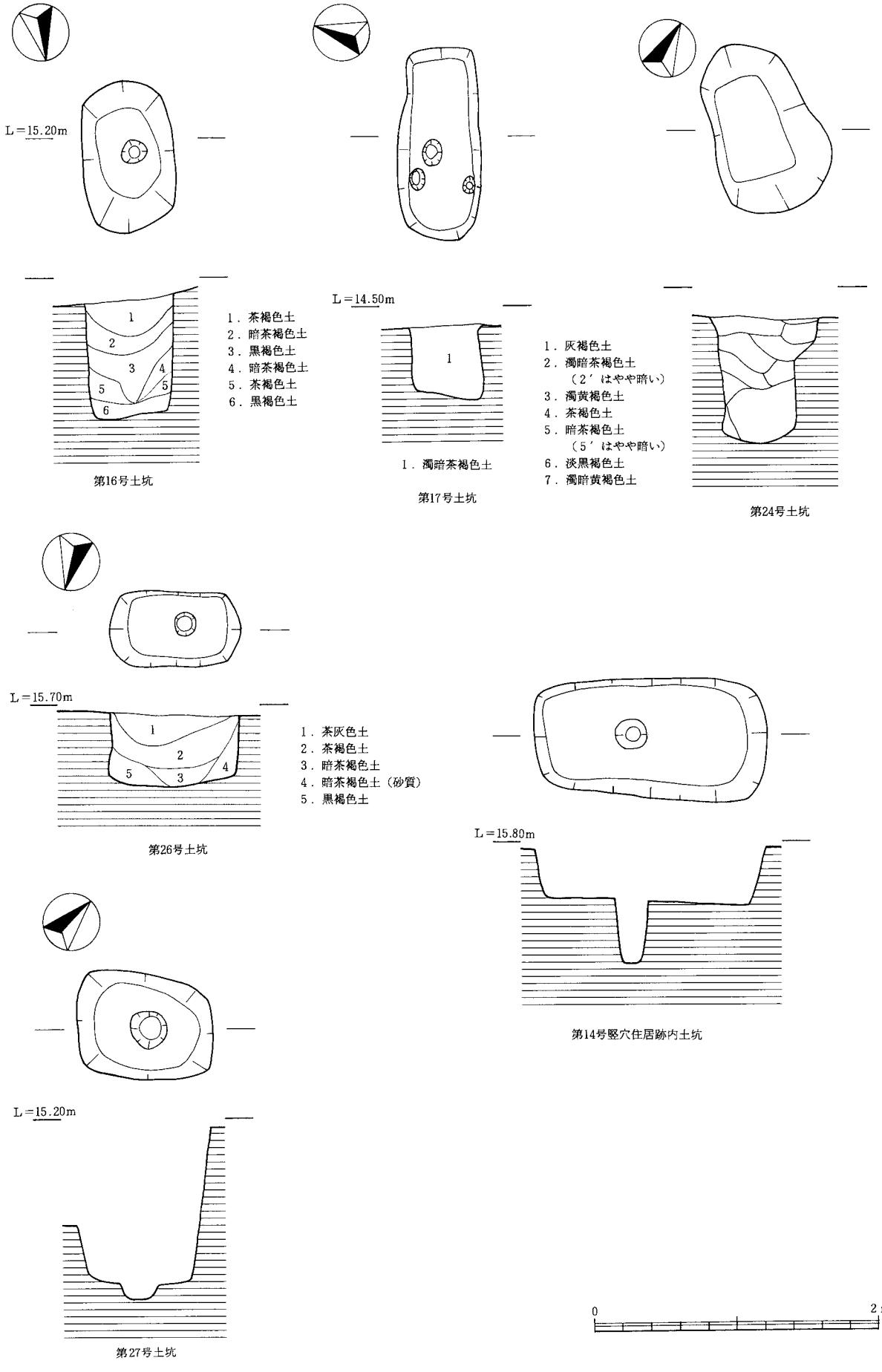


第14号土坑

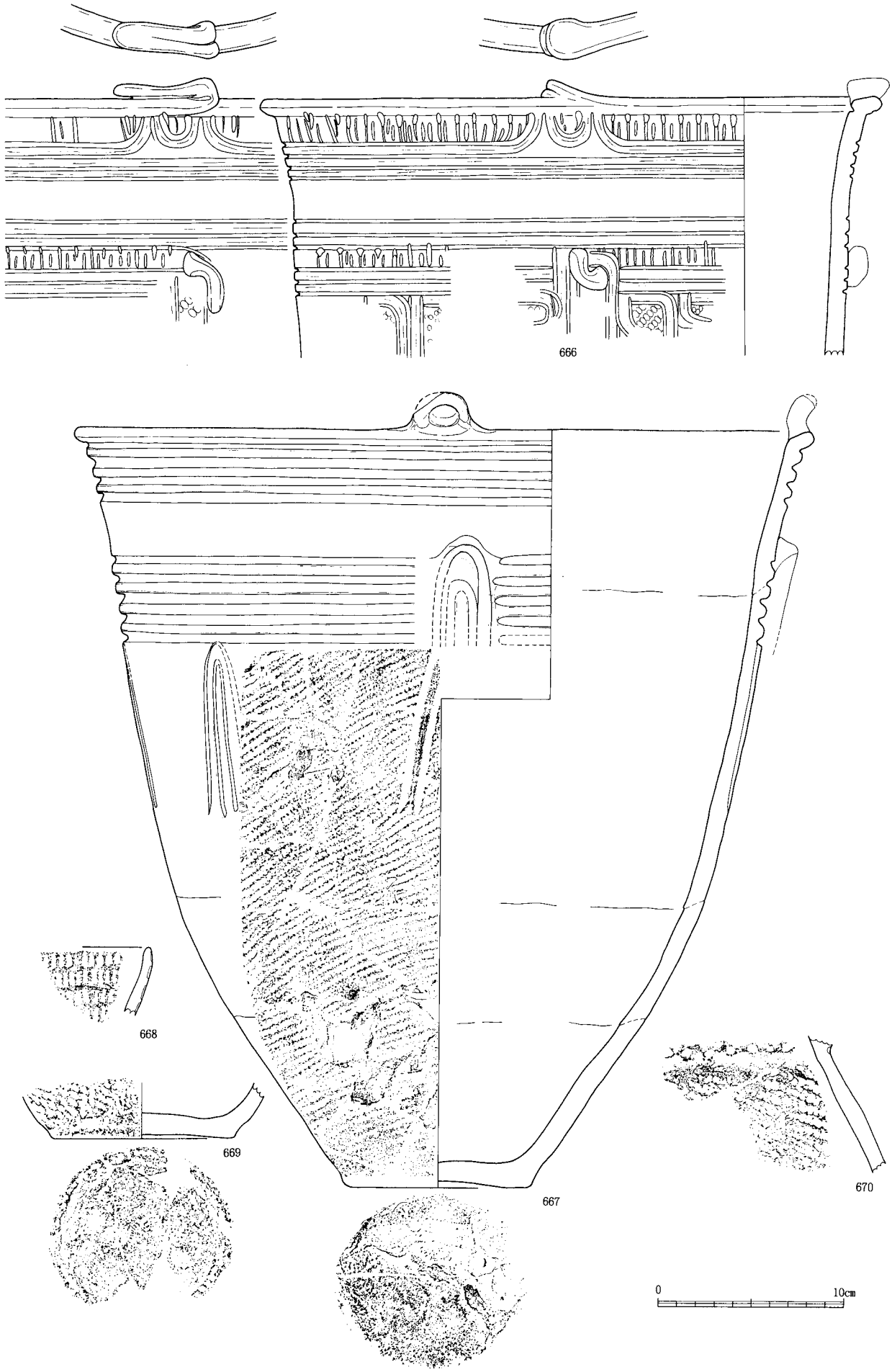


第15号土坑

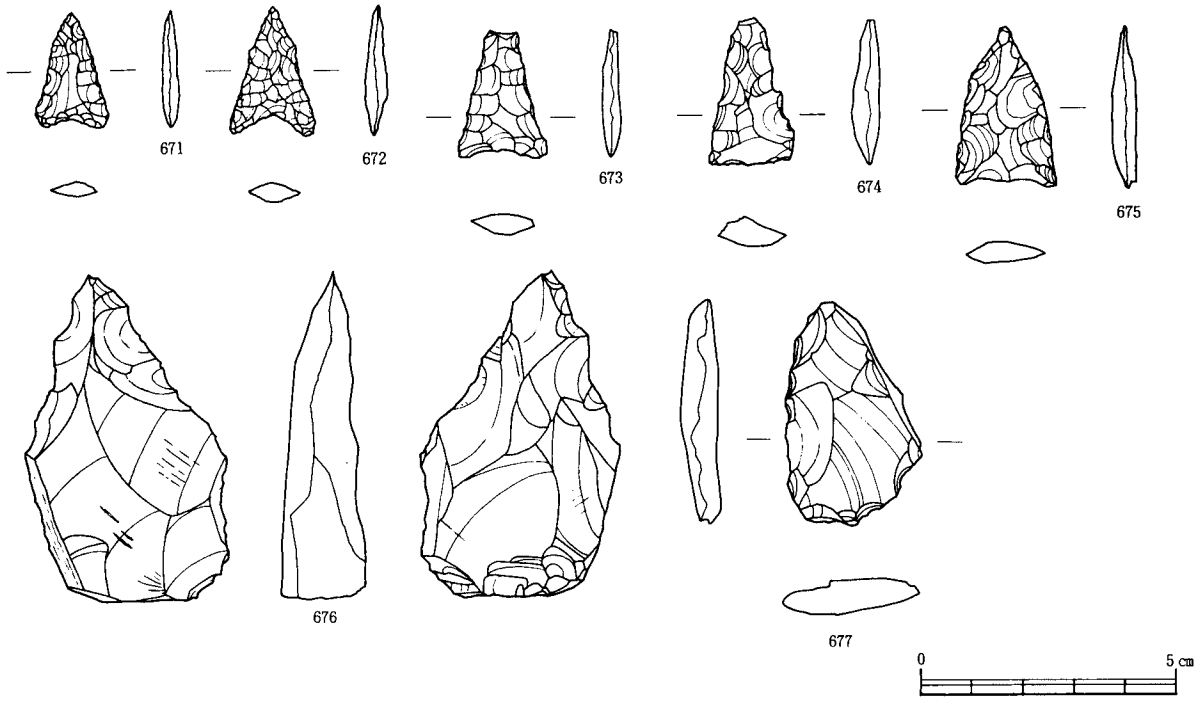
第138図　第３・８・14・15号土坑（１／40）



第139図　第16・17・24・26号土坑、第14号竪穴住居内土坑（１／40）



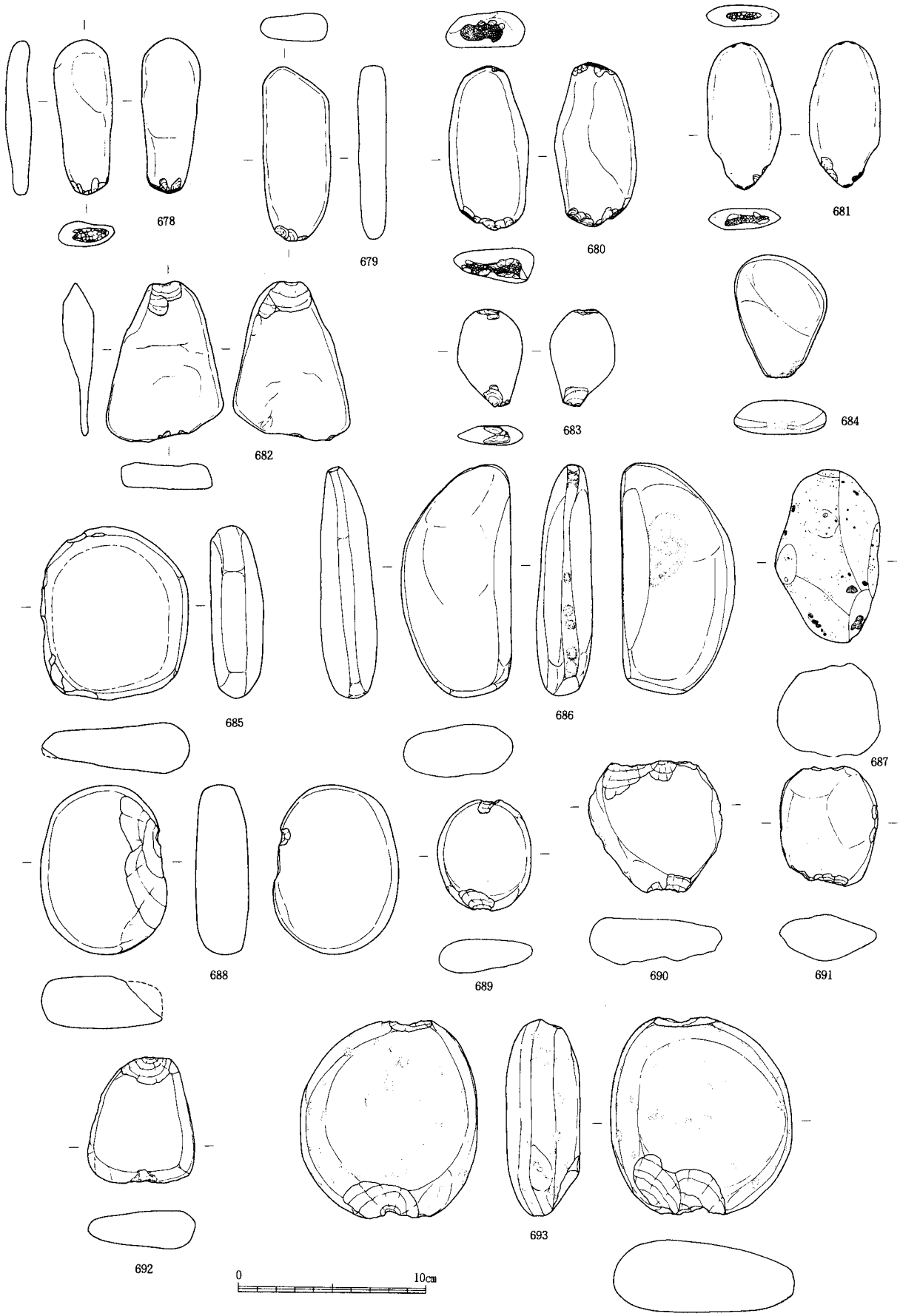
第140図　土器実測図（１／３）



第141図　石器実測図（２／３）

第７表　出土石器一覧表（単位　㎜　g）

番号	名称	長さ㎜	幅	厚さ	重量g	出土地点	石質	遺存状態
671	石鏃	22	15	4	0.9	G12グリッド表土	玉髄	完形
672	〃	22	17	4	1.2	G12グリッド表土	黒曜石	〃
673	〃	25	18	4	1.5	G11グリッド茶褐色土	安山岩	一部欠
674	〃	29	17	6	2.3	F11グリッド表土	玄武岩（安山岩？）	〃
675	〃	31	20	5	2.6	26号住居址	安山岩	完形
676	刃器	65	40	17	43.8	南西部地区黄褐色土	輝石安山岩	〃
677	〃	45	27	9	9.5	12号住居址　P３	安山岩	〃
678	敲石	84	30	14	39.4	１号墳封土	流紋岩	〃
679	〃	94	35	15	75.0	１号墳旧表土	〃	〃
680	〃	88	43	19	73.7	１号墳封土	〃	〃
681	〃	79	38	12	40.4	１号墳封土	〃	〃
682	打欠石錘	85	61	16	65.5	不明	〃	〃
683	〃	52	34	10	19.2	１号墳東周溝	〃	〃
684	敲石	67	49	18	54.6	１号墳南西部炭化物層	〃	〃
685	磨石	93	79	28	279.0	１号墳	流紋岩の風化	一部欠
686	〃	125	49	30	268.7	３号墳東周溝	安山岩	完形
687	軽石	93	55	52	40.3	〃	軽石	〃
688	磨石	91	68	28	221.8	A・B18グリッド	流紋岩	一部欠
689	打欠石錘	60	50	18	70.8	南西部地区最下層	石英斑岩	完形
690	〃	70	70	26	151.2	不明	花崗岩	〃
691	〃	65	51	25	75.1	南西部地区明黄褐色土	流紋岩	〃
692	〃	68	58	21	93.8	不明	安山岩	〃
693	〃	106	95	39	521.7	３号墳東周溝	流紋岩	〃



第142図　石器実測図（１／３）

土器（第140図　666～670）

666･667は西部発掘区の下層から一括として検出した資料である。666は口径34.5cm、現器高約15cmに復元できた深鉢である。口縁端部が横方向に大きく肥厚し、内面に一条の沈線が巡らされている。口唇部には形態の異なる突起が付加されていて、口縁帯の半截竹管文の半月状文、体部上端に貼付されている「し」の字状、逆「し」の字状の突起の位置を規定しており、４単位の文様構成を示している。平行半隆起文に区画された狭い文様帯には蓮華状文が施文されている。上端にとどかない沈線が縦に引かれ、花弁端部を示す施文が上端から下ろされている。下端が画然と切れているのは文様が口縁から底部へと順序を取っていることが判断される。幅の狭い横位無文帯は、半隆起文３条分の幅となっている。体部には縄文施文のあとにＢ字状文が施文されているようだ。色調は赤褐色を呈し、微砂粒を少数交えているだけで、焼成とともに良好である。

667は口径40.5cm、器高44cm、底径10cmに復元できた大型の口唇部の深鉢で、口唇部は外側へせりだすように伸びているが、内面には沈線は施されていない。突起に連携して頸部には逆「し」の字状の突起が貼付され、垂下する半隆起線文が施文されている。縦の半隆起線文の間隔は４単位と推定される。無文帯の高さは半隆起線文４条分から突起部分の５条分へと広がっているのが注意されるが、全形が遺存していないためにその理由は不明である。体部は底部にまで丁寧に縄文が施されている。底部から高さ約15cm程度までは二次的火熱による赤変が、それ以上から半隆起線文までには煤の付着が認められる。色調、胎土、焼成は666とほぼ同じである。時期的には中期前半新崎式に比定される。

668はピット242から２片が出土したものである。口唇が尖り気味に整形された口縁部の上から幅0.7cmの施文具が右方向に等間隔に刺突されている。内面には条痕調整痕が見られる。黄橙色を呈し、胎土に若干の砂粒が混じるが良好で、焼成も良い。同ピットから出土したもう一片は、体部片で茶褐色を呈し、内面は黒褐色で平滑となっていることから、前者と同一個体と断定は出来ない。類例は羽咋市寺家オオバタケ地区から出土したものが知られていて、前期中葉の同一時期（北白川下層Ｉ式平行）の所産と考えられる。

669は冬野小塚古墳群第１号墳の２号主体部の覆土から出土した底部である。体部の立ち上がりがやや穏やかであることから浅鉢の可能性も考えられる。底径10.1cmを計り、体部の縄文はやや深く施文されている。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも深鉢に同じである。時期的には中期前半新崎式土器の可能性が高い。

670は同じ第１号墳の南西部の炭化物層および封土から検出した体部片である。上下を確定することがやや困難で、内傾する器形で図示した。隆帯側面に棒状工具による刺突が巡らされているが、隆帯そのものの施文は剝落のために不明であり、所産時期を確定することは困難である。灰褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和されているが焼成は良好である。

石器（第141・142図　671～693）

石鏃は５点を得ているが、表採に近い形での出土が目立つ。石材はフリント質と輝石安山岩質のもので占められている。671は全体に連続剝離を施しているの小型品で、浅いわたくりを作っている。重量は最も軽量で、0.9ｇを計る。672は平面五角形をなしているものであるが、全体から見れば先端近くが突出している形態である。全体に入念な剝離調整がなされている。673･674は共に先端部を欠損している。石材が輝石安山岩質であることからか剝離調整がやや粗いと言える。675は完成品で、基部は剝離によって平基状に整えるがかえし部を僅かに残している。

刃器は２点の出土があった。676は基部に自然面が残る輝石安山岩で、粗い調整によって先端部を作り出している完成品である。677は不定形なスクレーパーで、丸刃となった所と側縁の一方に剝離調整がやや粗雑に入れられている。完成品である。

敲石は冬野小塚古墳群の第１号墳の旧表土、封土を中心として７点の検出があった。同古墳からは縄文時代前期、中期段階と目される土器の出土があるが、時期を決定することは出来なかった。川から採取してきた滑らかな円礫の長軸端部に、敲打作業に伴ったと見られる潰れとリングを持つ剝落痕が認められる。片一方だけではなく、両端に見られるものも在り、打欠石錘ではなく、同石錘の打欠部を作り出す際に用いたものと推定しておき

たい。

磨石は３点を図示した。685は両面および幅のある側面に磨きによる平滑面が遺存している。薄い側縁部には敲打痕が見られる。686は直線となっている側縁部の両面に刃部を作り出すように使用されている。688は側縁部を利用した磨石で、一部を欠損している。

軽石は各遺構から出土している石器であるが、687は第３号墳の東周溝から出土している。

打欠石錘は西南地区、古墳周辺から出土しているもので、先の敲打石のなかの２点を含むて７点が出土した。大小の差が大きく、石材の種類もばらつきが多い。

３　能登南部（宝達山地区）の地質

能登南部には、石動山周辺と宝達山に先第三系基盤（花こう岩・片麻岩類）の高まりがあり、やや広大な地表露出をみる。

半島における最高峰宝達山（637.2m）を構成する花こう岩・片麻岩類の岩体は、東西７km、南北６kmにわたって露出し、先第三系の露出としては半島でもっとも広大なものである。北東部の約⅓は片麻岩類、南西部の約⅔は花こう岩類から成るもののようである。片麻岩類は、主として黒雲母片麻岩、角閃石片麻石から成り、地表露出の北東隅では、これらの間に結晶質石灰岩がレンズ状にはさまれる。

宝達山東南側の新第三系は、基盤をとりまくドーム状をなす。地層は中新統最下部の太田累層（楡原累層）にはじまり、良好な標準層序となる。宝達山西側では、中新統を全く欠如し、先第三系基盤の上位に鮮新統（氷見累層）が直接不整合に重なる。

(1)　中新統下部

太田累層：珪岩の円礫や石英などの細礫を含む花こう岩質砂岩である。

瓜生累層：能登北部および中部で広大な分布を占める安山岩類（穴水累層）の分布はきわめて小範囲で、わずかに石動山南東側地域で、片麻岩類の上位にうすく介在するにすぎない。宝達山南東側には、流紋岩質の溶岩・溶結凝灰岩・凝灰角礫岩からなる累層が広く分布し、瓜生累層（野田火砕岩）とよばれる。凝灰岩中には珪化木をふくむ。

(2)　中新統中部

下半分の黒瀬谷階に相当する地層：

著しく層相変化に富み、互いに同時異相の関係にある多数のメンバーに区分される。河合砂礫岩層その上位に宮島凝灰岩層・坪地互層（一部砂岩層）である。

上半分の東別所階に相当する地層：

宝達山東南側では、北側にはみられない砂岩層が厚く発達し、三尾砂岩層・小野砂岩層とよばれる。この上位に海緑石質の凝灰質砂岩を介在する岩尾滝凝灰岩層がある。

(3)　中新統上部

音川階に相当する地層：

一般に厚い泥岩からなり聖川泥岩層とよばれる。北西側では泥岩中に砂礫岩の薄層をはさみ、これを末森山互層とよぶ。

(4)　鮮新統

北西隅の小範囲に化石を多産する山崎石灰質砂岩層がある。

第４節　弥生、古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第143図）

遺構　Ｂ－12区に位置する。遺存状態が悪く東壁は検出できなかったが、平面プランは隅丸方形と推定できる。規模は544×（530）cmを測る。残存壁高は19cmで壁溝は西南部分のみ検出できた。主柱穴はＰ－１～Ｐ－４の４本で、炉跡は住居跡中央西よりの焼土がそれに当たると思われる。他の焼土は別遺構のものと考えている。覆土は殆ど残っていないが暗茶褐色土が認められた。

第１号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
694	覆土	高　杯	A:21.4	杯部外ミガキ？		1
695	住居内ピット	——	——	口縁内外ミガキ	口縁外に波状文	2
696	覆土	甕	A（15.0）	口縁外ハケ		295
697	〃	〃	A:15.6	口縁内外ナデ	口縁外にスス付着	18
698	〃	軽　石	長10.4、幅7.7 厚4.6		重量75.7ｇ	石２
699	床面	敲　石	長12.1、幅6.3 厚5.4	両端に敲打痕	重量593.8ｇ 火山礫凝灰岩	石１

第２・４・22号竪穴住居跡（第145図、図版68）

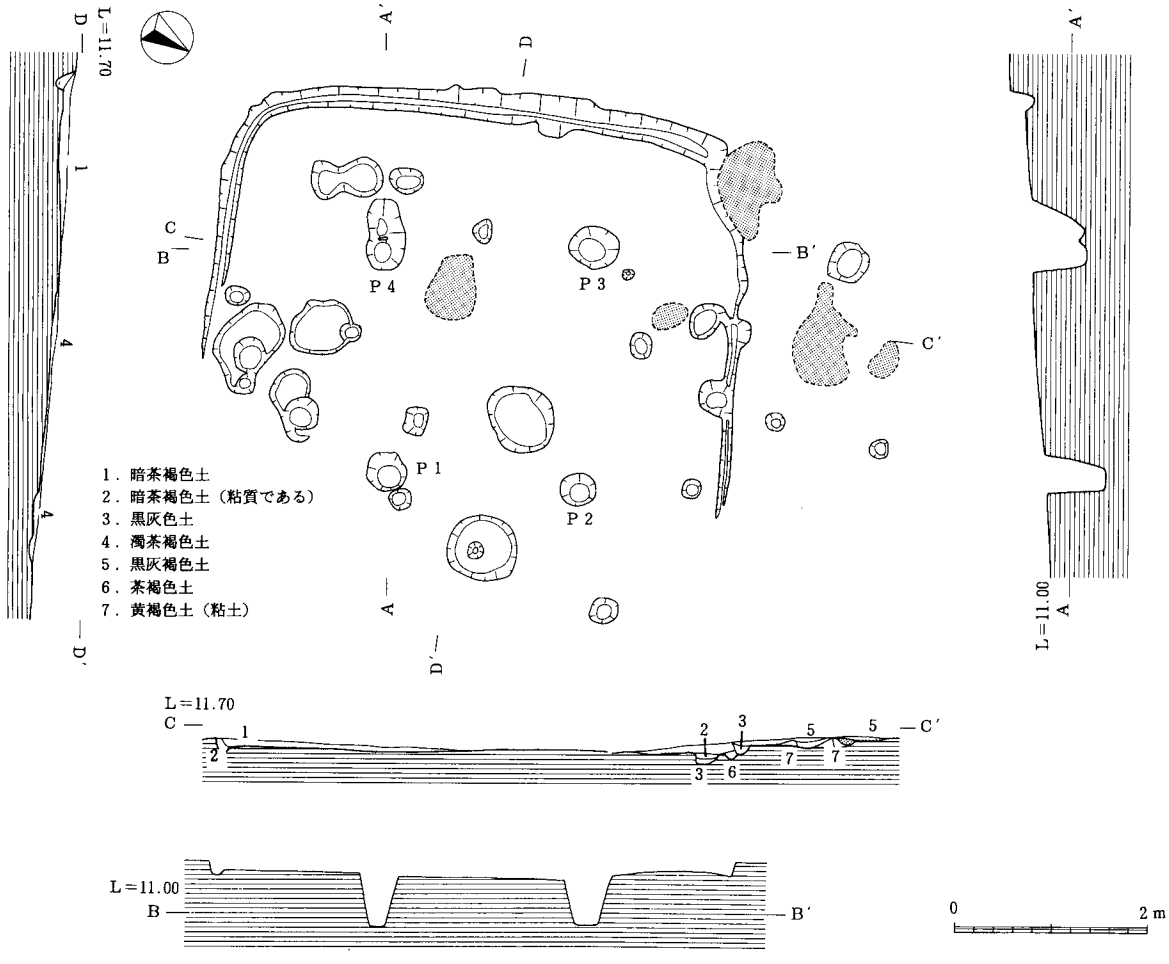
遺構　Ｃ－11区に位置する。第２号竪穴住居跡は、第４号竪穴住居跡に破壊され南西コーナー部を検出したにとどまる。平面プランは隅丸長方形で、規模は、430cm以上×550cm以上と推定している。壁溝は西壁下とこれに連続して南壁下の一部で確認している。残存壁高は12cmを測る。主柱穴は不明であるが、第４号住居跡の壁に残る凹みなどから２本主柱ではないかと考えている。炉跡は中央西よりに残る焼土がこれに当たると思われるが、位置的には通常の住居跡と異なる。覆土は汚れた灰褐色土で、下層の黄灰褐色土は貼床の可能性がある。

第４号竪穴住居跡は西南コーナーを含む約半分程度が確認できた。第２号竪穴住居跡を南東にずらしたような位置にある。東壁部分は第22号竪穴住居跡に壊されている。壁溝は南壁下で部分的に確認した。北側の溝を壁溝とすれば台形状をなすとも考えられる。規模は隅丸方形の場合（500）cm×（570）cmと考えている。主柱穴は４本と思われるが、Ｐ－１～Ｐ－３の３本を検出したにとどまる。炉跡は確認できなかった。覆土は上部に黒褐色土、下部には暗茶褐色土が堆積している。

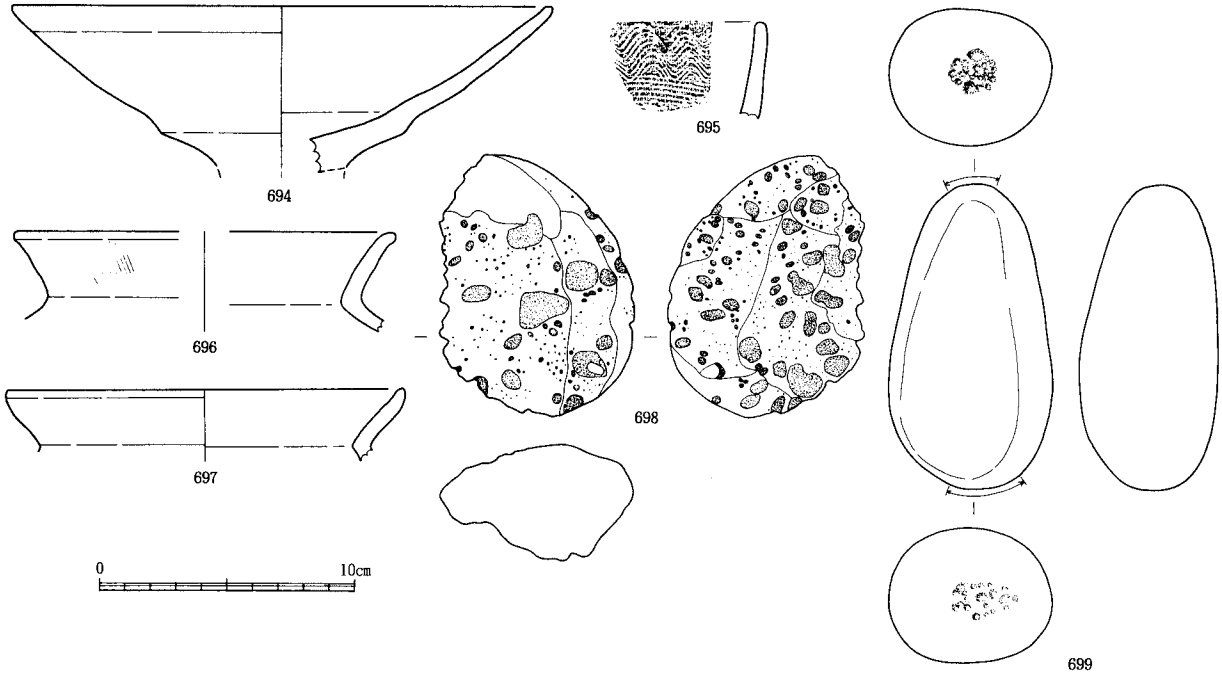
第22号竪穴住居跡は壁溝のみで、残存壁高は４cmである。平面プランは隅丸方形で、規模は216cm×210cm以上と考えている。主柱穴、炉跡とも確認できなかった。

第２号竪穴住居跡遺物

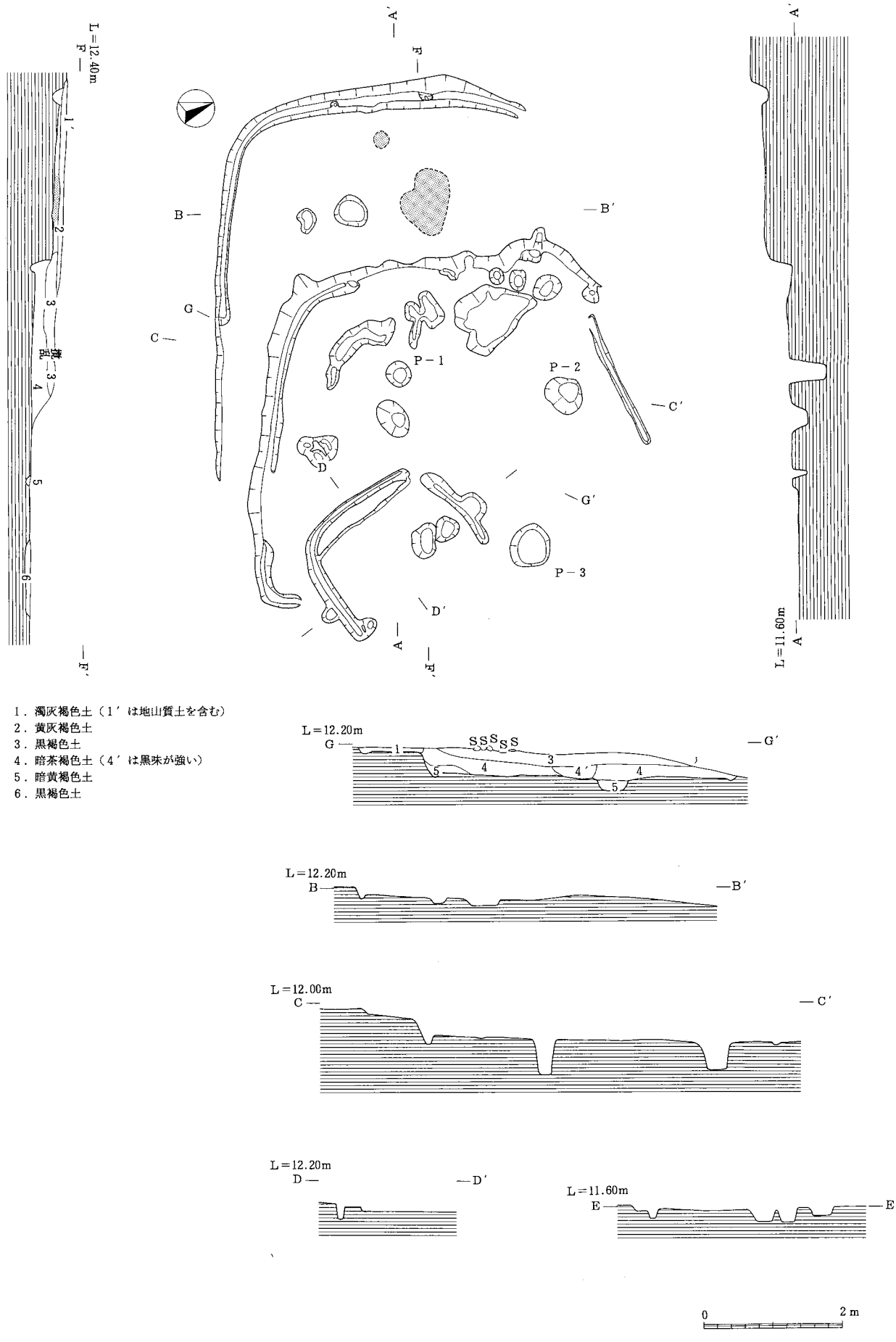
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
700	床面	鉢	——			7
701	〃	壺	A:10.8			10
702	〃	〃	A（16.3）	口縁外ミガキ、口縁内ハケ	無頸壺	336
703	〃	高　杯	A:28.0	杯部外ナデ、杯部内ミガキ	杯部内赤彩	3
704	〃	〃	——	杯部外ハケ→ミガキ、杯部内ミガキ、脚部外ミガキ	杯部内赤彩	8
705	〃	甕	B:5.9	胴下部外ハケ、底部内ケズ		9
706	〃	〃	A:18.1	リ？	口縁部外に擬凹線	19
707	〃	〃	B:4.6 M:16.1	胴部外ハケ、胴部内ナデ		20



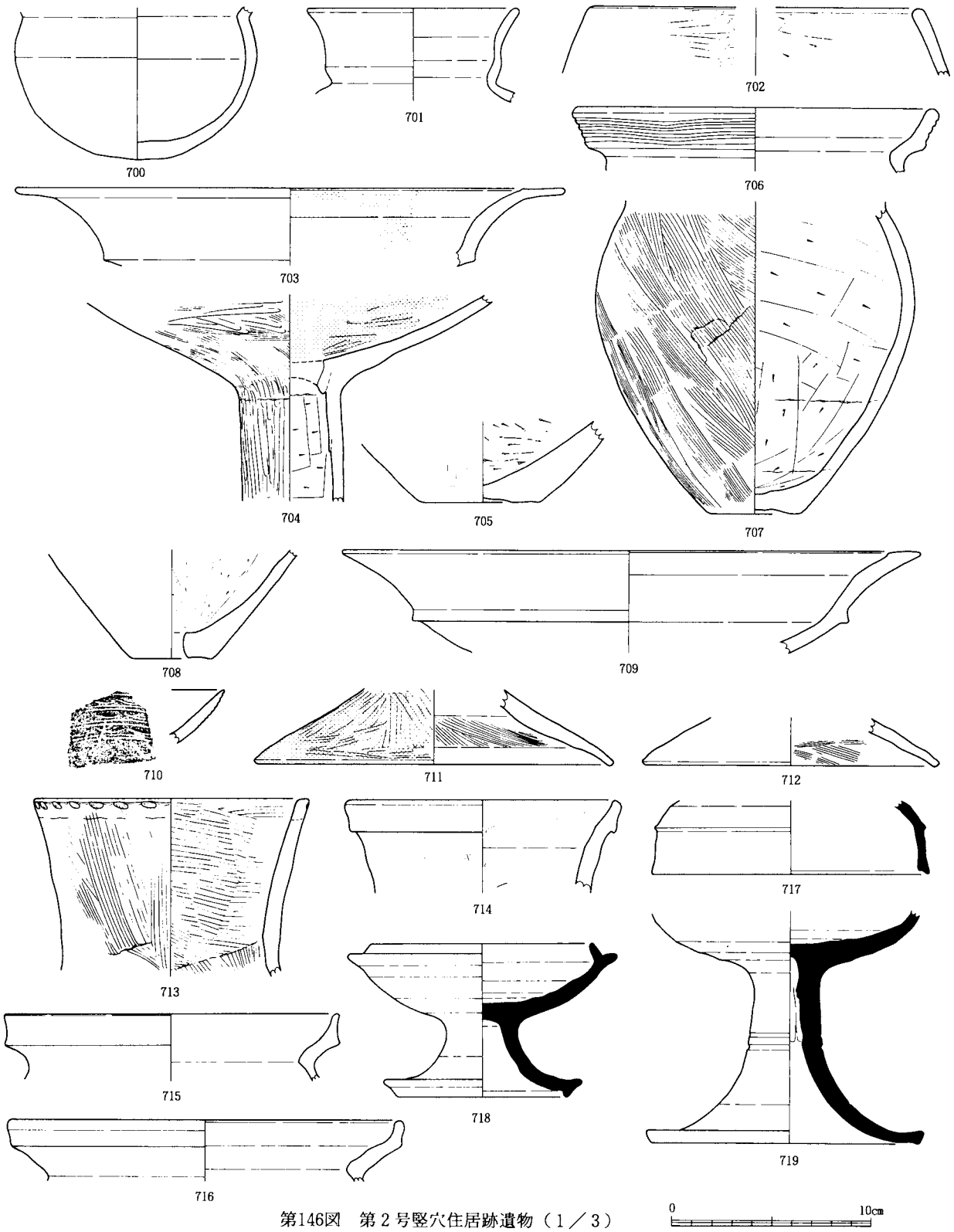
第143図　第１号住居跡（1/80）



第144図　第１号竪穴住居跡遺物（１／３）

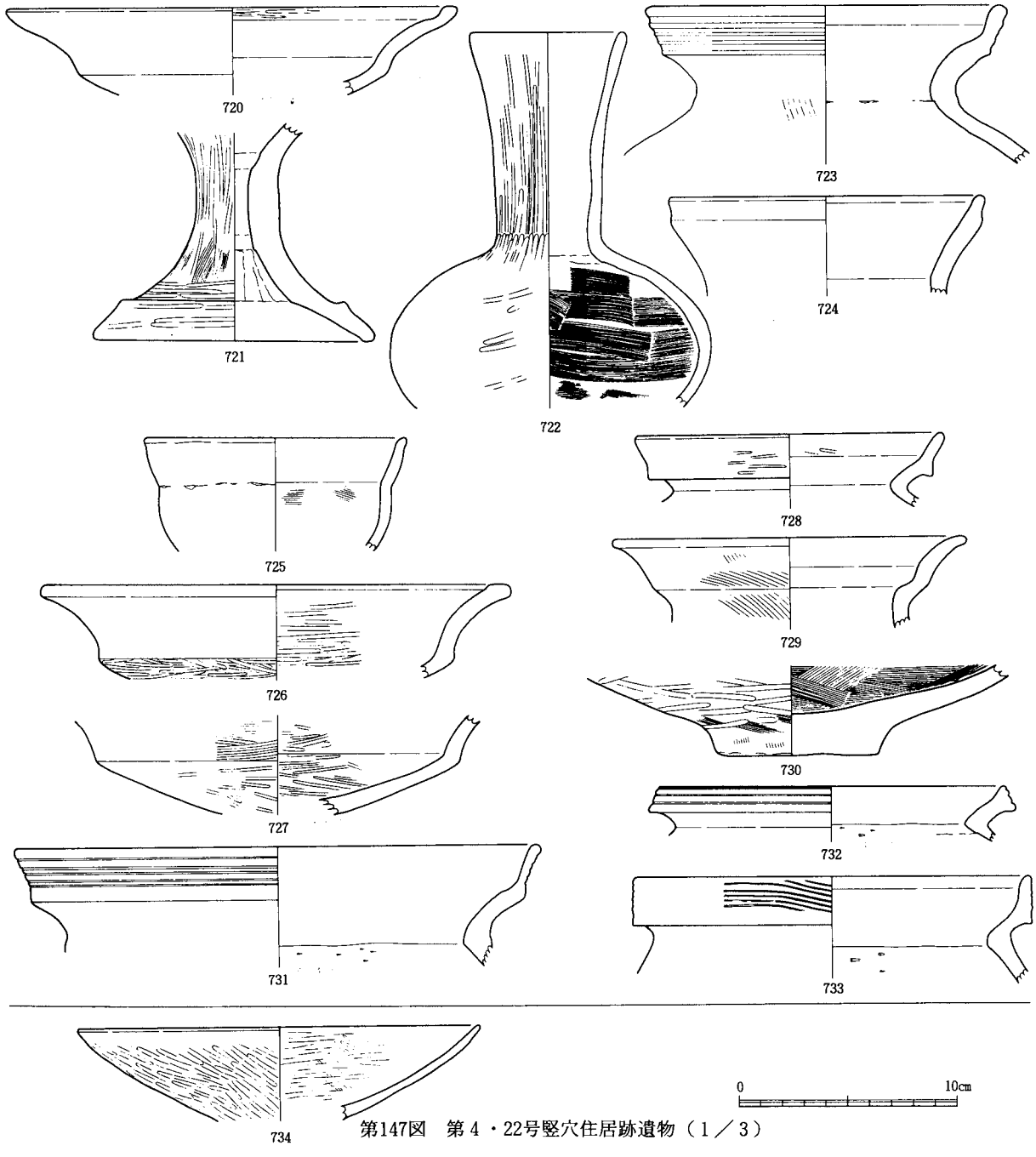


第145図　第２・４・22号竪穴住居跡（1/80）



第146図　第２号竪穴住居跡遺物（１／３）

708	覆土	鉢	B（4.1）	底部外ケズリ 胴底部内ナデ	底部有孔、焼成前穿孔	4
709	〃	高　　杯	A:29.3	杯部内外ナデ		5
710	〃	〃	——	杯部外ミガキ？	東海系高杯、口縁外文様あり	340
711	〃	〃	B:18	脚部外ミガキ、杯部内ハケ	脚部外赤彩	326
712	〃	〃	B:14.4	脚部内ハケ		402
713	〃	壺	A:13.7	口縁部内外ハケ		327
714	〃	〃	A:13.5	口縁部内外ハケ→ナデ		335



第147図　第４・22号竪穴住居跡遺物（１／３）

715	覆土	甕	A:16.8		口縁部外にスス付着	339
716	〃	〃	A:19.8	口縁部内外ナデ		325
717	〃	須恵器 杯蓋	A:13.9	内外面ロクロナデ		㊷
718	〃	須恵器 高杯	A:11.3、H:7.9 B:8.7	杯部底部外ロクロケズリ その他ロクロナデ	低脚タイプ	⑥
719	〃	須恵器 高杯	B:13.4	内外面ロクロナデ	脚部外面に２条の沈線	④

第４号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整等	その他	実測番号
720	床面	高杯	A:20.8			36
721	〃	器台	B:12.7	脚部外ミガキ、脚部内ナデ		23

722	床面	壺	A:7.1 M:15.0	外面ミガキ 胴内部ハケ→ナデ	細頸壺	32
723	〃	〃	A:16.0	口縁部内外ナデ	口縁部外に擬凹線	24
724	〃	〃	A:14.2	口縁部内外ナデ		341
725	覆土	鉢	A:12.0			330
726	〃	高　杯	A:21.4	杯部外ミガキとナデ 杯部内ナデ	傾き疑問あり	21
727	〃	〃	——	杯部内外ミガキ		342
728	〃	壺	A:14.0	口縁部外ミガキ、口縁部内ナデ		329
729	〃	〃	A:16.1	口縁部外ハケ、口縁部内ナデ		331
730	〃	壺底部	B:7.4	胴部外ミガキ、底部内ハケ	一部床面出土 外面にタール状付着物	22
731	〃	甕	A:24.2		口縁部外に擬凹線	35
732	〃	〃	A:15.9	口縁部内外ナデ	〃	344
733	〃	〃	A:18.0		〃	343

第22号竪穴住居跡遺物

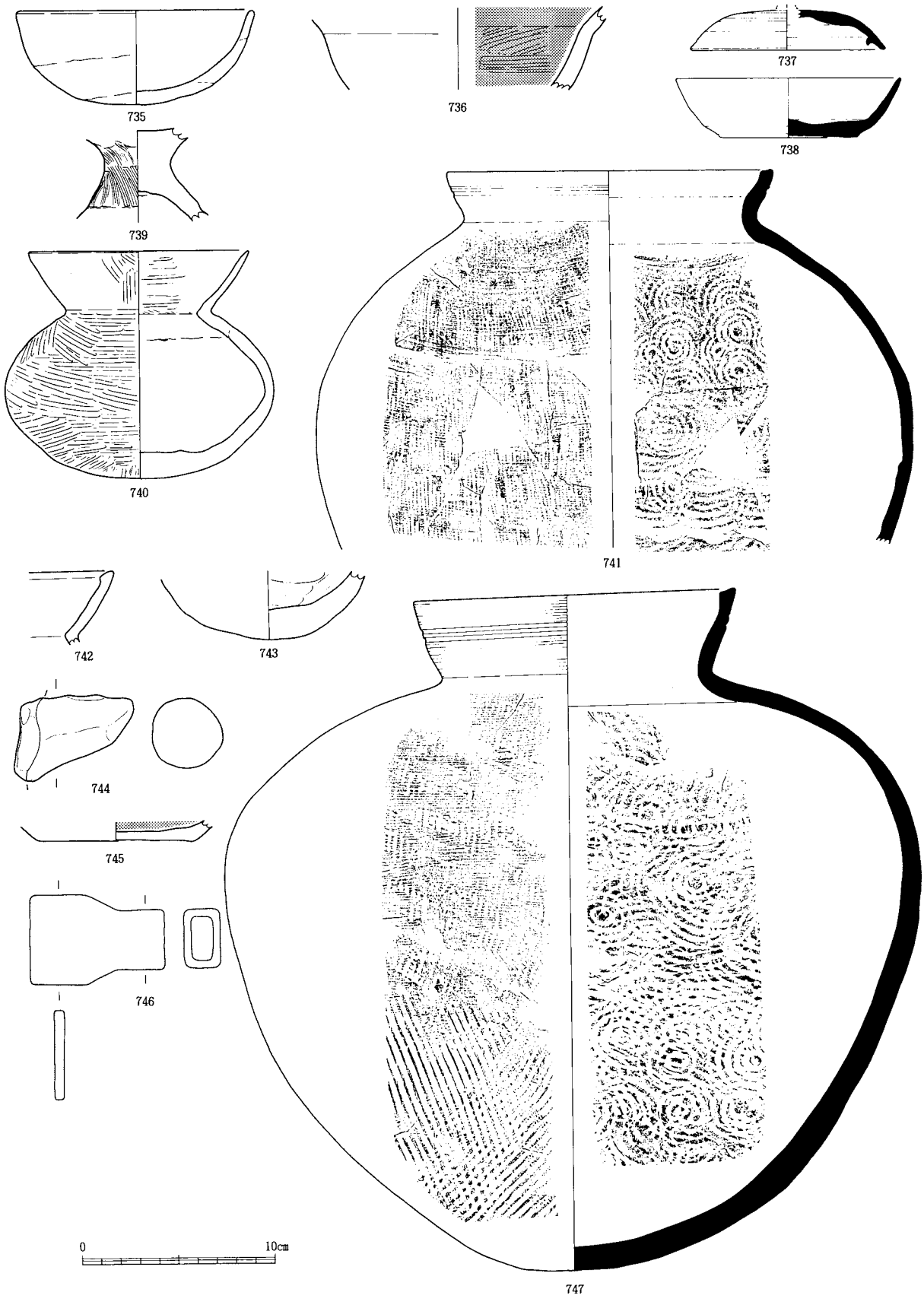
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
734	覆土	高　杯	A:18.7	杯部内外ミガキ		334

第３号竪穴住居跡（第151図）

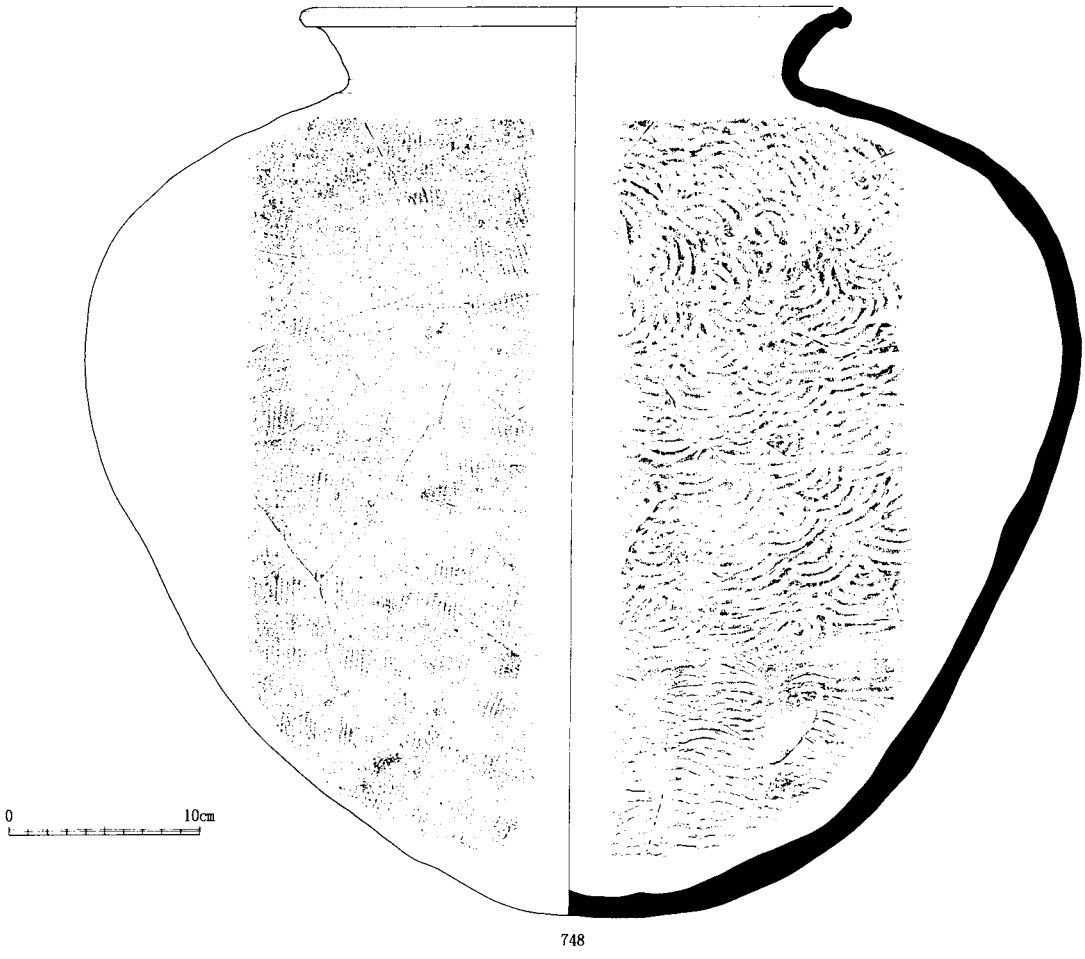
遺構　Ｃ－11区にあり第２、４、22号竪穴住居跡の北西に位置する。半分は調査区外にある。平面プランは長方形と考えられ、規模は（640）cm×320cm以上である。主柱穴は４本と考えられそのうちＰ－１、Ｐ－２の２本を確認した。他の２本は調査区外である。壁溝は南西コーナーと西壁で部分的に確認された。残存壁高は20cmを測る。炉跡は中央の焼土がこれに当たると思われる。覆土は上部に暗褐色土、下部に茶褐色土が認められ、これより下層の暗黄褐色土は貼床と考えられる。

第３号竪穴住居跡遺物

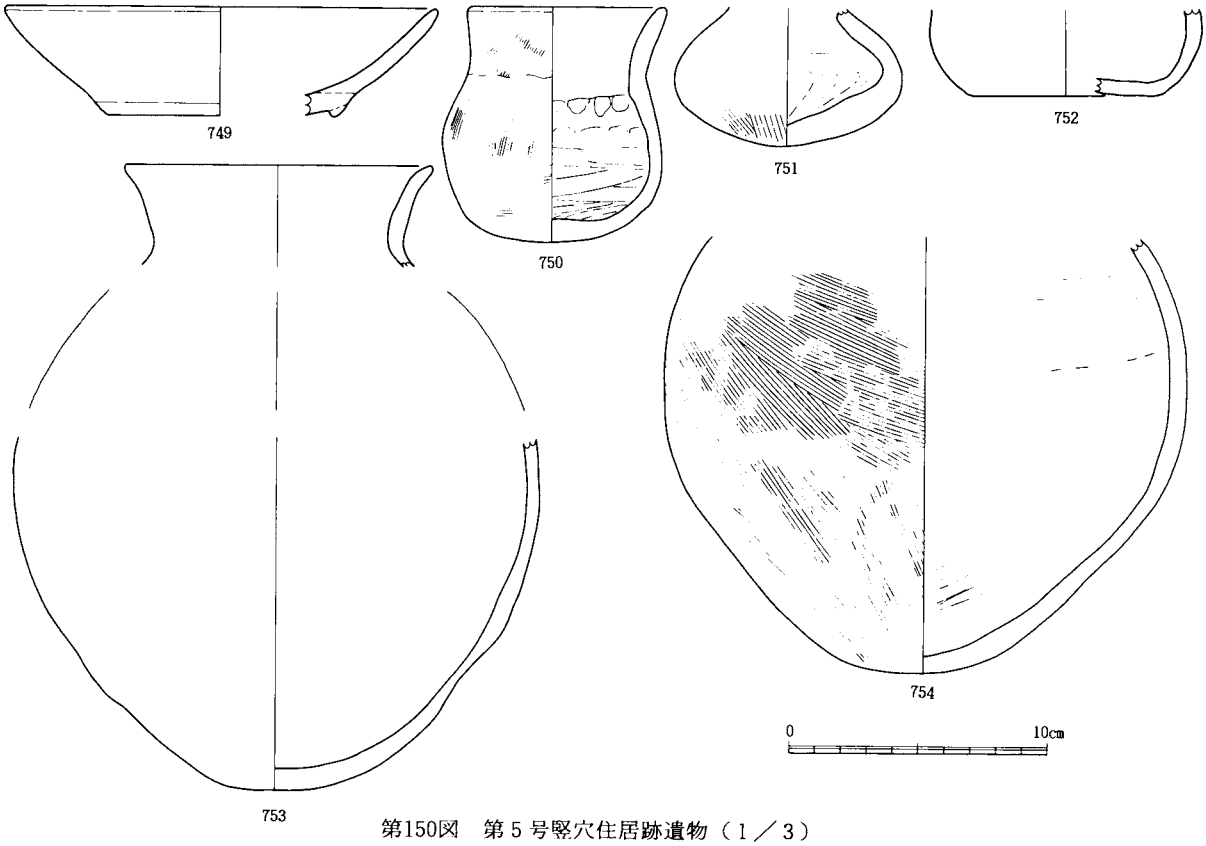
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
735	床面	椀	A:12.1	内外面ナデ	外面に巻き上げ痕	12
736	覆土	〃	H:4.9	内面ミガキ	内面黒色処理	324
737	〃	須恵器 杯蓋	A:10.1	内外面ロクロナデ	口縁部と天井部の境の外面ロクロケズリ	㊶
738	〃	須恵器 杯身	A:11.4、H:3.1 B:7.0	内外面ロクロナデ	底部ヘラ切り	⑤
739	〃	高　杯	——	脚部外ハケ	杯部内面黒色処理 脚部中実	15
740	〃	壺	A:11.4、M:14.0 H:11.9	外面ミガキ、口縁部内ミガキ		94
741	〃	須恵器 甕	A:16.3、M:30.9	口縁部内外ナデ 胴部外平行タタキ→カキ目 胴部内同心円タタキ	口縁部外面に１～２条の沈線	⑯
742	〃	〃	——	口縁部内外ナデ	口唇部内面肥厚、布留系甕	17
743	〃	甕底部	——	底部内ナデ	底部外が赤化	14
744	〃	甑	——		把手のみ	322
745	〃	杯	B:8.0	内面黒色処理	底部外面に糸切り痕 平安時代？	323



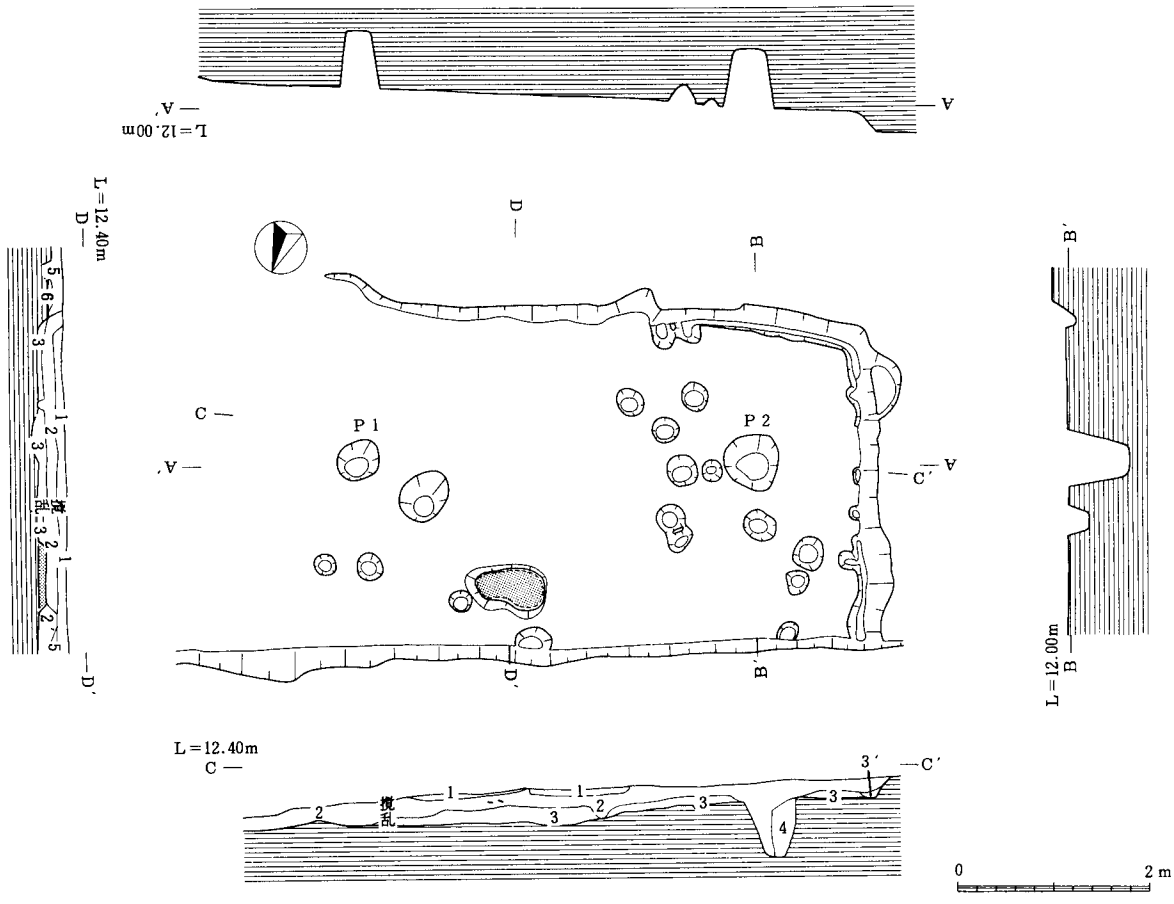
第148図　第３号竪穴住居跡遺物（１／３）



第149図　第３号竪穴住居跡遺物（１／４）



第150図　第５号竪穴住居跡遺物（１／３）



1．暗褐色土（耕土）
2．茶褐色土
3．暗黄褐色土（3′は地山質土を多く含む）
4．濁黄褐色土
5．黄灰褐色土（5′はやや淡い）
6．黒褐色土

第151図　第３号竪穴住居跡（1/80）

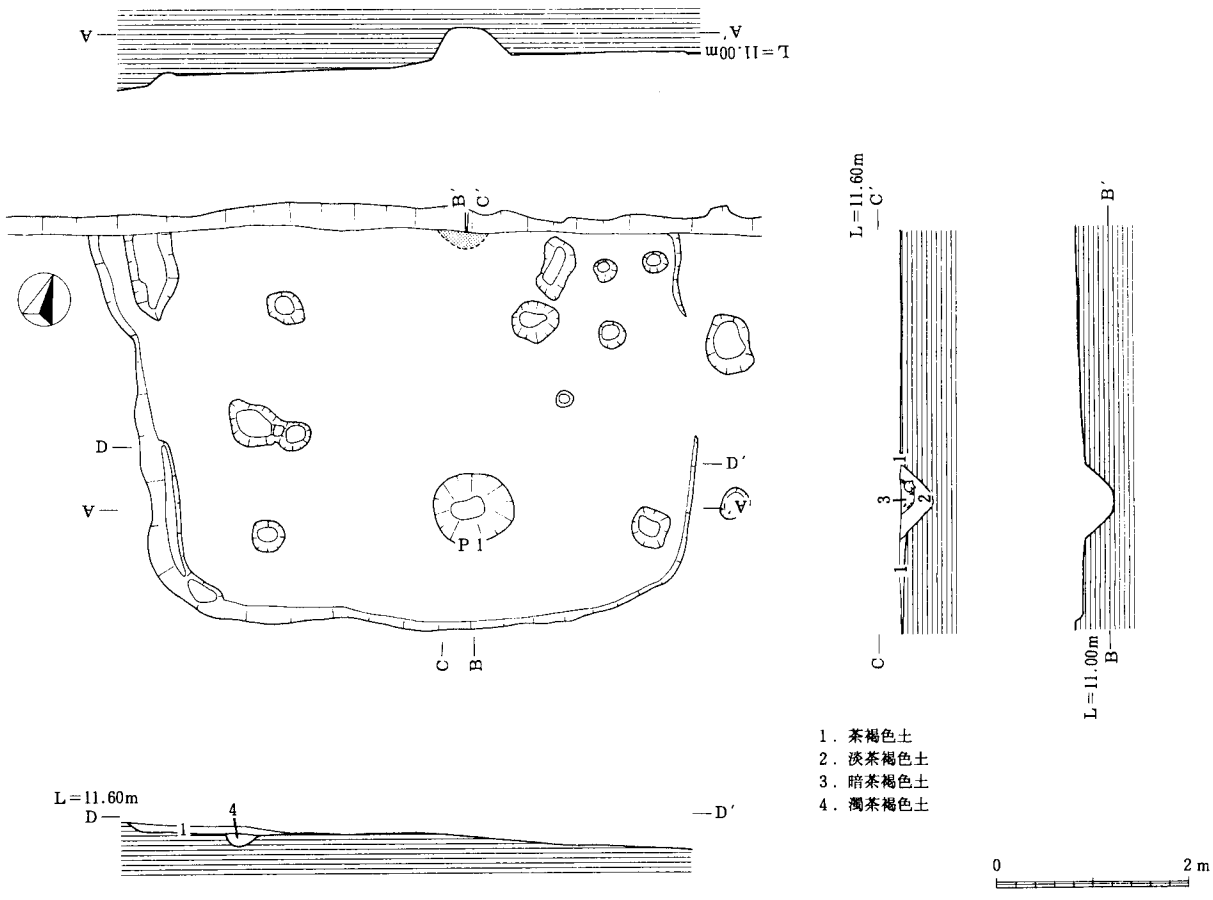
746	覆土	鉄　斧	長7.0、幅4.6 厚0.5		有袋鉄斧	金12
747	〃	須恵器 甕	A:16.7、M:36.2 H:35.1	口縁部ナデ 胴部外平行タタキ・カキ目 胴部内同心円タタキ	口縁部外面に２条の沈線	44
748	〃	須恵器 大甕	A:27.5、M:52.2 H:48.5	口縁部ナデ 胴部外平行タタキ・カキ目 胴部内同心円タタキ	口縁部～肩部外に自然釉	52

第５号竪穴住居跡（第152図、図版68）

遺構　Ｂ－11、Ｃ－11区にまたがって位置し、第３号竪穴住居跡の東にある。半分は調査区外にある。平面プランは方形と考えている。規模は532cm×410cm以上である。主柱穴と思われるものは検出できなかった。壁溝は西壁下のみである。残存壁高は10cmを測る。炉跡は住居跡中央調査区壁にかかって検出された焼土がこれに当たると思われる。南東壁よりにすりばち状の土坑が検出されている。

第５号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
749	覆土	高　杯	A:16.8	杯部内ナデ？		34



第152図　第５号竪穴住居跡（1/80）

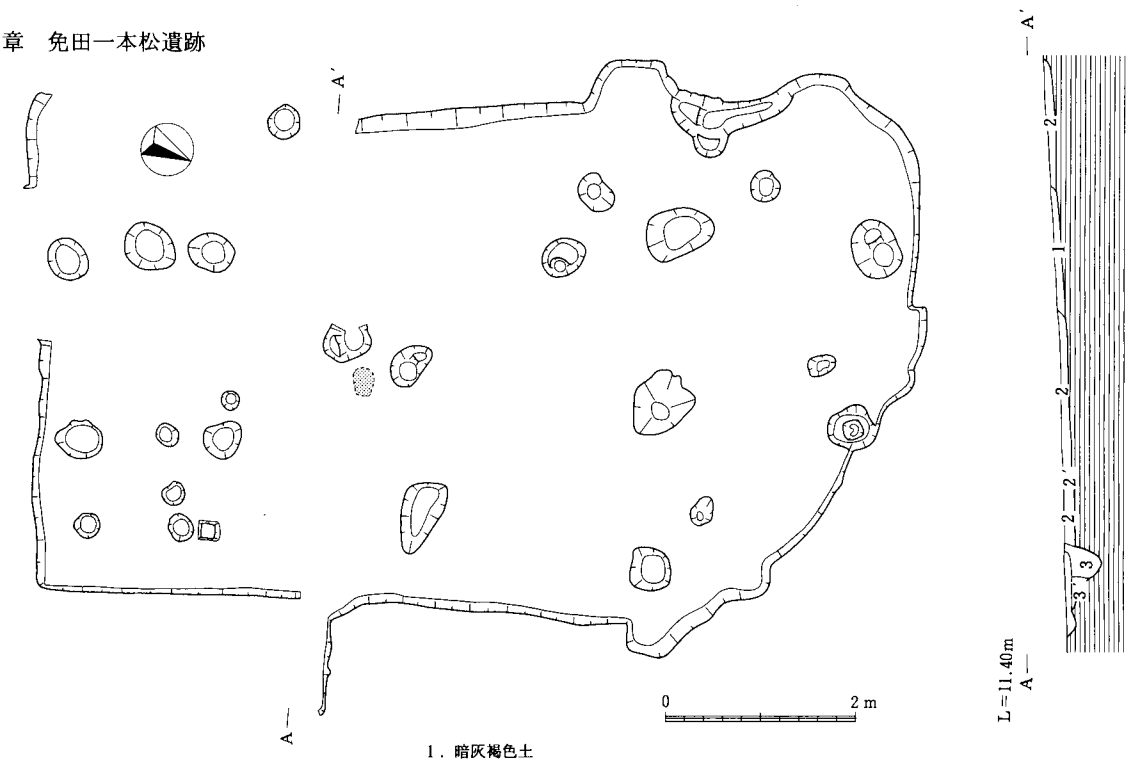
750	住居内土坑	壺	A:7.6、M:8.6 H:9.3	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ		31
751	覆土	〃	M:9.8	底部外ハケ、底部内ナデ	ミニチュア土器	40
752	〃	——	B:7.2			3 3
753	住居内土坑	壺	A:12.0 M:20.9			29
754	〃	甕	M:20.6	胴部外ハケ、胴部内ナデ		30

第６号竪穴住居跡（第153図）

遺構　A－11・12、B－11・12区にまたがって位置する。住居跡中央南よりに焼土が検出されたため住居跡としたが、形態は不整形で、主柱穴も不明である。

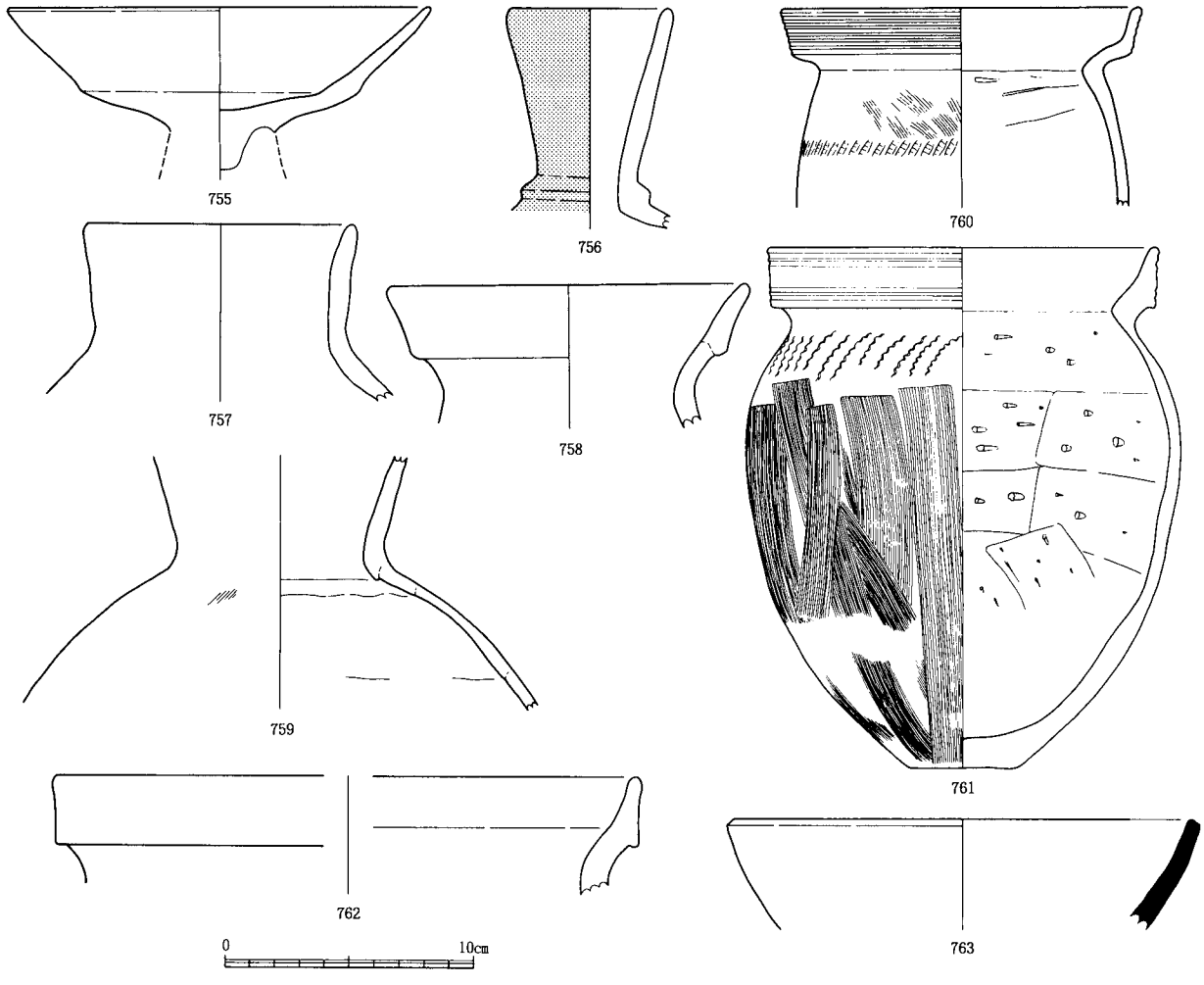
第６号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
755	覆土	高　杯	A:16.9	杯部内ナデ		28
756	住居内ピット	壺	A:6.4		外面赤彩	26
757	覆土	〃	A:10.7	口縁部外ナデ		37
758	〃	〃	A:14.3			25
759	〃	〃		内外面ナデ		39
760	住居内ピット	甕	A:14.2	胴部外ナデ、内面ナデ	口縁部外面に擬凹線 肩部外面に斜行キザミ	27
761	〃	〃	A:15.5、H:20.9 B:4.2、M:17.4	胴部外ナデ、内面ナデ	口縁部外面に擬凹線 肩部外面に斜行キザミ	297
762	覆土	〃？	A:23.4	口縁部外ナデ	大型鉢？	296



1．暗灰褐色土
2．暗茶褐色土（2′は地山質土を多く含む）
3．淡褐色土（3′はやや黄色い）

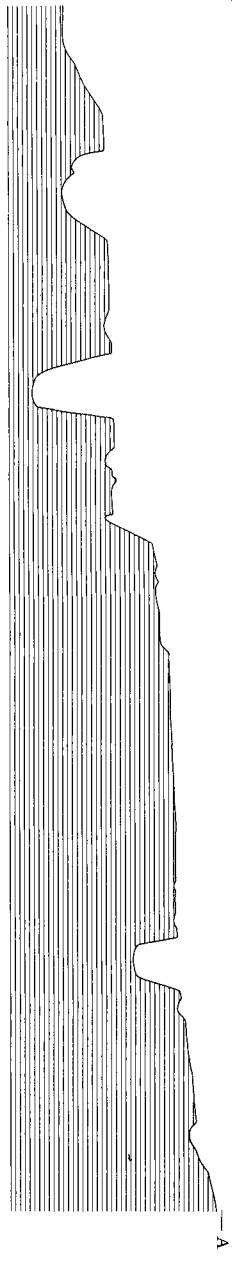
第153図　第６号竪穴住居跡（1/80）

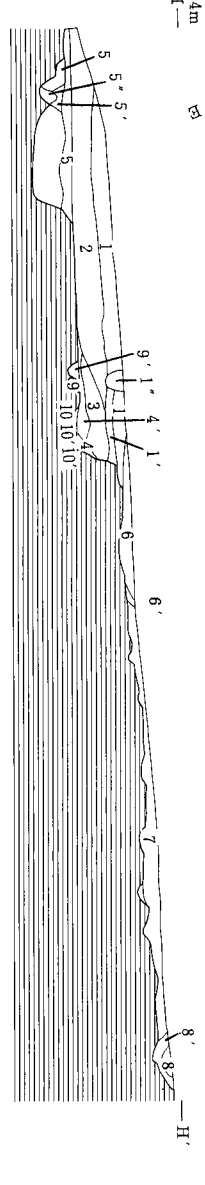


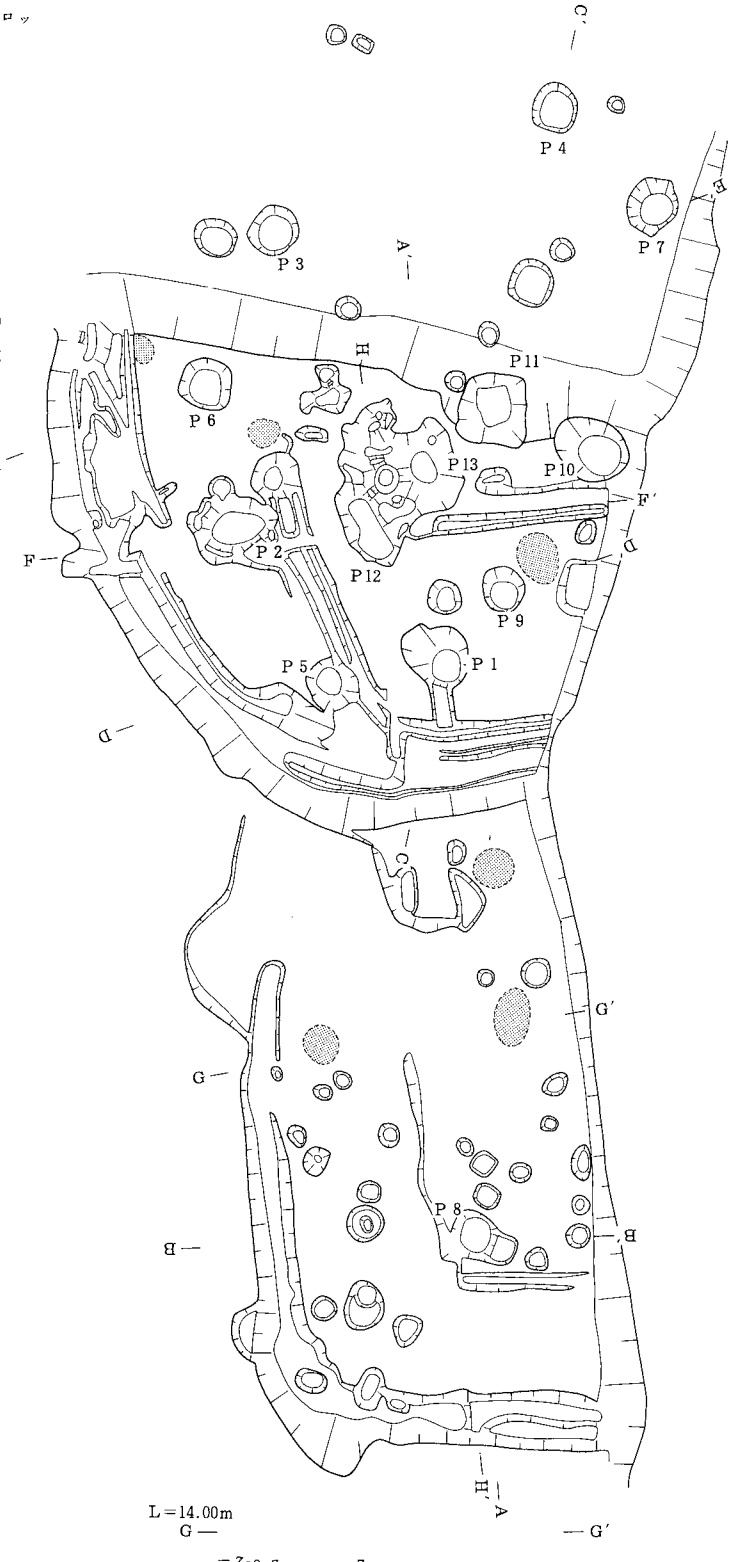
第154図　第６号竪穴住居跡遺物（１／３）

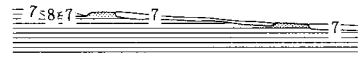
763	覆土	珠洲焼 こね鉢	A:18.3	内外面ロクロナデ		3

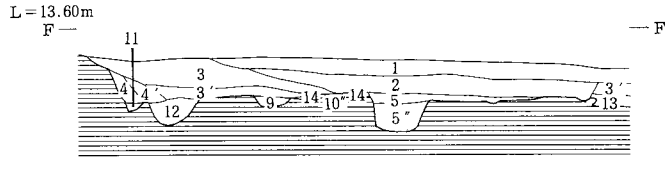
1．茶褐色土（1′は細礫炭化物を1より多く含む。1″はやや暗い）
2．暗茶褐色土
3．明茶褐色土（3′はやや明るい）
4．淡褐色土（4′はやや明るい）
5．暗黄褐色土（5′は含有物がほとんどなく5″は黄褐色土をブロック状に含む）
6．暗黄褐色土（6′はやや明るい）
7．暗褐色土
8．黒褐色土（8′は地山質土を含む）
9．茶褐色土（9′は9より砂礫を多く含む）
10．暗茶褐色土（10′はやや明るく10″は砂粒を多く含む）
11．淡褐色土
12．黄白色土
13．暗黄褐色土
14．黄褐色土（貼り床）



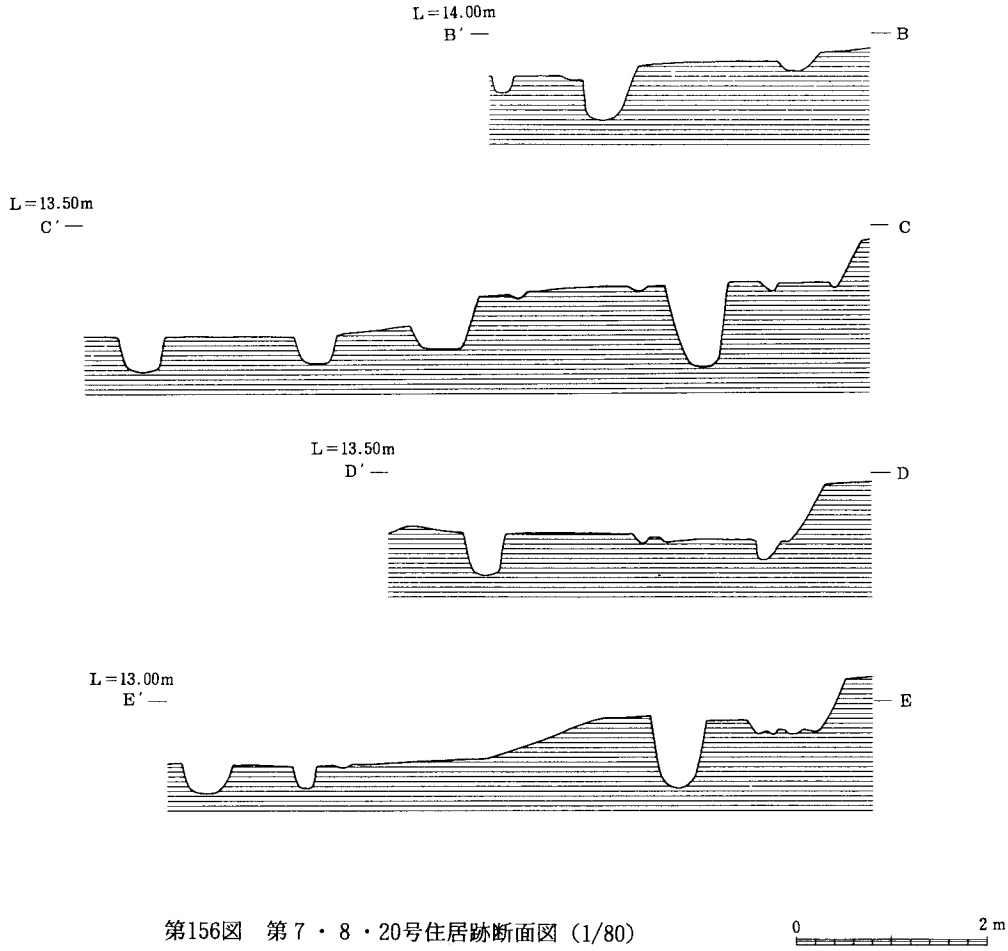








第155図　第７・８・20号竪穴住居跡（1/80）



第156図　第７・８・20号住居跡断面図（1/80）

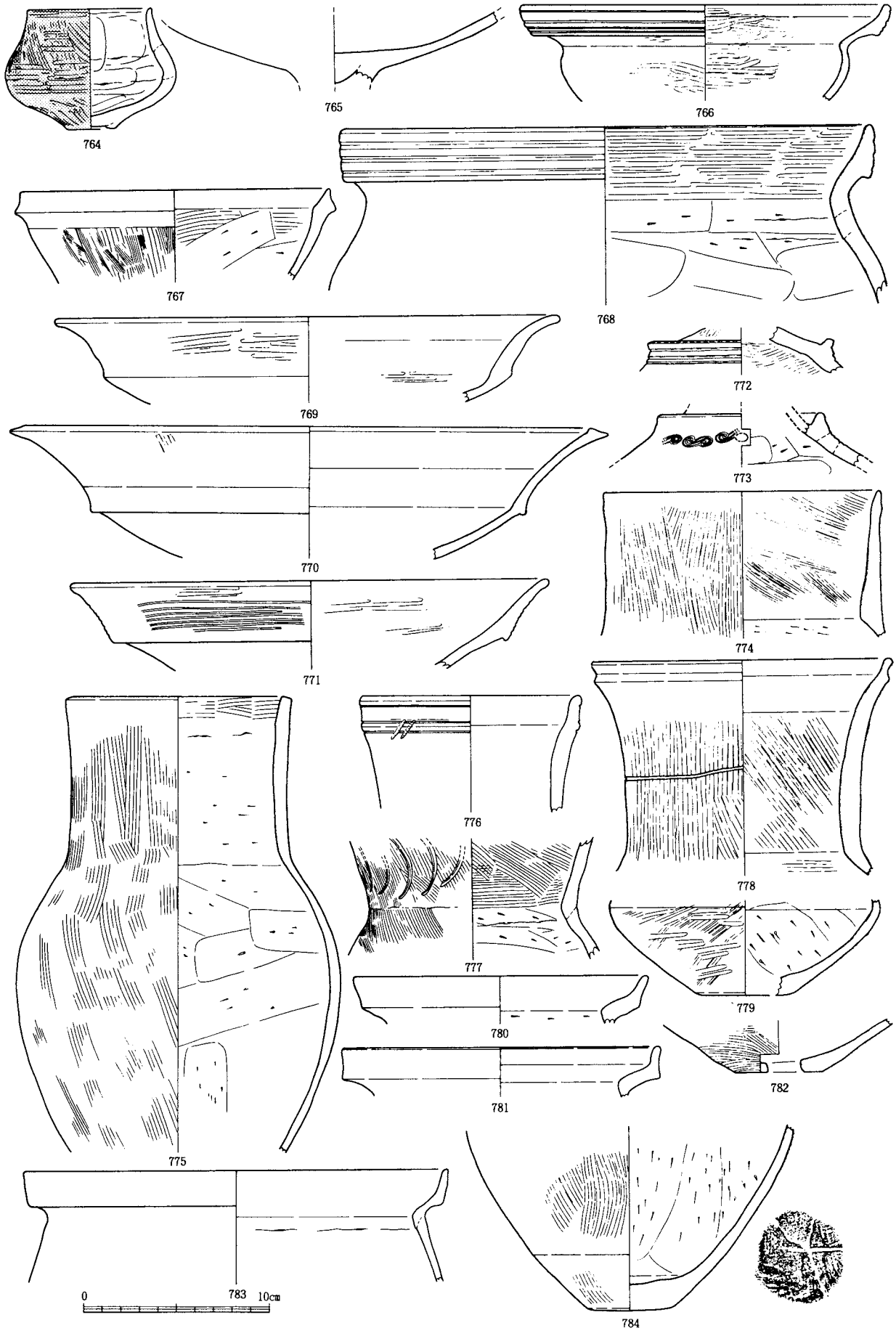
第７・８・20号竪穴住居跡（第155図、図版60・61）

遺構　Ｃ－13、Ｄ－13区にまたがって検出された。また、いずれも調査区壁にかかって確認されている。第７号竪穴住居跡は主柱穴の配列などから少くとも三回の建て替え、あるいは切り合いが想定できる。これをＡ、Ｂ、Ｃとする。Ａは直径（850）cmの円形を呈すると考えられるもので、主柱穴は６本と推定される。その内Ｐ－１～Ｐ－４の４本を確認した。Ｂは（590）cm×（650）cmの隅丸長方形と考えられるもので、主柱穴は４本と推定される。その内Ｐ－５～Ｐ－７の３本を確認した。Ｃは300cm以上×360cm以上の規模を持つ隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するものと考えている。主柱穴は４本と推定しているがＰ－９の一本を確認したのみである。いずれの住居跡も複数壁溝が確認でき、また中央部にはＰ－10～Ｐ－13等の土坑があり３棟以上の存在が推定可能である。残存壁高は60cmを測り、炉跡は床面で二箇所焼土を検出している。覆土は上部に茶褐色土、下部に暗茶褐色土が堆積し、壁際に明茶褐色土や淡茶褐色土がみられる。切り合いは土層断面では確認できなかった。

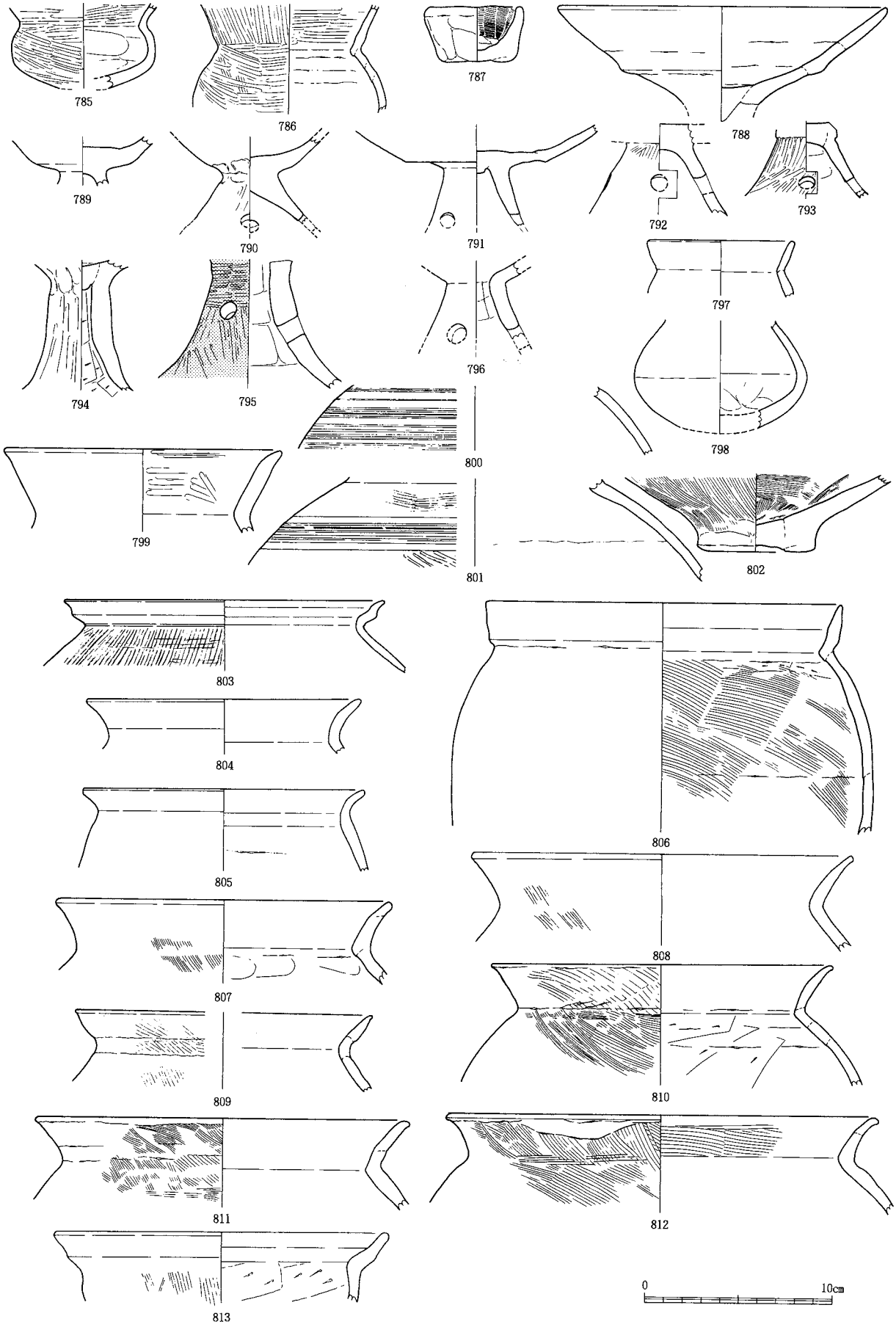
第８・20号竪穴住居跡は、第７号竪穴住居跡より新しい。第８号竪穴住居跡は隅丸方形を呈すると推定している。規模は610cm以上×310cm以上である。壁溝は幅60cmの物が西コーナーを中心として検出され、残存壁高は20cmを測る。主柱穴の本数は不明であるがＰ－８がこれに当たるものと考えている。第20号竪穴住居跡は、第８号竪穴住居跡の内側に位置し、方形を呈するものと推定している。規模は480cm以上×160cm以上である。壁溝は南東壁で確認している。いずれの住居跡の物かはわからないが焼土が三箇所確認されている。これらは別住居として取り扱ったが、第８号竪穴住居跡の壁溝幅などから同一住居の可能性も考えられる。

第７号竪穴住居跡遺物

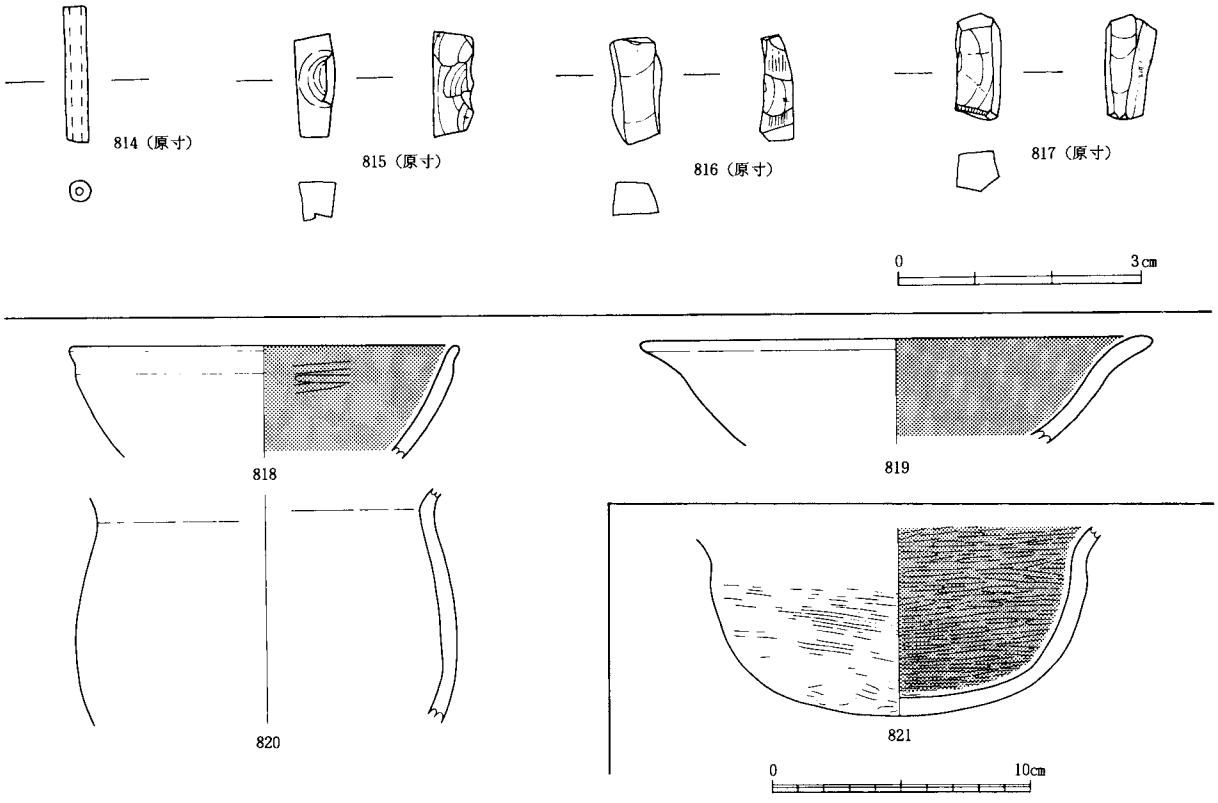
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
764	床面	鉢	A:6.6、H:6.6 B:2.6、M:9.3	外面ハケ→ミガキ 内面ナデ	外面赤彩	135



第157図　第７号竪穴住居跡遺物(1)（１／３）



第158図　第７号竪穴住居跡遺物(2)（１／３）

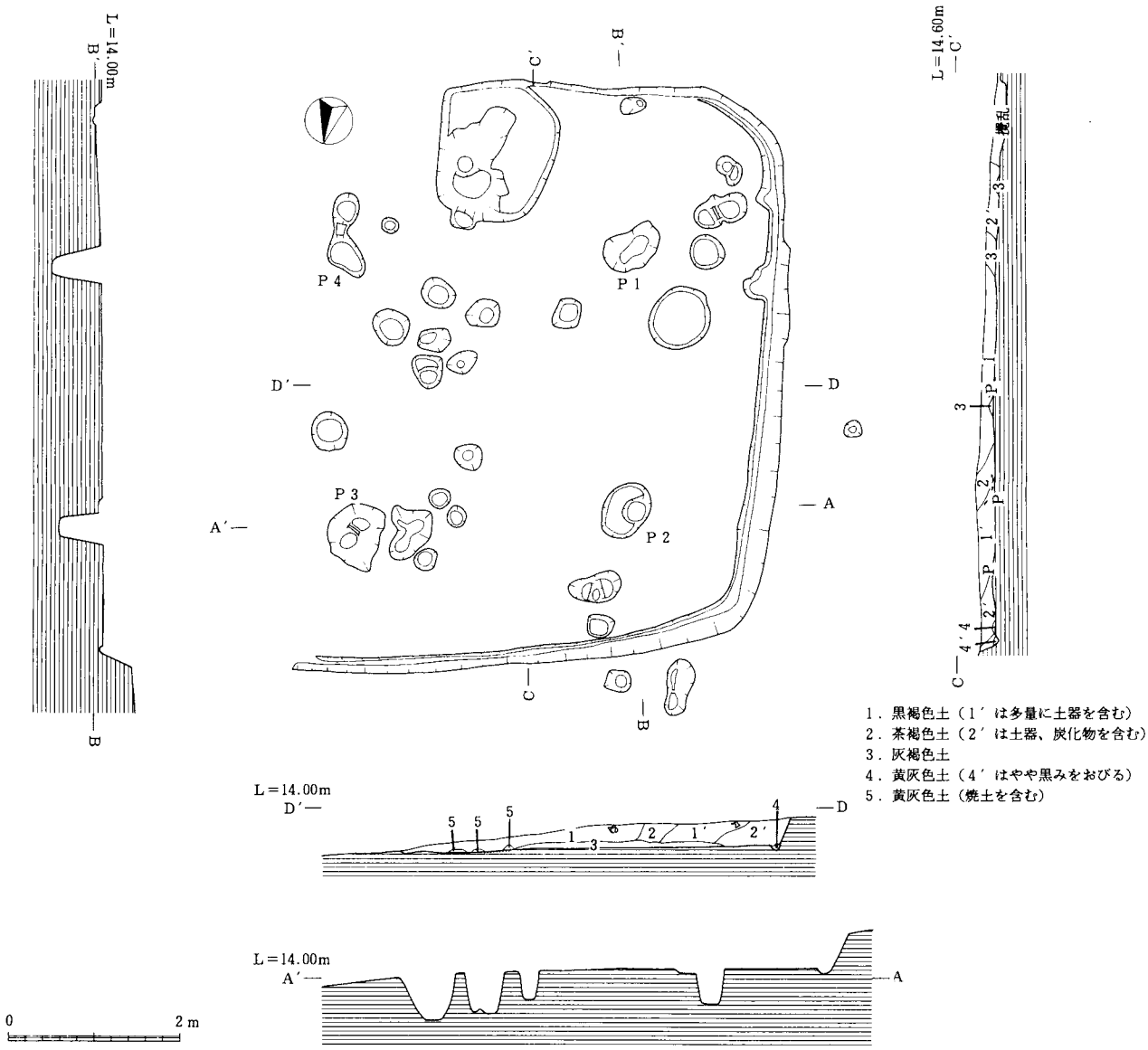


第159図　第７・８・20号竪穴住居跡遺物（１／３）

765	床面	高　　杯				123
766	覆土下層	鉢	A:19.6	内外ミガキ	口縁部外面に擬凹線	129
767	〃	〃	A:6.6	口縁部外ナデ、体部外ハケ 内面ハケ→ナデ	口縁部外面に凸帯	137
768	覆土上層	〃	A:28.3	胴部外ミガキ？ 口縁部内ミガキ、胴部内ナデ	口縁部外面に擬凹線 把手付大鉢？	152
769	〃	高　　杯	A:27.2	杯部外ナデ		155
770	柱穴	〃	A:30.6	杯部外ミガキ？	口縁端部に水平な面	125
771	覆土上層	器　　台	A:25.7	杯部内ナデ	器受部外面に４条以上の沈線	147
772	〃	高　　杯		脚部外ミガキ、脚部内ハケ	脚裾部外面に３条以上の沈線、 凸帯以上に刻み目	431
773	〃	〃		脚部内面ナデ	外面にスタンプ文 外面赤彩？	146
774	覆土下層	壺	A:14.7	頸部外ハケ、頸部内ナデ		337
775	〃	〃	A:11.2	外面ハケ、口縁部内ハケ 頸部内ハケ、胴部内ケズリ→ナデ		130
776	〃	〃	A:17.8		口縁部外面に擬凹線、刻み	426
777	〃	〃		頸部内外ハケ、胴部外ハケ、 胴部内ケズリ	頸部外面に記号文	66
778	〃	〃	A:15.9	頸部内外ハケ	頸部外記号文	338
779	〃	〃		胴部外ミガキ、胴部内ナデ		132
780	〃	甕	A:15.8			138
781	——	〃	A:17.0			121
782	住居内ピット	〃		胴部外ハケ、胴部内ナデ	底部穿孔？	292
783	覆土下層	〃	A:23.0			133
784	〃	〃	B:4.5	胴部外ハケ→ナデ 胴部内ケズリ	底部外面に記号文	127

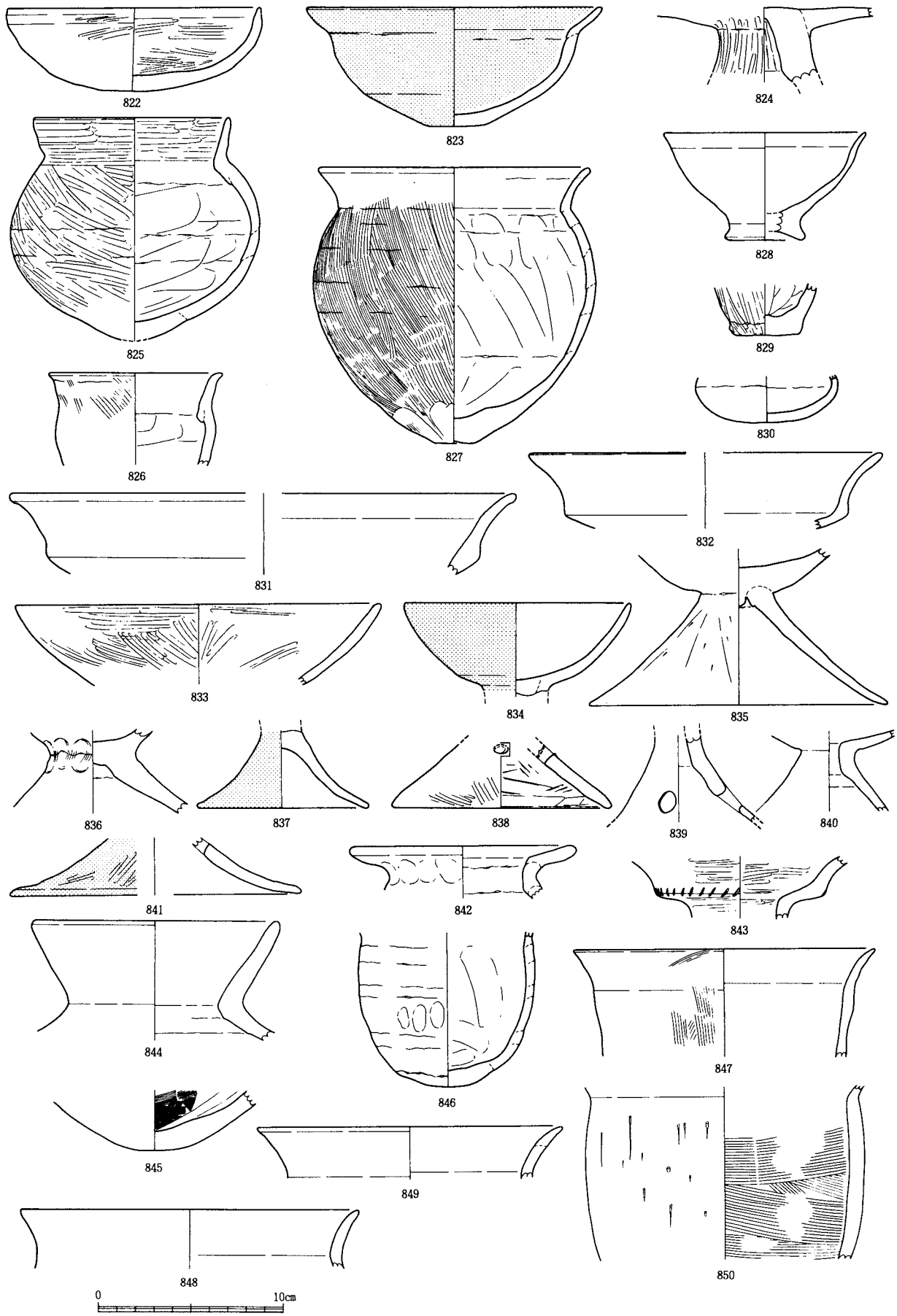
第10号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
822	床面南西隅	椀	A:13.6 H:4.6	外面ミガキ 内面ナデ（ミガキ？）		64
823	床面中央	鉢	A:15.9、H:6.5 B:3.0	内外面ナデ（ミガキ？）	内外面赤彩	80
824	床面	高　杯		杯部外ミガキ		72
825	床面南西隅	壺	A:10.5 M:13.5	外面ミガキ、内面ナデ		56
826	覆土上層	鉢	A:9.3	外面ハケ→ナデ、内面ナデ		75
827	床面南西隅	甕	A:14.5、H:15.0 B:2.2、M:15.4	口縁部外ナデ、胴部外ハケ、内面ナデ		52
828	覆土	鉢	A:10.7	外面ナデ		61
829	〃	手づくね土器	B:3.5	内外面ナデ		71
830	〃	壺				60
831	〃	高　杯	A（27.3）			404
832	〃	〃	A（18.8）			68
833	〃	〃	A:19.7	杯部内外ミガキ？		362
834	〃	〃	A:12.2	杯部内外ナデ	外面赤彩	58
835	〃	〃	B:16.0	脚部内外ナデ		49
836	覆土上層	〃				48
837	覆土	〃	B:9.2		外面赤彩	57
838	〃	〃	B:11.7	内外面ナデ	内外面赤彩	409
839	〃	器　台				51
840	〃	〃				406
841	〃	高　杯	B（15.6）	脚部外ミガキ	内外面赤彩	408
842	〃	壺	A:12.0	内外面ナデ		47
843	〃	〃		口縁部外ミガキ	口縁部下端に刻み	59
844	〃	〃	A:13.0	口縁部内ナデ		55
845	〃	壺		底部内ハケ		55
846	〃	甕		内外面ナデ	外面巻き上げ痕	74
847	〃	〃	A:16.1	口縁部外ナデ、胴部外ハケ		67
848	〃	甕	A:18.3			364
849	〃	〃	A:16.5	口縁部外ナデ		328
850	〃	〃		胴部外ケズリ、胴部内ハケ		361
851	〃	〃	A:14.5 M:15.9	外面ハケ、内面ナデ		62
852	〃	〃	A:14.7 M:22.0	口縁部内外ナデ 胴部外ハケ・ケズリ 胴部内ハケ→ナデ		69
853	〃	〃	A:15.2	口縁部外ナデ、胴部外ハケ、内面ナデ		403
854	〃	〃	A:17.2	口縁部外ハケ→ナデ 胴部外ケズリ、内面ハケ→ナデ		50
855	〃	〃	A:16.7	口縁部内外ハケ→ナデ 胴部内外ハケ		44
856	〃	〃	A:16.3	内外面ナデ？	布留式系甕	45
857	〃	〃	A:27.7		山陰系甕	73

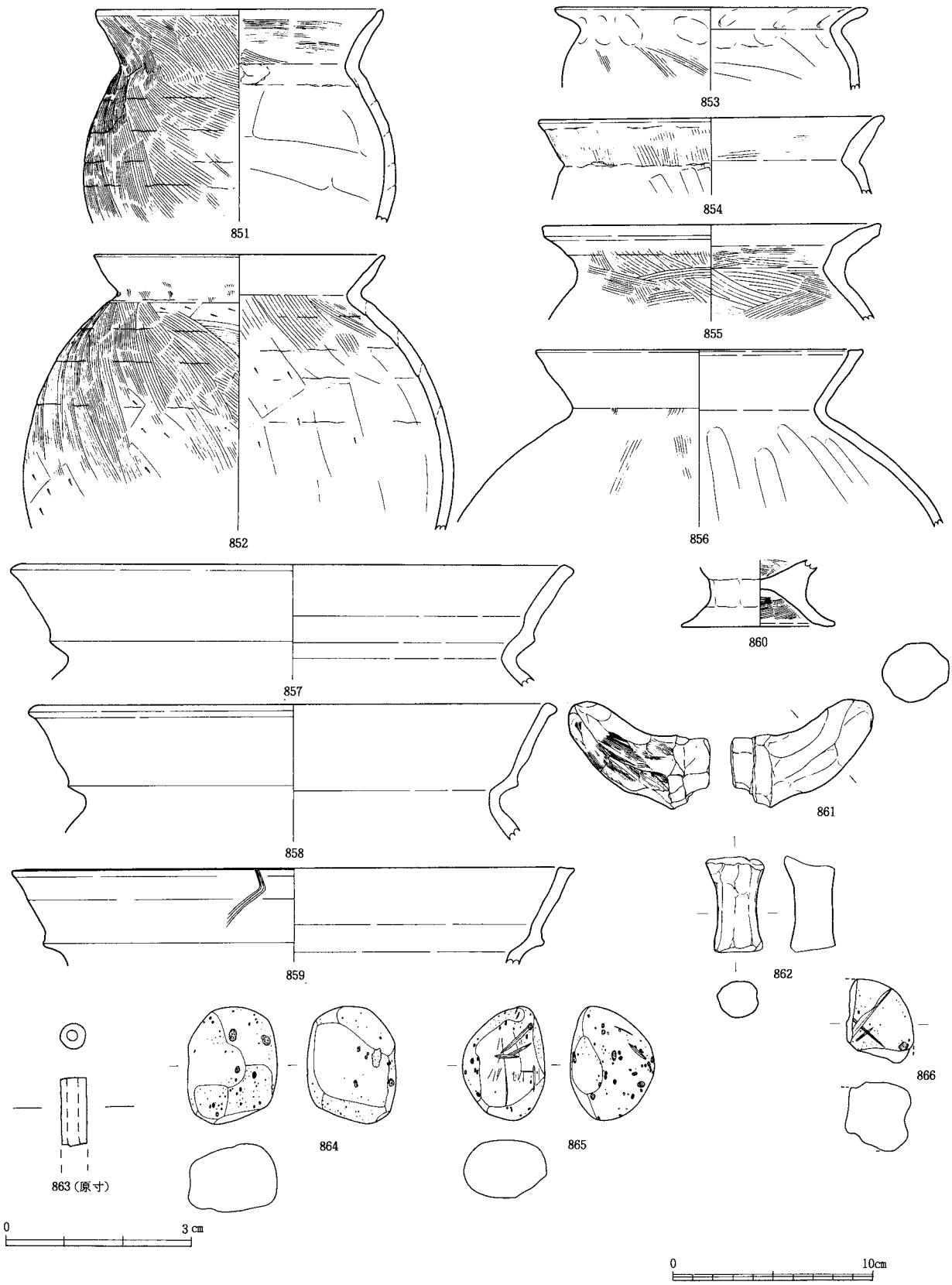


第161図　第10号竪穴住居跡（1/80）

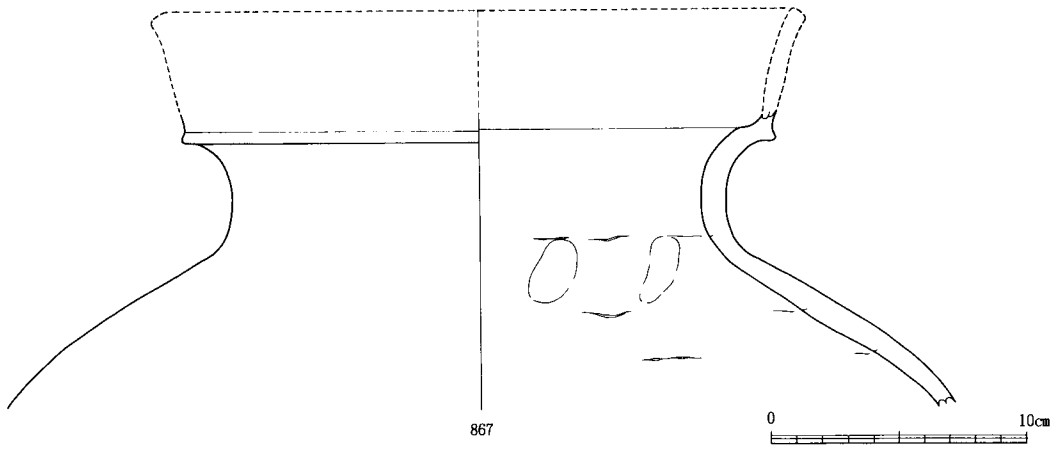
858	覆土	甕	A:26.1		山陰系甕	63
859	〃	〃	A:27.2	内外面ナデ	〃	46
860	〃	（脚台）	B:7.7	体部内ハケ、脚台部内ハケ		65
861	覆土下層	甑		外面ハケ	把手のみ	363
862	覆土	支脚？		外面ナデ	不整６角柱状	365
863	〃	管玉	長（1.2）、径0.5 孔径0.2		半分程度欠損、緑色凝灰石 重量（0.2）g	石29
864	〃	軽石	長6.0、幅4.6 厚3.5		完形 重量20.2g	石４
865	〃	〃	長5.9、幅4.2 厚3.0	３条の線状の溝あり （深さ0.1～0.3cm） 使用による面あり	完形 重量14.4g	石５
866	〃	〃	長（4.3） 幅（3.4）、厚3.5	３条の線状の溝あり （深さ0.1cm）	半分以上欠損 重量（8.8）g	石11
867	〃	壺		内外面ナデ	山陰系壺	70



第162図　第10号竪穴住居跡遺物(1)（１／３）



第163図　第10号竪穴住居跡遺物(2)（１／３）



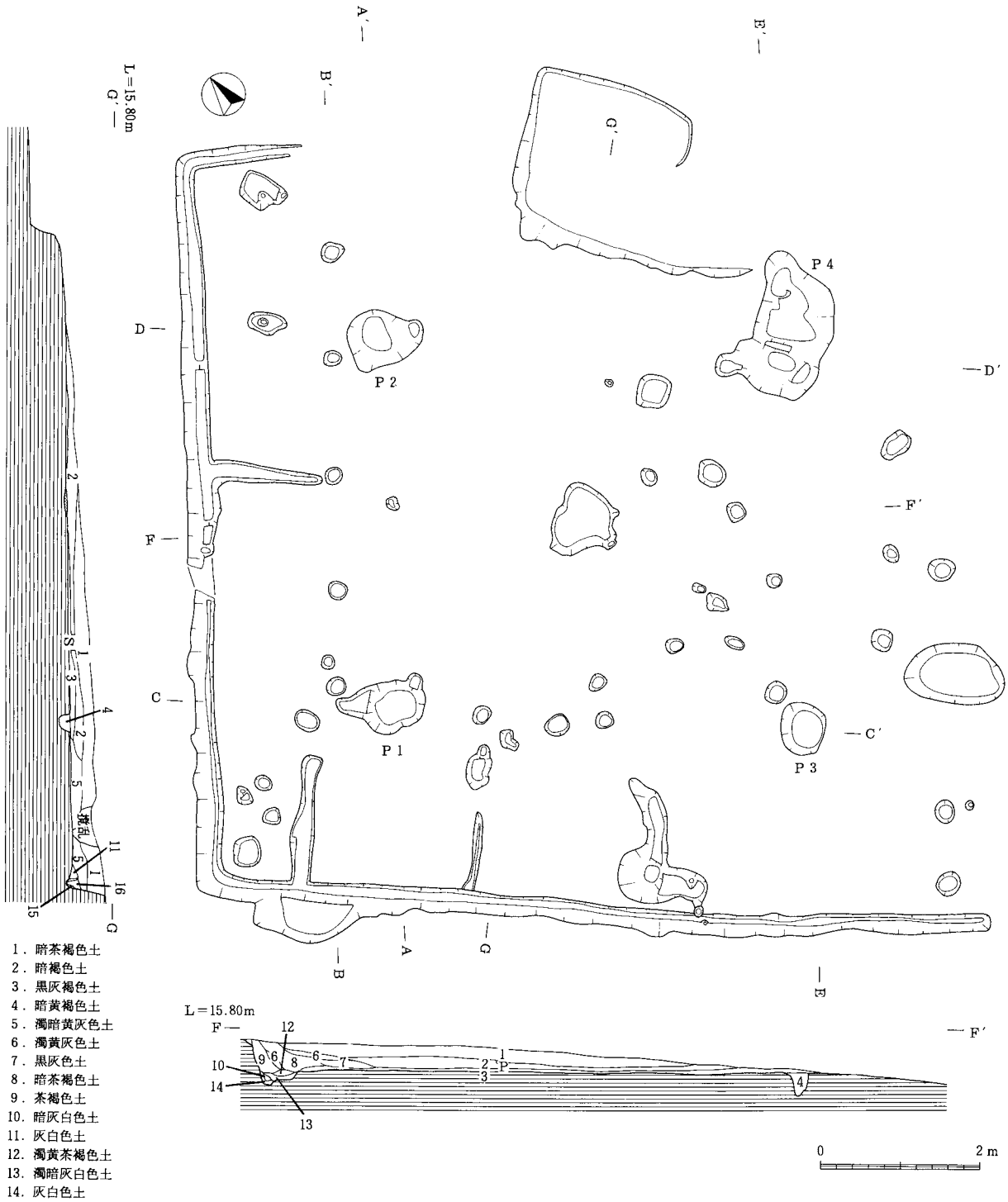
第164図　第10号竪穴住居跡遺物(3)（１／４）

第11号竪穴住居跡（第165図、図版64・65）

遺構　Ｅ－13・14、Ｆ－13・14区に位置する。北東、南東壁は確認できなかった。形態は方形と考えられ、規模は（926）cm×（980）cmで、本遺跡で確認された竪穴住居跡は内、最大のものである。残存壁高は49cmを測り、壁溝は北西、南西壁下で確認された。また、これからのびる間仕切り溝が北西壁下で１本、南西壁下で２本確認された。主柱穴は４本でＰ－１～Ｐ－４がこれに当たる。他の住居跡に比べ大型で深い。また、北西壁とＰ－１、Ｐ－２の間には小柱穴列が北東壁に並行して検出されている。炉跡は不整形な皿状の物が住居跡中央で確認されている。覆土は上部に暗茶褐色土が、下部に暗褐色土が堆積し、壁際では汚れた黄褐色系の土が流れ込むように堆積している。床面直上には黒灰褐色土が薄く堆積しているのが確認された。

第11号竪穴住居跡遺物

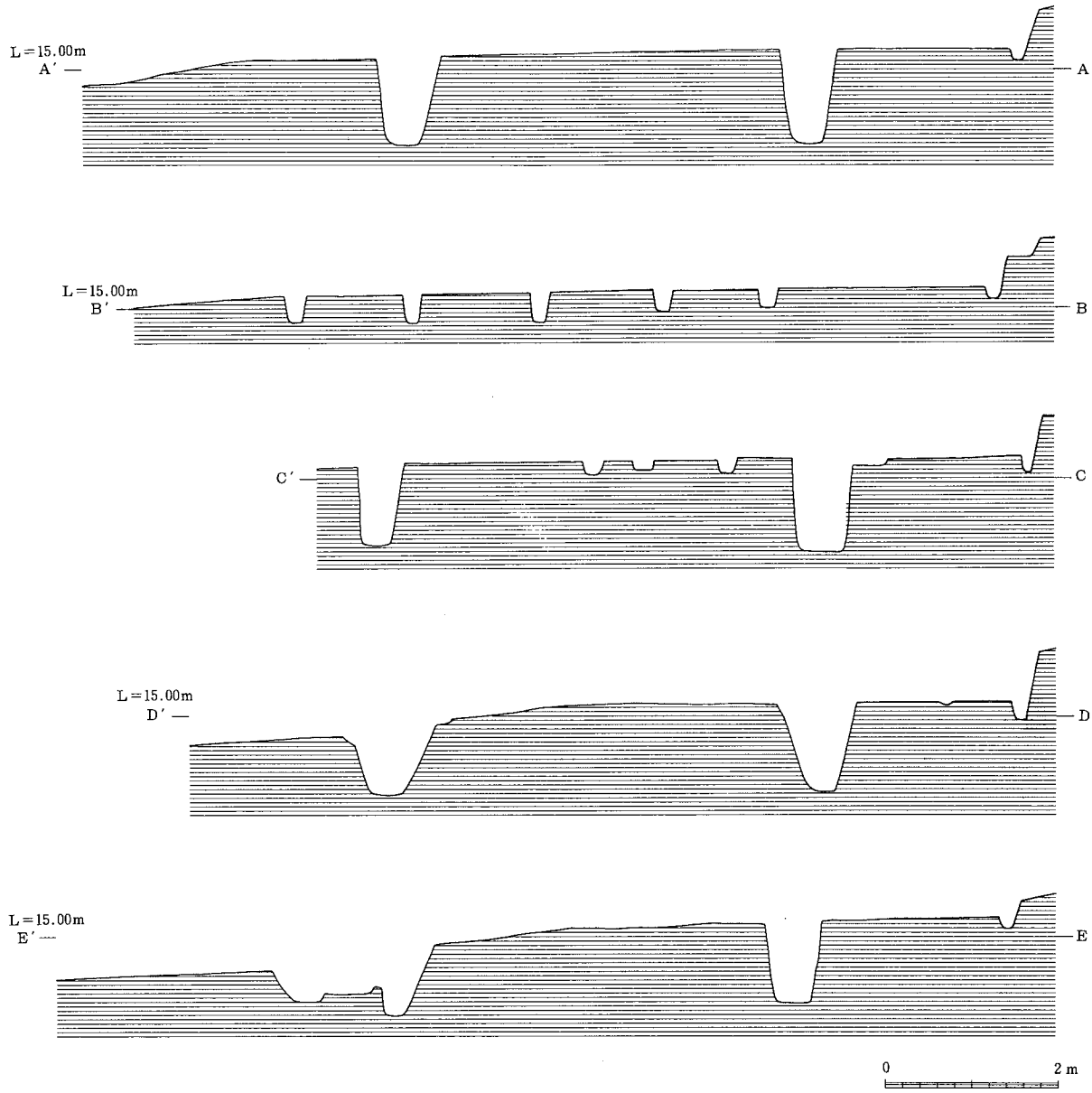
番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整等	その他	実測番号
868	床面	椀	A:11.5、H:4.6 B:5.5	内外面ミガキ	内面黒色処理？	164
869	〃	〃	A:12.9 H:5.1	口唇部内外ナデ、体部内外ミガキ		167
870	〃	須恵器杯身	A:11.5 H:5.0	底部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ		②
871	〃	手づくね土器	A:4.8、H:3.1 B:2.4			83
872	〃	壺	A:9.5、M:15.0 H:6.0	口縁部外ナデ→ミガキ 肩部外ミガキ 胴部外ハケ、口縁部内ハケ→ミガキ		407
873	〃	高杯		杯部外面ミガキ		84
874	〃	甕	A:20.9	外面ハケ、内面ナデ	外面赤化、甑？	81
875	〃	〃	A:13.6、M:16.6 H:20.9	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ	外面一部赤化	114
876	覆土	椀	A:12.6、H:3.9 B	外面ミガキ（ナデ？）		54
877	〃	〃	A:12.1	内外面ミガキ		370
878	〃	須恵器杯蓋	A:13.0	内外面ロクロナデ		①
879	〃	高杯？		杯部内面ナデ、脚部外面ナデ	杯部内面黒色処理	373
880	〃	高杯	A:17.6	杯部内外ナデ		77
881	〃	〃	A:16.6	外面ナデ、杯部内ナデ 胴部内ケズリ		82



1．暗茶褐色土
2．暗褐色土
3．黒灰褐色土
4．暗黄褐色土
5．濁暗黄灰色土
6．濁黄灰色土
7．黒灰色土
8．暗茶褐色土
9．茶褐色土
10．暗灰白色土
11．灰白色土
12．濁黄茶褐色土
13．濁暗灰白色土
14．灰白色土
15．灰白色土
16．暗灰褐色土

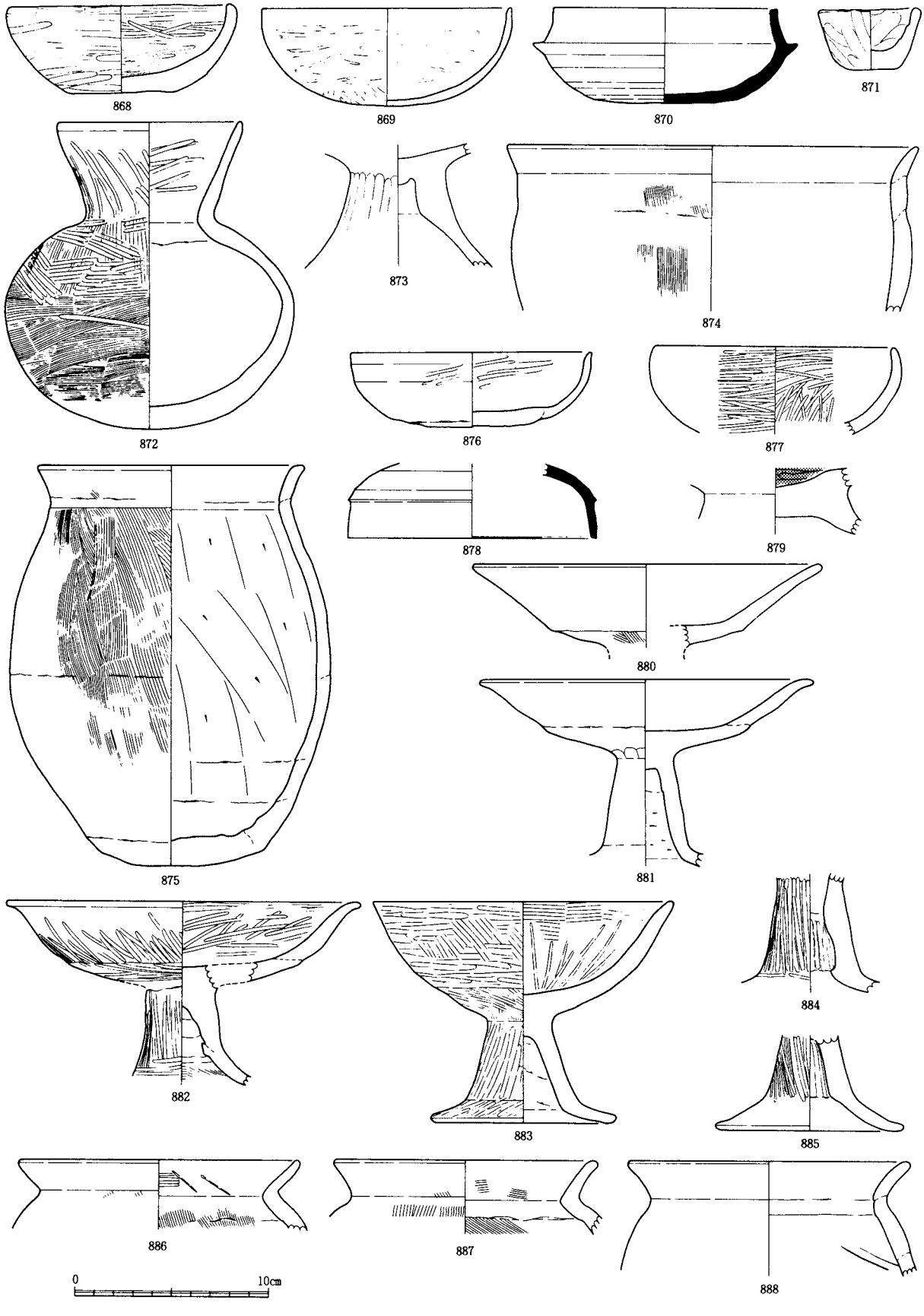
第165図　第11号住居跡（1/80）

882	覆土	高　　杯	A:18.0	杯部外面ナデ・ミガキ 杯部内ハガキ、脚部外ミガキ 脚部内ハケ		87
883	床面	〃	A:15.4、H:11.5 B:9.0	杯部内外ハケ→ミガキ 脚部外ミガキ 脚部内ナデ		171
884	覆土	〃		脚部外ミガキ		86
885	住居内ピット	〃	B:9.0	脚部外ミガキ		78
886	覆土	甕	A:14.3	外面ナデ、内面ハケ→ナデ	外面赤化	372

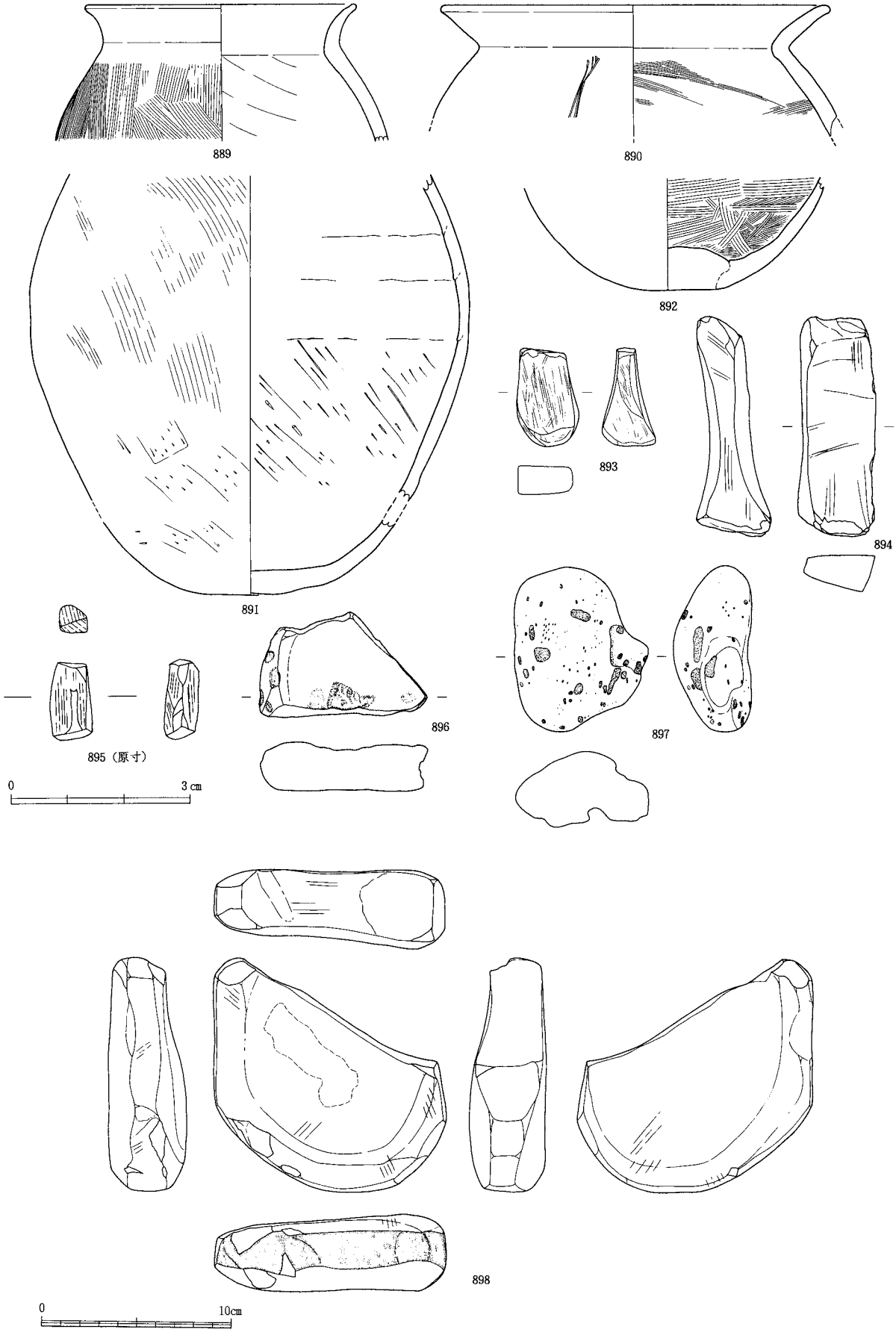


第166図　第11号住居跡断面図（1/80）

887	覆土	甕	A:13.4	口縁部外ナデ 口縁部内ハケ→ナデ 胴部内外ハケ		374
888	〃	〃	A:14.0	内外面ナデ	外面赤化	76
889	〃	〃	A:14.1	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ		85
890	〃	〃	A:20.2	外面ナデ、口縁内ナデ 胴部内ハケ		79
891	主柱穴	〃	M:23.3	胴部外ハケ・ケズリ 胴部内ナデ・ケズリ		460
892	覆土	〃		胴部内ハケ		371
893	床面	砥　　石	長5.2、幅3.3 厚2.7	表裏両面及び２側面が研磨作業面	凝灰岩 重量（43.3）g、半分程度欠	石34



第167図　第11号竪穴住居跡遺物(1)（１／３）



第168図　第11号竪穴住居跡遺物(2)（１／３）

894	床面	砥　　石	長11.7、幅4.0 厚2.0	表裏両面及び２側面が研磨作業面	凝灰岩？ 重量171.9ｇ、完形	石35
895	覆土	玉未製品	長1.4、幅0.8 厚0.6	研磨痕あり	緑色凝灰岩 重量（0.9）ｇ	石24
896	〃	凹　　石	長(5.1)、幅(9.0) 厚2.6	表面に凹みあり 表面に弱い磨痕	角閃石安山岩 重量（180.6ｇ）、大半が欠損	石47
897	〃	軽　　石	長8.8、幅7.1 厚4.0		重量39.7ｇ、完形	石10
898	床面	砥　　石	長12.5、幅12.4 厚4.2	表裏両面及び２側線が研磨作業面	細粒砂岩 重量645ｇ、完形	石46

第12・13・21号竪穴住居跡（第169図、図版66）

遺構　第12、21竪穴住居跡はＥ－14区、第13号竪穴住居跡はＦ－14区に位置する。いずれも調査区外に広がりを持ち平面プラン、主柱穴は捉えられなかった。第13号竪穴住居跡は北東壁を検出できなかったが、方形を呈すると推定している。規模は240cm以上×400cm以上である。壁溝は確認されず、残存壁高は20cmを測る。主柱穴、炉跡も確認されなかった。覆土は暗茶褐色土が主体となり、床面には淡茶褐色土が薄く堆積し、第21号竪穴住居跡の上面までのびている。壁ぎわには黄褐色系の土と焼土がみられる。

第21号竪穴住居跡は北西コーナー部分を中心として検出された。形態は隅丸方形を呈するものと推定している。規模は190cm以上×200cm以上である。残存壁高は24cmを測り、壁溝は検出された壁下でほぼ全ての部分で確認できた。主柱穴は４本と推定しているが、Ｐ－１のみを確認した。覆土は暗黄褐色土を主体として、壁によって暗褐色土、床面上には淡褐色土が堆積している。また、覆土上面、北西コーナーよりで焼土が確認されているが、これが第12、13号竪穴住居跡の炉跡に当たるものかも知れない。

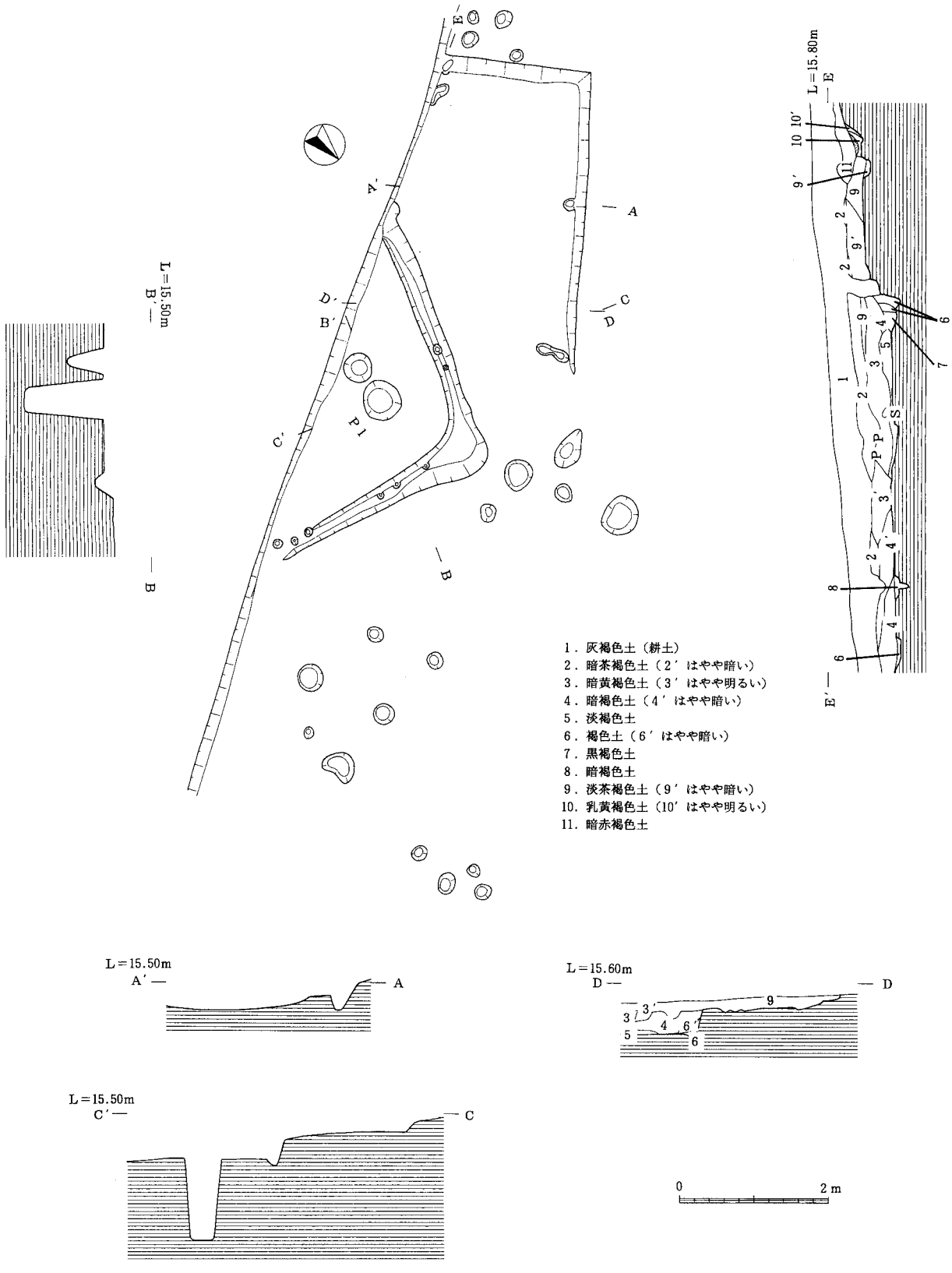
第12号竪穴住居跡は、第21号竪穴住居跡の北側で遺物が集中出土したため住居番号を付けたが、柱穴様の穴が確認されたのみで形態等は不明である。

第12号竪穴住居跡遺物

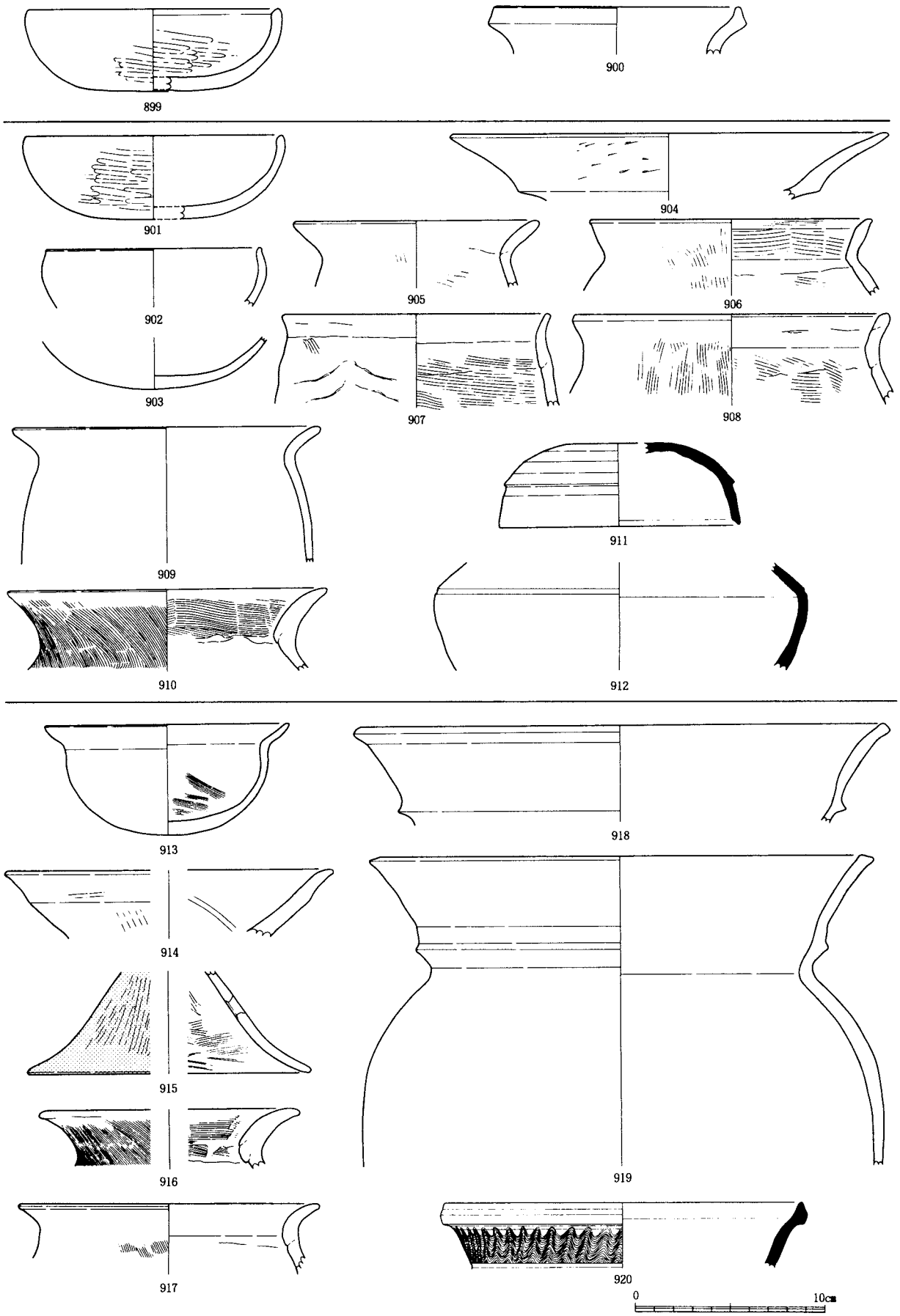
番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
899	ピット	椀	A:13.4、H:4.5 B:5.0	内外面ミガキ		204
900	〃	甕	A:12.9	外面ナデ、内面ハケ→ナデ		433

第13号竪穴住居跡遺物

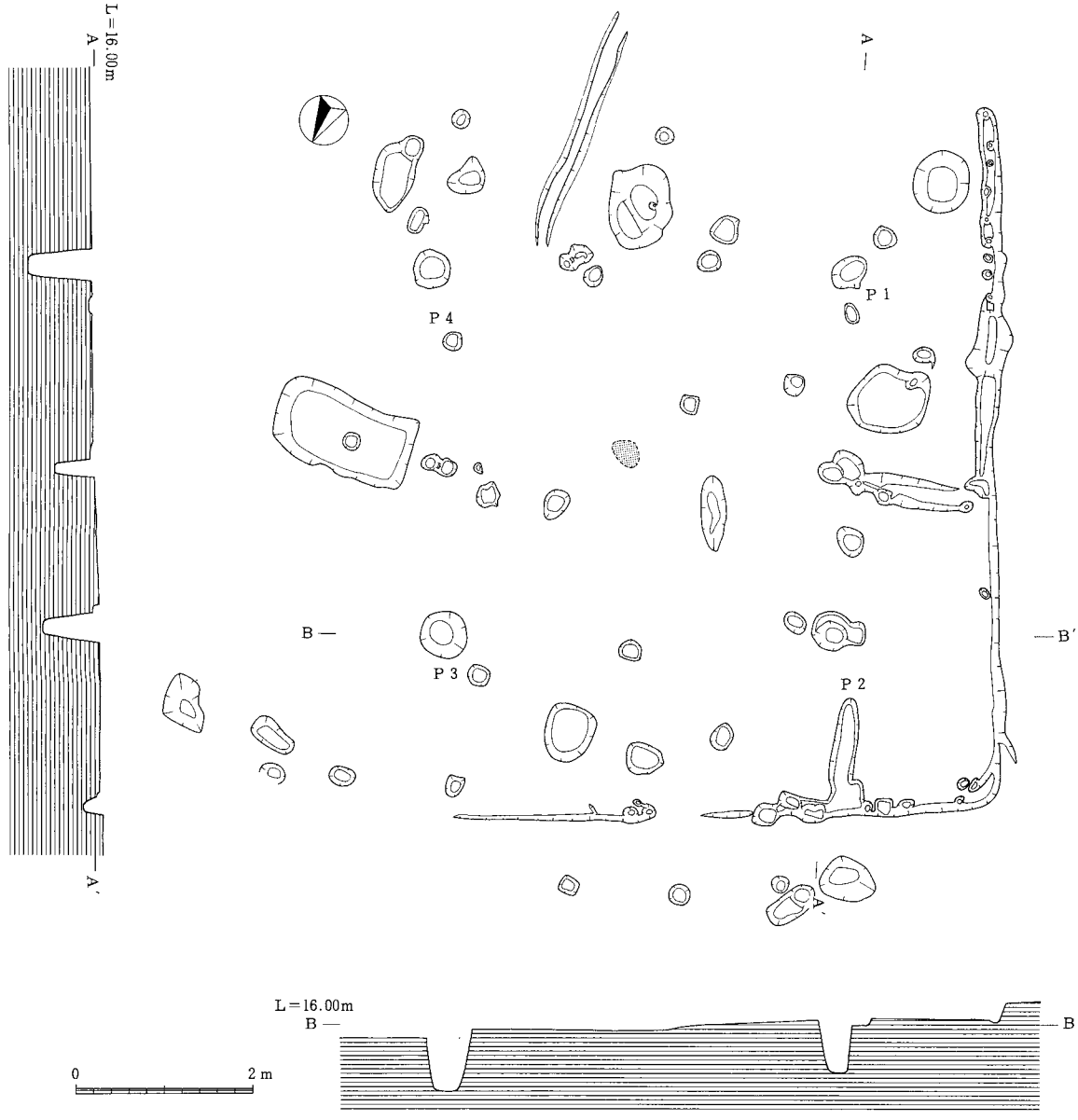
番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
901	覆土	椀	A:13.7	外面ミガキ、内面ナデ		175
902	〃	〃	A:11.3	内外面ナデ		179
903	〃	〃				440
904	〃	高　　杯	A:23.0	杯部内外ケズリ→ミガキ		176
905	〃	甕	A:12.9			177
906	〃	〃	A:14.7	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ハケ		181
907	〃	〃	A:14.1	口縁部内ナデ、胴部内ハケ	外面赤化	174
908	〃	〃	A:16.5	口縁部内外ナデ、胴部内外ハケ		182
909	〃	〃	A:16.2			180
910	〃	〃	A:17.0	外面ハケ、口縁部内ハケ 胴部内ナデ		178
911	〃	須恵器 杯　蓋	A:12.7	天井部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ		⑬
912	〃	須恵器 壺		内外面ロクロナデ	外面に沈線１条	㉗



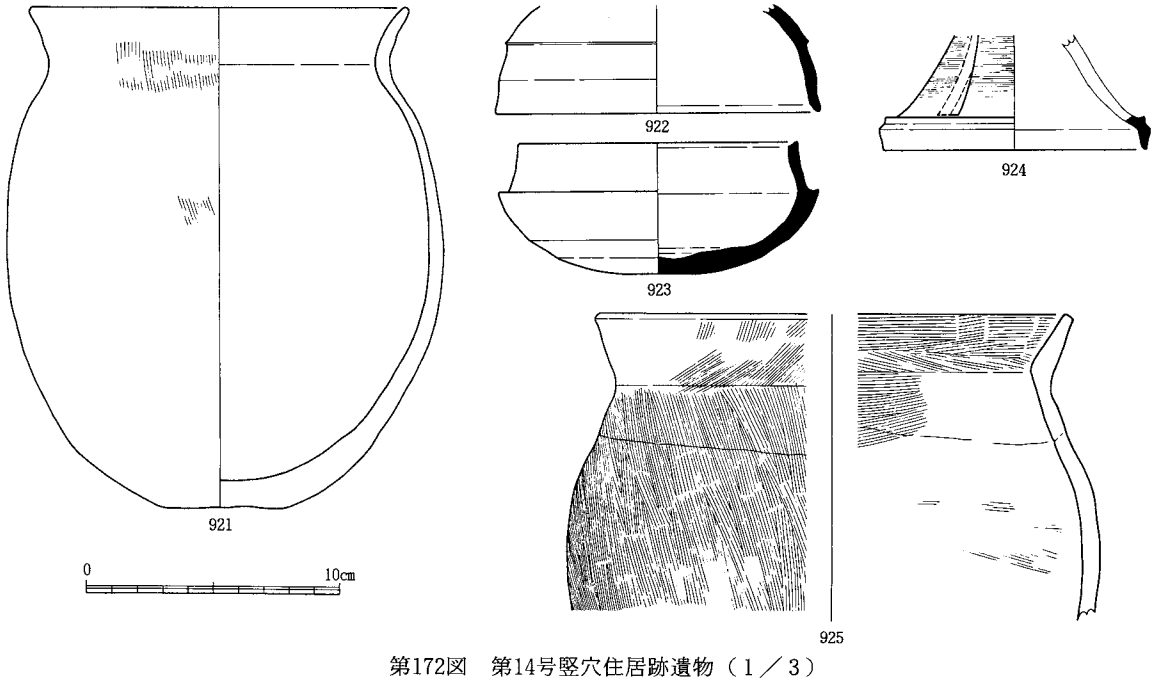
第169図　第12・13・21号竪穴住居跡（1/80）



第170図　第12・13・21号竪穴住居跡遺物（１／３）



第171図 第14号竪穴住居跡（1/80）



第172図　第14号竪穴住居跡遺物（１／３）

第21号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
913	住居内ピット	鉢	A:13.0 H:6.0			199
914	覆土	高　　杯	A（17.4）	杯部外面ナデ・ハケ		414
915	〃	〃	B（15.0）	脚部外ミガキ？、脚部内ハケ	外面赤彩	415
916	〃	壺　？	A（13.2）	口縁部内外ハケ		413
917	〃	甕	A:15.8	口縁部内外ナデ、胴部外ハケ		198
918	〃	〃	A:28.0	口縁部内外ナデ	山陰系甕	412
919	〃	〃	A:25.7	口縁部内外ナデ	〃	203
920	〃	須恵器 甕	A:19.0		波状文あり 内外面に自然釉	㊺

第14号竪穴住居跡（第171図、図版67）

遺構　Ｆ－12、13区に位置する。遺存状態がきわめて悪く、北東壁、南東壁は確認できなかった。形態は方形を呈し、規模は（80）cm×（790）cmと推定している。残存壁高は20cmを測り、壁溝は南西壁、北西壁下で断続的に確認されている。また、これから伸びる間仕切り溝が北西壁下、南西壁下でそれぞれ１本ずつ確認されている。主柱穴は４本でＰ－１～Ｐ－４がこれに当たる。炉跡は住居跡中央に焼土が確認されている。

第14号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
921	床面	甕	A:14.7、H:20.0 B:4.7、M:17.3	外面ハケ、内面ナデ	外面赤化	183
922	〃	須恵器 杯　蓋	A（12.8）	内外面ロクロナデ		㉖
923	覆土	須恵器 杯　身	A:11.0	底部外ロクロケズリ その他ロクロナデ		⑮
924	〃	須恵器 高　杯	H:6043	胸部外カキ目 内面及び脚端部外ロクロナデ	透しあり	⑭
925	〃	甕	A（18.3）	外面ハケ、口縁部内ハケ 胴部内ナデ	外面赤化	411

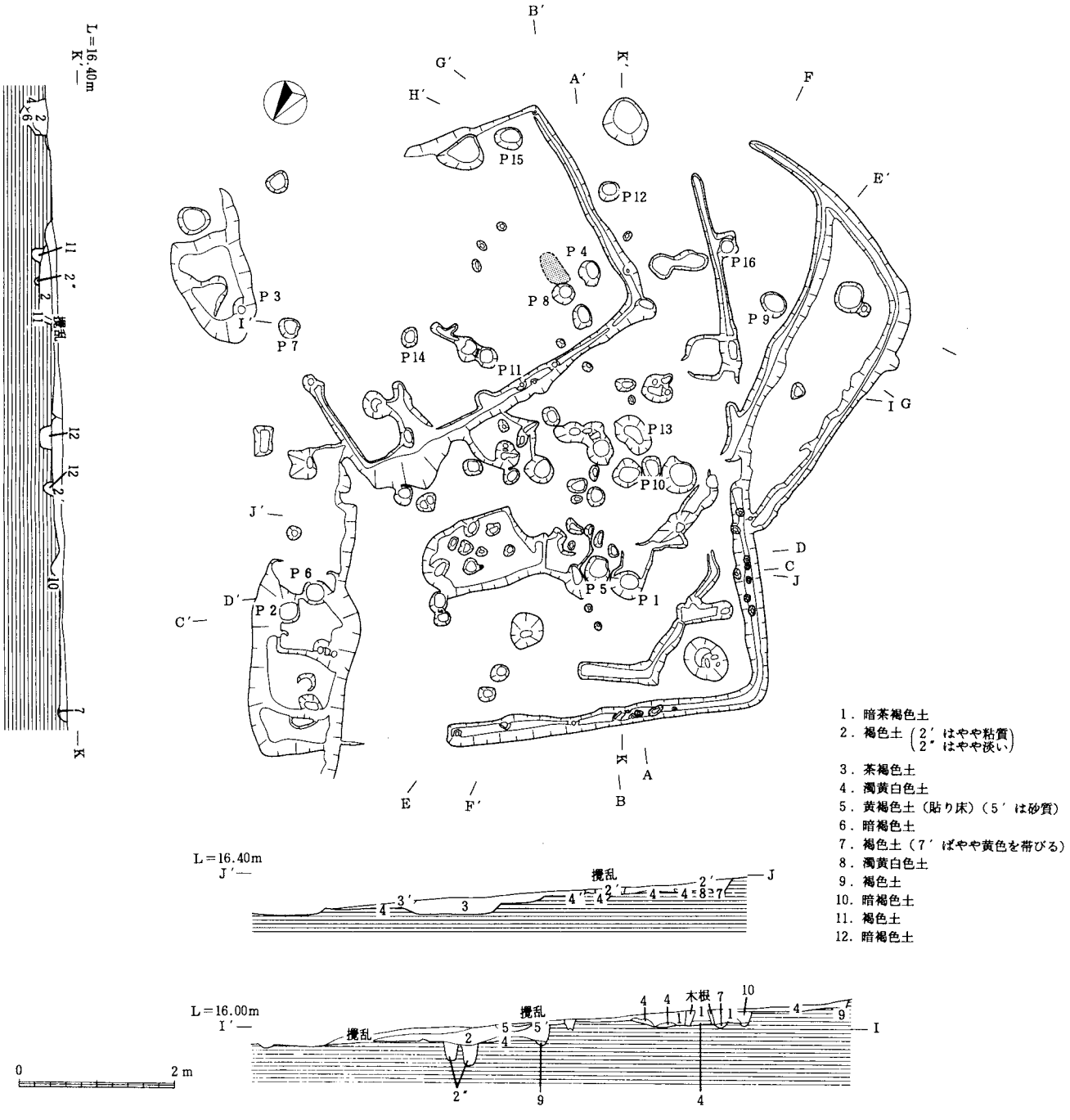
第15・16・18・19号竪穴住居跡（第173図、図版67）

遺構　第15号竪穴住居跡はＦ－13、14区、第16号竪穴住居跡はＦ－14、Ｇ－14区、第18・19号竪穴住居跡はＦ－14区に位置し互いに切り合い関係にある。

第15号竪穴住居跡は北東壁、南東壁を確認することができなかった。形態は、方形と推定され、規模は（710）cm×（726）cmである。主柱穴の配列より、拡張あるいは縮小ないしは同一地点での建て替えが行われていると考えられるが、検出できたのは外側のプランのみである。主柱穴はどちらも４本でＰ－１～Ｐ－４とＰ－５～Ｐ－８である。残存壁高は40cmを測り、壁溝は北西壁と南西壁～で確認している。炉跡と考えられるものは確認できなかった。覆土は褐色土を主体として床面直上にやや汚れた黄白色土がみられる。

第16号竪穴住居跡は南西コーナー部分を確認したにとどまる。第19号竪穴住居跡床面で壁溝かと思われる溝を検出したもののはっきりとはしていない。また、第18号竪穴住居跡とは南壁の壁溝が重なる形で切り合っている。形態は隅丸長方形と推定され、規模は（812）cm×（530）cmである。残存壁高は20cmを測る。主柱穴は４本でＰ－９～Ｐ－12である。炉跡は確認できなかった。

第18号竪穴住居跡も南西コーナー部分のみの確認である。形態は隅丸長方形と推定され、規模は（526）cm×（650）cmである。残存壁高は20cmを測り、壁溝は南東コーナー部分で確認している。やはり第16号竪穴住居跡床



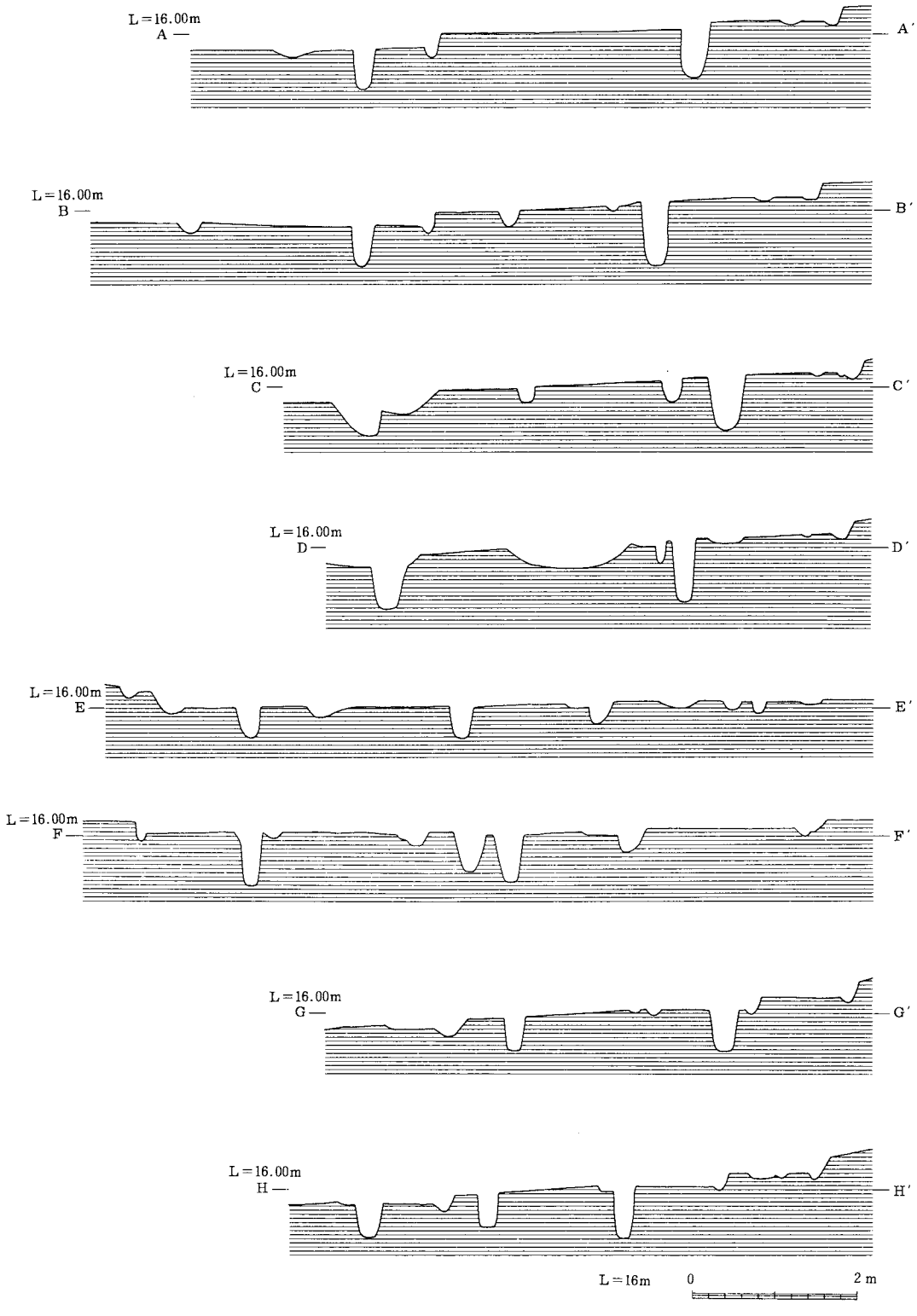
第173図　第15･16･18･19号竪穴住居跡（1/80）

面でそれと思われる溝を確認しているがはっきりとしない。炉跡は確認されなかった。

第19号竪穴住居跡は北東コーナー部分を確認できなかった。また、東壁もはっきりとした物ではない。形態は長方形で、規模は300cm×412cmである。残存壁高は28cmを測り、壁溝は南壁、西壁と北壁の一部で確認できた。主柱穴、炉跡は確認されていない。覆土は褐色土を主体としている。

第15号竪穴住居跡遺物

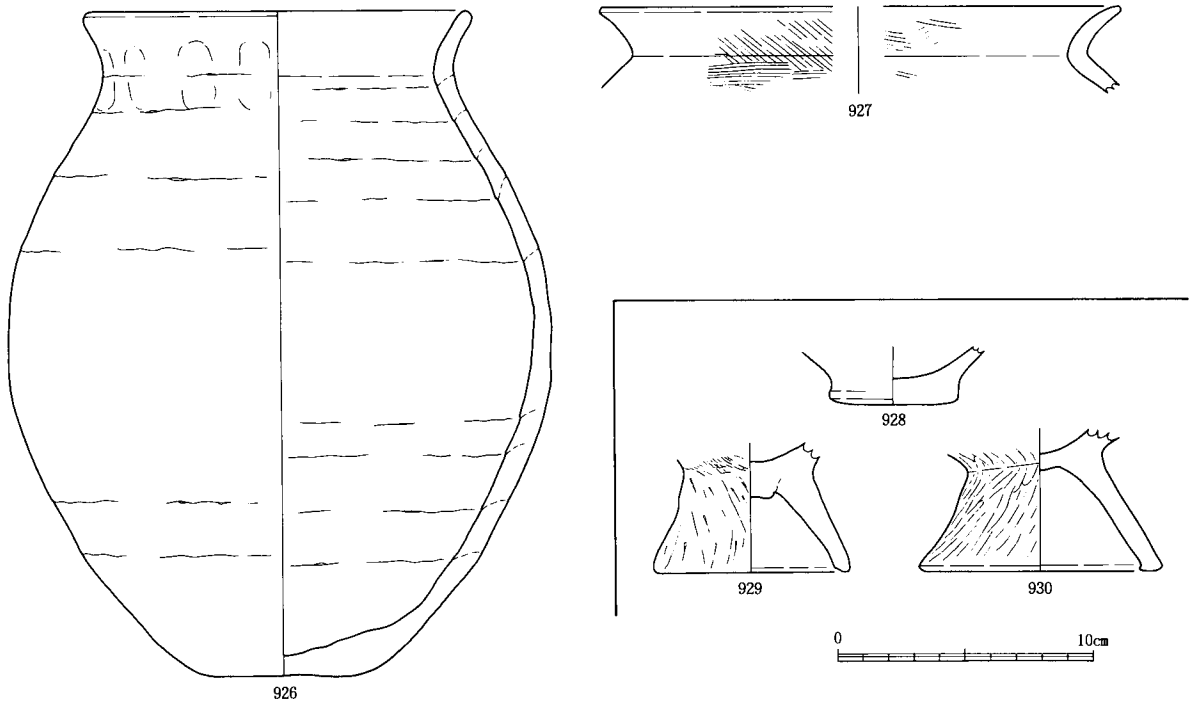
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
926	床面	甕	A:14.8、H:26.4 B:5.5、M:21.5	内外面ナデ		202
927	覆土	〃	A（20.3）	内外面ハケ	口径疑問あり	185



第174図　第15･16･18･19号住居跡断面図（1/80）

第19号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
928	覆土	壺（底部）	B:5.0			201
929	床面	（脚部）	B:7.3	外面ナデ（一部ケズリ） 内面ナデ		197
930	覆土	〃	B:9.0	外面ナデ（ミガキ？） 内面ナデ		200



第175図　第15・19号竪穴住居跡遺物（１／３）

第17号竪穴住居跡（第176図、図版67）

遺構　Ｈ－13区に位置する。攪乱が著しく、南西壁と北西壁の一部を確認したにとどまる。形態は長方形と推定され、規模は240cm以上×260cm以上である。残存壁高は28cmで、壁溝は確認できた壁下では検出されている。主柱穴は２本と推定しているが検出できたのはＰ－１のみである。炉跡は確認できなかった。

第17号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
931	覆土	壺	A:13.1	内外面ナデ		196

第23号竪穴住居跡（第177図、図版68）

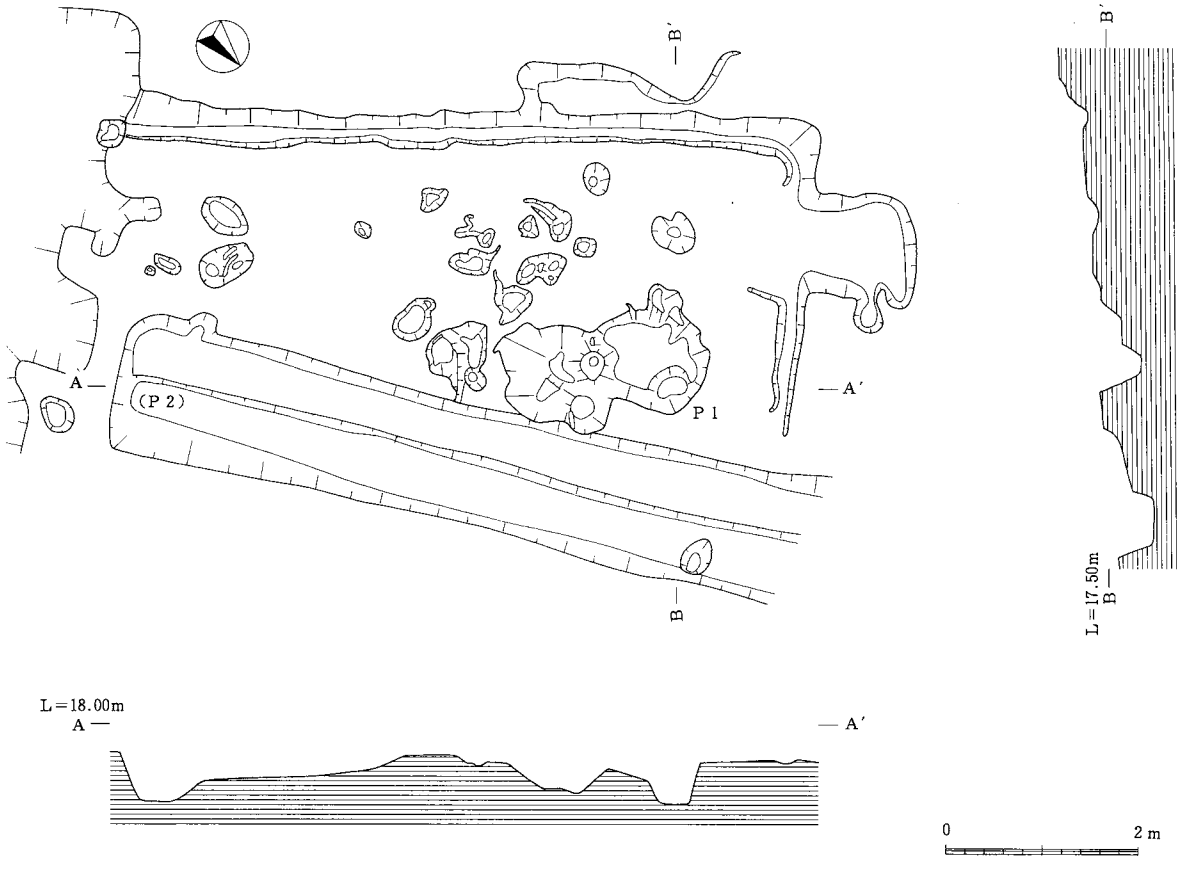
遺構　Ａ－11区で調査区壁にかかって検出されている。形態は隅丸方形と推定している。規模は240cm以上×260cm以上である。主柱穴、炉跡と考えられるものは確認できなかった。覆土は上から茶褐色土、明茶褐色内が堆積し、床面直上には暗茶褐色土がみられる。

第23号竪穴住居跡遺物

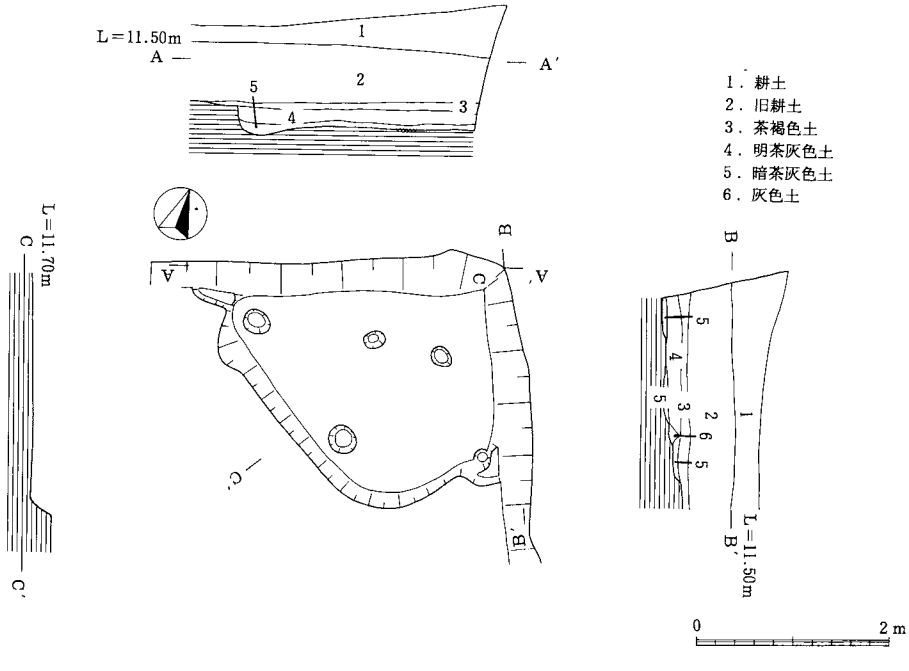
番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
932	床面	椀	A:11.5 H:3.8	外面ハケ、内面ハケ→ミガキ	粗いハケ 底部外面にもハケ	205
933	覆土	甑		胴部内面ナデ	把手のみ	298
934	〃	須恵器 甕	A:12.7、H:15.9 B:5.0	ロクロナデ（胴下部及び底部の外面は回転ケズリ）	波状文・沈線・ハケ目状のもの１孔、胴部内に玉あり	168

第24・26号竪穴住居跡（第179図、図版69・70）

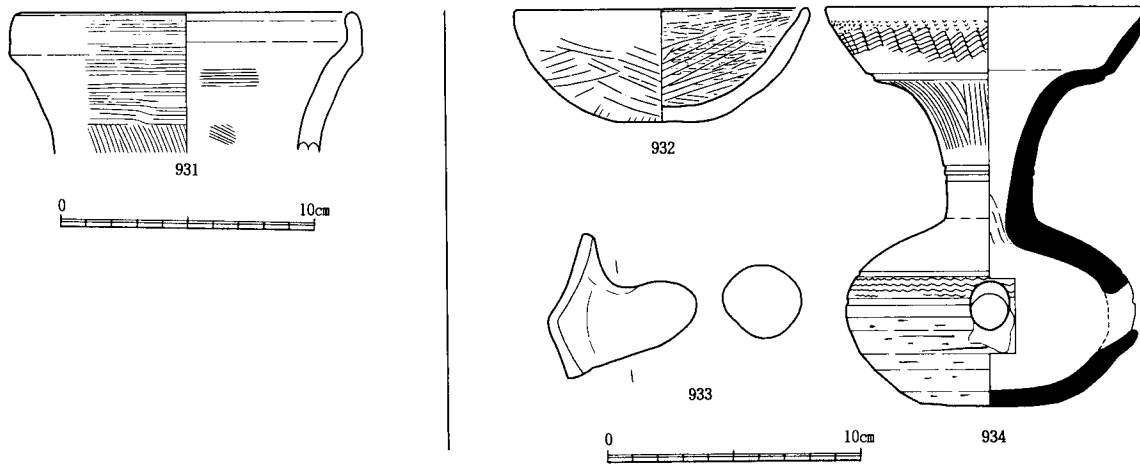
遺構　第24号竪穴住居跡はＢ－９・10、Ｃ－９・10区に位置する。調査区壁にかかって検出された北側約二分の一を確認したにとどまる。形態は隅丸方形と推定され、規模は496cm×290cm以上である。残存壁高は18cmを測り、壁溝は確認されていないが、幅90cm、深さ15cm程の外周溝が、壁より160cm程はなれて検出されている。主柱



第176図　第17号竪穴住居跡（1/80）



第177図　第23号住居跡（1/80）



第178図　第17・23号竪穴住居跡遺物（１／３）

穴は４本と推定されるが、Ｐ－１～Ｐ－２の２本を確認したにとどまる。炉跡は住居跡中央と、西壁よりに３箇所の焼土が確認されている。北壁では２本の並行する溝が第26号竪穴住居跡に向かってのびているのが、どちらの住居跡よりも新しいものと思われる。また、北壁部が二重になっているが、上部に別住居が存在したのかも知れない。柱穴も周辺を含め多数検出され、別遺構の存在が推定されるもののはっきりとはわからなかった。

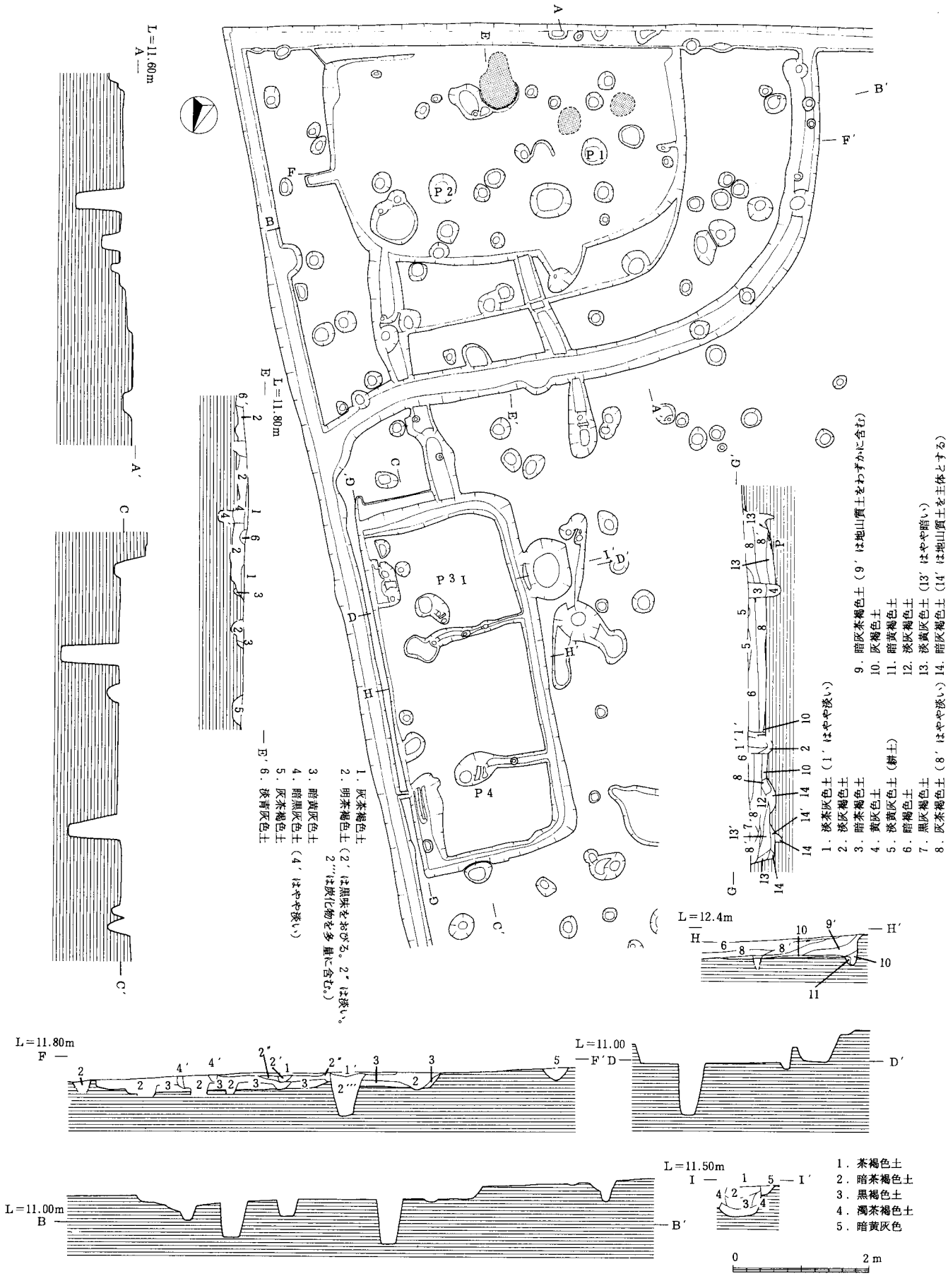
第26号竪穴住居跡はＢ－９区に位置する。調査区壁にかかって確認され西側の約二分の一を確認したにとどまる。形態は隅丸方形と推定され、規模は490cm×200cm以上である。残存壁高は40cmを測り、壁溝は確認された壁下では検出されている。また、西壁から２本、北壁から１本住居跡中央に延びる間仕切り溝が検出された。主柱穴では４本と推定されるが、Ｐ－３～Ｐ－４の２本を確認したにとどまる。炉跡は検出されていない。覆土は上から暗褐色土、黒灰褐色土が堆積し、床面上に薄く灰茶褐色土が堆積している。西壁南コーナーよりで第23号土坑と切り合っているが新旧はつかめなかった。

第24号竪穴住居跡遺物

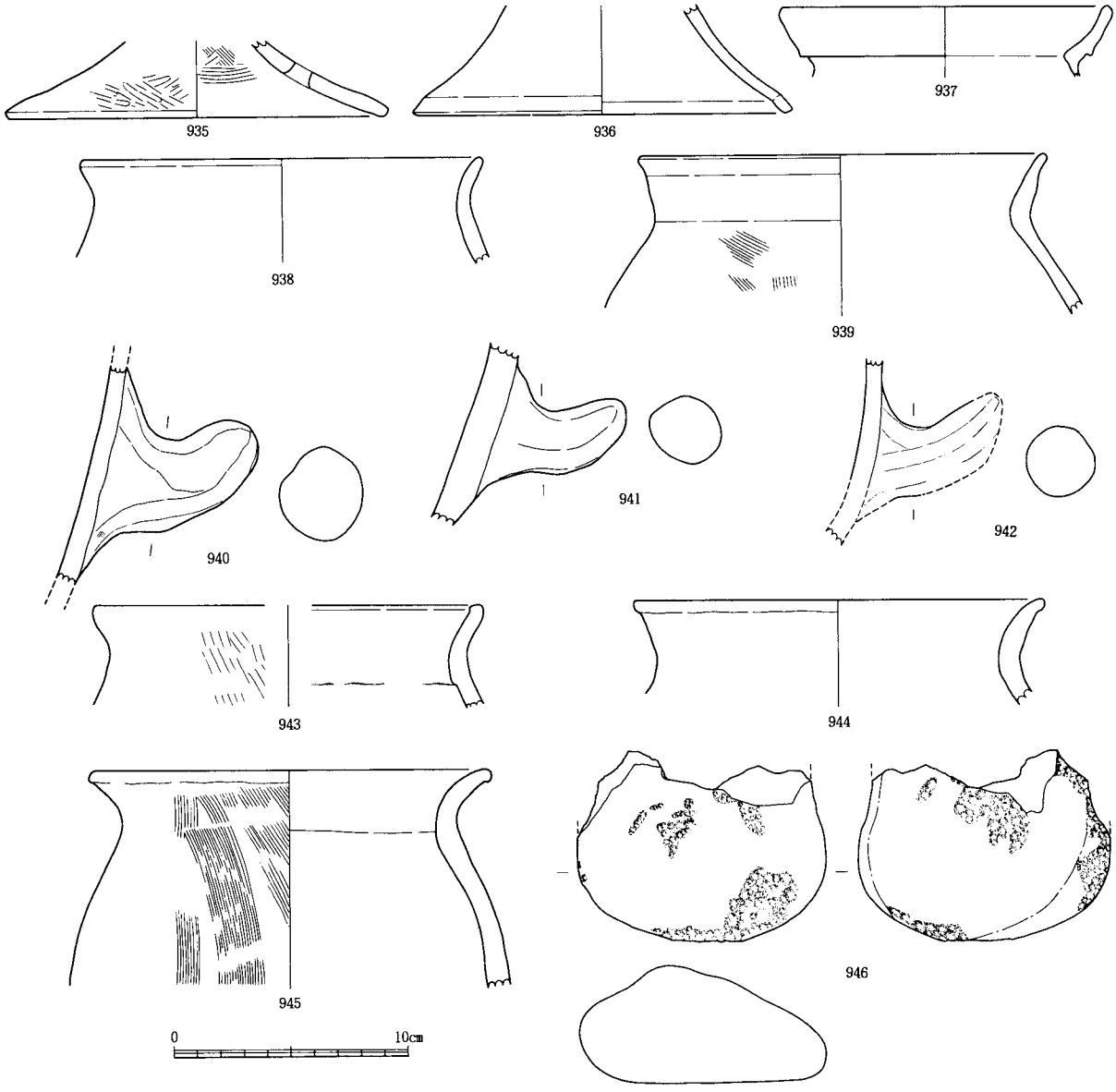
番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
935	覆土	高　杯	B:16.0	脚部外ナデ、脚部内ハケ・ナデ		419
936	〃	〃	B:15.8			424
937	〃	壺	A:13.7			423
938	〃	甕	A:17.0		外面赤化	89
939	焼土	〃	A:17.2	口縁部外ナデ、胴部外ハケ		91
940	覆土	甑		胴部外ハケ	把手のみ	422
941	〃	〃			〃	90
942	〃	〃			〃	416
943	周堤外側の周溝	甕	A（16.5）	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ	口縁端部に面あり 内側やや肥厚	102
944	〃	〃	A:16.7			421
945	〃	〃	A:17.3	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 胴部内ナデ（一部ハケ）		88
946	覆土	凹　石	長（8.2）、幅10.7 厚5.1	表面に磨痕及び凹み	中粒砂岩 重量（443）g、一部欠損	石44

第26号竪穴住居跡遺物

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
947	床面	高　杯		外面ハケ・ケズリ 内面ハケ→ナデ		418

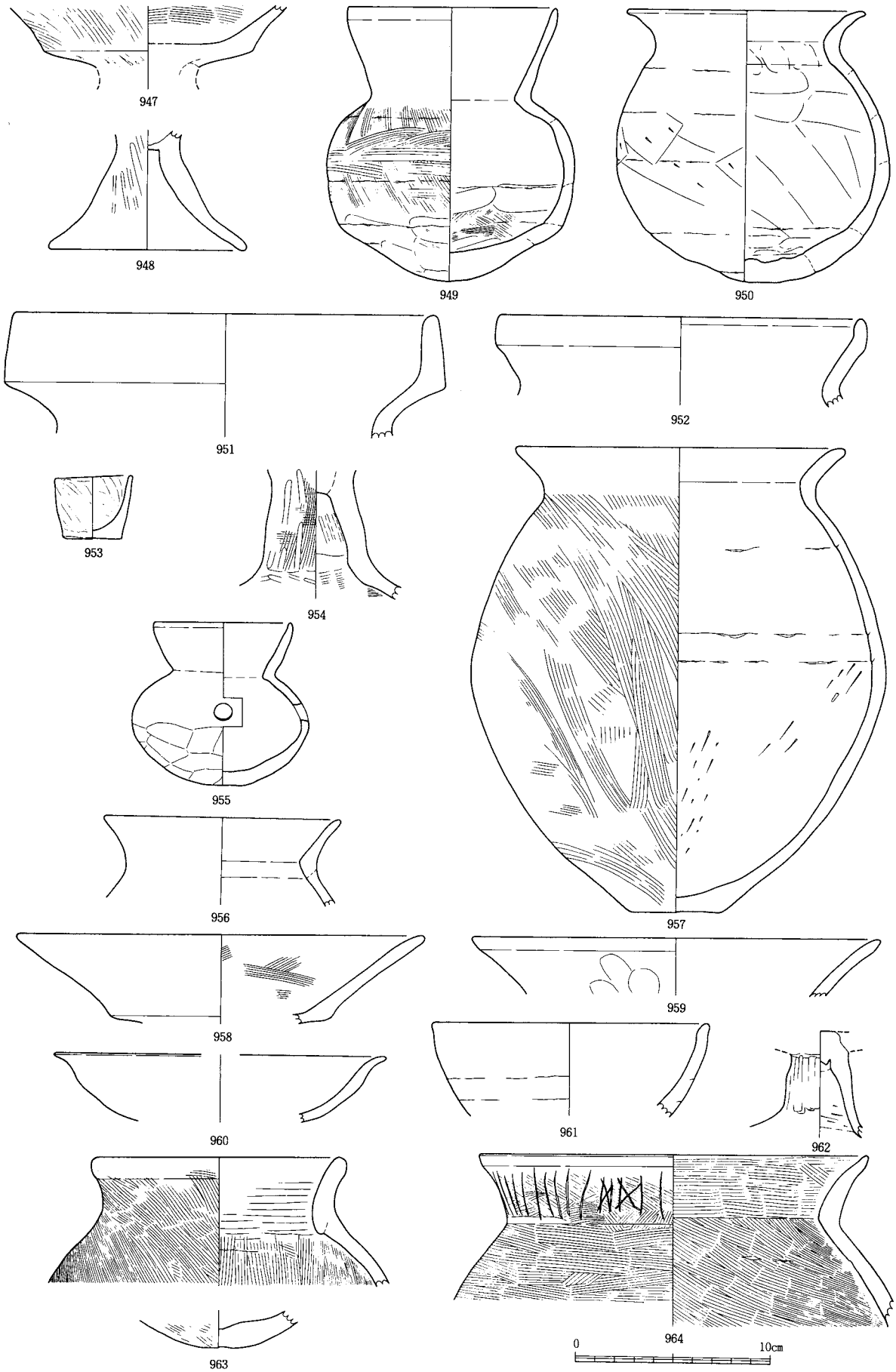


第179図　第24・26号竪穴住居跡（1/80）

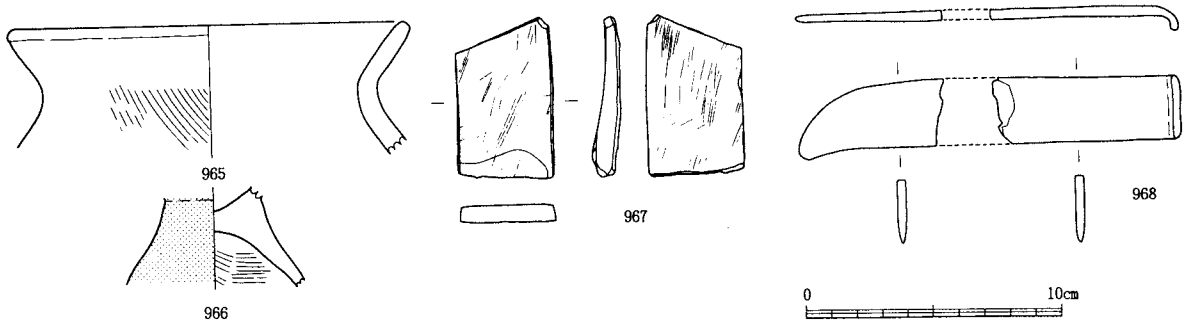


第180図　第24号竪穴住居跡遺物（１／３）

948	〃	〃	B:10			93
949	床面	壺	A:10.8、M:13 H:14.4	口縁部外ナデ、胴部外ハケ・ナデ 胴部内ナデ、底部内ハケ		104
950	〃	甕	A:12、M:14 H:14.3	口縁部外ナデ、胴部外ケズリ ・ナデ		170
951	壁周溝	壺	A:21.8	内面ナデ	花崗岩の粗い砂粒	95
952	〃	壺　？	A:18.5		〃	96
953	覆土	手づくね土器	A:4、H:3.2 B:3.1	内外面ナデ		417
954	〃	高　杯		脚部外ヨコハケ→タテハケ→ミガキ 脚裾部内ハケ	脚部巻き上げ成形	100
955	〃	甕	A:7、M:9.1 H:8.5	内外面ナデ	孔数１ 底部外面オサエ痕	166
956	〃	甕	A:12.2			101
957	〃	〃	A:16.8、H:24.4 B:4.5、M:21.4	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ		103
958	〃	高　杯	A:21	外面ナデ、内面ハケ		97
959	〃	〃	A:20.9	内外面ハケ		163
960	〃	〃	A（17.1）			425



第181図　第26号竪穴住居跡遺物(1)（１／３）



第182図　第26号竪穴住居跡遺物(2)（１／３）

961	覆土	高　　杯	A:14	内外面ナデ	外面に粘土紐痕	98
962	〃	〃		外面ミガキ、内面一部ミガキ		38
963	〃	壺	A:12.5	外面ハケ、口縁部内面ナデ 胴部内ハケ、底部内ナデ	口縁端部が肥厚しており、その外面のみナデ	11
964	〃	〃	A:19.8	内外面ハケ （口縁端部のみヨコナデ）	口縁部外面に沈線による文様あり	105
965	〃	甕	A:15.3	口縁部外ナデ、胴部ハケ		92
966	住居内土坑	（脚部）		内面ハケ	外面赤彩	441
967	覆土	砥　　石	長6.4、幅3.9 厚1.0	表裏面及び２側面が研磨作業面	泥岩 重量（31.0）g、一部欠損	石39
968	覆土下層	鉄　　鎌	幅2.6、厚0.4		曲刃鎌	

第25号竪穴住居跡（第183図、図版69）

遺構　Ｃ－８・９区に位置する。壁溝と炉跡のみの確認で掘り込みは確認できなかった。形態は隅丸形で、規模は538cm×460cmである。壁溝は幅90cm、深さ20cmを測り主柱穴はこの壁溝内側コーナーに位置する。Ｐ－１とＰ－２の間、Ｐ－３とＰ－４の間にはこれらよりやや浅い柱穴がそれぞれ一つずつ配されている。炉跡は住居跡中央やや北西よりに焼土が確認されている。

第27号竪穴住居跡（第184図）

遺構　Ｃ－６区に位置する。南東壁の一部を確認したにとどまる。形態は隅丸方形と推定され、規模は188cm以上×（400）cmである。残存壁高は５cmで、壁溝、炉跡は確認されていない。主柱穴は４本と推定されるが、Ｐ－１～Ｐ－２を確認したにとどまる。覆土は暗茶灰色土が主体で床面上に薄く茶灰色土が堆積している。

第27号竪穴住居跡遺物

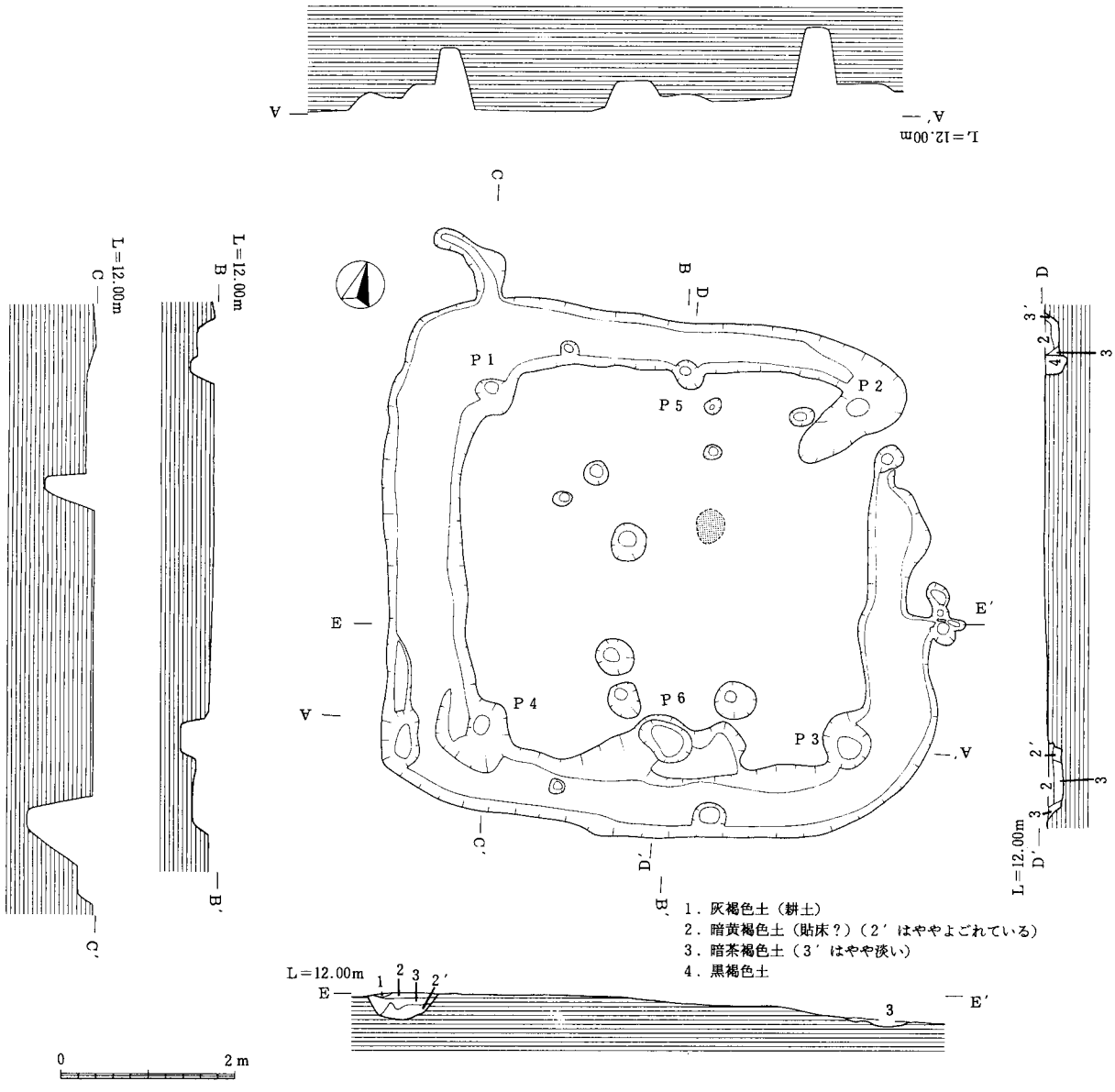
番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
969	覆土	甕	A:18.6	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ	タタキ風の粗いハケ 近江系甕	106

第28号竪穴住居跡（第186図）

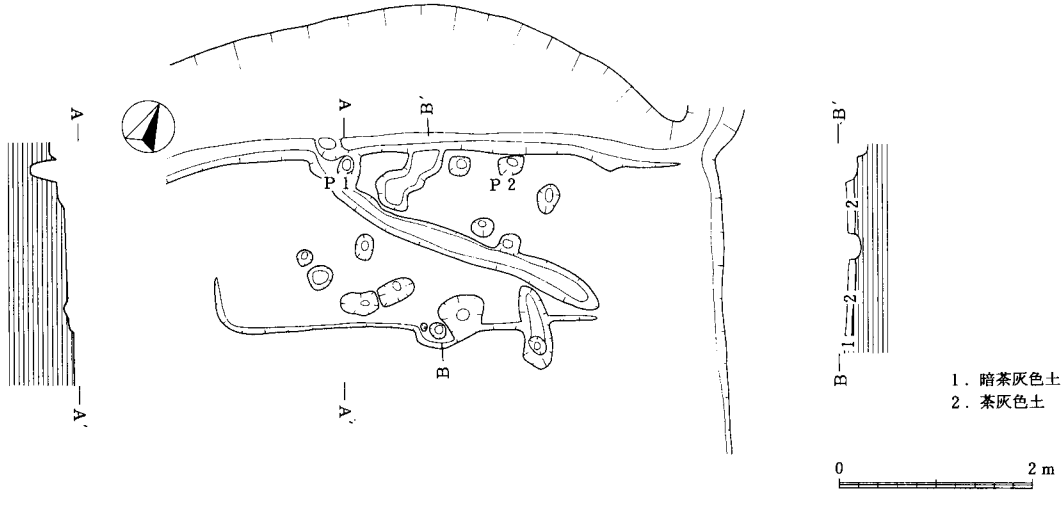
遺構　西南地区に位置する。調査区壁にかかって検出され北コーナー部を確認したにとどまる。形態は隅丸方形と推定している。規模は370cm以上×460cm以上である。残存壁高は18cmを測り、壁溝は北コーナー部分一部が確認できなかった。主柱穴、炉跡は確認していない。

第28号竪穴住居跡遺物

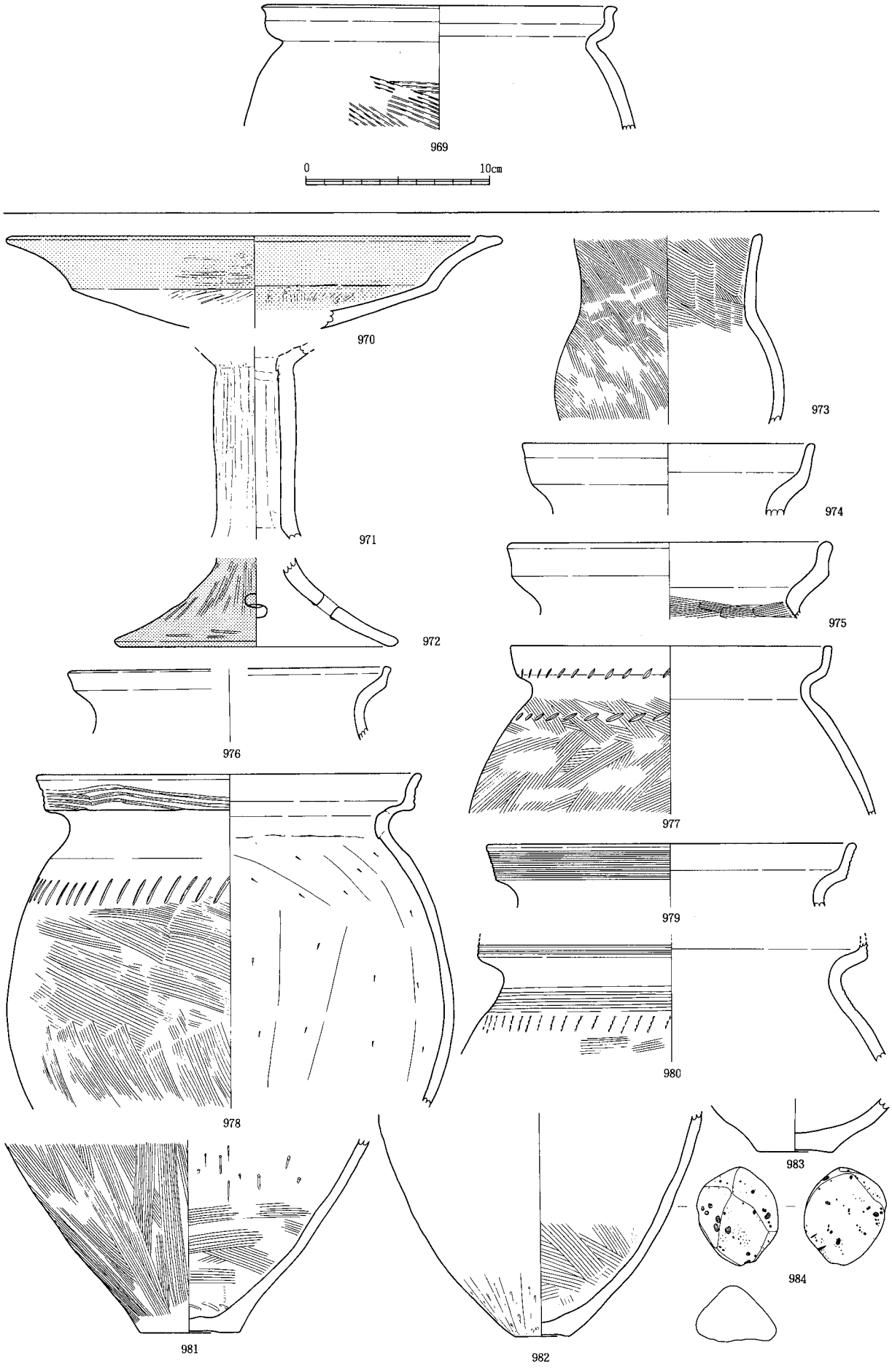
番号	出土地点	器　種	法　　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
970	覆土	高　　杯	A:26.5	杯部内外ミガキ	内外面赤彩	262
971	〃	〃		脚部外ミガキ、脚部内ナデ		264



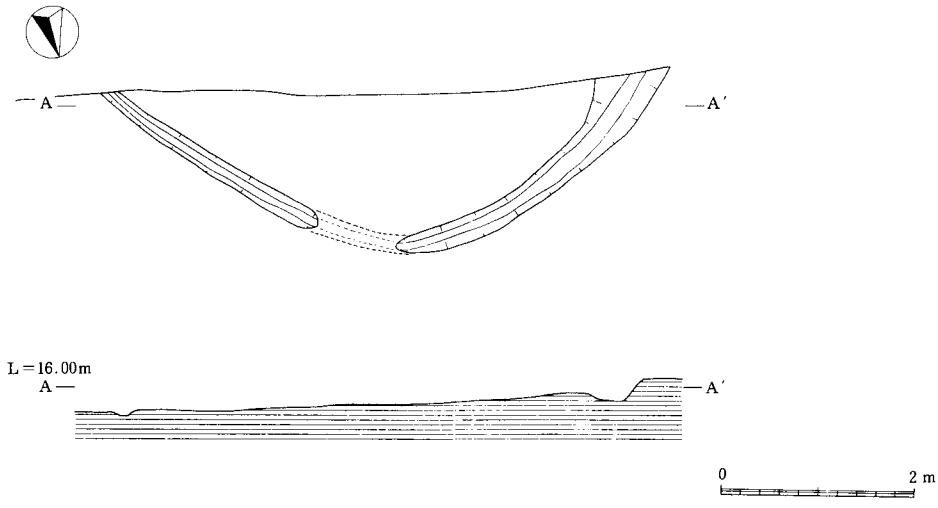
第183図　第25号竪穴住居跡（１／80）



第184図　第27号竪穴住居跡（１／80）



第185図　第27・28号竪穴住居跡遺物（１／３）



第186図　第28号竪穴住居跡（１／80）

972	覆土	高　　杯	B:14.7	脚部外ミガキ、脚部内ナデ	外面赤彩	113
973	〃	壺	M:12.3	口縁部内外ハケ、胴部外ハケ 胴部内ナデ		119
974	〃	甕　？	A:15.6	口縁部内外ナデ		99
975	〃	甕	A:17	口縁部内外ナデ		110
976	〃	〃	A:17			115
977	〃	〃	A:17.2	口縁部ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ	口縁部下端及び肩部外面に刺突	111
978	〃	〃	A:20.6 M:24.2	胴部外ハケ、口縁部内ナデ 胴部内ケズリ	口縁部外面に擬凹線 肩部外面に刺突	108
979	〃	〃	A:19.7	内外面ナデ	外面にスス付着 口縁部外面に擬凹線	410
980	〃	〃		口縁部内ナデ	口縁部・頸部に擬凹線 肩部に貝殻による刺突	109
981	〃	〃	B:5.4	内外面ハケ	底部外面にもハケ 内面にスス状付着物	118
982	〃	〃	B:3.0	肩部外ナデ・ケズリ、胴部内ハケ	外面にスス付着	124
983	〃	（底部）	B:4.0	内外面ナデ	壺？	117
984	〃	軽　　石	長5.5、幅4.3		重量8.8ｇ、完形	石７

２　土坑

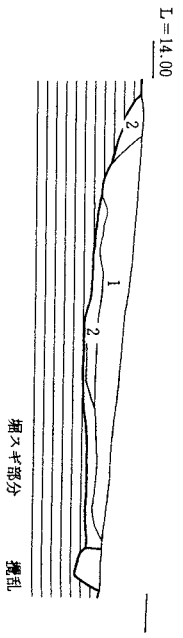
土坑については土坑ナンバーの不明となったものがいくつかあり、遺物を出土しながら位置不明のものがある。

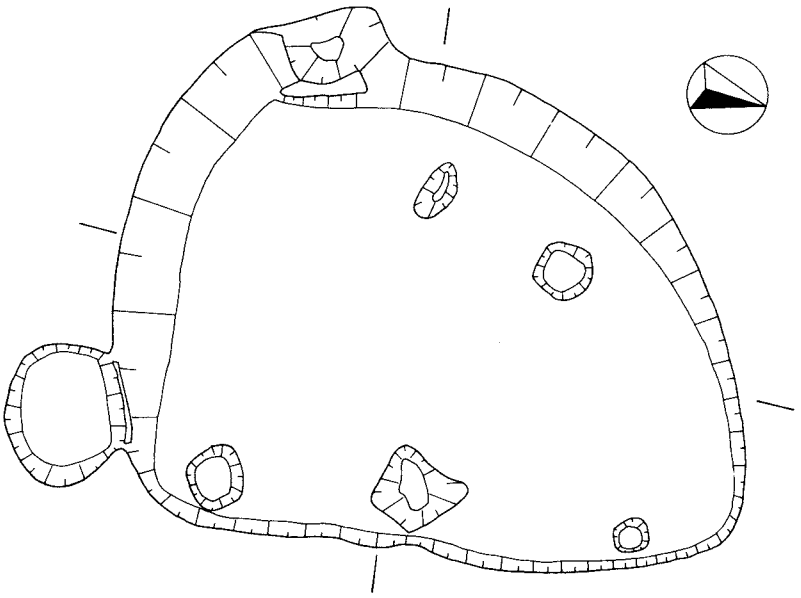
第２号土坑（第187図）

Ｄ－12、13区に位置する。約350cm×約370cmの半円形を呈する。深さは一番残りの良いところで約30cmを測る。本来は浅い皿状を呈していたものと思われる。覆土は暗黒褐色土を基本とし、底面付近に暗茶褐色土や淡褐色土がみられる。遺物の出土量は少ない。

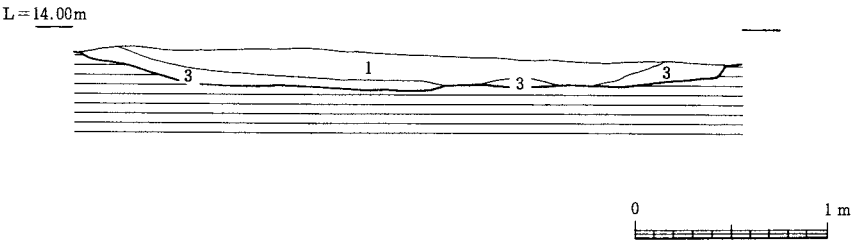
第４号土坑（第188図）

Ｃ－12区に位置する。約170cm×約110cmの不整形楕円形を呈する。柱穴と切り合っており、柱穴より新しい。深さは約15cmで、横断面形は浅い皿状を呈する。覆土は暗灰色土であり、古墳時代の甕の胴下半部が出土している。

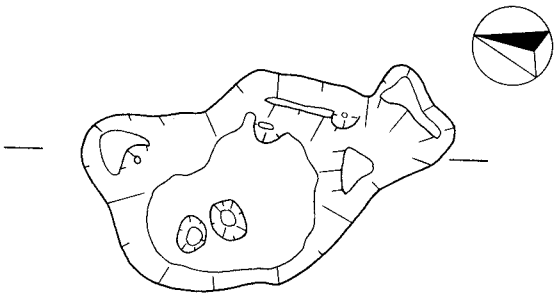




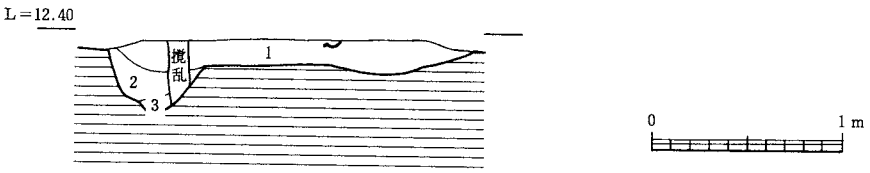
1．暗黒褐色土
2．暗茶褐色土
3．淡褐色土



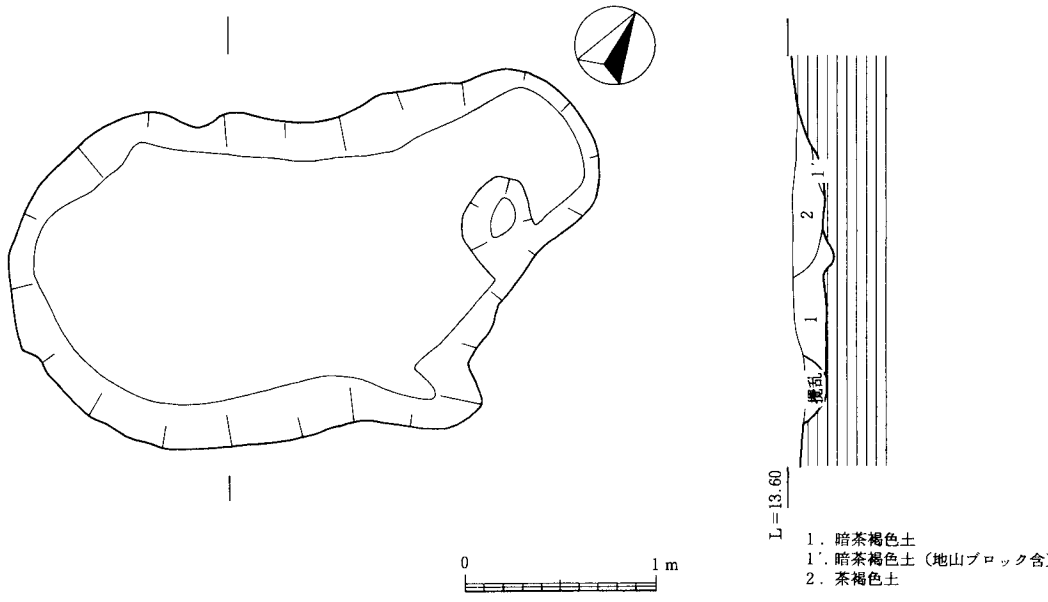
第187図　第２号土坑（１／40）



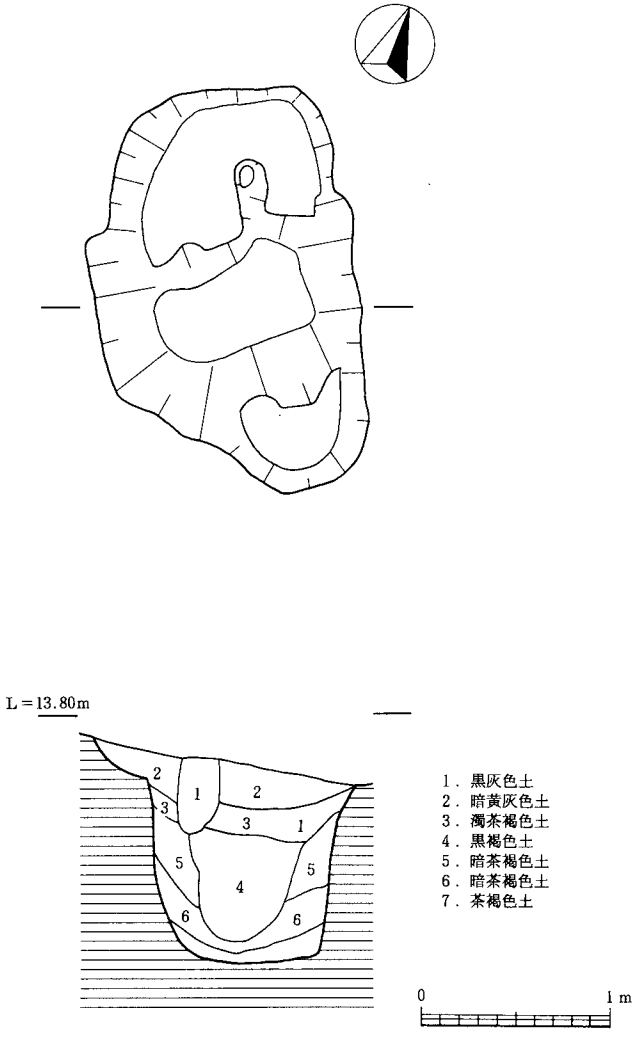
1．暗灰色土
2．暗茶灰色土
3．暗茶灰色土（地山ブロック含）



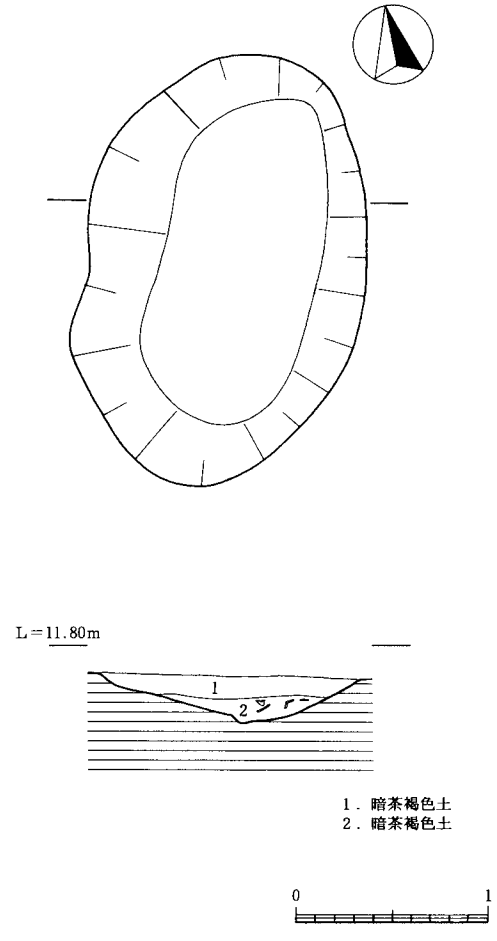
第188図　第４号土坑（１／40）



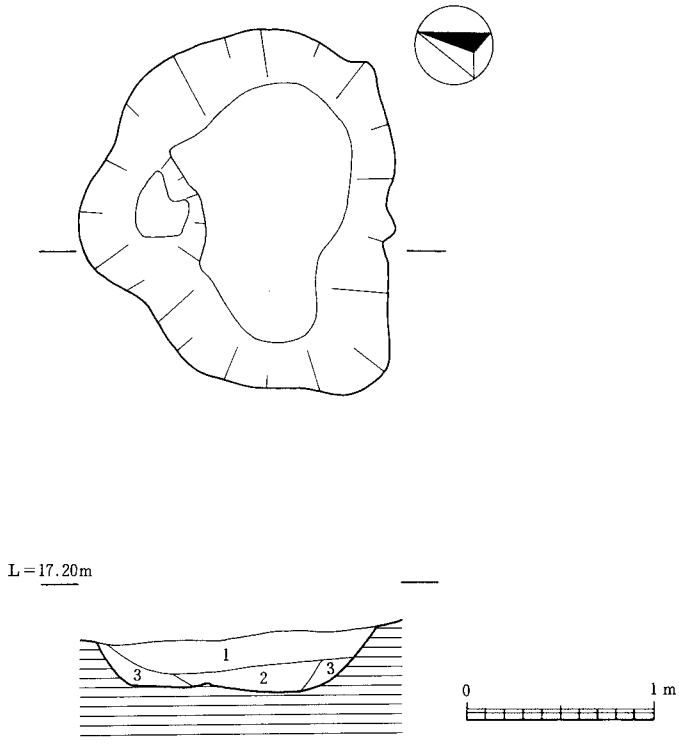
第189図　第10号土坑（１／40）



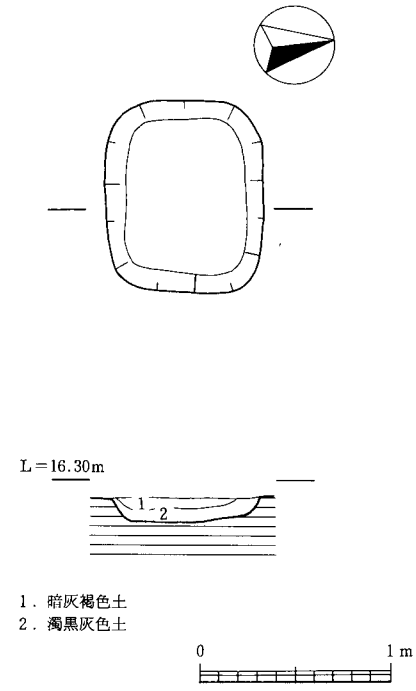
第190図　15号土坑（１／40）



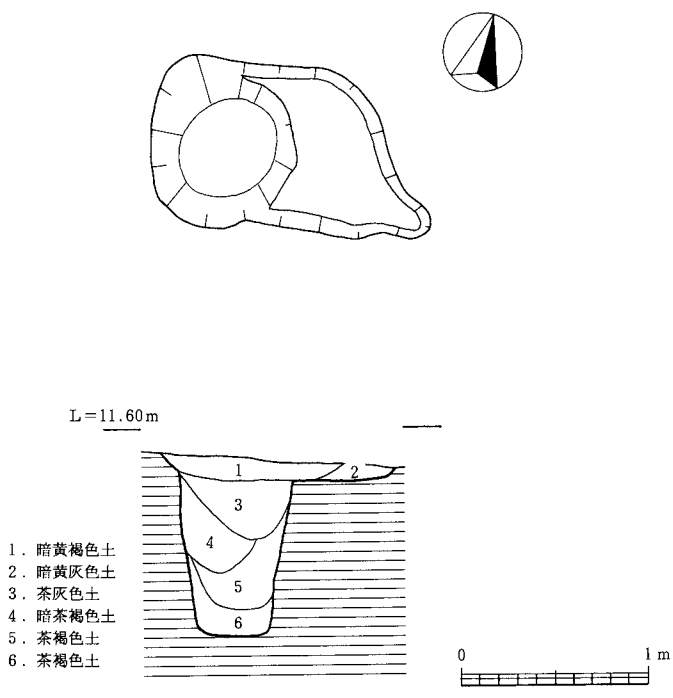
第191図　第19号土坑（１／40）



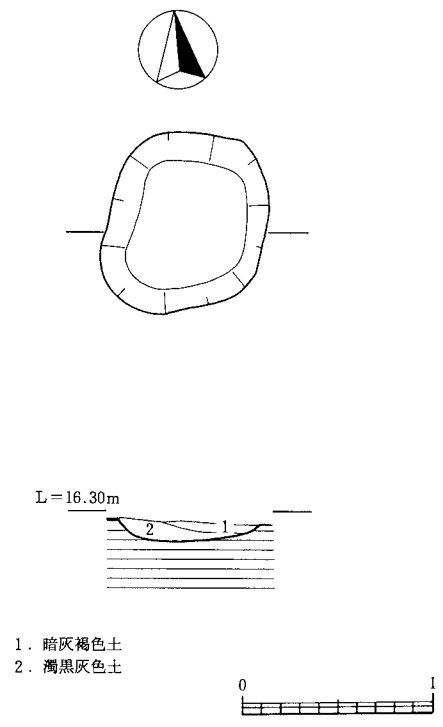
第192図　第22号土坑（１／40）



第193図　第28号土坑（１／40）



第194図　第25号土坑（１／40）



第195図　第29号土坑（１／40）

第10号土坑（第189図）

Ｄ－12区に位置する。約315cm×約165cmの不整形楕円形を呈する。横断面形は浅い皿状を呈し深さは約15cmを測る。覆土は上から茶褐色土、暗茶褐色土である。遺物は図示できるものがない。

第15号土坑（第190図）

Ｄ－11区に位置する。約220cm×約140cmの不整長方形を呈する深さ約30cmの土坑と、約120cm×約80cmの長方形を呈する深さ約120cmの土坑が切り合っているものと考えられる。不整長方形の土坑は黒灰色土を覆土とし、横断面形は皿状となっている。長方形のものは茶褐色形の土が周りに堆積したのち、中央に黒褐色土が堆積している。これを覆うようにして一番上には汚れた茶褐色土が見られる。どちらの物かはわからないが古墳時代の土器が出土している。

第19号土坑（第191図）

Ｃ－９区に位置する。約220cm×約150cmの長楕円形を呈する。深さは25cmを測り、緩くくぼんだ様な横断面形となる。覆土は上から暗茶褐色土、暗黒褐色土で、下層から土器片が出土している。

第22号土坑（第192図）

Ｈ－12区に位置する。約190cm×約170cmの不整楕円形を呈する。深さは約35cmを測り横断面形は鍋底状となる。覆土は上部に暗茶褐色土、下部に黄色系の土が堆積している。遺物は甕の口縁部が下層より、別個体の胴部が上層より出土している。

第25号土坑（第194図）

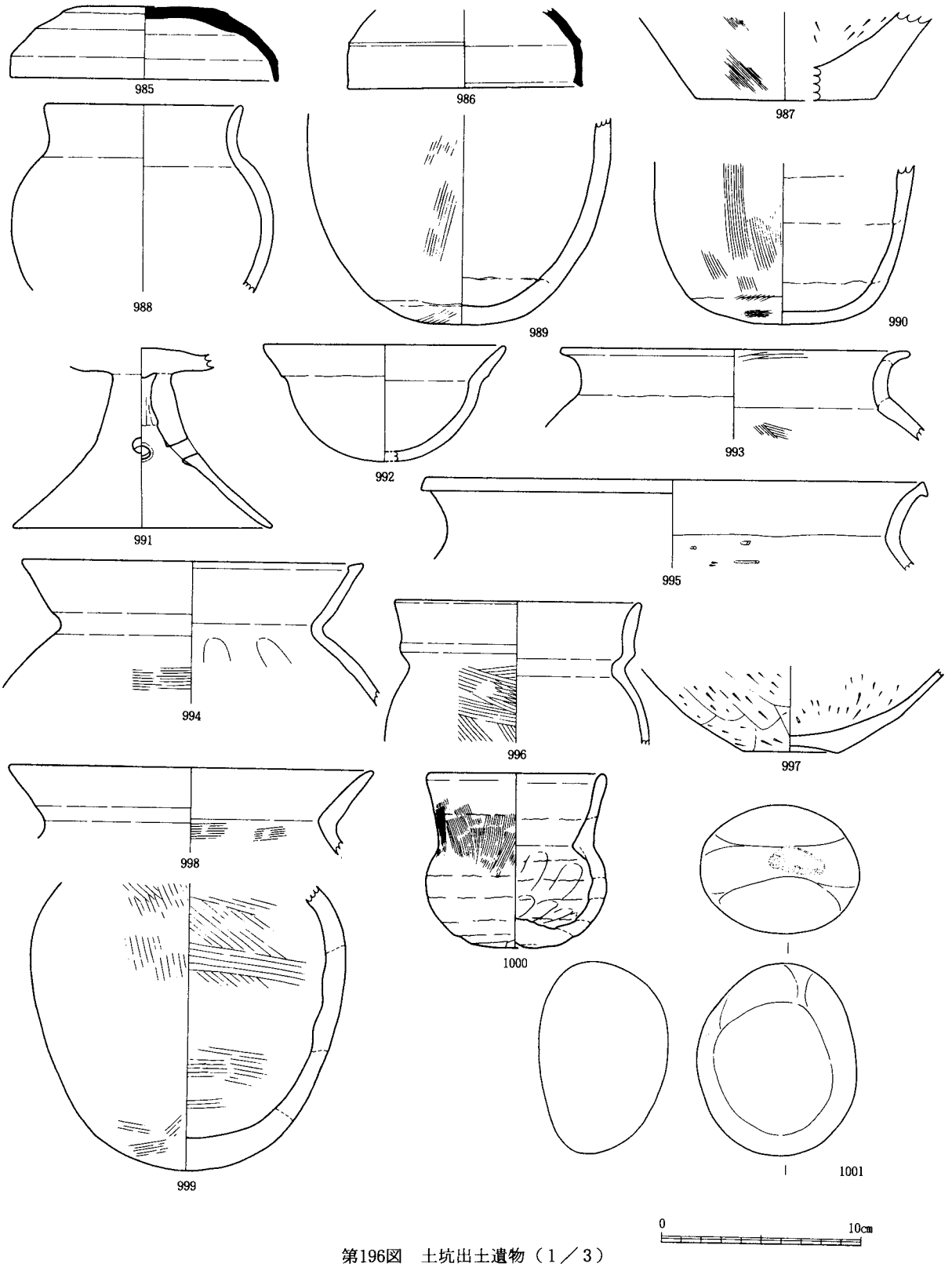
Ｂ－９区に位置する。約160cm×約90cmの不整長方形を呈する。土坑西寄りには約80cm×約80cm、深さ約90cmの柱穴状の部分があり、この部分を除くと深さ約10cmの浅い皿状の横断面形となる。覆土は浅い皿状の部分に暗黄褐色土が堆積し、柱穴状部分にはこれ以下、暗黄灰色土、茶灰色土、暗茶褐色土、茶褐色土が堆積している。
両者は切り合い関係にあるのかも知れない。遺物は図示できるものがない。

第28号土坑（第193図）

Ｌ－８区に位置する。約80cm×約100cmを方形を呈する。深さは約15cmを測り横断面形は浅い皿状となる。覆土

土坑出土資料

番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整等	その他	実測番号
985	１号土坑底面	須恵器 杯蓋	A:13.4、H:3.7 B:7.0	天井部外面ナデ その他ロクロナデ	焼き歪みを修正して実測	⑧
986	２号土坑	須恵器 杯蓋	A:11.9	内外面ロクロナデ		㉚
987	〃	甕	B:9.0	外面ナデ、内面ケズリ→ナデ		189
988	４号土坑	壺	A:9.8		短頸壺	107
989	〃	甕		胴部外ハケ、底部外ハケ 内面ナデ		218
990	〃	〃		胴部外ハケ、底部外ハケ 内面ナデ	胴部内面に巻き上げ痕	188
991	９号土坑	高杯	B:13.0			195
992	15号土坑	鉢	A:12.2	内面ナデ		212
993	〃	甕	A:17.3	内面ナデ（一部ハケ）		194
994	〃	〃	A:17.0	内外面ナデ	布留式形甕	193



第196図　土坑出土遺物（１／３）

995	19号土坑	甕	A:25.0	口縁部内ナデ、胴部内ケズリ	口縁端部面取り	192
996	〃	〃	A:12.3	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 内面ナデ		190
997	〃	〃	B:4.6	内外面ケズリ	外面にスス付着	191
998	22号土坑	〃	A:18.2	胴部内ハケ		214
999	22号土坑上層	〃	M:15.8	内外面ハケ	外面赤化	213

1000	23号土坑底面	壺	A:8.8、H:8.8 B:4.2、M:9.2	口縁部外ナデ・ハケ、胴部外ナデ、口縁部内ナデ	巻き上げ痕明瞭 底部外面凹みあり	165
1001	〃	磨　　石	長9.7、幅8.0 厚6.5	全面に磨痕 一端に敲打痕	安山岩 重量692ｇ、完形	石27

は上から暗灰褐色土、濁黒灰色土が堆積している。遺物は図示できるものがない。

第29号土坑（第195図）

Ｌ－８区に位置する。第28号土坑とは約４ｍ離れてあるが、形態、規模、覆土とも同様である。やはり遺物は図示できるものがない。

３　掘立柱建物

掘立柱建物は12棟を確認した。分布は北東地区と西地区に偏っており、ＦラインからＨラインの間と、Ｅライン以東に集中する。北西地区や西地区で建てきれなかった物を含めても掘立柱建物は、二つのグループを形成するものと考えられ、なんらかの規制が働いているものと考えている。

第１号掘立柱建物（第197図、図版71）

Ｃ－12、Ｄ－13区に位置する。柱間は一間×１間で桁長372cm、梁長350cmを測る。堀方は略円形であるが、いくつかの柱穴が切り合っており建て替えが想定される。面積は13.02㎡である。

第２号掘立柱建物（第198図、図版71）

Ｃ－11、Ｄ－11区に位置する。柱間は一間×一間で桁長344cm、梁長326cmで第１号掘立柱建物よりやや小さい。堀方は略円形で東コーナーの柱穴がやや浅い。また、北、南コーナーの柱穴は２本並んでおり、内一方が浅いものとなっている。面積は11.21㎡である。

第３号掘立柱建物（第199図、図版71）

Ｇ－11区に位置する。柱間は一間×一間で桁長407cm、梁長334cmでやや長方形となる。堀方は楕円形で面積は13.59㎡を計る。

三棟はほぼ同一の方向を取る。

第４号掘立柱建物（第201図、図版72）

Ｂ－12区に位置する。総柱の建物で柱間は二間×二間である。桁長は190cm＋186cm、梁長は202cm＋151cmを測る。堀方は略円形で、二つの柱穴が並ぶ部分もあり建て替えが想定される。面積は13.27㎡である。

第５号掘立柱建物（第202図、図版72）

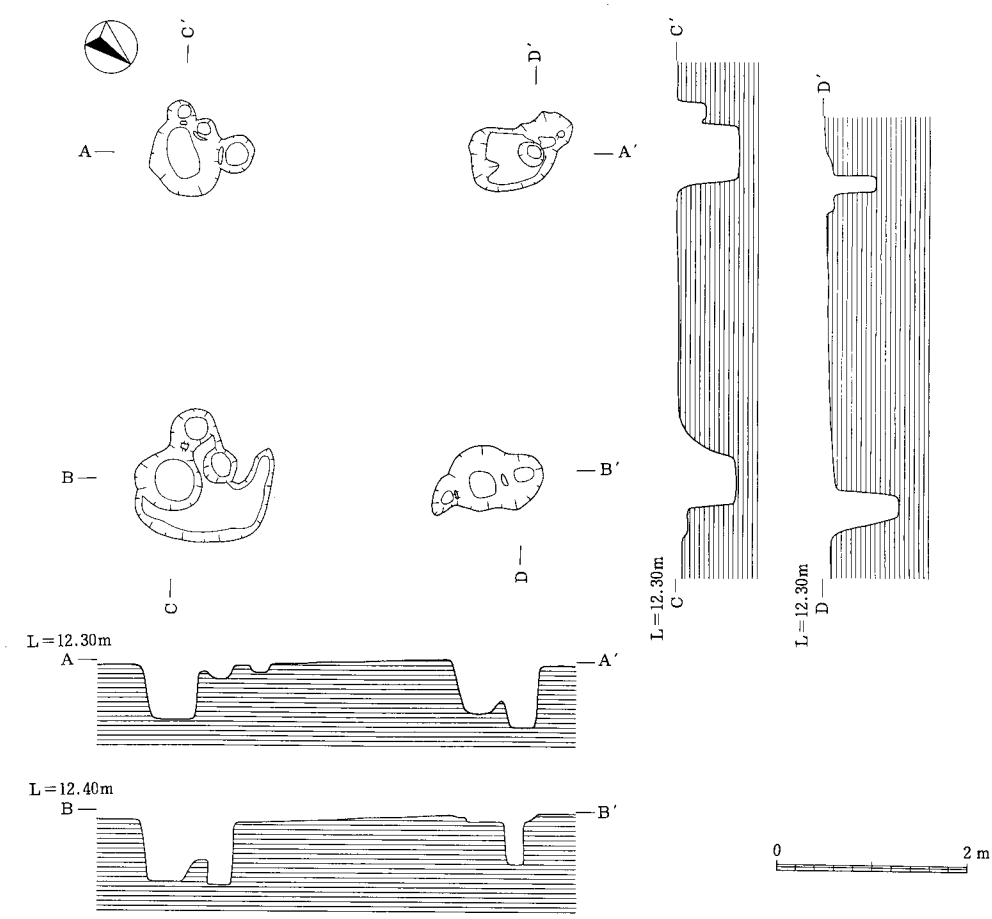
Ｂ－11区に位置する。総柱の建物で柱間は二間×二間で第４号掘立柱建物と同じであるが方向は異なる。桁長は202cm＋223cm、梁長は167cm＋177cmでやや長方形となる。堀方は略円形で、面積は14.62㎡と第４号掘立柱建物より大きい。

第６号掘立柱建物（第205図、図版72）

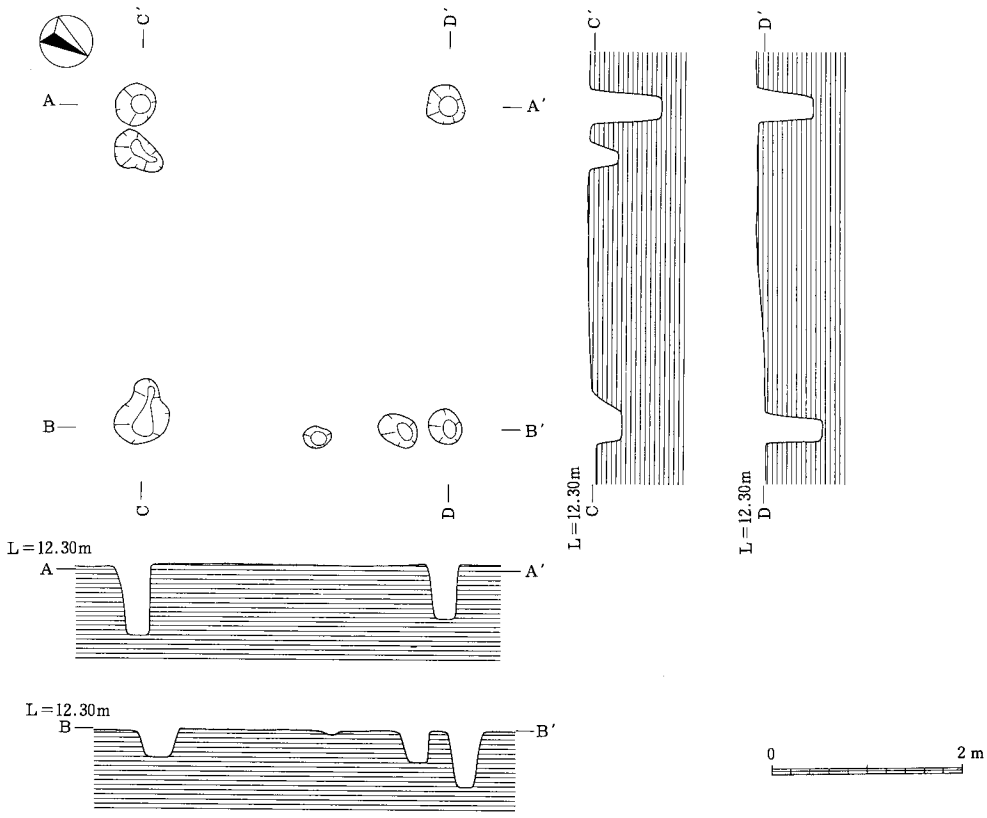
Ｂ－11区に位置する。柱間は四間×二間で桁長121cm＋170cm＋120cm、梁長225cm＋214cmである。堀方は略円形で、面積は25.77㎡である。桁行端と第二番目の柱間が短い。

第７号掘立柱建物（第203図、図版73）

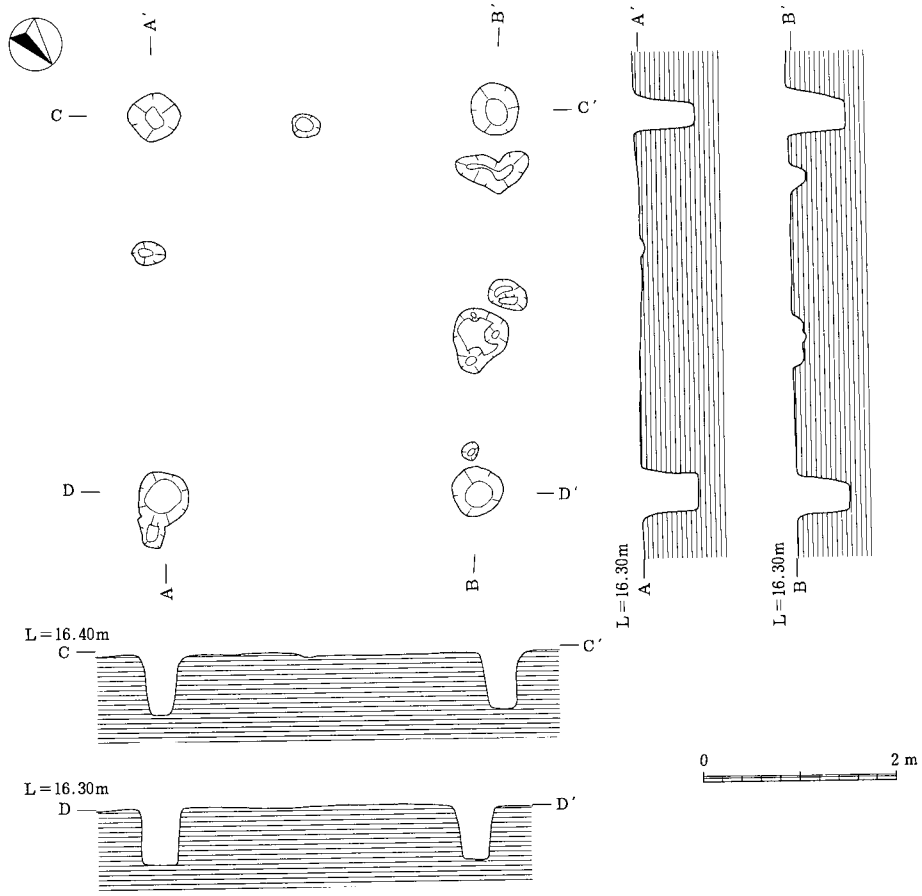
Ｂ－12、Ｇ－12区に位置する。柱間は三間×二間で桁長213cm＋214cm＋206cm、梁長217cm＋189cmである。堀方



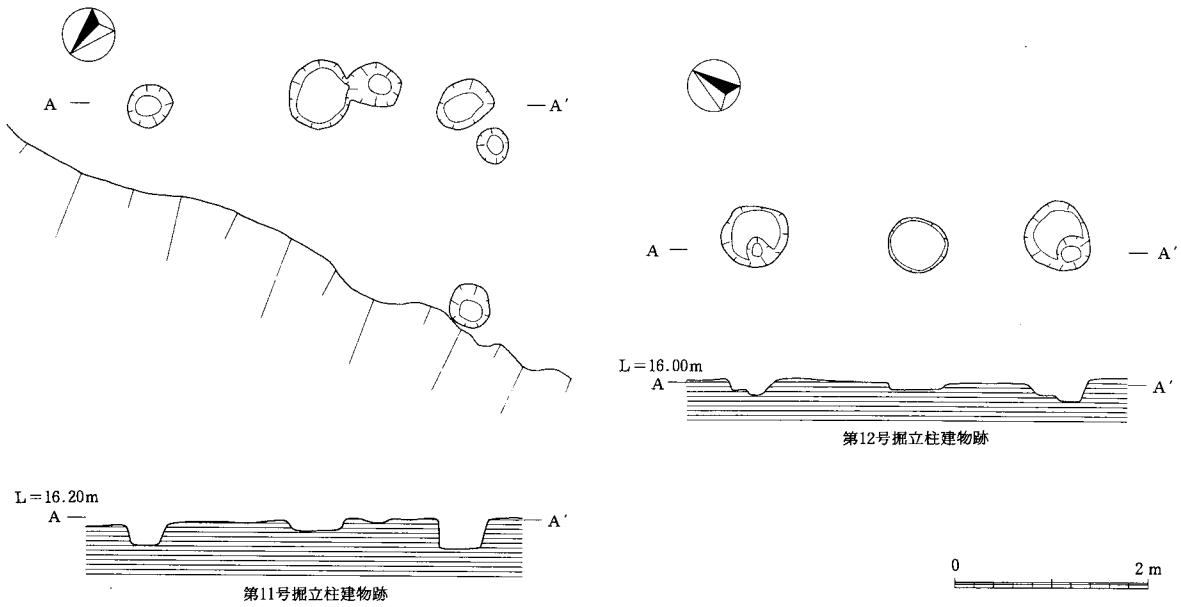
第197図　第１号掘立柱建物跡（1/80）



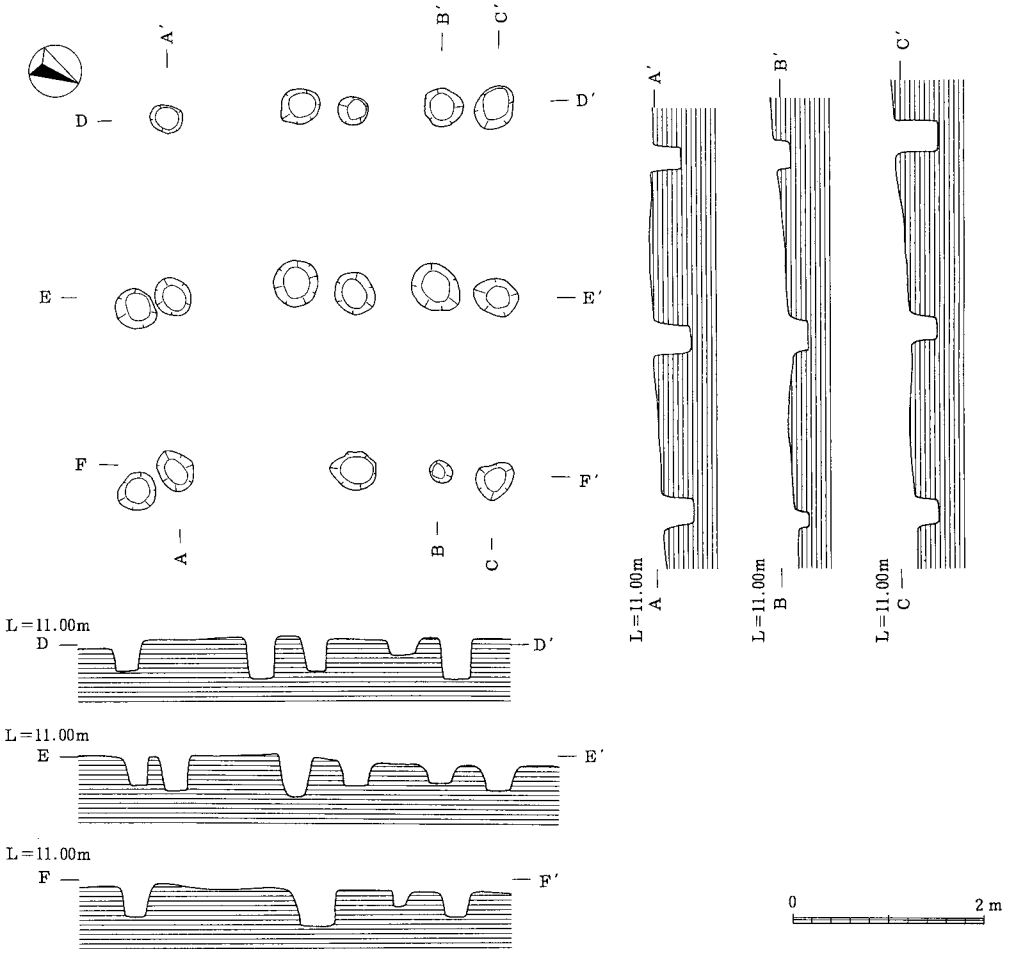
第198図　第２号掘立柱建物跡（1/80）



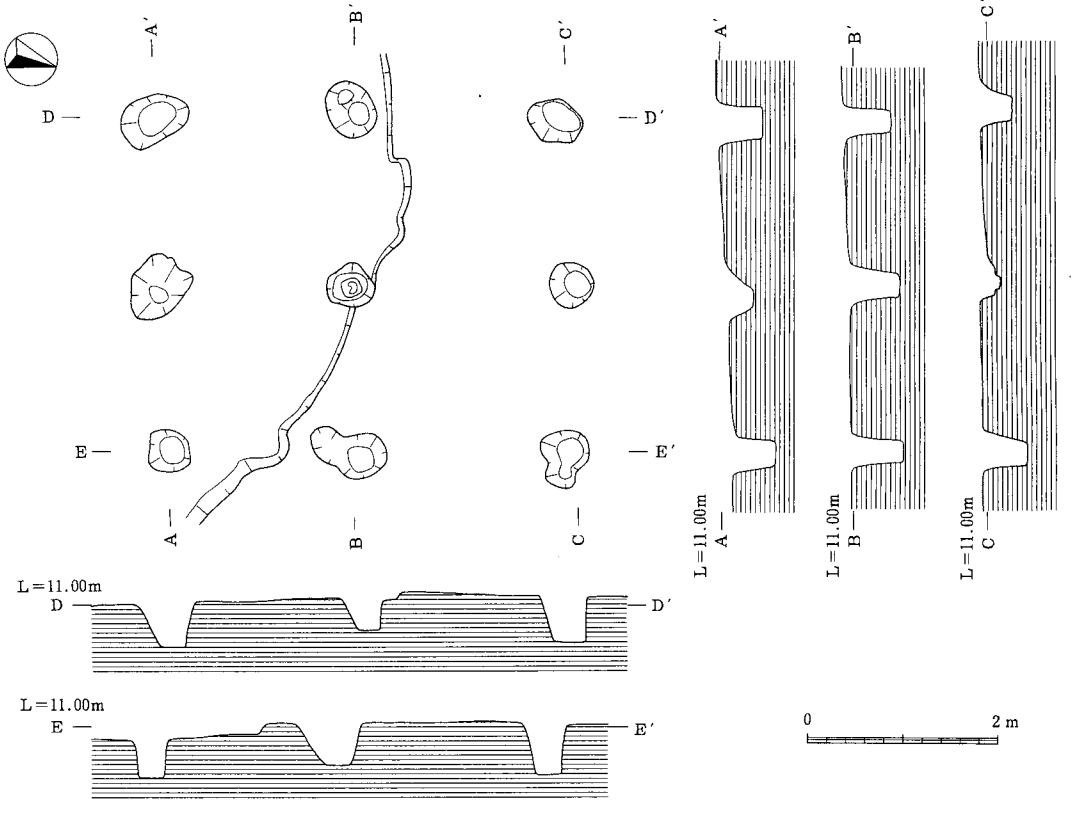
第199図　第３号掘立柱建物跡（1/80）



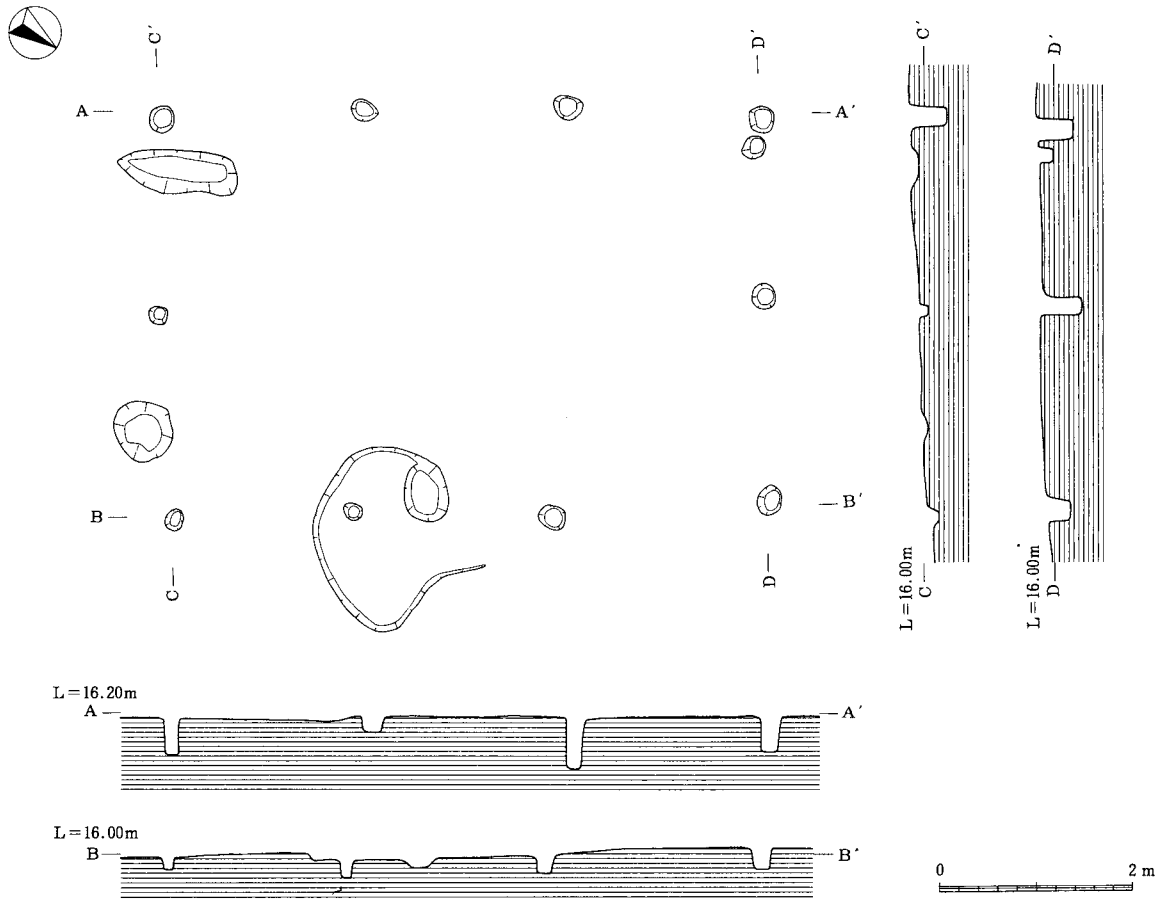
第200図　第11・12号掘立柱建物跡（1/80）



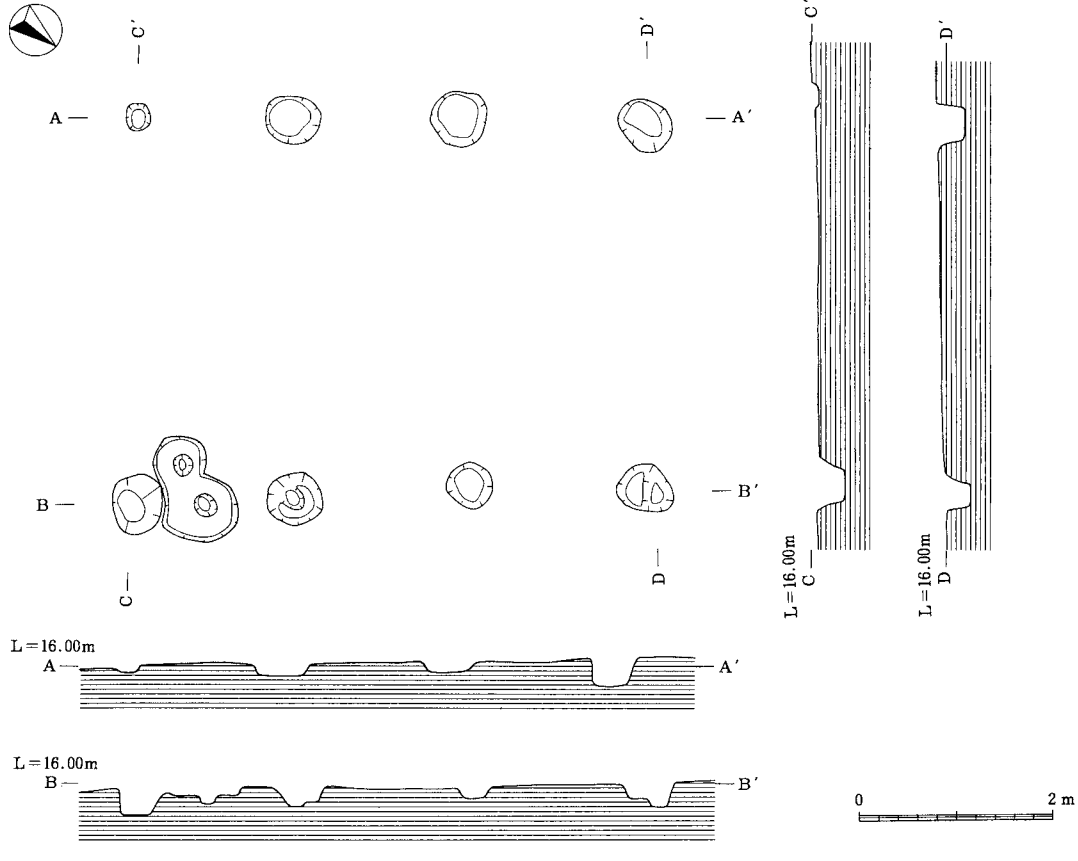
第201図　第４号掘立柱建物跡（1/80）



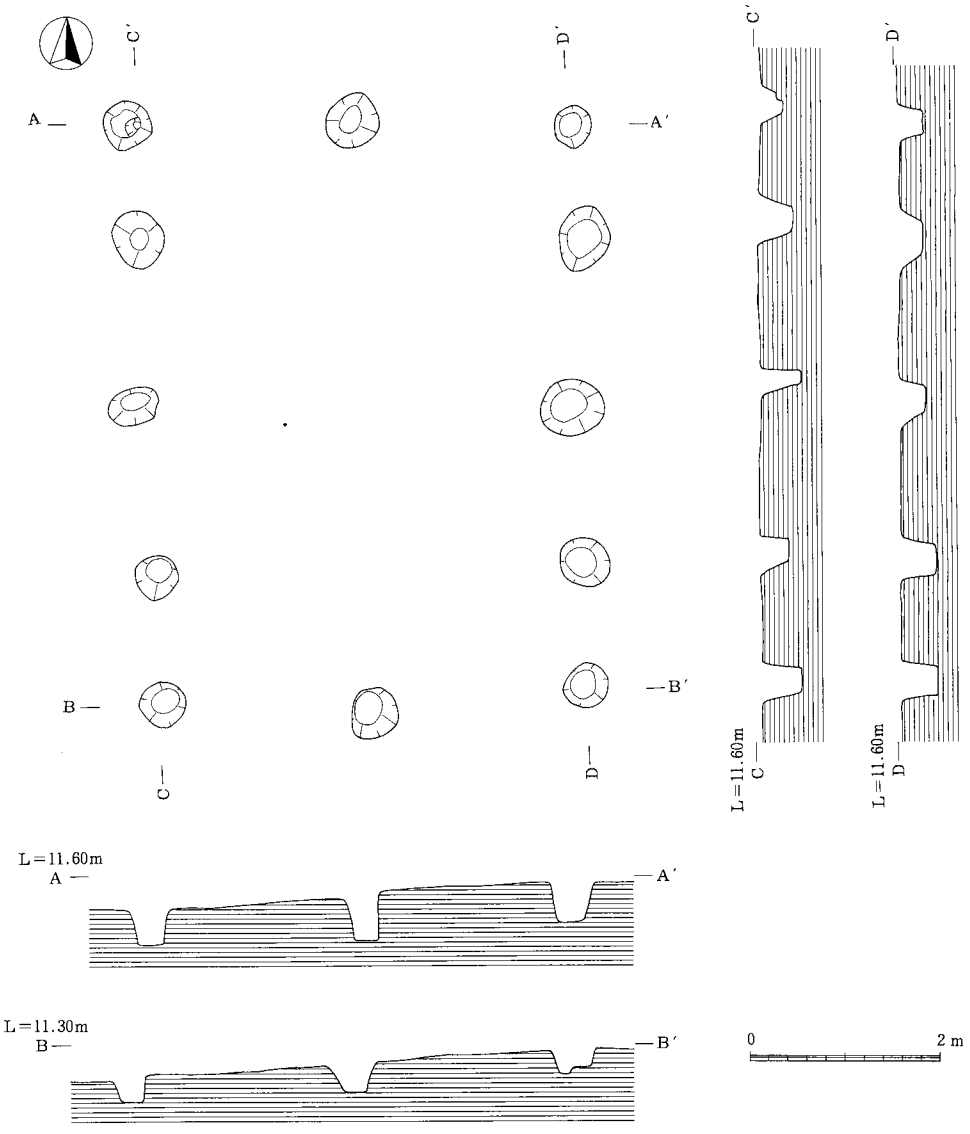
第202図　第５号掘立柱建物跡（1/80）



第203図　第７号掘立柱建物跡（1/80）



第204図　第８号掘立柱建物跡（1/80）



第205図　第６号掘立柱建物跡（1/80）

は略円形で、面積は25.70㎡である。

第８号掘立柱建物（第204図、図版73）

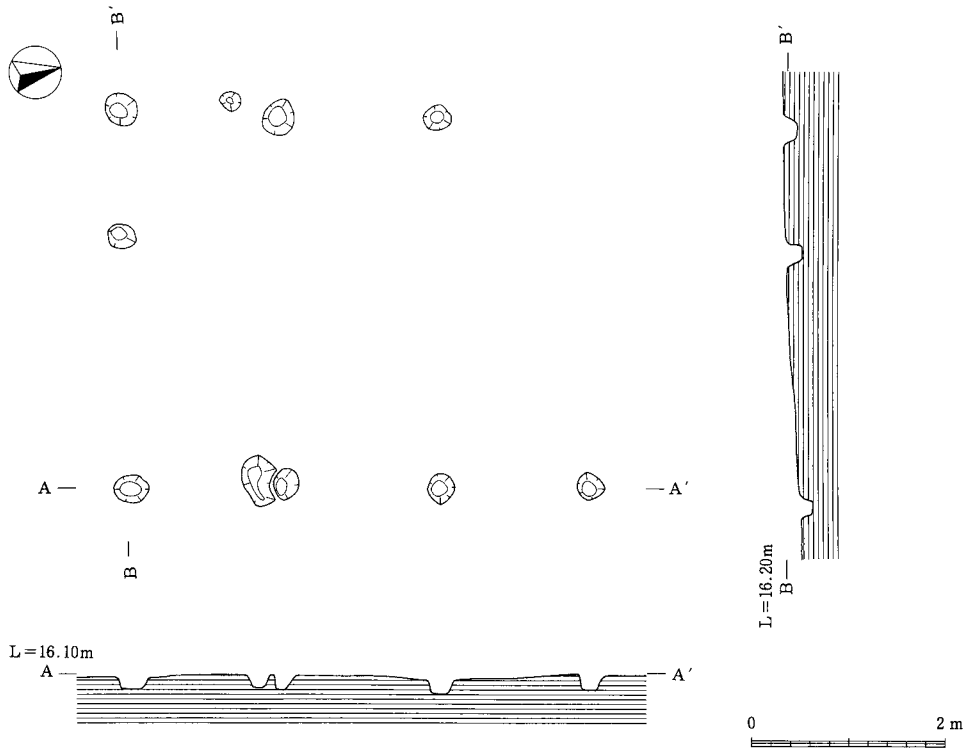
Ｆ－11区に位置する。柱間は三間×一間で桁長198cm＋182cm＋161cm、梁長413cmである。堀方は略円形で、径15cm程の柱痕が確認できた堀方もある。面積は22.34㎡で第７号掘立柱建物と方向を同じくする。

第９掘立柱建物（第206図、図版73）

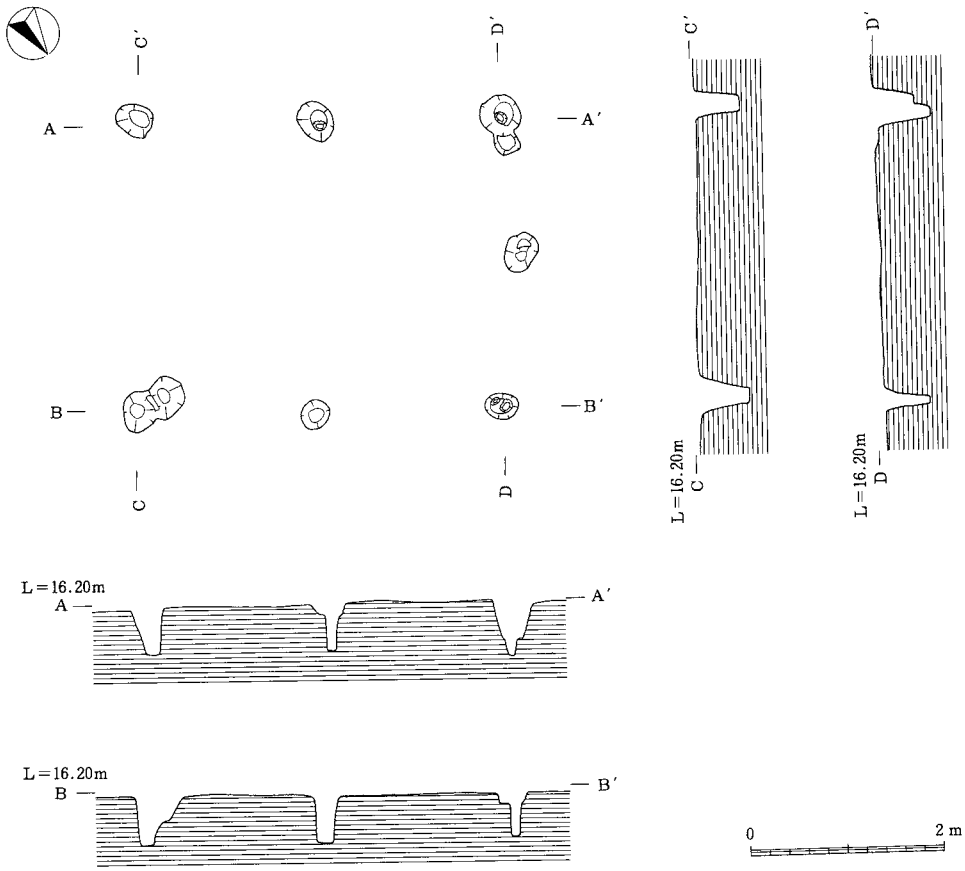
Ｆ－10・11、Ｇ－12区に位置する。北側は道路で削平されておりはっきりとした柱間はわからないが、三間×一間と推定している。桁長158cm＋167cm＋158cm、梁長402cmである。梁行きの間の柱穴もこの掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。堀方は略円形で、面積は19.42㎡である。

第10号掘立柱建物（第207図）

Ｇ－９・10区に位置する。柱間は二間×一間で梁行の柱穴はこの掘立柱建物を構成する柱穴ではないと考えている。桁長182cm＋192cm、梁長308cmである。堀方は略円形で、面積は11.46㎡である。



第206図　第９号掘立柱建物跡（1/80）



第207図　第10号掘立柱建物跡（1/80）

第11号掘立柱建物（第200図、図版73）

Ｇ－10・11区に位置する。大半は道路で削平されており南コーナー部分のみの確認である。柱間は一間以上×二間である。桁長218cm以上、梁長182cm＋154cmである。堀方は略円形である。

第12号掘立柱建物（第200図）

Ｆ－11区に位置する。北東側は削平されておりどの様な建物となるかわからない。柱間長は150cm＋168cmで、堀方は第８号堀立柱建物と同様である。

４　包含層等出土資料

ここでは包含層出土資料（1002～1148）と調査区外採集資料（1129～1148）について簡単に述べることにする。

まず、前者においては本遺跡で竪穴住居跡の構築が確認された時期、すなわち、弥生時代後期の法仏式併行期から７世紀にかけての時期の資料が中心をなしている。これらは免田一本松遺跡で営まれた集落跡に関する資料と言い換えることもできよう。このことはまた今回検出された掘立柱建物跡群の下限を考える際の一つの留意点といえる。その他では1111～1113など中世に降る遺物がみられるが、これらについては量的にもわずかであって性格は不明である。

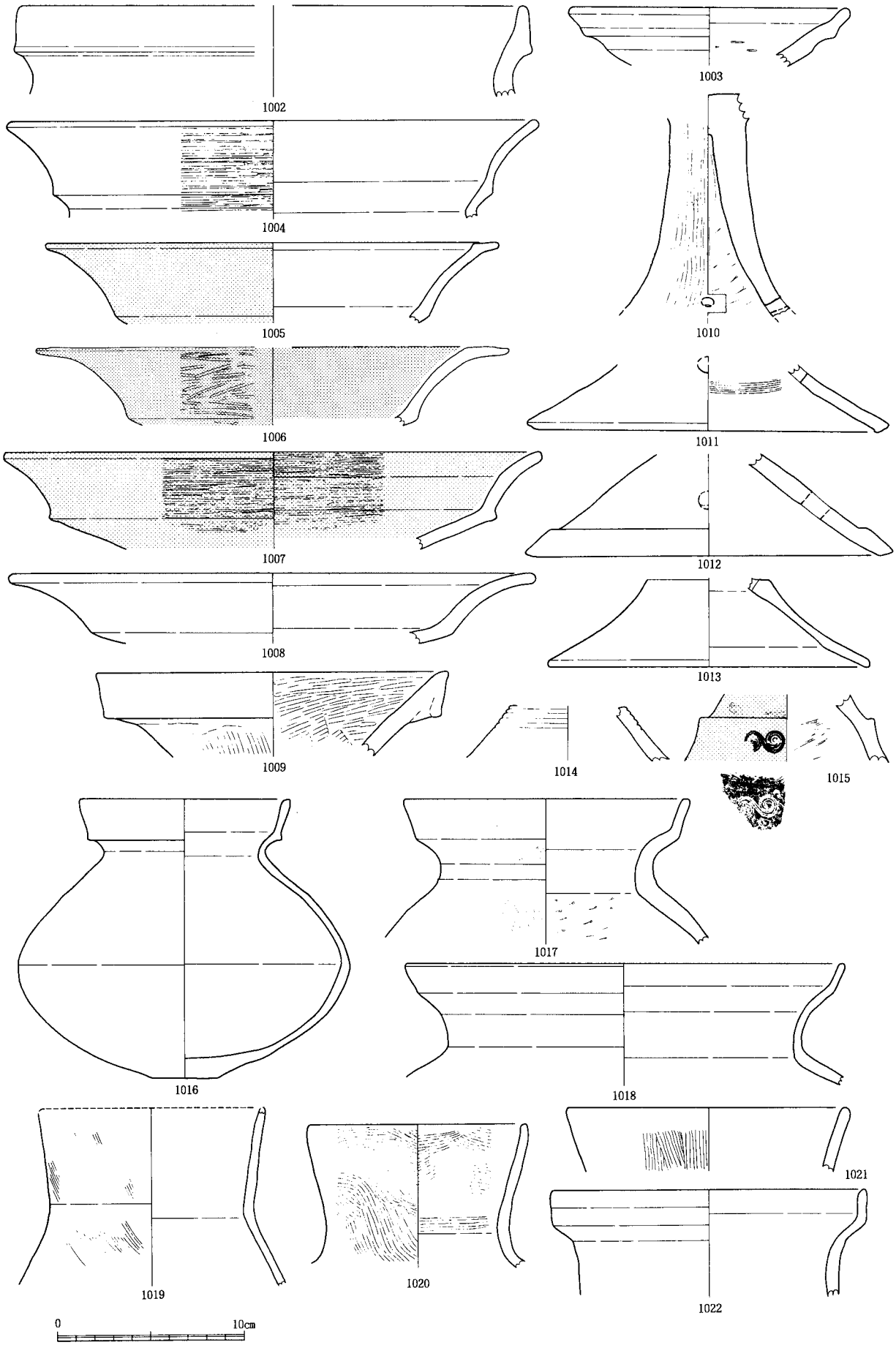
残る後者については、発掘調査に参加した津田耕吉氏が調査区周辺で採集した資料と事前の試掘の際に出土した資料とに大別することができる。調査区東側採集とした1129～1137は、町道森本・北川尻線の法面から採集されており、そこは大海川下流の低地を南に望む崖端にあたる場所である。津田氏が法面を観察した所見では、冬野遺跡で検出されたものと同様の大型土坑が数基程度確認されたという。免田一本松台地でも調査区域とは地点を異にして大型土坑群が営まれていることは、重要な指摘といえる。次に調査区西側出土とした1138～1143は、西地区の北西約100ｍにある尾角友一氏（冬野在住）所有の畑地より採集された遺物である。尾角氏の夫人が耕作中に偶然土器を発見したとの報に接し、津田氏が現地確認を実施し耕作土中より追加資料を得るところとなった。このように1129～1143は免田一本松台地における遺跡の広がりを物語る資料であり、帰宅途中などの時間を割いて遺跡周辺の踏査を積極的に行った津田氏の熱意に対してここに改めて敬意を表する次第である。続く1144～1148については、事前の分布調査の際に得られた遺物だが、1144～1145が出土した台地南側裾や1146～1148が出土した台地北側の冬野台地との間の谷部（いずれもバイパス路線内）について、調査期間中に再度重機や人力による試掘を実施したが、ともに遺物包含層及び遺構は確認されなかった。

以上述べた遺物の個々については末尾に付した観察表に譲ることとし、若干の補足をすることにしたい。なお、須恵器の胎土やそれから予想される生産地、また年代等については、本章のまとめに川畑誠氏による論稿が掲載されているのでそちらの方を参照頂ければよいかと思われる。

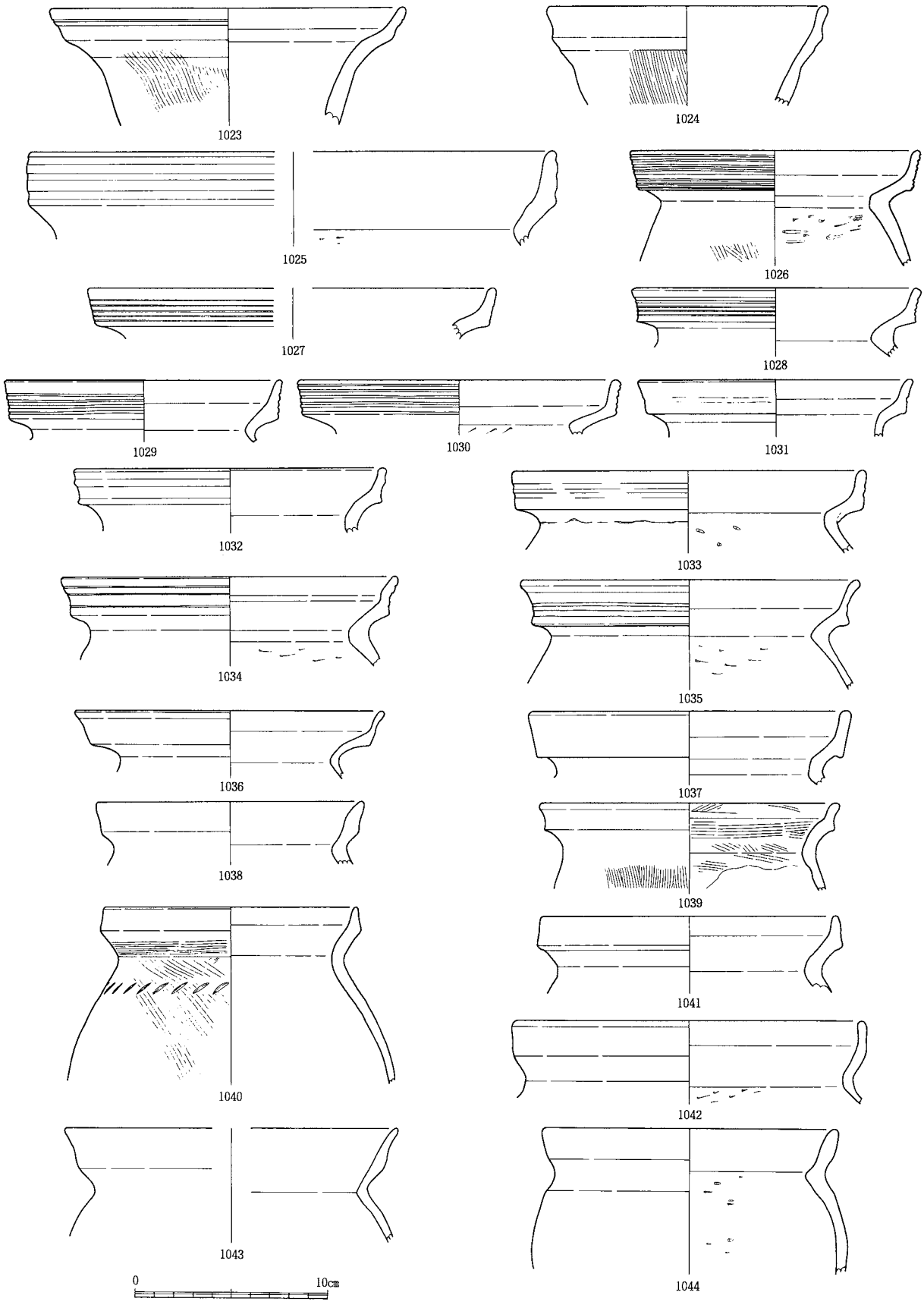
擬凹線を施す有段口縁の甕形土器1034～1036は口縁部上半が外反する特徴を有しており、他のそれに比して際立った存在である。本田秀生氏によればそれらが出土したＧ12区の一角には包含層が落ち込む箇所がみられたという。同じくＧ12区付近からは1018・1042など器壁の薄い一群もみられ、竪穴住居跡群関連の資料からは必ずしも明瞭に把握されたわけではない弥生時代終末から古墳時代初頭頃にかけての時期の土器様相を考えるうえでの興味深い一群といえよう。

1053として掲げた縦位の突起については、冬野遺跡１号竪穴住居跡出土の無頸壺（本書の13）がその性格を考える際の一つの参考になろう。本例も口縁に近接した位置を占めており、蓋の孔から突起の孔にかけて紐を通すことによって本体と蓋の両者を結び付ける機能を果たしていたものと想像される。

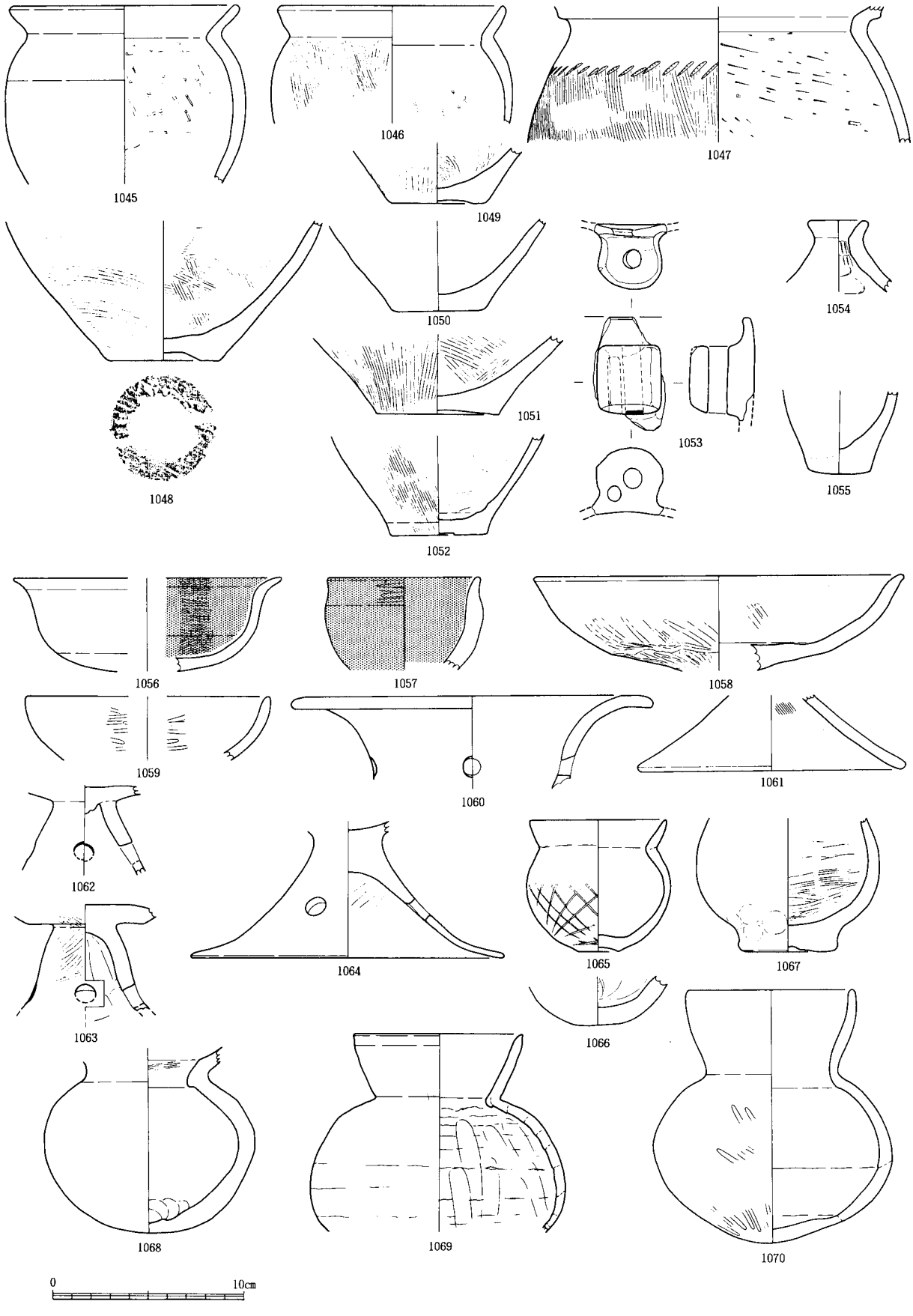
最後に土馬の脚の部分と推定される1110について若干補足しておきたい。焼成は須恵質で、中心部を孔が上下に貫通している。この孔については塑像製作時の骨組（芯棒）の痕跡ではないかと思われ、それに粘土を貼り付けて概形を作り出したのちにケズリ調整によって不整四角柱状に面取りが施されている。本遺跡の遺構・包含層から出土した遺物には８世紀以降の古代の資料がごくわずかしか認められないことから、これについても７世紀以前に遡る可能性が高いのではなかろうか。



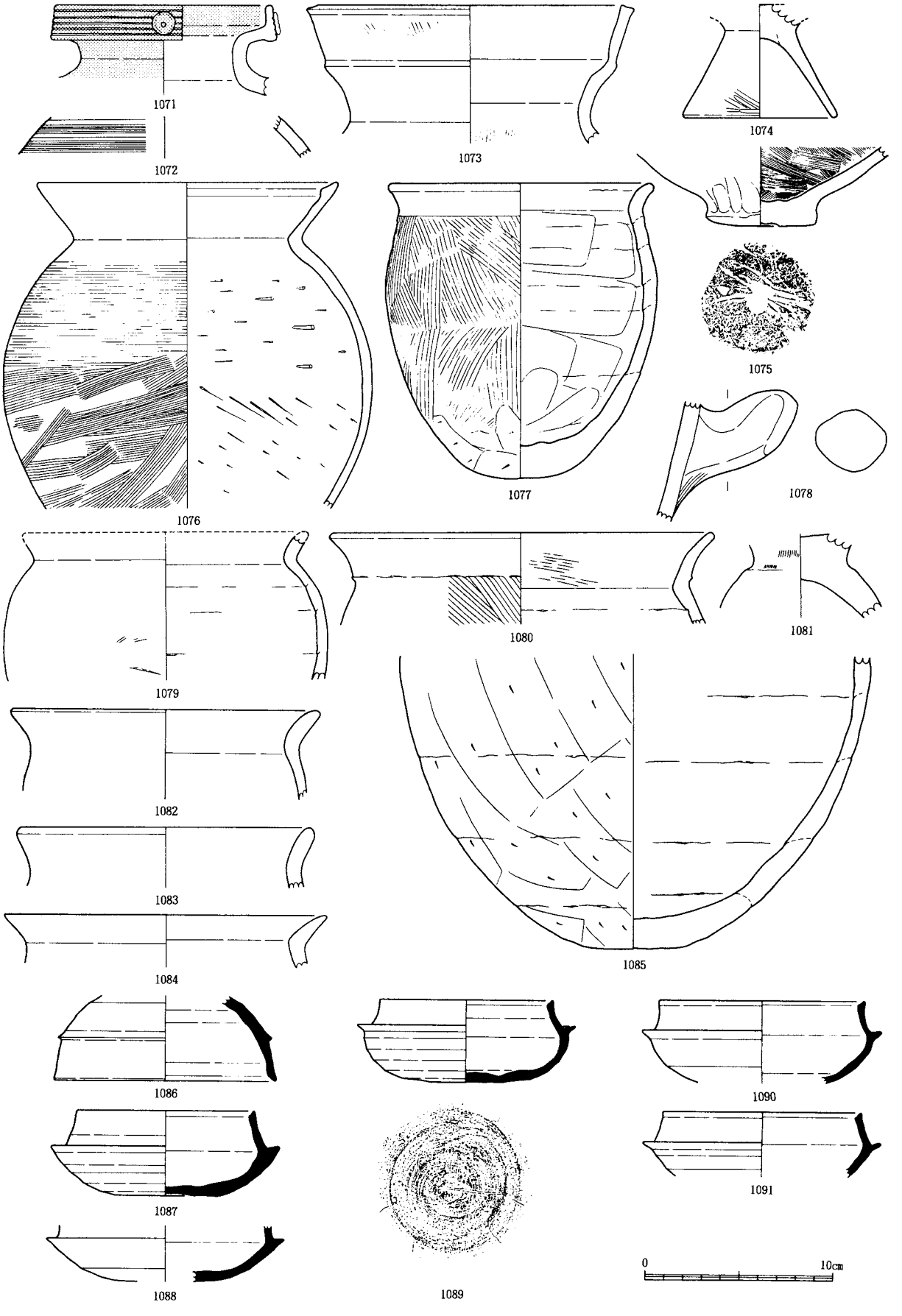
第208図　包含層出土資料実測図その１（１／３）



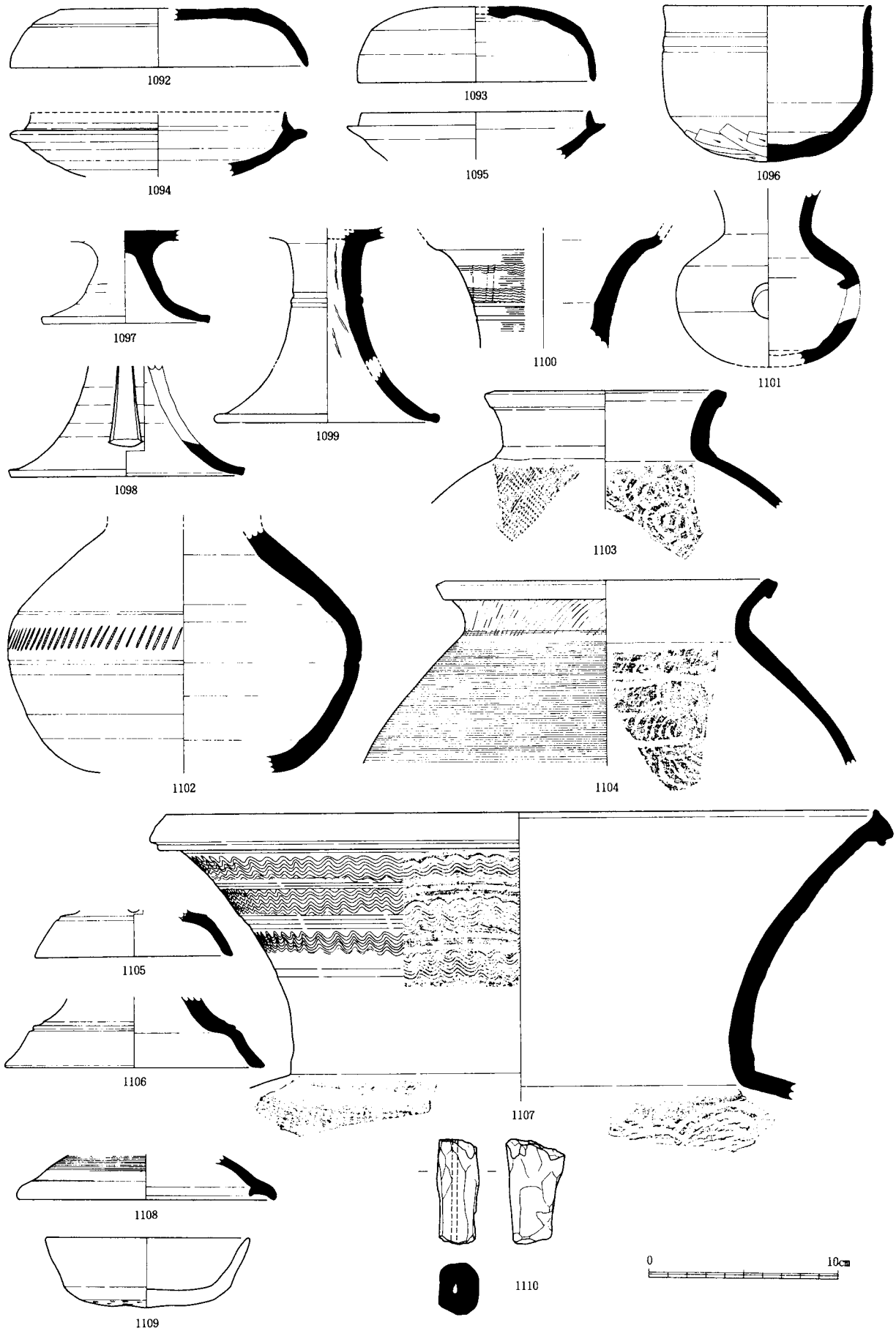
第209図　包含層出土資料実測図その２（１／３）



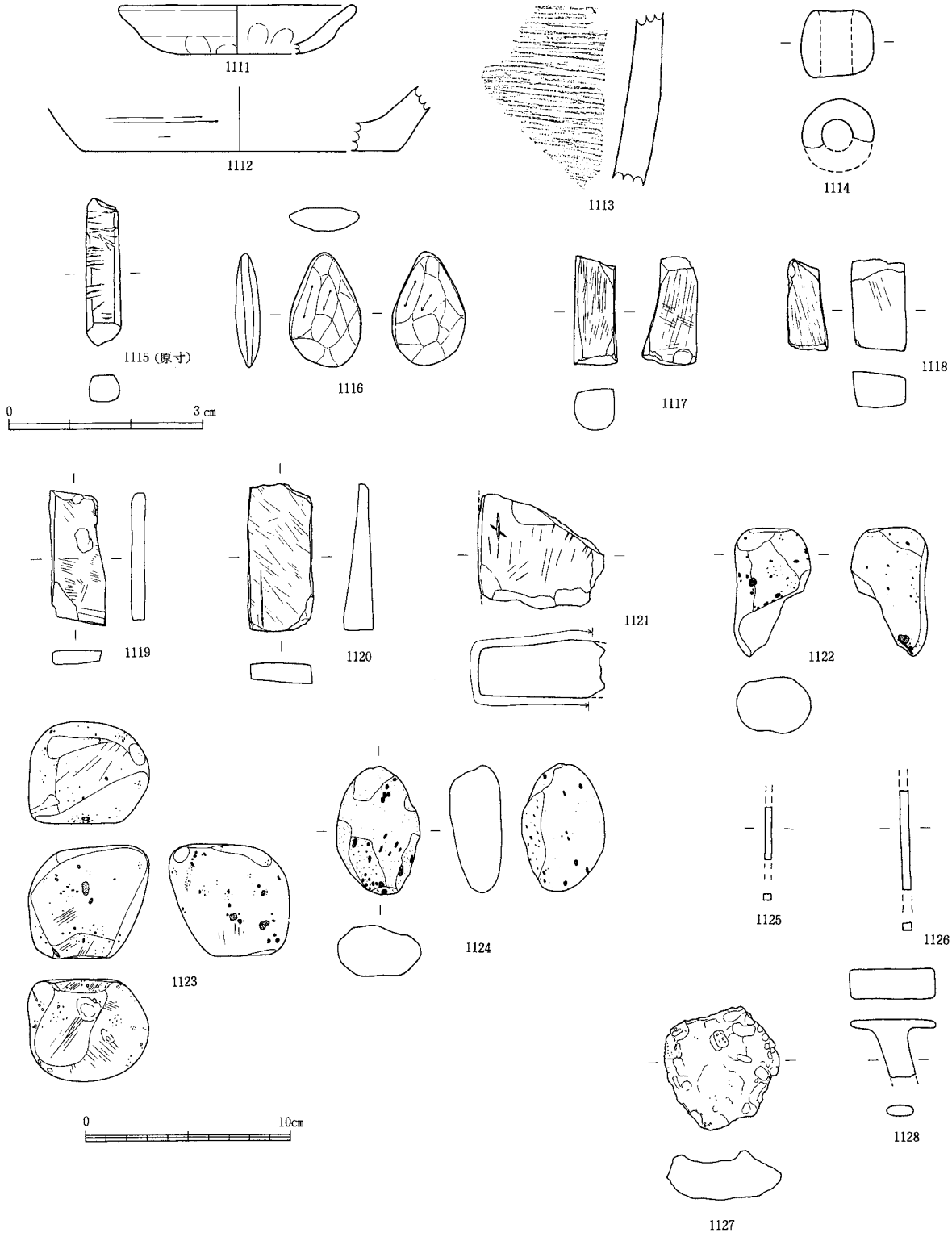
第210図　包含層出土資料実測図その３（１／３）



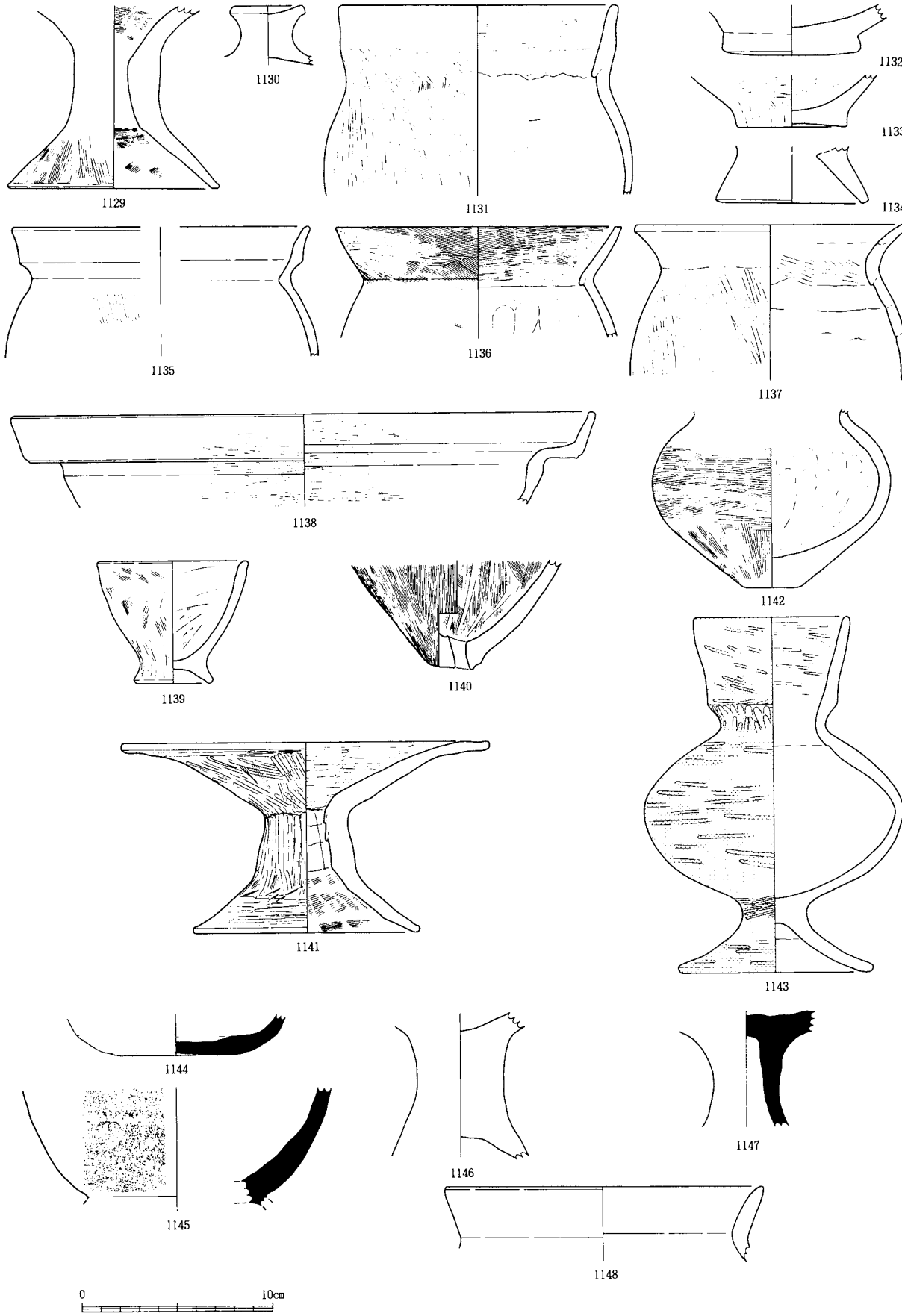
第211図　包含層出土資料実測図その４（１／３）



第212図　包含層出土資料実測図その５（１／３）



第213図　包含層出土資料実測図その６（１／３）



第214図　調査区外採集資料実測図（１／３）

第8表　遺物観察表（包含層出土資料）

番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整等	その他	実測番号
1002	B11区	鉢	A(27.0)	口縁部外ナデ、口縁部内ミガキ	把手付大鉢？	301
1003	C11区	〃	A:14.5	外面ナデ、内面ケズリ→ナデ		332
1004	G12区	高杯	A:28.3	杯部外ミガキ、杯部内ナデ	杯部外面赤彩 杯部外面に擬凹線？	350
1005	〃	〃	A:24.2		杯部外面赤彩	352
1006	A12区	〃	A(24.0)	杯部内外ミガキ	杯部内外面赤彩	308
1007	C11区	〃	A:28.8	杯部内外ハケ→ミガキ	〃	6
1008	G12区	〃	A:28.0	杯部外ナデ		353
1009	排土	器台	A:18.8	内面ハケ→ミガキ？		288
1010	西南地区	高杯		脚部外ミガキ 局部内ケズリ→ナデ		272
1011	〃	〃	B:19.0	脚部外ナデ、脚部内ハケ・ナデ		275
1012	G12区	〃	B:19.6			354
1013	〃	〃	B16.8			351
1014	西南地区	〃		脚部外ナデ	脚部外に平行沈線	271
1015	〃	〃		脚部外ナデ 脚部内ケズリ→ナデ	外面にスタンプ文 外面赤彩	268
1016	A12区	壺	A:11.2、H:5.2 B:3.6、M:7.9	内外面ナデ？		375
1017	西南地区	〃	A:15.2	外面ナデ、口縁部内ミガキ？ 胴部内ケズリ		184
1018	G12区	〃	A:23.4			376
1019	〃	〃		外面ハケ		390
1020	西南地区	〃	A:11.7	頸部内外面ハケ		267
1021	G12区	〃	A:14.7	口縁部外ナデ・ハケ 口縁部内ナデ		427
1022	A12区	〃	A:16.5			305
1023	西南地区	〃	A18.3	口縁部外ナデ、頸部外ハケ→ナデ 内面ナデ	口縁部外面に擬凹線	274
1024	A12区	〃	A:14.2	口縁部外ナデ、頸部外ハケ		316
1025	〃	壺	A(27.2)	口縁部内外ナデ	口縁部外面に3条の擬凹線	312
1026	G12区	〃	A:14.7	胴部外ナデ、口縁部内ナデ 胴部内ケズリ	口縁部外面に擬凹線	360
1027	H11区	〃	A(21.1)		〃	393
1028	H12区	〃	A:14.4	口縁部内外ナデ	〃	384
1029	G12区	〃	A:14.2		〃	359
1030	〃	〃	A:16.5		〃	378
1031	〃	〃	A:14.0			386
1032	西地区	〃	A:16.0	口縁部内外ナデ	口縁部外面に擬凹線	209
1033	H11区	〃	A:18.1	口縁部内ナデ、胴部内ケズリ	〃	367
1034	G12区	〃	A:17.3	外面ナデ	〃	380
1035	〃	〃	A:17.4	内外面ナデ	〃 口縁部下端に刻み	368
1036	〃	〃	A:16.0			429

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
1037	G11区	〃	A:16.3	内面ナデ		388
1038	甕	A:13.7				310
1039	西地区	〃	A:15.3	口縁部外ナデ、胴部外ハケ 口縁部内ハケ		208
1040	西南地区	〃	A:13.0	胴部外ハケ→ナデ	肩部外面に刺突 外面にスス付着	269
1041	G12区	〃	A:15.3			356
1042	〃	〃	A:17.9	口線部内ナデ		385
1043	A12区	〃	A(17.2)			311
1044	A11区	〃	A:15.0	口縁部内ナデ、胴部内ケズリ	胴部外面スス付着	321
1045	G12区	〃	A:11.7	胴部内ケズリ		355
1046	G11区	〃	A:11.7	口縁部外ナデ、胴部外ハケ		439
1047	A12区	〃		胴部外ハケ、胴部内ケズリ	肩部に刺突	306
1048	G11区	甕　底　部	B:5.8	胴部内外ハケ		392
1049	G12区	〃	B:4.9	胴部外ナデ、底部内ハケ		437
1050	〃	〃	B:4.9		胴部下端外面が赤化	400
1051	——	〃	B:6.5	胴部外ハケ、胴部内ハケ→ナデ		186
1052	G12区	〃	B:5.1	胴部外ハケ、胴部内ハケ・ナデ		377
1053	西南地区	——		内外面ナデ	縦位の突起 無頸壺？	452
1054	〃	蓋	A:2.9			451
1055	G12区	——	B:3.2	内外面ナデ		357
1056	西南地区	椀	A(14.1)	内面ミガキ	内面黒色処理	270
1057	A12区	鉢	A:8.0	口縁部外ミガキ	内外面黒色処理 （外面は一部）	315
1058	西南地区	高　　杯	A:19.1	杯部外ナデ・ミガキ、杯部内ナデ		273
1059	F14区	〃？	A(12.7)	外面ナデ、内面ミガキ		398
1060	G12区	器　　台	A:19.0		いわゆる二ツ屋タイプの器台	349
1061	H11区	高　　杯	B:13.5	脚部内外面ナデ		382
1062	A12区	〃				320
1063	西南地区	〃		外面ミガキ、脚部内ナデ		266
1064	——	〃	B:16.3	脚部内ナデ		210
1065	——	壺	A:7.1、B:7.0 B:2.0、M:7.5	胴部外ミガキ、胴部内ナデ	胴部外面に斜格子目文	211
1066	G12区	〃		底部外ナデ、底部内ハケ		389
1067	西地区	〃	B:4.7 M:9.5	胴部外ナデ、胴部内ナデ・ハケ		206
1068	G12区	〃	M:11.1	底部外ケズリ、胴部内ナデ		217
1069	C13区	〃	A:8.8 M:13.4	外面ナデ、口縁部内ハケ→ナデ	胴部内面に巻き上げ痕	247
1070	A・B12区	〃	A:8.5、M:12.4 H:13.4	外面ナデ、口縁部内ハケ→ナデ 胴部内ナデ		366
1071	G12区	〃	A:11.5	口縁部内外ナデ	口縁部外面に擬凹線と円形浮文、円外面赤彩	358
1072	D区	〃		胴部内外面ナデ	肩部外面に細い平行沈線、東海系壺	401
1073	G12区	〃	A:16.4	口縁部内外ナデ		391

番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整等	その他	実測番号
1074	C11区	（脚台）	B:8.0	脚部外ミガキ		333
1075	A12区	（底部）		脚部外ナデ、胴部内ハケ 口縁部内ハケ→ナデ	壺？	319
1076	C11区	甕	A:16.0 M:19.8	口縁部内外ナデ、胴部外ハケ 胴部内ケズリ	外面にススト付着 布留式系甕	246
1077	西地区	〃	A:13.8、M:14.6 H:15.9	口縁部内外ナデ、胴部外ハケ 底部外ケズリ 胴部内ケズリ→ナデ	底部周辺の外面赤化	207
1078	A12区	甑	胴部外ハケ		把手部のみ	309
1079	B12区	甕		内外面ナデ		300
1080	B11区	〃	A:20.3	口縁部外ナデ、胴部外ハケ		303
1081	B12区	（脚台）				299
1082	〃	甕	A:16.2			302
1083	F14区	〃	A:15.5	口縁部内ナデ		399
1084	西南地区	〃	A:17.2			283
1085	B12区	〃			外面赤化	405
1086	H11区	須恵器 杯蓋	A:11.9	内外面ロクロナデ		㉙
1087	西地区	須恵器 杯身	A:9.5、M:12.2 B:4.5	底部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ		㊸
1088	西南地区	須恵器 〃		底部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ		⑨
1089	〃	須恵器 〃	A:9.4、H:4.8 B:4.0、M:11.8	底部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ	底部にヘラ記号「－」 焼き歪み修正して実測	⑦
1090	G11区	須恵器 〃	A:10.9	底部外面ロクロケズリ その他ロクロナデ		㉕
1091	〃 G12区	須恵器 〃	A:10.5	内外面ロクロナデ		㉘
1092	A12区	須恵器 杯蓋	A:15.9、H:3.2 B:10.6	天井部外ロクロケズリ その他ロクロナデ		⑱
1093	〃	須恵器 〃	A:12.7 H:4.1	天井部外ロクロケズリ その他ロクロナデ	外面に１条の沈線 杯身の可能性あり	⑲
1094	A11区	須恵器 杯身		底部外ロクロケズリ その他ロクロナデ	厚手、高杯か？	㊼
1095	A12区	須恵器 〃	A:12.3	内外面ロクロナデ		㉔
1096	C11区	須恵器 鉢	A:10.9、M:11.1 H:8.5	底部外ロクロケズリ→手持ちケズリ 底部内ナデ、その他ロクロナデ	外面に２条の沈線	⑪
1097	A12区	須恵器 高杯	B:9.0	内外面ロクロナデ	低脚タイプ	⑳
1098	C11区	須恵器 〃	B:12.6	内外面ロクロナデ	透しあり	⑫
1099	〃	須恵器 〃	B:11.9		脚部外面に２条の沈線 軟質	304
1100	A12区 B12区	須恵器 甕		外面波状文→カキ目 内面ロクロナデ		㊻
1101	A12区 B12区	須恵器 甕	M:9.8	内外面ロクロナデ		⑩
1102	A12区 B12区	須恵器 壺	M(19.0)	内外面ロクロナデ	２条の沈線間に刻み目状の刺突	㉑
1103	A12区	須恵器 壺	A:12.8	口縁部内外ロクロナデ 胴部外平行タタキ→カキ目 胴部内同心円タタキ		⑦
1104	〃	須恵器 甕	A:17.2	口縁部外ヘラナデ 胴部外平行タタキ→カキ目 胴部内同心円タタキ	瓦質	㉓
1105	——	須恵器	B:10.6	内外面ロクロナデ	外面に１条の沈線 有孔	㊶
1106	A12区	須恵器	A:13.9	内外面ロクロナデ	外面に１条の沈線	㊺
1107	B12区	須恵器 甕	A:38.0	口縁部内外ロクロナデ 胴部外平行タタキ 胴部内同心円タタキ	３段の波状文	㉒
1108	F11区	須恵器 杯身	A:10.8 H:3.8	外面カキ目、内面ロクロナデ		㉜

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
1109	F11区	杯　身	A:10.8 H:3.8	底部外周ロクロケズリ その他ロクロ？ナデ	土師質 底部ヘラ切り	347
1110	C9区	須恵器 土馬？		外面ケズリ		㊽
1111	A12区	皿	A:11.3	口縁部外面2段ナデ 内面ナデ	14世紀頃 （垣内光次郎氏教示）	307
1112	E13区	珠洲焼				348
1113	——	〃		内面タタキ、内面ナデ		㊵
1114	——	土　錘	長3.3、径3.4 孔径1.5			287
1115	D12区	石　墨	長2.5、幅0.6 厚0.5	線状の刻み目あり	重量1.2g	石56
1116	25号住居跡周辺	磨製石器	長5.6、幅3.4 厚1.2	護符的性格のものか？	蛇紋岩製 重量32.1g	石28
1117	A12区	砥　石	長(5.4)、幅2.2 厚2.7	表面及び1側面が研磨作業面	擬灰石、重量(34)g	石37
1118	G12区	〃	長(4.4)、幅2.6 厚1.9	表面及び2側面が研磨作業面	擬灰岩、重量(36)g	石36
1119	西地区	〃	長(6.3)、幅(2.7) 厚(0.8)	表面が研磨作業面	いわゆる赤間石 重量(21)g、硯？	石38
1120	H12区	〃	長(7.3)、幅3.2 厚1.5	表裏両面が研磨作業面	擬灰岩 重量(45)g	石32
1121	H11区	〃	長(5.7)、幅(6.2) 厚(3.0)	表裏両面が1側面が研磨作業面	細粒砂岩 重量(119)g	石51
1122	H12区	軽　石	長(6.4)、幅3.7 厚2.8	使用の形跡あり	重量(11.6)g	石6
1123	西南地区	〃	長5.6、幅5.8 厚5.1	使用による面がみられる	重量27.1g	石8
1124	西地区	軽　石	長6.2、幅4.1 厚2.5		重量11.5g	石3
1125	B13区	鉄製品	長(2.7)、幅0.3 厚0.3	断面4角形	鉄鏃の一部？	金60
1126	D13区	〃	長(4.2)、幅0.4 厚0.3	〃	〃	金50
1127	G11区	鉄　滓			重量75.8g	金42
1128	西地区	鉄製品			性格不明	石41

調査区外採集資料

番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	調　整　等	そ　の　他	実測番号
1129	調査区東側	器　台	B:11.0	内外面ハケ→ナデ		254
1130	〃	蓋	A:3.6			261
1131	〃	壺	B:14.5	外面ミガキ、口縁部内ミガキ 胴部内ナデ		252
1132	〃	壺（底部）	B:7.1	底部内ハケ？		256
1133	〃	〃（〃）	B:5.6	胴部外ハケ→ミガキ 底部外ケズリ、底部内ミガキ		255
1134	〃	（脚台）	B:8.0			258
1135	〃	甕	B:15.5	口縁部外ナデ、胴部外ハケ		291
1136	〃	〃	A:15.0	口縁部外ハケ 胴部外ハケ→ナデ、胴部内ナデ		253
1137	〃	〃	B:13.8	口縁部内外ナデ、胴部外ハケ 胴部内ハケ→ナデ	内面に巻き上げ痕	290
1138	調査区西側	鉢	A:30.5	口縁部内外ナデ、胴部外		276
1139	〃	〃	A:7.7、H:6.5 B:3.9	外面ハケ→ナデ、内面ケズリ →ナデ		257
1140	〃	〃		外面ハケ、内面ハケ→ナデ	底部有孔	277

1141	〃	器　台	A:19.3、H:10.1 B:11.8	杯部外ハケ→ミガキ 杯部内ミガキ？ 脚部外ケズリ→ミガキ、脚部内ハケ		260
1142	〃	壺	B:3.0 M:12.4	外面ハケ、内面ナデ		41
1143	〃	〃	A:8.0、H:18.8 B:9.7、M:13.5	外面ミガキ・ナデ 口縁部内ハケ→ナデ、胴部内ナデ	外面及び口縁内面 赤彩	259
1144	調査区南側 （分調）	須恵器 杯	B:5.8	内外面ロクロナデ		282
1145	〃	須恵器 壺		外面平行タタキ→ロクロナデ 内面ロクロナデ		㊳
1146	調査区北側 （分調）	高　杯			脚部中実	289
1147	〃	須恵器 高　杯		内外面ロクロナデ		㉞
1148	〃	甕	A:16.5	口縁部内外ナデ	口縁部外面にスス状付着物	285

第５節　まとめ

１　岩宿時代―押水町の岩宿時代の遺跡

はじめに

現在石川県では37の当該期の遺跡が発見されている。その分布は石川県全域に広がる（北陸旧石器文化研究会1990）。押水町では本遺跡を含め６つの遺跡が確認されている。そのうち、４遺跡は押水バイパスに係る調査で発見され、３遺跡は報告がなされている（北野他　1987、米沢他　1987、三浦他　1988）。また、松山和彦は、その内容の詳細な検討を行い、石器製作の技術基盤を解明すると共に、全国的見地から石器群の系統や編年的位置を明らかにしている。（松山　1987）。今回は、押水バイパスに係る調査の最後の報告ということで、松山の研究結果に基づき、前述３遺跡の概要を再度紹介すると共に、本遺跡を含む残りの遺跡に付いても紹介し、押水町の岩宿時代を概観したい。

(1)　宿向山遺跡（第218図）

遺跡は標高約40ｍの海成段丘上に位置している。岩宿時代の石器は資料整理の段階で発見され、これまでに29点を確認している。遺物包含層は定かではないが、段丘堆積物の直上ぐらいから出土したものと思われる。調査区内ではグリッド別の出土状態から２つのブロックが存在したと考えられるが、平坦面の広がりからみて調査区外にもブロックの存在が想定できる。

北側のブロックでは台形様石器１（未報告）、くさび形石器１、局部磨製石斧１、石核１（未報告）、剥片を９を確認している。台形様石器は、佐藤分類（佐藤　1988）のＩ－ｂ－１類に当たるもので、器体下半を欠損している。また、石核と接合している。剥片を横に用い、打面部は打面を除去するような形で背面側から、ヒンジフラクチャーとなった剥片端部では腹面側から調整加工が施されている。打面側では急角度の、端部側では平坦な剥離となっている。台形様石器と接合した石核の素材は、打面転移を頻繁に繰り返し、横長、幅広剥片を生産する石核から剥離された分厚い剥片である。まず、素材の打面を除去し、台形様石器の素材となった剥片を含む２枚を腹面側で剥ぎ、その面を打面として背面側で剥片剥離を行っている。また、相対する辺でも小形の剥片を剥離している。石材はメノウである。

局部磨製石斧は撥形を呈し、刃部は緩く弧状に仕上げられている。石材は凝灰岩と思われる。

南側のブロックではナイフ形石器１、台形様石器２、小剥離痕を持つ剥片１、石核３、剥片６を確認した。ナイフ形石器は鉄石英の縦長剥片を素材としている。調整加工は後世の破損と区別しづらいのだが、基部周辺に施された微細な剥離痕がそれに当たると考えている。台形様石器の内一点は佐藤分類（佐藤　前掲）のⅡ類に当たるものである。加工はやや急斜なものが腹面に施されている。石材は珪化凝灰岩である。もう一点はⅢ類に当たるもので、先端を欠損している。小さな貝殻状剥片の端部に微細な加工が施されているものである。石材は玉髄である。

石核は３点出土している。剥片剥離作業が相当に進んでおり素材の形態はよくわからないが、分割礫や、分厚い剥片を素材としているようである。最終的に板状になったものと、三角錐状のものがある。どれも最終段階では小型の貝殻状剥片や横長の剥片を剥離している。板状の物は玉髄、三角錐状の物は鉄石英である。

この他、出土位置不明で石核、剥片がある。この石核は、分厚い剥片の打面側で、打面と作業面を入れ代えながら横長、幅広剥片を剥離している。削器、篦状石器として使用された可能性がある。

剥片の形状は両ブロックとも差がない。小型貝殻状のものもあるが、横長、幅広のものがめだつ。石刃としてよいものはないが、縦長剥片を連続的に剥離した痕跡の残る剥片がある。

石材は珪化凝灰岩、玉髄、メノウ、鉄石英が、両ブロックともに認められる。母岩は10個体以上が確認でき、両ブロックにまたがって分布するものも認められる。但し、凝灰岩は正確な分類を行っていない。また、その他の石材も点数が少ないのでやや細かい分類となっており統合される可能性がある。

剥片剥離技術は横長、幅広剥片を剥離するものが主体となる。石核は、分割礫等を素材として、サイコロを転

がすように打面転移を行いながら、剥片剥離を行うものと、分厚い剥片等を素材としてその一側縁に作業部位を固定し、打面と作業面を入れ換えながら剥片剥離を行うものがある。ただ、一つの打面－作業面からは数枚の剥片を連続して剥離するようである。

遺物の遺存、出土状況とも悪く、また、他にブロックの存在が想定され、全体像は不明である。ただ、台形様石器の製作はこの地で行われているようである。

(2)　宿東山遺跡（第218図）

遺跡は谷頭に面した標高37ｍ前後に緩斜面に位置する。同じく海岸段丘上である。１ブロックを確認している。残念なことにこのブロックは仮設建物建設の際に大部分が破壊され、石器の多くはこの地点の排土中より発見されたが、８点が調査区壁面よりプライマリーな状態で出土しており、調査区外にも分布を持つようである。また、火山灰分析がこの壁面で行われ、石器はＡＴ降灰層準より下層からの出土であると確認された。

石器は、ナイフ形石器２点、台形様石器２点、小剥離痕を持つ剥片２点、石核１点、剥片11点、砕片13点を確認している。この他、この地点より北西に約90ｍ離れた標高約33ｍの地点で小剥離痕を持つ石刃が単独出土している。石材はすべて珪化凝灰岩で、正確な母岩別分類は出来ないが、数種類の母岩が存在すると考えている。

ナイフ形石器は、石刃を素材とし基部に加工を施すものである。一点は先端が平らで、左側縁の加工は器体中央までおよぶ。もう一点は欠損して基部のみである。調整加工は基部周辺に限られる。何れも、左側縁の加工が右側縁のそれより顕著である。また、素材の形をほとんど変えていない。

台形様石器は佐藤による分類（佐藤　1988）のⅢ類に当たるものである。一つは小型貝殻状の剥片の先端に加工を施している。もう一つも同様であるが、加工は腹面側に、平らな先端を一部残しそれをはさむような形で施されている。

石核はやや幅広の縦長剥片を素材として、その両側縁腹面側で小型貝殻状の剥片を生産している。

剥片は、石刃、小型貝殻状剥片、幅広、横長剥片がある。

以上の資料から復元可能な剥片剥離技術は、石刃、縦長剥片剥離技術と横長、幅広剥片剥離技術である。石刃、縦長剥片剥離技術は、石刃技法と呼べるような、石刃を連続的に剥離するもので、その石核は分割礫等を素材とし、打面は両設のものが想定できる。また、頭部調整は施すものの、打面調整は行なわれない。

横長、幅広剥片剥離技術は、剥片を素材とし、その腹面で小型貝殻状の剥片を連続的に剥離するものと、頻繁に打面転移を行いながら同様な剥片を剥離するものが想定できる。ややおおぶりの横長、幅広剥片を剥離する技術については資料数が少なくよくわからない。

母岩別分類をしっかりと行い得ないのと、ブロックが破壊され発見され、また、全掘していないのではっきりとは言えないが、ナイフ形石器は搬入品あり、このブロックでは台形様石器の製作が行われたのではと考えている。

(3)　竹生野遺跡（第217図）

遺跡は末森山から派生する丘陵状に位置し、標高32～38ｍを計る。やはり海岸段丘上である。当該期の石器の発見は、調査中に竪穴住居跡から石刃が出土したことによる。60点を確認しているが、そのほとんどが切り合い関係にある３棟の竪穴住居跡から出土しており、また、その他のものも遺構出土で、包含層遺物として取り上げられたものは５点にすぎない。よってブロック等は全く不明である。確認のトレンチ調査ではベースの段丘堆積物を掘り下げているが、石器は出土していないと言う。調査地は、後世の耕作等で著しく攪乱されており、遺構に落ち込んだもののみが発見されたということであろうか。

石器は定形的なものが少ない。台形様石器は佐藤（佐藤　前掲）の分類ではⅢ類であるが、形態的にはⅡ類に類似する。素材は小型の縦長剥片で、背面にはポジ面を持つ。加工は先端部左に微細なものが施されている。石材は鉄石英である。この他、小剥離痕のある剥片中にも台形様石器である可能性の高いものがあるが、本例も含み二次加工のしっかりしたものはない。

鋸歯縁状石器は基部を欠損している。やや厚みのある石刃状の剥片を素材として、右側縁では腹面側に、左側

縁では背面側にやや大きめの加工と微細な加工を組み合わせ鋸歯縁を作り出している。右側縁には一部未加工の部分を残している。先端部には腹面に二つの樋状剥離様の剥離痕が残されており彫器とも考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

錐（未報告）は小形の不定形な剥片を用いている。素材剥片の打面部は欠損している。剥片の左側縁部に機能部を作り出している。石材は鉄石英である。

石核は3点出土している。一つは幅広の縦長剥片を素材とし、その腹面で小型貝殻状の剥片を剥離している物で、最終形態がサイコロ状をなすもので、自然面を一枚残すものと板状となった物がある。これらには同一母岩と思われる剥片がある。

剥片は、石刃、横長、幅広剥片、小型貝殻状剥片がある。石刃は2点あるが、何れも両設打面の石核から剥離されたものである。頭部調整がなされている。石材は珪化凝灰岩である。

剥片剥離技術は、前述の2遺跡で見たものとほぼ同じである。剥片どうしの接合資料がある。打面転移が行われていること、一組の打面－作業面では数枚の剥片が剥離されていることが理解できる。

使用されている石材は、珪化凝灰岩、メノウ、玉髄、鉄石英、蛋白石、チャート、黒曜石である。母岩別分類では20個体を確認したが、宿向山遺跡と同様な理由で確かなものではない。珪化凝灰岩は、石刃、横長、幅広剥片に用いられ、その他の石材は、横長幅広剥片、小型貝殻状剥片に用いられている。

(4)　免田一本松遺跡

前述した通りである。1点の石刃から導き出されることには限りがあるが、藤原の言う（藤原　1983）真性の石刃技法の完成された時期の所産と考えてほぼ間違いないであろう。

(5)　御館遺跡（第217図）

遺跡は標高約20mの扇状地に位置する。石川県で初めて岩宿時代の石器が確認された遺跡で、石器は1960年に水田耕地整理の作業中、地下約60cmの所から須恵器の破片などと共に出土したとされている。当時、石川考古学研究会副会長であった秋田喜一氏は、これを「先土器時代の所産となし一種のナイフブレード」と考え、1961年の日本考古学協会大会で、芹沢長介、江坂輝弥、戸沢充則らの鑑定を受け、1964年『古代学研究』37(秋田　1964)で紹介している。

石器は現在行方不明である。写真、実測図から判断すると、最大幅が打面直下にある打瘤の発達した石刃で、単剥離打面をもつ。頭部調整は顕著で、背面に残る二面の剥離面は、腹面と同一方向からの打撃によるものと思われる。左側縁打面よりに残る小剥離痕は細かいもののやや急角度に見え、調整剥離痕であるならばナイフ形石器と考えられる。群馬県後田遺跡（麻生　1987）や千葉県東林跡遺跡（須藤　1986）出土の一側縁加工のナイフ形石器に類似したものがある。長さ9cm、幅3cm、厚さ1.5cm。石材は頁岩に類似した物とされている。

(6)　正友はちじがり遺跡（第217図）

前述の秋田論文（秋田　前掲）と押水町史（松永、村井　1973）に紹介されている遺跡である。押水町史には石槍と紹介されている。水田耕地整理中に、地下30cmの粘土層中より多数の土器破片と共に発見されたらしい。秋田によれば、御館出土の石器と同様にあめ色を呈すらしく、頁岩の可能性がある。形態的には岩宿時代に属する可能性もあり、資料を実見したのちの検討が必要である。

さて、これまで押水町で確認された当該器の遺跡の概要について述べてきた。遺跡は、丘陵上に位置するものと、扇状地に立地するものとが認められる。丘陵上に位置するものは何れも小さな谷を望むように地点に立地している。また、扇状地に立地するものは丘陵先端の裾に当たる位置に立地している。標高は50mを越えることはない。遺跡の規模は、石器出土様態が悪いため正確なところはわからないものの、何れも小規模なものと考えられる。このようなあり方は、当概期この地域（押水バイパスルート周辺と言えようか）の土地利用を示唆するものかも知れない。

それぞれの遺跡の石器群は、その石器組成や、保持する剥片剥離技術等から三つに分類が可能であろう。ただ、免田一本松遺跡や正友はちじがり遺跡は石器一点のみであり、各々別群と思われるものの内容については不明と

言わざるを得ない。残りの一群は、宿向岡遺跡、宿東山遺跡、竹生述遺跡、御館遺跡で、その出土状態に問題があるものの、御館遺跡を除いては石器点数がある程度まとまっておりその内容に一歩踏み込むことが可能である。これらについてはすでに松山の論考（松山　前掲）がある。これまで発表されたものは実測図の誤りや内容の訂正などが必要な部分があり、今回は時間的に余裕がなく未報告のものとあわせてあらためて述べる機会を持ちたいと思っている。編年的には竹生野遺跡（関東立川ローム X 層並行期）→宿向山遺跡（同 IX 層並行期）→宿東山遺跡（同 VII 層下部並行期）という位置づけを考えている。

このように押水町には五つの当該期の遺跡があり、県内でもその発見例の多い地域である。今後の遺跡数の増加と研究の発展がこの地域でなされることを望みたい。

引用・参考文献

秋田喜一　1964　「石川県羽咋郡押水町出土石器の一例」『古代学研究』37　古代学研究会

麻生敏隆他　1987　『後田遺跡（旧石器編）』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

北野博司他　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻第３号　日本考古学会

須藤隆司　1986　「群馬県藪塚遺跡の石器文化－ナイフ形石器の型式学的研究－」『明治大学考古学博物館報』２　明治大学考古学博物館

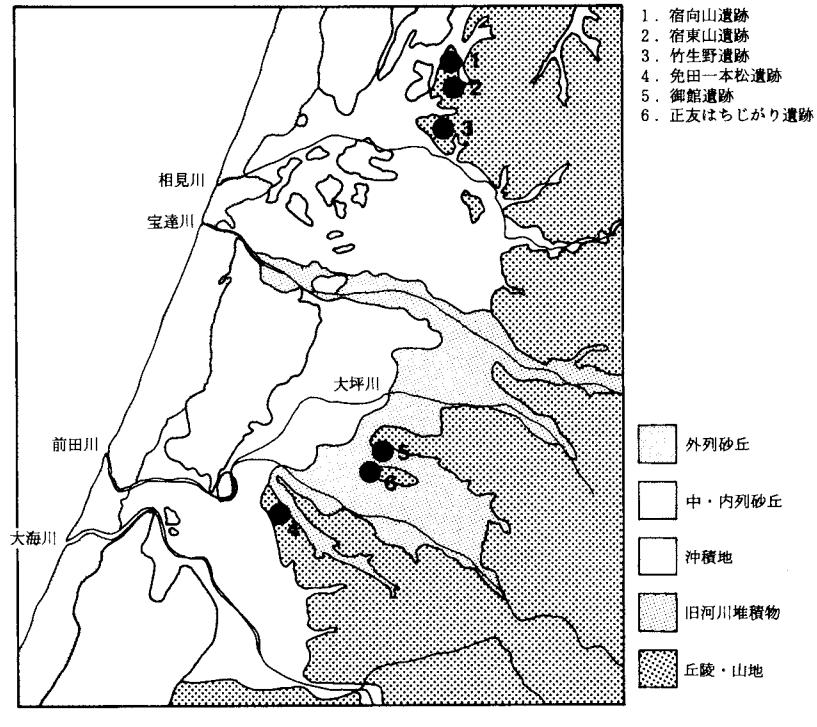
藤原妃敏　1983　「東北地方における後期旧石器時代の技術基盤－石刃石器群を中心として－」『考古学論叢』１

松永　清・村井　一郎　1974　「原始古代　第２章　原始より古代へ」『押水町史』　押水町役場

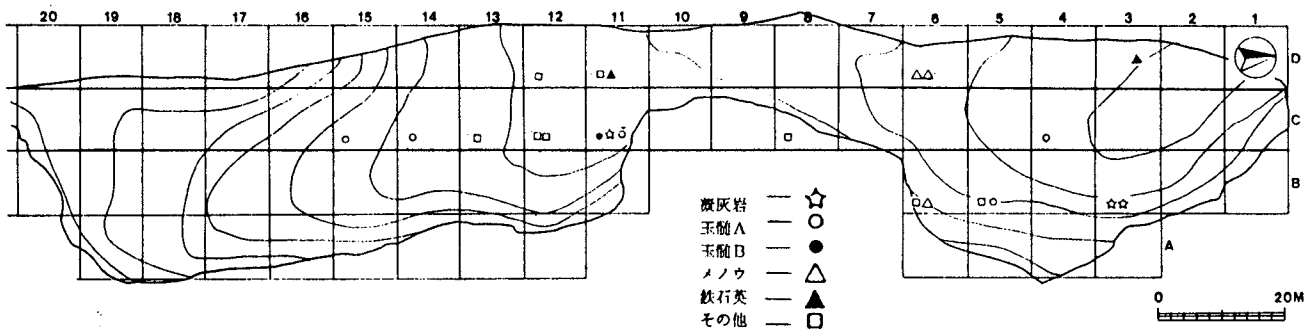
松山和彦　1988　「第６章　考察　第１節　旧石器時代の末森山麓」『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

三浦純夫他　1988　『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

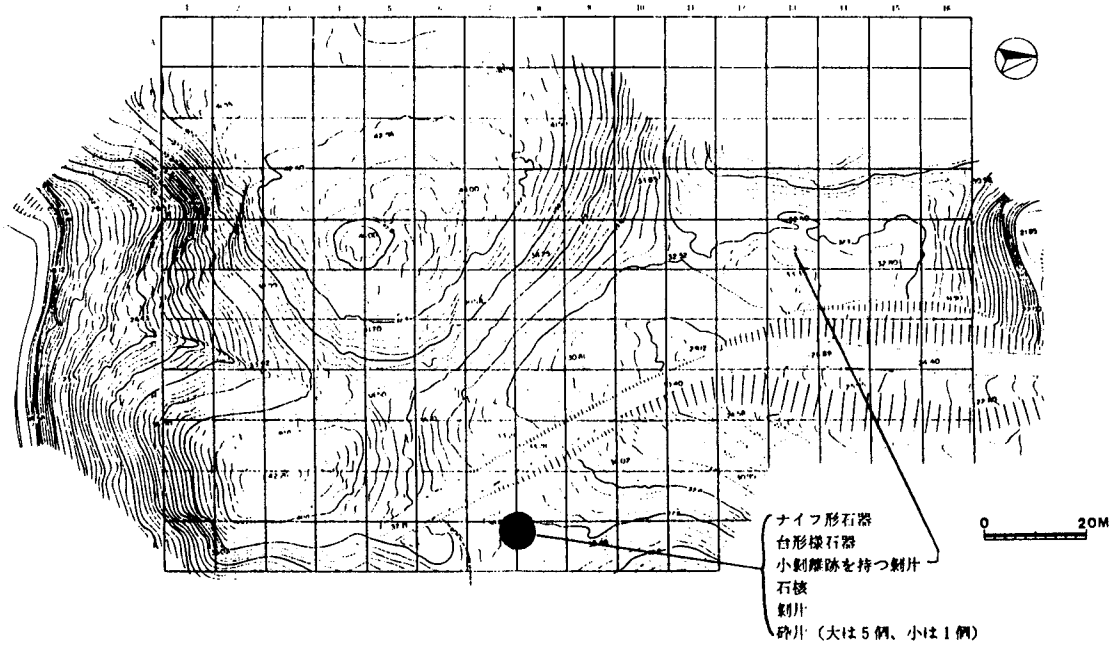
米沢義光他　1987　『宿向山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター



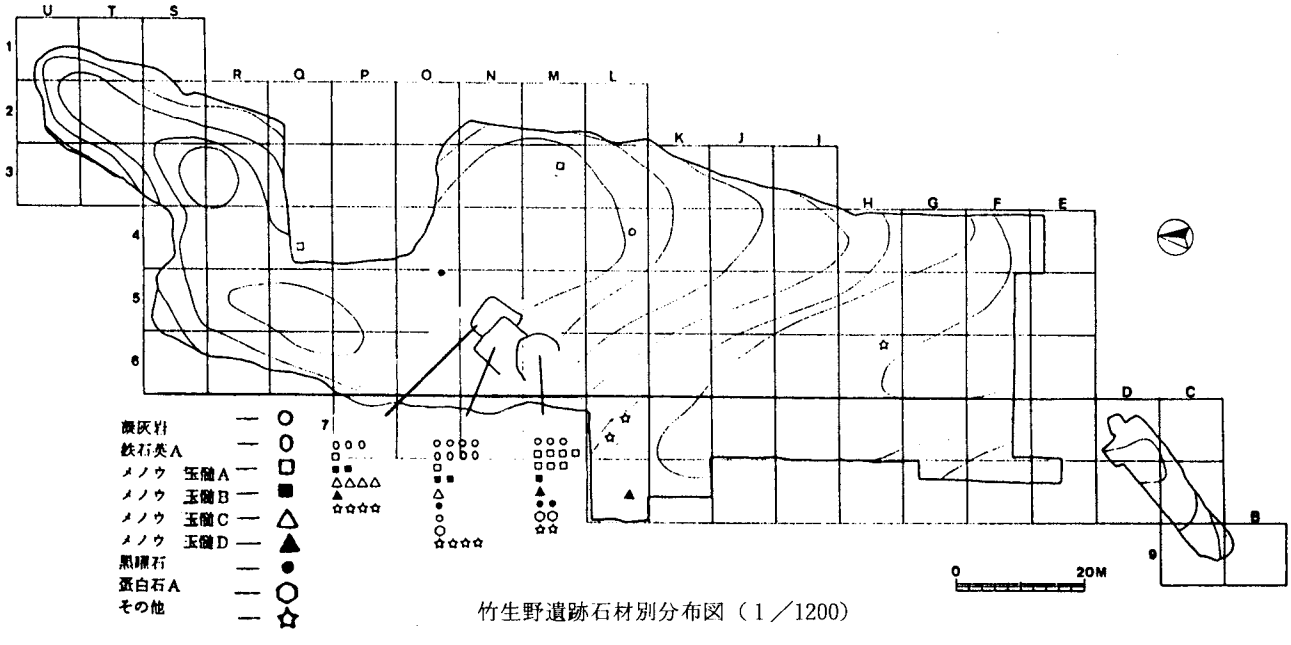
第215図　押水町の地質と岩宿時代の遺跡
（北野他1987を改変）



宿向山遺跡石材別分布図（1／1200）

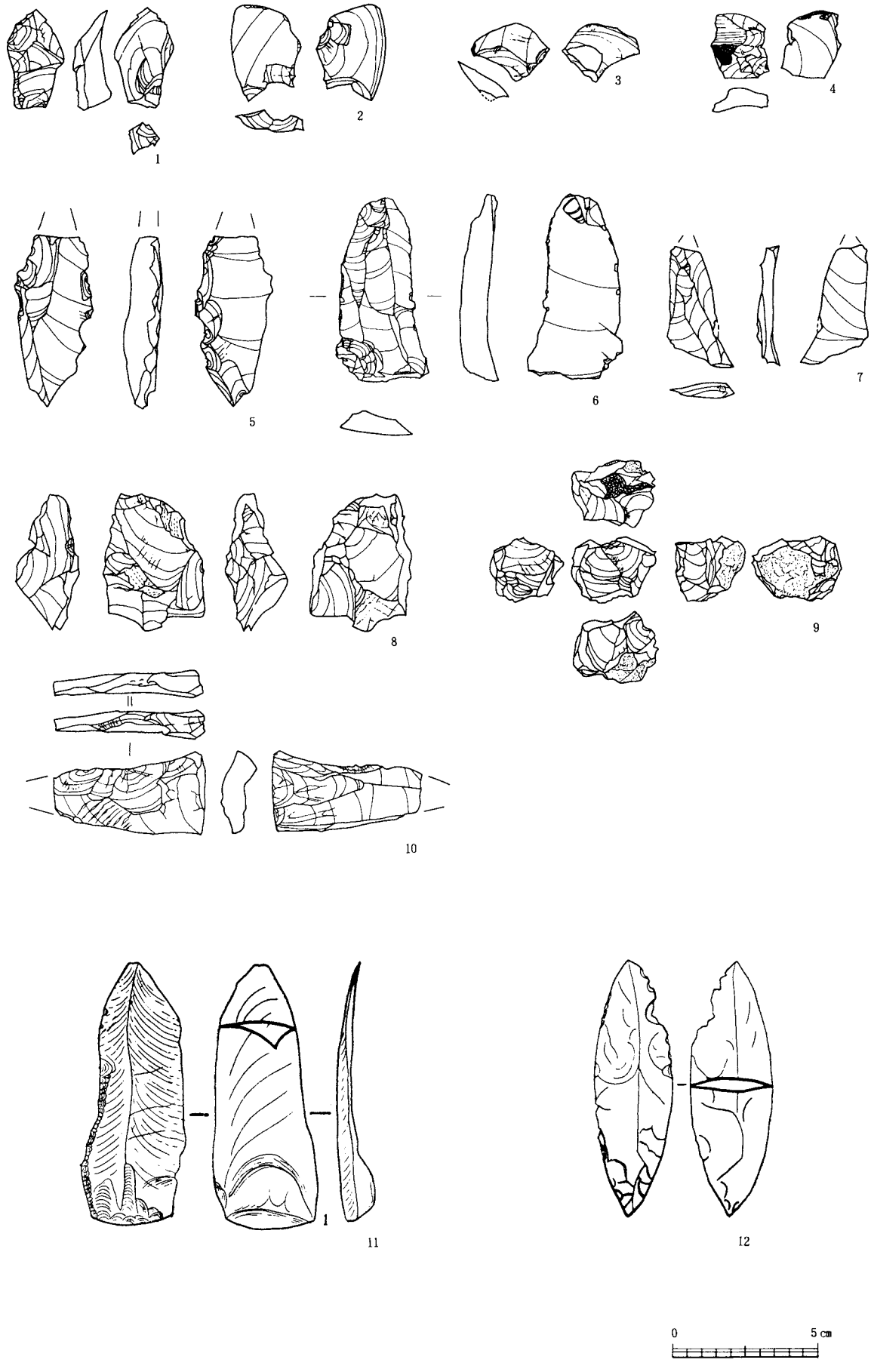


宿東山遺跡器種別分布図（1／1500）



竹生野遺跡石材別分布図（1／1200）

第216図　宿向山、宿東山、竹生野遺跡石器分布図



第217図　竹生野遺跡（１～10）、御館遺跡（11）、正友はちじがり遺跡（12）出土遺物、（１～４は台形様石器、５は鋸歯縁石器、６、７は石刃、８～10は石核、11はナイフ形石器、12は尖頭器）

第218図　宿向山遺跡（１～７）、宿東山遺跡（８～15）出土遺物（１、８、９はナイフ形石器、
３、10、11は台形様式石器、４は局部磨製石斧、12、13、15は微細剥離痕のある剥片、５～７、14は石核）

2　縄文時代　－新崎式土器の細分について－

本遺跡での縄文時代の遺構は、落し穴と推定される土坑群のみで、生活の主要拠点としての住居址は発見されなかった。少数の石器、少量の土器片を得たのみであるが、比較的まとまった量の敲打石の在り方から、発掘調査区周辺の丘陵台地に該期の集落が存在していることが容易に想定される。調査区は縄文時代集落の周辺に位置する猟場として、機能していたものと考えられる。

新崎式土器　本遺跡で発見された土器の中で、全形を復元し得たのは縄文時代中期前葉の新崎式期に比定できる深鉢2個体だけであった。本遺跡出土土器で新崎式土器の内容を膨らますことは困難であるが、若干のコメントを記述してまとめとしたい。

新崎式土器は穴水町新崎遺跡出土土器を標識としている。昭和27年の能登調査の際に山内清男氏によって採集遺物の中から抜き出されて、中期初頭に位置付けられたが、以後、正式報告が行われず、他遺跡からの出土品によって内容を膨らませていくという状況の中で、新崎式は大きな振幅を持って揺られた（註1）。前段階にある新保式土器が単純に近い組成内容である事から、型式としての認識に幅を生じさせるほどでなかったことと好対照を見せている（註2）。それは、同じ状況の中にあった宇ノ気町上山田貝塚を標識とする上山田式土器との型式間を巡るものではなく、一方が蚕食してしまうというものでさえあった（註3）。北陸の中期型式は判りにくいとの批判を他地域の研究者から受けるほどのもので、判然とはしない研究史を自ら解きほぐさなければ、北陸の型式を認識するのはいささか困難な状態となっている（註4）。しかし、これらの混乱した研究史を現在的に批判するだけではなく、問題を生じさせた原因を追求し、その型式編年観を問い直す事、そして、歴史的な成果を継承発展させていく事が研究史に学ぶ基本ではあろう。別の機会に整理して考えたい。

さて、新崎式土器については、能都町真脇遺跡調査報告書の第9群土器、新崎式期を報告された山田芳和氏と、同報告書の北陸の縄文土器編年を執筆された高堀勝喜氏の記述が簡潔な研究成果として上げられ（註5）、現在的には加藤三千雄の様式編年が、北陸の代表的研究者の基本的な考えなのであろう（註6）。

新崎式は大きくはⅠ・Ⅱ式という新古型式に編年され、正位蓮華状文の成立によってⅠ式とし、横位無文帯の縁に付加される楔形刻目文の導入によってⅡ式とされている（註7）。新崎式の蓮華状文は、新保式新段階での軌軸文からの変化として逆位蓮華状文が生まれ、正位蓮華状文に変化したものであろう（註8）。軌軸文施文での特色である箆先を使う細い沈線と小さな三角形の彫去が、蓮華状文の施文手法の要件を満たしていると考える。軌軸文施文からの「手抜きの論理」が働いての蓮華状文で、さらなる手抜きで正位蓮華状文に変様したのである。正位蓮華状文の花弁先端を三角形彫法から半截竹管押圧による刻印蓮華状文（註9）になるのは、やはり同じ論理が働いたのであろう。新保式新段階では半截竹管で施文した逆U字状文が、軌軸文と同一個体に認められることや（註10）、間隔を置いた三角形の彫去文から引き下ろす沈線でなる蓮華状文が見られることから、軌軸文から一元的に生起発達したものではないと先に指摘した（註11）。山田芳和氏は先の報告の中で「蓮華状文は多条半隆線文に変化を与えるために考察された文様意匠で、各条半隆線の何条かが蓮華状文に置きかえられたのである。また、半隆線の多条化によって無位無文帯は必然的に幅広から幅をせばめることになった。」として、新保式と新崎式を分ける根拠のひとつにしている（註5）。しかし、蓮華状文は置き換えられたものではなく、軌軸文からの変様として前型式から施文位置が確定していたものと理解するべきであり、また、入字状突起などの口縁加飾の完成も新保式新段階での口縁部に付加されていた突起がせり上ってきたものと見られるのである。胴部に施文されていた木目状撚糸文などの消滅を東北日本の影響からの離脱として着目し、新崎式を北陸独自型式の確立とするのは一面的な見方であり、東北各地で出土している北陸系土器とされるものの在り方は、北陸からの流れを推定させるものであり、北陸縄文人の活動範囲が狭まり、交流地域が変化した結果として新崎式を理解すべきもので、前期末の朝日下層式土器で獲得した器形、文様、縄文を徐々に変化させて辿り着いた土着型式が新崎式土器なのである。

新崎Ⅱ式は横位無文帯に付加される楔形刻目文によって分離するのが、北陸の研究者一般の考え方である。この見慣れた単純な文様の出自については等閑視されているが、朝日下層・新保様式土器に系譜が辿れるのであろ

うか。類推されるものとしては軌軸文であるが、既に蓮華状文として変様をとげており、同一器面内に施文される場合が多いことから系譜を追うには困難なものがあり、蓮華状文成立時に抜き出されたのであれば、新崎Ⅰ式段階から存在すると考えるのが一般的であろう。無理に関連付けるならば、軌軸文や蓮華状文の三角形彫法が上げられるだろうが、楔形刻目文が無文帯全体に密に施文されることの理由としては弱いように感じられ、朝日下層・新保様式以外からの影響と推定するのが妥当と考えられる。また、伝統的な文様であるならば体部へ降下現象を起こしていると推定され、目を引く口縁部に施文されている事は新たに導入された文様である事を示していると言える。

結論的には中部高地の狢沢式土器の角押文からの影響と見たい（註4）。楕円形区画文に角押文を特徴とする狢沢式土器の影響を受けて、角押文を楔形刻目文に置換させ横位無文帯に導入して新崎Ⅱ式土器が成立したのである。中部高地出土の北陸系土器を検討された数野雅彦氏の研究では、新崎Ⅰ式に狢沢Ⅰ～Ⅱ期、新崎Ⅱ式に狢沢Ⅲ期、上山田Ⅰ式に新道式（藤内式）を並行させる編年が示されていて、納得できる流れと評価される。

楔形刻目文と刻目文については、南　久和氏が詳細な観察による違いを指摘し、古手の新崎Ⅱ式期頃に貫入的な形で連続刺突沈文系の土器が流入し、その影響を受けて新崎Ⅱ式が変化し、上山田Ⅰ式期頃に多数のものが模倣製作されたとしている。その結果、上山田Ⅰ式には初現期の渦巻文系、外来の区画文系とその影響によって崩れた新崎式系統の三系統が見られるとしている（註12）。連続刺突沈文系土器が北陸に影響を与えた時期を巡っての相違は、先の報告で山田芳和氏は発掘層位を基として、新道式系土器を新崎Ⅱ式に含める形で報告しているが、註が付され（註13）加賀朝日遺跡、巌照寺遺跡でも新道系土器と組む土器は資料的には不十分であると指摘している。その後の加賀朝日遺跡の報告でも、高堀勝喜氏は「第3群の新道系土器は、上山田Ⅰ式であることを再言する。中部高地の新道式は勝坂式並行と考えるからである。」とされている（註14）。先の検討でも記述したが、楕円形区画文に連続刺突沈刻文が施文されたものは狢沢式で、三角形区画文で構成されるのが新道式系土器と分類を明確にすることによって、問題点が明確になっていくものと理解される。器形で見ると、高堀勝喜氏は「新崎Ⅰ式期の器形は中ふくらみの円筒形胴部が基本器形で、同Ⅱ式期に胴部球形のものが出現する」との指摘を行っているが（註15）、まさに狢沢式土器の影響の下に新崎式が変化を見せたことを指しているものと筆者には理解される。

型式編年の限界　加藤三千雄氏は「新保・新崎土器様式」の結語で（註16）、型式編年と様式論との境界についての論点が絞り込まれているとしている。共存する新崎様式と上山田様式の土器を、「同時性が強くとも、新崎風のものは新保・新崎様式、上山田風のものは上山田様式と把握する」高堀勝喜氏と器形と口辺に出現する新手法・渦巻文をもって上山田様式の成立とする小島俊彰氏との差は実物に即するとわずかであると、楽観的な見通しを述べているが、一括出土品の検討を通しても、該期の資料がどれだけ集積してもその差は決して埋まることはないと考える。そのよって立つ基盤が異なり、視点が異なっているからである。型式の認定は一面では類型分類であり、新保式、新崎式などの比較的幅のある型式編年では、極めて有効に目的を達成できたが、今日の細分化を目指す土器編年では限界にきていると考える。

中尾佐助氏の「分類の発想」によれば、「類型分類は基本的性格上、タクソン（分類単位）間の境界区別が明確ではないので、多分類するとその欠陥が重複されるようになって、ゴテゴテしてくるだけで、分類の目的、つまり、分類を通じて何かを整理して理解に供しようという目的にそぐわなくなる」と指摘されている（註17）。型式分類の中でしばしば散見される新崎Ⅱ式後半、新崎Ⅱ式後半末或いは新崎風、過渡的様相、規格崩れ等の用語は、型式の細分化を目指しているように受け取れるが、まさに型式境界の灰色部分を指している言葉で、地域の専門研究者でなければ理解できない用語と言わざるを得ない。類型分類によってのみ型式編年が立っているかぎりの共通理解に立った細分は進まず、分類単位を自在に変化させた分類が行われ、かっての上山田古式や新崎式をめぐっての北陸の土器編年の混乱状態が、縄文時代中期に限らず、これからも何度でも惹起されることは想像に難くない。筆者が鹿島町徳前C遺跡の報告書で提出した編年対応表試案は、様式編年を意図したものであったが、不注意な用語を使用したことによって、高堀勝喜氏によって型式編年を読み替えただけのものとの御批判を受け

（註18）、様式編年そのものが判りにくいとの評価となっているようだ。南　久和氏の批判は方法論の違いの根拠が明確ではなく、「難解な新崎式と上山田式の境目を不鮮明なものにする効果のみが目立つ様式概念」であり、様式名称を巡っては研究史的に納得し難いものがあると結論されている（註19）。しかし、先に述べたように境目の灰色部分を払拭できないのが型式概念であると考えられる。型式分類は偶然によって出土し、あるまとまりを持った土器群を標準土器群とし、その出土遺跡を標識遺跡としているが、標準土器群、標識遺跡は地域的にも時期的にも相対的なもののまとまりでしかなく、絶対的な基準を示すものではない事は容易に理解されるだろう。その相対的な位置にしかない土器群を定まった標準とすることによって、標準資料に近いもの、遠いものという形で、時期差あるいは地域差を設定していくのが型式編年であると理解されるが、標準土器群同士の境界はいつでも灰色の曖昧なものとして残さざるを得ないのが類型分類を行う型式編年なのである。良好な資料を出土した遺跡ではこまかく画期が設定され、あたかも遺跡ごとに型式編年があるように報告されているのも、類型分類による標準が個々遺跡で設定されるためと理解される。小林達雄氏の「共通の気風・雰囲気を持った『型式』群を一括して、『様式』という概念を設定する。」（註20）ということにより、様式編年は標準資料をも相対的に見ることによって幅のある土器群の画期（境界）をとらえようとする試みであると筆者は考えている。その画期の把握が型式分類の手法と類似している為に、用語を書き替えただけとの批判を受けたものと思われるが、画期の規定はこれまでの型式編年研究の成果を受け継いでいることは論を待たない。画期の規定は具体的には器形の変化、新しい文様の受容ないしは隣接地域の文様の影響などを、器形と口縁部の新手法に視点を置いて一線を引くことであり、型式の説明ではなく型式変遷の原因を考え読み取る事である。それは段階的な画期を様式として編年する事になると理解される。

降下現象を成し終えた文様が区画内充塡文となったり、消滅していくことについては、伝統の手法が忘れ去られただけであり、歴史的なダイナミズムの一側面でしかなく、加藤三千雄氏が指摘するように、「刻印蓮華文の完成・木目状撚糸文の消滅は、北陸（石川県・富山県）の土器群の五領ヶ台様式と円筒様式からの訣別を意味する」という社会的な背景をも含み込んだ積極的な意義までを（註21）読み取るという見方はとりにくい。また、同氏が同書の第Ⅳ様式の説明の中で「楔形刻目文がないものもあり、ないからといって古いとはかぎらない。」としているが、口縁部、器形に新段階の要素が認められないときは古いものとして取り扱うのが、様式的な理解と考えられる。

文様の降下現象　鹿島町徳前C遺跡の縄文時代土器群の整理を実施した際に、異なり重複する文様がある場合に口縁部の上位置にある文様を主体とし、器形を組み合わせた分類を行った。分類から編年を考えていく際に、新しい文様の受容とその文様が胴部文様、充塡文様として推移していく現象を降下現象として把握し、編年を考えていく上での手掛りになる得ると報告書に記述したが（註10）、その後、報告書発行以前の1981年、今村啓爾氏が「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」という論考を発表されていることを知った（註22）。文様の受容と降下現象に相通じる視点であり、筆者の浅学をお詫びしておきたい。今村啓爾氏は施文順序の解明から編年研究にひとつ手掛かりが得られるとされ、「施文順序のちがいが土器型式のちがいを認定する手がかりなるという認識から一歩進んで、ちょうど遺跡において古い層の上に新しい層がかさなっているように、土器の表面においても、古い文様の上に新しく発達した文様がかさなり、さらには、新しい文様の発達の結果、下じきになった古い文様は意味を失って消え去っていく」変化が見られ、「施文順序自体に土器の歴史的変遷過程が記録、内包されている場合がある」と諸磯式土器の結節浮線文と結節沈文の在り方に視点を置いて事例を記述されている。文様帯の中で新しい施文手法が古い施文手法の上に重なる形で堆積していくとの視点である。文様そのものに視点を置いた文様の受容と降下現象とは若干の違いを指摘できるが、器面に対して垂直方向、水平方向に文様が堆積していくという意味は共通しているものである。

註

1　秋田喜一　1954　「羽咋郡中荘村上田通称地頭方遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌第6号』

高堀勝喜　1954　「金沢市古府遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌第6号』

高堀勝喜　1955　「石川県羽咋郡堀松貝塚調査報告」『福野潟総合調査』

高堀勝喜　1955　「先史文化」『能登』九学会編

2　高堀勝喜　1952　「珠洲郡松波町新保遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌第4号』

3　小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年」『大境第5号』

4　数野雅彦　1986　「北陸系土器研究序説－縄文時代中期前葉の編年対比を中心として－」『山梨考古学論集』

5　山田芳和　1986　「第9群土器　新崎式土器」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会

高堀勝喜　1986　「北陸の縄文土器編年」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会

6　加藤三千雄　1988　「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観　3　中期Ⅱ』小学館

第Ⅰ様式は先に指摘したように（「金沢市笠舞A遺跡　Ⅲ」）、朝日下層式の中で把握するのが妥当と理解される。器形の変化より粘土紐の有無を重視するのは、真脇編年の流れなのであろうか。土器器形や文様要素においても朝日下層式を引き継いでいるものであり、「朝日下層式土器様式」としてとらえるべきではないだろうか。

7　南　久和　1985　「北陸の縄文時代の編年　他9編」転形書房

8　米沢義光　1986　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）」石川県立埋蔵文化財センター

9　南　久和　1976　「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会々誌第19号』

10　西野秀和　1983　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅳ）」石川県立埋蔵文化財センター　34頁155の土器

11　同上　132頁

12　南　久和　1986　「第10群土器　上山田・天神山式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会

13　5と同じ　112頁

14　高堀勝喜　1987　「金沢市加賀朝日遺跡出土の縄文中期土器」『石川考古学研究会々誌第30号』　19頁

15　高堀勝喜　1986　「北陸の縄文土器編年」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会　203頁

16　6と同じ　288頁

17　中尾佐助　1990　「分類の発想　思考のルールをつくる」朝日選書409　朝日新聞社　174頁

類型分類という手法が間違った手法であるということではなく、類型分類には限界があると言う事である。これまでの型式編年で見られるように、大きな成果が上がったことも事実である。

中尾佐助氏は同書80頁に述べている。「類型分類は現在あらゆる分野で一番普及し、最もありふれたものとなっている。類型分類はあらゆる分野で自由自在にできるもので、その自由度の高いことから見ても、普及ぶりから見ても、それは分類の王様ということができるものである。」

18　15と同じ　194頁

19　12と同じ　125頁

型式編年研究では標準遺跡の位置は大きな意義を持つものであり、それを冠した型式名称は研究史的には重要ではあるが、様式編年では整理されていくものと考えている。ちなみに、加藤三千雄氏が記述された「新保・新崎式土器様式」（註6）は、「朝日下層様式」の範疇で考えるのが妥当であり、新保・新崎などの名称は省略していくこととなる。

20　小林達雄　1977　「縄文土器」『日本原始美術大系　1』講談社

21　6と同じ

22　今村啓爾　1981　「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究　第27巻　第4号』考古学研究会

３　出土土器にみる免田一本松遺跡竪穴住居跡群の変遷

本章第４節では弥生・古墳時代の竪穴住居跡出土資料について実測図及び観察表を示したのみであった。ここでは床面出土資料を中心に検討を加え、各住居跡が営まれた年代を考えてみることにしたい。そしてその結果に基いて調査区内における数百年間の長きにわたる竪穴住居跡群構築の軌跡の一端でも復原できれば幸いである。

まず、本章第４節に掲げた順番に従って各竪穴住居跡の年代を想定することから始めたいが、その際には各遺構の遺存状態や資料の量的な面に由来する制約が伴うことを予めおことわりしておく。

(a)　各住居跡の推定年代

第１号竪穴住居跡（以下１号住居跡というように略称を用いる）では床面出土の土器はみられなかった。しかし、いずれも古墳時代に属する土器のようであり、本住居跡も同時代に営まれた可能性が高いと考えられる。もちろん、断定はできない。

２号住居跡からは700～707、また**４号住居跡**からは720～724が床面出土資料として検出されていたが、いずれも大きく切り合った遺構からの出土であり、その一括性については保留せざるを得ない性格の資料といえる。２号住居跡床面における701の存在はそのことを端的に示しているだろう。とはいえ、口縁端部が水平に伸びる高杯形土器（以下高杯というように略す）703は、大海川流域では高松町中沼Ｃ遺跡のＳＤ－03[1]などに類例をみることができ、702～707全体から２号住居跡は弥生時代後期の法仏式併行期に営まれた可能性が高いと判断できる。また、４号住居跡は切合い関係でそれより新しい点や床面出土資料から考えて、法仏式併行期か或いはそれよりやや後出する段階に位置付けるのが妥当であろう。残る**22号住居跡**については、734から古墳時代前期頃の遺構と考えることもできるが、その出土状況が不明である点、竪穴住居跡としては規模が小さ過ぎる点、加えて主柱穴が未確認である点などから、竪穴住居跡がどうかということも含めて、ここでは結論を差し控えたい。

３号住居跡は床面出土の椀735から７世紀頃に構築されたものと思われる。覆土中出土の内面に返りのある須恵器杯蓋737や底部ヘラ切りによる須恵器杯身738も勘案すれば、７世紀でも後半とすることができるだろう。ここからの須恵器甕類のややまとまった出土も注目される。

５号住居跡では床面出土の資料に恵まれないか、出土土器はいずれも古墳時代に属するものである。わずかに残った覆土最下層（貼床的性格の土層か）出土と住居内土坑（ピット１）出土に二分されるが、集落跡出土資料としては、南加賀の加賀市敷地天神山遺跡[2]におけるＣ調査区から出土した古墳時代資料に対比すべきものを認めることができる。形態的に類似する資料として、750は「Ｃ調査区土器溜り」に、752は「Ｃ調査区第４号竪穴住居跡」に、壺753は「Ｃ調査区第12号竪穴住居跡」に類例が求められる。以上の点からも本遺跡５号住居跡も６世紀代に営まれた可能性が高い。

６号住居跡は先述したとおり、果たして竪穴住居跡なのかどうか多いに疑問である。住居内ピット（位置は不明）出土の756・760・761はいずれも弥生時代後期の法仏式併行期に含まれるが、覆土中の殆んどの資料とは大きく年代を異にしている。

７号住居跡では少なくとも三回の建て替え、あるいは切り合いが想定され、加えてその個々が複数の壁周溝を有するといったひじょうに錯綜した状況が明らかとなっている。残存する壁の高さが約60cmを測り、覆土が厚く遺存していたため、出土遺物には恵まれているが、その各々がどの住居跡に帰属するかを出土状況から語ることは困難である。とはいえ、766～784に示した概ね弥生時代後期の法仏式併行期頃と考えられる一群と、もう一方785～812に示した古墳時代に属すると考えられる一群とに大別することができる。後者は古墳時代前期頃の資料を主体としており、遅くとも押水町宿東山遺跡Ｄ群[3]をを下限とするものが大半を占めるが、手づくね土器787や杯部の口縁部と底部の境が不明瞭な高杯788などに代表される宮地式以後の遺物も一部含んでいる。円形プランで６本主柱と考えられる７号Ａ住居跡については、押水町宿東山遺跡「６－Ｉ住」[4]や同町宿向山遺跡９号住居址[5]の事例から、法仏式併行期の資料がこれに伴うと考えてほぼ間違いないであろう。７号Ｂ・Ｃ住居跡の両者については、東海系土器の存在に特徴づけられる古墳時代前期頃の一群と宮地式（漆町編年案[6]でいえば13群土器）以後と思われる一群をその各々いずれかに充てて解釈することもできるが、宮地式以後のものについては、隣接す

る8号住居跡或いはこの付近で構築された別の住居跡から混入した可能性も十分に想定される。土層断面図で見る限り8号住居跡覆土最下層から続く第6層は明らかに7号住居跡の覆土上層（第1層）を被覆しており、調査時の所見からも宮地式以後の土器は8号住居跡関連資料と考えた方がよさそうである。

8・20号住居跡では、先述のとおり20号住居跡の認定そのものに疑問が残るため、ここでは一括して扱うことにする。8号住居跡において床面資料は検出されなかったが、壁周溝出土が2点みられる。8・20号住居跡で図化した4点のうちの3点までが内面黒色の椀・鉢類によって占められている。『永町ガマノマガリ遺跡』[7]における田嶋明人氏の分類にしたがえば、818はA_3類、819はA_2類、821はA_1類に含まれる。また、器面の調整ではいずれもd手法を主体としているといえる。これら出土土器の特徴から8・20号住居跡は漆町編年[8]の15群土器に併行する時期を中心に営まれたものと考えられる。

9号住居跡は出土遺物に恵まれず、時期不詳である。

10号住居跡からは、822～825・827が床面出土資料として検出されている。このうち823については覆土第1層に伴う可能性が高く、廃棄された住居跡の埋積過程において、最後まで残った窪みの入り込んだ場合も考えられるので、住居跡の年代を考える際の直接的な資料とはならないかもしれない。他の床面資料、とりわけ床面西南隅においてまとまって出土した822・825・827が住居跡の年代を考える際の参考になるかと思われる。まず、822は比較的浅い器形で口縁部の屈曲が弱く、内外面にヘラミガキ（内面はやや不明瞭）が施される椀である。ヘラミガキが施される椀形土器は、羽咋郡域では富来町高田遺跡祭祀遺構[9]や志賀町中村畑B地区大溝[10]などから出土している。椀形土器の器面調整法としてヘラミガキが盛行し始める時期については、漆町編年の14群土器の時期からとする田嶋明人氏の指摘がある。[11] 内外面をヘラミガキする広口の壺825は、822などヘラミガキ手法のみられる椀形土器との共伴例は殆んど見当たらない。系譜的にも不明な点が多く、ヘラミガキを施す椀形土器との共伴例も一般的といえぬ面もあるが、類似した資料は加賀市敷地天神山遺跡C調査区土器溜り[12]において認めることができる。ただし、その外面の調整はハケによるものであり、底部の形態も異る。残る甕827は小さく不安定な平底が特徴的といえる。以上の床面南西隅の資料は組成における多く器種を欠落させているため、これらのみから細かな年代を導くことは難しいが、一応6世紀前半頃と考えられるのではなかろうか。

11号住居跡からは器種組成を知ることができる良好な資料が検出されている。この住居跡は一辺が9m以上を測る調査区中最大規模のもので、他の住居跡との切合いはもとよりこの住居跡自体の建替えの痕跡も認められない。残存壁高も最高で約50cmを測り、西辺及び南辺沿いでは覆土が厚く遺存していた。床面上には覆土第3層（黒灰褐色土）或いは第2層（暗褐色土）が薄いながらも安定した堆積状況を示している。床面からは椀868・869、手づくね土器871、高杯873・883、壺872、甕874・875などの土師器のほか、須恵器杯身870が出土している。これらはいずれも住居跡廃絶時と近接した時期の資料と考えられる。868は口縁部が内湾する平底の椀で、外面は暗褐色、内面は黒灰色を基調とする。内面については黒色処理が施されている可能性もあるが、色調のムラがみられる点や断面の観察でも黒色化している部分がごく表面に限られる点などから断定はできない。869は明橙褐色を呈し、口縁部はやや内湾ぎみで、底部は丸底である。871はいわゆる「ぐい呑み形」の手づくね土器で、器表面には成形時の指ナデや指オサエの痕跡を残している。883は深身の椀形の杯部を有する高杯で調整はヘラミガキを主体とする。脚裾部は大きく横に開く。872は直線的に緩く外傾する比較的短い口縁～頸部を有する壺で、胴部は上下にやや寸づまりな球胴である。874は大きく開く口縁部を有し、頸部のしまりは弱い。胴部外面にはタテ方向のハケ調整がみられる。甑とも考えられる。長胴で頸部のしまりが弱い甕875は、底部が厚く平底に近い形状を呈する。874同様外面胴部以下にハケによる調整が施されている。

11号住居跡床面出土資料の特徴は以下の通りである。

① 椀・高坏の調整はヘラミガキを主体とする。868で可能性が想定され、覆土中出土の879で認められる以外は内面の黒色処理は一般的とは考えられない。椀の形態では口縁部が屈曲して外反するものがみられない。

② 「ぐい呑み形」の手づくね土器がみられる。

③ 中型壺（直口壺）を伴っている。

④　長胴の甕と甑と思われるものが認められる。

⑤　須恵器ではＴＫ47型式[03]の杯身が含まれている。

以上の点から11号住居跡床面資料は南加賀における漆町編年14群土器に併行する時期に属する資料と考えられ、対比すべき資料として、能登では羽咋郡富来町高田遺跡祭祀遺構[04]、加賀では手取川流域の能美郡辰口町辰口西部遺跡群の下開発Ａ地区16号土坑[05]をあげることができる。

12号住居跡は明確なプラン（壁）が確認されているわけではない。21号住居跡の北から北東にかけてみられるピット群の周辺で暗茶褐色土或いは黒灰褐色土の浅い落ち込みがみられた程度で、住居跡と考えない方がよいかもしれない。ピット中より土器が出土しているが、そのうちのヘラミガキのみられる椀899は後述する13号住居跡関連のものかと思われる。**13号住居跡**は平面プランにおいて北西コーナーが隅円とはならずむしろ直角に近い形状を示す。遺物はすべて覆土中からの出土であり、そこから住居跡の年代を論ずることは難しいといえる。とはいえ、ヘラミガキを施す901をはじめとする椀類、906～908の甕類、そしてＴＫ47型式期に属する須恵器の杯蓋911などから、南加賀の漆町編年の14群土器に併行する時期である可能性が高い。**21号住居跡**は913が住居内ピット出土であるほかはいずれも覆土中出土である。現地で実際に住居跡の調査に携わった本田秀生氏によれば、床面よりやや浮いた状態で出土した山陰系の大甕919が住居跡の年代を示すのではないかとのことであった。919は口縁部下端の稜が鋭さを欠き、頸部のくびれも弱い。田嶋明人氏の大型の山陰系の甕形土器「B_1a類」の変遷図では「第３類」[06]に該当しよう。一方、それに対して918は口縁部下端の稜が鋭くやや古相を呈するといえるかもしれない。また、住居内ピット出土の913は深身の体部とそこから屈曲して開く短い口縁部を有する小型の鉢で、底部は丸底である。913及び919から漆町編年の９～10群土器に併行する時期が想定されようか。なお、覆土中から出土した波状文で加飾する須恵器甕920は13号住居跡に伴う資料と考えられる。

14号住居跡については、須恵器杯蓋922等が床面から出土している。922は遅くともＴＫ47型式を下らない時期の資料と考えられ、若干それよりも古相に属する可能性も残る。須恵器では杯身923及び高杯924が覆土中から出土している。それらもＴＫ47型式頃に位置付けられよう。住居跡の年代に関しては、概ね南加賀の漆町編年の14群土器に併行する時期と思われるが、一部同13群土群の新しい段階に遡る可能性も残る。

15号住居跡では長胴の甕926が床面から出土している。外面の調整はナデによるものでハケはみられない。また、底部は平底に近い形状を呈している。この住居跡は恐らく古墳時代後半頃とも考えられるが、出土資料が少なく細かな時期の限定はできない。**19号住居跡**においては、台付甕の脚台かと思われるものが、床面及び覆土中から出土している。このような脚台については、押水町宿向山遺跡３号住居址床面[07]や羽咋市吉崎・次場遺跡「Ｓ－２号土坑」[08]などからの出土例が知られている。古墳時代初頭頃を中心とする古墳時代前期に位置付けられるのではなかろうか。錯綜とした切合いをみせる15・16・18・19号住居跡は相互に大きく重複するばかりか、検出された遺物量も少ない。したがって、出土土器から個々の住居跡の年代を想定するには限界があることも事実である。

17号住居跡は覆土中から壺の口縁部片が１点出土しているのみで、住居跡の年代については不詳である。なお、931は弥生時代後期頃のものであろうか。

23号住居跡においては、床面から椀932が出土している。内外面に粗いハケ目がみられ、外面の一部には巻き上げ痕が残る。内面ではハケ目のうえからミガキが施されている。底部は不安定な平底である。七尾市万行赤岩山遺跡９号掘立柱建物跡[09]などに類例がみられる。また、覆土中から出土した須恵器瑞934は成形時の穿孔の際に生じた粘土の小円板を胴部内に留めたまま焼成を行っているようであり、胴部は振れば音が出る土鈴的な機能も有している。類似する資料は、集落跡よりむしろ古墳に多い。口縁部・頸部・胴部中位を加飾するという面では七尾市三室まどかけ古墳[20]出土の瑞に通ずるものがあるが、それに比して本例は明らかに頸部が短かい。形態的には鹿島町高畠経塚古墳[21]の瑞が最も近いといえよう。また、七尾市りきの宮古墳[22]や羽咋市柴垣ところ塚古墳[23]の瑞にみる肩部の張りもみられない。したがって934は６世紀末葉から７世紀前葉頃のものと考えられる。23号住居跡もそれと近接した時期に構築された可能性が高い。

24号住居跡の床面焼土中からは甕939が出土している。古墳時代のものと考えて間違いないが、これ1点のみから住居跡の年代を推定することは難しい。しかし、羽咋郡内の他の資料と比較した場合、志賀町倉垣遺跡大溝[24]出土の甕形土器よりも同町中村畑遺跡のB地区大溝下層出土の「甕B_2」[25]に含めて扱うべき資料といえよう。また、周堤外側の周溝から出土した944は同じく「甕B_2」、945は「甕B_3」に当たる。また、口縁部が内湾ぎみに立ち上がり口唇内面が肥厚し口縁端部に水平に近い面を有する甕943は、小矢部市道林寺遺跡第1号住居跡[26]などで類例をみることができる。その他覆土中からは甑の把手がややまとまって出土している。24号住居跡については、口縁部が直立ぎみで端部が短かく外反する939の形態から、一応、漆町編年の14～15群土器する時期と推定しておきたい。

26号住居跡では、土器6点が床面或いは壁周溝から出土している。高杯947は口縁と杯底部の境目は明瞭であるが、杯部内面にハケ調整を残す。中型壺は直線的に立ち上がる広口の口縁部を有する949で、胴部外面の調整はハケによる。950は口縁部が外反し端部が先細り状になる小型の甕で、頸部のしまりが強く底部は丸底である。山陰系の大型壺の一種と考えられる951は厚手で内傾する有段の口縁部をもつ。これらからは漆町編年の12～13群土器に併行する時期が考えられる。なお、覆土中からは手づくね土器953、甑955、小さな平底で内面の一部にケズリらしき痕跡を残す「く」の字口縁甕957、浅い杯部の口縁端部が屈曲して外方へのびる高杯960、深い杯部を有する高杯961が出土している。内面にも密にハケ調整を留める甕964の頸部外面には記号文風のものが描かれている。内面のハケ調整は甕963においても観察することができる。ほかに金属製品として曲刃の鉄鎌も出土している。

27号住居跡においては覆土中から受口口縁を有する近江系の甕969が得られたのみである。口縁部端部を外方へ小さくつまみ出す特徴がみられ、胴部外面にはタタキを想わせる粗いハケ目が施されている。また、煮炊きに際して火にかけられたようであり、外面は赤化している。近江（滋賀県）でも北陸に近い湖北地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年については、浜崎悟司氏による試案がある[27]。それによれば、969は氏が「4」とする段階に比定できるものと思われる。「4」の段階に関しては、浜崎氏が掲げた東海系の高杯に類似する資料が能登半島では押水町宿向山遺跡3号住居址床面[28]や鹿島町徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構[29]で出土しており、およそ古墳時代初頭に該当するものと思われる。

28号住居跡に関する資料はすべて覆土中出土であるが、ほとんどが弥生時代後期の法仏式併行期に属するようである。赤彩を施す高杯の杯部970は口縁端部が水平にのびる。直立する比較的長い口縁部を有する壺973の器面調整にはハケが用いられている。（実測図に示された口縁は擬口縁であり、実際には口縁部はより長くのびるであろう。）図示した甕の口縁部はいずれも有段口縁或いはそれに類するものであり、長さは比較的短いのが特徴である。975はとりわけ厚手に作られている。擬凹線が施された有段口縁で、肩部外面に刺突のみられる978・980は、施文原体として貝殻を使っている。一方、977の口縁下端及び肩部における刺突文は、ヘラ状具によるものである。以上、28号住居跡出土の土器群には、冬野遺跡2号竪穴住居跡の資料（本書第3章第3節）と対比すべき様相が含まれ、この点は今回の調査で確認された冬野・免田一本松集落跡での弥生時代における竪穴住居群構築の開始時期を知る手懸りになると考えられる。

(b)　竪穴住居跡群の変遷

これまで出土土器に基いて各住居跡が営まれた時期について推定してきたわけであるが、床面における良好な資料に恵まれなかったことや筆者の力量不足もあって、今後修正すべき点もあろうかと思われる。それについては刊行後に御叱正を賜ることとし、ここでは現時点でわかる範囲のなかで免田一本松遺跡での集落跡変遷の素描を試みることにする。

第Ⅰ期　弥生時代後期後半の法仏式を中心とする時期

2・4・7A・28号住居跡があげられる。前三者が北東地区の北部、最後者が西南地区を占地し、空間的に2つのグループに分けられる。北東地区北部に所在する7号A住居跡は円形プランで6本主柱からなり、住居形態の面でも特筆される。また、2・4号住居跡は切合い関係から、2→4号の順で築かれたことが知られる。その

他では６号住居跡とされる落ち込み中のピットから該期の壺・甕形土器が３個体まとまって出土している。

第Ⅱ期　古墳時代初頭頃の時期

19・27号住居跡から該期と思われる資料が出土しているが、遺物量が少なく実態不明である。

第Ⅲ期　古墳時代前期の古府クルビ式から高畠式にかけての時期

７号Ｂ・Ｃ住居跡や21号住居跡があげられる。前者に属すると思われる資料には時期幅が認められるが、中心をなすのは概ね該期のものであろう。住居跡の立地では北東地区中部の東側に寄る傾向が看取される。

第Ⅳ期　漆町編年12～13群に併行する時期

北西地区の北寄りに26号住居跡１棟がみられるのみである。

第Ⅴ期　漆町編年14～15群に併行する時期で、およそ６世紀前葉～中葉頃を中心とする。

８（20）・10・11・13・14・24号住居跡があげられ、５号住居跡も恐らくこの時期であろうか。調査区内における立地では、北東地区中部東寄りの一群と北東地区北部から北西地区北部にかけてを占地する一群とに大別できる。このなかでも14号住居跡は須恵器杯蓋の形態からやや古相に、また土師器椀・鉢類の内面で黒色処理技法が多用される８・20号住居跡はより新相に位置付けられるものと思われる。11号住居跡床面からはまとまった資料が得られており、能登南部の漆町編年14群土器併行期（四柳嘉章氏の提唱する「高田式」）[30]の様相を考える際の一つの指標となろう。なお、発掘調査時点で本田秀生氏は11・13・14・15号住居跡の南辺がほぼ平行することを指摘されていたが、これは該期の竪穴住居配置の企画性に由来するとも解される。

第Ⅵ期　６世紀末葉から７世紀前葉の時期

23号住居跡１棟のみであるが後述する第Ⅶ期ともども北東地区北西端周辺を占める。

第Ⅶ期　７世紀後半の時期

３号住居跡があげられる。調査区内ではこの時期を境に以後は遺物量は激減する。

(c)　掘立柱建物跡をめぐる問題

今回の調査では免田一本松遺跡からは12棟の掘立柱建物跡が検出されている。本章第４節で本田秀生氏が記した通り北東地区の北部を占地する一群と北東地区中部西寄りから西地区南部にかけて占地する一群との２つのグループが存在する。この点においては掘立柱建物跡群が竪穴住居跡群を挟んで「南群」と「北群」に分けられる冬野遺跡のあり方と共通する面をもつ。現時点では本遺跡においては柱穴中の遺物など掘立柱建物跡の年代を考える材料が乏しいのが実情であるが、竪穴住居跡を補完、或いはそれと置換されることによって、殊にある時期以降は集落構成上大きな役割を担ったのが掘立柱建物であり、そのためそれを抜きにして集落の変遷を語ることはできない。ゆえにここでは敢えて大まかなその年代推定を試みることにしたい。まず、検出された12棟のうちに含まれる１×１間のものについては、冬野遺跡の７号建物跡の例からも弥生時代に遡る可能性を有している。この種の建物跡は、４本主柱の浅い竪穴住居が削平された結果生ずる場合も想定できる。それらを除く建物跡については、本調査区において８世紀以降の遺物がほとんど出土していない点から、一応そのほとんどが７世紀をもって下限とすることができるのではないかと考えられる。さらにいえば、第212図に掲げた包含層出土の須恵器から、６世紀末葉から７世紀中葉頃の年代が推定できるものと思われる。掘立柱建物跡群の２つのグループのうち北のグループ周辺のＡ11～12・Ｂ12・Ｃ11区からは1092～1104が採集され、また南のグループ周辺のＦ11・Ｇ12区からは1108～1109が出土している。現段階では一応これらの資料が１×１間のものを除く掘立柱建物跡と関連すると想定せざるを得ない。そうすれば第Ⅴ期から第Ⅵ・Ⅶ期にかけての竪穴住居跡数の減少についても、掘立柱建物という新しい住居形態の普及現象である程度説明がつくのではなかろうか。[31]そして、この普及の画期の面においては、既応の調査事例でみる限り冬野・免田一本松両遺跡が、砂丘・台地・低丘陵上で営まれた押水町周辺の他の遺跡に比して早い時期に属することは、すでに第２章に述べた通りである。（もう一度ことわっておくが上記の掘立柱建物の年代観はあくまでも推定の域を出ず、したがって今後適宜是正されるべき性格のものに過ぎない。）

なお、桁行×梁行の間数・柱穴の大きさや形状・柱間寸法・推定床面積などの掘立柱建物跡の規模や形態、ま

た主軸方向や配置などにみる集落内における構成を通じての分析は今後の課題として残るため、ここでは免田一本松遺跡の掘立柱建物群を瞥見して感ずるところを二点ばかり記すに留めたい。

まず、北東調査区北部を占める北側のグループでは、第4号及び第5号掘立柱建物跡など2×2間の総柱式の建物がみられる。これらはいわゆる「田」の字形の建物で、一般に倉庫として用いられたと考えられている。この周辺は台地斜面の裾部にあたり、防湿の面からも必ずしも物資の保管に適した場所ではない。にもかかわらず倉庫域が営まれている背景にはむしろ隣接する低湿地との積極的係わりが想定できそうである。その低湿地とは冬野台地との間の幅約100～150mの谷にほかならないが、試掘時の所見からも谷部の土質は冬野台地側で相対的に硬く、免田一本松台地に近付くにしたがって梅雨時は重機も進めない程に軟弱で湧水に富んだものとなる状況が窺えた。この点は、発掘作業に参加された地元の方々からの、谷部の水田で耕地整理が行われ排水路が付け替えられる以前は免田一本松台地の北裾に沿って川舟で遡行可能な水路が存在したという談話を裏付けている。そして、その水路は大海川下流域の低湿地を縫うようにして河口から日本海に通じていたはずであり、そう考えれば上記の倉庫と考えられる2棟の建物跡はその舟付場と関連した施設であった可能性が高いと思われる。ところで、その水路に程近い北西地区内において須恵質の土馬の脚部と考えられる1110が出土している。もしそれが実際に土馬であるとすれば、「土馬は川の神に捧げる生け贄の代用品であった」とする越坂一也氏の見解[02]が想起され、免田一本松遺跡と大海川下流域・日本海を直結する水路のほとりで執り行われた祭祀についてイメージすることもできる。

次に北東地区中部西寄りを占める南のグループに属する第7・8号掘立柱建物跡について少し触れたい。第4節で本田秀生氏が記したように前者が3×2間の側柱式で推定床面積25.7㎡、後者は3×1間で推定床面積22.34㎡を測り、両者は主軸方位をほぼ同じくしているが、最も近接した前者の北西隅と後者の南東隅の桁行はわずか1mの距離でもって平行している。このような関係を示す2棟の掘立柱建物の例としては冬野遺跡の5・6号掘立柱建物跡（本書第3章第4節）をあげることができる。ここで問題となるのはそれぞれ2棟が同時併存したか或いは建て替え等の結果なのかという点である。2棟が近接（因みに冬野遺跡では約1.8m）し過ぎているために軒端が重なりあってしまい同時に存在し得なかったと解することもできるが、筆者は両遺跡のそれぞれ2棟間にみられる差異に着目して性格を異にする建物が相互補完の関係で同時併存し、2棟で1単位をなしたとする立場をとりたい。例えば免田一本松遺跡では第7号と第8号は推定床面積や桁行の柱間寸法の面ではさほど大きな違いがみられない反面、両者は柱穴の大きさ（直径）の点では大きく異る。前者が掘方が径約25cmと小ぶりであるのに比べ後者のそれの大半が径50～60cmの大ぶりのものによって占められており、この点が両者の機能差に起因するとも考えられる。一方、冬野遺跡では柱穴掘方の直径の面では大きな違いのみられない5・6号建物跡であるが、推定床面積及び桁行の平均柱間寸法において後者は前者の2倍近くを測る。このように属性を異にする両遺跡のそれぞれ2棟を単純に近接する時間・場所における建て替えとして評価できないことは改めて繰り返すまでもないであろう。むしろ、主屋と副屋の関係で相互に有機的に結びつき合いながら1単位を構成したとすべきであって、こう考える場合、免田一本松7号・冬野6号建物跡が主屋で免田一本松8号・冬野5号建物跡が副屋であった可能性が高いといえる。このうちの免田一本松8号建物跡については、柱穴掘方の直径からみて主屋と察せられる同7号建物跡に比してかなり太い柱を用いていたようであり、倉庫棟であったとも考えられる。

また、両遺跡のそれぞれ2棟の配置に関しては、主軸方位をほぼ同じくしつつ斜めに並んでいる状況が窺える。このようなあり方は、大聖寺川水系の要地を占め、6～7世紀では掘立柱建物群から集落が構成される加賀市永町ガマノマガリ遺跡について分析した田嶋明人氏が、「建物小群」の配置の類型として、“「コ」の字配置”・“「L」の字配置”とともにあげる“並行「雁行型」配置”に該当する[03]。田嶋氏によれば、2棟の建物跡が“並行「雁行方」配置”をとる例は、同遺跡では、6～7世紀に属すると考えられる掘立柱建物群のうちでも、最も新しく7世紀後半頃を中心に営まれたと推定される「D群」を除く、「A群」～「C群」にみられるという。

「建物小群」が3棟以上から構成される事例は、本書第3章第4節で述べたように冬野遺跡の8世紀を中心とする時期の掘立柱建物跡群中で指摘することができる。それより遡る6～7世紀については、度々触れたように

冬野・免田一本松両遺跡で２棟をもって１つの単位を構成するものがみられる。２棟を１単位とする「建物小群」が能登半島をはじめとする北陸地方の古墳時代集落でどの程度の普遍性をもって分布するかという点の解明は、今後の調査例の増加をまって検討されるべき性質のものといえるが、近年金沢平野などの沖積低地で方形の溝を廻らした区画の中に掘立柱建物群を配する住居形態が知られるようになってきており[34]、そのような例にこの問題を考える際の重要な鍵の１つが存することは想像に難くない。

(d)　おわりに

本稿を記すにあたっては西野秀和・栃木英道・北野博司・本田秀生・浜崎悟司・川畑誠・安英樹の各氏よりご教示を頂いている。ここに衷心より感謝申し上げる次第である。しかし、筆者の不勉強・怠慢のために再度検討せざるを得ない事項を多く含んだ内容となってしまっていることもまた事実であり、その点を反省するとともに今後の課題としたい。

註

(1)　折戸靖幸　1987　『高松町中沼Ｃ遺跡』　石川県高松町教育委員会

(2)　平田天秋・田嶋明人・中島俊一他　1987　『敷地天神山遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター

(3)　北野博司他　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(4)　(3)に同じ

(5)　藤田邦雄他　1987　『宿向山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(6)　田嶋明人・越坂一也他　1986　『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

(7)　田嶋明人他　1987　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(8)　以下、“漆町編年”という場合は特にことわらないがいずれも(6)に示された編年案をさす。

(9)　四柳嘉章　1983　「古墳時代の沙庭と祭具」『北陸の考古学』　石川考古学研究会

(10)　谷内尾晋司　1982　『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

(11)　(7)の文献など

(12)　(2)に同じ

(13)　田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店

(14)　(9)に同じ

(15)　北野博司他　1988　『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

(16)　(6)に同じ

(17)　(5)に同じ

(18)　福島正実氏の教示による。

(19)　土肥富士夫他　1983　『万行赤岩山遺跡』　七尾市教育委員会

(20)　橋本澄夫　1970　「第２章　古墳文化」『七尾市史』資料編第四巻　七尾市役所

(21)　谷内尾晋司　1982　「第三章　古墳文化」『鹿島町史』資料編(一)上巻　鹿島町役場

(22)　(20)に同じ

(23)　谷内碩央　1984　『柴垣ところ塚古墳・柴垣ごぜん塚古墳』　羽咋市教育委員会

(24)　土肥富士夫　1985　『倉垣遺跡』　志賀町教育委員会

(25)　(10)に同じ

(26)　上野　章・岸本雅敏　1978　『日の宮遺跡発掘調査報告書』　富山県教育委員会

(27)　浜崎悟司　1988　「第Ⅰ章　長浜市森前遺跡・国友遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸＶ－１　(財)滋賀県文化財保護協会

(28)　(5)に同じ

(29)　湯尻修平他　1986　『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』　石川県立埋蔵文化財センター

(30) (9)に同じ

(31) 第V期の大型の竪穴住居跡とセットをなす可能性も若干は保留しておく

(32) (7)に同じ

(33) (7)に同じ

(34) 南久和氏のご教示による。

４　古墳時代以降の遺物

免田一本松遺跡と冬野遺跡の調査で陶邑編年ＴＫ47型式併行期から８世紀後半代にかけての須恵器が出土している。北加賀、能登地域における古墳時代を中心とする須恵器の生産と流通については、七尾市矢田遺跡（木立、三辻他・1986)、押水町竹生野遺跡（木立・1988)、鹿島町水白モンショ遺跡（北野・1989）において、また県内全域に関しては田嶋氏の論考（1989）がある。いずれも出土須恵器の胎土の綿密な観察に基づく識別をおこない、近年の研究で次第に明らかになりつつある県内の窯跡群ごとの胎土の特徴と照らしあわせ（註１)、生産、流通の様相を明らかにしている。ここでは、同様な手順を踏むことで北加賀地域の様相の一端を論じることとする。

(1)　出土須恵器の分類

出土須恵器は、胎土・焼成等から第９表のようにＡ～Ｊ群に分類が可能である。Ａ群は砂礫の含みが少なく、胎土は粘質で精良、丁寧に作られている。ＴＫ47型式併行期に位置づけられる。そして色調や砂粒の含み具合からＡ－１群、Ａ－２群に小分類可能である。Ａ－１群は灰色～暗灰色を呈する。砂粒をほとんど含まず、堅緻な印象を受ける。Ａ－２群の胎土はＡ－１群に準ずるものの砂礫をより多く含む。灰色～淡灰色を呈する。Ｂ群は角張った白色石英や長石などを大量に含むことが大きな特徴で、コンクリート的な質感をもつ。そのため、割れ口は鋭利さを欠き、バサバサとなる。端部面取りは鋭さを欠いており、ＴＫ47型式併行期を中心としてＭＴ15型式併行期を一部含むと考えられる。Ｃ群に含まれる砂礫はＢ群と類似しているが、角張った砂礫はその量が相対的に少なく、粒子も比較的小さく、大きさが揃っている。また、Ｂ群より焼成良好で断面が紫がかり、作りも薄手である。ＴＫ47型式併行期を中心をして一部ＭＴ15型式併行期を含んだ時期に供給がおこなわれている。なお、海綿骨片を若干含む個体も少量ある。Ｃ群の産地を考える上で一つの手がかりとなるであろう。Ｄ群の胎土はＣ群に準じるが、やや粘質。焼成時の発泡が認められることから一群と設定した。ＴＫ47型式併行期と考えて大過

第９表　冬野遺跡・免田一本松遺跡出土須恵器胎土分類表

	色　調	胎土の特徴	その他の特徴	時　期	冬野遺跡	免田一本松遺跡他	竹生野遺跡分類
Ａ－Ｉ群	灰色～暗灰色	・砂礫の含み少なく、粘質。 ・長石若干含む。	・作りは丁寧。 ・焼成良好。	ＴＫ47	——	870、1089	Ｃ群
Ａ－２群	灰色～淡灰色	・Ａ－Ｉ群より砂礫含む。 ・黒色砂粒浮き出す。	・割れ口はザラザラ。 ・端部鋭さに欠ける。	ＴＫ47	——	1087、1091	Ｂ群（？）
Ｂ群	灰色	・角張った砂礫を多量に含み、粗い手ざわり。 ・砂粒表面に浮き出す。	・端部鋭さに欠ける。 ・コンクリート的質感。	ＴＫ47～ＭＴ15	——	717、911、922、923、1088	Ｅ群
Ｃ群	灰色（断面紫色）	・Ｂ群と類似しているが、砂礫が少なく小さい。 ・一部海綿骨片含む。	・焼成がよく、堅緻。 ・薄手である。	ＴＫ47～ＭＴ15	505、604、605	878、987、1090	Ａ、Ｂ群
Ｄ群	灰色	・胎土の質感はＣ群と極似する。	・焼成時、発泡。	ＴＫ47	——	1086	Ａ群
Ｅ群	灰色	・キメが細かく、精良。 ・砂粒がほとんど含まない。	・作りは丁寧。 ・断面灰茶色。	ＴＫ47	——	924	？
Ｆ群	灰色	・砂粒多く含み、ザラザラ。 ・粗いコンクリート的質感。	・焼成は良好。	７Ｃ後半	——	738	？
Ｇ群	淡灰色	・胎土は粘質で、長石や半透明な石英を少量含む。	・焼成不良品を含む。 ・割れ口は丸い。	ＴＫ209～	506、532、533、536、537、540、543、603他	718、719、912、1093～1095、1097、1104、1108他	Ｆ群
Ｈ群	灰色（断面セピア）	・Ｇ群より胎土は粘質。 ・長石、石英の含みは多い。 ・黒色砂粒を含む。	・焼成はよく、堅緻。 ・割れ口は鋭い。	ＴＫ209～平城Ｉ	521、538、539、542、603、607他	737、1092、1096、1098、1105他	？
Ｉ群	灰色～暗灰色	・Ｇ群の質感に類似。 ・砂粒を多量に入れる。 ・大粒の石英が目立つ。	・砂っぽい印象。 ・焼成はよく、堅緻。	７Ｃ後半～	534、535、541、639、640、641他	1102	Ｆ群
Ｊ群	上記に分類不可能なもの、また分類困難なもの。					741、1110	

ないと思われる。Ｅ群は粘質な胎土で、断面灰茶色を呈する。砂礫をほとんど含まない。丁寧な作りの高杯脚部1086だけであり、やはりＴＫ47型式併行期に位置づけられる。Ｆ群も１点のみである。砂粒を多く含みザラザラした手ざわりで、粗いコンクリート的質感をもつ。Ｉ群と類似した印象を受ける。７世紀後半代の所産であろう。Ｇ群およびＩ群の胎土はいずれも粘質な印象を受けるが、混和材である砂礫の含みに違いが認められる。Ｇ群は淡灰色を呈するものが多く、長石や半透明な石英を少量含む。壁面はネットリとした質感をもち、割れ口は鋭さを欠く。焼成不良品を一定量含むようだ。ＴＫ209型式併行期以降、８世紀代を通じて供給がおこなわれている。Ｈ群はＧ群より粘性に富む胎土で堅緻である。焼成も良好であるため、割れ口が鋭いものが多い。断面セピア色を呈する。またＧ群と類似した砂礫を含むが、その量は相対的に多く、ザラザラとした手ざわりである。黒色砂粒が入っている。ＭＴ15型併行期に１点のみ認められ（註２）、ＴＫ209型式併行期以降継続的に供給がおこなわれている。Ｉ群はＧ群に類似した質感をもつが川砂のような砂粒を多く含み、砂っぽい印象を受ける。また大粒の半透明な石英が目立つ。７世紀後半以降、８世紀代を通じて認められる一群である。

次にＡ～Ｉ群の産地について考えてみたい。Ａ－１群は作りも丁寧で器壁も薄く、胎土の具合からも一般に和泉陶邑産と認定されるものである。Ａ－２群は作りがやや甘く、胎土も砂っぽい。肉眼観察からは県内の窯跡群の胎土の特徴とは合致せず、やはり県外から供給されたものと思われる。

Ｂ群～Ｉ群は「在地産」と思われる。Ｂ群は羽咋窯跡群の柳田ウワノ１号窯（福島他・1982）との対比が可能である。同窯は表採遺物よりＴＫ47型式併行期に位置づけられ、現在北陸地域で確認された最古の窯跡である。その胎土は木立氏によりⅠ、Ⅱ群に大別されている（1988）。Ⅰ群は「海綿骨片を含まず焼成が堅緻でザラついた質感をもち」、Ⅱ群は「海綿骨片を大量に含み、焼成がやや甘い」ものである。今回分類したＢ群は木立氏の分類したⅠ群と胎土が酷似している。また口径のわりに天井が高く丸味をもつ特徴なども一致する。よってＢ群は羽咋窯跡群産須恵器と考えられる。Ｃ群も柳田ウワノ１号窯の木立氏のいうⅡ群と対比が可能である。胎土や断面が紫がかる特徴は柳田ウワノ１号窯Ⅱ群の甕片などと一致する。また、Ｃ群の一部に海綿骨片が含まれている。海綿骨片を含む土は広く能登から北加賀一帯に分布しているが、須恵器の胎土としては羽咋窯跡群、志賀町周辺の窯跡、七尾市池崎窯跡に認められるにすぎない。９世紀後半に位置づけられる七尾市池崎窯を除けば羽咋周辺に集中しており、この点からもＣ群を羽咋窯跡群産と考えるのが妥当であろう。Ｄ群の焼成時発泡する特徴は柳田ウワノ１号窯出土須恵器に一般に認められる。胎土もＤ群はＣ群とよく似ており、Ｄ群も羽咋窯跡群産の製品であろう。Ｅ群の特徴をもつ須恵器は県内全域で確認される（註３）が、産地は不明である。今後の課題といえよう。Ｆ群の砂粒の多い特徴は一般に南加賀窯跡群でみられるものである。ただし、Ｆ群は後述するように高松・押水窯跡群産としたＩ群胎土とも類似しており、産地はそのいずれかであろう。現在のところ産地推定は難しい。Ｇ群は砂礫の含み具合、質感等から近接する高松・押水窯跡群と考えてほぼ間違いないと思われる。Ｈ群は鳥屋窯跡群深沢１号窯出土須恵器（浜岡他・1965）との対比が可能である。ＭＴ15型式併行期に位置づけられる同窯須恵器は角張った白色石英、長石と黒色砂粒を含み、焼成は良好で堅緻、断面セピアを呈するものが多い。この特徴はＨ群と一致している。またＨ群には７世紀後半～８世紀初めに位置づけられるものもあるが、やはり深沢１号窯調査の際に採取されている同時期の製品と非常によく似ている。よってＨ群は鳥屋窯跡群産と考えられる。次にＩ群だが粘性をおびた胎土に砂粒が入り、ザラザラとした質感をもつ特徴は高松・押水窯跡群によく見られる傾向である。

以上のことから、Ａ群は非在地産（和泉陶邑産含む）、Ｂ～Ｄ群は羽咋窯跡群産、Ｇ・Ｉ群は高松・押水窯跡群産、Ｈ群は鳥屋窯跡群産、Ｅ・Ｆ群は産地不明と分類できる。

(2)　生産の流通について

北加賀～能登地域の須恵器の生産と流通については木立氏の先駆的な業績がある。まず七尾市矢田遺跡で肉眼観察による胎土分類と蛍光Ｘ線分析のクロス・チェックにより産地識別をおこなっている。その結果、ＴＫ23～ＭＴ15型式併行期に和泉陶邑産、ＭＴ15型式併行期に南加賀窯跡群産、６世紀末以降に鳥屋窯跡群産と推定され

る須恵器が供給されたことを明らかにしている。そして和泉陶邑からの一元的搬入段階（ＴＫ47型式併行期以前)、能登の在地窯が稼動したものの自給できず南加賀窯跡群等の複数産地を主体とした「寄せ集め的」な多元的供給段階（６世紀前半)、そして能登の在地窯からの安定した一元的供給がおこなわれた段階（６世紀後半（末）以降）の画期を想定している。ここでは在地窯稼動段階において南加賀窯跡群等からの供給が主体を占め、近接する鳥屋窯跡群からは少量のみ供給された可能性をもつこと、羽咋窯跡群産と識別できる個体のないことが注目される。また押水町竹生野遺跡では肉眼観察によりＴＫ23～ＴＫ47型式併行期では和泉陶邑産須恵器、ＴＫ47～ＭＴ15型式併行期には羽咋窯跡群産須恵器が供給されていることを明らかにした。次に北野氏が水白モンショ遺跡で肉眼観察により、ＴＫ47型式併行期の和泉陶邑産、羽咋窯跡群産の須恵器を確認している。そして鳥屋窯跡群産の製品も含まれる可能性があるという。また、羽咋窯跡群産の頻度の高さと南加賀窯跡群産の頻度の低さを指摘し、この状況が能登地域に普遍化できる可能性に言及していることが注目される。これらの成果を踏まえ、田嶋氏は越前北部～南加賀地域が在地窯出現以降、須恵器の日常容器化・食器化をスムーズに受け入れ、自給的・恒常的な須恵器生産を支えたのに対し、北加賀～能登地域では須恵器があくまで土師器の補完物としてしか扱われなかったため、散発的・断続的な生産にとどまり、他地域を含めた多元的な供給状況を現出したと指摘している。そして北加賀～能登地域の生産と流通を①ＴＫ23型式併行期以前の和泉陶邑産を主体とした移入須恵器の段階。②ＴＫ47型併行期の能登地域在地窯が出現し、和泉陶邑産、南加賀窯跡群産を含めた「寄せ集め的」な段階。③ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期の和泉陶邑産が減少・消滅し、南加賀産等の北加賀～能登地域以外を主体とした多元的供給段階。④６世紀ないし７世紀初頭以降の能登の在地生産主体の段階と整理されている。

今回出土した須恵器の肉眼観察による分類、産地の推定は第10表のとおり整理できる。ＴＫ10～ＴＫ43型式併行期の資料が欠除し、連続した流れはつかめないものの、次のように考えられよう。

ⓐ移入須恵器を含んだ寄せ集め的段階（ＴＫ47型式併行期・Ａ～Ｅ群）→ⓑ能登地域内での供給段階（ＭＴ15型式併行期・Ｂ、Ｃ、Ｈ群）→ⓒ（ＴＫ10～ＴＫ43型式併行期　資料欠除）→ⓓ近接する在地窯出現にもかかわらず、能登の他窯跡から一定の供給を受ける段階（７世紀初頭～８世紀初め、Ｇ～Ｉ群）→ⓔ近接する在地窯からの一元的供給段階。（８世紀前半以降、Ｇ、Ｉ群）これは田嶋氏の②以降の段階にあたり、ほぼ沿った推移状況が認められる。

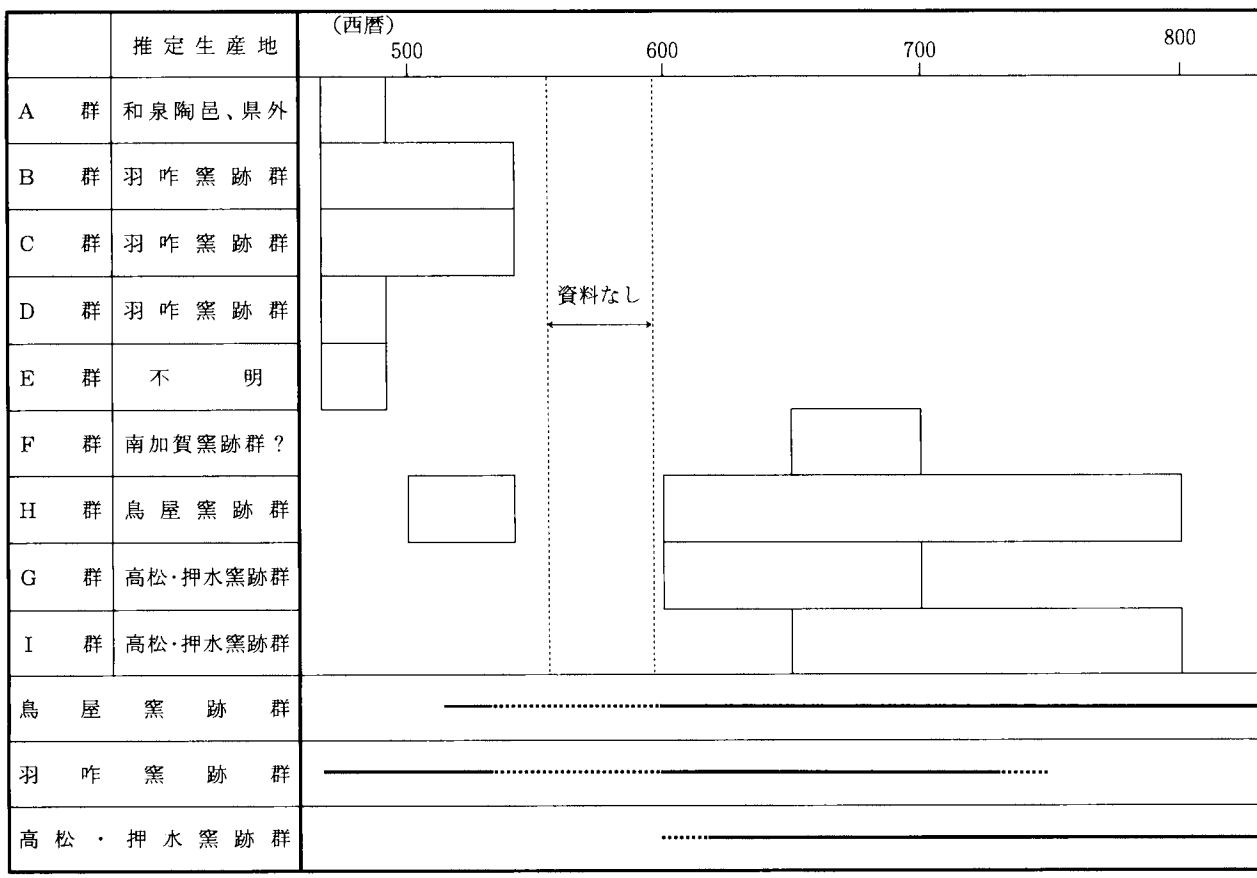
当遺跡でも明らかなように、ＴＫ47型式併行期の在地窯が展開する時期の北加賀～能登地域への須恵器の供給は「寄せ集め的」な状況を呈する。ただし在地産須恵器については七尾市矢田遺跡では南加賀窯跡群産が主体を占めるのに対し、当遺跡は竹生野遺跡や水白モンショ遺跡と同様に羽咋窯跡群産が主体を占めるという違いが認められる。そして、鳥屋窯跡群産は一部存在する可能性をもつ程度の頻度である(註４)。こうしてみるとＴＫ47型式併行期に南加賀窯跡群産を除く「和泉陶邑産＋羽咋窯跡群産＋少量の他窯跡群産」で須恵器が構成される状況が、羽咋地域を中心とした地域に一般的に認められる可能性が高いように思われる。また、羽咋窯跡群の活動開始にもかかわらず矢田遺跡にみられるような能登地域内での製品を受け入れることの少ない地域が存在する可能性がある。すわなち、能登地域の中で羽咋を中心とする地域に「和泉陶邑産＋羽咋窯跡群産」が主に供給され、また七尾を中心とする地域で「和泉陶邑産＋南加賀窯跡群などの羽咋窯跡群以外の在地産」が供給されるというような、単なる「寄せ集め的」というよりも一定の相関関係をもつ需給が存在した可能性が高いと思われる。このことについて、木立氏は「能登内部の地域差」と理解されている。この「地域差」は単に須恵器生産の受容にとどまらず、より政治的な側面を含めた何らかの「地域性」を反映したものとも考えられるが詳細は今後の研究をまたねばならないだろう。いずれにしても南加賀窯跡群が恒常的な生産をおこない、能登地域に限らず越中以東をも含めた「遠隔地への供給を一つの目的とした、日本海側での拠点窯」（田嶋・1989）という性格を有する中で、一時的ではあるにしても須恵器供給のあり方に小地域性が存在することをどのように理解していくか大きな課題のひとつといえる。なお、ＭＴ15型式併行期に入ると鳥屋窯跡群も確実に稼動しており、北加賀～能登加賀地域の「寄せ集め的」な供給による地域差はさらに複雑な様相を示すことが予想される（註５)。

次に７世紀以降の生産と供給について考えてみたい。肉眼観察の結果より、高松・押水窯跡群産（Ｉ・Ｇ群）

が大半を占める中で、鳥屋窯跡群産が一定割合含まれ、羽咋窯跡群産は未確認であることがわかった。これは8世紀初頭を中心とする「ごく短期間」に竪穴住居2棟を中心とする「ごく小規模なムラ」が営まれた押水町宿東山遺跡（北野、木立他・1987）の須恵器が、至近距離にある高松・押水窯跡群産が大半を占めるる中で鳥屋窯跡群産が3分の1程度含まれていることに類似する（註6）。とするならば、このような供給のあり方は同地域における一般的な状況であった可能性をもつ。今までの研究で、高松・押水窯跡群については7世紀前半代に位置づけられる坏身が灰原で採取された紺屋町ムカイノ窯、次いで7世紀末に近い時期の八野ウワノ1号窯、8世紀に入ると紺屋町ムカイノ窯、野寺1号窯、八野ガメ山1・2号窯などが確認され窯跡の増加傾向が認められている。このようなことから同窯跡群は7世紀前半代に操業を開始、7世紀後半～8世紀前葉に規模が大きく拡大したと考えた（川畑・1987）が、今回明らかとなった消費遺跡の動向から再考が迫られよう。まず開窯時期については今回の結果飛鳥Ⅰ期と考えられる須恵器が存在することから7世紀初頭まで、さかのぼると考えて大過ないと思われる。また、7世紀をとおして鳥屋窯跡群からの供給を受けていることから、高松・押水窯跡群の生産規模はそれ程大きくなく、「食器の須恵器化」に起因する須恵器需要の増加に対して、地域内での自給ができず、継続的に鳥屋窯跡群などの能登の他の在地窯からの製品を受け入れる状況があったと考えられる。そして、高松・押水窯跡群が「一群一窯体制」を目指す政策の中で整備され、本格的に生産規模を拡大、安定的した供給が可能となるのは8世紀前半の早い時期をまたねばならなかったことが予想される。その意味で羽咋窯跡群の性格や動向との対比が大いに注目されるであろう。

最後に、基礎的な作業の一つである個体数の計測等による資料の数量化や比較的まとまって出土した8世紀後半の須恵器の様相については扱うことができなかった。いずれ、別の形で報告をおこないたいと思っている。また、考察をおこなうにあたり、北野博司、垣内光次郎、木立雅朗、近間強、松山和彦の各氏から有益な御教示をいただいた。深く感謝したい。

第10表　冬野遺跡・免田一本松遺跡への須恵器供給の様相



註

1　胎土の肉眼観察による産地推定については、同一窯跡群内での窯跡の移動、生産組織の広がり、胎土の選び方などの重要な問題が明らかになっていないこと、また推定が経験に頼ること等批判もある。しかし、窯跡群のある一地域・一時期にかなりの程度で固有の特徴をもつことが明らかになっている。その特徴と他窯跡群の特徴とのクロス・チェックをおこなうことで、一定の時期幅の中での産地の推定は可能と思われる。当然、時期が異なればそれぞれの窯跡群の特徴は変わるし、固有の特徴が複数あることもある。

2　天井部全体を平面的に回転ケズリ調整をおこなった坏蓋1092である。かなり特徴をもつ個体といえる。

3　北野博司氏より御教示。

4　先にも述べたように鳥屋窯跡群で確実に生産が認められるのはＭＴ15型式併行期に位置づけられる深沢１号窯である。能登地域での生産状況が窯跡からは追求できず、消費遺跡でも明確に把握できない現在の状況では、鳥屋窯跡群の生産は羽咋窯跡群より遅れかつ小規模であったことが予想できる。

5　例えば、北加賀地域の戸水Ｃ遺跡10号土坑では南加賀群産が主体を占めることが明らかとなっている。

6　ただし、報文中Ａ群須恵器の中に海綿骨片が入った一群が存在し、羽咋窯跡群産の可能性をもつ。いずれにしても、高松・押水窯跡群以外から供給がおこなわれていたものと考えられる。

参　考　文　献

田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店

浜岡賢太郎・吉岡康暢　1965　「能登鳥屋古窯跡群の調査（第一次）」『石川考古学研究会々誌』第９号　石川考古学研究会

木立雅朗・三辻利一　1986　第Ｖ章　「須恵器」『矢田遺跡』　七尾市教育委員会

木立雅朗　1988　「竹生野遺跡出土の須恵器について」『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

北野博司　1989　「古墳時代の遺物」『水白モンショ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1989　「加賀・能登の古代土器生産」『北陸の古代手工業生産』　北陸古代手工業生産史研究会

福島正実他　1982　『柳田タンワリ１号窯跡』　石川県立埋蔵文化財センター

北野博司他　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

川畑　誠　1990　「高松・押水窯跡群について」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会

望月精司他　1990　『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』　小松市教育委員会

第５章　冬野小塚古墳群

第１節　古墳群の配置と調査経過

冬野小塚古墳群は押水町免田（小字イッポンマツ）・森本地内に位置する２支群４基から成る円墳群として知られていた。富山県境になる標高637ｍの宝達山系から、西方向の日本海側に徐々に高度を下げて伸びる丘陵の最先端部に立地する。宝達山系から流れ出る前田川、大海川に挟まれた標高約50～20ｍの丘陵は、複雑な解析を遂げ、小さな谷を抱え込んだ樹枝状丘陵となっているが、大海川が沖積した平野部を望む丘陵縁辺部に展開しているのが本古墳群で、背後の谷地形を臨む丘陵緩斜面に前章で記述してきたように各時代の集落遺跡が展開している。押水平野で古墳時代中期の代表的な円墳は森本大塚古墳（小字ジュウサンヅカ）で、円筒埴輪を施設する径38ｍ、高さ5.5ｍの規模を持つ。本古墳群の盟主的古墳で、同じ丘陵上に立地し、南東方向へ約300ｍの距離に位置している。

古墳群の立地する丘陵の標高は約22ｍ程度で、平野部との比高差は約10ｍ程度を測り、比較的平坦な台地状を呈し、宅地、畑地として利用されてきたが、最近では山林として荒れ地に近い状況となっているものが目立ってきている。

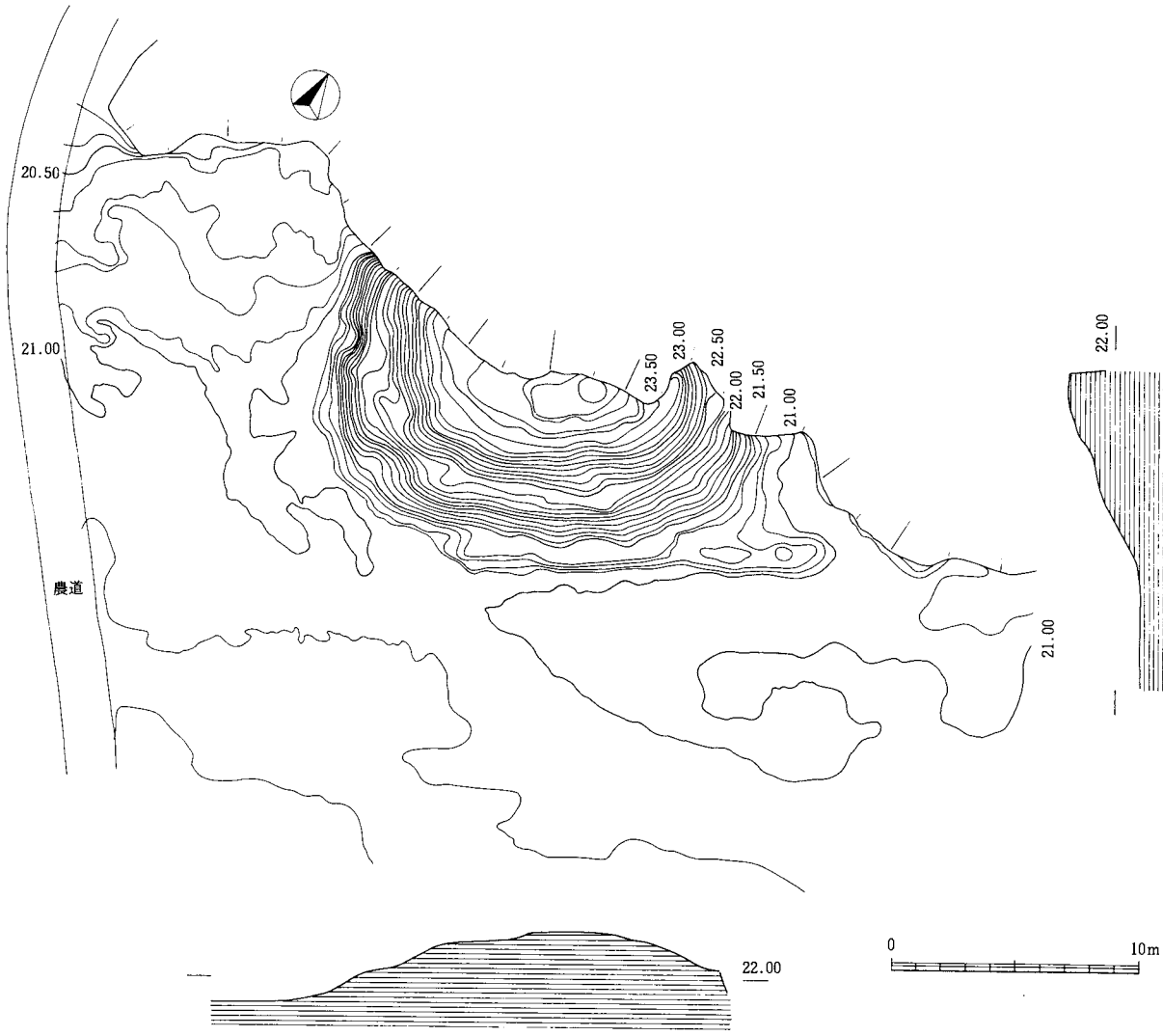
本古墳群の第１号墳は径７ｍ、高さ３ｍ、第２号墳は径12.5ｍ、高さ3.5ｍの円墳として、県発行（1980年）の遺跡地図に搭載されていた。第１号墳は昭和40年代には県道脇に近いこともあって土取り場となり、墳丘の過半は破壊されてしまった。村井一郎氏（石川考古学研究会幹事）の当時の観察によれば、墳丘断面に赤色顔料のような変色が認められたとの事である。出土遺物は墳丘内の土器片が見られた程度で、主体部内での副葬品などについては不明との事である。また、第２号墳については敗戦直後の時期に、米軍の将校が地元民を使って盗掘を試みたとの伝承があり、事実墳丘の中央部に盗掘穴があいた状況となっているが、その経緯や結果について確かめることは困難となっている。

その後、昭和50年代に国道159号線の押水バイパス建設に伴い、本線の位置に第１号墳の全体が、県道の取付道路拡幅に係る位置で第２号墳の周溝および墳裾が取り込まれる計画が本センターに提示された。

発掘調査は冬野遺跡、免田一本松遺跡、冬野小塚古墳群の順序で進み、冬野遺跡の調査が一段落して航空測量を実施した時に、冬野小塚第１号墳の現況測量を合わせて実施した、そして、免田一本松遺跡の調査が終了したあとに、第１号墳の表土除去、周溝の発掘、墳丘断面の観察、実測作業を行い、第１号墳の南方向に隣接した平野部を望む平坦地で、墳丘を失い、周溝のみが遺存していた第３号墳を検出した。これらの２基は予想に反して、方形に周溝が巡る方墳であることが判明した。第１号墳は一辺20ｍ、第３号墳は一辺15ｍの規模であった。第１号墳の墳裾は畑の耕作によって削り取られていたのである。同様な事は第２号墳の墳丘裾調査によっても認められた。第１号墳の墳丘断面の精査によって、主体部の掘り方の一部が検出できたことも特筆される。

第２号墳は第１・３号墳の西方向約50ｍの距離を持ち、間に小さな埋積谷を挟んでいる。埋積谷の谷頭には弥生時代後期の住居址、縄文時代の包含層が確認された。丘陵は大海川の平野部にわずかに飛び出るような形となっていて、平野部側から見上げた場合を意図したものと推定された。道路工事に係る部分は墳丘裾と周溝の一部だけであることから、地主の了解を得て、墳丘上の伐採、現況測量を合せて実施した。墳丘裾はかなり損壊を受けているものと想定され、円墳、方墳のいずれとも判然とはしないが、一辺25ｍ、高さ4.5ｍの方墳と推定した。

調査終了後の1988年（昭和63）には、取付道路部分の拡幅を第２号墳側に取らざるを得ないので発掘調査についての依頼が石川県羽咋土木事務所から提出された。古墳側でなく反対側の拡幅は住宅の関係と住宅への進入路



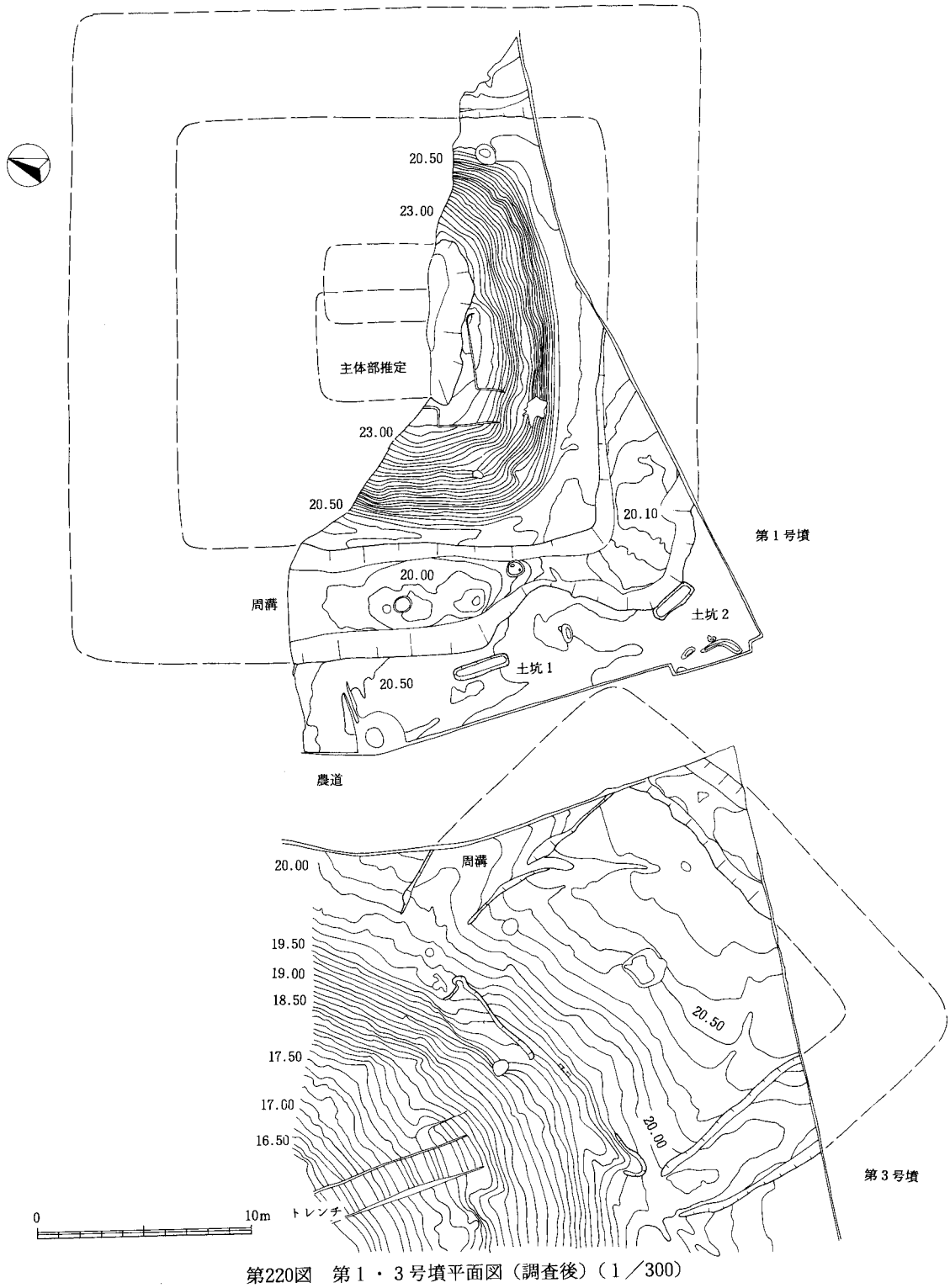
第219図　第１号墳調査前の墳丘平面図（１／300）

が確保しにくいとの事から、墳丘側に擁壁を立てて破壊を最小限に止めるとの協議が成立し、建設省の調査区から最大幅で２ｍの調査を実施した。現実にはかっての調査区の法面を垂直に立てるという調査であった。1988年12月12日から18日までの期間で終了した。調査担当は本センターの岡本恭一と西野である。

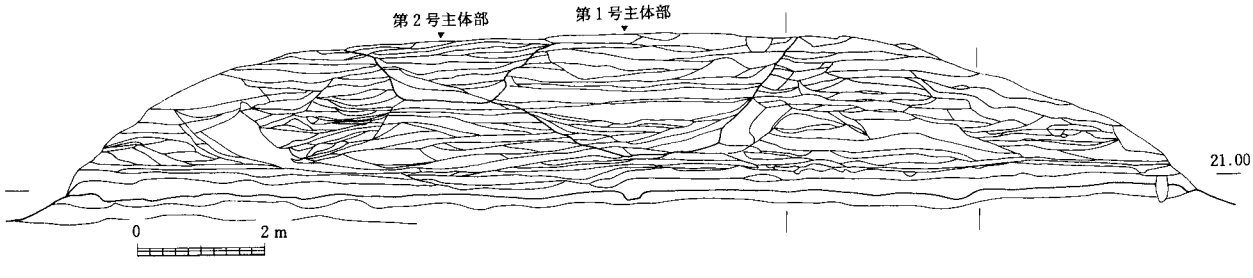
第２節　第１号墳

位置（第131図、図版85）

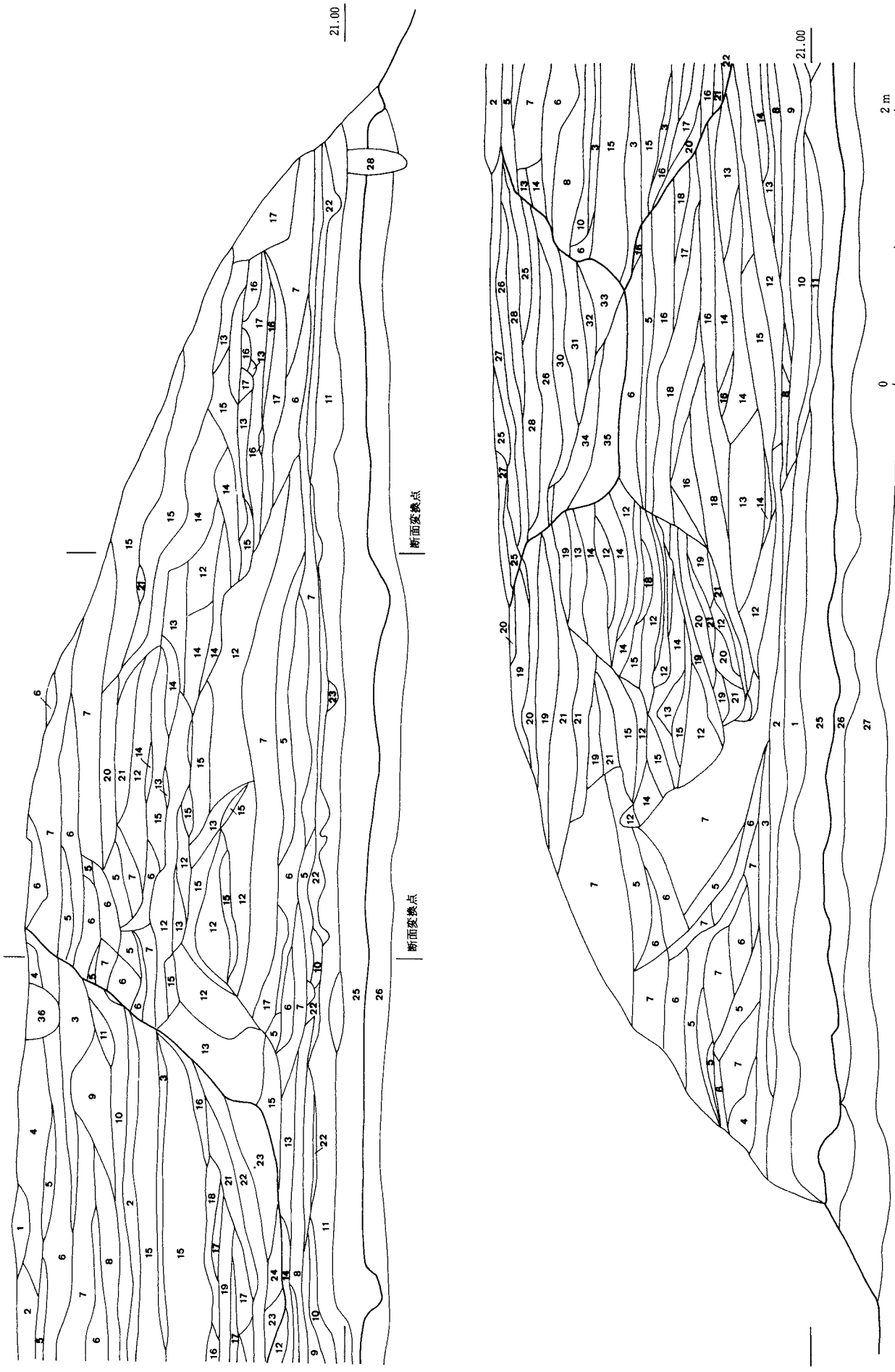
西方向に伸びる丘陵は幅約80～100ｍの平坦面をつくる台地で、大海川を臨む南辺は台地から急傾斜面ないしは崖地形となって平野部に落ち込んでいく。一方の北側は小谷を挟んで冬野の集落を臨み、幅約100ｍ程度の緩斜面となっている。本古墳は台地の中央から若干北側に寄った位置を占地して築造されている。標高約21ｍの台地が基盤で、墳頂の標高は23.93ｍを測り、高さは約３ｍ弱であった。古墳からの眺望は良好で、冬野遺跡の乗る台地を越えて押水平野の北半を望み、南方向は大海川の沖積平野を越えて高松町二ツ屋、中沼周辺を遠望することができる格好の位置を占めている。



第220図　第１・３号墳平面図（調査後）（１／300）



第221図　第１号墳破壊面断面図（１／120）



第222図　第１号墳破壊面断面図（１／40）

墳丘土層名
1．明茶褐色粘質土（地山質土を多量含む）
2．暗茶褐色砂質土（炭化物を多量に含み、地山ブロックを少量含む）
3．明黄褐色砂質土（地山質土、炭化物を少量含む）
4．暗茶灰色砂質土（炭化物を少量含む）
5．暗黄褐色粘質土（地山質土を少量含む）
6．暗黄褐色粘質土（地山ブロックを少量含む）
7．暗黄褐色粘質土（地山ブロックを多量含む）
8．暗灰褐色粘質土（炭粒を少量含む）
9．暗灰褐色粘質土（地山ブロックを多量含む）
10．暗灰褐色粘質土（木炭を層状に含む）
11．暗灰褐色粘質土（色調がやや淡い）
12．明黄褐色粘質土（地山質土をブロック状に含む）
13．明黄褐色粘質土（色調がやや淡い）
14．明黄褐色粘質土（色調に黒味が混じり、炭化粒を少量含む）
15．明黄褐色粘質土（13より暗い色調を呈する）
16．暗茶褐色砂質土（地山を粒状に含む。炭化物多い）
17．暗茶褐色砂質土（黒味を帯びる。炭化物多い）
18．暗茶褐色砂質土（地山質土をブロック状に多量に含む）
19．明茶褐色砂質土（地山ブロックを含まず、炭化物を含む）
20．明茶褐色砂質土（地山ブロックを粒状に含み、炭化物を含む）
21．明茶褐色砂質土（色調が黒味を帯び、炭化物を含む）
22．黒褐色砂質土（地山湿度を粒状に含む。炭化物多し）
23．黒褐色砂質土（22より色調が淡い。炭化物多し）
24．暗褐色砂質土（炭化物を多量に含む）
25．黒褐色砂質土（旧表土）
26．明茶褐色粘質土（地山漸移層）
27．明黄褐色粘質土（地山上層）
28．木の根の攪乱

主体部土層名
1．暗赤褐色砂質土
2．黒褐色土（地山ブロックを含む）
3．暗黄褐色地山ブロック土
4．黄灰色砂質土（地山ブロックを含む）やや暗い
5．黄灰色砂質土（地山ブロックを含む）明るい
6．黄灰色砂質土（地山ブロックを含む）明るい
7．黄灰色砂質土（地山ブロックを含む）やや暗い
8．黄灰色砂質土（地山ブロックを含む）やや暗い
9．黒褐色砂質土（地山ブロックを含む）
10．黒褐色砂質土（地山ブロックを少量含む）
11．黒褐色砂質土（軟質）
12．黒褐色砂質土（硬質）
13．暗灰褐色粘質土
14．暗灰褐色粘質土（地山ブロックを含む）
15．暗茶褐色砂質土（地山ブロックを含む）
16．黒褐色砂質土（地山ブロックを含む）
17．黒褐色砂質土（地山ブロックを16より多く含む）
18．茶褐色砂質土（地山ブロックを含む）
19．茶灰色砂質土（地山ブロックを含む）
20．茶灰色砂質土
21．暗黄褐色粘質土（小粒の地山ブロックが主体）
22．濁黄褐色粘質土（地山ブロックが主体）
23．濁黄褐色粘質土（地山ブロックが主体）
24．濁黄褐色粘質土（地山ブロックが主体）
25．暗黄褐色砂質土（地山ブロックを含む）
26．暗黄褐色砂質土（地山ブロックを25より多く含む）
27．暗茶褐色砂質土（地山ブロックを含む）
28．暗茶褐色砂質土（地山ブロックを27より多く含む）
29．暗茶褐色砂質土（地山ブロックを28より多く含む）
30．茶褐色砂質土（地山ブロックを含む）
31．暗茶灰色砂質土（地山ブロックを含む）
32．暗灰褐色砂質土（地山ブロックを含む）
33．暗黄褐色粘質土（地山土主体層）
34．暗黄褐色粘質土（地山土主体層であるが、他の土をより多く含む）
35．黒褐色砂質土（地山ブロックを含む）

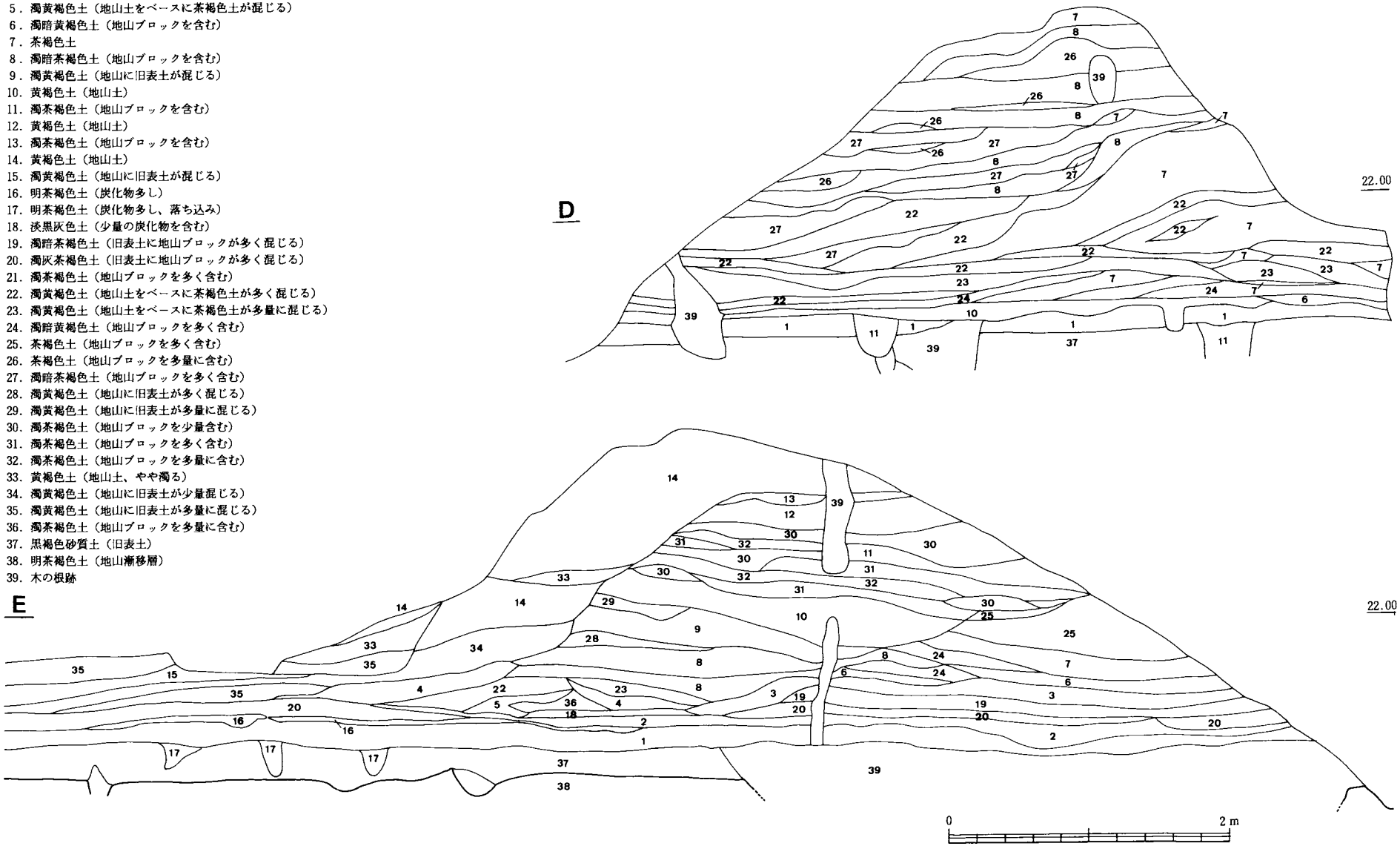
発掘調査が進展していく過程で発見された第3号墳は、周溝立ち上がりから約3～4m西方向に位置している。第3号墳に接している地区の周溝が大きく蛇行していることから、第1号墳は後出したものと想定される。

墳丘（第219～223図、図版87・88）

調査前の墳丘の状況は、過半以上が土取りによって削りとられ南北方向に鍵型に墳丘が遺存し、墳丘上は雑木が繁茂している状態となっていて、墳形を観察することも困難な状態となっていた。調査は雑木を伐採し、航空測量によって現況測量図を作成することから実施した。雑木を払った段階で、東方向の墳丘裾が直線的であることが認められ、方墳の可能性を持つものとして考えた。表土層は墳頂部で約20cm、墳丘で約40cm程度あるが、墳丘裾では流土が加わって約80cmにも及ぶ所もあった。表土層があった段階の墳頂の標高は23.88cmで、西側の周溝掘り込み検出面からの高さは328cmとなる。表土層を取り除いた段階で、墳丘頂上部での主体部の掘り方を検出する精査に取り掛かり、併せて遺存している現況での墳丘断面の削り出しを実施した。図示した墳丘断面図は現況での断面であり、遺存した墳丘に沿って曲線的につないだもので、面が変換している所が2箇所有るので留意していただきたい。また、主体部、盛土断面の実測が終了した段階で、墳丘に直行する形での断面図を作成し、併せて墳丘基底面の精査を実施した。墳丘の外周は後世の畑作による削平が全面に加えられていて、墳丘基底で100～200cmにも及んでいた。特に墳丘の東側面では著しい。

台地上に占地している事から、墳丘の高まりは基本的に全て盛土から造られたものであるが、周溝外側から盛土を取っている事による基底面の削平が加わっていることによる高まりも考慮しなければならない。遺存していた墳丘下の全面にわたって旧表土層の黒褐色砂質土が認められた。全体に炭化物が多量に混入している土層で、標高21.26～21.28mのレベルでは焼土粒が集中している箇所を2箇所検出した。平面楕円形を呈し、径70cmと130cmの規模を測るもので、約8mの間隔を置いていた。墳丘の築造に当たっての整地作業や祭祀行為などを示す痕跡は見られなかったが、墳丘築造に当たって雑木などを焼却処分したものと想定される。墳丘の厚さは墳頂部で220cmを越え、全体では膨大な量になる。築成は周溝の掘削と並行に進められたと考えられるが、周溝は幅はあるものの深さは最大で50cm程度であり、盛土の全てをまかなうには不十分であり、周辺地区から小運搬をしなければならなかったものと想定される。盛土の砂質土と粘質土のいずれにも地山ブロックが小粒であれ混入している

墳丘土層名
1．明茶褐色土
2．淡黒灰色土（多量の炭化物を含む。土器小片が混じる）
3．濁暗茶褐色土（旧表土に地山ブロックが混じる）
4．濁茶褐色土（地山ブロックを含む）
5．濁黄褐色土（地山土をベースに茶褐色土が混じる）
6．濁暗黄褐色土（地山ブロックを含む）
7．茶褐色土
8．濁暗茶褐色土（地山ブロックを含む）
9．濁黄褐色土（地山に旧表土が混じる）
10．黄褐色土（地山土）
11．濁茶褐色土（地山ブロックを含む）
12．黄褐色土（地山土）
13．濁茶褐色土（地山ブロックを含む）
14．黄褐色土（地山土）
15．濁黄褐色土（地山に旧表土が混じる）
16．明茶褐色土（炭化物多し）
17．明茶褐色土（炭化物多し、落ち込み）
18．淡黒灰色土（少量の炭化物を含む）
19．濁暗茶褐色土（旧表土に地山ブロックが多く混じる）
20．濁灰茶褐色土（旧表土に地山ブロックが多く混じる）
21．濁茶褐色土（地山ブロックを多く含む）
22．濁黄褐色土（地山土をベースに茶褐色土が多く混じる）
23．濁黄褐色土（地山土をベースに茶褐色土が多量に混じる）
24．濁暗黄褐色土（地山ブロックを多く含む）
25．茶褐色土（地山ブロックを多く含む）
26．茶褐色土（地山ブロックを多量に含む）
27．濁暗茶褐色土（地山ブロックを多く含む）
28．濁黄褐色土（地山に旧表土が多く混じる）
29．濁黄褐色土（地山に旧表土が多量に混じる）
30．濁茶褐色土（地山ブロックを少量含む）
31．濁茶褐色土（地山ブロックを多く含む）
32．濁茶褐色土（地山ブロックを多量に含む）
33．黄褐色土（地山土、やや濁る）
34．濁黄褐色土（地山に旧表土が少量混じる）
35．濁黄褐色土（地山に旧表土が少量に混じる）
36．濁茶褐色土（地山ブロックを多量に含む）
37．黒褐色砂質土（旧表土）
38．明茶褐色土（地山漸移層）
39．木の根跡



第223図　第1号墳断面図（1／40）

のが一般的で、粘質土は丘陵台地上の地山となっているもので、砂質土は丘陵斜面ないしは地山の下層に堆積しているものである。地山ブロックを混入させて盛土の強度を意図した可能性も考えねばならないが、短絡的に採取する地点を推定するならば、第１号墳の北西側の台地の傾斜が変換する地区があり、砂質土の露頭も見られることから、その周辺地区からの運搬を考えておきたい。

盛土のなされた段階を推定してみると、雑草、雑木の焼却が行われた旧表土上に約20cm程度の厚さで地山ブロック土を混じえた明茶褐色粘質土、暗茶褐色砂質土が均一に敷かれ、中軸線上の中央部分にさらに約20cm程度が盛り上げられる。そして、墳丘裾に近い位置で幅３～４ｍ、高さ１ｍ程度の堤状になったものが全体に巡らされる。その後、窪んでいる中央部分に墳丘裾近くの土堤と同じ高さまで八方から土が投げ込まれる。墳丘は約120cm程度まで盛土によって形作られたのである。最終段階として水平になっている墳頂部や水平堆積に近い形で盛土が順々に積み上げられて完成したと推定される。墳丘斜面や墳頂部を覆うような特別な土や化粧土については、判断できる材料は得られなかった。主体部は盛土が終了した段階で、墳頂部に掘り込まれている。

出土遺物は旧表土や盛土内から、叩き石、土師器などが得られているが、完形品や纏まりを持った形でのものではなく、混入した遺物としてのものである。

周溝（第224・225図、図版89）

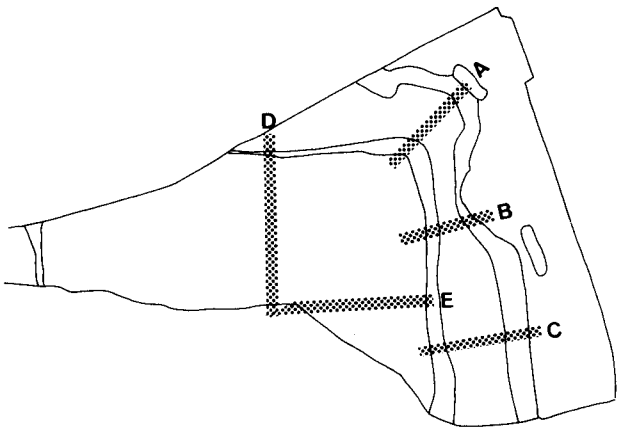
周溝は発掘区が限定されていることから全掘はできなかったが、基本的には全周しているものと考えられる。墳丘側および外周側のいずれの立上がりも緩やかで、断面形は皿状を呈している。底面は凹凸が目立つ状態となっている。西方向では最も幅が広く掘削されていて、幅470cm、深さ50cmを測る。覆土は黒褐色、暗茶褐色系の粘質の弱い土がレンズ状に堆積し、遺物は少なく小片となったものだけである。覆土の地山面に近い位置で、径70cmの範囲で炭化物層が広がっていたが、伴出遺物もなくその性格については不明である。西方向の周溝では幅が5.3mから幅２ｍへと大きく減少している地区があり、周溝立ち上がり外縁に沿って、２基の土坑墓が相対して掘り込まれている特異な在り方を示している。本古墳群をめぐる墓道、あるいは、本古墳の墳丘への入り口部とも考えられるが、さらに西方向に築造されていた第３号墳の周溝に接近したために、幅を減少したものとも考えられ、いずれにしろ格別の意味を有していたものと想像される。周溝の南隅コーナーでは周溝外縁立ち上がりに沿って土師器が一定の纏まりを持って出土している。周溝内祭祀行為に係るものではなく、土坑墓に伴う土器群と見たほうが良いようで、他の地点においては遺物は散発的な出土状況を示していた。南側の周溝幅は4.5ｍとやや減少した掘り方となっていた。第221図の平面図では周溝部を含めて復元図を示したが、墳丘裾での長さは21ｍ、周溝外縁での長さは約31ｍ、周溝底面からの高さは約350cmの規模が推定される。また、前方後方墳ではなかったとの確証はなく、可能性としては考慮しなければならないと言える。

主体部（第220図、図版87）

墳丘の過半が破壊されていた為に、主体部そのものの検出はできなかったが、墓坑の一部を確認することができた。墳丘断面の観察で切り合い関係を持つ落ち込み二箇所を認めることができる。墳丘中央部に位置している第１号主体部は、墳丘の主軸線（北17度西）に平行する形に掘り込まれ、幅約540cm、深さ192cmを測るが、現況での長さは120cmであった。第２号主体部は第１号主体部の北側に隣接する形で掘り込まれ、同主体部の掘り方を切り込んでいる。主軸方向はやはり墳丘に平行する位置と考えられ、幅320cm、深さ92cm、現況での長さは200cmの規模を測る。発掘調査では主体部覆土から土師器の断片を検出しているが、副葬品と考えられるものの出土は皆無であった。村井一郎氏（石川考古学研究会幹事）の教示によれば、土取りが進んでいる過程で、断面に赤色顔料の層位が認められたとの事である。おそらく、棺底に置かれていた赤色顔料と推定される。

周溝外土坑（第226図、図版90）

周溝の記述の中で触れたように、墳丘から南西方向の周溝外縁に沿う形で２基の土坑を検出した。周溝幅が大きく変換している地区の両脇に位置していることが、なんらかの祭祀の場としての意味を持つのではないかと注目される。西側に位置している土坑１は、周溝外縁の落ち込みに平行し、50cmの距離を置いて掘り込まれている。段を付けない素掘りの土坑で、平面形が長方形を呈し、長さ265cm、幅60～68cm、深さ37cmを測り、主軸方向は北

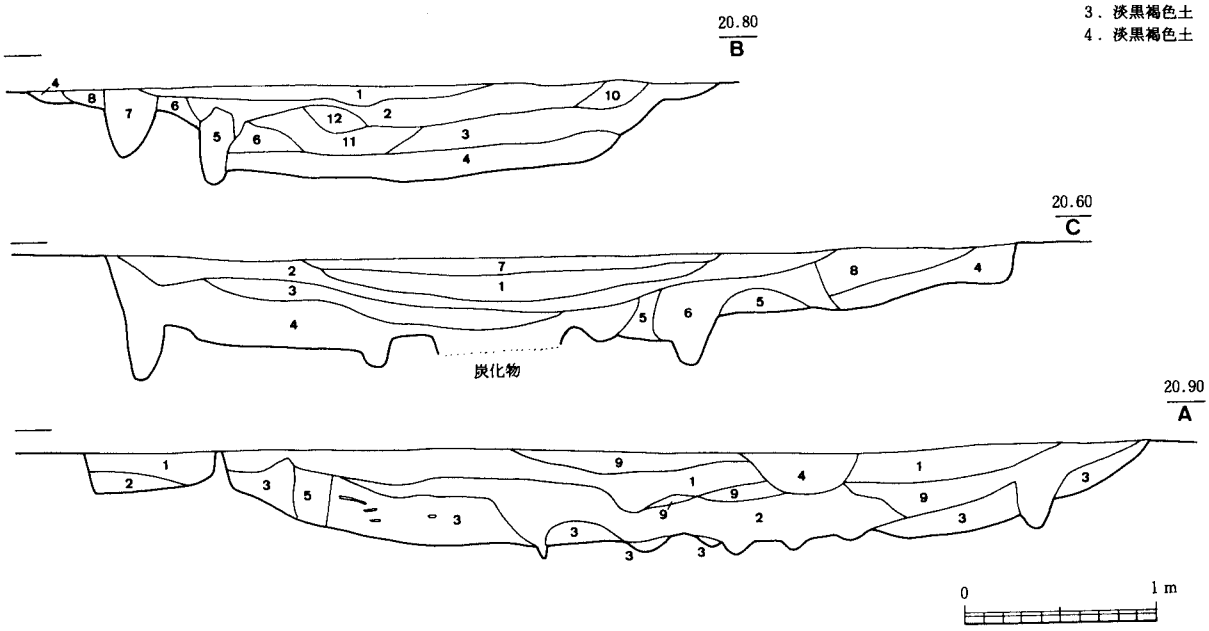


B　1．黒褐色土
　　2．暗灰褐色土（少し炭化物を含む）
　　3．暗黄褐色土
　　4．淡暗茶褐色土（粗粒、砂質）
　　5．淡茶褐色土（地山粒を含む）
　　6．濁暗黄褐色土
　　7．暗黄灰色土
　　8．黄灰色土
　　9．黄褐色土（地山質土）
　　10．黒褐色土（炭化物を含む）
　　11．暗黄褐色土（３より暗い）
　　12．暗黄褐色土（11より暗い）

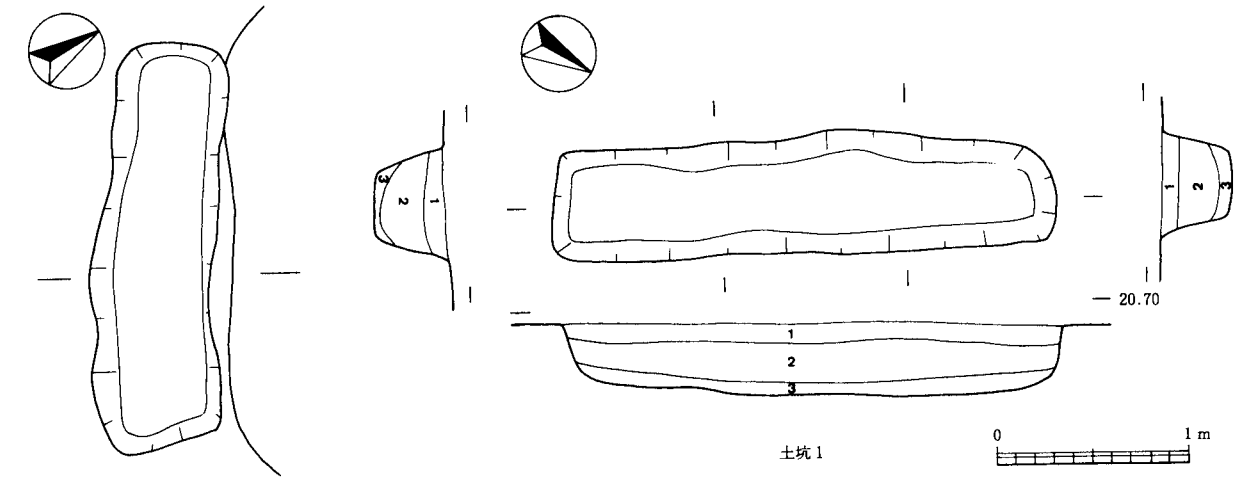
C　1．黒褐色土
　　2．暗灰褐色土
　　3．暗黄褐色土
　　4．淡暗茶褐色土
　　5．濁黄褐色土
　　6．濁暗灰褐色土
　　7．淡黒褐色土
　　8．暗黄褐色土（やや暗い）

第224図　断面実測位置図（１／400）

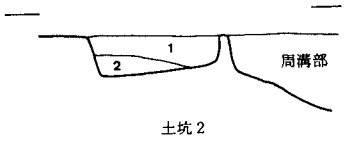
A　1．黒褐色土
　　2．暗灰褐色土
　　3．淡黒褐色土
　　4．淡黒褐色土



第225図　第１号墳周溝断面図（１／40）



１、茶褐色土
２、淡茶褐色土（地山ブロックを含む）
３、褐色土



１、茶褐色粘質土
２、暗茶褐色粘質土（地山ブロックを含む）

第226図　第１号墳周溝外土坑（１／40）

29度西に置いている。墳丘の主軸とは若干のずれを持っている。坑底は平坦に整えられていて、木棺などの痕跡を認めることはできず、地山ブロックを混じえた覆土がほぼ水平位置に充填されていた。覆土内からの遺物は皆無で、隣接する周溝内でも特別の遺物の検出はなかった。

土坑2は1から南東方向へ720cm離れ、周溝外縁に接する形で掘り込まれていた。長軸は北63度西に置かれ、土坑1、墳丘の主軸とも大きく振れているのは、周溝の掘り方に沿っているためであろう。土坑1と同じ平面形が長方形を呈し、長さ212cm、幅60cm、深さ22cmを測る。底面は平坦に整えられ、覆土は茶褐色粘質土系の土で、出土遺物は皆無であった。墳丘側の周溝には土坑側からの流れ込みを推定させる形での、土師器の出土が見られたが、本土坑墓に係るものであるかの確証は得られない。

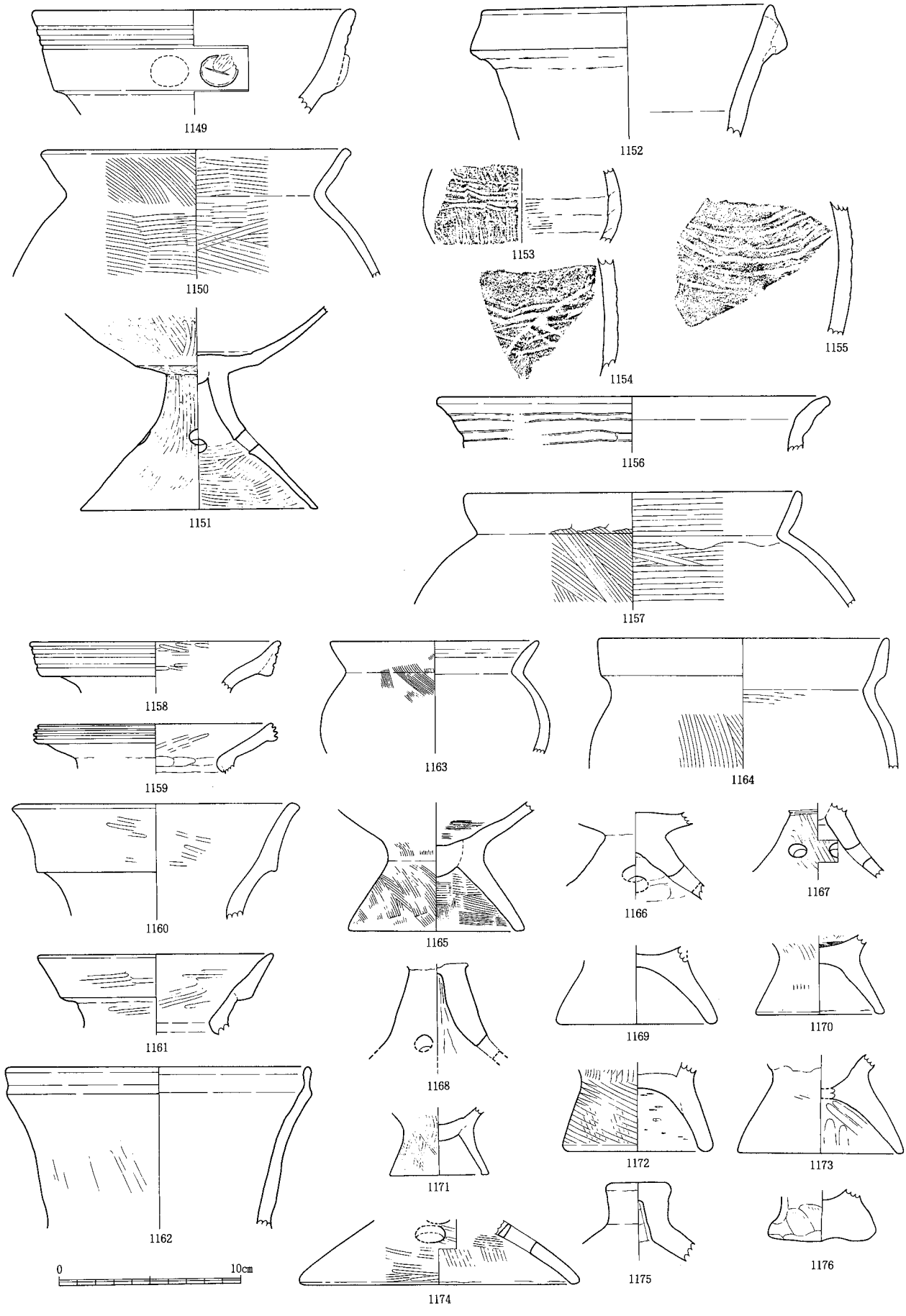
出土遺物（第227・228図）

1149・1150は第1号主体部から検出した土器で、いずれも断片的な資料である。1149は壺形土器の口縁部で、やや粗雑な形で擬凹線が巡らされ、径2cm、厚さ0.5cmの円形浮文が貼付されているが、小片のため対となるのか全面に貼付されるのかは不明である。口径17.4cmに復元され、橙色を呈し、胎土・焼成は良好である。1150は「く」の字状口縁の甕で、口径16.4cmに復元される。幅1cmに5本の歯がついた工具でなでられていて、内面はやや軟質の段階で、器表面はやや乾いた段階で調整されたようである。器表面は数回程度のなでであるが、内面は一回限りで止められている。黒褐色を呈し、胎土に若干の砂粒をまじえるが、焼成は堅緻である。

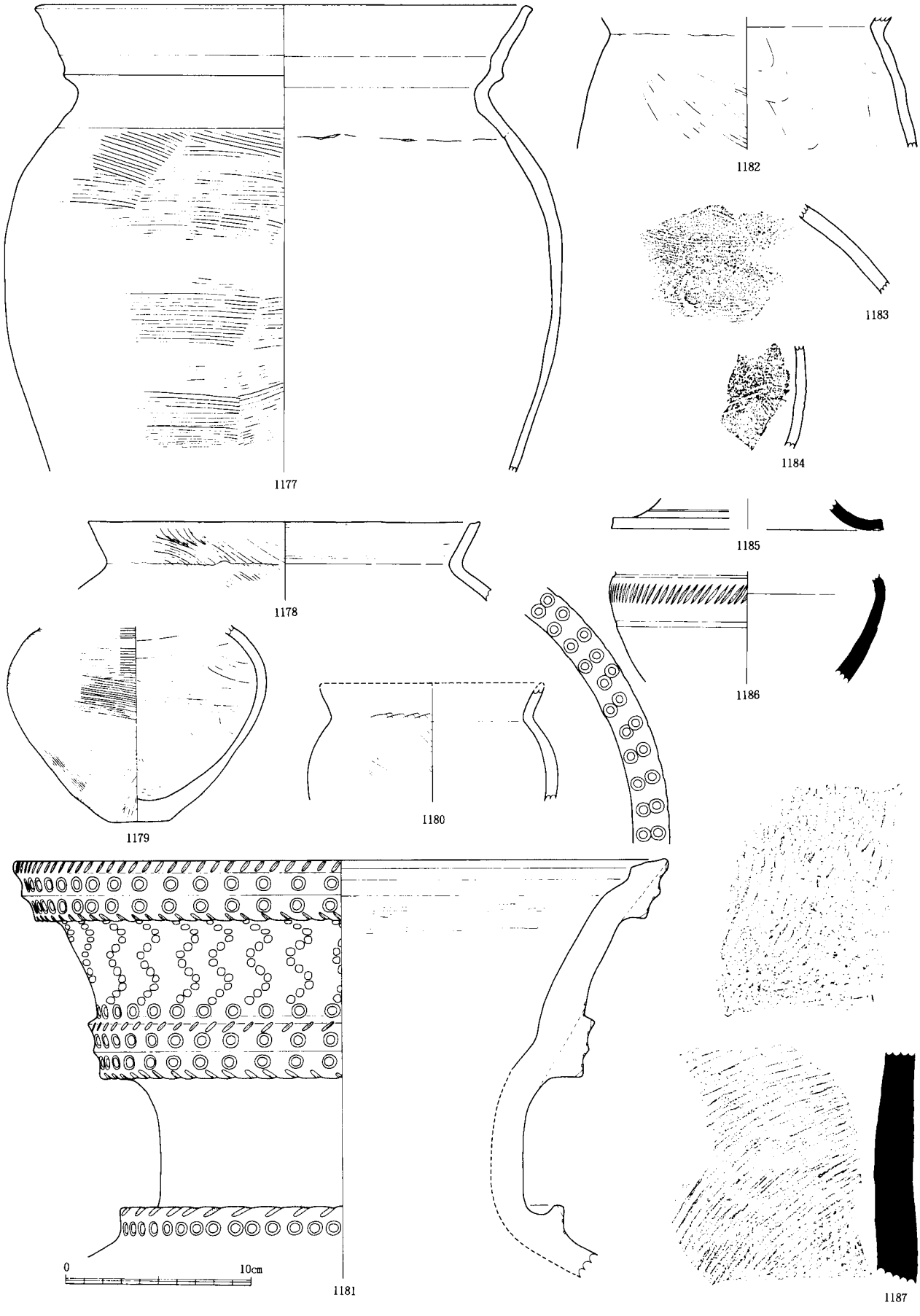
1151は第2号主体部から検出した高杯で、脚台部は遺存しているが口縁は大きく欠損している。底径13cm、現器高11.1cmを測る。口縁部の内外面共に丁寧な磨きが施されているが、脚台の下に下がるほどに粗雑となっていく。脚台の内面は刷毛目調整痕がそのままに遺存している。脚台部との接合は口縁部分を端部に回すような形で繋がり、脚柱の穴は新たに加えたもので充填する形となっている。橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

1152・1153は、封土下層の焼土、炭化物層から出土したものである。小片であるために口径には不安が残るが口径15.6cmに復元される口縁部に突帯を貼付する壺である。突帯は二本の粘土紐で形作られていて、下位の粘土紐を被せるように上から粘土紐を張り付けている。浅橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。1153は器表面に煤が付着した小型甕の体部片である。2本1単位の工具で、粗雑な波文が施されている。1154・1155は封土、主体部から散発的に出土した壺の胴部であるが、復元することは出来ず、比較的大型の壺に推定される。肩部あたりかと想像される断片には、幅0.3cmのへら状工具による沈線が平行線を意図したように巡らされている。橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。1156は南東部の旧表土層から出土した、甕の口縁部である。口径21.3cmに復元され、外反する口縁部に幅0.4cmの凹線が2条巡らされ、内面は平滑に整えられている。色調は茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を混和している。類例を見出だすことが出来ず、どの段階の土器であるかは不明である。

1157～1167、1171の資料は封土から出土したものである。1157は口径18cmに復元される甕で、磨耗しているが内外面共に炭化物の付着が認められる。頸部では口縁部から被さるように粘土がはみ出ていて、内面では覆うような形となっている。刷毛調整は内外周ともに施されているが、入れられた段階に差があるようだ。1158・1159は壺器形の口縁部に推定したもので、口径13.6cm、12.6cmに復元された。口縁部の下端の調整は共に荒く、狭い口縁帯に凹線が施されるが、前者はやや粗雑である。胎土は精良で、明確ではないが赤彩が施されていたようだ。1161は口径14.8cmを測る壺の口縁部で、突帯部分は尖り気味に整形されている。内面は篦磨きで平滑になっているが、器表面は磨耗を受けている。浅黄橙色を呈し、2ミリ以下の砂粒を若干含む程度で、焼成と共に良好である。1161は口径12.9cmに復元される小型壺の口縁部である。1162は口縁部を摘み上げたような整形をとる長頸壺の口縁部である。狭い口縁部を含めて全体に横撫で調整によって整えられている。胎土には2～3ミリの砂粒を多く含んでいる。1163は口径11.4cmを測る小型壺である。頸部に弱い刷毛調整痕が見られ、体部の内面は撫で調整の儘である。黄橙色を呈し、胎土に若干の砂粒が混入している。1164は口径15.6cmに復元される素文の口縁部を持つ甕で、口縁の内外周共に横撫で調整が丁寧に施されているが、体部の内面は撫で調整だけである。器表面には煤の付着が顕著である。1165は底径9.8cmの脚台で、内外面共に顕著な刷毛目が遺存している。胎土には2ミリ程度の砂粒が多く混和されている。色調は淡赤褐色を呈し、二次的火熱による変色と推定される。1171は小型



第227図　第１号墳出土土器(1)（１／３）



第228図　第１号墳出土土器(2)（１／３）

の台付甕の脚台で、全体に華奢に作られている。色調はやはり二次的火熱による変色が認められる。1166は高杯の脚台部で、低い脚が大きく広がる形となる。脚には透かし穴４個が穿たれている。全体に磨耗が著しく、器表面の調整は不明であるが、脚の内面は粗雑な刷毛調整痕が認められる。明黄橙色を呈し、胎土は良好である。1167は器台の脚部で、器表面は磨き調整が施されている。透かし穴は特異で、２個１対が２組入れられている。

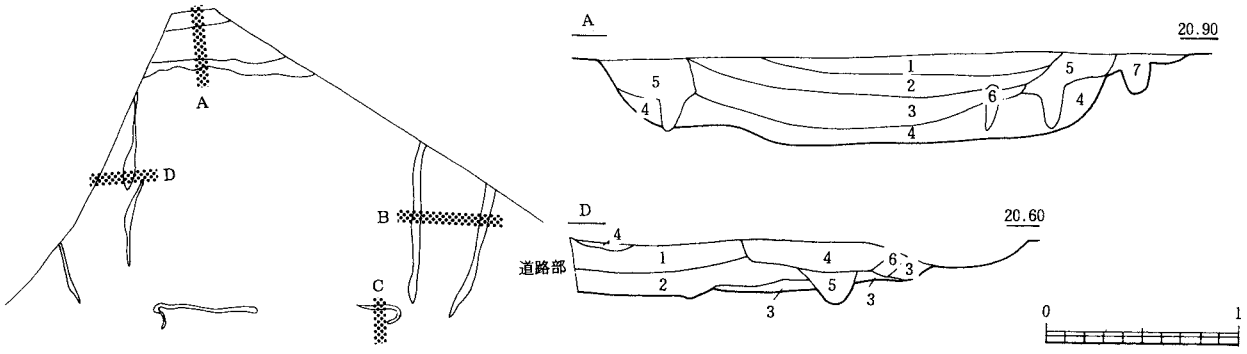
1168～1187は周溝内および表土層から出土した資料で、その中で1172～1174・1178・1182は南隅で一括で検出したものである。1168は高杯の脚柱部で、全体に磨耗が進んでいるために、調整はつかめない。1169は底径8.3cmを測る台付甕の台部で、橙色を呈し、胎土には砂粒の混和が目立つ。1170も二次的な火熱による変色が認められるもので、荒い整形で作られた甕に直接接合して作られたものである。1172は底径7.4cm、高さ４cmを測る脚台で、甕と台部の間には詰め物が充填されている。器表面は刷毛撫で調整が、内面には篦による削り回しが入れられている。1173は甕との間の詰め物が剝落したために、中央部が大きく窪んでいる台部である。内外面、端部に篦撫でが施されている。赤褐色を呈し、二次的加熱のためと考えられる。胎土には砂粒の混和が目立つ。1174は赤褐色を呈する焼成堅緻な脚部で、器表面は篦磨き、内面は刷毛調整の後下端部を撫で調整で仕上げている。透しの数は小片のため不明である。1175は表土層から出土した蓋のつまみ部で、器表面は磨耗のため調整痕を確認することができない。1176は甕の台部に推定したもので、指押さえによった調整痕が見られる。1177は北側周溝から検出したもので、口径26.2cm、現器高25.5cmに復元できた。体部下半には煤の付着が見られるが、全体に磨耗が進んでいるために微調整痕はつかめない。1178は口径17.2cmに復元される甕で、口縁端部の面取はやや粗雑で、頸部から上方向に施される刷毛調整によって端部が尖り気味になっている。頸部以下の内面は撫でだけで止められている。橙色を呈し、胎土には微砂粒が目立つ。焼成は堅緻。1179は周溝西南部から出土した小型甕で、器表面全体に刷毛調整が施されている。肩部には平行線文が施されているように観察できるが、刷毛状工具によるものと見られ、全形は不明である。胴部最大径は14cmに復元され、現器高は10.6cmを測る。浅黄橙色を呈し、胎土には若干の微砂粒を含む。1180は口縁端部を欠損している小型甕で、全体に磨耗のため遺存状態は良くない。1181は北及び南裾から出土した大型壺の口縁部で、口径35.4cm、口頸部の現況高さは約23cmに復元された。頸部と口縁端部に貼付された突帯上の施文はほぼ同一であるが、肩部に巡らされた突帯は刺突文が一列だけとなっているのは、突帯の幅が狭くなっているためである。中央に稜を付け等間隔に竹管状工具による刺突が施され、突帯端部に方向を違えた刺突文が施文される。突帯間には全体が窪む刺突がジグザグ状に入れられている。器壁は1.7cmにも及ぶもので、器表面には赤彩の痕跡を認めることができる。胎土には砂粒が一定程度混和され、浅黄橙色を呈している。1182は口縁部を欠いているために器形的に不安が残るもので、全体に著しく磨耗が進んでいる。1183は赤彩された壺形土器の肩部片で、刷毛状工具の端部を立てて施文したジグザグ文二列を見ることができる。刺突文には点となった歯の部分が、等間隔に並んでいる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精選され砂粒の混和は極少数である。1184は篦先を使った平行沈線文が施文されているものである。

1185～1187は周溝から出土した須恵器片で、全形を止めているものは見られなかった。1185は高杯脚部の断片で、1186は“はそう”の体部片に推定されるもの、1187は甕の体部片である。

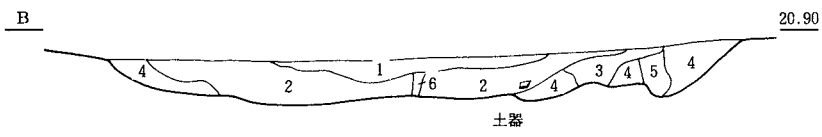
第３節　第３号墳

位置（第131図、図版91）

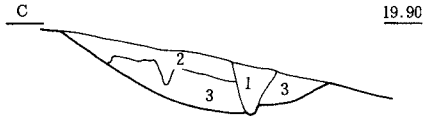
第１号墳の南方に周溝を接するようにして構築されていたのが、第３号墳である。大海川の平野部を望む東西方向にのびる平坦な丘陵が、南北方向の小さな谷を抱え込んでいて、その小谷に台地が傾斜を強める位置に立地している。小谷の向こう、直線距離にして約40mに第２号墳が位置している。調査に係る前は平坦な台地の端部という状態であったが、近年まで鶏舎が建設されていて、整地工事が施された地区であった。発掘調査によって方形に巡る周溝が発見されたが、まったく削平された為に墳丘の状況は不明である。台地の南端まで約18mの距離で、崖状に平野部に落ち込む。大海川への展望は下流方向では良好であるが、上流方向へはやや死角になる位



第229図　断面実測位置図（１／400）



A　１．黒褐色土
　　２．暗灰褐色土
　　３．淡黒褐色土（地山ブロックを含む）
　　４．濁暗黄褐色土（軟質）
　　５．黄灰褐色土
　　６．木の根跡
　　７．暗茶褐色土（覆土）

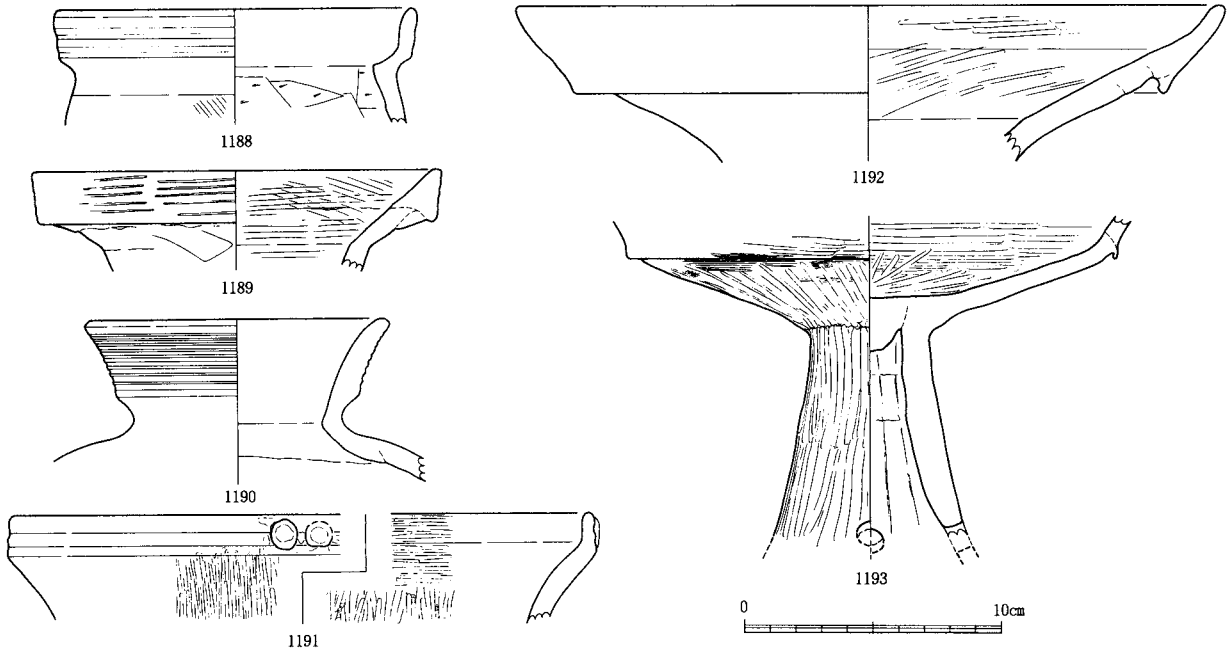


D　１．黒褐色土
　　２．暗灰褐色土
　　３．濁黄褐色土（再堆積）
　　４．暗黄灰色土
　　５．木の根跡
　　６．暗黄灰色土（地山ブロックを含む）

B　１．黒褐色土
　　２．暗灰褐色土
　　３．黄灰褐色土
　　４．濁暗黄褐色土
　　５．茶褐色土
　　６．木の根跡
　　地山　明黄褐色土

C　１．暗灰褐色土
　　２．黄灰褐色土
　　３．暗黄褐色土

第230図　第３号墳周溝断面図（１／40）



第231図　第３号墳周溝およびその周辺出土土器（１／３）

置である。平野部全体を眺望するのであれば、崖に接する形での立地が考えられるが、なんらかの規制があったものかと推定される。現地踏査によれば調査区に隣接した東側の崖面には、大型土坑の断面数基が見られるとのことであり、集落が立地していたための占地が想定される。

墳丘

墳丘は全く検出することができなかった。地山面まで掘り下げた段階で周溝の落ち込みが確認され、ようやく方墳が立地していたことを知ったためである。あるいは、墳丘の基底面ぐらいは検出することができた可能性は残る。墳丘の平面形は正方形ではなく。ほぼ南北方向にやや伸びた長方形を呈していて、長軸15.5m、短軸13.5mの規模を持つ。周溝を加えた場合は長軸約23m、短軸約18mを測る。主軸方位は北28度東に置いている。第１号墳とはほぼ45度の角度を付けた形となっている。

周溝は傾斜面を含めて全周していたものと推定され、断面形は緩やかな傾斜となる皿状を呈している。周溝幅を確認できた東側では300cm、南側で430cmで、深さは最も深くなっていた東側で45cmを測った。覆土の堆積は断面図Ａ（第230図）で示されているように、黒褐色、灰褐色系の比較的絞まりのない土でレンズ状の堆積となっている。周溝底面は比較的平坦になっていて、所々に木の根の攪乱による小穴が認められる程度であった。出土遺物は東と南側の周溝内から散発的な形での出土が見られた程度で、復元完形となるような遺物は得られなかった。古墳時代ではないが、東側の周溝覆土から旧石器時代のブレイドが出土しているのが注目された。

主体部についてはなんらの手掛かりも得られなかった。

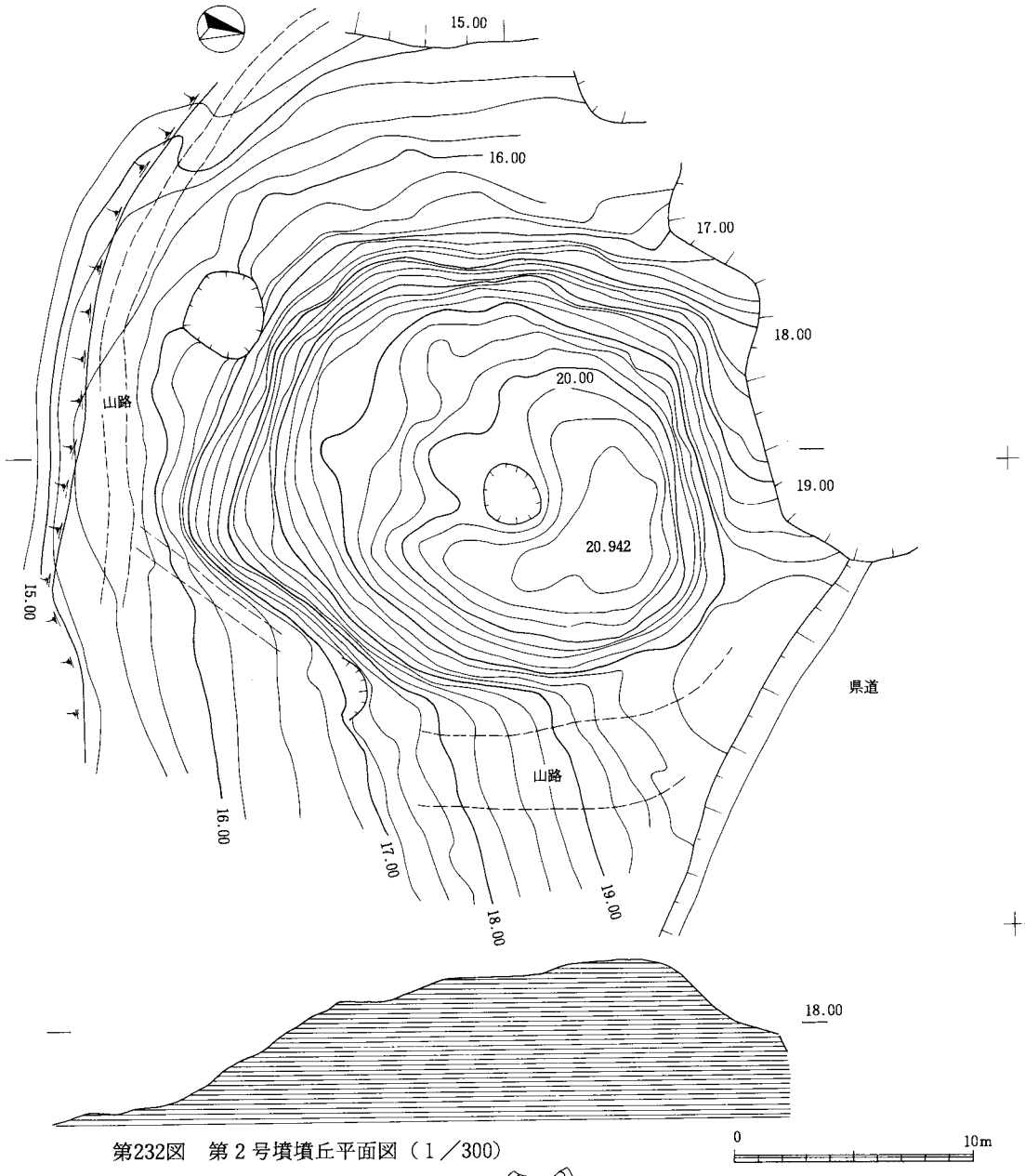
出土遺物（第231図）

1188は西側周溝から出土した甕で、横撫で調整の口縁部の内面頸部は、強い篦削り調整が施されている。にぶい橙色を呈し、胎土の砂粒は器表面では目立たない。1189は口径16cmに復元される壺の口縁部で、貼付した突帯部に凹線と円形浮文が付けられていたように観察されるが、全体に磨耗が著しいために確定は出来ない。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である、1190・1191は第３号墳の南西方向の斜面に設けたトレンチから出土したもので、第３号墳とは直接的な関係は持たない。1190は有段口縁の壺で、口径12cmに復元される。胎土には砂粒の混和が目立つほどに磨耗が進んでいる。1191は径1.1cmの円形浮文を付けた口縁部であるが、小片であるために口径には不安がある。全体に篦磨き調整が丁寧に施されている。1192は南側周溝から出土した器台の口縁部に推定したもので、口径27.6cmに復元される。器表面は荒れていて調整は不明であるが、内面は篦磨きの痕跡が観察される。口縁部の内面は僅かに凹線が巡るような整形が成されている。浅黄橙色を呈し、２～３ミリの砂粒をやや多く含んでいる。1193は東側周溝から出土した高杯で、体部と脚部は接合できなかったが図上で復元した。口縁部は平滑に磨かれているようである。平板に近くなる体部の器表面は刷毛撫でのあと軽く篦磨きが入れられている。口縁下端部の径は19.2cm、脚部端の径は4.7cmに復元される。にぶい黄橙色を呈し、一部に黒斑が見られる。胎土は１～２ミリ程度の微砂粒が若干認められるが、全体としては良好である。

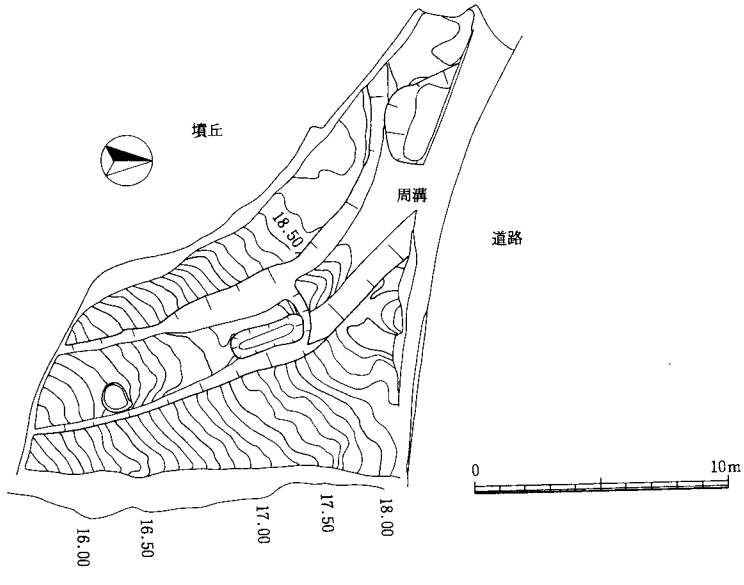
第４節　第２号墳

位置（第131図、図版93）

第２号墳は東西方向に伸びる丘陵に入り込んだ小谷に挟まれるような形となった小尾根端部に立地していて、丘尾切断に近い在り方と言える。北側の県道側を除いては三方が急傾斜となっているのである。第１・３号墳からは直線距離にして約40m程度西に位置していることになる。墳頂部から大海川の平野部が一望のもとに展望することができるが、第１号墳のように北側の押水平野北部を眺望することはやや困難である。墳頂部での標高は20.9mを測り、平野部側のテラス面での標高は15m程であり、現況での比高は６mと言うことになる。平野部から見上げた場合を強く意図した在り方と考えられる。古墳の北側は県道が、西側は崖地を削り込んで建てられた住宅が位置している為に、周溝の一部は既に消滅した状況となっている。また、既述したように墳頂部には平面形が楕円形を呈する径250cm、深さ100cmにおよぶ盗掘穴が露呈した形となっている。これは敗戦直後の時期に掘



第232図　第２号墳墳丘平面図（１／300）



第233図　第２号墳調査区平面図（１／300）

られたとの事で、出土遺物やその経緯については不明である。露呈していた盗掘穴の断面観察では土坑の落ち込みなどの土層の変化は認められなかった。盗掘穴から排出した土砂は、北側や南側の等高線の乱れとなって表れている。本古墳に係る工事は、国道バイパス本線ではなく県道からの取り付け道路となる拡幅に係るものであることから、発掘調査は周溝の一部に止まり、古墳の大部分は現況のまま残されることとなっていた。現状の墳形を把握するために、地主の了解を得て、雑木の伐採と25cmコンターで縮尺100分の１の平面図を作成した。

墳丘（第232図、図版93）

平面形は矩形の五角形を呈し、西側部分が直線的な状況を示していて、方墳の可能性が高いと推定できるが、東側部分の裾はかっての主要な山道であったことや、西側部分は住宅の庭地であり、南東部分は不自然な形で等高線が密集し崖地となるなど、墳丘裾は大きく変化している。第１号墳の墳裾の削平が大きく進行していたことや、本古墳周溝部の発掘調査によって同様の事実が認められ、墳裾はかなりの削平を受けているものと考えられる。現況での規模は南北方向で約25m、東西方向で約24m、高さ約６ｍを測る。しかし、県道側の北での高さは約180cm程度のものであり、丘陵端部の立地を最大限に生かしていると言える。発掘で確認された立ち上がりの内縁の曲線で推定すると、円墳を想定することはやや困難である。南東隅や南西隅は大きく削平されているが、北西隅は旧状を良く止どめているものと推定される。また、盗掘穴の位置はやや東方に寄って開けられており、主体部の全てが破壊された可能性は弱いと考えられる。

周溝は発掘区全域に渡って検出され、全体に巡らされているものと考えられる。周溝幅は300～315cm程度、深さ35～65cmの規模であるが、北周溝部分はやや幅が拡がっていたものと見られる。覆土はレンズ状の堆積状況を示している。発掘区の地山は墳丘部分は赤褐色粘質土であるが、周溝底面では明茶褐色砂質土が地山となっていて、覆土には砂質土の腐食した土が堆積していた。周溝の北東コーナーでは溝底に約50cm程度の段差が付いていて、落ち込んだ位置には土坑が１基掘り込まれ、さらに、下位置に平面形が楕円形を呈する土坑１基が検出された。

周溝からの出土遺物は、県道側の周溝から土師器の甕が地山に接して発見された他、土坑の南側に一括土器４個体が周溝の外縁から落ち込んだような状態で出土している。後者は土坑に伴うものと推定された。

1988年の冬に実施した県道拡幅に係る調査で、墳丘の裾断面を確認することができた。明茶褐色粘質土は周溝から見て比較的高い位置で検出され、炭化物及び土師器小片を含む旧表土の上には、地山の下位に位置している黄褐色砂質土が色調を変えて水平方向に盛られているのが確認された。尾根筋の上位にあるために、盛土と地山掘削が同じ高さに近い形となっている。

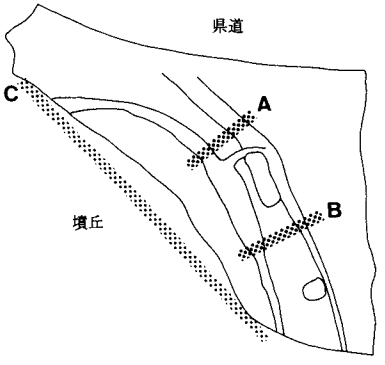
土坑（第236・237図、図版95）

周溝底面に発見された土坑は、平面形が長方形を呈し、二段掘りとなるものである。長さ300cm、幅96cm、深さ40cm、土坑底面の長さ225cm、同幅36cmを計測した。主軸方位は北９度西に在り、周溝の位置に規定されている面が高いと推定される。覆土は地山土の黄褐色砂質土が褐色に変化した状態であり、分層することはできなかった。土坑底面には副葬品は検出されなかったが、土坑検出面の上位置で土師器坩と器台の２組が、周溝外縁から転げたような状態で発見されている。

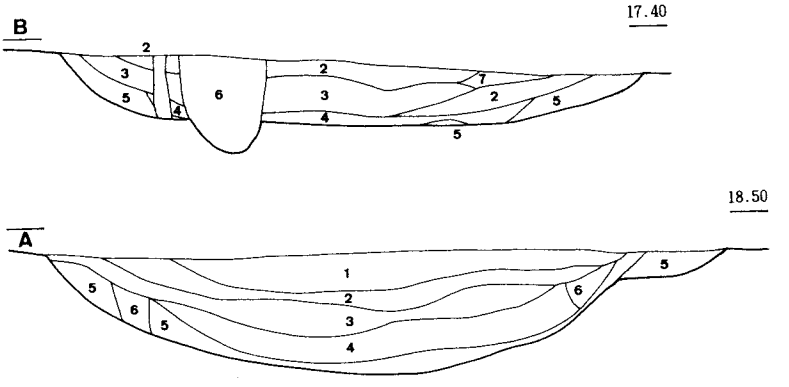
先の土坑から南方向に約450cmの位置で、平面形が楕円形を呈する土坑１基を確認した。径100×110cm、深さ35cmの規模を測る。覆土は炭化物を交えた黒褐色土で、壁面の一部が赤変しており、火がたかれたものと推定される。出土品は皆無である。

出土土器（第239図）

1194～1197は北周溝の傾斜面に沿って出土した一括品で、周溝内土坑に関係するものと推定される。1194はいわゆる小型丸底壺で、復元完形品となった。口径10cm、器高６cmを測る。長く伸びる口縁部と小振りの体部に方向を変えた磨き調整が施されているが、内面の調整はやや粗雑である。にぶい橙色を呈し、胎土には砂粒の混和は少ない。1195は口径11.5cm、口縁器高4.5cmに復元されるもので、口縁部には斜め方向の磨きが施されているが、器表面は凹凸が目立つ。浅黄橙色を呈し、焼成は堅緻で、やはり、胎土は精選されたものが使われている。

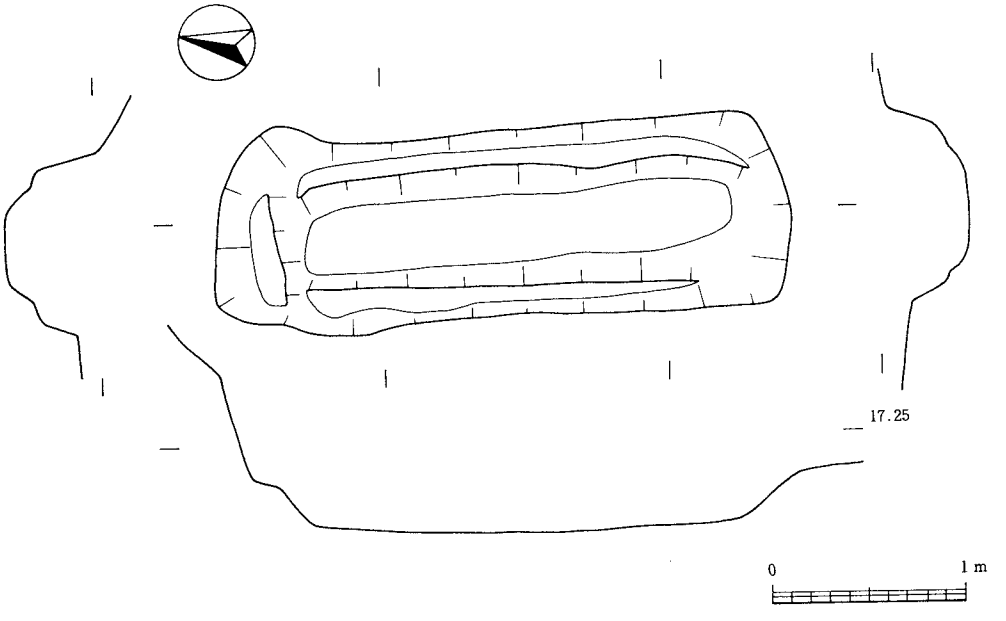


第234図　断面実測位置図（１／400）

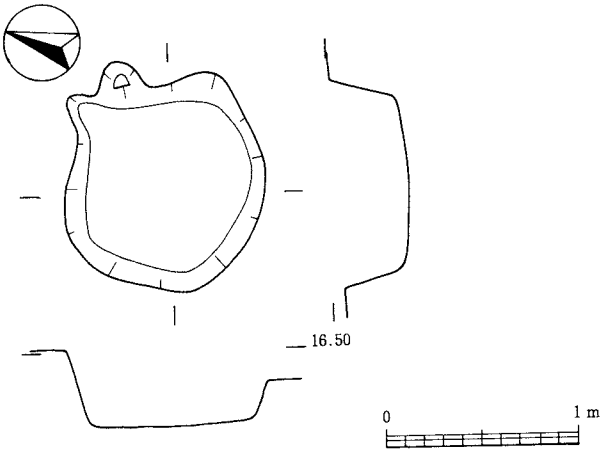


1．黒褐色砂質土
2．茶褐色砂質土
3．暗茶灰褐色砂質土
4．明茶灰色砂質土
5．暗黄褐色砂質土
6．暗黄褐色砂質土（地山ブロックを含む）
7．明茶褐色砂質土

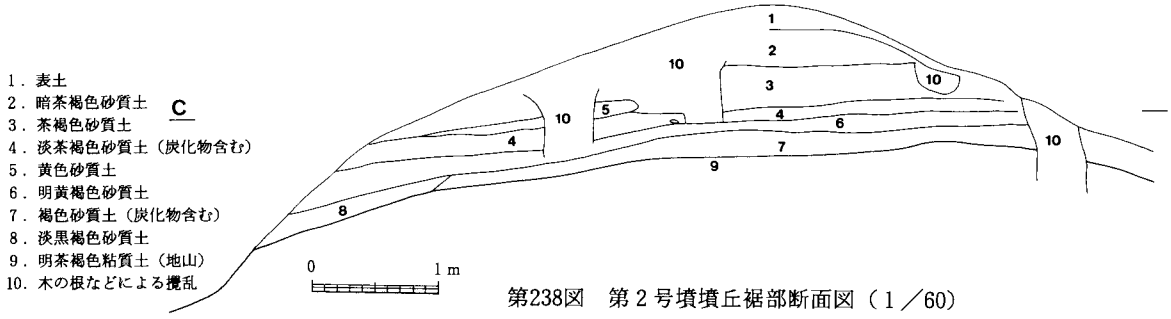
第235図　第２号墳周溝断面（１／40）



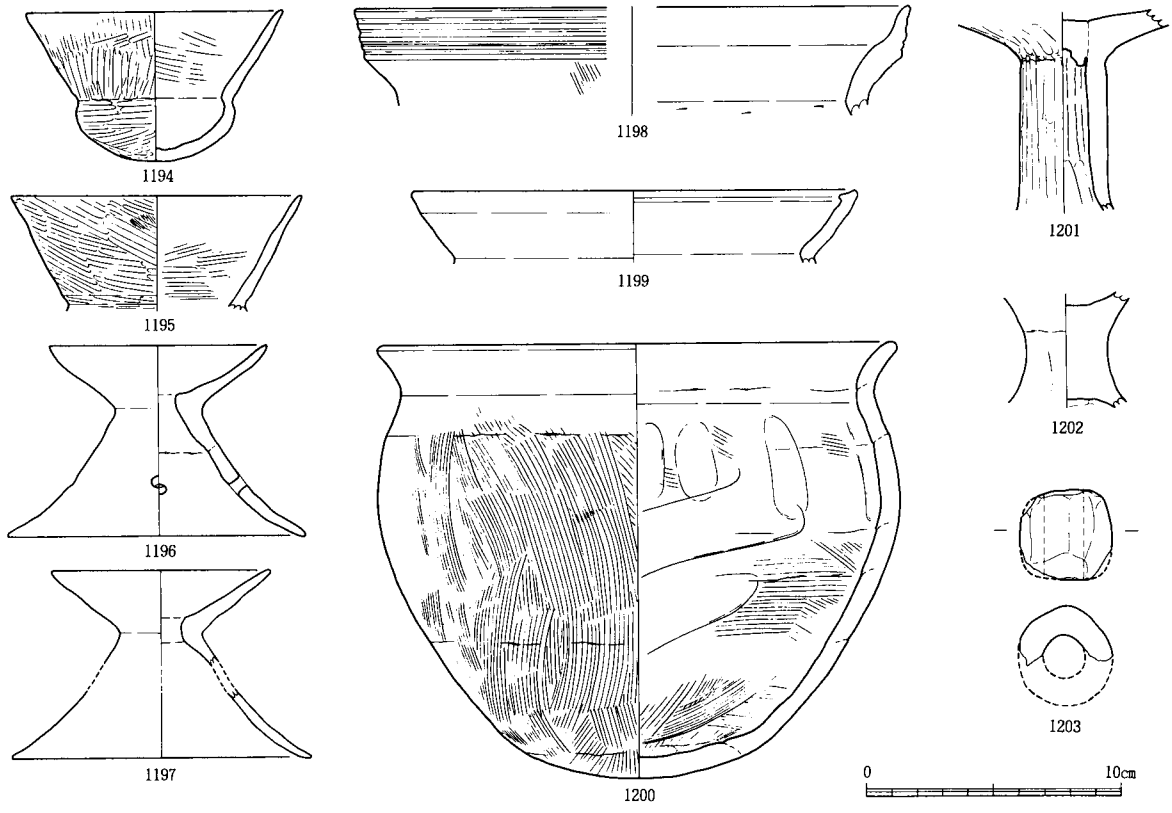
第236図　周溝内１号土坑（１／40）



第237図　周溝内２号土坑（１／40）



第238図　第２号墳墳丘裾部断面図（１／60）



第239図　第２号墳周溝出土土器（１／３）

1196は小型器台で、口径8.6cm、底径11.7cm、器高7.6cmに復元できた。透かし穴は四方透しであるのが確認できるが、全体に磨耗が進んでいて、調整痕はつかみがたい。橙色を呈し、砂粒の混入は少ない。1197も前者とほぼ同様の資料で、径、器高とも同じと言っても良いほどだ。1198は北周溝から出土した有段口縁甕の小片である。擬凹線が狭い口縁帯に巡らされている。胎土に砂粒は少ないが、全体に砂っぽい印象を受ける。1199は東周溝の上層から出土した内面肥厚の甕である。口径17.6cmに復元でき、体部片の出土もみられるのであるが接合復元することができなかった。体部の器表面は刷毛撫で調整が、内面は篦削りが施されている。色調は淡黄色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和されている。1200は東周溝上層の黒色土層から出土したもので、口径20.3cm、器高17.4cmに復元された。浅黄橙色を呈し、胎土には２～３ミリの砂粒を少量含んでいる。1201は円筒状の脚部を持つ高杯断片で、北側周溝から出土した。全体に磨耗が進んでいる。1202は北側周溝から出土した高杯、器台とも判断に苦しむものであるが、器台形土器の脚柱部として考えたい。胎土には１～２ミリの微砂粒を少量混和している。1203は北周溝から出土した土錘で、半分を欠損している。径3.6cm、器高3.7cm、内径1.6cmを測る。

第５節　まとめ

本古墳群の発掘調査で方形墳３基が確認され、出土土器から前期古墳群である事が判明したが、集落址の免田一本松遺跡の在り方から隣接した地域には墳丘を失った古墳や先行する弥生時代の墳墓群が所在する可能性が高いと考えられ、完結した墓域として検討は今後の課題である。調査で検出したのは墳丘が半壊していた第１号墳、墳丘を全く失っていた第３号墳、周溝部の発掘のみにとどまった第２号墳と、いずれの古墳についても調査が限定されている事もあって主体部を検出できず、充分な調査とは言えないが、古墳築造の過程を推測してまとめとしたい。なお、免田一本松遺跡との関わりについては、今後の検討課題としたい。

墳丘規模で見ると、周溝部を検出できた第３号墳が最も小さく、墳丘が半壊していた第１号墳、墳丘裾部と周溝部の調査となった第２号墳の順序で大きくなっていく。15m・20m・25mの規模を測るが、各墳丘が正確に正方形であるかは疑問が残る。土砂採取以前の第１号墳は、敗戦後の昭和20年代に盗掘がなされたとのことであるが、墳丘については検討されておらず、北側あるいは東側に前方部を付えた前方後方墳の可能性は否定しきれない。周溝幅についても、検出できた南側と西側とでは4mと5mと幅に差が見られる理由については不明である。また、南西部の周溝幅が極端に狭くなっていることについても、先行していた第3号墳の周溝隅を避ける形での掘削なのか、周溝外土坑2基の在り方から祭祀の場か墳丘上への通路であったか、あるいは、その全てを考慮したものであったかは確定することはできない。第2号墳は前者と同様に墳丘裾部は後世の削平によって縮小している事が確認され、20×25mの規模を持つ墳丘の全形を残してはいるものの一辺が25mの墳丘と推定される。本古墳群の中では最大規模であるものの、丘陵端部の地形を利用した立地から盛り土量では平坦部の第１号墳よりは少ないと推定される。第３号墳は周溝の立ち上がりで見ると、15×13mの規模を測る長方形を呈しているのは、本古墳群の平面形を考えていく上で或る視点を呈示しているとも言える。つまり、第３号墳を除いては周溝の四周の立ち上がりを検出していない為に、平面方形プランでの推定値を考えているが、長方形プランの可能性も残っているのである。

主体部に関しては、痕跡が推定された第１号墳を含めても、それらの比較検討は困難である。消極的の評価では、第１・２号墳が破壊・盗掘を受け副葬品の出土が伝えられていないことから、豊富な副葬品が在ったとは考えにくいとも言える。しかし、第２号墳は盗掘穴が主体部を外している可能性が高いことから、今後の調査を待たねばならない。

本古墳群の調査で特色として上げられるのは、周溝内、周溝外で検出された土坑の検出であろう。検出した３基の土坑のいずれにも土器を除いて顕著な副葬品は認められなかったのは、古墳主体部の経済力を或る程度反映したものであることが想定される。第１号墳の２基の土坑では、周溝の掘り込み線から一定の間隔を保っているものと、それに接しているものがあるが、若干の時期差を持っているのではないかと推定している。つまり、前者は古墳築造時ないしはそれに近い時期、後者はやや遅れ周溝掘り込み面が判別しにくくなった段階である。第２号墳の周溝内に埋葬された土坑と、第１号墳の周溝外の土坑とは若干の性格の違いがあるのであろう。兆域に含まれるものは、墳丘主体部により近い関係を持つものと理解されるが、血縁的な関係よりは主従的な関係の中にとどまるものと推定している。

出土した土器の編年的位置を確実に押さえられるのは、第２号墳の周溝内土坑に伴うセット関係にある小型器台と小型丸底壺及び周溝底面から出土した甕で、口能登地域での高畠式期の所産が考えられる。時期判断が容易な高杯を欠いているが、高畠式期のなかでも早い段階のものを推定している。周辺地域では押水町の宿東山遺跡第15号住居址、第16号住居址出土土器が当てられるのであろう。第１・２号墳から出土した土器群は、免田一本松遺跡の集落群と複合している可能性が高いと判断され、周溝内、封土からの出土土器を古墳築造時を示しているものではないが、全体的な傾向性を見ると、第２主体部から出土している高杯（1151）の開き気味の脚部の在り方やヘラ描き施文を施す壺型土器や大型装飾壺（1181）、甕の脚台が目立つ事などから、第２号墳よりは古い時期での築造が推定され、古府クルビ式期に位置付けられよう。

調査を実施した３基の古墳は別支群の可能性を残すが、既述した状況から第３号、第１号、第２号の順序で築

造されたと考えられる。

本古墳群と同一丘陵上に立地し、埴輪を持つ森本大塚古墳は、大海川流域の盟主墳と見られ、本古墳群につながる位置が想定されるが、前方後円墳２基、前方後方墳２基を含む押水北部の宿・竹生野古墳群が経起的な発展過程をたどるのと、対称的な内容を持っていると言える。大海川の対岸にある高松町の弥生時代以来の遺跡の展開を含めて、押水地域南部の地域性の検討は今後の課題である。

参　考　文　献

三浦純夫・越坂一也他　1988　「竹性野遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター

北野博司他　1987　「宿東山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人他　1986　「漆町遺跡Ⅰ」　石川県立埋蔵文化財センター

米沢義光・藤田邦雄　1987　「宿向山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター

折戸靖幸　1987　「高松町中沼Ｃ遺跡」　石川県高松町教育委員会

橋本澄夫　1975　「金沢市高畠遺跡」　金沢市教育委員会

冬野遺跡全景

図版2

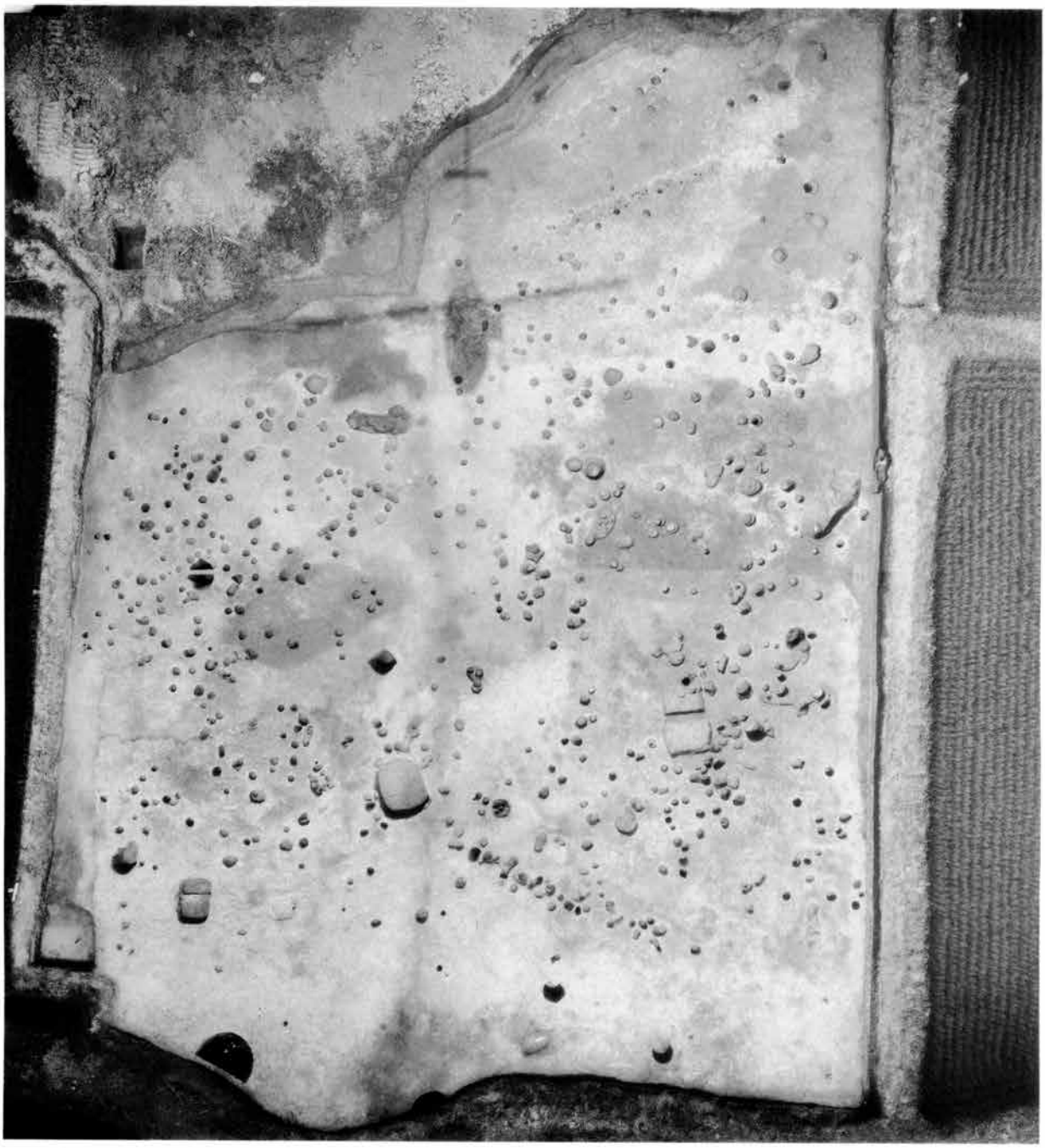
冬野遺跡群航空写真

免田一本松遺跡全景

冬野遺跡遠景（西南から）

冬野遺跡全景（西から）

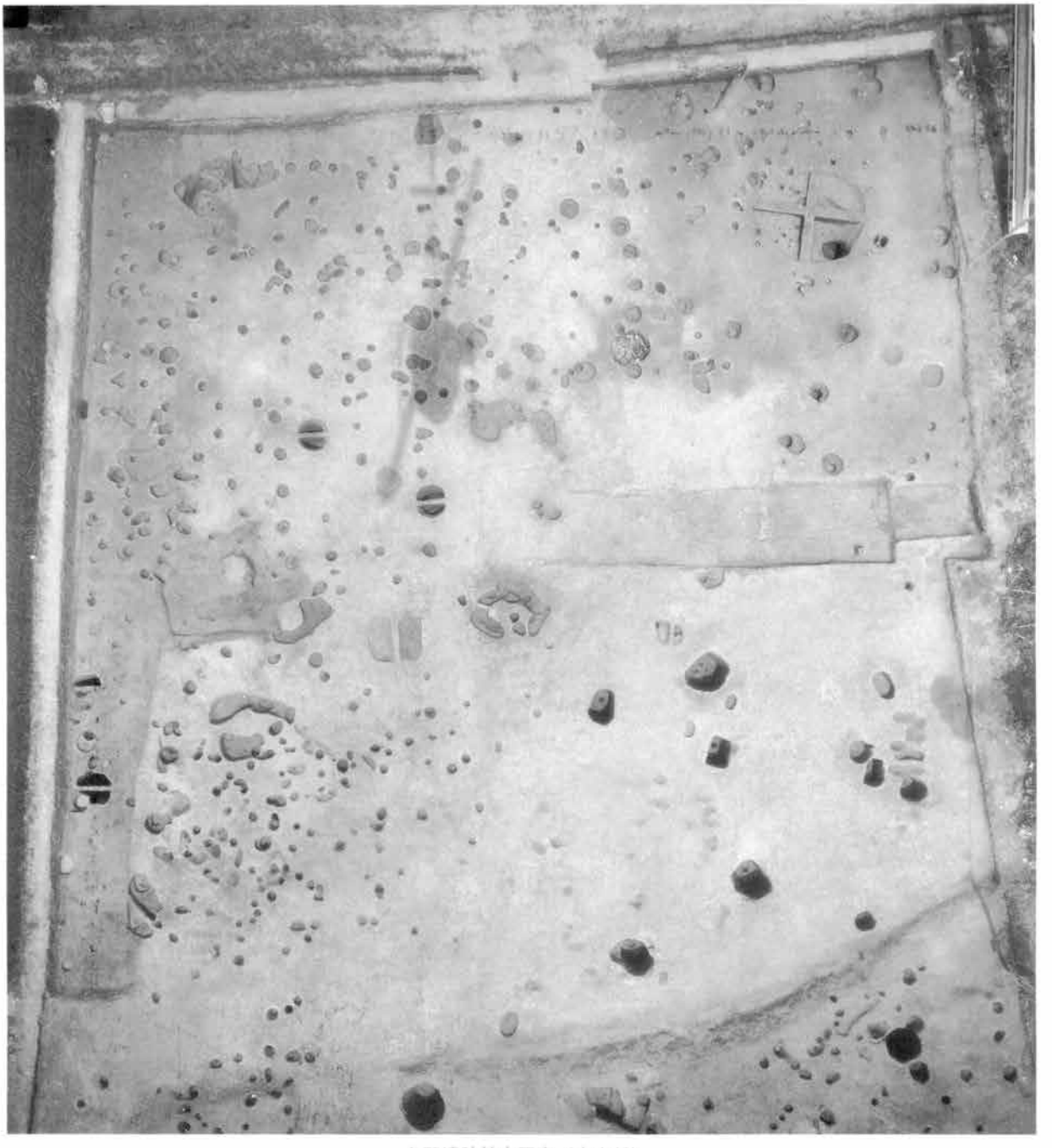
図版4



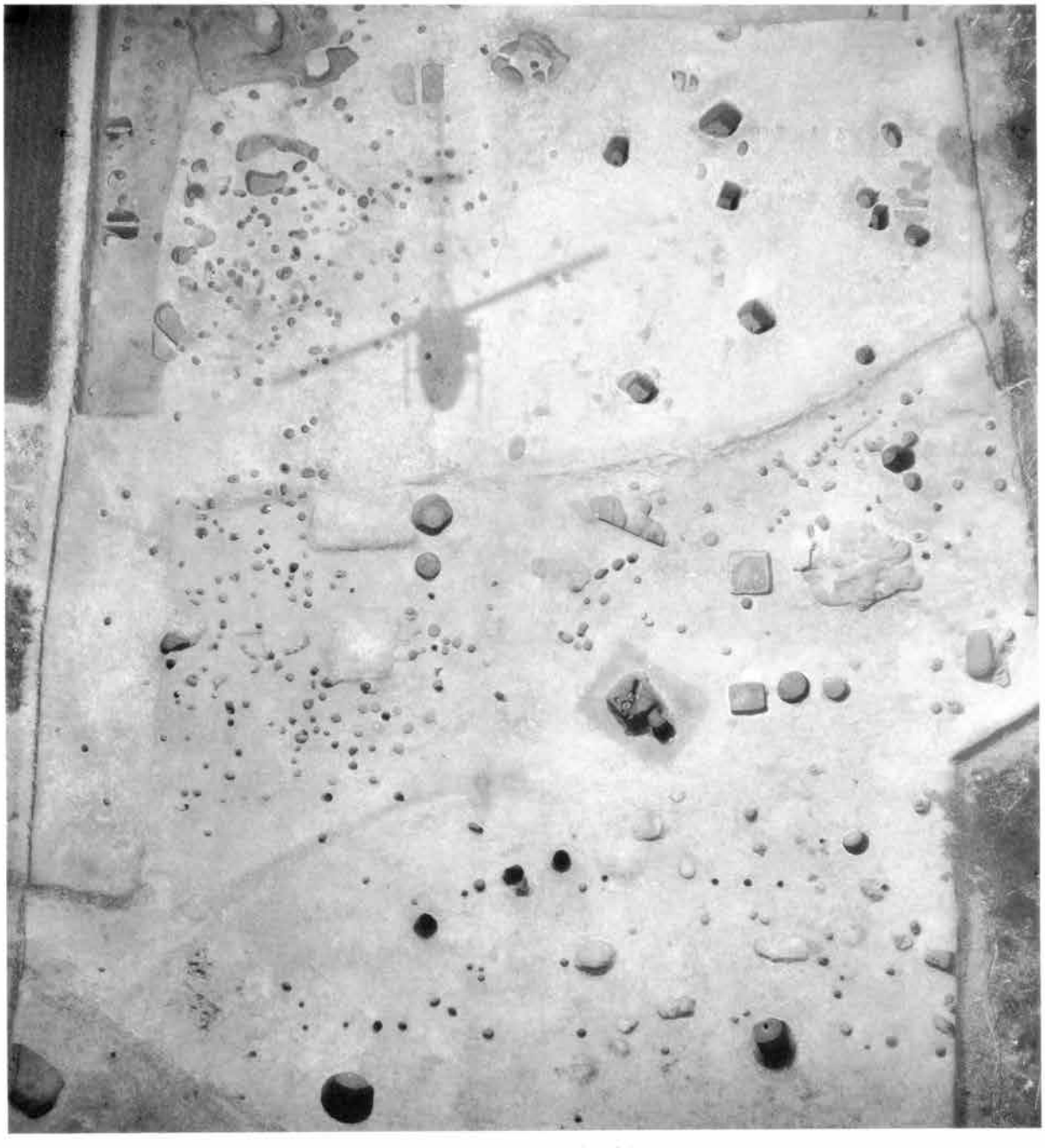
冬野遺跡航空写真（最北部）

冬野遺跡航空写真（北　部）

図版6

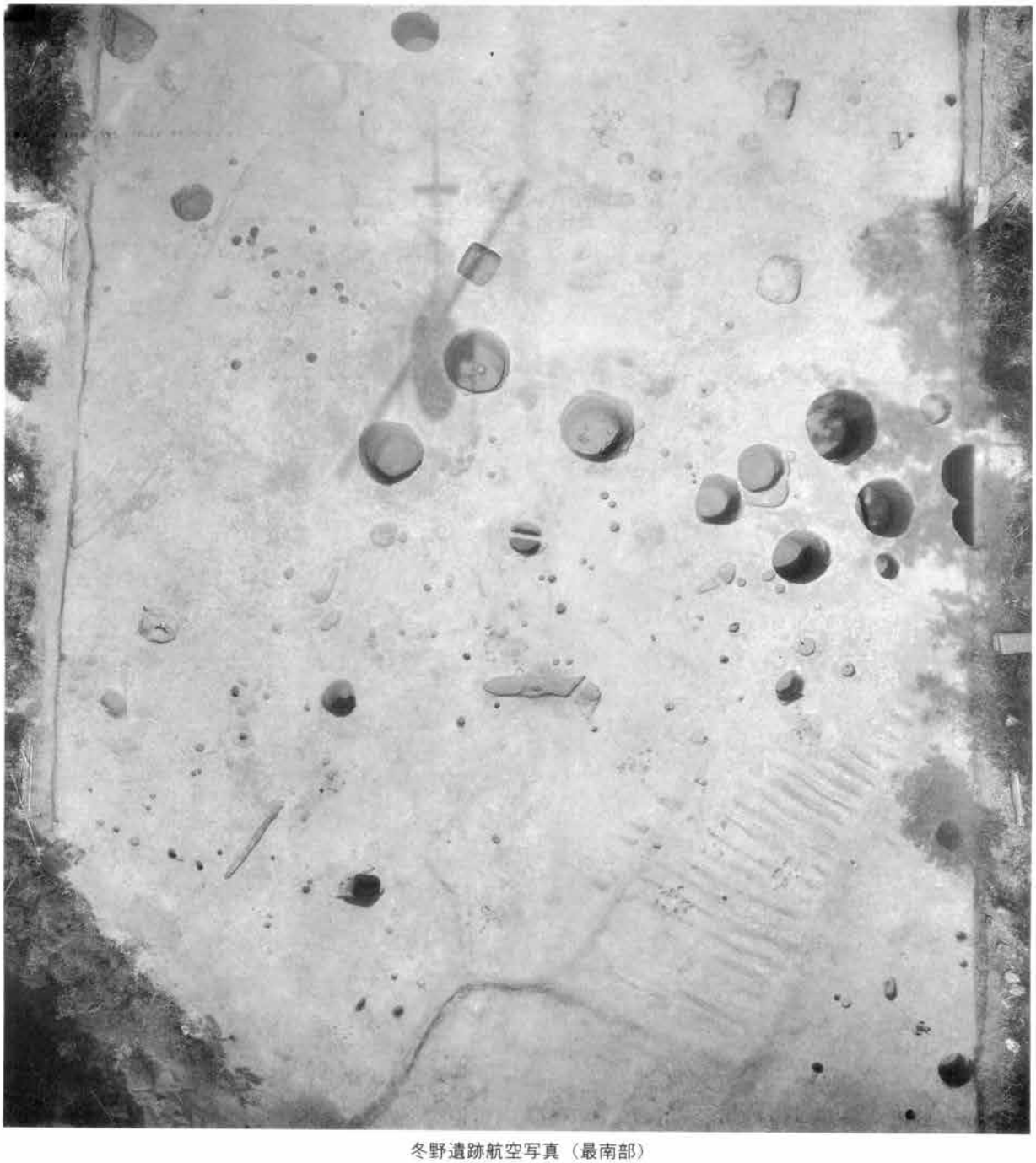


冬野遺跡航空写真（中央部）



冬野遺跡航空写真（南　部）

図版8

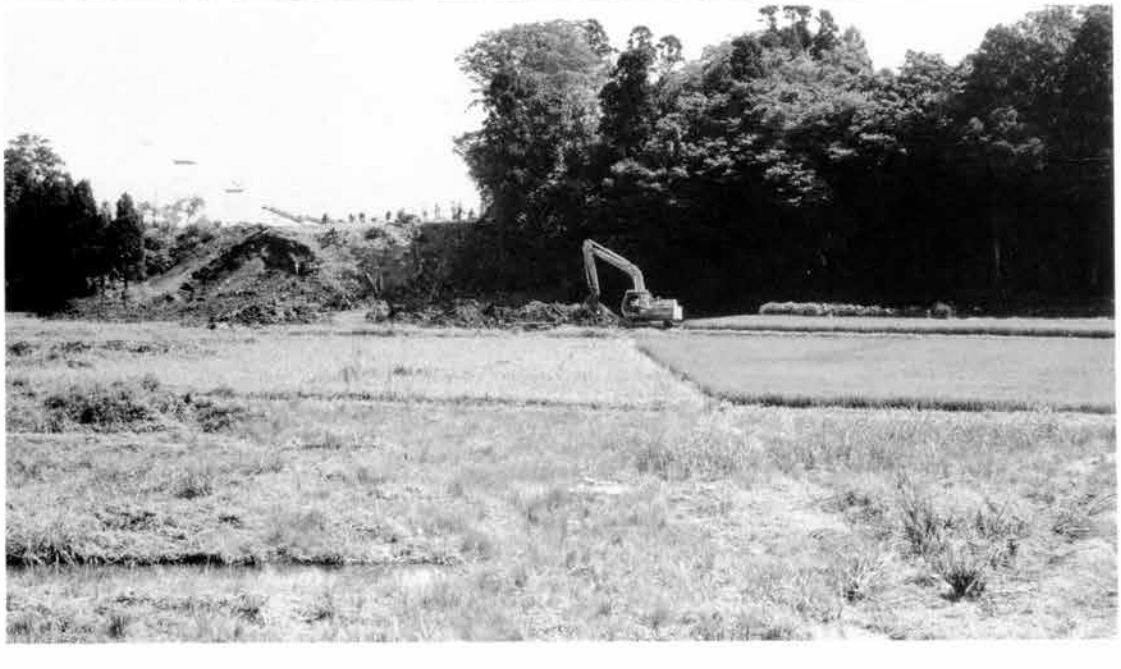


冬野遺跡航空写真（最南部）

調査前風景

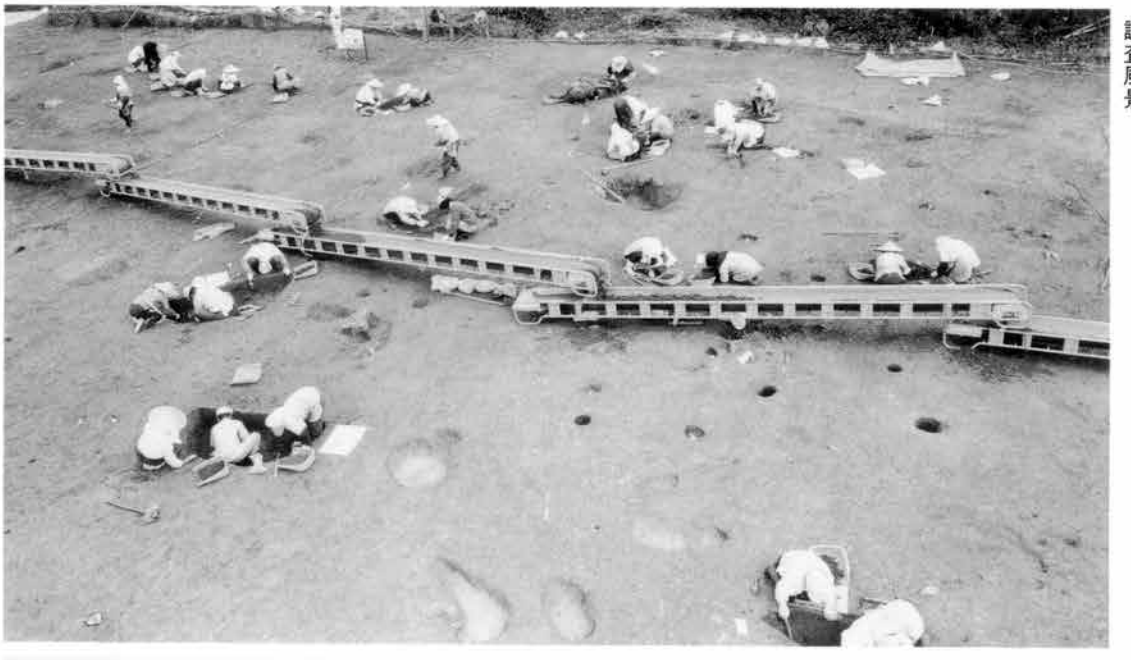
表土除去風景

水田部試掘風景



図版10

調査風景



調査風景

調査風景

図版11

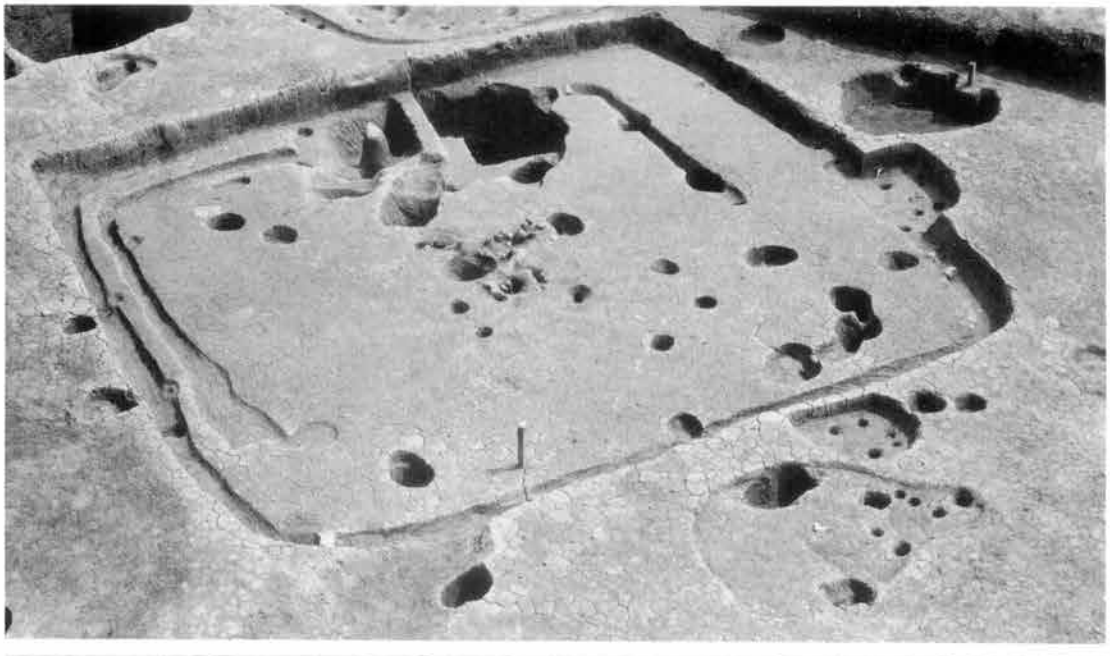
航空測量風景

調査区南部（北から）

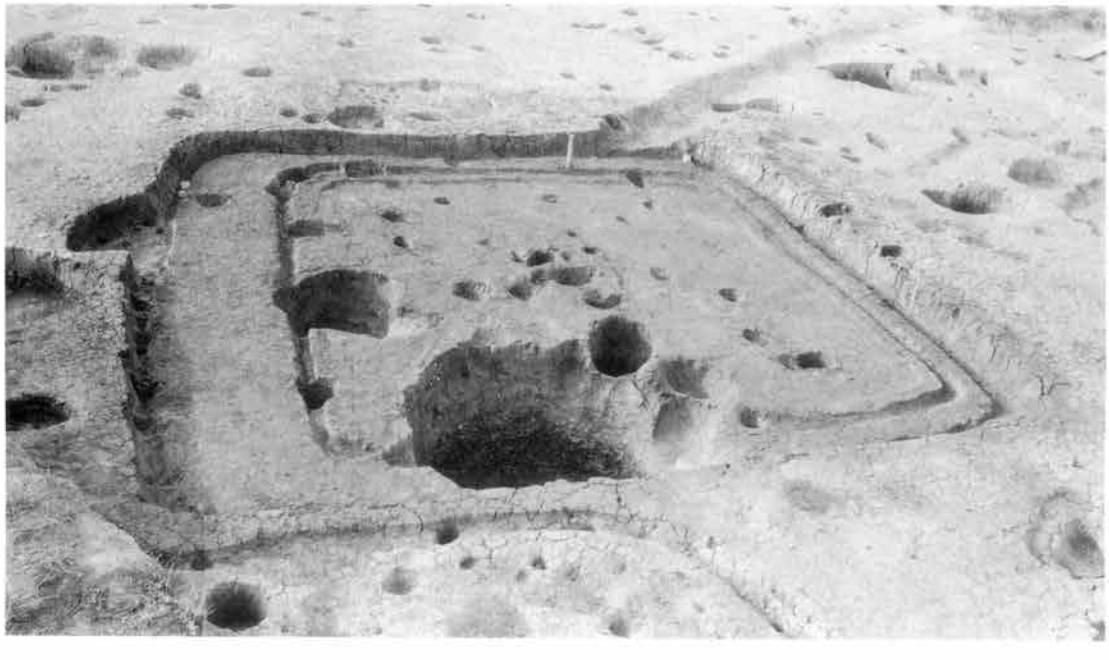
調査区北部（南から）

図版12

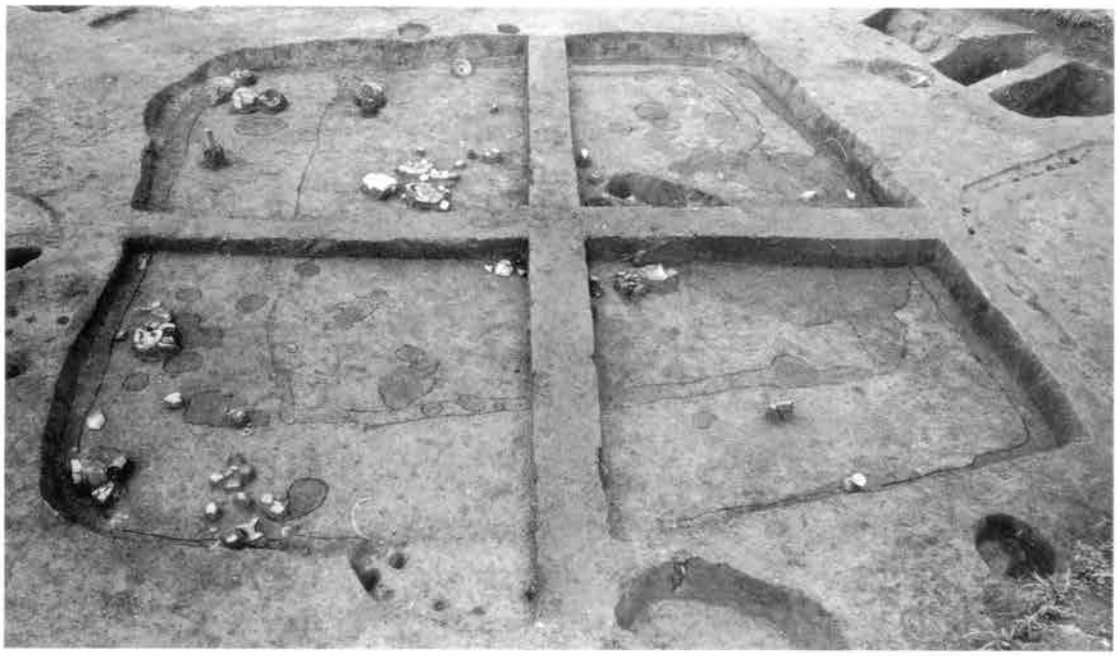
第1号竪穴住居跡（調査風景）



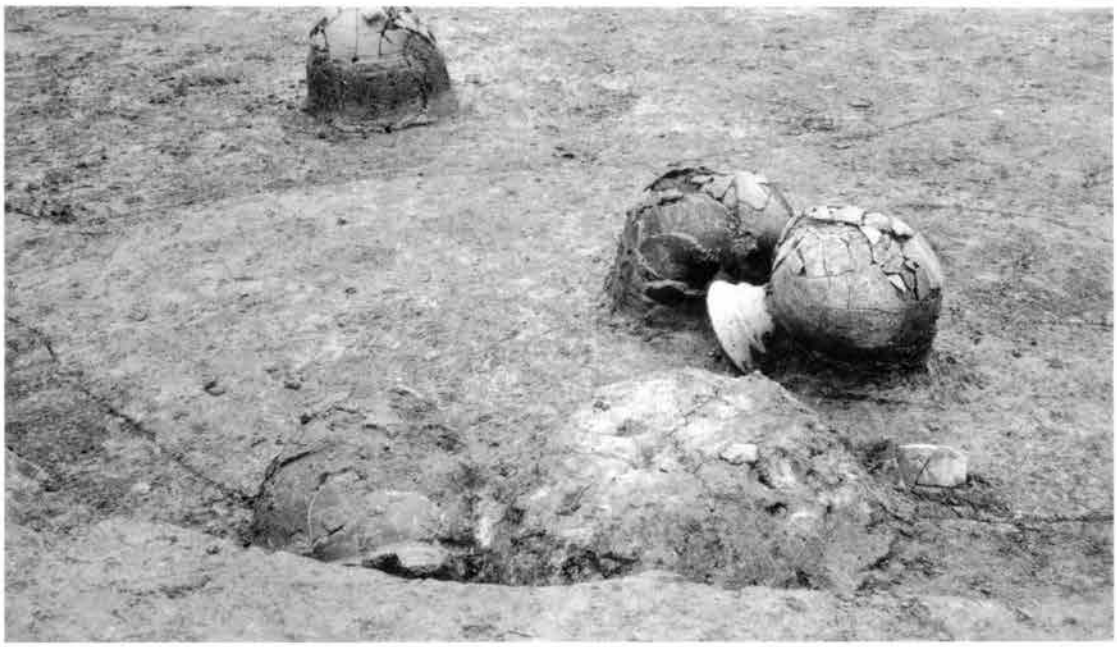
第1号竪穴住居跡



第1号竪穴住居跡



第1号竪穴住居跡（遺物出土状況）



第1号竪穴住居跡（遺物出土状況）

第1号竪穴住居跡（遺物出土状況）

図版14

第2号竪穴住居跡（調査風景）

第2号竪穴住居跡（遺物出土状況）

第2号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡

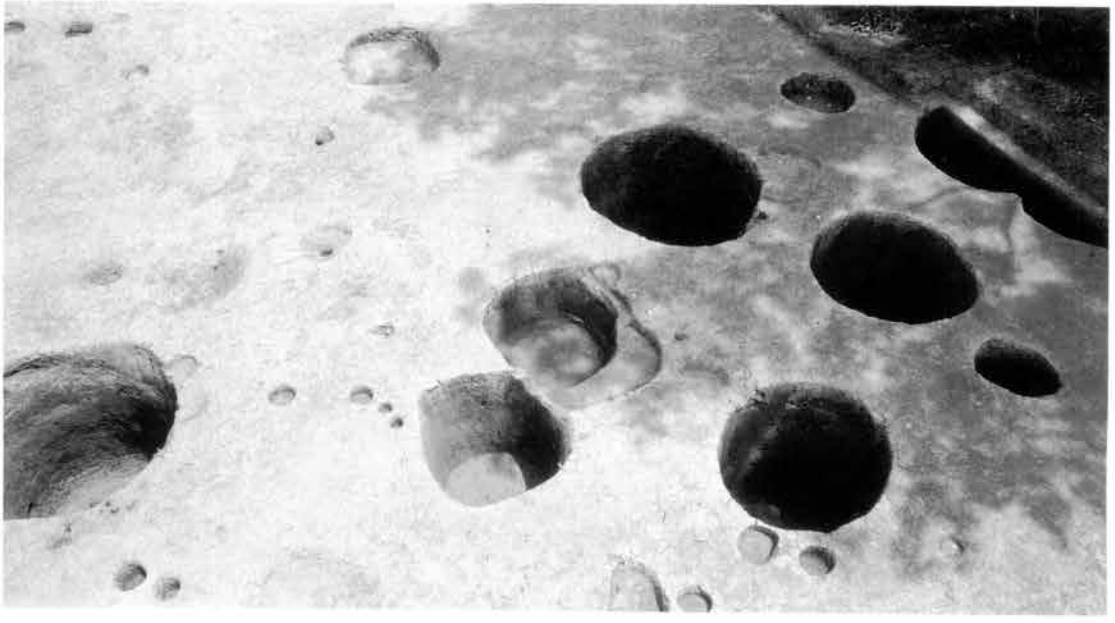
第5号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡

図版16

列状に分布する南a群（北西から）

南a群1・3・12号土坑（南から）

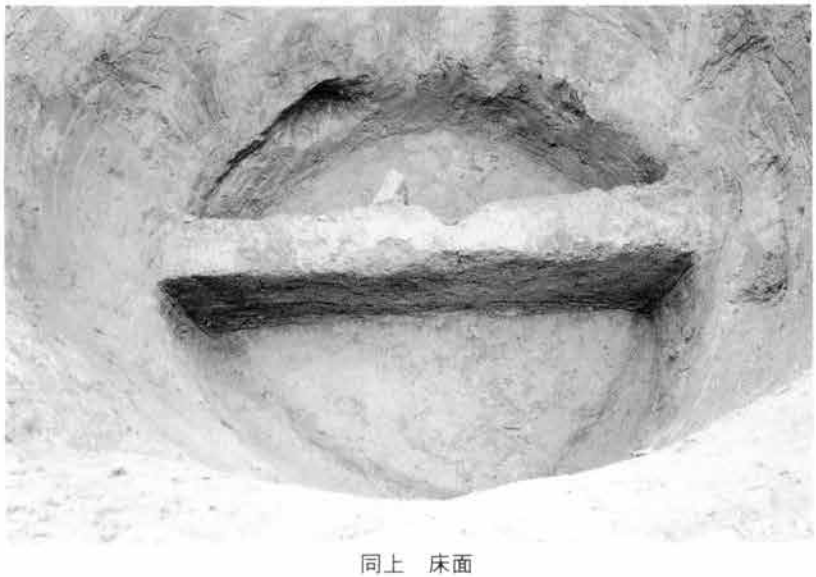


南a群7～10・35・36号土坑（西から）

大型土坑

1号土坑　第1次土器群

同左　「月影式」甕



同上　床面

同上　土層断面

3号土坑　作業風景

同左　第1次土器群と土層

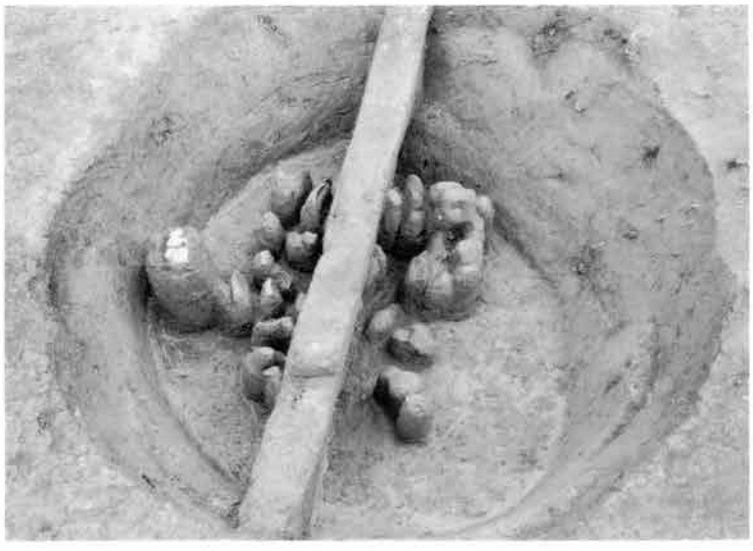
3号土坑　第1次土器群

同上　第2土器群

同上　土層断面

同上　坑底土器

12号土坑　第１次土器群



同左　第２次土器群

同上　土層断面

同上　作業風景

同上　第４次土器群（坑底）と土層断面

7号土坑　土層断面

同左　完掘

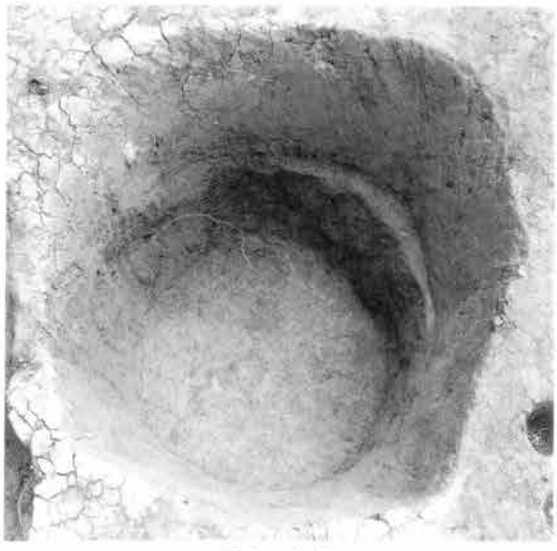
8号土坑　土層断面

同左　壁溝検出状況

9号土坑　第1次土器群

同左　第3次土器群

9号土坑　土層断面

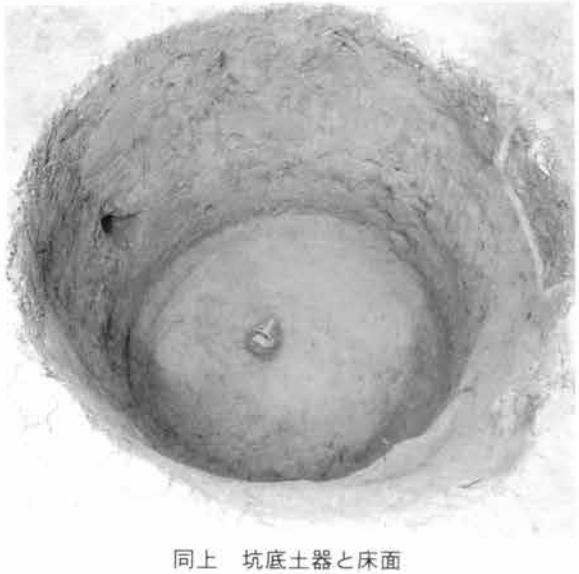


同左　完掘

10号土坑　土層断面（上半）

同左　第1次土器群

同上　土層断面（下半）



同上　坑底土器と床面

7号土坑　土層断面

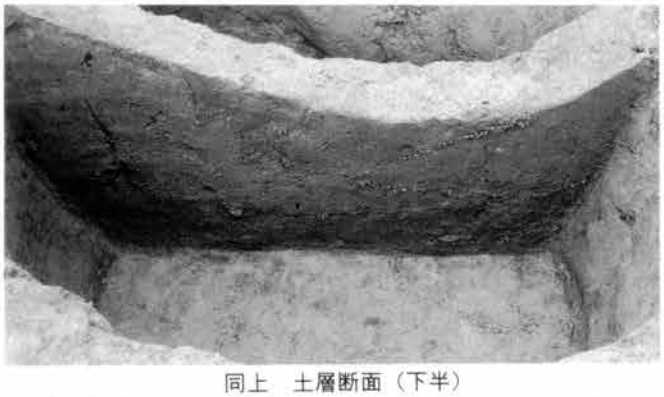
同左　完掘

同上　床面土器群

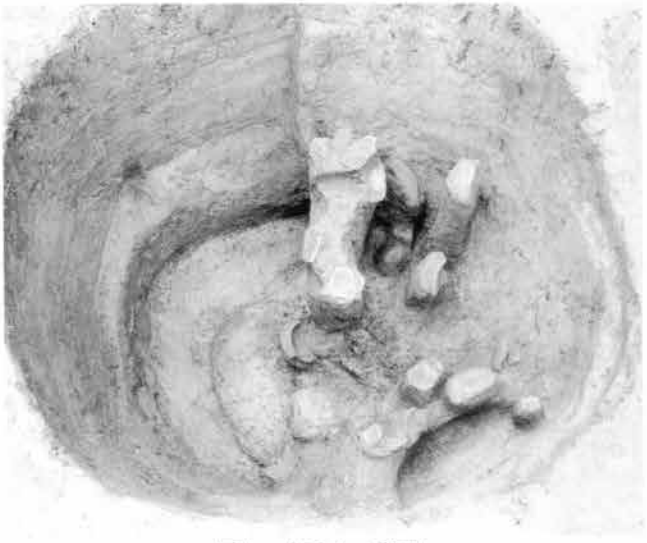
同左　作業風景

35号土坑1層土器群

14号土坑　第１次土器群（左）と土層断面（右）

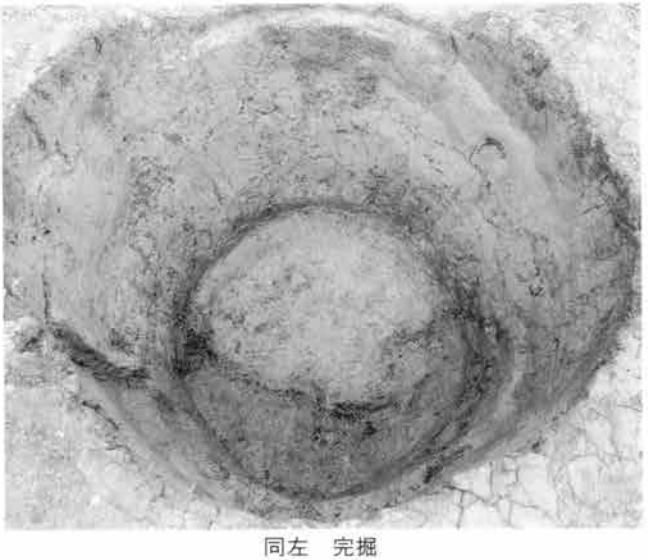


同上　土層断面（下半）



同左　第２次土器群

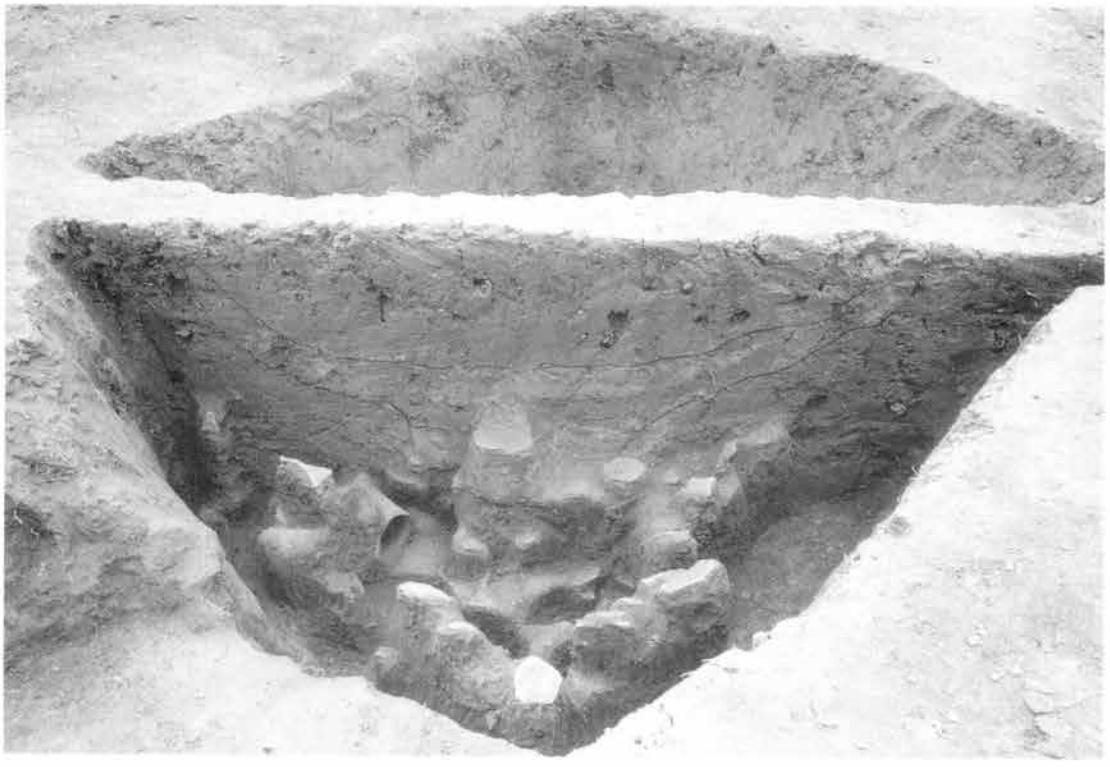
20号土坑　土層断面（上）と焼土面（下）



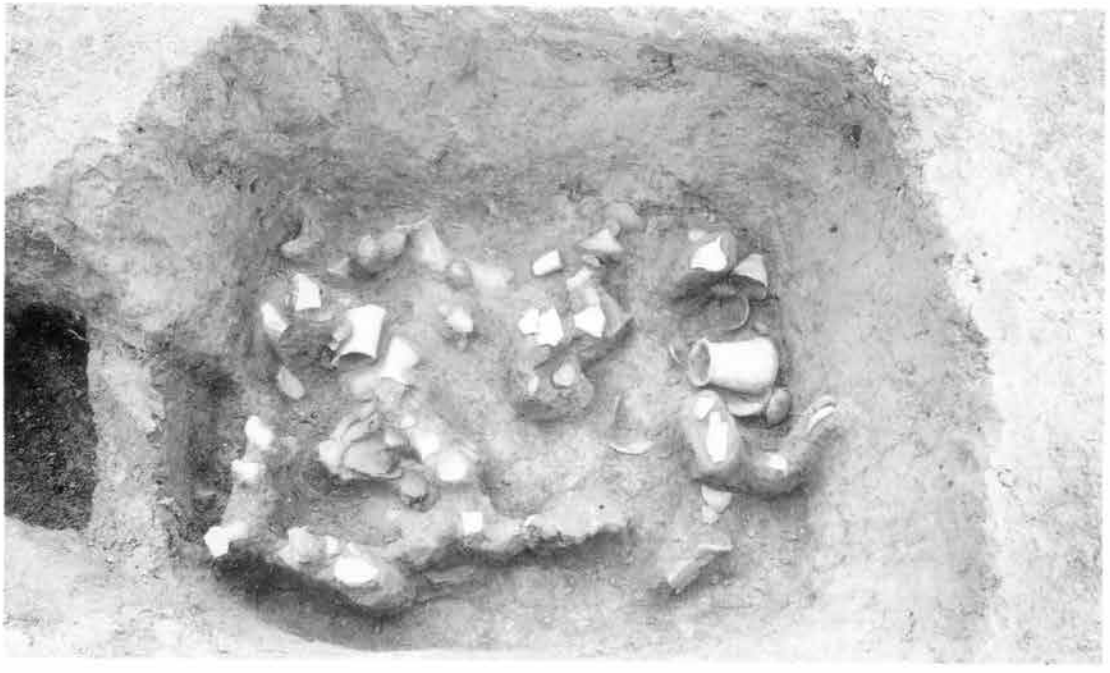
同左　完掘

図版24

17号土坑　第1次土器群

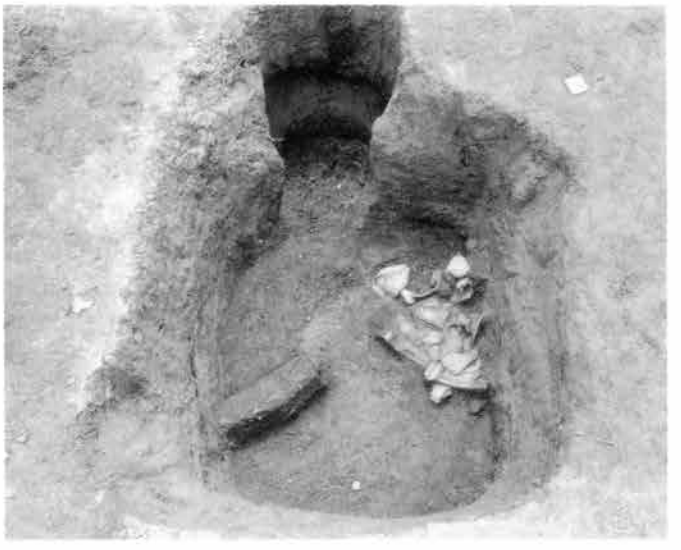


同上　第2次土器群と土層断面



同上　第2次土器群

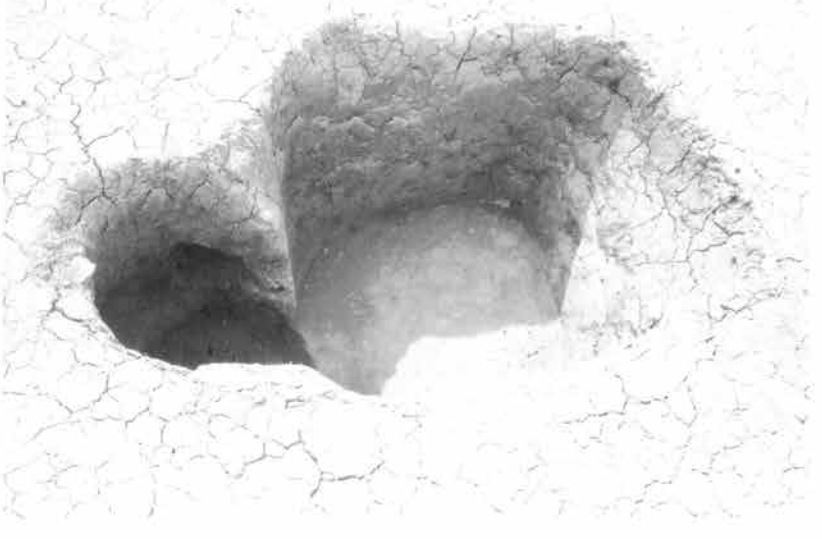
17号土坑　第３次土器群（１）



同左　第３次土器群（２）

同上　第４次土器群

同上　近接

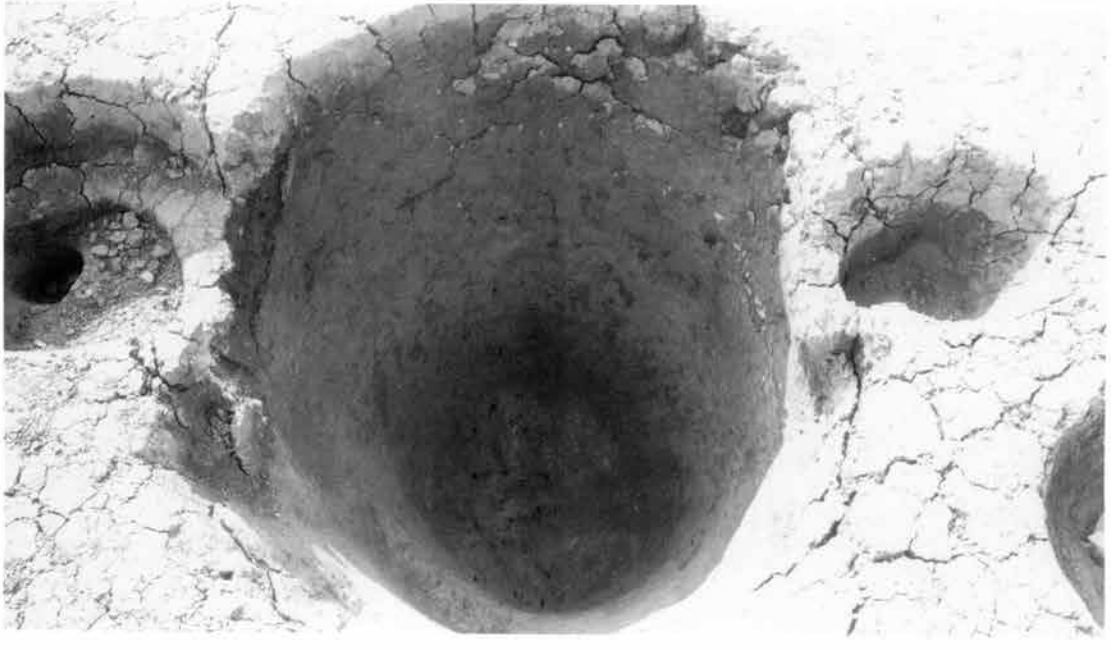


同上　完掘

図版26

32号土坑作業風景

同上　遺物出土状況

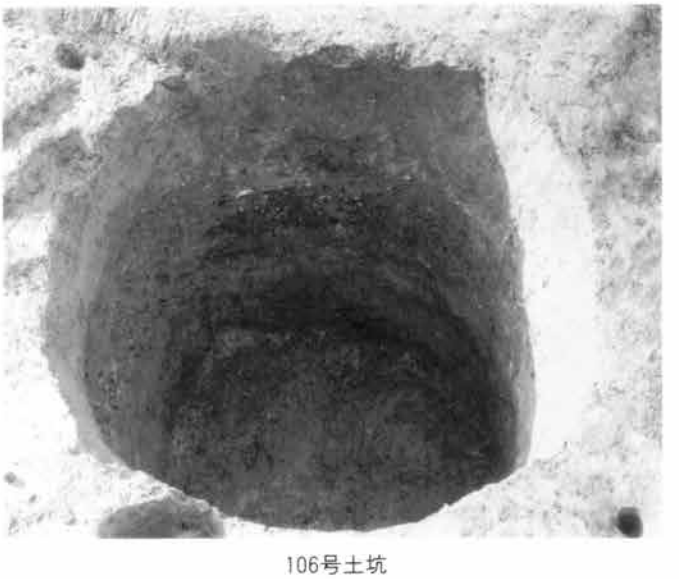


同上　完掘

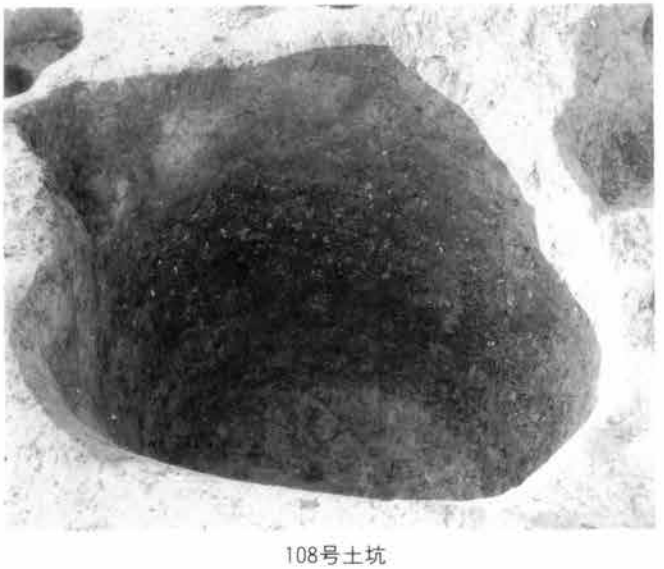
73号土坑

98土坑

100号土坑



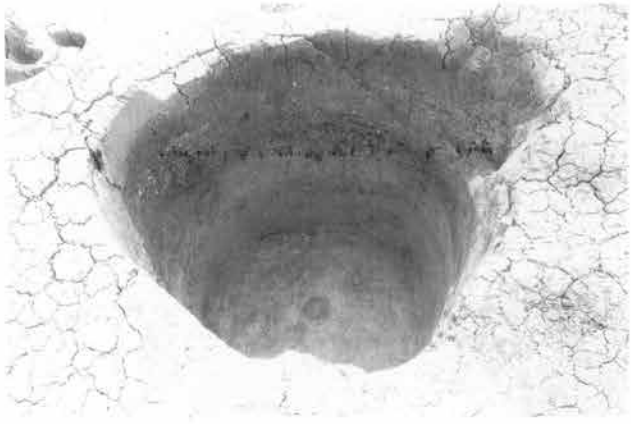
106号土坑



108号土坑

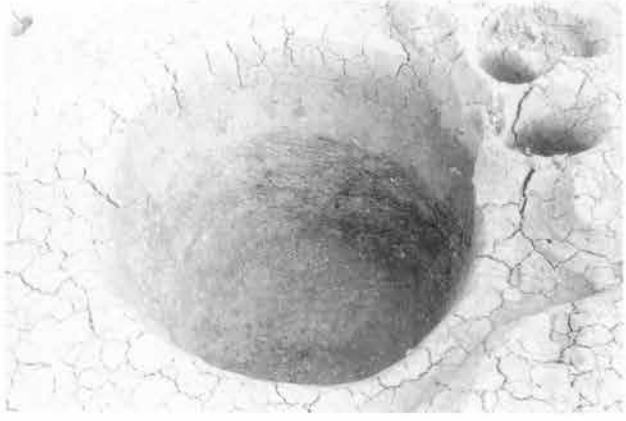
同左　土器出土状況

41号土坑　土層断面



47号土坑

同上　土器出土状況



44号土坑

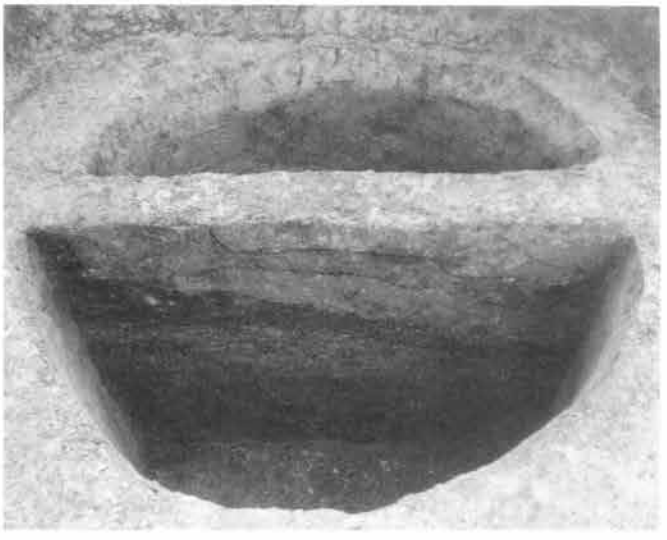
同上　完掘

49号土坑

43号土坑　土層断面

49号土坑（左）と44号土坑（右）

50号土坑　作業風景



104号土坑　土層断面

同上　土層断面

同上　完掘

同上　土器出土状況

同上　完掘

同上　作業風景

図版30

第1号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡

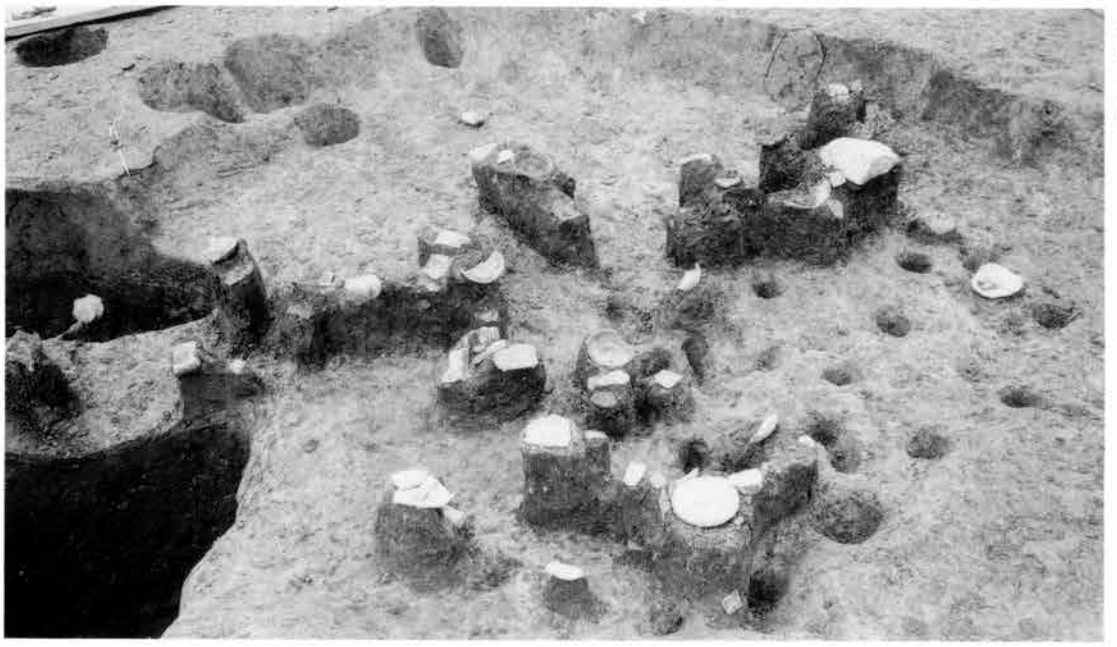
第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡

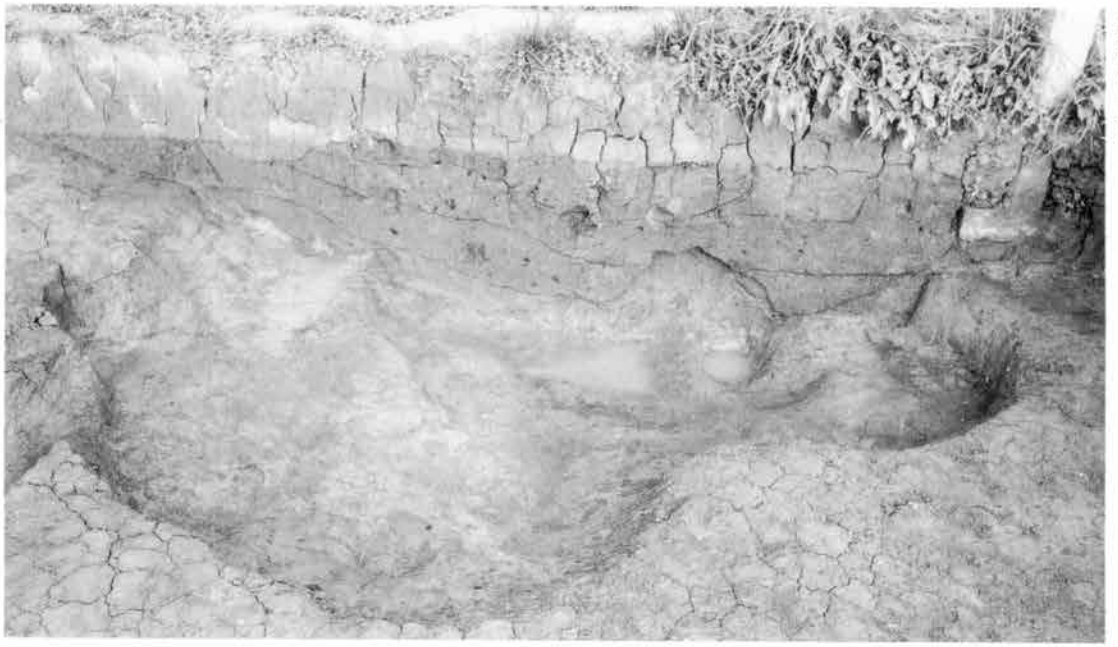
第7号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡

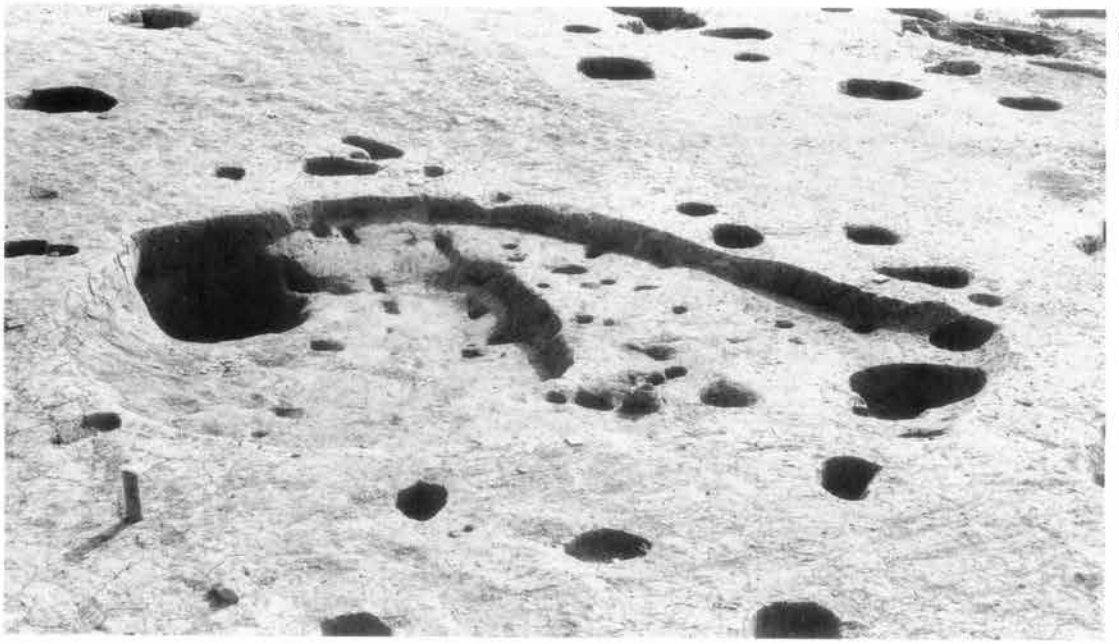
図版32



第48号土坑

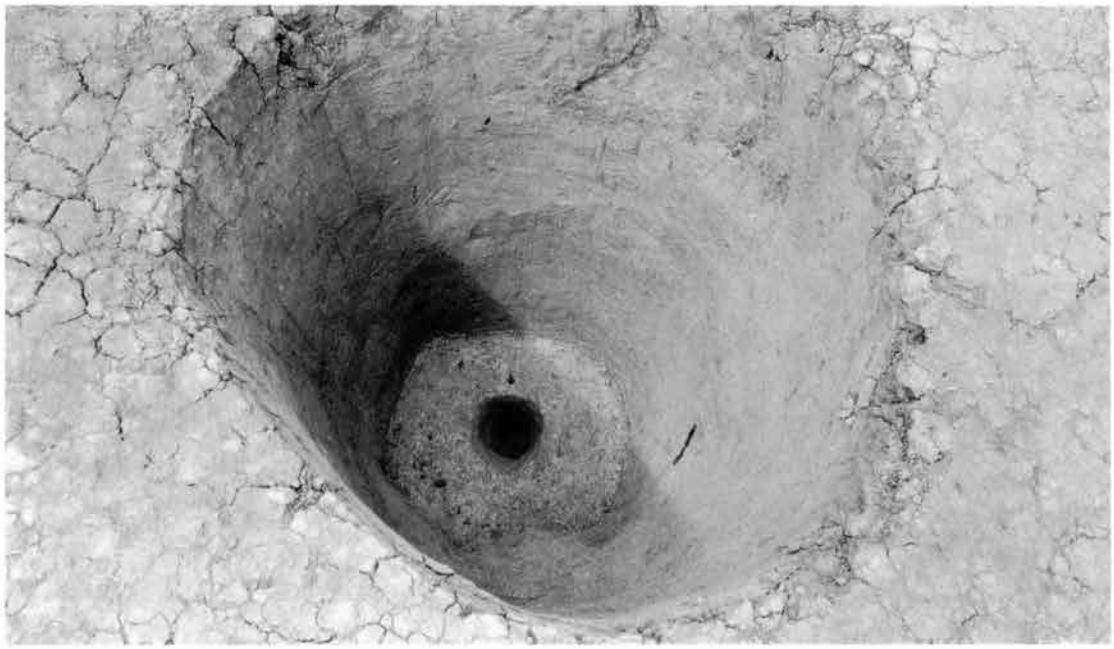


第70号土坑



第75号土坑

第2号土坑



第4号土坑

第11号土坑

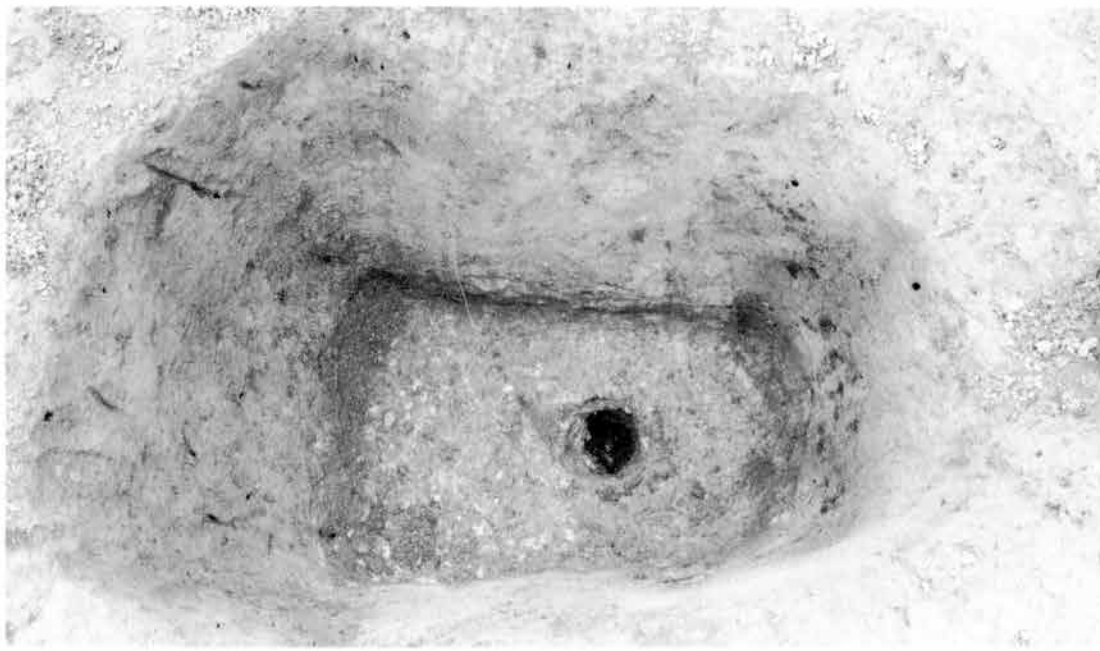
図版34

第15号土坑

第26号土坑

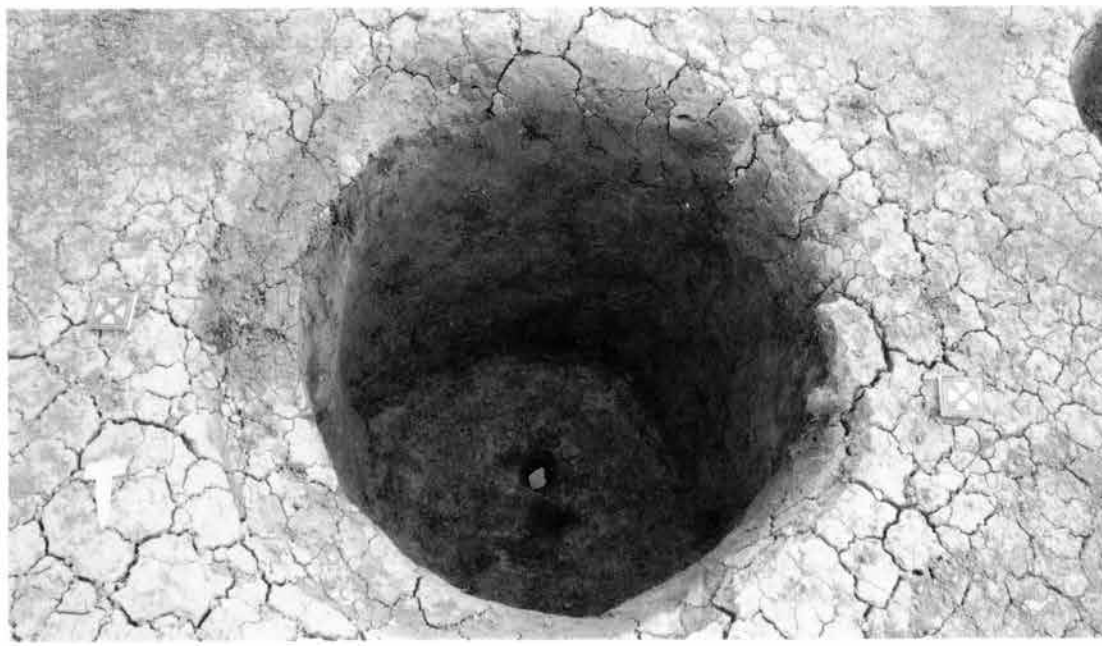
第27号土坑

第30号土坑



第39号土坑

第90号土坑



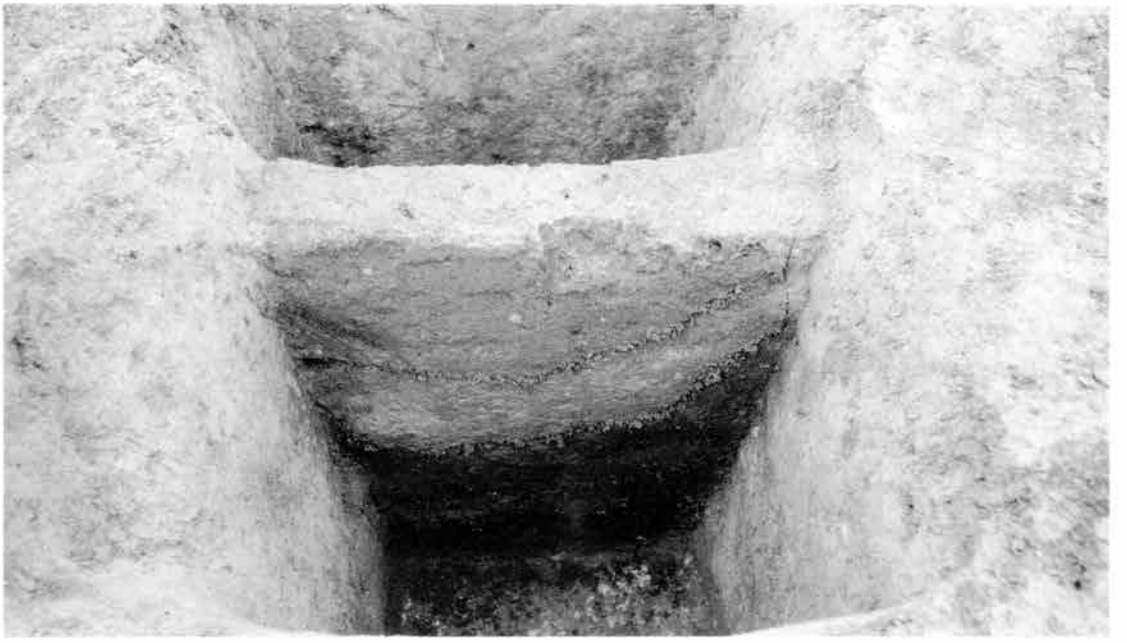
図版36

第91号土坑

第96号土坑

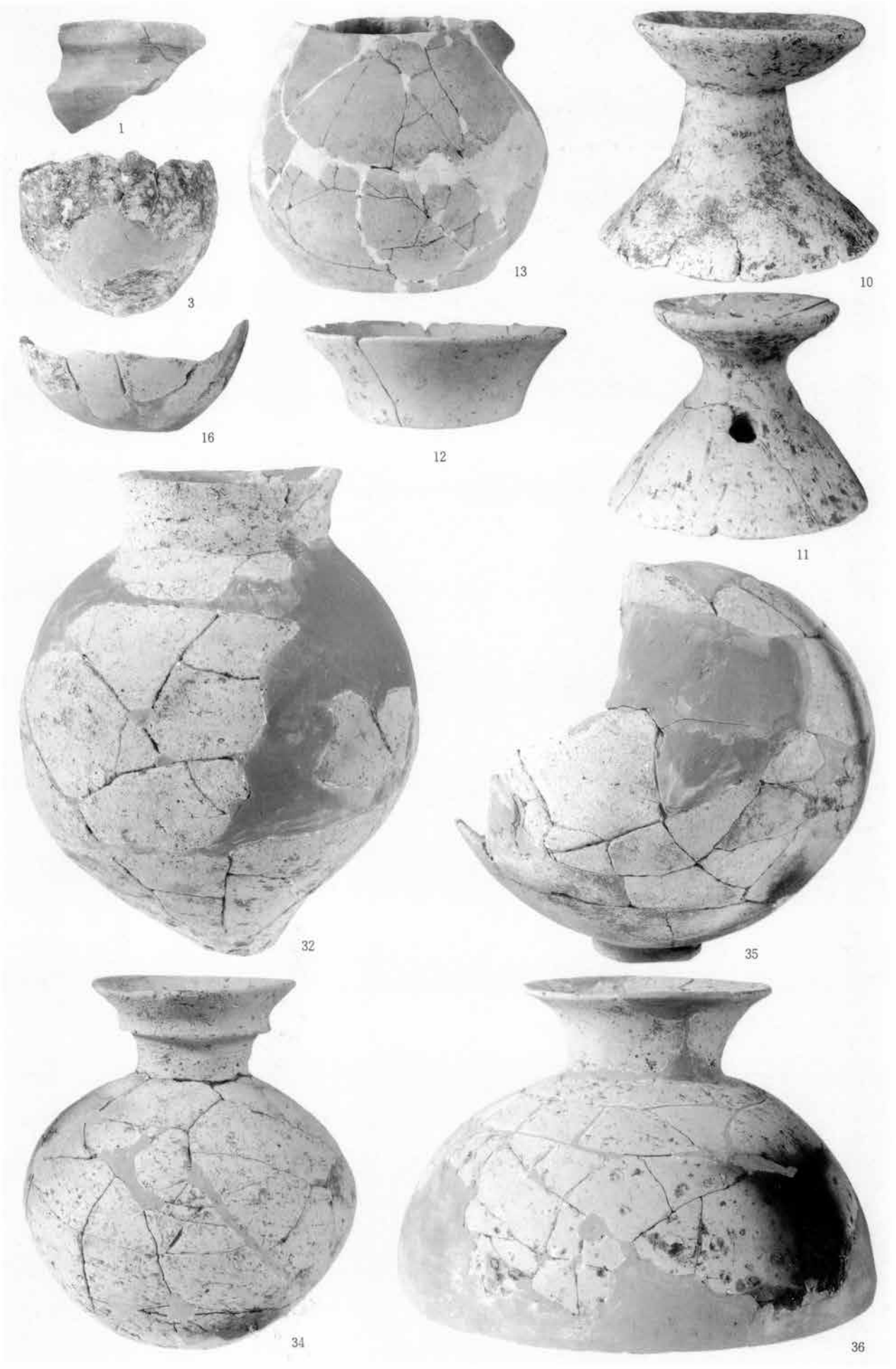
第103号土坑

第15号土坑（土層）



第27土坑（土層）

第29号土坑（土層）



第１号竪穴住居跡出土土器

33

31

29

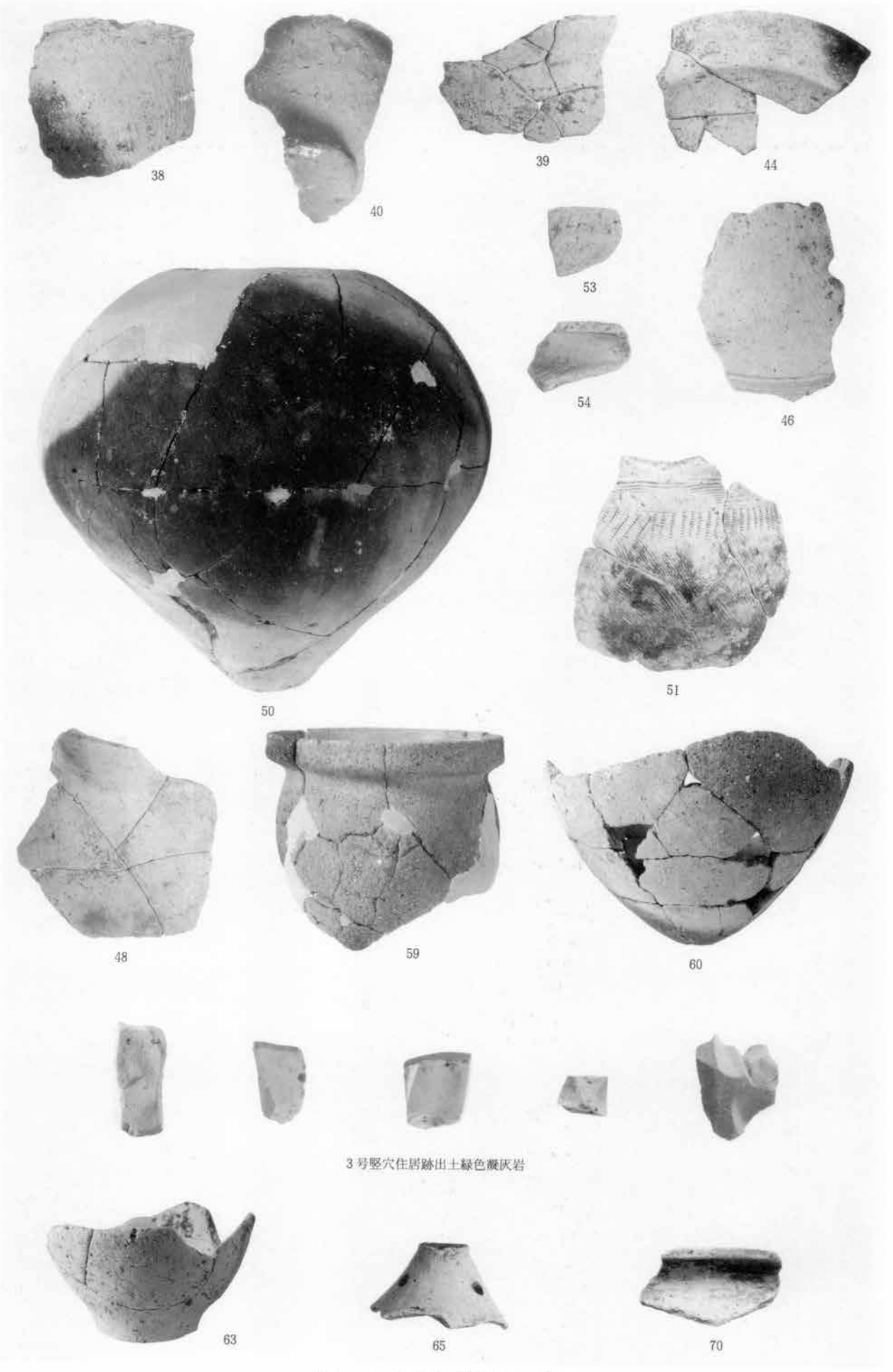
24

23

22

13の底部の焼成前補修痕

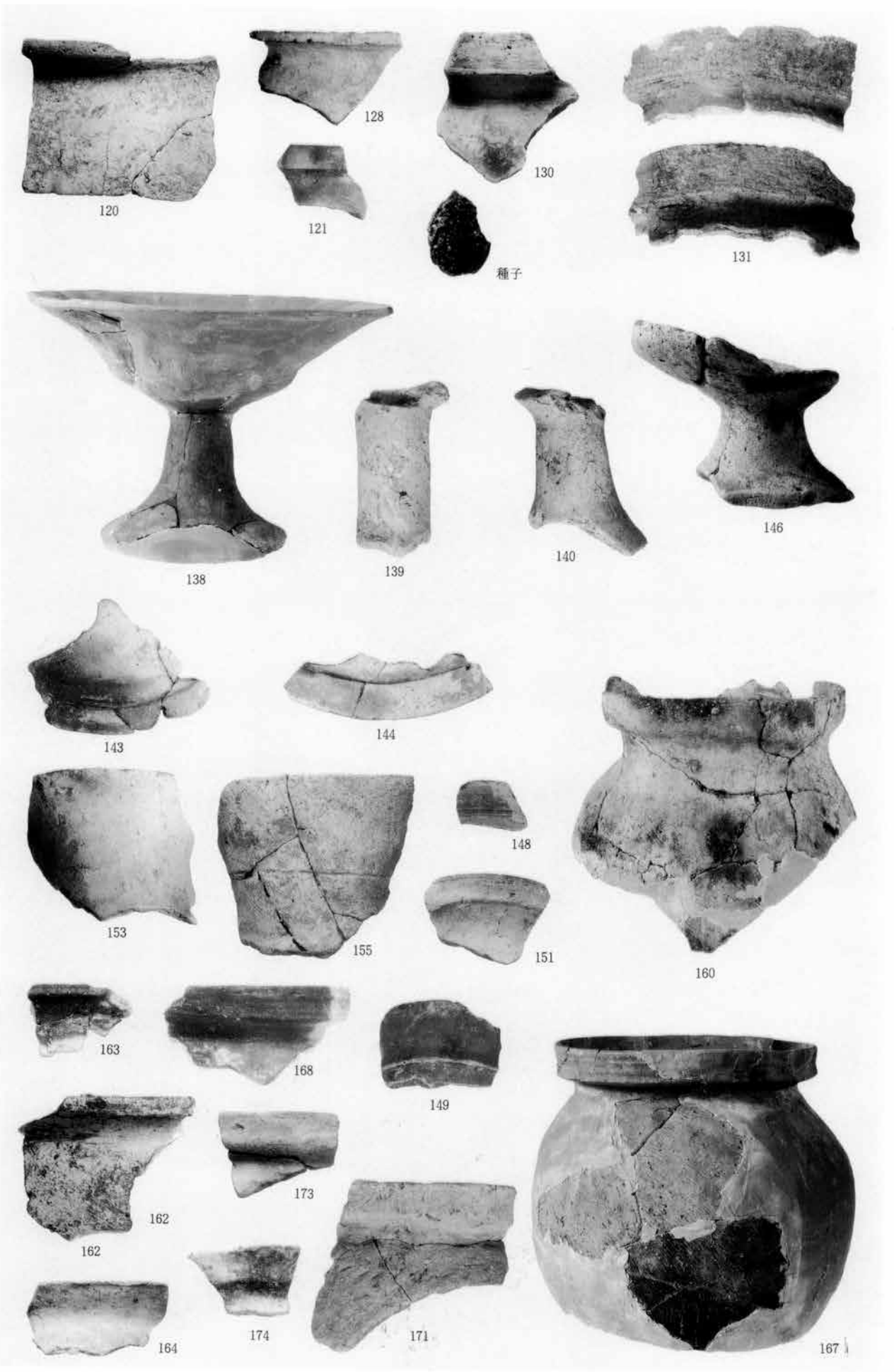
第１号竪穴住居跡出土土器



第2・3・5号竪穴住居跡出土土器

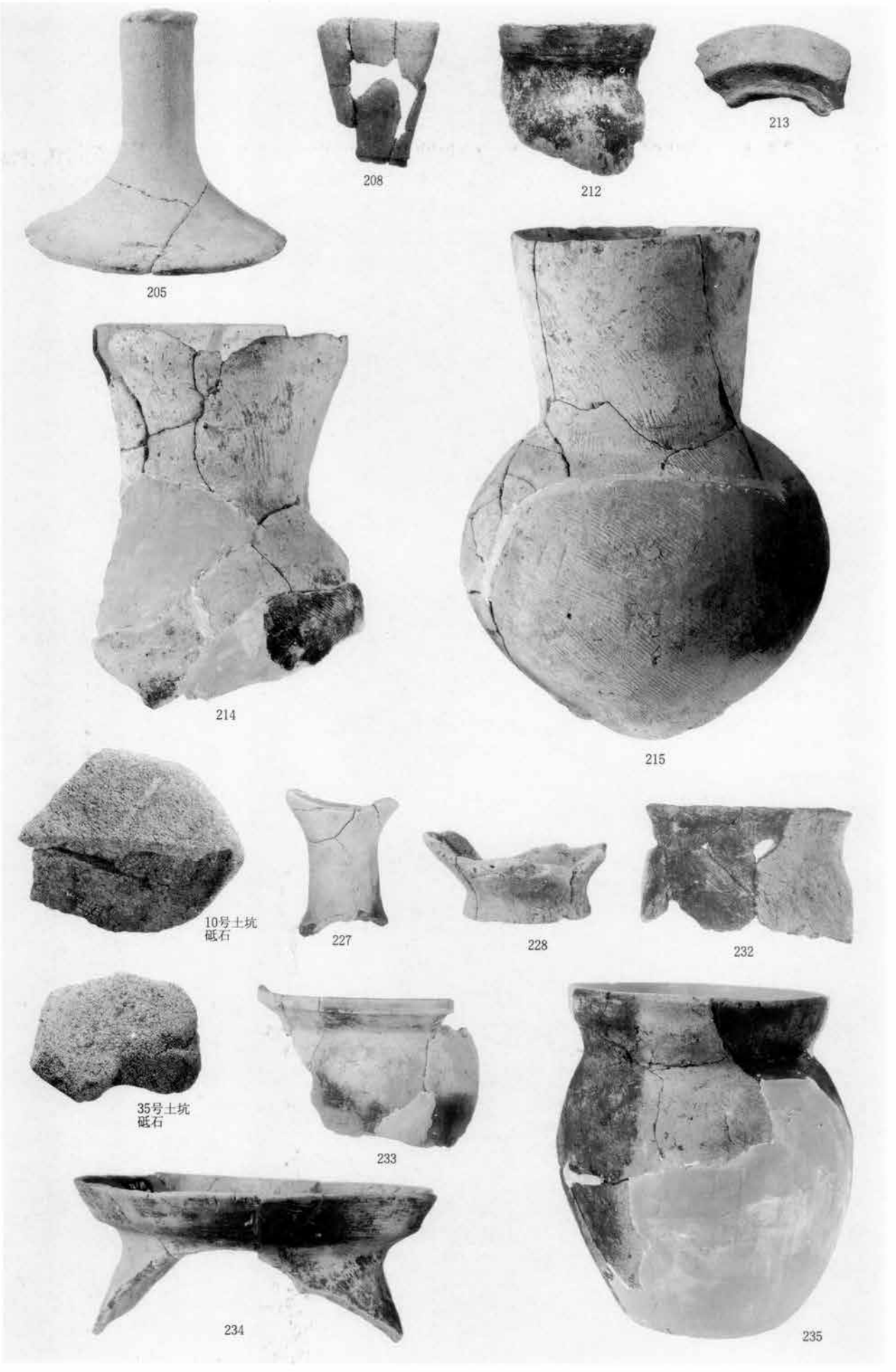
72
78
79
81
82
83
85
91
91
92
89
86
90
94
98
103
108
110
115
116
113
119
117

第1・3号土坑出土土器

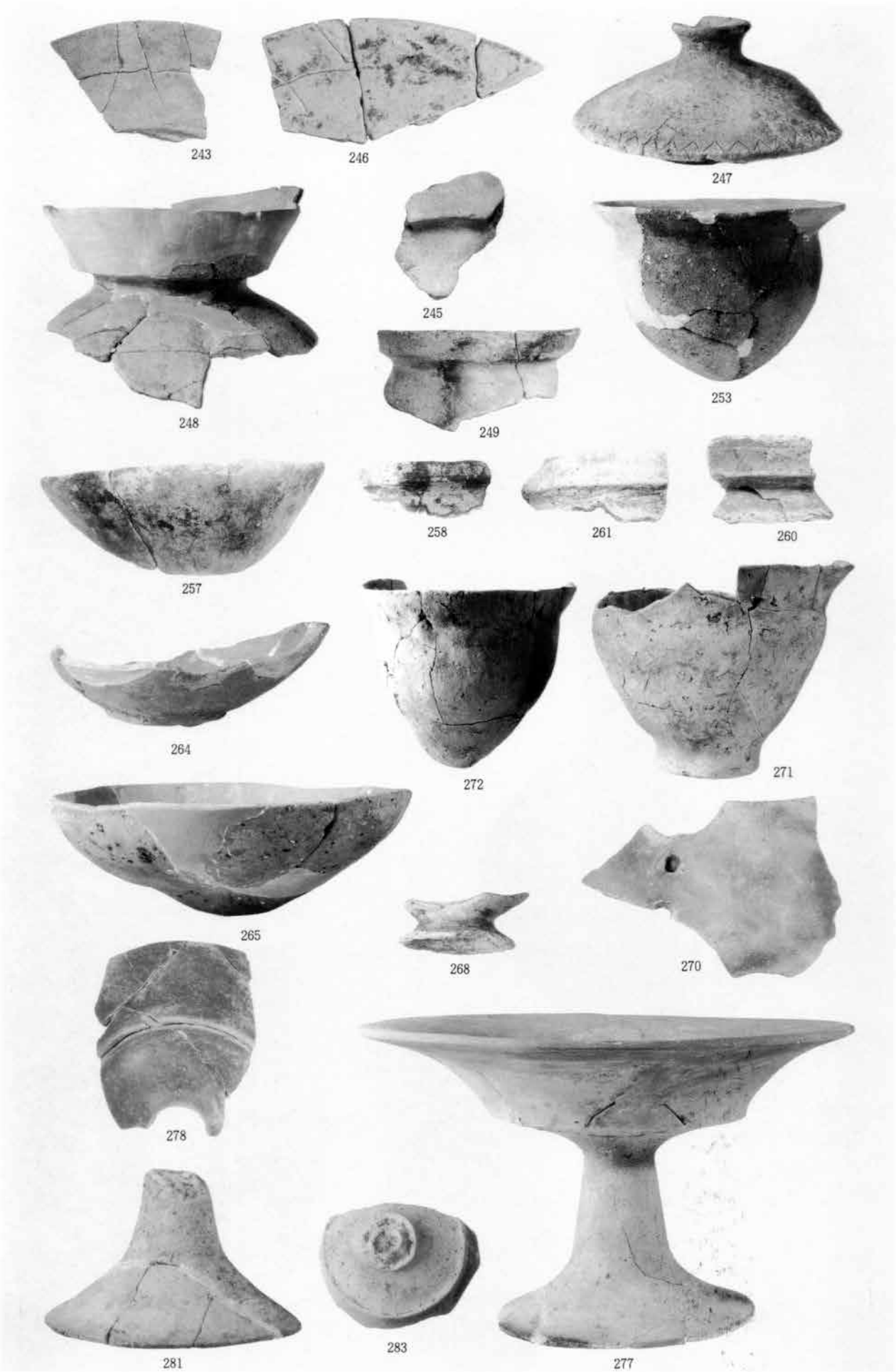


第3・12号土坑出土土器

第12・7・9号土坑出土土器

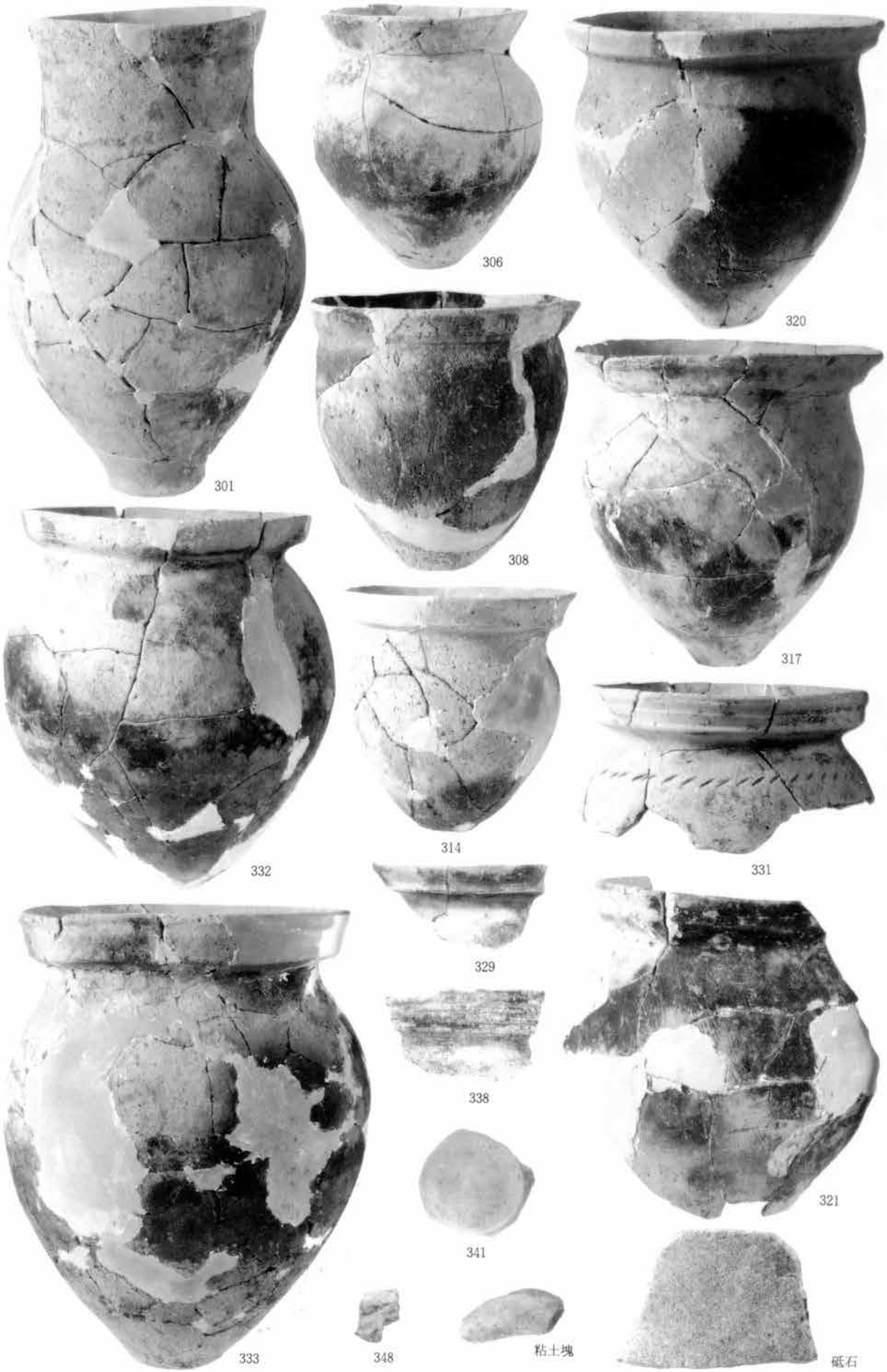


第10・35号土坑出土土器



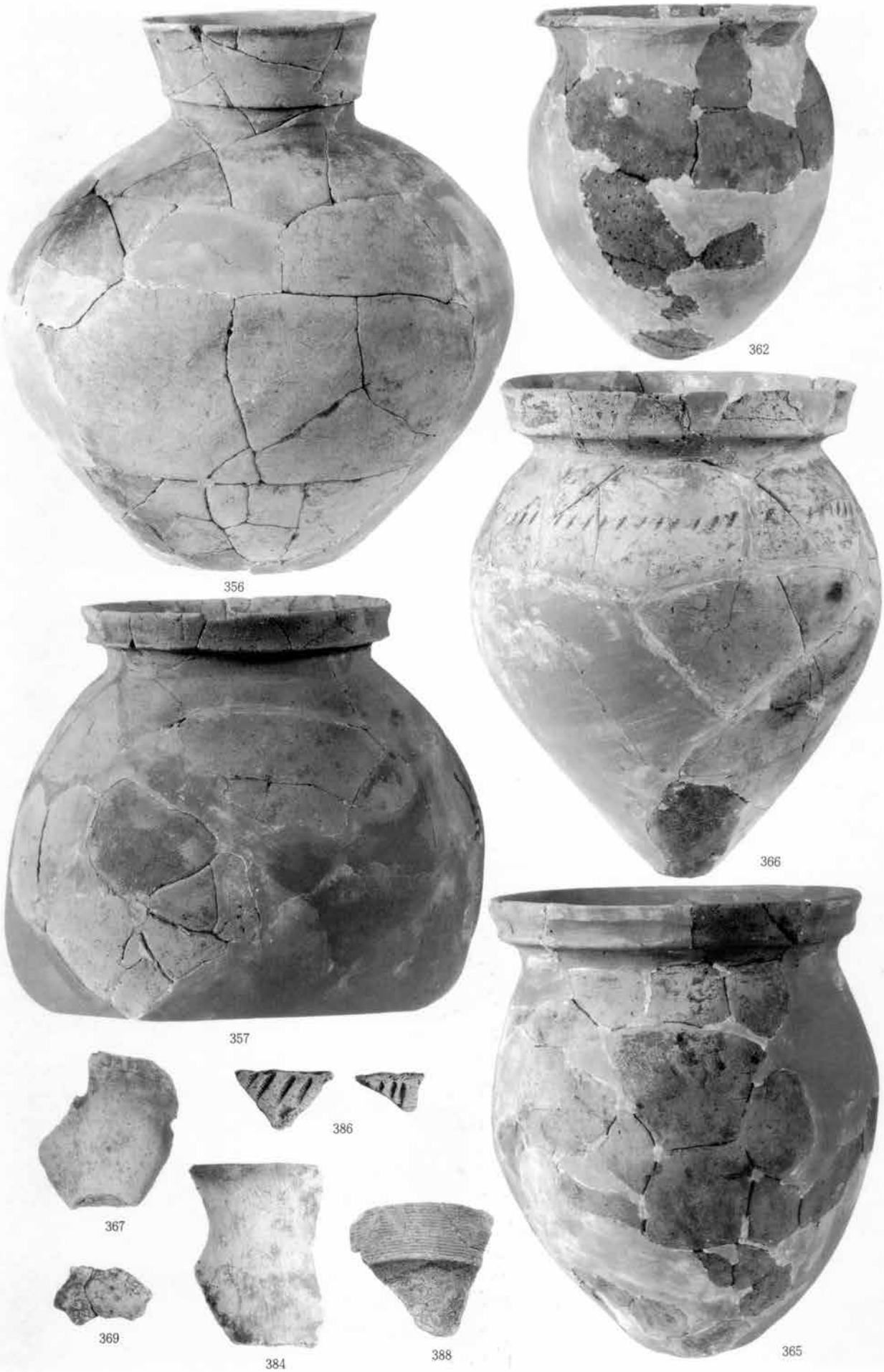
第14・20・17号土坑出土土器

第17号土坑出土土器

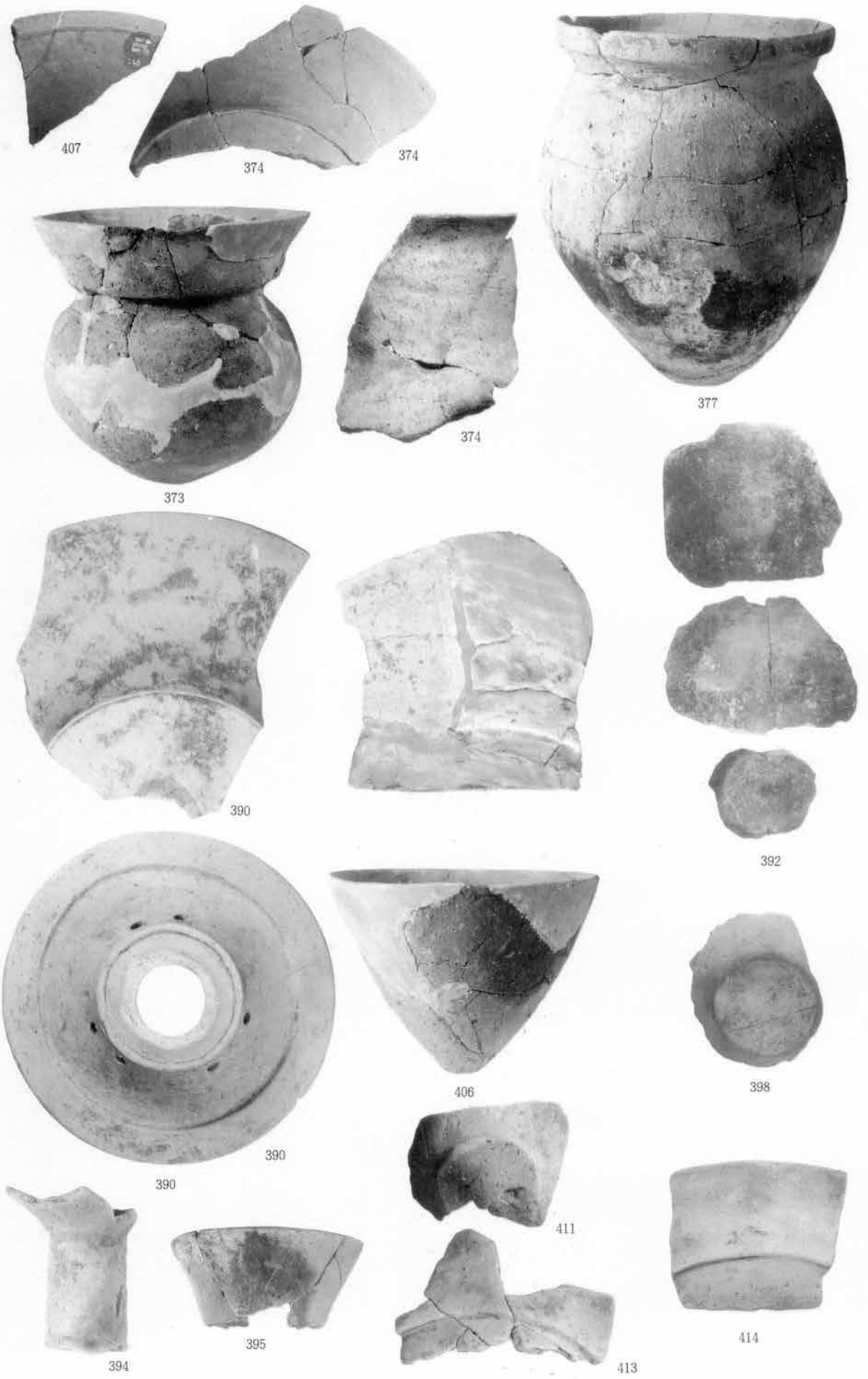


第17号土坑出土土器

第17・32号土坑出土土器



第32号土坑出土土器



第108・41・44号土坑出土土器

第44・47・50号土坑他出土土器

奈良時代以降の出土土器

奈良時代以降の出土土器

航　空　写　真（免田一本松遺跡）

航　空　写　真（全　景）

航空写真（北部）

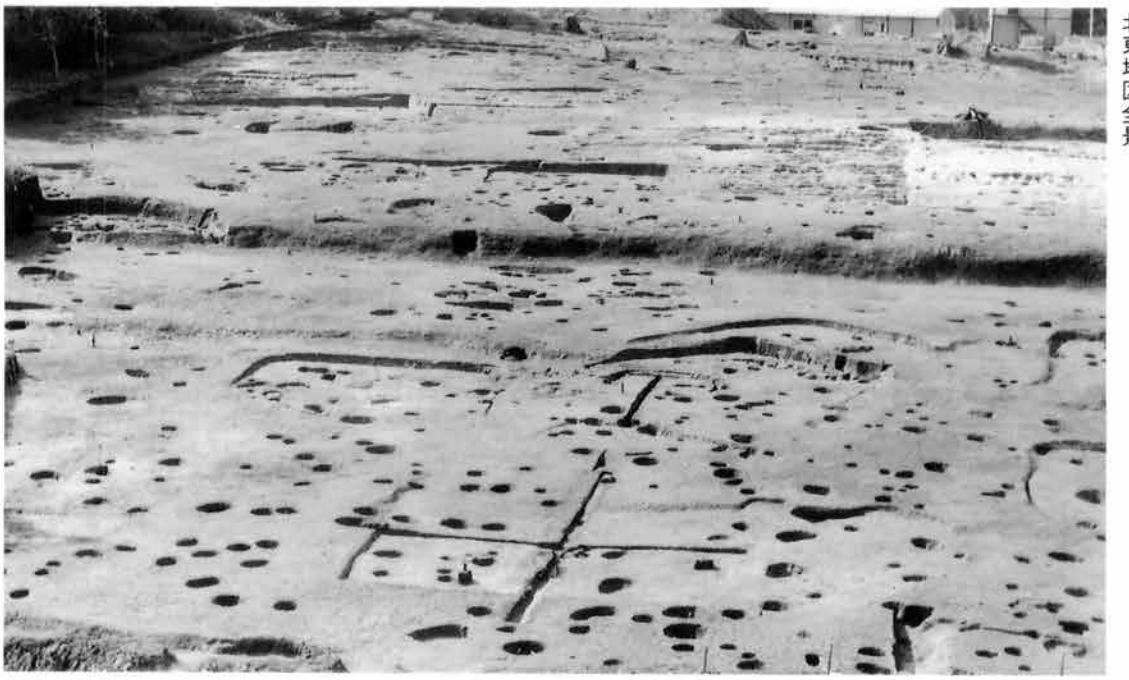
航　空　写　真（中央部）

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北から）

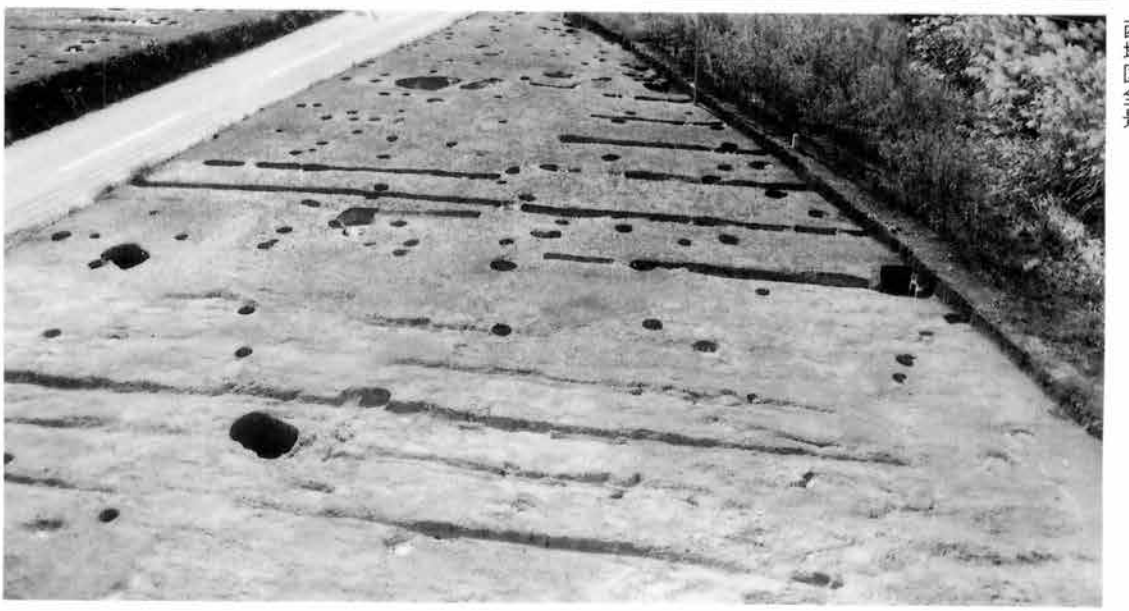
調査区全景

図版58



北東地区全景

北西地区全景



西地区全景

北東地区遺構検出

同上　遺構発掘

同上

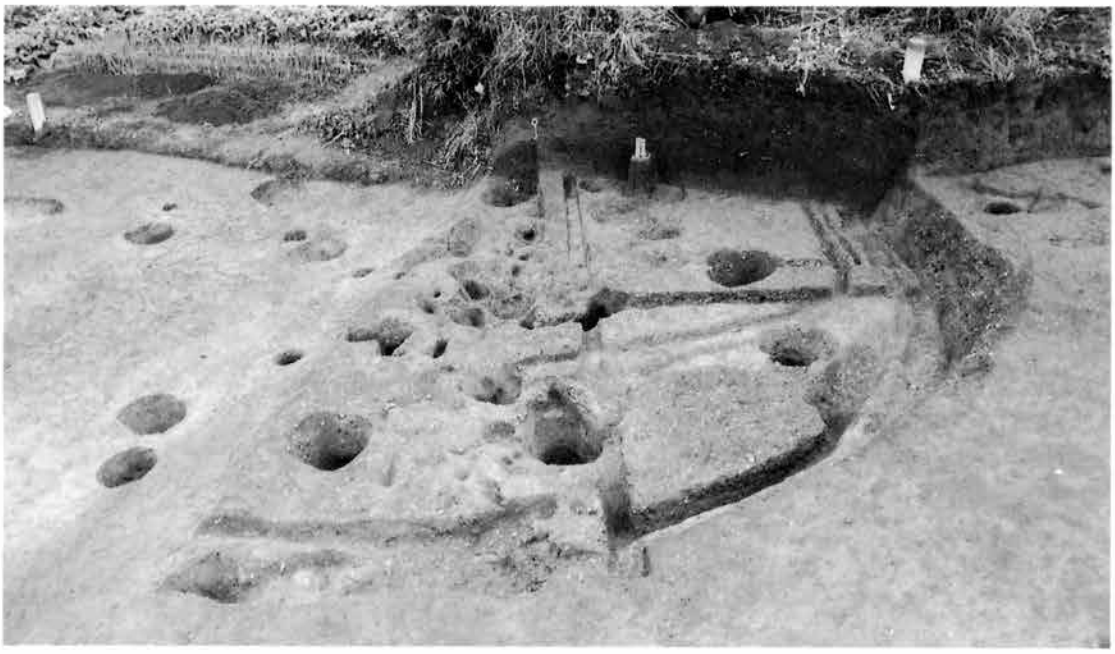
図版60

第8号住居跡

第8・20・7号住居跡

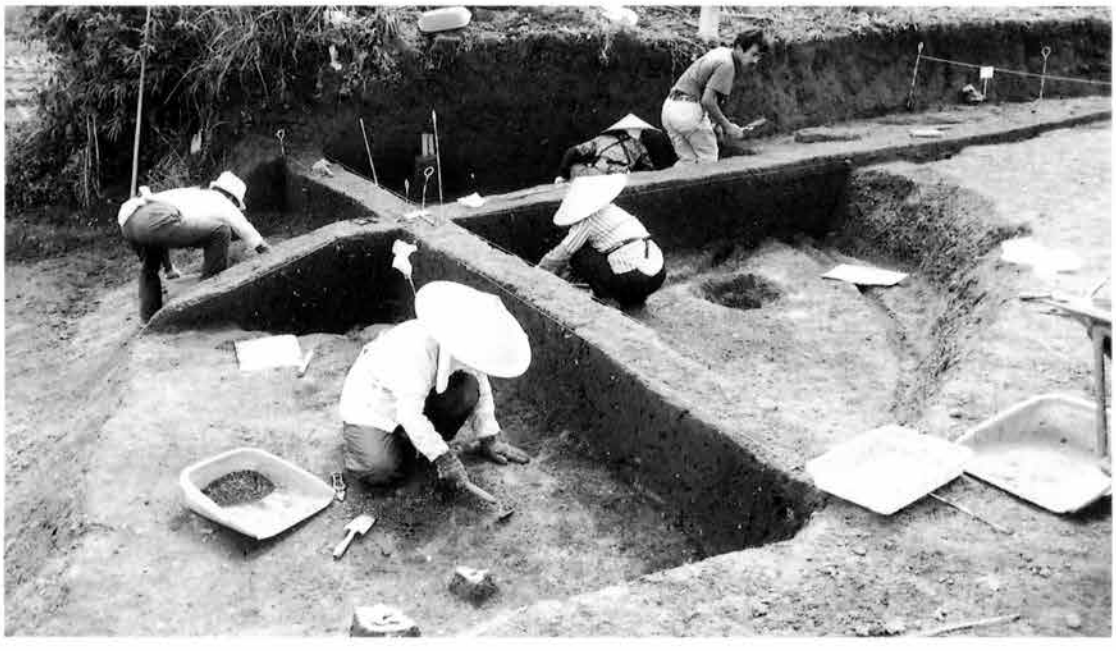
第8・20号住居跡

第7号住居跡



同上

同上



図版62

第10号住居跡

同上

同上周溝断面

第10号住居跡遺物出土状況

図版64

第11号住居跡

同上

同上

第11号住居跡断面

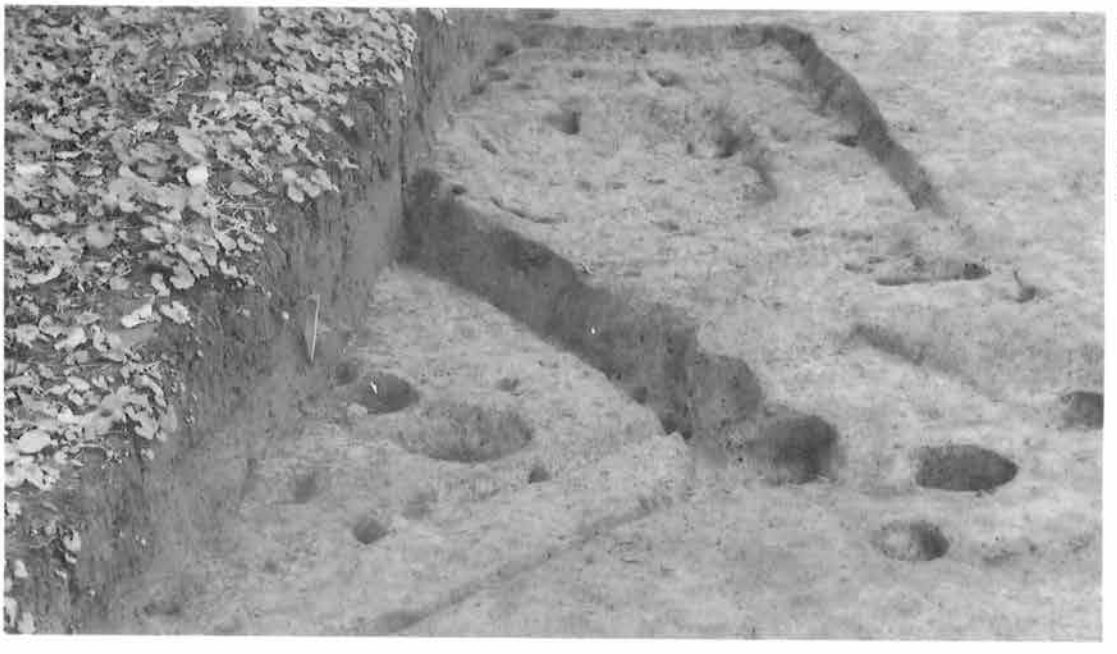
同上

同上土師器出土状況

図版66

第13号住居跡

第21号住居跡



第13・21号住居跡

第17号住居跡

第14号住居跡

第15・16・18・19号住居跡

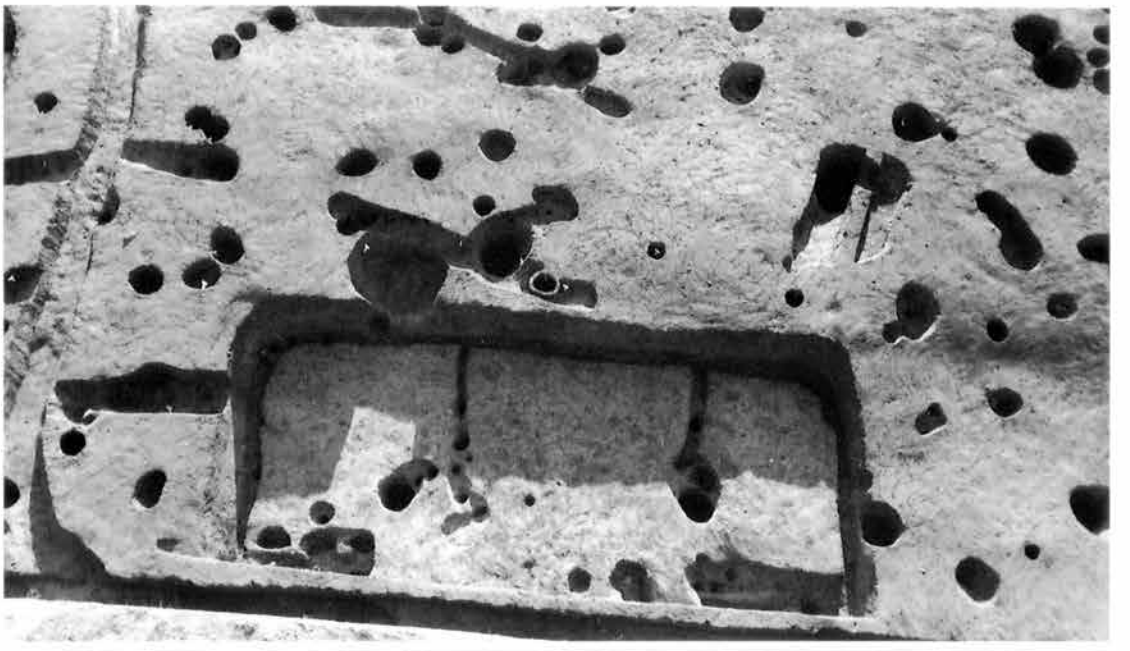
図版68

第23号住居跡

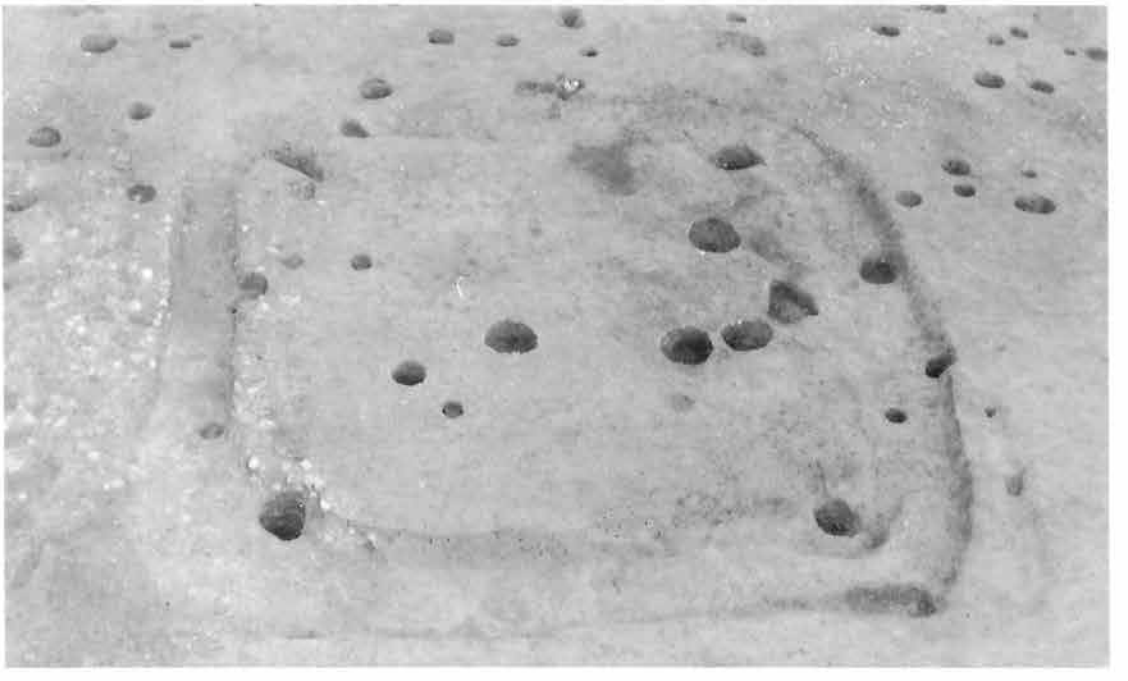
第5号住居跡

第2・4号住居跡

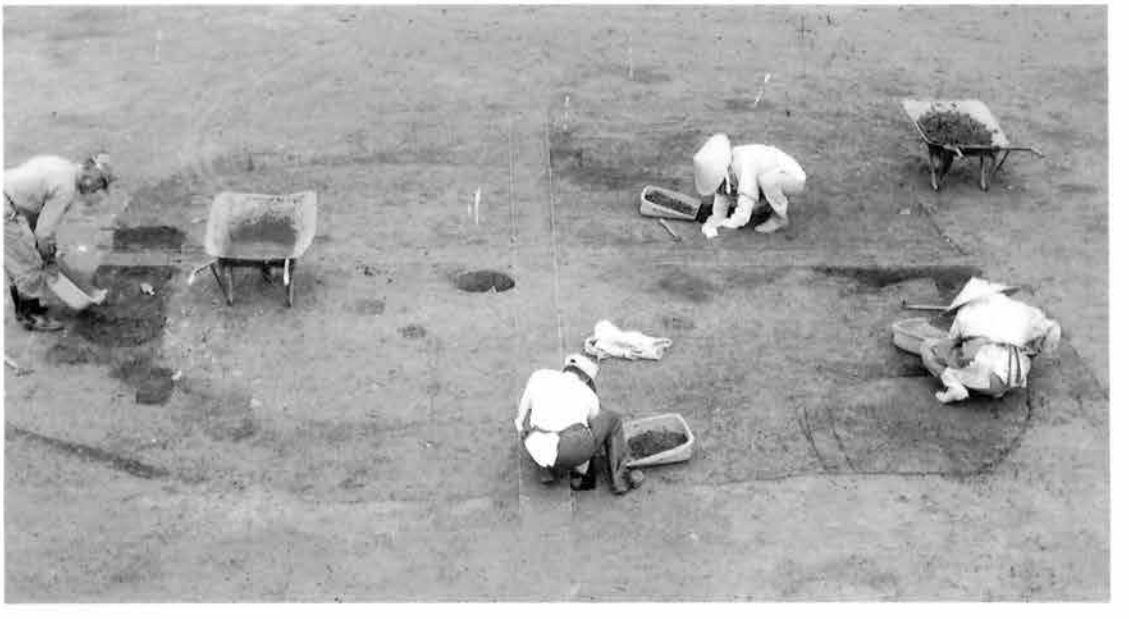
第26号住居跡



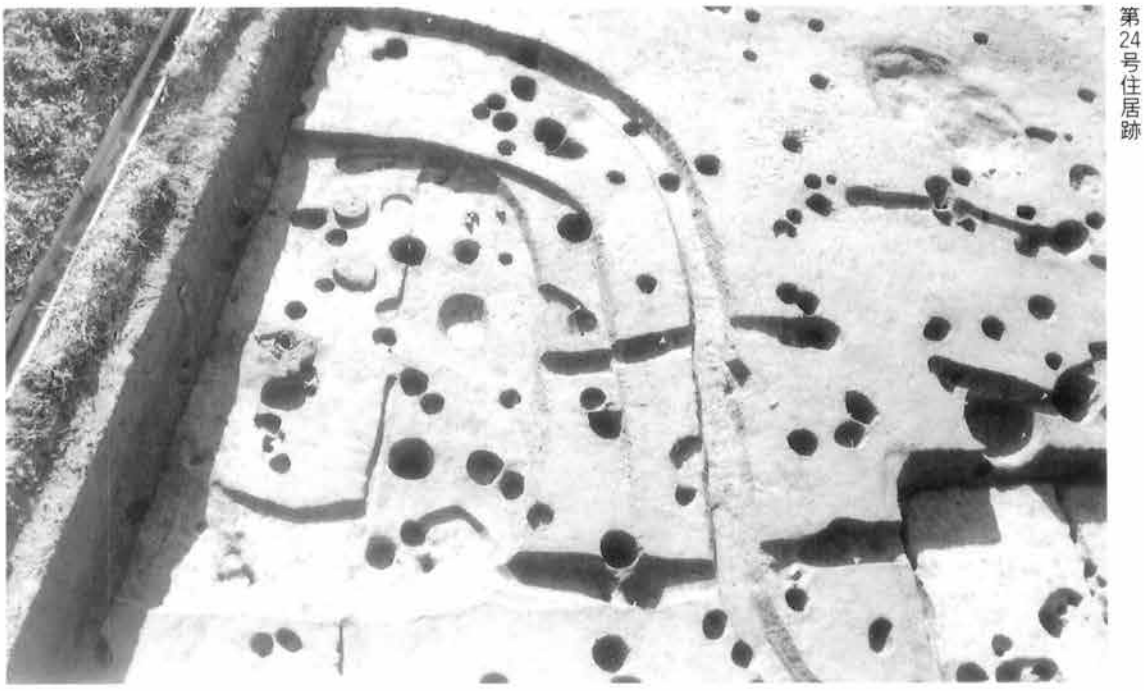
第25号住居跡



同上

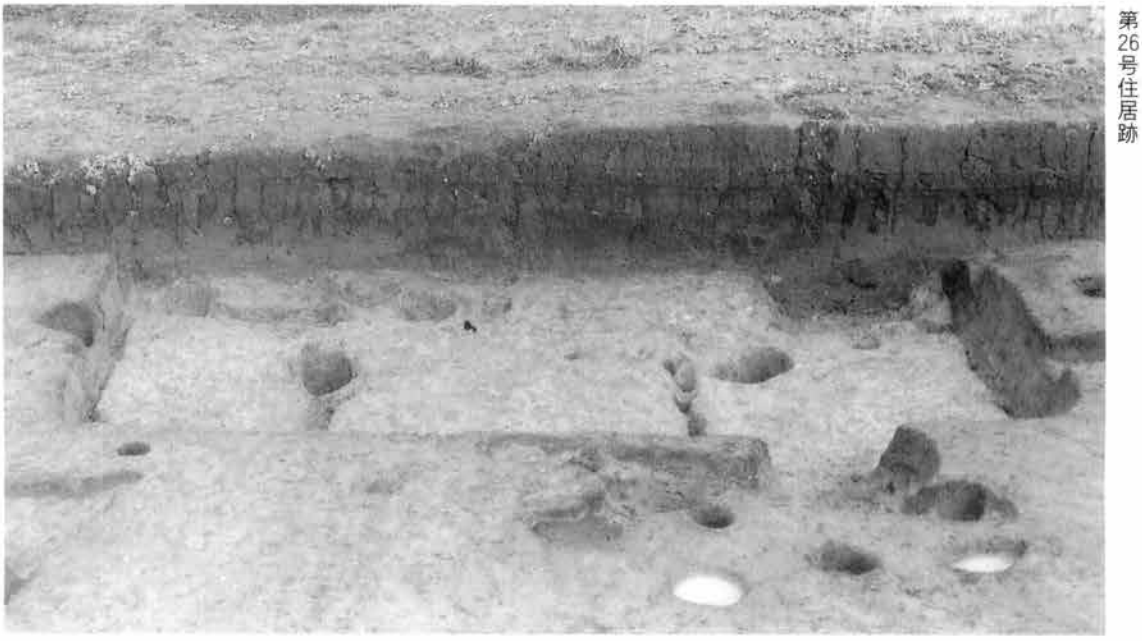


図版70



第24号住居跡

同上



第26号住居跡

第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡

第9・11号掘立柱建物跡

図版74

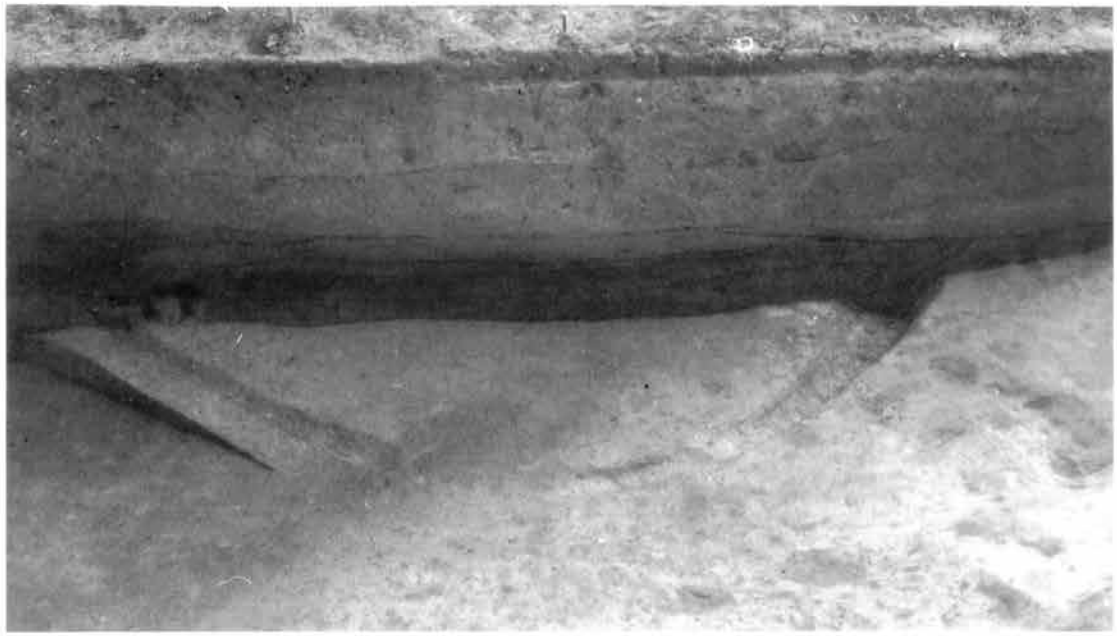
南西地区発掘風景

同上　検出状況

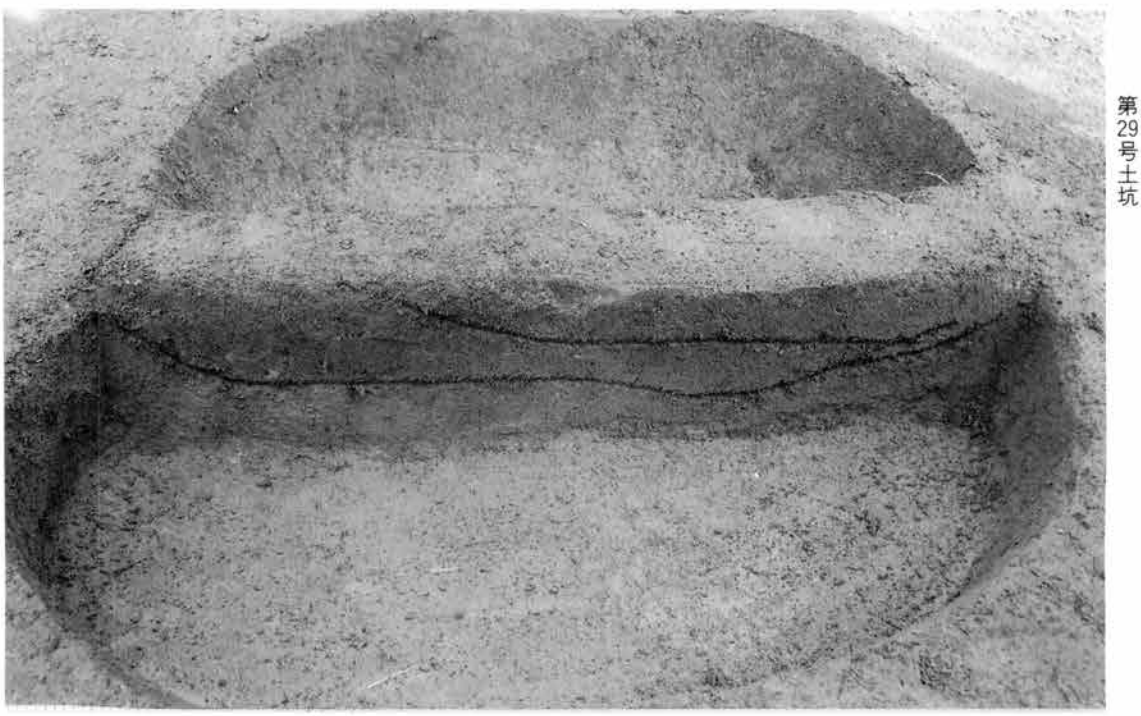
同上

遺物出土状況

住居跡検出状況

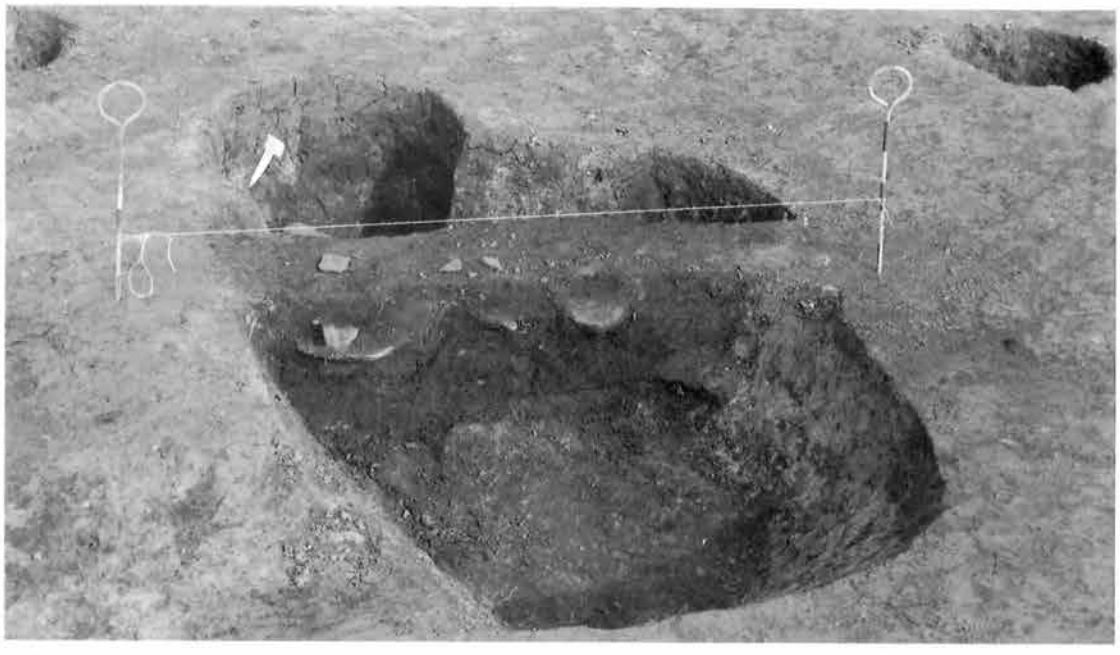


縄文土器出土状況

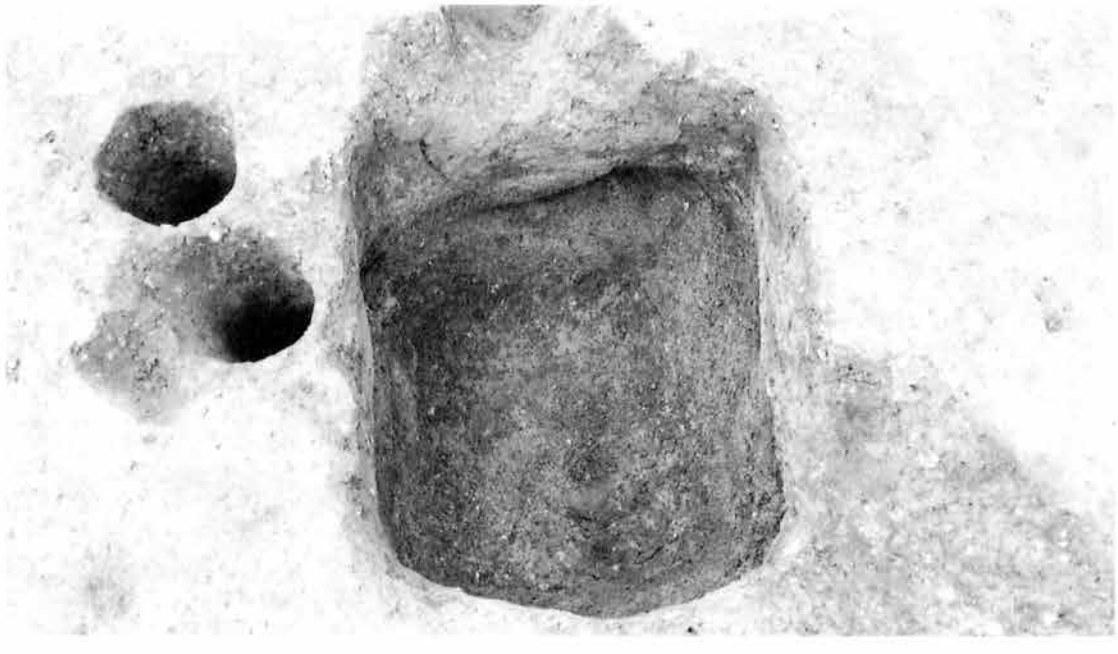


第29号土坑

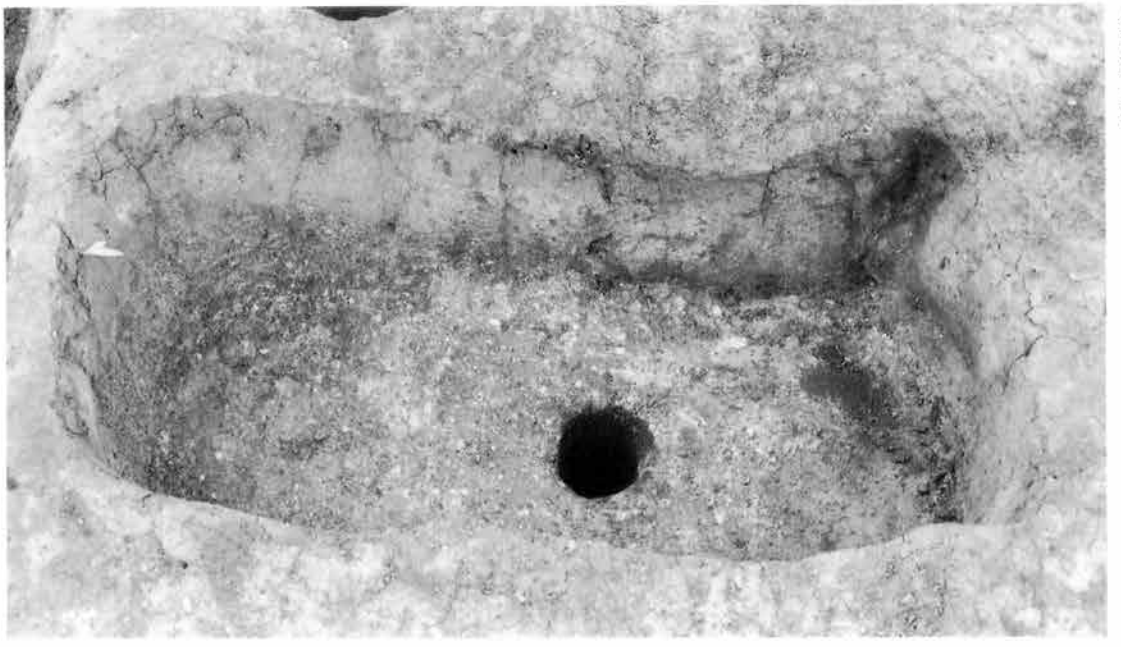
第10号土坑



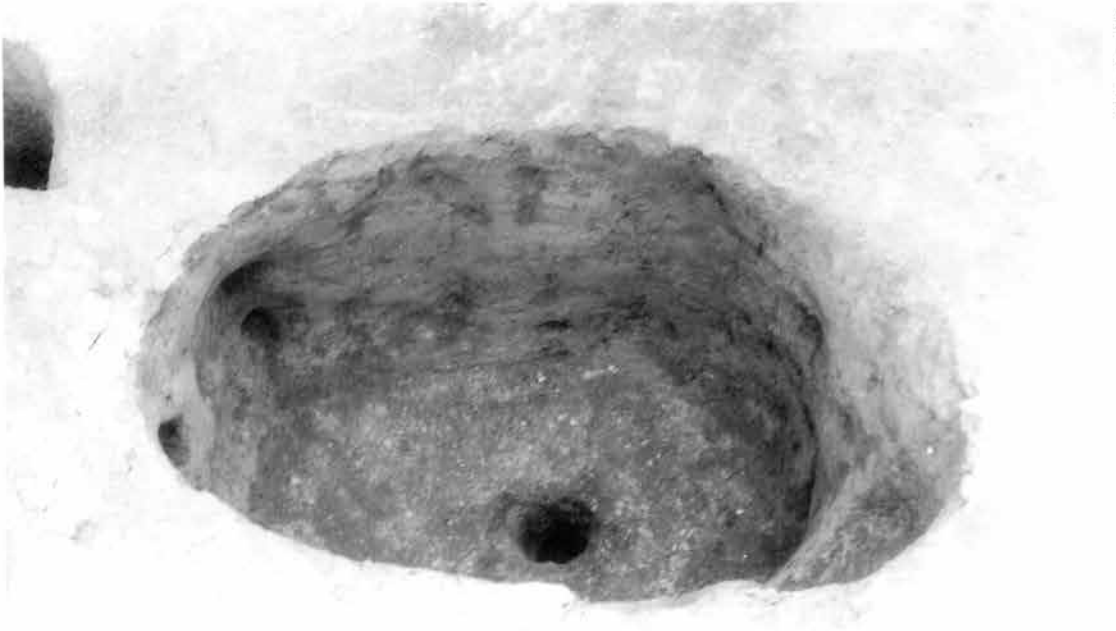
第22号土坑



図版78

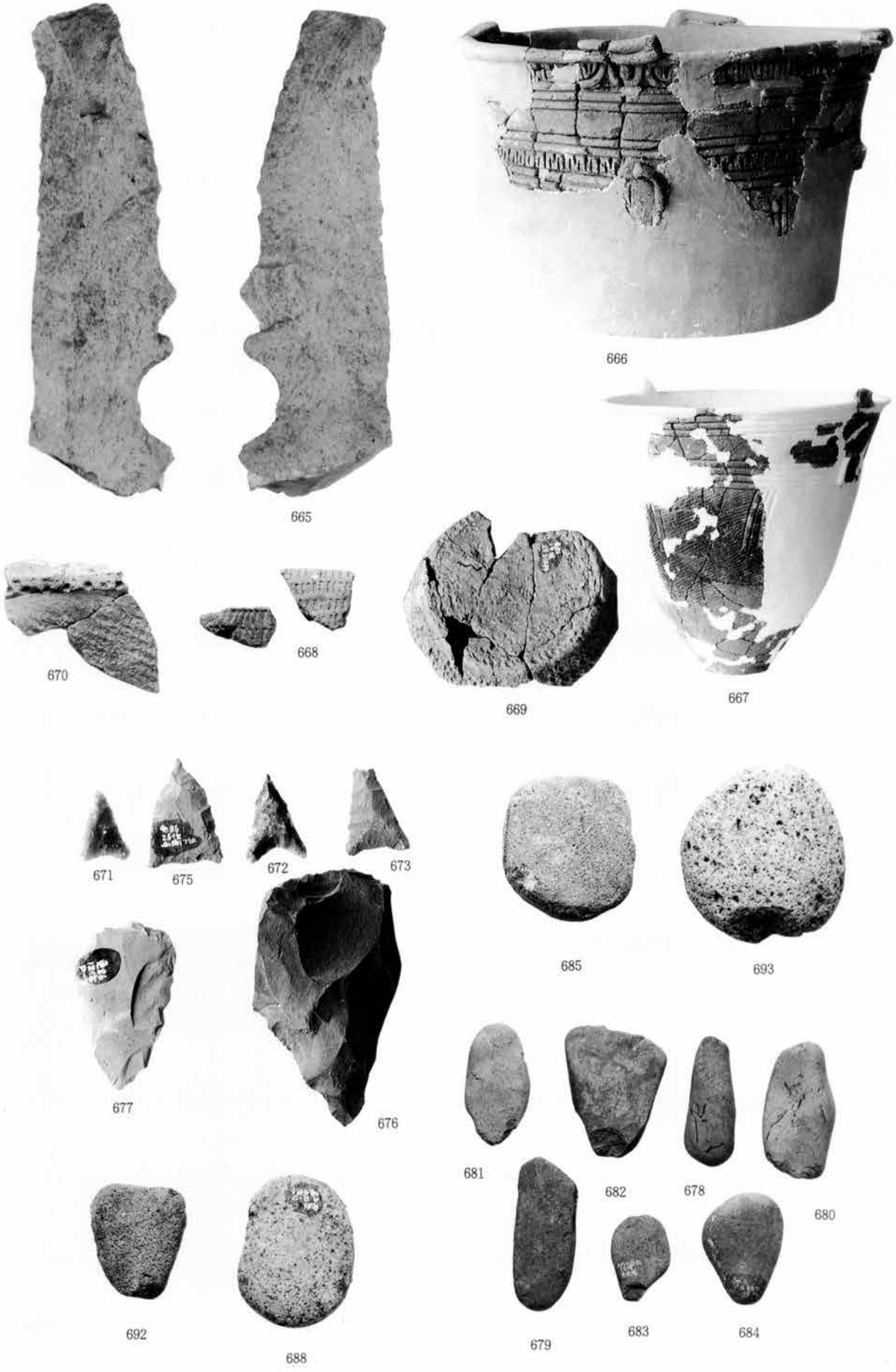


第14号土坑



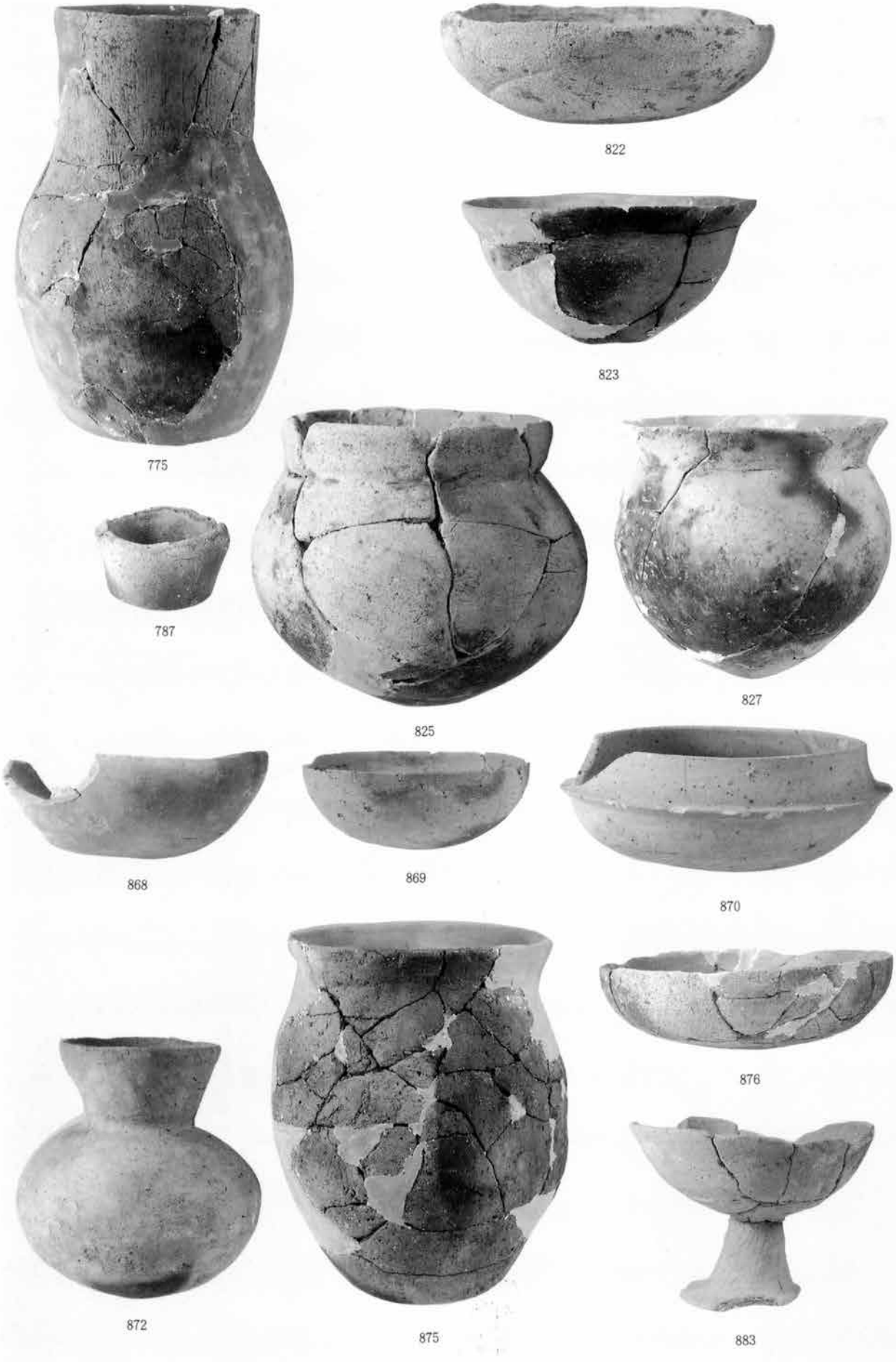
第16号土坑

第26号土坑

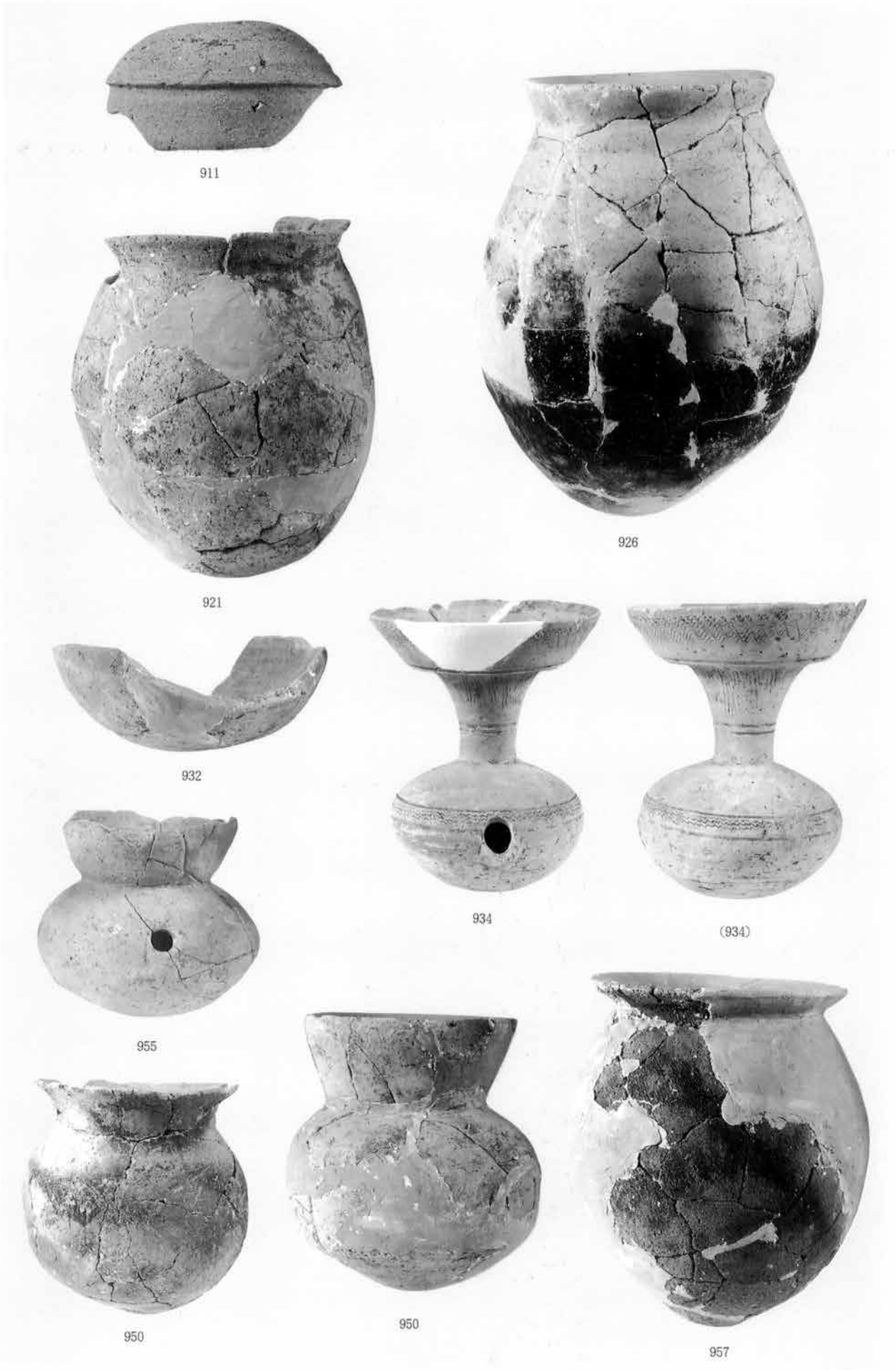

665
666
667
668
669
670
671
672
673
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
688
692
693

岩宿・縄文時代の遺物

竪穴住居跡出土土器（1）
718・719（第2号竪穴住居跡）、722（第4号竪穴住居跡）、
750（第5号竪穴住居跡）、761（第6号竪穴住居跡）、その他
（第3号竪穴住居跡）



竪穴住居跡出土土器（2）
775・787（第7号竪穴住居跡）、882・823・825・827（第10号竪穴住居跡、その他（第11号竪穴住居跡）



竪穴住居跡出土土器（3）
911（第13号竪穴住居跡）、921（第14号竪穴住居跡）、926（第15号竪穴住居跡）、932・934（第23号竪穴住居跡）、その他（第26号竪穴住居跡）

978

985

1000

1016

1068

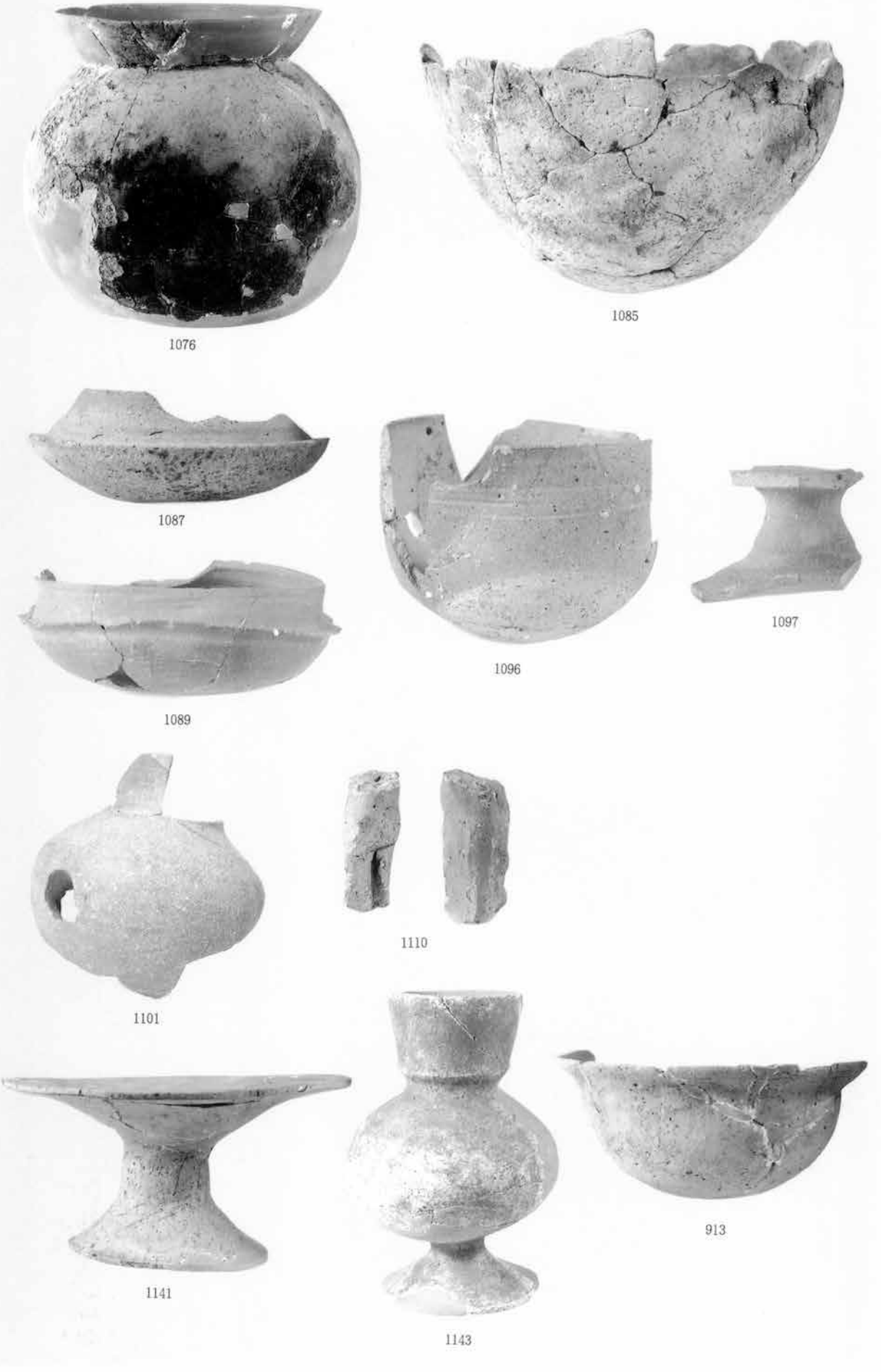
1065

1069

1070

1077

土坑・包含層等出土土器
978（第28号竪穴住居跡）、985（第1号土坑）、1000（第23号土坑）、その他（包含層）



包含層等出土土器
1141・1143（調査区外）、913（第21号竪穴住居跡）、その他（包含層）

冬野小塚第１号墳

同上　第３号墳

第1号墳（調査前）

同上　墳丘（北から）

同上墳上（東から）

同上　表土除去後の墳丘

断面全景

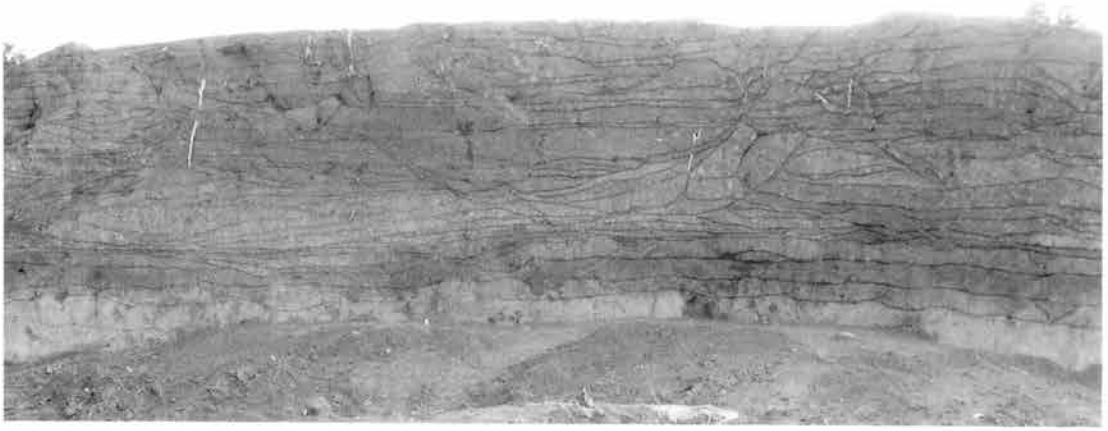
主体部掘方検出

同上

同上　断面

図版88

墳丘断面全景



同上　中央部

同上　南部

同上　北部

周溝断面

同上　遺物出土状況

同上　全景（東から）

図版90

墳丘断割

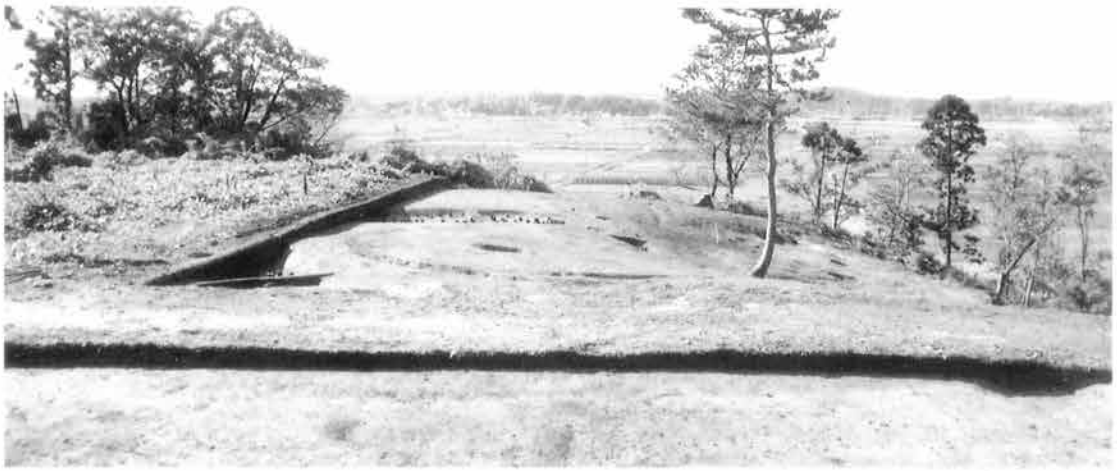
同上

同上

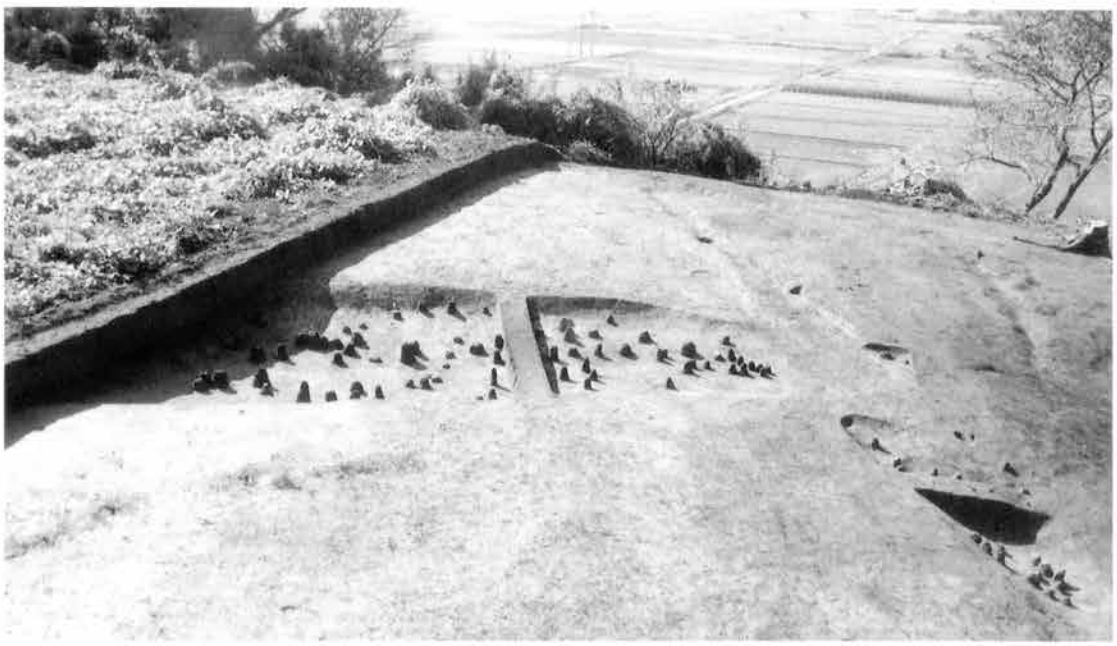
墳丘除去後の状況

南東地区全景

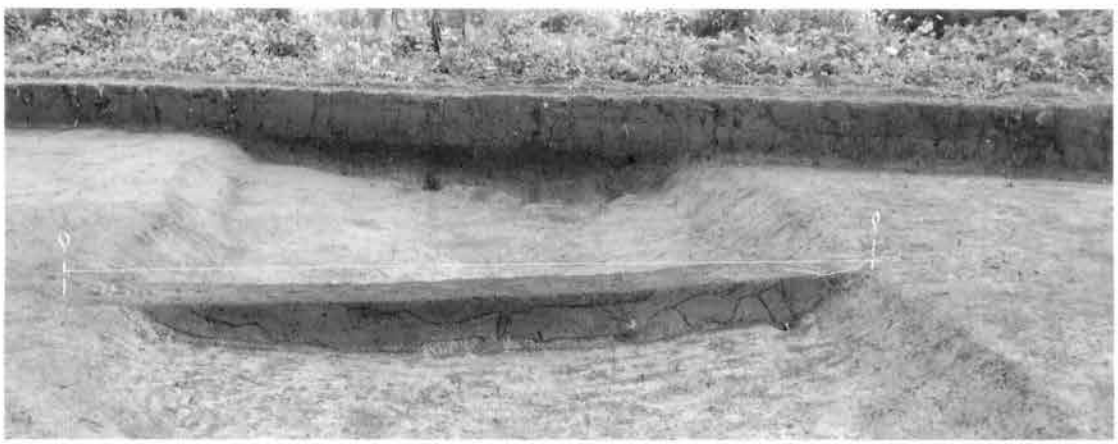
同上　発掘状況



第3号墳周溝

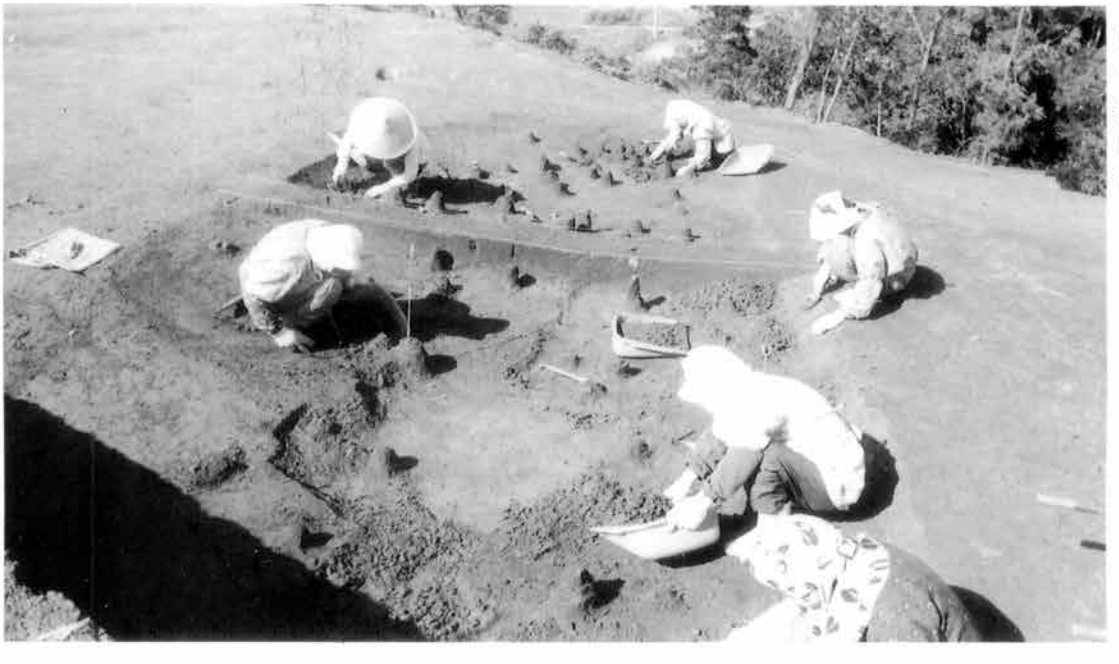


同上



第3号墳周溝

同上　断面



同上　発掘状況

第2号墳全景（北から）

同上（東から）

周溝検出状況（東部）

同上（北部）

周溝検出状況（東部、南から）

同上　断面

周溝内遺物出土状況

周溝内遺物出土状況

同上　拡大

周溝内土坑

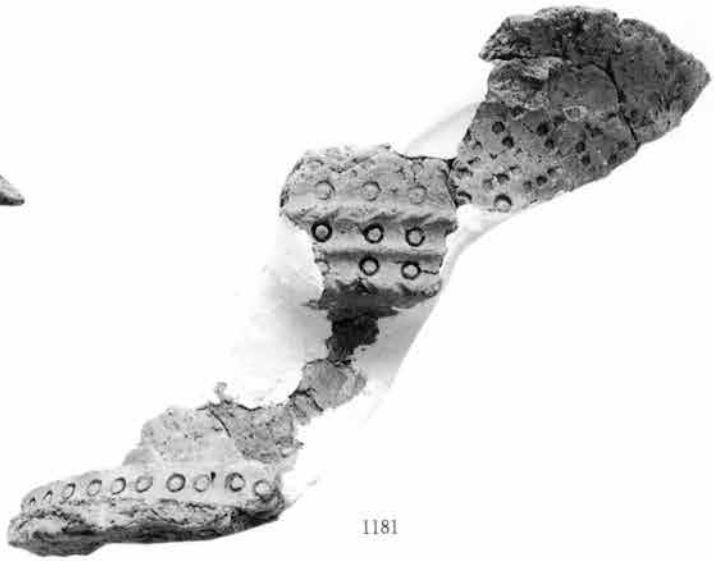
墳丘北端断面

1149
1153
1183
1163
1151
1156
1152
1159
1158
1160
1162
1157
1180
1168
1173
1164
1150
1170
1177

第1号墳出土土器

1183

1184


1181

1179

1196

1194

1200

第１・３号墳出土土器

押水町冬野遺跡群

国道159号線押水バイパス改築事業に係る
石川県羽咋郡押水町冬野遺跡群発掘調査報告

発行日　平成３年３月30日（1991）

編集者
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
〒921　金沢市米泉４－133

印刷者　能登印刷株式会社
〒920　金沢市武蔵町７－14